これこそ預言されていたこと

エイミー・センプル・マクファーソン
藤遥　制作

序文

これこそ預言されていたこと

（使徒二・一六～一八）

これこそ、預言者ヨエルが預言していたことである。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし（中略）その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう』

イエスはまもなく来られる。なすべきことは、何であれ急いでしなければならない。そう悟ったことで、私の魂は「急げ」とせき立てられている。使えるかぎりの手段で、できるだけ短いあいだに、できるだけ多くの人にこのメッセージを届けたいのである。

主のぶどう園のある一角で働いていると、多くの人に届いていると感じることがある。しかし、祈りの重荷を負っているとき、主は私たちを御霊のうちに引き上げてくださる。目は澄み、見渡す地平は広がる。すると、地上の幾百万の人々が見えてくる。その人々は、まだ時のしるしに気づかず、主の来臨が近いことを知らない。それを見ると、私たちは抑えきれない思いに駆られる。国々を駆けめぐり、このメッセージを鳴り響かせたいのだ。「イエスはまもなく来られる。主に会う備えをせよ！」と。ああ、燃える文字でそれを大空に書きつけることができたら！　だからこそ、この本を送り出すのである。

第一部「個人の証し」は、飾らずに書いた。ただほかの人々を励ますためである。主は、これほどふさわしくない者に、これほど恵み深いことをしてくださった。同じことをすべての人にもしてくださる力が、主には満ちあふれている。また、喜んでそうしてくださる。私はそう知っている。

第二部。『すべての事がらは、ふたりか三人の証人の証言によって確定する』（第二コリント一三・一）。

第三部「説教と著作」には、罪人へのメッセージがある。また、新しく生まれたが、まだ聖霊のバプテスマを受けていない魂へのメッセージもある。さらに、すでにそのバプテスマを受け、完全を目ざして進んでいる信者へのメッセージもある。

第四部には、幻と預言、そしてメッセージの解き明かしを収めた。どれも、主が御霊のうちにあって私に与えてくださったものである。それらは私たちにもほかの人々にも、大きな益となり、祝福となった。失われてしまうには、あまりに尊いと思う。

主は私に、出て行くように命じられた。何を食べ、何を飲み、何を着ようかと思いわずらうことなく、である。私は確信していた。全世界に出て行って福音を宣べ伝えるよう私に命じられたかたは、私の必要を知っておられる。そして、ご自身の富の中から、いっさいの必要を満たしてくださる、と。

私たちは、後ろ盾となる地上の伝道団体を持ったことがない。支えを当てにできる人も、一人もいなかった。それでも神は、私たちのすべての必要を驚くほど満たしてくださった。

読者には、誤りを許し、文章のまずさよりも、この本を書いた心のほうを見ていただきたい。同じような事情のもとで書かれた本は、ほかにないだろう。私には、引きこもって戸を閉め、世間と数えきれない邪魔を締め出せる静かな書斎がなかった。どのページも、わずかな空き時間に書いた。集会では楽器を弾き、歌い、説教し、祭壇で働く。その慌ただしさのただ中で書いたのである。そのうえ、福音自動車で各地を広く旅していた。最初の数章はフロリダで書いた。その後は旅をしながら書き継いだ。フロリダからニューヨーク、ニューイングランドの諸州へ行き、さらに大陸を横断してカリフォルニアへ向かう道中である。

読者と筆者は、この世では会うことがないかもしれない。それでも、この本は私の手と心から送り出される。イエスが姿を現されるとき、私たちが共に引き上

げられ、栄光の雲の中で主に会うことができるように。そう切に祈り、願いながら送り出すのである。

第一部　個人の証し

第一章　母

『主の言葉がわたしに臨んで言う、「わたしはあなたを（中略）つくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした」。その時わたしは言った、「ああ、主なる神よ、わたしはただ若者にすぎず、どのように語ってよいか知りません」。しかし主はわたしに言われた、「あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」。そして主はみ手を伸べて、わたしの口につけ、主はわたしに言われた、「見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた」』（エレミヤ一・四～九）

私が十七歳の少女だったころのことである。ある日、寝室でひとり祈っていると、主がこの言葉をはっきりと語られた。驚く私の耳に、その言葉が届いた。主はそこで、福音を宣べ伝える者として私を任じられた。厳粛なときだった。初めは、あまりに驚くべきことで、本当とは思えなかった。私のように素朴で、ふさわしくない田舎の小娘を、主が福音を宣べ伝えに遣わそうとされるなど、ありえないと思えた。しかし、その召しと任職はまことに確かだった。のちに私は、神の聖徒たちによって聖別され、任職を受けた。それでも、私にとって本当の任職は、いつもあの小さな寝室の思い出である。主があの言葉を語られたとき、寝室は神の栄光に満ちあふれたのだった。

『わたしはあなたをつくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し』。この言葉は、私の生涯にまさにそのとおりだった。だから私は、自分が生まれる二十年ほど前にさかのぼって、証しを始めなければならない。私たちの人生は大きな織機のようなもので、多くの糸を織り合わせていく。私の人生の最初の糸は、愛する母と切り離せないように織り込まれている。だから、私の生涯の物語は、本当は母から始まるのである。

十二歳のとき、学校から帰った母は、奇妙な「軍隊」の記事を夢中で読んだ。その軍隊が町を砲撃し、王のために捕虜を取るというのである。母は、危険を冒して行こうと祖母を説き伏せた。二人は土砂降りの雨の中に立ち、軍隊が来るのを待った。やがて、こう言う声が伝わってきた。

「来たぞ！」

だが、軍隊はどこにいるのか。これで全部なのか。地味な青の外套をまとった見知らぬ三人が、広場に進み出た。そしてひざまずき、黙って祈った。

そのへりくだりと真剣さと優しさが、母の心に押し寄せた。母は、聖霊が優しく引き寄せておられるのを感じた。一言も語られないうちに、母は知った。この人々は神の民であり、自分の民なのだと。三人は歌った。

「われらは向かう、清く聖なる者の地へ、
幸いな者のふるさと、愛の御国へ。
神を離れ、愚かな広い道をさまよう人よ、
ああ、答えよ。天のエデンへ行かないか」

母の心は、愛と礼拝の思いに溶かされて、「行きます」と答えた。

祖母は、初期のメソジスト教会に現れた神の大いなる力について、よく話していた。母は、この救世軍でそれにふたたび出会った。ジョン・ウェスレーの時代の教会と同じように、男も女も神の力に打たれて倒れることは珍しくなかった。母の心は、ほかの魂をイエスに導きたいという願いで満たされた。キリストの愛が母に強く迫り、喜ばしい主の奉仕へと向かわせた。神の召しに従って備えをすること、それが母の魂のすべてを占める目的となった。

＊　＊　＊

まもなく祖母は病に倒れ、亡くなった。祖母はその前に、改まって母に話していた。お前はまもなく、この世にひとり残される。そのときは、神と大尉の妻の

優しい守りにゆだねるつもりだ、と。大尉の妻は、母にとって霊の母だった。救世軍の隊列に加われという召しに、母は少しもためらわずに応えた。わずかな持ち物を手早くまとめると、友も家も故郷も、すべてを捨ててイエスに従ったのである。

遠くの町の救世軍の宿舎に着いてからの奉仕の日々は、母に祝福に満ちた助けと励ましをもたらした。指導者たちは敬虔な生活を送っていた。大尉は、尊い魂のためにとりなし、しばしば夜通し神の前にひれ伏して祈った。母は病人や罪人を何時間もかけて訪ね、「前哨地」の務めを手伝うために五マイルの道を歩いた。機関紙『ときのこえ』を売り、集会にも加わった。そうしたすべてが、日々の営みとなった。

しかし、ふたたび影が差した。今度は病気で、長いあいだ環境と仕事を変えなければならなかった。そのため母は、戦友たちとつらい別れをして、田舎の農場に身を寄せた。

母が結婚したのは、そのころだった。体は弱り、心は沈み、思いやり深い母親の手を失ったことを嘆いていた。結婚しても、神のための働きは続けられると望んでいた。しかし、慣れない重い農作業に追われるなかで、母は認めざるをえなかった。自分は悪魔の網にかかってしまった。第一線の奉仕については、もう手も足も出ない。暮らしと家庭のさまざまな務めに、ほとんどの力を注がなければならない、と。

そのような境遇にあっても、母は主に忠実であり続けた。家庭礼拝を始め、近所の家々での集会を手伝った。いちばん近い小隊まで六マイルの道を、馬車で、あるいは歩いて、たびたび通った。重い労働と気苦労に疲れ果てていても、それが一日のうちでただ一つの明るい時間だった。それでも、主の期待を裏切ってしまったという思いが、いつも母を離れなかった。主は母を贖い、ご自身の栄光ある目的のために聖別してくださったのである。生活はますますわびしくなり、母の霊はひどく悲しんだ。神の前に、また導くように召された魂たちに対して、自分を立て直す希望の光は一筋もなかった。

ああ、これを読む人の多くは、母の気持ちがわかるだろう。悲しいことに、多くの人が道の途中で弱り、よろめく。あるいは、もっと楽な道を探そうとする。そして気がつくと、従順と祝福の道から外れているのである。

そのころの母の道は、困難に囲まれていた。働く力をそがれ、境遇に縛られ、母はまさに獄屋の中でうすをひいていた。しかし、不思議に思えるかもしれないが、体が縛られていたあいだずっと、母の魂は天に向かっていた。神が母を任じられた働きがあった。そのために母は家も友も捨て、主に身をささげたのである。その働きを続けたいという願いは、時を追うごとに強くなった。ついにその願いは、目覚めているあいだは母の思いのすべてを占め、眠っているあいだはただ一つの夢となった。果たせずにいた誓いを、遅ればせながら何としても果たさなければならない。十字架の栄光ある召しに、「復帰」しなければならない。

一筋の希望の光

ある日、母はハンナの物語を繰り返し読んだあと、自分の部屋に行った。戸を閉め、ベッドのそばにひざまずいて主に祈り、誓いを立てて言った。

「主よ、あなたは私を、福音を宣べ伝えるように召してくださいました。けれども、どういうわけか私はあなたの期待を裏切り、行くことができません。どうか、昔ハンナの祈りを聞かれたように、私の祈りを聞いてください。小さな女の赤ちゃんを与えてくださるなら、その子を惜しみなくあなたの奉仕にささげます。私が宣べ伝えるはずだったみことばを、その子が宣べ伝えるように。私が占めるはずだった場所を、その子が占めるように。あなたに仕えて私が生きるはずだった生涯を、その子が生きるように。主よ、聞いて、答えてください。主よ、私の祈りを聞いてくださったというしるしを、私に与えてください。あなたの御名のために。アーメン」

母は窓のほうを向き、カーテンを払いのけた。そして、空をおおって向こうの日の光をさえぎる黒い雲を、切なげに見上げた。

突然、雲に裂け目ができた。一筋の日の光が、向こうの丘の頂を照らした。光はすばやく丘の斜面を下り、谷に、果樹園に、そして家そのものに届いた。窓の枠の中に、泣きはらした目をした、青ざめて不安げな顔があった。光はその顔に

まともに降り注ぎ、神々しい輝きと希望と勇気で照らした。さらに光は部屋に流れ込み、部屋を金色の栄光で満たした。

窓辺にひざまずく母の、切に願う小さな心には、これこそ上からの神のしるしだと思えた。神への誓いに押された証印である。

母はふたたび、ハンナと、ハンナが主にささげた子の物語を何度も読んだ。それから座ったまま、遠くを見つめていた。これからの年月を夢見ていたのである。遠くの丘の向こうに、日はみるみる沈んでいった。暗い空は深紅と紫と金に燃え、すばらしい希望の蜃気楼に変わった。

ああ、希望よ！　まばゆく輝く希望よ！　あなたは望みを失った者に、なんという変化をもたらすことか。暗くなった道を明るくし、さびしい旅路を元気づけてくれる。

第二章　赤ん坊

『この子を与えてくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとどけられました。それゆえ、わたしもこの子を主にささげます。この子は一生のあいだ主にささげたものです』（第一サムエル一・二七～二八）

「静かに、わが子よ、
じっと眠れ。
聖なる御使が床を守る。
数えきれない天の祝福が
そっとおまえの頭に降りそそぐ」

家に、あ・か・ん・ぼ・うがいた！　小さくて、取るに足りないちっぽけなものである。眠ることと、泣くことと、柔らかい小さなピンクの親指をしゃぶることのほかは、ほとんど何の役にも立たない。そして、どうやら私がその赤ん坊だったらしい。

母は、刺繍をした大きなショールにていねいにくるんだ、温かい小さな包みを揺らしていた。そして、子供のころの子守歌をそっと歌っていた。

「静かに、わが子よ」

小さな頭が、こっくり、こっくり、こっくりと揺れる。「じっとねむ」

疲れた目が、とろんと、とろーんと閉じていく。「聖なる御使が床をま」握っていた小さな指が、ゆっくりとゆるんでいく。「数えきれ」最後にもう一度、そっと軽くたたくと、赤ん坊は眠っていた。

食堂の窓の外では、秋の木の葉が、また静かに地面へ舞い落ちていた。十月も終わりに近い日の光が、ふたたび斜めに差し込んでいた。家の戸口に番兵のように立つ、大きなかえでとニセアカシアの、華やかな葉のあいだからである。秋風が葉をさらさらと鳴らし、枝を揺すった。色とりどりの葉が、まさに雨のように宙を舞い、窓ガラスを軽くたたいた。まるで、思い出を誘っているかのようだった。葉と同じように軽やかに、去年の秋へ舞い戻ろう。この同じ木々が、前に色とりどりの上着を脱ぎ捨てた秋へ。そして、母が自分の部屋で祈ったあの日へ。自分に代わって、大きな喜びのおとずれを宣べ伝える小さな娘を、母が求めて祈った日である。

その後の日々、母は一瞬たりとも神を疑わなかった。約束してくださったかたは、真実なかたではないか。赤ん坊の衣類は一枚、また一枚と仕上げられ、用心深く鍵をかけてしまい込まれた。いま、赤ん坊を腕に抱いて座りながら、母は思い出の中で、ふたたびつま先立ちで軽やかに階段を上った。部屋の戸に鍵をかけ、小さな娘のための衣類を一枚ずつ広げた。このうえない喜びとともに、いとおしげに指でなでたのである。母は、神に仕える自分の場所を埋める「娘」を、神に求めたのではなかったか。ピンクの顔に茶色の目をした小さな見知らぬ客が、まぎれもない声で到着を告げた朝があった。静かな古い農家に、その声が響き渡った。その朝も、いとしい母は疑わなかった。そして、確信をもって尋ねた。

「娘はどこ。ここに連れてきて」

それから母の思いは、過去と現在を越えて、はるかな未来へと舞い上がった。これから来る年月を夢見たのである。この小さな者は、鼻が上を向き、「十本ずつの小さな手の指と足の指」を持っている。この子が、やがて神の子イエス・キリストの福音を宣べ伝えるようになるのだ。

小さな指をなでながら、母は夢見た。この同じ小さな手がたくましくなり、聖書を持ち、みことばの剣をふるう日を。この小さな足が、小羊に従って「導かれる所へはどこへでも」ついて行く日を。この小さな唇が、みことばを宣べ伝える日を。ああ、

「信仰は、力ある信仰は、約束を見つめ、
ただそれだけを仰ぐ。

できないことを笑い飛ばし、
『それは成る』と叫ぶ」

これまで母の魂には、愛と、自分で奉仕したいという願いが、大きな奔流となってあふれていた。その流れは、いまや新しい水路に向けられた。この赤ん坊を、その行くべき道に従って育てること、それが母の生涯の、心を奪う何より大切な仕事となった。この教育は、早く始めすぎるということはない、と母は考えた。そこで、私が生後三週間になると、母は固い決心を言い渡した。五マイル離れた小隊の「祝会」に、赤ん坊を連れて行くというのである。看護婦はぞっとし、家じゅうの者が驚いた。

善意の忠告がたくさん、戸口まで母を追いかけてきた。

「その子は家で、火のそばに置いておきなさい」というのである。赤ん坊はきっと肺炎になる、と言い張る人もいた。マリアおばさんは「赤ん坊のことなら何でも知っている」人で、首を振った。そして、自分の家では赤ん坊をどう扱っているかを話し、最後まで反対して言った。

「あんた、その子を死なせる気かい！　赤ん坊のことを何もわかっちゃいない。赤ん坊の世話がそのくらいしかできない人は、赤ん坊を持っちゃいけないんだよ」（しかし悲しいことに、マリアおばさんの赤ん坊は、その肉の体をとても大事に育てられ、いつも火のそばでくるまれていた。それなのに、まもなく、あれほど恐れていた風邪をひいて死んでしまった。）

母の話では、私はその最初の集会から温かく迎えられたという。最前列の席に陣取り、頼まれもしないのに、その晩の音楽と盛り上がりに、私なりの分をたっぷり加えたそうである。

生後六週間で、私は壇上へ昇進した。救世軍での、私の厳粛な献児式である。母が待ち望み、祈ってきたときだった。母の夢と望みのときだった。そのとき母は、目に見える祈りの答えである小さな娘を、公に主の奉仕にささげたのである。

こうして、私が赤ん坊のうちに、大切な母は主への誓いを果たした。主は、はしためのの悩みをかえりみ、母を覚えて、祈り求めた子を与えてくださったのである。

「すべてを見守るかたに、
私は思いわずらいの重荷をゆだねる。
祈れば、主は聞いてくださると信じて。
主はいつも祈りに答えてくださる。
ときには、長い年月を待つこともある。
ときには、その場ですぐに
主の答えの知らせが聞こえる。
神はいつも祈りに答えてくださる。
ときには、主は遠くへ『行け』と命じられる。
けれども、主はそこへ共に行ってくださる。
主が『とどまれ』と言われるなら、私はそれを喜ぶ。
愛はいつも祈りに答えてくださる。
明日かもしれない。今日かもしれない。
それが『しかり』であっても、
『否』であっても、
神はいつも祈りに答えてくださる」

第三章　子供のころ

（子供たちのために書いた章である。大人や賢い人たちは読まずに、第四章へ進んでいただきたい。）

＊　＊　＊

『子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない』（箴言二二・六）

＊　＊　＊

「やさしいイエスさま、柔和でおだやかなかた、
この小さな子をごらんください。
幼い私をあわれんで、
みもとに行かせてください。
あなたのもとへ連れて行ってほしいのです。
恵み深い主よ、止めないでください。
小さな子に居場所をください」

「神さま、パパを祝福してください。ママを祝福してください。世界じゅうのみんなを祝福してください。そして、小さなエイミーをよい子にしてください。イエスさまのお名前によってお祈りします。アーメン」

子供のころの幸せな毎日は、こうして、祈りとキスと聖書のお話で終わった。私自身の子供時代は、キリスト教の感化と聖書の教えに、とても恵まれていた。だから私には、いつもこう思えてきた。敬虔で祈る母のいない家は、地上のあらゆる祝福のうち最大のものを奪われている。その家は、地上のあらゆる宝石のうち最大のものを盗まれているのだ。その家の子は、二度と取り戻せない損失をこうむっている。

反対に、どんなに貧しい家でも、谷間のどんなに粗末な小屋でも、敬虔な母がいれば違う。その母は、来る日も来る日も、祈りと涙とほほえみを、とがめと励ましの言葉を、忍耐と愛を、日の光と軽やかな歌を分け与える。そういう家は、この世の数え方では貧しくても、値のつけられない宝石を納めた宝石箱のようである。

子供のころの思い出でいちばん大切なのはどれかと、もしだれかに聞かれたら、私はかわいい子羊たちのことは飛ばすだろう。大きなニューファンドランド犬も、牛たちも、子馬たちも、ふわふわのがちょうのひなやひよこも、私の白い鳩も飛ばすだろう。そのほか、子供心に大切にしていた数々の宝物も飛ばすだろう。そして、あの聖なるたそがれどきのことを話すだろう。私は母の腕にしっかり抱かれて、大きくて古い、座り心地のよい揺り椅子で、母といっしょに前に後ろに揺れていた。母は、すばらしい聖書のお話をしてくれ、救い主の愛を歌う賛美歌を歌ってくれた。

獅子の穴のダニエルのお話があった。子供の心にいつも親しいお話である。火の燃える炉の中の、三人のヘブル人の若者たち。色とりどりの上着を着たヨセフ。イスラエルの人々を率いたモーセとアロン。イエスの生涯と犠牲。イエスが備えに行かれた、天と呼ばれるすばらしい場所の美しさ。これらのお話や、ほかの多くのお話が、明るい金の糸のように、幼い私のしつけに織り込まれていた。五歳のとき、聖書のお話で、頼まれて立ち上がって話せないものは、ほとんどなかった。幼いうちからキリスト教のしつけを受けると、こうなるのである。

小さなみなさんは、守りの御使の絵を見たことがあるだろうか。大きながけのふちを、花を摘みながら走っていく小さな男の子と女の子を、御使が見守り、守っている絵である。それと同じように不思議なしかたで、私たちの愛するイエスさまは、私を見守り、守ってくださった。そういうことが何度もあった。

深くて暗い井戸の上につるされた、大きな古いつるべおけに、私がよじ登ったときのことである。井戸の壁は、こけむした石が何段も何段も積み重なってできていた。私は、板で四角く囲った井戸の縁からのぞき込んだ。つま先でいっぱいに背伸びをすると、その囲いがちょうど私のあごの高さになった。石の壁は、下

へ、下へ、下へと、好奇心いっぱいの目の届くかぎり続いていた。ときどき、日の当たり具合がちょうどよく、おけが井戸のすぐ内側の小さな棚に載っていることがあった。そういうとき、下にもう一人の小さな女の子が見えた。その子に、私が親しみをこめて、小さな声で呼びかける。

「こんにちは！」すると、その子はいつも「ちは！」と、こだまを返してきた。井戸の口を守る板の囲いの上には、巻き上げ機が渡してあった。巻き上げ機にはハンドルが付いていた。ハンドルを回すと軸が回り、太い綱が長く長く下りていく。そして、冷たい水がなみなみと入った大きなおけを引き上げるのである。

いじって試していると、大きなハンドルに何度もひどくぶたれて、こらしめられたものだった。母も、井戸に近づいてはいけないと、何度も何度も私に注意していた。ところがある日、母がお客をもてなしているとき、私は食卓の椅子からするりと下りた。母の守りと見張る目から離れ、よちよちと、あの不思議と興味に満ちた井戸へまっすぐ向かった。

揺れている綱をつかみ、おけに乗って下りていき、水に映って見えたあの小さな女の子を訪ねたら、どんなに楽しいだろう！　私は箱によじ登り、身を乗り出して、おけに這い込もうとしていた。ちょうどそのとき、母が私のいないのに気づいた。あたりがしんと静まり返っているので、母は胸騒ぎがした。戸口に飛んで行くと、ちょうどピンクの服のすそと小さな両足が、井戸の縁を越えて消えていくところだった。ハンドルががたんと留め具から外れ、回り始めた。そのとき母がハンドルをつかみ、私を井戸の口からさっと抱き上げた。

その後、井戸の囲いは高くされ、まもなく風車が取り付けられた。もう、おけで遊ぶことはできなくなった。しかし確かに、すべてを見守っておられる父なる神が、私を守り、いのちを救ってくださったのである。御名がほめたたえられるように。

次の章を読めば、私がまったく同じように、天の父の食卓からするりと抜け出したことがわかるだろう。私は、ぽっかり口を開けた罪の暗い井戸に、大きく身を乗り出した。その深みに誘い込まれようとしていた。ハンドルが回り始めた、まさにそのとき、イエスが私を救い出してくださった。そして、私をその腕に抱き上げ、安全な所に置いてくださったのである。

それから、こんなこともあった。母に言いつけられて、台所のかまどにくべる木っ端をバケツに一杯集めに、納屋の裏へ行ったときのことである。これは私の毎日の手伝いの一つだった。父は橋の工事を請け負う建築業者だった。父が大きな材木を削った所には、いつも木っ端が山のようにたまっていた。

その晩、私は赤い丸模様の入った小さな白い服を着ていた。私の自慢の服だった。雄牛が、ほかの牛たちといっしょに畑から戻り、水飲みおけのまわりに集まっていた。その雄牛は、どうやら私の服のりっぱな赤い丸模様が気に入らなかったらしい。その雄牛はいつもとてもおとなしく、害がなかったので、そこから危険が来るとはだれも思っていなかった。

私は、大きな材木の山の向かい、納屋の角にいた。バケツはもう木っ端でほとんどいっぱいだった。雄牛が脅すように近づいてくるので、私はこわくなった。木っ端を投げつけて、「あっちへ行って」と言った。けれども雄牛は止まらず、迫ってきた。いかにも用ありげな、心に決めたような、いやな様子だった。

雄牛は私の上にそびえ立ち、額で私を打った。私が起き上がるたびに、雄牛がひどく突くので、私はぬかるんだ納屋の庭にまた倒れた。幸い、父がしばらく前に、雄牛の角をのこぎりで切り落としていた。それでも、雄牛が怒った大きな足で私を踏みにじらなかったのは、ただ神のあわれみによる。私がとっさに機転をきかせることができたのも、神のあわれみによる。材木の山の下には、すき間が通っていた。私はそこに這い込み、反対の端まで這い抜けた。雄牛が私の出てくるのを待っているあいだに、こうして逃げ出したのである。

私はすっかりしびれたようになっていた。口の中は泥と血でいっぱいだった。それでも、木っ端の入ったバケツを両手でしっかり握っていた。ママは私に、木っ端を取ってくるように言った。だから、木っ端をママのところへ持って帰るのだ。

母は私の泣き声を聞いたが、歌っているのだと思った。（私の歌がたいしたものではなかったということである。）けれども、窓から私の姿が見えたので、母はたちまち私のそばに来た。母が私を抱き上げたとき、私はまだ木っ端のバケツ

にしがみついていた。母が私を井戸まで連れて行き、冷たい水で洗い始めて、ようやく私は母の腕の中で気を失った。そのとき初めて、木っ端を手放したのである。

私は、良い兵卒として苦しみに耐えるように召されている。どんなに戦いが激しくても、尊い魂をイエスのもとに連れ帰るように召されている。主は、そのための力を私のうちに置いてくださった。それで私は、敗北を拒み、落胆することさえ拒んで、最後までやり抜く。私はよく、あの小さな女の子のことを思う。泥だらけになった赤い丸模様の服を着て、木っ端のバケツを家に持ち帰った女の子である。そして、なぜか私にはわかる。母は、戦いの傷あとも木っ端もいっしょに、私をその腕に抱き上げた。それと同じように、主は人生の短い一日の終わりに、私を迎えてくださる。しっかり握りしめた尊い荷物ごと、私をその腕に抱き上げてくださるのだ。

父の農場で馬に乗ることは、私の何よりの楽しみの一つだった。ここでもまた、主は私を見守ってくださった。あるとき、私は気の荒い馬に乗っていた。男の人たちでさえ、めったに乗ろうとしない馬だった。けれども、私が砂糖をやったりなでたりしてなだめすかすと、その馬はしかたなさそうに私の言うことを聞くようになっていた。私は針金の柵から馬の背に飛び乗った。ところが馬は、柵ががたがた鳴る音におびえた。そして、私がまだ体勢を整えないうちに、畑を横切って狂ったように駆けだした。

馬は有刺鉄線の柵に向かって走っていた。この柵まで行けば馬はだめになってしまうと、私にはわかっていた。父がとても大切にしている馬だった。そこで私は、長くなびくたてがみにしがみつき、馬が跳ぶのに合わせて跳んで、両足で降り立とうと決めた。そうすれば、馬はすぐに速度を落とすだろうと思ったのである。前にも、そうしたことがあった。ところが今度は、運悪く蟻塚の上に降りてしまった。足首をひねってひどくくじき、筋を何本か切ってしまった。しかし、神をほめたたえよ、いのちは助かった。そして、松葉杖をつき、痛みをこらえながらも、私はクラスで一番の成績で試験に合格した。中等学校の入学試験で最高の成績を取った者に贈られる奨学金でも、二番になった。

私の幼いころ、母は救世軍の少年部の曹長（つまり日曜学校の校長）で、大勢の少年少女を受け持っていた。母の働き場所である小隊は五マイル離れていて、そこへ通うのは、しばしばたいへんな苦労だった。道が悪いときや、馬と馬車が使えないときは歩いた。道がよいときは、私を自転車のハンドルに乗せ、丘を越え、ほこりの中を集会へ向かった。そういうことが何度もあった（私が五歳、六歳、七歳のころである）。こうして母は、キリストのための働きを続けた。

この集会は、私にとって大きな楽しみだった。ほかの小さな子供たちを悔い改めの座に連れて行き、祈ってもらうのは、格別の喜びだった。また、母のいかめしい肩書きも、私の大の自慢だった。私には、それがとても立派で偉いものに思えた。次に兵営で集会があるまで待ちきれず、私はよく二階の大きな寝室を集会所に変えた。家のあちこちから椅子を運んで何列にも並べ、自分で集会を開いた。母が戸の外で聞いていると、私がおごそかに告げるのが聞こえた。

「では、曹長がお祈りをします」そう言って、私はひざまずいて祈った。

「では、曹長が独唱をします」それから、母のやさしい歌の一つを、できるかぎり上手にまねて歌った。

「では、曹長が証し会を導きます」「みことばを読みます」そして最後に、椅子たちはみな、おごそかに頭を垂れるように求められた。そのあいだに、曹長が祈って集会を閉じたのである。

このように、そのころから神は、私の上に、私の心の願いと志の上に、御手を置いておられたのである。私は祈りによって生まれた子だった。その私を、神は愛といつくしみのうちに知り、優しいあわれみによって、ある目的のために召してくださった。それは、本当にそのとおりだと思えた。ああ、ハレルヤ！

少年少女の大会では、子供たちは、色の糸で標語を刺繍した白いたすきを掛けるのが習わしだった。ほかの子供たちのたすきには、『イエスは救う』『神は愛である』などの言葉があった。けれども、母が私のために縫ってくれたたすきには、『神の小さな子』とあった。母は、自分の祈りがかなうことを求めて、そのように私を守り続けた。嵐と試練、悲しみと落胆を通り抜けて、そうしたのである。約束を自分のものとして受け取り、子をその行くべき道に従って育て、年老いてもそれを離れることがないようにするためだった。

この章を読んでいる小さな女の子、男の子のみなさん、教えてほしい。あなたのママは、イエスさまを知っているだろうか。あなたがいつかイエスさまのために働く人になるように、ママは祈ってくれているだろうか。そして、あなたは、心がまだやわらかく、人生の始まりにいる今、イエスさまに心をささげただろうか。

第四章　少女のころ

『愚かなことが子供の心の中につながれている』（箴言二二・一五）

やがて、学校で学ぶ日々が始まった。家から一マイル離れた角に建つ、小さな白い校舎である。救世軍の子供は私一人で、ほかの生徒はみな教会の信徒の子だった。初めのうち、子供たちは救世軍のことで私をからかった。叫び声や行進や太鼓のことである。そのころ救世軍は、まだ人々にさげすまれていたのだ。けれども、私はとうとう子供たちの心をつかんだ。丸いチーズの箱で太鼓をこしらえ、定規をばちにした。赤いテーブル掛けで「血と火」の旗を作った。そして、みんなで校舎のまわりを行進し、「救世軍ごっこ」をしたのである。

すべてはうまくいっていた。ところが、私に朗読の才能が少しあることが知られた。兵営までは遠かった。それに、教会のほうがずっと人気があるように見えた。それで私は、メソジスト教会に通い始めた。父がかつて聖歌隊の指揮者をしていた教会である。その教会の催し物に一度招かれると、まもなくほかの教会にも迎えられるようになった。そして、近隣一帯の催し物のプログラムに、私の名が載るようになった。朗読や掛け合いや劇については、教会でそれを教える先生たちから、多くの助けと指導を受けた。キリスト教婦人矯風会の大会でほかの人たちと競い、私は銀メダルを、のちには金メダルを贈られた。

しかし、禁酒運動のためのものを除けば、出し物や劇は、ほとんどが滑稽なものばかりだった。何か聖なるもののほうがよいかと牧師たちに尋ねると、決まってこういう答えが返ってきた。

「いや、何かおもしろいものをやってくれないか。みんなが笑うような、滑稽なものがいい。この前のアイルランドなまりの朗読はすばらしかった。ああいうのをやってくれ」

私が朗読すると、聴衆は笑い、手をたたき、また笑って、目に涙を浮かべた。そのころ私は、教会でたいへんな人気者だった。たぶん、今よりずっと人気があっただろう。

年がたつにつれて、私は小学校から中等学校へ進み、教会の催し物にいっそう夢中になった。かきの夕食会があり、いちご祭りがあり、クリスマスツリーの会があった。その後にはいつも音楽会があり、切符が売られた。そのころ私は、それを「神が借金を払われるのを助け、教会を支えるため」だと思っていた。しかし今では、こう学んでいる。私たちの神は、ご自分の働きのための資金を豊かに備えることのできるかたである。だから、そのような方法に頼る必要はまったくないのだ。

人々の称賛と拍手は、私たち若い者の何人かにとって、たいへん魅力のあるものだった。私たちはよく、舞台に立つことを話し合った。教会はこの方面でよい訓練をしてくれている、と私たちは言い合った。それに、劇や音楽会を教会でやろうと劇場でやろうと、たいした違いはないではないか、と。

堕落の道での次の一歩は、日曜学校の図書室の小説を読み始めたことだった（小説は、紙の表紙でも布の表紙でも小説である）。そして、それを読みあさってしまうと、もっと手に入る所を探し当てた。

誘惑する者の次の誘いは、聖歌隊の一人にこう聞かれたときに来た。今週は活動写真館に行ったか、というのである。私は答えた。

「いいえ」、教会の外で活動写真を見たことは一度もない、と。すると彼女は、見下して哀れむような目で私を見た。私は自尊心を傷つけられ、行こうと決めた。けれども、母には言わなかった。入るときには、ひどく後ろめたかった。ところが、中に教会の信徒が何人かと、日曜学校の先生が一人いるのが見えた。それで気が楽になった（あの人たちがいるのだから、きっとかまわないのだ）。そして、腰を落ち着けて活動写真を楽しんだ。

私は運動が得意で、外の遊びが好きだった。次に来たのは仮装のスケート大会で、それから初めての学校の舞踏会だった。私はもう中等学校の上級に進んでいた。きれいに刷られた招待状を家に持って帰ると、母はきっぱりと許さなかっ

た。さんざん頼み込み、なだめすかして、ようやくしぶしぶ承知してもらった。ドレスと舞踏靴が買いそろえられた。私は初めての舞踏会に出かけた。外見はまぶしいほど幸せそうだったが、内心は少し重く、良心がとがめていた。母が家で一人、悲しみながら祈っていることを知っていたからである。

けれども、それはとても上品な集まりに見えた。最初に踊った相手は、長老派の牧師だった。ほかにも善良な（はずの）教会の信徒たちが来ていた。きっと母の思い違いか、母の考えが少し古いのだ。何もかもが、なんとすてきに見えたことだろう。楽団、花、私に向けられる注目、美しい衣装、よく整えられた夜食！

ああ、罪よ、おまえは、なんとまばゆい美しさと、なんと上品なビロードで、その爪を隠すことか！　若者の足を誘うおまえの美しい約束は、なんと魅力に満ちていることか！　敵のたくらみは、なんと巧みなことか！　敵は、なんとなめらかに、ずる賢く計画を立てることか。敵は網を編み、その網をますますきつく引き絞っていく。そして、将来とその見通しを、ばら色と、美しく塗った約束とで照らし出す。しかしその実は、ひとたびもぎ取ると、それを追い求める者の手の中で、灰となって崩れ落ちるのである。

私の将来と学業の見通しは明るく見えた。両親は、私を学校に通わせるためなら、どんな努力も苦労もいとわなかった。実際、それは両親にとって小さなことではなかった。毎日十マイルを行き来しなければならなかったのである。朝に五マイル、夕方に五マイル、汽車か馬車で通った。田舎道はぬかるみ、雨が降り、雪が積もったが、それでも通った。

このころ、私たちの教室に一冊の教科書が取り入れられた。『高等学校自然地理』という題の本である。その本は、地球のでき方や岩の地層などの問題を掘り下げ、生命の起源と進化の過程を学者ぶって説明していた。この重大な問題について、ダーウィンやほかの権威者の言葉が引かれていた。この惑星の生命の起源について、本はこう教えた。海のぬめりや海藻や菌類の中から、虫のたぐいの生き物が現れた。虫から動物が生まれ、絶え間ない進化の過程を経て、ついに人間が現れた。人間は、もちろん猿やほかのどんな生き物よりも高等である、と。

ほかの生徒たちがこの理論や教えをどう受け止めたかは、わからない。しかし私には、それが著しい影響を及ぼした。

「人間が、進化の過程でできたというのか。

それなら、聖書の言うこととは違って、神が人間を造られたのではまったくないのだ。聖書には誤りや間違いがあると言う牧師たちは、正しかったのだ」若い私の頭の中を、考えがどこまでも駆けめぐった。そして、ついにこう考えるに至った。

「それなら、聖書が一か所で間違っているなら、ほかの所でも間違っているおそれが大きい。聖書の言うことは当てにならない。きっと神なんかいないのだ。だからクリスチャンたちは、日曜日には教会でいかにも信心深くふるまい、週日には好き勝手にしているのだ」

「そうだ、神なんかいないのだ」大きな月やまたたく星があることさえ、科学で説明されていた。太陽は、かつて溶けた溶岩の大きなかたまりだった。それが渦を巻いて回り始め、地球も月も星も、ほかの惑星をみな投げ出したのだという。そこには神のことは何もない。あるのは科学と、今や明らかにされた条件から当然出てくる結果だけである。それを明らかにしたのは賢い天文学者たちである。彼らは大きな望遠鏡ですべてを調べ上げていた（その望遠鏡は、とてつもない金をかけ、何年もかけて発明されたものである）。だから彼らは何もかも知っているのだ。

この本のために、私の心には多くの疑問がわき起こった。それで私は、ほかの不信仰な理論をさらに深く調べた。あまりに興味を持ったので、新聞に投書を書いた。モントリオールで出ていた『ファミリー・ヘラルド・アンド・ウィークリー・スター』紙で、当時カナダ一の新聞だった。私の問いには、ハミルトン大主教をはじめ、多くの人が答えてくれた。その本とその教えについて、賛成と反対の両方の論が出された。

今日、説教壇が不信者と高等批評家で満ちているのも、何の不思議があるだろうか。

手紙が何か月も押し寄せた。イギリスから、ニュージーランドから、オーストラリアから、アメリカのあらゆる所から、そして私の国からも届いた。どの手紙にも違う説明が書いてあった。しかし、こう書いてあるものは一通もなかった。

「お嬢さん、聖書は真実です。神のみことばをそのまま受け取り、書いてあるとおりに信じなさい」

読めば読むほど、またクリスチャンの生活を見れば見るほど、私は神が本当におられるのかを疑うようになった。（どうして疑うことなどできたのか、今では私にとって謎であり、恥でもある。）悪魔はしばらくのあいだ、私の目をくらませて、まわりにいた本物のクリスチャンを見えなくしていたにちがいない。私に見えたのは、口先だけの信仰告白ばかりだった。日曜日には聖歌隊で歌ったり会衆席に座ったりしている人たちが、週日にはありとあらゆる世俗の集まりに出ていた。私は聖書を読み始めた。聖書が自分と矛盾していないか、読んできた本と比べてどうかを確かめるためである。ああ、私は真理を知らなければならなかった。信仰には、何か確かなものがあるのだろうか。

機会があるたびに、つかまえられるかぎりのクリスチャンに問いかけ、問い詰めた。けれども、あまり先へは進めないようだった。最初に試みた相手は母だった。私はこの問題を真剣に考えていた。母が牛乳の入った平なべを両手に持って、地下室の急な階段を上がってきたちょうどそのとき、私は母を問いで出迎えた。

「お母さん、神さまがおられるって、どうしてわかるの」

かわいそうに、母はあまりに驚いて、もう少しで後ろ向きに階段から落ちるところだった。母は、知っているかぎりの説明をしてくれた。聖書の言葉を挙げた。また、驚くべきことに満ちた被造物を指して、それが造り主の御手のわざである証拠だと言った。

母が説明しようとするたびに、私はあの本の学者めいた言葉と、十七歳の私の、二十世紀の優れた（はずの）知恵とで迎え撃った。その本と知恵は、母親たちも聖書も、はるか後ろに置き去りにしていた。母の論は、しぼんで何もなくなってしまうように思えた。母は、驚いて目を見開いたまま、台所の椅子にどさりと腰を下ろした。口をはさむすきもなかったのである。

次に試みた相手は、うちに夕食に来た牧師だった。母は台所で、牧師をもてなすお決まりの鶏料理を作っていた。けれども私には客間で用があった。表向きは家族のアルバムを見せていたのだが、実は、心にかかっている問いで牧師を探ろうとしていたのである。

「主は、今でも奇跡を行ったり、病人をいやしたりなさるのですか」と私は尋ねた。

「いやいや、お嬢さん、奇跡の時代は終わったのだよ」というのが、驚いた牧師の答えだった。「人は、主が与えてくださった知性と知恵を、内科や外科の方面で用いるように求められているのだ。そういうものこそ本当に奇跡なのだよ」

「でも、ほら、ヤコブの手紙五章十四節に書いてありませんか。あなたがたの中に病んでいる者があれば、『その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリブ油を注いで祈ってもらうがよい。信仰による祈りは、病んでいる人を救い』、病人はいやされる、と。

それに、『イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない』という聖句もありませんか。『わたしを信じる者は、またわたしのしているわざをするであろう。そればかりか、もっと大きいわざをするであろう。わたしが父のみもとに行くからである』という聖句もありませんか。

主がもうそのような奇跡を行われないということと、これらの聖句とを、どう折り合わせるのですか」

私の問いははぐらかされた。そして、おまえはほんの子供だからこういうことはわからないのだ、と思わされた。私の納得のいく説明は、ついに得られなかった。

母は私の態度と問いに不安を覚え、どこかの教会に入るように頼んだ。私が言い訳をすると、母は、いろいろな教会に残らず連れて行こうと言った。それぞれの教えをよく調べて、いちばんよいと思うところに入ってほしい、というのである。私は答えた。催し物や音楽会で、今でも教会の働きは十分にしていると思う。それから、独りよがりな調子で付け加えた。私だってほかのだれにも劣らず善良だと思う。私たちの生活に、とくに違いがあるとは思えない。教会員であろうとなかろうと、どうでもよいことだ、と。

「それなら、今夜は救世軍の特別集会に行きましょう。いっしょに行くのは久しぶりね」

かわいそうな母！　あのときの母の顔を、私はいつか忘れることがあるだろうか。その夜、そこでは催し物が開かれていたのだ。しかも、私たちが入って最初に演じられた出し物は、これだった。

「ちょいな、ちょいな、
ねこがバイオリンをひいて、
めうしがお月さまを跳びこえた！」

演じたのは小隊の下士官の一人で、聴衆は笑いながら拍手していた。その人は、黒人のミンストレル芸人に扮していた。

その後、私たちは、准将とその妻と娘が導く特別集会に出た。娘は、イエスに心をささげるようにと、とてもやさしく私を招いてくれた。私は彼女に言い返した。神なんかいない、聖書には何もない、と。彼女は手に負えなくなったようで、母親を呼びに行った。母親も、祭壇の前に来るようにと私に頼んだ。それから二人は父親を呼びにやり、まもなく私は人の輪の中心になっていた。母は輪の外で、顔を赤らめて聞いていた。そのあいだ私は、無知のまま、進化について自分の考えを述べ立てたのである。

ああ、愛するイエスさま、あなたは私の生涯のすべての日々、私にこれほどよくしてくださり、あわれみ深く、真実であってくださいました。そのあなたを、どうして疑うことなどできたのでしょう！

長い道のりを馬車で帰るあいだ、母はずっと激しく泣いていた。母が私をとがめたのは、ただこれだけだった。

「ああ、エイミー、今夜あの人たちの前であんな話をする娘を育てるなんて、夢にも思わなかった！　何年もクリスチャンとして歩んできたのに。あんなに祈って、あの小隊で働いてきたのに。よりによってあなたが、こんな話をするなんて！　ああ、私はどこで間違ったの。ああ！　ああ！！　あああ！！！」

私は良心がとがめ、母の嘆きの前に恥じ入った。家に着くとすぐ、よく考えようと自分の部屋に逃げ込んだ。私は確かに母を愛していた。母を嘆かせ、悲しませることは、この広い世界で私がいちばんしたくないことだった。「でも、それでも」

私はランプをともす間も惜しんで、寝室の窓辺へ行った。窓をいっぱいに開け放ち、床に座った。窓の敷居にひじをつき、両手にあごを載せた。そして、星をちりばめた天の床を、物思いにふけりながら見上げた。大きな白い銀色の月が、東の空から私のほうへ、おごそかに渡ってくるのを見上げた。それから、途切れた言葉の続きを言い終えた。「神さまは本当におられるのかしら。だれが正しいのだろう。何が真理なのだろう」

野と木々をおおう白い雪のマントが、澄みきった凍てつく空気の中できらめいていた。そして

まあ、あそこの月のなんと大きく見えたことか。一千万もの星が、なんとまたたき、きらめき、光っているように見えたことか！　私は掛けぶとんを体に巻きつけ、寒さも忘れて、いつまでも座っていた。天の川や北斗七星や、ほかの見慣れた星々を見上げていた。

きっと、あの星々のすべての向こうに、神がおられるに、ち、が、い、な、い。星々は、神ご自身がそこにおられ、すぐ近くにおられることから、息づき、あふれ出てくるように思えた。

学校で、惑星のことを学んでいた。惑星はそれぞれ、自分の軸を中心に自転し、自分の軌道を回っている。ぶつかり合うことも、乱れることもない。それは何もかも、あまりに大きく、あまりに高く、死ぬべき人間の手も知恵もとうてい届かないものだった。この驚くべき太陽系を支え、治めているのは、きっと神の御手にちがいない。

まあ、神がなんと近くにおられるように思えたことか。今、このときに！

突然、考える間もなく、私は思わず両腕を窓の外に投げ出した。そして、天に向かって手を伸ばし、叫んだ。

「ああ、神よ！　もし神がおられるなら、私にご自身を現してください！」

その叫びは、私の心の底から出たものだった。実際には、唇からもれたのはささやきにすぎなかった。けれども、正直で、慕い求める心から出たそのささやきだけで、星々を越えて響き、父の御座に届くのに十分だった。天におられ、小さな子らの叫びにいつも耳を傾けておられるかたが、私の声を聞き、答えてくださった。御名がほめたたえられるように。

ああ、疑う人や不信者を自認する人がみな、その心からの祈りを一つ、神にささげさえすれば。そうすれば、神は私にしてくださったように、その人たちにもご自身を現してくださるだろう。神は人をかたよりみないかただからである。ハレルヤ！

第五章　救いと聖霊のバプテスマ（その一）

『彼らが呼ばないさきに、わたしは答え、彼らがなお語っているときに、わたしは聞く』（イザヤ六五・二四）

私たちの神は、祈りに答えてくださるかたである。御座に着いておられ、その耳はいつも私たちの叫びに開かれ、その心は私たちの弱さに動かされる。その神が、この哀れで値打ちのない子供の叫びに、もう答えてくださっていた。神は、一連の出来事を動かし始めておられた。それは、私自身の魂を救いとバプテスマに導くだけではなかった。私を主のぶどう園へ連れ出し、主の尊い奉仕の働き手とするものだったのである。

寝室の開いた窓辺で祈ってから、ほんの数日後のことである。父が学校まで迎えに来てくれ、私たちは家に帰る途中、大通りを馬車で走っていた。あちこちの教会や会館で、盛大なクリスマスの催しや音楽会が目前に迫っていた。私たちは、そこでの私の出番について、夢中で話し合い、計画を立てていた。店のショーウィンドーは、緑と赤と金銀のモールのクリスマスの装いで、なんときれいだったことか！

ところが、ほら！　通りの左側の向こうの窓に、それまで見たことのない新しい看板が出ていた。こう書いてあった。

『ペンテコステ伝道所　集会　毎晩　日曜は終日』

私は父のほうを向いて言った。

「お父さん、明日の晩、あそこに行ってみたいの。うわさに聞いたのはあそこだと思う。跳びはねたり踊ったり、神の力に打たれて倒れたり、とても変なことをするんですって。見に行ったら、きっとすごくおもしろいわ」

こうして次の晩、私たちは、町に来たばかりの小さなペンテコステ伝道所の後ろの席に座っていた（そこからなら全部見えるのである）。その晩はあとで、町の公会堂で劇の一つの下稽古があることになっていた。伝道所に寄る時間が、ちょうどそれだけあったのである。

そこにいたのは、ごく普通の人たちのようだった。町の金持ちや名の知れた人は一人もいなかった。私は、帽子に花を飾り、金の鎖のロケットを下げ、指には指輪をはめていた。そんな身なりの私は、まわりの人たちより少しばかり身分が上のような気がした。人々が叫び、踊り、祈るのを、私はおもしろがって眺めていた。

町の牛乳屋の一人だと知っている男の人が、神の力に打たれて頭から足まで震えた。それから後ろに倒れ、床に長々と横たわって主をほめたたえた。そういうことのすべてに、私はくすくすとばかみたいに笑った。何もわかっておらず、何もかもひどくこっけいだと思っていたのである。

やがて、背の高い若い男の人（百八十八センチほど）が壇上に立った。聖書を手に取って開き、読み始めた。私は思わず見とれた。率直で、明るく、やさしそうな顔。天の光をたたえた、アイルランド人らしい青い目。ふさふさした髪。その茶色の巻き毛のひとふさは、何度指でかき上げても、目のすぐそばにはらりと落ちてくるのだった。

彼が真剣な熱意をこめて語るあいだ、私は彼を頭から足まで眺めていた（この若い人がまもなく私の夫になるとは、思いもしなかった）。聖書の箇所は、使徒行伝二章三十八節と三十九節だった。（ペンテコステの集会には、一つ確かなことがある。そこに通っていれば、ほどなく使徒行伝に第二章があることを知るのである。私はそれを最初の集会で知った。）

その伝道者は、名をロバート・センプルといった。彼は聖書の箇所の最初の言葉から話を始めた。

「悔い改めなさい」ああ、彼はその言葉をなんと繰り返したことか。悔い改めなさい！　悔い改めなさい！！　く、い、あ、ら、た、め、な、さ、い！！！何度も何度も繰り返した。その恐ろしい言葉を言うのをやめてくれたらと、私はどんなに願ったことか。その言葉は、矢のように私の心を刺し通すように思え

た。彼は神の霊感を受け、聖霊の力と証明とによって語っていたからである。彼は本当に、イエスと聖霊がおられると信じているように語った。それは、ぼんやりした、神話のような、つかみどころのない影ではなかった。はるか向こうの雲の中にある何かでもなかった。本物の、生きた、力ある、手でふれられる、動いている現実だった。私たちの心と生活のうちに住み、私たちを主の宮とし、主の御前で信心と聖さと礼拝のうちに歩ませてくださるかたであった。

かきの夕食会やクリスマスの催しや裁縫の会の告知は、一つもなかった。献金の呼びかけもなかった。献金を集めることさえしなかった。初めから終わりまで、ただ神、神、神だった。彼の言葉は、雨のように私の上に降り注いでくるようだった。その一つ一つが、私の心と生活のどこかを傷つけた。しまいには、どこがいちばん痛むのかわからなくなった。

「悔い改めなさい！」伝道者は続けて言った。もし私たちが世を愛しているなら、私たちのうちに父の愛はない。そして、劇場、活動写真、ダンス、小説、仮装のスケート場、世俗の音楽、ラグタイムの音楽などを、ひとまとめに断罪した（まったく、私がそこにいるとだれかが彼に告げたかのようだった。それほどありありと、彼は私自身の生活と歩みを描き出したのである）。こういうものに夢中になっている人はみな悪魔に属しており、地獄への道を歩んでいる、と彼は言い切った。そして、今すぐに悔い改め、世と肉と悪魔を捨てないなら、その人たちは滅びる。永遠に、とこしえに罰を受ける、と言った。

私がもう笑わなかったことは、請け合ってもいい。私は席で背筋を伸ばした。目と耳を大きく開いて、彼の言うことを一言残らず飲み込んだ。彼は「悔い改めなさい」という言葉を語り終えた。そして、本当の救いとは何かを説明した。それは、私たちが主と一つにされるときに知る、死と葬りと復活である。それから彼は、次の言葉について語り始めた。

『そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである』

ここで彼は、聖霊のバプテスマについて語り始めた。救いのメッセージと御霊が内に来られることとは、並べて、手を携えて語られるべきだ、と彼は言い切った。また、クリスチャンが聖霊のバプテスマなしに生きるのは、神のみこころにかなわない、普通でない状態で生きることだ、と言った。彼は、聖書の時代に聖霊がどのように受けられたかを語った。また、御霊を受けた人々が、御霊が語らせるままに、他国の言葉、つまり一度も習ったことのない言葉で語ったことも話した。

彼は、使徒行伝二章四節の『他国の言葉』、つまり異言をとくに強調した。そして、これこそ聖霊のバプテスマの聖書的なしるしであると、大胆に言い切った。

「異言ですって」と私は心の中で言った。「異言って、いったい何だろう。聖書でそんなことを聞いた覚えは一度もないけれど」

すると、私をさらに驚かせることが起こった。語っていた彼自身が、突然、大きな声で異言を語り出したのである。目を閉じ、両手を私のほうに差し伸べていた。

私にとって、それは神の声だった。罪を示し、罪に定める恐ろしい言葉が、雷のように私の魂にとどろいた。メッセージは異言で語られたのに、神が私にこう言われたように思えた。

「おまえこそ、哀れな、失われた、みじめな、地獄にふさわしい罪人だ！」ここではっきり言っておきたい。私にはわかっていた。これは、神が御霊によって、土でできた人の唇を通して語っておられるのだ。コリント人への第一の手紙の十四章に、異言を語ることは信じない者へのしるしだ、という節がある。私の場合は、確かにそのとおりだった。あの若い人が異言で語るのを聞いた瞬間から今日まで、私は一瞬たりとも疑ったことがない。神はおられる。そして、哀れな、失われた、みじめな、地獄にふさわしい罪人という私の本当の姿を、神は示してくださったのだ。

それまで、こんなふうに私に言った人はだれもいなかった。私はかわいがられ、愛され、たぶん少し甘やかされていた。なんて賢くて良い子だろうと言われてきた。しかし、神が真実を語ってくださることを感謝する。神は、私たちのうわべを塗ってつくろうことも、背中をたたいて褒めることも、砂糖でくるんだ丸薬を与えることもなさらない。そうではなく、私たちがどこに立っているかをそ

のまま示される。イエスとその尊い血の外にいる私たちは、汚れ、罪深く、滅びるほかない者なのである。

おもしろがる気持ちも、高慢なプライドも、すっかり消えていた。私の魂そのものが、神の前で裸にされていた。神はおられた。そして私は、神に会う備えができていなかった。ああ、どうして私は、この愛すべき人たちを見下し、自分のほうが上だなどと思えたのだろう。とんでもない、私はこの人たちの靴を磨く値打ちさえなかった。この人たちは聖徒で、私は罪人だった。

私たちは、集会が終わる前に、そっと早めに抜け出さなければならなかった。下稽古をどうやって終えたのかは、覚えていない。けれども、一つだけはっきりしている。それからの七十二時間、私はそれまでで最もみじめな三日間を過ごしたのである。

罪の自覚！　ああ！　私はほとんど食べることも、休むことも、眠ることもできなかった。勉強どころではなかった。「哀れな、失われた、みじめな、地獄にふさわしい罪人」という言葉が、何度も何度も耳に鳴り響いた。あの閉じた目と、差し伸べられた手が見えた。その手は、すくみ上がった私の罪深い魂を指していた。その魂は、私の造り主の目の前で裸にされていた。

私は、クリスチャンになるために捨てなければならない多くのものを数え上げ始めた。まず、ダンスがあった。それは喜んで手放そう。それから、小説、劇場、世俗の器楽。一つ一つについて自分に問うてみた。すると、救いの喜びや、罪がゆるされたと知ることに比べれば、どれも惜しくないとわかった。

けれども、一つだけ、どうしてもしたくない、またできそうにないことがあった。クリスチャンになりながら、あのばかげたアイルランドなまりの朗読をし、あの劇や掛け合いを演じることはできない。それはわかっていた。神の子は聖く、ささげられた者でなければならない。その言葉は、イエスの血におおわれていなければならない。私の聖書には、こう書いてあった。無益な言葉一つについてさえ（ばかげた言葉はなおさらである）、神のさばきの座の前で言い開きをしなければならない。けれども、クリスマスの約束を取り消すには、もう遅すぎた。代わりの人を見つけるにも、遅すぎた。どう見ても、クリスチャンになるのはクリスマスが過ぎるまで待つほかなかった。

しかし、どうして待つことなどできただろう。私は恐ろしくてたまらなかった。罪の自覚に震えていた。神の外で、神に向かって悔い改めないまま生きる一瞬一瞬が、最も恐ろしい危険の中にあるように思えた。あわれみもなく地獄に投げ込まれる、この上なく重大な危険である。ああ、この言葉を読むすべての罪人が、その魂に同じ恐ろしい罪の自覚を感じてくれたら！

二日目と三日目、私はこんなふうに祈り始めた。

「ああ、神さま、私は本当にクリスチャンになりたいのです。いつまでもあなたを愛し、あなたに仕えたいのです。罪を告白して、イエス・キリストの血で洗われたいのです。でも、ああ、どうかクリスマスが過ぎるまで生かしておいてください。そうしたら、あなたに心をささげます。主よ、あわれんでください。ああ、どうか、どうかクリスマスが過ぎるまで、私を死なせないでください」

私の魂をとらえたあの恐ろしいおびえのことを証しすると、今では多くの人がほほえむ。しかし、私の魂の永遠の幸いがかかっていたのだ。私にとってそれは、いのちか死か、永遠に天国か地獄かの分かれ目だった。

三日目の終わり、学校からそりで帰る途中、私はもう耐えられなくなった。頭上に垂れこめた空も、木々も、野も、足もとの道さえも、不機嫌に私を見下ろしているように思えた。そして、至る所にこう書いてあるのが見えた。

『哀れな、失われた、みじめな、地獄にふさわしい罪人！』

私はすっかり行き詰まっていた。牧師たちや催し物の委員会やほかのだれがどう思うかなど、考えもしなかった。私は両手を上げた。そして、その田舎道でただ一人、天に向かって大声で叫んだ。

「ああ、主なる神よ、罪人の私をあわれんでください！」たちまち、私の魂に最も驚くべき変化が起こった。闇が去り、光が入ってきた。空は輝きに満ち、木々も野も、あちこち飛び交う小さなゆきほおじろも、主をほめたたえ、私にほほえみかけていた。

罪をゆるすイエスの血を、私はありありと感じた。その血が私の上に流れているのが感じられるようだった。気がつくと、私の顔は涙にぬれていた。涙は、手綱を握る私の手にしたたり落ちた。そして、努めることも、考えることもなく、私はあの古くからなじみの賛美歌を歌っていた。

「主よ、私のいのちを受け取り、
あなたにささげさせてください。
私のひとときも日々も受け取り、
やむことのない賛美として流れさせてください」
すすり泣きの合間に、とぎれとぎれに歌っていた。
「主よ、私のいのちを受け取り、
あなたにささげさせてください」
私の魂のすべてが、神へ、私の父へと流れ出ていた。
「わ、た、し、の、お、と、う、さ、ま！」ああ、イエスに栄光あれ！　私には天の父がおられるのだ！　もう恐れる必要はない。父の愛といつくしみと守りが、今や私のためにあるのだ。
歌が次のところに来た。
「私の手を受け取り、
あなたの愛に促されて動かしてください」
そのとき私は、もう世俗の音楽とは縁がないとわかった。そのときから、私が歌うのは賛美歌だけになった。そして、こう歌ったとき、
「私の足を受け取り、
あなたのために速く、美しくしてください」
それがダンスホールやスケート場でのことではないと、私にはわかった。主をほめたたえよ。
「私の唇を受け取り、
いつも、ただ私の王のために歌わせてください」
もう、ばかげた朗読もラグタイムの歌もない。
「ああ、イエスよ、あなたを愛します。
あなたは私のもの、そう知っています。
あなたのために、罪の愚かな楽しみを
すべて捨てます」
次から次へと、歌が唇からほとばしり出た。家に帰るまでずっと、私は大声で叫び、神をほめたたえた。私はあがなわれたのだ！

言うまでもなく、私は催し物には出なかった。町の多くの人は、私を狂信的で、ひどく愚かだと思った。それでも、それからの日々は、喜びと幸せにあふれていた。私は神のみことばをなんと愛したことか！　眠るときには枕の下に置き、朝目を覚ませば手に持っていたかった。学校では、以前は代数や幾何の教科書に小説を隠していた。今は、そこに小さな新約聖書があった。そして私は、聖霊のバプテスマにふれた箇所を一つ一つ調べていた。
慰めを得た約束はたくさんあった。けれども、マタイによる福音書七章七節から十一節の素朴な約束に並ぶものは、なかったと思う。
『求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう』
『すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである』ここで主は、私に請け合ってくださった。私がパンを求めるなら、主は石をお与えにならない。また、地上の親が子に良い贈り物をするよりも、主はもっと喜んで聖霊を与えてくださる、と。
いつも、それくらいまで読み進むと、ああ、聖書がまったく新しく、生きて語りかけてくるように思えた（実際、それは神が私に語っておられたのだ）。私はもう一刻も待てなくなった。断って教室を出ると、地下へ下り、ひざまずいて祈り始めるのだった。
「ああ、主よ、私に聖霊のバプテスマを授けてください。主よ、あなたは、約束は遠くの者一同に、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者に与えられている、とおっしゃいました。主よ、今あなたは私を召してくださいました。約束は私のためのものです。今すぐ私を満たしてください」
女の子たちは、私がこうして祈っているのを見つけ、どう考えたらよいかわからなかった。それほど私はすっかり変わっていたのである。もう先生の椅子に糊を塗ることも、先生を体育館に閉じ込める手伝いをすることもない。昼休みに廊下でダンスのステップを練習することもない。驚くべき変化が起こっていた。古いものはみな過ぎ去り、すべてが新しくなったのである。私は新しく生まれ、キリスト・イエスにある新しく造られた者になっていた。

聖霊のバプテスマを求める飢え渇きは、日ごとにますます強く、ますます激しくなった。とうとう私は、学校にいるのに満足できなくなり、勉強も手につかなくなった。そして、そっと抜け出しては、待ち望みの集会に行った。そこでは愛する聖徒たちが集まって、聖霊のバプテスマを求める人々のために祈っていたのである。

それは、なんとすばらしい時間だったことか！　私の魂にとって、なんという啓示だったことか！　まるで天が地に下ってきたかのようだった。学校を休むことがあまりに多かったので、私は初めて勉強に遅れ始めた。期末試験が近づいていたが、代数にも幾何にも化学にも、どうしても興味が持てなかった。私の関心は、ただ聖霊のバプテスマと、まもなく来られる救い主に空中でお会いする備えにだけあった。

第五章　救いと聖霊のバプテスマ（その二）

やがて、ある日、中等学校の校長が母に手紙をよこした。もっと勉強に身を入れなければ、きっと落第するだろう、という手紙だった。

さらに悪いことに、同じ日、救世軍の士官の一人が母を訪ねてきて、こう言った。

「ねえ、姉妹、ほかの人たちがあのペンテコステ伝道所に行くのは、まだそれほどかまわないのです。でも、あなたが娘さんを行かせているのには、本当に驚いていますし、間違っていると思います。あなたは長年この働きに携わってきたのですから、娘さんがあの人たちと少しでもかかわるのを許していては、ほかの人たちに悪い手本を示すことになります」さらに士官たちは母に、あのいわゆる力というものは、どれも興奮か催眠術で、偽物だとも言った。

その晩、家に帰ると、母が私を待っていた。母はとても厳しく私に言い聞かせ、しまいに最後通告を言い渡した。

「いいこと、もしまた学校を抜け出して、あの伝道所や待ち望みの集会に行ったと聞いたら、もう学校には行かせずに、ずっと家に置いておくしかないわ。あなたがこんなふうにうわさされるのは許しません」

次の朝、道には雪が高く積もっていたので、私は汽車で学校に行った。町に着くまでずっと、窓の外に降りしきる雪を眺めながら、主に祈っていた。何とかしてすべてを整え、開いてくださるまで門をたたき続けられるようにしてください。さもなければ、今すぐ私にバプテスマを授けてください、と。

駅から中等学校まで歩くには、伝道所の前と、ある姉妹の家の前を通らなければならなかった。その姉妹の家には、バプテスマを待ち望むためによく通っていた。その家の前を通るとき、私はあこがれる思いで窓を見上げた。姉妹がそこにいれば、中に入らずに歩道から話しかけられるのに、と思ったのである。中に入れば母の言いつけにそむくことになる。けれども、姉妹の姿はどこにも見えなかった。

私はゆっくりと通り過ぎた。そのあいだずっと、悲しく、飢え渇いた思いで振り返っていた。そして、とうとう歩道で立ち止まり、自分に言い聞かせた。

「ねえ、いいこと、イエスさまはもうすぐ来られるのよ。世界じゅうの試験に受かるより、聖霊を受けるほうが大事なことは、わかっているでしょう。イエスさまが現れるときに備えるには、聖霊が必要なのよ。ともしびといっしょに、入れ物に油を用意しておかなくてはならないの。

学校に行くか、バプテスマを求めるか、どちらかを選ばなくてはならないのだから、今日は学校に行くのはやめよう。姉妹の家に戻って、一日じゅうバプテスマを求めよう」

そう言って、私は向きを変え、急いでその家に引き返した。呼び鈴を鳴らして中に入った。困っていることを姉妹に話すと、姉妹は静かに言った。

「天のお父さまに、すっかりお話ししましょう」そこで私たちはひざまずいて、祈り始めた。姉妹は祈りの中で主に願った。今この場で私にバプテスマを授けてくださるか、さもなければ、私がバプテスマを受けるまでここにいられるように、何とか取り計らってください、と。

主はこの祈りを聞いてくださった。窓の外では、それまで軽くちらついていた雪が、前も見えないほどの吹雪になって降り始めた。私の天の父は御使たちを遣わし、ご自分のあの大きな、羊毛のような雲をいくつかかき回させたのである。雪はどっと降り、窓ガラスをがたがたと鳴らした。昔ながらのカナダの大吹雪が始まったのだ。

その日は一日じゅう祈って過ごした。夜、帰りの汽車のことを確かめに駅へ行くと、切符係が窓口から言った。

「すみませんね、お嬢さん、今夜は汽車が出ないんです。線路が雪でふさがっていて、通れないんですよ」ああ、ハレルヤ！　私は少しも残念ではなかった。

すると、こんな考えが浮かんだ。「これではあまり役に立たない。お母さんに電話をかけなくてはならないし、そうしたらお母さんは、知り合いの家に泊まるように言うだろう。そして、伝道所には近づかないように、と言いつけるだろう」ところが、電話をかけに行って番号を告げると、交換手が言った。

「あいにく、嵐で電線がみな切れております」今度こそ、私は「栄光あれ」と叫んだ。そして、姉妹の家までほとんどずっと走って帰った。

嵐はますます激しくなった。男たちが道を開こうとするそばから、主はそこを白い雪の山で埋めてしまわれた。とうとう、嵐が続くあいだは通り抜けようという考えを、みなすっかりあきらめた。

ああ、私はなんと熱心に御霊のバプテスマを求めたことか。今、祭壇の前に来ても、楽な姿勢で腰を下ろし、片手で頭を支えて、気のない、どうでもよさそうな調子で御霊を神に求め始める人がいる。そういう人を見ると、この人たちは本当に求めるとはどういうことかを知らないのだ、と思うことがある。

時は尊かった。人は懸命に雪をかき出し、神はご自分の大きな雲を総動員して雪をかき入れておられる。そのあいだに、私も心を尽くして求めるという自分の務めを果たさなければならなかった。

金曜日、私は真夜中まで主の前で待ち望んだ。土曜日の朝は夜明けに起きた。家の中でまだだれも起きていないうちに客間へ行き、隅の大きな安楽椅子のそばにひざまずいた。心には、固い決意があった。

私の聖書には、『天国は激しく襲われている。そして激しく襲う者たちがそれを奪い取っている』と書いてあった（マタイ一一・一二）。私は、パンを求めて戸をたたいた人のたとえを、もう一度読んだ。家の中の主人が起き上がって、必要なだけのパンを与えたのは、友人だからではなく、しきりに願ったからだった。そして今、イエスは私の友だった。イエスは私に門をたたくように命じ、開いてくださると請け合ってくださった。求めるようにと招き、受けると約束してくださった。飢えている者を、むなしく追い返しはしないと約束してくださった。私は必死になって求め始めた。そして、こう言ったのを覚えている。

「ああ、主よ、私はあなたの聖霊に、こんなにも飢えています。私が一心に尋ね求めるその日に、あなたは私に会ってくださると言われました。主よ、私はここを動きません。あなたが待つようにと命じられた約束の聖霊を、私の上に注いでくださるまで、ここにいます。たとえ飢え死にしても、そうします。聖霊にこんなにも飢えているので、もう一日も待てません。あなたがバプテスマを授けてくださるまで、もう一食も食べません」

両親が恐れていたように、間違った霊を受けたり、催眠術にかけられたりするのが怖くなかったのか、とあなたは聞くだろう。私の心には、そんな恐れはなかった。私は、ルカによる福音書十一章十一節にあるとおり、天の父を心から信頼していた。そこで主は、私がパンを求めるなら石を与えはしない、と請け合ってくださった。主の血で洗われた子供たちがパンを求めるとき、主が蛇やさそりを与えられるはずはない。私はそれを知っていた。主は言われたではないか。地上の父親でさえ、自分の子に良い贈り物をすることを知っている。それなら、『天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか』（ルカ一一・一三）。

こうして熱心に祈った。いわば、聖霊を求める願いで天を攻め立てたのである。すると、静けさがそっと私に忍び寄り、主の聖なる臨在が私を包むように思えた。主の御声が、やさしく語られた。

「さあ、子よ、あがくのも、せがむのもやめなさい。ただわたしを賛美し始めなさい。そして、素直な、幼子のような信仰で、聖霊を受けなさい」

ああ、主を賛美するのは難しいことではなかった。主は私の心に、こんなにも近く、言葉にできないほどいとしいかたになっておられた。ハレルヤ！　努めることもなく、私は言い始めた。

「イエスに栄光あれ！　イエスに栄光あれ！　イエスに栄光あれ！！！」

「イエスに栄光あれ！」と言うたびに、その言葉は前よりも深い所から、前よりも深い声で出てくるように思えた。ついには「イエスに栄光あれ」の大波が、つま先から上へとうねり上がってきた。これほどの礼拝と賛美ができるとは、それまで知らなかった。

突然、私の手と腕が震え始めた。初めは静かに、それから激しく震え、ついには全身が聖霊の力に打たれて震えていた。私はそれを少しも奇妙だとは思わなかった。学校の実験室で私たちが実験した電池が、電気の力でうなり、揺れ、震

えたのを知っていたからである。そして今、三位一体の第三のかたが、満ちあふれるばかりに私のからだに入って来られ、私をご自分の住まい、『聖霊の宮』としておられたのだ。私のこの貧しい人間のからだが、その力の大いなる働きの下で震えたとしても、何の不思議があるだろうか。

私はなんと幸せだったことか。ああ、なんと幸せだったことか！　主の驚くべき力が私のすべてを治めていくのを感じるだけで、幸せだった。ああ、栄光あれ！　あの聖なるひとときは、私にとってこの上なく甘美である。こうして書いていても、その聖さを思い出すと胸が震える。

ほとんど気づかないうちに、私のからだは静かに床へすべり落ちた。私は神の力に打たれて、床に長々と横たわっていた。けれども、まるで引き上げられて、波打つ栄光の雲の上に浮かんでいるように感じた。これを、私がまわりのことに気づいていなかったという意味に取らないでいただきたい。気づいてはいた。けれども、イエスのほうが、まわりの地上のものより確かで、近かったのである。主を賛美し、拝し、あがめたいという願いが、私の魂のうちに燃え上がった。主はあまりにすばらしく、あまりに栄光に満ちておられた。そして私のこの貧しい舌は、主を賛美する言葉を見つけることがまったくできなかった。

助け主が入って来られると、私の肺は、その力に打たれてふくらみ、波打ち始めた。のどの筋がぴくぴくと動き始めた。あごが小刻みに震え始め、それから激しく震えた。けれども、ああ、なんと甘美な震えだったことか！　舌が口の中で、上下に、左右に動き始めた。イザヤ書二十八章十一節に言われている、どもる唇と異国の舌のような、わけのわからない音が、唇からもれ始めた。まず、いろいろな音節がどもるように出てきた。それから言葉が、それからつながった文が出てきた。これがしばらく続いた。御霊が私に、ご自分に身をゆだねることを教えておられたのである。それから突然、御霊が語らせるままに、私の内の奥底から、異言による賛美が川のように流れ出た（使徒二・四）。ああ、私にはわかった。御霊が栄光に満ちた言葉でイエスを賛美し、イエスに誉れと栄光をまとわせておられたのだ。それは私が感じてはいても、決して言葉にすることのできないものだった。

なんとすばらしいことだろう。この私が、はるか後の一九〇八年に、知らない言葉で語っていたのだ。聖書の時代に、エペソやカイザリヤで信者たちが語ったのと同じように。そして今、イエスが『わたしに栄光を得させるであろう』と言われた、そのかたが来てくださったのだ。

私は叫び、歌い、笑い、異言で語った。とうとう、祝福で満ちあふれ、もう少しでも受けたら栄光で張り裂けてしまうように思えた。神のみことばは真実だった。約束は本当に、遠くの者一同に、主なる神の召しにあずかるすべての者に与えられていたのだ。助け主が来て、一度も習ったことのない言葉で、私の魂をイエスへの恍惚とした賛美のうちに引き上げてくださった。私はこう言ったのを覚えている。

「ああ、主よ、このまま私を天に連れて行ってくださることはできないのですか。どうせ、もうこんなに近くにいるのですから。またあの古い世界に戻らなければならないのですか」

「催眠術だ」と、あなたは言うのか。もしそうなら、それは驚くほど長く、この上なく楽しい催眠術である。十一年も続いていて、私に心を尽くしてイエスを愛させ、イエスが現れる日を慕い求めさせているのだから。それに、部屋には私に催眠術をかける者はだれもいなかったことも、考えに入れていただきたい。救われたとき、私はたった一人だった。聖霊のバプテスマを受けたときも、たった一人だった。

「悪霊の力だ」「何もかも悪魔から出たものだ」と言う人もいるかもしれない。もしそうなら、悪魔は最近、すっかり回心したにちがいない。私の魂に入って来たものは、私の主であり救い主であるイエス・キリストを私に愛させ、主に従わせ、その血をあがめさせ、聖霊を敬わせるのだから。

「興奮だ」と、あなたは言うのか。とんでもない！　信じない友よ、それはあまりに長く試練に耐えてきた。病のときにも、悲しみのときにも、死の門においてさえ、聖霊は、イエスが遣わすと言われた助け主であることを示してくださった。

私が異言で語り、主をほめたたえているのを聞いて、泊めてもらっていた家の愛する姉妹が、階段を下りて客間に入ってきた。そして、涙を流しながら、私と

いっしょに主をほめたたえた。まもなくセンプル兄弟やほかの聖徒たちも集まってきた。なんという叫びと喜びだったことか！　ああ、ハレルヤ！　それなのに、あふれる喜びと栄光のさなかにも、静けさとおごそかな沈黙が、私のすべてに満ちていた。

通りを歩きながら、私は何度も自分に言い聞かせた。

「さあ、王の御前で、くつを脱いだ足で、そっと注意深く歩まなくてはならない。このやさしく柔和な鳩を悲しませないように。この鳩は私の内に来て、私をご自分の宮とし、いつまでも私とともにいてくださるのだから」

次の日は日曜日だった。嵐はすっかりやみ、太陽が雪をとかすような暖かさで照っていた。伝道所の朝の礼拝に出て、私たちは主の晩餐にあずかった。主の驚くべき愛を、私たちのために流された主の血を、木の上で裂かれた主のからだを思いめぐらしていると、私はもう耐えられなくなった。そして、また神の力に打たれて床に倒れた。ああ、だれがあのあふれるばかりの重い栄光を言い表せるだろう。十字架につけられた私の救い主、よみがえられた私の主、やがて来られる私の王が、ご自身を現してくださったのだ！

学校の友だちや知り合いが立ち上がり、座席越しにのぞき込んで、いったい私に何が起こったのかと見ていた。けれども私はまた、私の魂の愛するイエスとともに、われを忘れていた。異言で語り、神の力に打たれて震えていたのである。

ある男の人は、私が床に横たわっているのを見てひどく憤慨し、立ち上がって集会を出て行った。そして電話のところへ行き、母を呼び出した。（嵐のあいだ切れていた電線は、私の知らないうちに直され、このときにはもうつながっていたのである。）その人は言った。

「町に出てきて、お宅の娘さんを何とかしたほうがいいですよ。伝道所で、みんなの前で床に寝ころんで、猿みたいにぺちゃくちゃしゃべっているんですから」

かわいそうな母！　自分の娘が、そんなふうに恥をさらすほど慎みを忘れてしまうとは。母はそう思って、気が気でなかった。母は私を電話口に呼び出した。母のなつかしい声が聞こえた。

「エイミー！　あなたが伝道所で床に寝ころんでいたって聞いたけれど、いったいどういうことなの。これはいったい何のまねなの」

私は答えようとしたが、また異言で語り出してしまった。

「何ですって」と母は問い詰めた。私は説明しようとした。すると、厳しく、取りつく島もない母の声が返ってきた。

「私がそっちに着くまで待っていなさい、お嬢さん。ただではすまないわよ！」

（読者のみなさんの気をもませないように、少し先回りして話しておこう。私の愛する母も今では自分のバプテスマを受けていて、異言で語ったのである。しかも、床の上で！）

私は姉妹の家に戻り、オルガンの前に座って、母が来るのを待った。白状すると、いくらかびくびくし、怖かった。勇気を奮い起こすために、あの古くからなじみの賛美歌を何度も何度も歌った。

「わたしは決してあなたを離れず、あなたを捨てない。
わたしの手であなたを支え、
わたしの腕にあなたを抱く。
わたしはあなたのあがない主、あなたを守る！」

母は何と言うだろう。わかってくれるだろうか。そういえば、なつかしい救世軍に神の力が下っていたのは、そんなに昔のことではなかった。キッチン兄弟の話を、私は母から聞いたことがあったではないか。人々は彼を「神が住まわれるキッチン（台所）」と呼んでいた。その人がひざまずいて祈っていると、からだが震え出した。そして、震えながら壇上の端から端まで行ってしまい、向こう側で神の力に打たれて長々と横たわったのである。また、昔のメソジスト教会にも同じ力があったことを、父から聞いたことがあったではないか。力と知恵を神に祈りながら、私は歌い続けた。

「たとえ谷間の夜が
暗くても、
そのすぐ向こうには
とこしえの光が輝く」

六時になった。母も来た！　そりの鈴のりんりんという音が、母の「どうどう！」という声とともに、ぴたりとやんだ。それから、有無を言わせぬ呼び鈴の音が、家の中の張りつめた静けさを震わせた。私はオルガンの腰掛けからすべり下り、コートと帽子を手につかんで、急いで戸口へ行った。母は私を迎えると、

「お嬢さん、すぐに出てきて、今すぐこれに乗りなさい」と言い、たちまち私を小さなそりに押し込んだ。姉妹も兄弟も、何とか口をはさんで、母を説得し、説明しようとした。けれども母は耳を貸さず、私たちはあっというまに走り出していた。

家に帰るまでずっと、母は私を叱り、泣き、娘のことで胸が張り裂けんばかりだった。母の考えでは、娘はあのひどい人たちに、何か恐ろしい魔法をかけられてしまったのである。その人たちは、もう町の人々から「ホーリー・ローラー（聖なる転げ回り屋）」というあだ名をつけられていた。ああ、主をほめたたえよ！　悪魔が彼らを何と呼ぼうと、少なくとも彼らが「聖なる」者であることは、認めないわけにはいかなかったのだ。キリスト教を名乗る多くの教派については、悪魔もそうは言えなかっただろう。そうではないか。

私は一人っ子で、愛され、かわいがられて育った。だから、ひとこと叱られたり、いさめられたりしただけで、涙が出たものだった。ところが今、母はそれまでの私の生涯になかったほど厳しく叱り、きついことを言っていた。それなのに、どういうわけか、涙一つこぼれなかった。母の気持ちを思えば、少しは涙をしぼり出すのが務めだと感じた。けれども、どうしてもできなかった。私にできたのは、ただ歌って、歌って、歌うことだけだった。帰り道ずっと、歌っていた。

「喜びは川のように流れる、
助け主が来られてから。
いつまでも私とともにいて、
信じる心を住まいとされる」

内なる御霊がわき上がり、言葉につくせない、輝きにみちた喜びで私を満たした。かわいそうな母は、私のほうを向いては言った。

「ああ、エイミー！　お願いだから、その歌をやめて。どうして歌えるのか、わからないわ。お母さんの心が張り裂けそうなのは、わかっているでしょう。まさか、それが御霊の実だなんて言わないでしょうね」けれども、私には自分が歌っているとはまったく思えなかった。歌がひとりでに歌い、何の努力もなく出てくるように思えたのである。

「祝福された静けさ、聖なる静けさ、
わが魂のなんという確かさ。
嵐の海で、イエスが私に語られると、
大波はうねるのをやめる」

家に着くと、父が食堂の暖炉のそばに座り、両手で頭を抱えて言っていた。

「ふうむ！　ふうむ！　ふうむ！」父は、何かでひどく心を痛めているとき、いつもそうするのだった。母は私を父の前に連れて行って、言った。

「さあ、お父さんに全部話してちょうだい。あなたがどんなふるまいをして、あの人たちの前でどんなふうに床に寝ころんでいたか、話しなさい」なるほど、口に出して話せば、確かにひどいことに聞こえた。けれども、ああ、あの何かが私の心の中で、ささやき、こだまし続けていた。

「たとえ谷間の夜が
暗くても、
そのすぐ向こうには
とこしえの昼が輝く」

とうとう自分の部屋に行かされると、私はすぐにひざまずいて祈り始めた。たまたま、ストーブの煙突を通す穴のそばにひざまずいていたので、両親の話の一部が、いやでも聞こえてきた。それは、こんな話だった。

「ああ、どうしたらいいの。あの人たちがうちの娘を言いなりにしてしまったのよ。催眠術か、魔術か、何かをかけたのよ」

「あの子と言い争っても、まったくむだだ。何を言っても、迫害されていると思うだけで、ますます強くしがみつくだろう」

「ああ、どうしたらいいの」そこで戸が閉まり、それ以上は聞こえなかった。

ああ、私の魂に来た喜びと栄光を、どう言い表せばよいだろう。あの深く落ち着いた平安。主が導き、手引きし、すべてを正しく成し遂げてくださるという確信。

次に母が学校に行くのを許してくれたとき、母は、父と二人で決めたことを私に告げた。もう一度でもあのペンテコステの人たちに近づいたら、教育がどうなろうと、学校を永久にやめさせる、というのである。母がそう告げたとき、聖霊は私に知恵を与えて、こう答えさせてくださった。

「お母さん、聖書には、子は主にあって両親に従いなさい、と書いてあるわ。だから、私が受けたものが聖書の教えに合わないことを、神のみことばで示してくれたら、もう二度と伝道所には行かない。聖霊のバプテスマと、その聖書的なしるしである異言が今の時代のものではない、と書いてある所を一か所でも示してくれても、同じよ」私は、自分のすべてをみことばに賭けたのである。

「ええ、もちろん証明してみせるわ」と母は答えた。「ああいうことは、使徒の時代だけのものだったのよ。聖句を調べて、今夜あなたが帰ってきたら証明してあげる」

愛する母は、聖書をよく学んできた人で、何年も日曜学校や聖書研究会で教えてきた。ああ、聖霊の力と臨在のこうした現れがみな過ぎ去った時代だけのものだと、母は証明できるだろうか。私はこのことについて、聖書をあまりよく知らなかった。それでも、自分が受けたものが神から来たことは知っていた。

母は正直に聖書を調べてくれるにちがいない。そう確信していたので、私はどんな結果になっても従うと約束したのである。聖書が言うことなら、何であれ、それに従う。こうして私たちは二人とも、この問題すべてに決着をつける最後のよりどころとして、神のみことばに向かったのである。

母は、聖書と聖書語句索引と鉛筆と帳面を取り出した。そして、心も思いもこの一つのことでいっぱいにして、すぐに朝食の食卓に腰を下ろし、本を目の前に広げた。朝食の皿を洗うために片づける間も惜しんだのである。ランプも磨かれず、ベッドも整えられないままだった。

（ああ、信じない人が、聖書を開き、偏見のない心で腰を据えて調べてくれさえすれば、私たちが自分の立場を弁護する必要はない。このことについて、神のみことばはそれほど明らかなのである。）

私が家を出て学校へ向かったのは、朝の八時半だった。五時半に帰ってみると、母はまだ朝食の食卓に座り、聖書と紙を前にしていた。そして、信じられるだろうか。朝食の皿はまだ洗われず、ランプも磨かれず、ベッドも整えられていなかった。いつも申し分のない主婦である母には、聞いたこともないことだった。

私は息をこらして、母の判断を待った。母の目が赤いのを見て、泣いていたのだとわかり、私の心はやわらいだ。ああ、母の答えは何だろう。母の顔に浮かんだほほえみに勇気づけられて、私は尋ねた。

「ああ、お母さん、どうだったの」さて、読者のみなさん、母は何と言ったと思われるだろうか。母は顔を輝かせて答えた。

「ええ、あなた、認めないわけにはいかないわ。本当に、これこそ預言者ヨエルが預言していたこと、終わりの時に起こると言われていたことなのね！」

母は見つけていたのだ。はるか昔のイザヤ書二十八章十一節で、主は「どもる唇と異国の舌とをもって、わたしはこの民に語る」と言われていた。また預言者ヨエルは、この終わりの時に、後の雨にたとえられる聖霊の驚くべき注ぎがあると、はっきり預言していた。そのときには、むすこも娘も、しもべもはしためも、ともにこの栄光の大雨を喜ぶのである。

私はひと跳びで部屋を横切り、母の首に両腕を投げかけた。あまりきつく抱きしめたので、首の骨が折れるかと思ったと、母が言ったほどだった。私たちは食卓のまわりを踊り回った。いっしょに笑い、泣き、歌った。なんと幸せだったことか。

「これぞ昔ながらの信仰、
私にはこれで十分」

聖霊のバプテスマが本物であることを疑う人がみな、神のみことばを手に取り、初めから終わりまで調べてくれたら。その人もまた、少しの疑いもなく確信するだろう。「これこそ預言されていたこと」なのだ、と。

第六章　ぶどう園への召しと結婚

『わが愛する者よ、さあ、わたしたちはいなかへ出ていって、村里に宿りましょう』（雅歌七・一一）

これまでの章で語ってきた一連の出来事は、私たちをちょうどあの時のところまで連れて来る。神がご自分の哀れな小さいはしために語られたときである。こののはしための心は、新しく見いだした救い主を喜んでいた。そのとき神は、みことばを宣べ伝えるようにと私を召し、私の部屋で私を任じてくださった。第一章の初めに書いたとおりである。（忘れてしまったかたは、前に戻って思い出していただきたい。）

イエスのために魂を勝ち取る者になりたい。天から与えられたその激しいあこがれが、御霊によって私の魂のうちに生まれた。主は私のために、こんなにも多くのことをしてくださった。泥の沼から、私の足を引き上げてくださったのである。ああ、ほかの魂を勝ち取り、輝く宝石として主の尊い足もとに置くことができたら！　ああ、滅びゆく人々に、あがない主の愛を語ることができたら！　神は私の存在の奥底で語られ、こう告げてくださった。「わたしはあなたを召さないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てた」

「なんだ、おまえはまだ子供じゃないか。だれもおまえの言うことなど聞かないし、信頼もしない」と、敵がささやいた。「だいたい、説教について何を知っているというのか」と、自我と常識がうなずいた。「説教者ならここにいる。国じゅうにいくらでもいる。学があり、大学を出て、何年も本を読み、神学の研究をこなしてきた人たちだ。おまえが働き手として出て行こうと考えることさえ、ばかげている」

「しかし、召された者のうちには、『人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはいない。それだのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれた』（第一コリント一・二六〜二七）」と、みことばが言い返した。「神は、虫にひとしい者をもって山を打つと言われたではないか。私たちは弱いときにこそ強いのだ、と。小さいわらべが彼らを導く、と。終わりの時には、しもべにも、はしためにもご自分の霊を注ぎ、彼らは預言する、と言われたではないか。御霊が来られたあとは、あなたの腹から（頭や知性や知識からではない）『生ける水が川となって流れ出る』と言われたではないか。その川が流れていることは、あなたも知っている。ただ口を広くあけなさい。そうすれば、主が満たしてくださる」

「そうね。でも、若さと学の足りなさのほかにも、忘れてはならないことがあるわ」と、肉親の情が叫んだ。「お母さんのことを考えなくてはいけないのよ。あなたは一人っ子で、この世でお母さんのたった一つの慰めで、愛を注ぐただ一人の相手なのよ。お母さんがあなたのためにしてくれたことを思ってごらんなさい。まさか、こんないなかにお母さんを一人ぼっちで置いて行こうなんて、考えはしないでしょう」

「ここには愛も家庭も安らぎもある。望むものは何でもそろっている。働き手として出て行けば、これをみな捨てなければならない」と、安楽を愛する心が言い添えた。

「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない」と、イエスのやさしい御声が言われた。「わたしのために、また福音のために、家や畑を捨てた者で、今この時代にその百倍を受け、またきたるべき世で永遠のいのちを受けない者はない。わたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい」

「でも、主よ、このペンテコステの人たちには、後ろ盾になる地上の伝道団体もなければ、給料もありません」と、慎重さと先見が叫んだ。「くつや服や、どうしても要る費用はどうするのですか」

「何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと思いわずらうな。主は、これらのものがあなたに必要であることをご存じなのだから」と、疑わない信仰が静かにさえぎった。

「ああ、はい、主よ。あなたの恵みによって、私は自分の十字架を負います。それは喜びとなるでしょう」と、献身が歌った。「何が起ころうと、あなたを信頼し、あなたに従います。私のすべては祭壇の上にあります。『行け』であっても、『とどまれ』であっても、どうぞ私をみこころのままにしてください。私の生涯に、あなたの完全なみこころが成し遂げられますように。私は自分の弱さと足りなさを感じています。将来に何があるかも知りません。まだ子供にすぎません。けれども、

『救い主の呼ぶ声が聞こえる。

「十字架を負って、わたしに従え、従え」と』

ああ、主よ、ここに私がおります。私をおつかわしください。私は魂のための重荷を、こんなにも負っています。大西洋から太平洋まで、両手両ひざで這って行ってもいいと思うほどです。たった一人の哀れな、失われた魂に、こう言うためだけにでも。

『愛する罪人よ、イエスはあなたを愛しておられます』」

「イエスさま、私といっしょに行ってください。私の弱さを助け、私に代わって語ってください。ご覧のとおり、私は語ることができません。若者にすぎないのです」

しかし主は私に言われた。『あなたはただ若者にすぎないと言ってはならない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることをみな語らなければならない。彼らを恐れてはならない、わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである』と主は仰せられる。そして主はみ手を伸べて、私の口につけ、私に言われた。『見よ、わたしの言葉をあなたの口に入れた』（エレミヤ一・七～九）。

戦いは終わり、争いはやんだ。献身はなされた。何が起ころうと、あの聖なるひとときに交わされたことをだれが疑おうと、私は任じられたのである。人からではなく、神から。

日ごとに召しの声は大きくなり、ますますはっきりと耳に鳴り響いた。私はピアノに向かい、あふれる心から、何時間も歌い続けたものだった。「愛する主よ、あなたの望まれる所へ私は行きます。山でも、野でも、海を越えても。愛する主よ、あなたの望まれることを私は語ります。あなたの望まれる者に私はなります」

涙が頬を流れ落ちた。からだはそこにあったが、霊は遠く刈入れの畑に出て、イエスのために働いていた。

私は主の召しにすっかり心を奪われていた。そのため、私が弾き始めるたびに母がしていたことに、ぼんやりとしか気づかないことがよくあった。母は、家のどこにいても仕事の手を止めて客間の戸口に来た。そして戸に寄りかかり、エプロンの端で大粒の涙をぬぐっていたのである。神は母の母親としての心に語りかけておられた。小さな女の子を求めて祈った日へ、母を連れ戻しておられた。献児式のことを思い出させておられた。その式で母は、神が遣わされる所なら、地の果てまでも娘を行かせると約束したのである。母は、神の大いなる召しが娘に臨んだことを悟った。そして、自分が最大の犠牲をささげるときが近いことを悟った。母はハンナの言葉を思い出した。

『わが君よ、わたしは、かつてここに立って、あなたの前で、主に祈った女です。この子を与えてくださいと、わたしは祈りましたが、主はわたしの求めた願いを聞きとどけられました。それゆえ、わたしもこの子を主にささげます。この子は一生のあいだ主にささげたものです』そして、ハンナはそこで主を拝した（第一サムエル一・二六～二八）。

それがどのように実現するのか、私たちには少しもわからなかった。集会は私たちの魂のごちそうだった。働き手たちが気軽にいなかの私たちの家を訪ねてきた。伝道者ロバート・センプルは、あの祝された神の人である。キリストのような立ち居ふるまいのために、人々の中にあって王子のようであった。その人がほかの町へ移って行ったあとも、何通もの長い手紙で、主にあって私を励まし、教え続けてくれた。手紙はどれも聖句と、神の倉からの糧に満ちていた。

この聖徒のような祈りの人は、霊感を受けた筆で手紙を書いて送ってくれた。あれほどの手紙を読む恵みにあずかったことは、ほかに一度もない。彼は天の空

気の中を歩み、生き、呼吸していた。彼を知る人はみな、彼を愛し、敬った。

やがて、彼がまた私たちの町を訪ねてくるときが来た。そして、あの忘れられない夜が来た。その夜、私は二人の小さな子供の看病を申し出ていた。私がバプテスマを受けた家の姉妹の子供たちである。子供たちは腸チフスにかかって寝込んでいた。母親は長い看病と寝ずの番で疲れ果てていた。

夜も更けて、私が子供たちの世話をし、部屋を片づけていると、戸が開いてロバート・センプルが入って来た。手伝いと祈りを申し出てくれたのである。彼が祈ると、子供たちは静かに眠りに落ちた。私たちは並んで腰を下ろし、笠をかけたランプの明かりで聖書を読んだ。ロバートは熱心に語った。救い主とその愛について。働きについて。はや色づいて刈入れを待っている、金色の穀物の広い畑について。この恵みの時代の終わりの時に、働き人が必要とされていることについて。イエスがまもなく来られることと、まだ救われなければならない多くの魂について。信仰の生活とは何か、その犠牲と喜びと報いについて。それから、彼は手を伸ばして私の手を取った。そして、自分の愛を打ち明け、妻になって、助け手としてそばで働いてほしいと言った。

あの神聖な、きよいひとときにかかったベールを、たとえ少しでも上げようとするのは、これが初めてである。私たちは手を取り合って並んでひざまずいた。彼はうやうやしく神に祈った。神が私たちを顧みて、私たちの婚約をおごそかに定めてくださるように。そして、神の召しに従う真の働き人として私たちを遣わし、滅びゆく哀れな魂を永遠の滅びから救い出させてくださるように、と。

目を閉じ、胸を高鳴らせてひざまずいていると（そういえば、ここは私がバプテスマを受けた、まさにその部屋だった！）、部屋は御使たちで満ちているように思えた。御使たちは、金色に日の照る人生の道の両側に並んでいた。その道は、来るべき日々の眺めの中へ、遠く続いていた。私たちの主であり王であるかたへの、栄光に満ちた愛と喜ばしい奉仕の日々である。

ここに、召しへの目に見える答えがあった。

ここに、愛に満ちた人の手があった。機会の門の掛け金を外し、私の歩みをあの輝く道へと導き、その道をしっかりと歩き出させるために遣わされた手である。その道は、日なたと日陰、涙とほほえみ、喜びと悲しみ、生と死、山の頂と谷を通って続いてきた。

その夜、父の御座へとどこまでも続く輝く道を思い描きながら、私は少しも知らなかった。祈る私を抱き、私を働きへ導き出してくれたこの力強い、いとしい腕が、どれほど早く取り去られることになるかを。結婚して二年で、私は一人残されることになったのだ。けれども、一人きりではなかった。

神はあわれみによって、将来を見通せない霧で覆っておられる。その霧は裂かれないままだった。けれども、中国の香港のハッピー・バレーで、掘り返したばかりの小さな土の盛り上がりが、このいとしい人の墓のしるしとなる。それを知っていたとしても、私は彼の問いにそっと「はい」とささやくのをためらわなかっただろう。彼のそばに立つという召しから、一瞬たりともしりごみしなかっただろう。私はそれを、それまでに知った最も大きな特権と誉れの一つと考えた。

ああ、イエスさま！　イエスさま！　哀れで値打ちのない私のために、主はなんとすばらしくすべてを計画してくださったことか！　主はなんと私を探し、召し、選んでくださったことか！　このようなあがない主への恍惚とした愛と賛美を私の心が歌ったとしても、何の不思議があるだろうか。

ロバートは、まっすぐで男らしいやり方で、母のところへ承諾を求めに行った。それに加えて、このことについて主が母の心に働きかけておられた。それで母は、娘を手放す気持ちになった。もっとも母は、母親らしく、娘がいなくなれば農場からも家からも日の光と笑い声と音楽がなくなってしまう、と言い切った。

その年の八月、芝生の上の花で飾ったアーチの下で、ささやかな結婚式が行われた。そのことを描こうとは思わない。結婚の晩餐のためにりんごの木の下に並べられた長い食卓のことも、描くまい。小さな白い花嫁衣装が脱がれ、紺の服を着た花嫁が馬車に乗り込むとき、けなげにほほえんでいようとした母の顔のことも。馬車はストラトフォード行きの汽車に間に合うように走り去り、たちまち土ぼこりの雲に隠れた。ストラトフォードは、夫が受け持っていた伝道地である。

「全自然界がわがものであっても、
それはあまりに小さなささげ物。
かくも驚くべき、神々しい愛は、
わが愛を、わがいのちを、わがすべてを求める」

第七章　初めのころの奉仕と、折れた足首のいやし

『わたしたちは早く起き、ぶどう園へ行って、ぶどうの木が芽ざしたか、ぶどうの花が咲いたか、ざくろが花咲いたかを見ましょう。その所で、わたしはわが愛をあなたに与えます』（雅歌七・一二）

それに続く、イエスに仕える幸せな日々のことを、こまごまと書く必要はないだろう。私たちは町の中心に、小さな部屋を三つ借りていた。近くの鋳物工場から渦を巻く煙の雲が流れてきて、屋根と小さな裏庭の上を吹き抜けた。その裏庭で、私は初めての洗濯に必死で取り組んだ。洗ってはこすり、すすいだ。けれども、洗ったそばから、すすが服を黒くしてしまうのだった。それは煙と私との戦いだった。私はひどく困った。良い妻の家事の腕前は洗濯とビスケットで決まる、と昔から聞かされていたからである。姉妹の一人が手を貸し、知恵を授けてくれなかったら、勝負は燃えがらの勝ちになっていただろう。

部屋の家具は質素なものだった。小さな台所のかまどは扉が壊れていて、煙が目にしみた。それでも、私が初めて焼いた一皿のビスケットは、固くて茶色に焦げてはいたが、大成功の傑作と認められた。認めてくれたのは、ボイラー工場での骨の折れる仕事から昼に帰ってきた夫である。これほどほめられたビスケットはなかった。そして、これほど固いビスケットもおそらくなかっただろう。それでも、学ぼう、喜ばせようという気持ちは、ちゃんとそこにあったのである。

小さな集会の人々は、この世の富に乏しかった。愛する夫は、私たちの暮らしを彼らの重荷にしたくなかった。それで、このつつましい仕事についていたのである。ほかの町でなら、良い給料の、それなりの地位につくこともできたであろうに。夫はパウロのように、自分の手で働くことを恐れなかった。

オンタリオ州ストラトフォードで、主は私たちの働きを祝福してくださった。尊い魂を救い、聖霊のバプテスマを授け、私を新しい道へと導き出してくださった。主はストラトフォードから、はっきりと私たちを次の町へ導かれた。

カナダ、オンタリオ州ロンドン

その町では、愛するアームストロング姉妹の美しい家が、私たちのために開かれた。集会は姉妹の家の客間で開かれたが、やがて部屋が手狭になり、ウォートマン兄弟の家に移った。

主が夫をその町に導かれたころ、ペンテコステの教えはそこではほとんど知られていなかった。けれども、一年もたたないうちに、百人を超える人が聖霊のバプテスマを受け、聖書的なしるしである異言を語った。罪人が救われ、目覚ましいいやしもいくつか起こった。これらの集会での御霊の働きの結果、町の中心に近い大通りの一つに、大きなペンテコステ伝道所が建てられ、栄えている。神の働きは今日まで栄光のうちに進んでいる。

イリノイ州シカゴ

シカゴへ行って、W・H・ダーラム兄弟の集会に出るように。主はそのことを私たちの心に示し始められた。そこで、必要な費用を求めて祈っていると、主は母の心を動かして、旅費やほかの必要な費用を出させてくださった。

私たちは何か月ものあいだ、ノース・アベニューの小さな集会で礼拝した。ああ、そこで受けた教え、そこで深められた信仰、そこでの数々の経験は、その後の年月にどれほど大きな意味を持ってきたことか！　主が私に解き明かしの賜物を与えてくださったのは、ここである。

ある日、私はベッドのそばにひざまずいて祈りながら、異言で語っていた。（聖霊を受け、聖霊が思いのままに働かれるようになると、御霊によって祈らずにいるのは難しい。魂がいっぱいになって、人間の思いではその願いを口にすることも、言い表すこともできなくなるときがある。そのとき、内におられる聖霊がわき上がり、私たちの弱さを助けてくださる。そして、言葉にあらわせないう

めきをもって、私たちを通して祈ってくださる。あるいは、場合によっては、イエスを賛美し、あがめてくださるのである。）

その日、御霊が語らせるままに、他国の言葉で主を礼拝していると、突然、気づいた。御霊が私を通して語っておられる言葉が、私にわかるのである。御霊は、霧が巻き取られる栄光の朝を描かれた。山々の上に永遠の夜明けが訪れるさまを描かれた。主の来臨が間近に迫り、燃えるような色で手を伸ばし、主が現れるという約束で空を照らしているさまを描かれた。主の栄光と美しさ、威厳に満ちた足取り、王の衣が、私には決して思いつけなかったであろうすばらしい言葉で描かれた。力が私から離れると、天を味わったような思いが残った。

この経験の意味がわからなかったので、私はだれにも話さなかった。ところが、その晩、ノース・アベニュー伝道所の席に着いていると、ダーラム兄弟が説教の途中で、長い異言のメッセージを語った。この集会では、それまでだれも解き明かしの賜物を受けていなかった。人々は、だれかにその賜物が与えられるように熱心に祈っていたのである。

牧師が語っているあいだ、力が私の全身を流れていた。メッセージが次々に、次々に、次々に流れ込んでくるように思えた。御霊が牧師を通して語るのをやめられた瞬間、私は、すっくと立ち上がって口を開きたいという強い促しを感じた。そうすれば、メッセージが英語でどんどん流れ出てくることは確かだった。

顔が赤くなっていくのがわかった。私が解き明かしを持っていることは、みんなに知られているにちがいないと思えた。続く沈黙のあいだ、頭から足まで震えていたからである。ところが、兄弟が会衆越しに私のほうを指さして、

「ここにいるだれかが、解き明かしを受けています」と言っても、私はまだ椅子に座ったままだった。思い違いだったらと恐れて、立ち上がれなかったのである。

集会が終わると、兄弟は私のところに下りて来て言った。

「あなたは解き明かしを受けていたでしょう」私が自分の経験を話すと、兄弟は、すぐに祭壇に行って、御霊を消したことを主に赦していただきなさい、と言った。そして、御霊に従わなければ御霊を悲しませ、賜物は取り去られてしまう、と念を押した。

次の集会で、その兄弟を通して異言のメッセージが語られたとき、私は御霊に身をゆだねた。御霊は文字どおり私を立ち上がらせてくださるように思えた。そして、異言で語られたメッセージの解き明かしを、私を通して英語で語ってくださった。それがあまりにたやすいので、私は驚いた。私は何もしていなかったのである。それは異言で語るのとほとんど同じだった。唇と舌は、まったく同じように御霊に動かされていた。言葉は私の頭を通らず、御霊が語らせるままに、私の内の奥底から流れ出てきた。異言で語るのと違うのは、それが英語で出てきたことだけだった。その言葉は、私には決して使えないような言葉だった。

聖徒たちは叫び、跳び上がった。そして、力がいたる所に下った。それからは、集会ごとに、御霊が私を通して解き明かしを与えてくださった。人は、この賜物で私が高ぶるだろうと思ったかもしれない。けれども実際は、それまでに与えられたどんなものよりも、この賜物は私をへりくだらせるように思えた。だれかが異言で語りそうになると、建物から逃げ出したいという強い誘惑を敵が私に仕掛けてくるのだった。

最もきびしい試練の一つは、こういうときに来た。ある異言のメッセージは、三語か四語ほどしかないように聞こえた。ところが、それに対応する解き明かしは、二文ほどの長さがあった。解き明かしは私の頭に浮かんだものではなく、御霊が語られたものだ。それは私にもわかっていた。けれども、長さの違いがどうしても理解できなかった。それに、ほかの人もみな、それに気づいたにちがいないと思えた。私はすっかりうろたえて腰を下ろした。

そのとき、会場の後ろで一人の男の人が立ち上がった。そして、あの異言のメッセージは自分の国の言葉で語られたもので、解き明かしはそれとぴったり合っていた、と言ったのである。私の喜びと安堵を想像していただきたい。どっと安堵がこみ上げるとともに、私は思い出した。学校のラテン語の授業では、ラテン語の一語が英語の三語、ときには四語にもなった。そして、壁に書かれた文字をダニエルが解き明かしたときも、その長さはまちまちだった。

『メネは神があなたの治世を数えて、これをその終りに至らせたことをいうのです。

テケルは、あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれたことをいうのです。

ペレスは、あなたの国が分かたれて、メデアとペルシャの人々に与えられることをいうのです』（ダニエル五・二六～二八）

どうして疑ったりするほど愚かだったのだろうか。それでも、読者の中には、こういうかたもおられるかもしれない。異言のメッセージを聞いて、その解き明かしが長さの点で合っていないように思えたので、今日まで疑い、非難してきたかたである。

今日、私たちははっきりと悟らされている。主はご自分の教会を、ペンテコステの栄光と完全に、余すところなく回復しておられるのだ。そこでは、御霊のあらゆる賜物と実が現されることになっている。

オハイオ州フィンドレー　折れた足首の奇跡的な、たちどころのいやし

オハイオ州フィンドレーのレナード兄弟の伝道所で、ダーラム兄弟が二週間の特別集会を開いたとき、私たちもそこにいた。私たちはバプテスマを求める人々のために夜も昼も祈った。そして主は、その一人ひとりに会ってくださった。ときには、祭壇の前の床一面が、主の力に打たれて倒れた人々でおおわれた。御霊のバプテスマを求める人々の中に、その町の牧師と医者が一人ずついた。ある晩、私は祭壇での長い時間にからだが疲れたので、待ち望みの集会のあいだ、二階に上がって横になった。休もうと身を落ち着けたとたん、あの牧師の太い低い声が「栄光あれ！　栄光あれ！！　栄光あれ！！！」と叫ぶのが聞こえた。私たちの祈りが聞かれつつあるのを喜び、牧師が聖霊を受けているのか見に行こうと、私は寝椅子から跳ね起きた。

長い階段を急いで駆け下りる途中、私はつまずいた。足首をからだの下に折り曲げたまま、階段の中ほどから下まで転げ落ちた。落ちるとき、からだの下で骨がぐしゃりと鳴るのが、はっきりと聞こえるほどだった。つま先はかかとがあるはずの方を向き、足首は見る見るはれ上がった。

それまで私はずっと健康に恵まれていたので、主を自分自身のいやし主として信じる機会がなかった。すばらしいいやしは、たくさん見てきたのだが。今、聖徒たちが私のまわりに集まって祈ってくれた。けれども、白状しなければならない。私の頭は、いやし主である主のことよりも、折れた足の痛みと、身を切るような苦しみでいっぱいだった。そのため、その晩はいやされなかった。

医者が私の足を診て言った。骨にひびが入っているだけではない。倒れるときに足を後ろにねじったので、足の指を動かす靭帯のうち四本が、すっかり裂けて切れている。切れていないのは親指に行く一本だけで、そのために指がぐるりと後ろへ引っぱられているのだ、と。

はれが引いて、ギプスをはめられるようになった。するとすぐに、ハリソン医師と、やはりその町で開業している息子さんとが、骨を接いでくれた。曲がった足を元の位置に引き戻し、重いギプスをはめてくれた。医師はこう説明した。切れた筋がつながることはない。だから足首はいつまでもこわばったままだろう。けれども、すっかり治るまで四週間ギプスをはめておけば、足はまっすぐになる。二人とも、足を床につけたり、体重をかけたりしてはいけない、と私に念を押した。松葉杖を一組買い、私はそれに助けられて、シカゴに戻る汽車までよろよろと歩いて行った。

着いた日の午後、私は伝道所の礼拝に出た。痛んで熱を持った足を、前の壇の上にのせて休ませていた。床が揺れるたびに、刺すような痛みが走った。痛みで気分が悪くなり、私は会場から一ブロック離れた自分の部屋に帰った。そこに座って、黒くはれた指を見ながら、自分を哀れんでいた。足のうちで見えるのはその指だけだった。すると、一つの声が私に語りかけた。

「折れた足に履く靴を包み、帰りに履けるように持って行きなさい。そして、ノース・アベニュー伝道所のダーラム兄弟のところへ行き、足に手を置いてくれるように頼みなさい。そうすれば、わたしがその足をいやそう」

靴を包むなんて、と私は思った。その靴は、足がふつうのときでさえきつかったのである。あまりにおかしく思えたので、私はその考えを笑って追い払った。けれども、その声は、またしても、さらにもう一度、聞こえてきた。

「帰りに履く靴を包みなさい。祈ってもらいに行くときに、それを持って行きなさい。そうすれば、わたしがあなたをいやそう」みことばには『わたしの羊はわたしの声に聞き従う』とある（ヨハネ一〇・二七）。私はとうとう松葉杖に手を伸ばし、もう片方の靴のところまでよろよろと行って、それを包んだ。そして、それをわきに抱え、祈ってもらうために伝道所へ行こうと、らせん階段をぎこちなく下り始めた。

行く途中、松葉杖が板張りの歩道の穴にすべり込んだ。つま先が固い板にぶつかり、身を切るような痛みが脚を駆け上がった。全身に玉の汗が浮かんだ。階段の下にたどり着いたときには、めまいがして気が遠くなりそうだった。（ダーラム兄弟は伝道所の上に住んでいたのである。）痛みで震え、真っ青になって、とても階段を上れそうになかった。それで、兄弟が二人、私を椅子に乗せて運び上げてくれた。

私は、主が言われたことを、そのまま彼らに話した。部屋には私のほかに十二人いて、一人を除いてみな祈り始めた。祈らなかった一人は不信者で、私たちの牧師の実の兄弟だった。

ダーラム兄弟は、主を呼び求めながら部屋の中を行ったり来たりしていた。そして突然立ち止まり、私の足首に手を置いて、異言で祈り出した。それから英語で言った。

「イエスの名によって、いやしを受けなさい」突然、電気の衝撃が足を打ったように感じた。それが全身を流れ、私は神の力に打たれて震えた。たちどころに、私の足は完全にいやされた。黒ずみは消え、切れていた靭帯はつながり、骨は元どおりになった。イエスに栄光あれ！　私はいやされたのだ！

興奮と喜びで震えながら、聖徒たちに手伝ってもらって、ギプスを外すのにたっぷり五分かかった。その場にいた不信者が言った。

「ばかなことはやめなさい。はめたままにしておくんだ。医者に三ドル払って、またはめてもらうことになるだけだぞ」

けれども、イエスに栄光あれ、私はいやされていた。とうとうギプスが外れ、脱脂綿も取れた。靴下を履き、靴も履いた（今度はぴったり合った）。そして私は跳び上がり、いやされた足で踊ったり跳ねたりし始めた。

部屋にいた人はみな御霊に満たされ、私たちはみな踊り、歌い、異言で語った。ハレルヤ！　私たちが主の賛美を叫ぶのも不思議ではない。イエスがおられるなら、叫ぶに値するものがあるのだから。

夫が次の高架鉄道の電車で帰ってくることを、ふと思い出した。私は松葉杖を置いたまま階段を駆け下り、駅までずっと走って行って、夫にこのすばらしい知らせを伝えた。足首は前と同じように丈夫だった。

その晩、伝道所は戸口まで人でいっぱいだった。牧師が私に、壇上に上がって、このすばらしいいやしのことを話すように言った。聖徒たちは、松葉杖もギプスもなくなり、私がその足で跳んだり踊ったりできるのを見て、叫び、主を賛美した。いやしの力を知らないシカゴの見物人の多くは、そもそも足首が折れていたのかと疑った。知らせがオハイオ州フィンドレーに届き、いやしが公に告げられた。すると今度は、足首が折れていたことを知っているそこの人々の多くが、いやされたとは信じようとしなかった。なんと人間らしいことだろう。『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』（ルカ一六・三一）。

第八章　外国の畑への召し

『そしてわたしに言われた、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」』（マルコ一六・一五）

シカゴに戻り、いま書いたとおり、折れた足首が奇跡的にたちどころにいやされて、まもなくのことである。夫と私は、中国への召しに従うときが来たことを、はっきりと悟らされた。御霊はしばらく前から、その召しをますます強く夫の心に置いておられたのである。

私たちは、必要な旅費と衣類を求めて祈り始めた。前に書いたとおり、私たちには後ろ盾になる地上の伝道団体もなければ、寄りかかる組織もなかった。だから、私たちを召してくださったかた、イエスをまっすぐに仰ぎ、必要をすべて満たしてくださるように願った。わずか二週間余りで、必要な衣類と旅費が、神の愛する聖徒たちから贈られた。贈ってくれたのは金持ちではなく、貧しい人々だった。

国じゅうどこの集会でも、金持ちや、金持ちに近い人たちは、私たちのところに来てこう言う。

「ああ、今ちょうど何かささげられる立場になくて、本当に申し訳ありません。お金が動かせなくて、今はあまりお役に立てないのです。できたらどんなにいいでしょう」そうして彼らが口ごもり、ためらっているあいだに、貧しい人たちが進み出てくる。そして、うれしそうに目を輝かせ、私たちの手をしっかり握って、心をこめて言うのである。

「神の祝福がありますように！　一ドルです」あるいは「五ドルです」「十ドルです」と。「ああ、もっと多ければよかったのですが、来週の給料袋が入ったら、もっとお渡しできます。こうしてささげることができて、本当に誇らしく思います！」

シカゴに別れを告げると、私たちはダーラム兄弟といっしょにカナダへ行き、オンタリオ州のあちこちの町で信仰復興の集会を開いた。ロンドンでは、主がなおも恵み深く御霊を注いでおられた。このときも、そこで栄光に満ちた信仰復興があった。

私の故郷の町はほんの二十マイルしか離れていなかったので、両親に別れを告げることができた。駅で私を見送るときでさえ、母はけなげにほほえんでいた。プラットホームでハンカチを振りながら、私から見えなくなるまでずっとほほえんでいたのである。私は窓から手を出して上を指さし、イエスを仰いでほしいと伝えた。

トロントで最後の集会を終えた。そこでは多くの人が御霊のバプテスマを受けた。私たちはニューブランズウィック州のセント・ジョン行きの汽車に乗り込んだ。汽車がユニオン駅を出て行くとき、聖徒たちが歌う美しい声が聞こえてきた。「また会う日まで、神があなたとともにおられるように」

セント・ジョンを発って、私たちはイングランドのリバプールへ向けて出帆した。そこからアイルランドのベルファストへ行った。ベルファストでは、主がすばらしい信仰復興を送ってくださった。三週間で四十人を超える人が聖霊のバプテスマを受け、みな他国の言葉で語った。

夫の実家はアイルランド北部のマヘラフェルトにあり、ほんの数マイルしか離れていなかったので、私たちはそこを訪ねた。夫の愛する父と母、男のきょうだい二人と女のきょうだい二人は、競い合って私たちのトランクを詰めてくれた。中身は新しい衣類やおいしいものだった。とうとう出発の日が来て、一家は夫に別れを告げた。そのとき、センプル夫人（ロバートの母）は言った。この世で二度と息子の顔を見ることはないというしるしを、たった今、主が与えてくださった、と。けれども、ハレルヤ！『人がその兄弟のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない』（ヨハネ一五・一三）。

イングランドのロンドンで乗る船を待つあいだ、私たちは愛する聖徒たちにもてなされた。彼らはこの上ない親切と愛を示してくれた。ロンドンで開かれてい

たペンテコステの集会に出てみると、主はアメリカとまったく同じように御霊を注いでおられた。何百人もの熱心なクリスチャンが、同じ聖霊のバプテスマを受け、他国の言葉で語り、主を賛美していた。主が私に、聖霊の時代についてのあのすばらしい幻と、預言のメッセージを与えてくださったのは、ここである。主が与えてくださったものなので、それはいつも私にとって、とても栄光に満ちたものに思えてきた。

船が波止場を離れていくとき、私たちは甲板に立ち、桟橋に立つ大勢の聖徒たちといっしょに、声を上げて歌った。私たちのあいだの距離はますます開いていった。その上を響いてくる愛する人々の声は、なんと美しく、なんと励みになったことか。聞こえるかぎり、彼らは歌っていた。

「神はあなたを守ってくださる」

声が聞こえなくなっても、いと高き神のこの尊い子供たちが振るハンカチや帽子は見えていた。

ビスケー湾の端をかすめて、私たちはジブラルタルへ進んだ。それから日の照る青い地中海に入り、スエズ運河を通って、紅海へと進んだ。イスラエルの人々が、足をぬらさずに導かれて渡った海である。私たちはその海の広さに驚いた。そして、それが「紅海」と呼ばれるわけを知った。砂漠から吹きつける嵐が赤い砂を海の上に吹き散らすので、ときどき海が赤く見えるのである。

まもなく私たちは、インド洋の波を切って進んでいた。セイロンに寄ったあと、ほどなく目的地の香港が近づいてきた。

旅の途中、エジプト、インド、セイロン、マルタなどで後の雨が注がれているという良い知らせを聞いた。長くなるので、ここでは語れない。彼らも私たちと同じく、聖書的なしるしである異言を伴って聖霊を受けた、とだけ言っておこう。病人がいやされ、聖なる僕イエスの名によって、しるしと奇跡が行われていた。

船の上では、イエスを証しする機会がたくさん与えられた。夫は毎日、何時間も何時間も神の前で待ち望み、残りの時間はみことばを読んで過ごした。私たちは日ごとに主に近く引き寄せられ、この世のものではなくなっていくように思えた。

激しい台風を乗り切ったあと、ついにその日が来た。早朝の日の出の中に、香港の山が見えた。そして、たくさんのサンパンが忙しく行き交う港が見えた。

私たちは聖徒たちに迎えられ、宣教師館に連れて行かれた。そのころは、マッキントッシュ兄弟が館の責任者だった。ここにはディクソン兄弟夫妻や、ほかの宣教師たちもいた。そして、アメリカと同じように中国にも後の雨が降っていることを知った。神の小さな子供たちが、忠実に真理を告げ知らせていたのである。そうだ、中国の人々もバプテスマを受けると、ペンテコステの日に百二十人が語ったのとまったく同じように、他国の言葉で語るのである。病人はいやされ、らい病人はきよめられる。ハレルヤ！

中国で私たちは、助け主である聖霊がどれほど必要かを、これまでになく感じた。祈り抜くことも、ずっと難しく感じられた。この邪悪な、暗やみに閉ざされた国では、何百年ものあいだ、悪魔礼拝が公然と行われてきた。ときには、空気が悪霊と地獄の軍勢で満ちているように思えた。私たちは、中国の人々が大きな神々の前にひれ伏すのを見た。神々への信心の炎を絶やさないために、何百ドル分もの紙を燃やすのを見た。豚を丸焼きにし、それを米やほかのごちそうといっしょに、寺やほら穴の大きな石の竜に供えるのを見た。

先祖崇拝は、ほとんどだれもが守っている。人々が食べ物や米、鶏、砂糖漬けの木の実、果物を運んで、死者の墓に供えるのは、奇妙な光景である。ある宣教師が、救われたばかりの中国人の青年に、亡くなった家族の墓に食べ物を持って行くのはいつやめるのか、と尋ねたことがあった。青年は答えた。

「さあ、あなたがたの国の人たちが、亡くなった人をしのんで花を供えるのをやめたときでしょうか」

第九章　夫の死

『あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない』（イザヤ四三・二）

中国にいたあいだ、夫は日ごとに、ますます主に近く引き寄せられていくように見えた。昼も夜も、何時間も祈って過ごした。夫は中国の人々のために、まことに御霊のうちに産みの苦しみをしていた。そしてよく、自分はもうアメリカには帰らないような気がする、と口にした。尊い中国の魂を腕に抱いてイエスのもとへ運びながら、中国から引き上げられて主に会うだろう、と言うのである。夫は、あの小さなコーラスを何度も何度も歌っていた。

「束を運び入れ」という歌である。ただ、夫は歌詞をこう変えていた。

「中国の人を運び入れ、
中国の人を運び入れ、
喜びつつ帰り来ん、
中国の人を運び入れ」

昼の暑さが過ぎると、私たちはよく夕方、浜辺に出て座った。働き手たちがあちこちで話し合っているうちに、ふと気がつくと、夫の姿が見えないことがあった。よく捜してみると、どこか離れた大きな岩の陰に隠れて、魂のために熱心に祈っているのだった。またあるときは、ハッピー・バレーの美しい墓地を歩き、イエスのためにいのちを捨てた宣教師たちの墓碑銘を読んでいた。花も噴水も木々の緑も、なんと美しかったことか。それほどのまれな美しさは、見たことがなかった。

この木々の下に座って、何時間も学び、読んでいたとき、私たちは思いもしなかった。愛するロバートが、まもなくハッピー・バレーのまさにこの場所に葬られることになろうとは。

激しい暑さと、私たちの住む土地の不潔で不衛生なありさまは、私たちの健康をむしばみ始めた。マラリアが猛威を振るっていた。真昼に、コルクのヘルメットと厚い日傘なしで外に出れば、たとえ五分でも、ほとんど確実に死を意味した。

夫が重い病に倒れたのは、私たちが海岸をずっと下ったマカオにいたときだった。夫はひどく弱った状態で汽船に運ばれ、香港へ戻った。そして山の上のイギリス人の療養所に運び上げられた。そこは宣教師のために特に建てられたもので、無料で手当てを受けることができた。

私自身も最も重いマラリアにかかっていたが、夫といっしょにその病院に入った。そこならそばにいられたからである（私は女性の病棟に、夫は少し離れた病棟にいた）。面会日のほかは、互いに顔を見ることもできなかったのだが。

ロバートが入院していたのは、ちょうど一週間だった。そのあいだに、結婚二周年の記念日が来た。私たちは看護婦に託して小さな手紙をやりとりし、それを祝った。夫の病棟を訪ねることを許された、何度かの短い面会のたびに、使い込んだ聖書がいつも夫のそばにあった。夫はこの聖書から説教して私に罪を自覚させ、救いの道と聖霊のバプテスマを説き明かしてくれたのである。それは夫の変わらぬ友だった。聖書は表紙から裏表紙まで書き込みでいっぱいで、夫の指はいつもそのページのあいだにはさまれているように見えた。

夫は日ごとに弱っていった。私は主が夫をいやしてくださると確信していた。けれども夫は、自分の働きはもう終わったと感じていた。戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくした、今や義の冠が自分を待っている、と感じていたのである（第二テモテ四・七～八）。

週の終わりのある晩、医者が特別に、夫のそばについていることを許してくれた。そう聞いて私の心は喜びに躍った。この特別な親切の理由など、夢にも思わなかった。ただ医者に感謝していた。愛する人がこんなにもすぐに取り去られるという考えは、一度も頭に浮かばなかった。枕もとに座って、やせた青白い顔を見つめていると、大きなかたまりがのどにこみ上げて、息が詰まりそうだった。

わずか数日で、すっかり変わってしまった顔である。けれども、勇気を出して励まさなければと思い、私は痛々しいほど懸命に、明るく話そうとした。二人で長いあいだ計画し、待ち望んできた小さな子供が、もうすぐ生まれることを話したのである。

そうして話していると、白衣の看護婦のかかとの音がこつこつと聞こえた。長い病棟を歩いてきて、もう自分の病棟へ戻る時間だと告げに来たのである。ああ、そのとき夫の顔を明るく照らした優しいほほえみを、私は決して忘れない。どういうわけか、何かの悲しみが私に降りかかるという恐ろしい予感が、私の心をとらえた。それは漠然とした、形にならない思いだった。私はベッドの足もとの白いエナメルの手すりにしがみついた。そのとき私の顔をよぎった表情を、夫は見たにちがいないと思う。夫はなおも励ますようにほほえみながら、私の目をのぞき込んで言ったのである。

「おやすみ。また朝に会おう」これが、夫が私にかけた最後の言葉になった。けれども、ああ、私は知っている。いつの日か、明るく雲一つない朝が明けることを。そのときには、

「もはや別れもなく、涙もない。
もはや嘆きもなく、恐れもない」

主が来られるとき、これらのものは過ぎ去るのである。そうだ、今まさに、夜明けの最初の光が空に差してくるのが見えるような気がする。そして御霊が、優しくささやいておられる。

「朝は近い。イエスはまもなく来られる。もう少しのあいだ、忠実であれ」

「おやすみ。また朝に会おう」ああ、読者のみなさん、あなたがたはその朝、そこにいるだろうか。その日にイエスに会う備えができているだろうか。

言いようのない落ち着かない気持ちのまま、私は女性の病棟のベッドに戻った。そして何時間も暗やみを見つめて横になり、周りのほかの患者たちの不規則な寝息を聞いていた。

真夜中、私はぎくりとしてベッドの上に起き上がった。ベッドの足もとの窓から、大きな四角い中庭の向こうが見えた。夫のベッドのわきにあるとわかっている窓に、明るい光がともっていた。どういうわけか、大きな恐怖が私の魂をとらえた。二つの病棟をつなぐ廊下を、夜勤の看護婦が急ぎ足でやって来るのが聞こえた。看護婦はまっすぐ私のベッドに来た。そして、決して忘れられない、張り詰めて、のどに詰まるような声で言った。部屋着とスリッパを身につけて、急いで隣の病棟へ行くように。ご主人の容体がとても悪い、と。

「夫は、夫は、まさか、し、死にかけているのではないでしょうか」こわばった唇から、私はやっとのことであえぐように言った。

「早く来てください！　どんどん弱っています」その言葉は、弔いの鐘のように響いた。私たちは長い廊下を急いだ。その先に何が待っているのだろうか。

「死だろうか。ああ、まさか。そんなはずはない」と私は考えた。私は人が死ぬのを見たことがなかった。まだ二十歳にもなっていなかった。しかも、どんな風からもいつもかばい、守ってくれた母から遠く離れて、地球の反対側のこんな所にいたのである。

「死にかけているのか。ありえない！　だって、生まれてくる小さな子はどうなるのか。あんなに誇らしくしまっておいた小さな産着を、あの子がまばゆく着ている姿を、夫はきっと生きて見るはずではないか」こうした思いが、いなずまのように心を駆けめぐった。私は呆然としていた。唇は震え、ひざががくがくして、ほとんど歩けなかった。

それから、夫のベッドのそばに立った。意識はなかったが、栄光の世界の光が夫の顔を照らしているのが見えた。私はくずおれるように夫のかたわらに座り込み、冷たい手にすがりついた。夫は目を開けず、私を見なかった。けれども、きっとイエスを見ていたのだと思う。夫の顔に浮かんでいた表情は、それほど恍惚としていた。

全世界が崩れ落ち、足もとから滑り去っていくように思えた、まさにそのときである。助け主が、イエスが遣わしてくださった祝福に満ちた聖霊が、私のうちに立ち上がられた。そしてイエスを、なんとも尊く示してくださった。神のみこころをこの上なく甘いものにし、備えられたすまいをありありと見せてくださった。それで私は、ロバート・センプルの臨終の床のそばで、「栄光あれ」と叫んだのである。別れる日が来るとは、夢にも思っていなかった人だった。喜びの波が私の魂の上に押し寄せ、私は地から天へ引き上げられた。真珠の門まで、夫に

付き添って行ったように思えた。『主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな』（ヨブ一・二一）。

医者に肩を揺すぶられているのを感じて、私はようやくベッドから顔を上げ、愛する冷たい手を握っていた手をゆるめた。最後にもう一度、冷たい額に口づけしようとかがんだとき、私は助け主がどれほど必要かを悟った。助け主は私を見捨てず、優しく耳もとで語ってくださった。

「彼はここにはいない。よみがえったのだ」（ルカ二四・六）

ああ、愛する友よ、イエスが遣わしてくださった助け主など自分には要らない、と二度と言わないでいただきたい。助け主が必要なのは、山の頂で喜ぶときだけではない。悲しみに暗く閉ざされたときにも、死の陰の谷を下っていくときにも、あなたには助け主が必要である。ハレルヤ！　集会で私たちが喜びのあまり踊り、叫ぶのを見て、それがみな興奮と、うわべだけの祝福だと思わないでいただきたい。それは事実ではないからである。ああ、そうではない。足が暗い水の中へと導かれ、大水があふれかかるように思えるときにも、聖霊はなおとどまっておられる。そのとき聖霊はそこにいて、慰め、支えてくださる。また私たちが燃える炉の中を通るとき、神の子のような第四の者の姿を、これまでになく示してくださるのである（ダニエル三・二五）。

ああ、愛するイエスさま、私たちはどれほど感謝していることでしょう。あなたは言ってくださいました。「わたしはあなたがたを、慰める者もないままにはしておかない。ほかの助け主、すなわち聖霊を遣わそう」（ヨハネ一四・一八、一六）

私は二度と、愛する人の顔を見ることを許されなかった。医者が、できるかぎりの苦しみから私を守ろうと心を砕いてくれたからである。けれども、ああ、人々がブラインドを下ろすのが見えた。私に見せまいとしてのことである。重い足音も聞こえた。人々が担いだものを運んで、私たちの窓の前を通り、階段を下りて行くのである。この尊い聖霊がおられなかったら、どうしてそれに耐えられただろうか。

わずかな手持ちの資金はほとんど尽きていた。すぐにお金が要り、葬儀の費用も払わなければならない。次に考えなければならないのは、そのことだった。そこで私は、こう言われた主に心を向けた。

「思いわずらうな（中略）わたしがあなたの必要を満たそう」（マタイ六・二五、ピリピ四・一九）その日の午後の郵便で、シカゴの愛する二人の姉妹から、六十ドルの入った手紙が届いた。手紙の日付は一か月前だった。主が真夜中に二人を起こし、こう言われたというのである。

「小さなセンプル姉妹が困っている。すぐに起きて、六十ドルを送りなさい」

二人は起きてお金を送った。そして、それがちょうど必要なときに、ここに届いたのである。ああ、ハレルヤ！　愛する母には、急いで電報を打っていた。いつでも助けようと待ち構えている母の心から、必要なお金が届くはずだった。けれども、それが届きうるよりずっと前に、このお金は着いていたのである。

それから一か月のあいだ、毎朝毎朝、私は悲鳴を上げて目を覚ました。大きな喪失が押し寄せてきて、父親の顔を決して見ることのない小さな子供のことを思ったのである。すると、助け主がたちまち私のうちにわき上がってくださり、私は言葉につくせない喜びに満たされた。熱く乾いた目から、愛と祝福の涙が流れた。

やがて、小さな娘が生まれた。ほんのちっぽけな子だったが、ああ、なんという慰めだったことか。ここでもまた、助け主が私とともにおられた。まことにイエスは、やもめの夫、みなしごの父である。私は父親のロバートにちなんで、その子をロバータと名づけた。小さな娘が生まれたのは、香港の山の上だった。娘が生後六週間になったとき、私は上海へ向けて船出した。

上海を発って、私たちは日本の門司、神戸、長崎へ行った。日本を離れると、ホノルルと合衆国へ向けて出帆した。私は尊い小さな荷物を、日本のかごに入れて運んだ。

母がお金を送ってくれていたが、一部はまだ受け取っていなかった。船の上で何度も計算してみたが、大陸をすっかり横断するには足りないことがわかった。私は地上のだれにも自分の必要を告げず、イエスを仰ぎ続けた。そして船の上で機会を見つけるたびに、イエスを証しした。この帰りの旅での思いを、描こうとは思わない。けれども、ああ、とてつもなく大きな空しさが、私の周りいっぱいに

に口を開けているように思えた。私は愛する小さな温かい包み、ロバータを、いっそう胸に抱き寄せた。

サンフランシスコで汽船を降りようとしていると、事務長が走って追いかけてきて、私の腕に触れて言った。

「ああ、ちょっと待ってください！　乗客のみなさんから、これをお渡しします」事務長が私の手に滑り込ませた封筒を開けると、乗客たちが寄せてくれた六十五ドルが入っていた。

旅のあいだずっと、私に必要なもので、主がすぐに送ってくださらなかったものは一つもなかったように思えた。クリスマスが近づいていた。中国はとても暖かかったので、赤ん坊にはごく薄いボンネットしかなかった。私は船室で小さなボンネットを指の上でくるくる回しながら、故国の雪の中に着くまでに、暖かいのを用意してやらなければと考えていた。すると、ドアをたたく音がして、婦人の声が言った。

「あの、赤ちゃんに暖かい羽毛のボンネットとケープをお持ちしました。きっとご入用になりますから」

またあるときは、赤ん坊のために厚いショールがほしいと思っていた。すると給仕が船室に来て、こう言った。日本の最後の港で降りたある男の人が、この暖かい毛織りのショールを置いていった。もう要らないからと言って、「赤ちゃんを連れた、あの小さな宣教師のご婦人」に渡すようにと言い残したという。美しい、高価なショールだった。私はどれほどイエスを賛美したことか。

またあるときは、魔法瓶が要った。だれにも一言も言わないのに、それが私のドアまで届けられ、黙って手渡された。主は毛を刈られた小羊に吹く風を和らげ、小さな子供たちを優しく見守ってくださる。そのことについてお話しできることはたくさんあるが、これはそのうちのほんのいくつかにすぎない。

ロッキー山脈を越えてシカゴへひた走る汽車の中で、私は生まれて初めて汽車酔いにかかった。それで、二日ほど寝台で横になっていなければならなかった。何人もの乗客が忠告してくれた。この車両の車掌は見たこともないほど気難しい老人だから、どんなことがあっても頼み事をしてはいけない、と。けれども、ああ、私の主は、獅子を小羊のようにおとなしくし、苦いものを甘いものに変えることがおできになる。

あの愛すべき車掌は、何時間も何時間も通路を行き来して、私の代わりに赤ん坊の世話をしてくれた。哺乳瓶を温めておくために、ポケットに入れて持ち歩いてさえくれたのである。主をほめたたえよ！

シカゴに数日とどまったあと、私たちはニューヨークへ旅を続けた。母はそこで救世軍の働きに携わっていた。汽車が駅に入ると、母が迎えに来ていた。私は片方の腕に赤ん坊を抱いていたが、もう片方の手で、なおも空を指さして、イエスを示すことができた。汽車が中国へ向けて出て行ったあのときと同じように。主をほめたたえよ。心に聖霊を宿しているなら、聖霊はあなたを助けて、なおも手を上に上げ、「神を賛美し続ける」ことができるようにしてくださる。

第十章　ニネベからタルシシへ、そして帰還

『ヨナは魚の腹の中からその神、主に祈って、（中略）主は魚にお命じになったので、魚はヨナを陸に吐き出した。時に主の言葉は再びヨナに臨んで言った、「立って、ニネベに行き、あなたに命じる言葉をこれに伝えよ」。そこでヨナは立って、行った』（ヨナ二・一、一〇、三・一～三）

あなたには、クリスチャンとしての歩みの押し入れの奥に、秘密をしまい込んでいたことがないだろうか。人目と批判の日の光にさらすのを、しりごみするような秘密である。あるいは、あなたの霊のどこかに、痛むところがないだろうか。好奇心に満ちた、探るような指で触れられると思っただけで、顔をしかめてしまうほど痛むところである。あるいは、人生のある時期について、あまり人に知られたり、話題にされたりしたくないと思うことはないだろうか。それはみな、とうの昔に告白し、ゆるされ、きよめる血の下に葬られたことなのだが。

神の最善で完全なみこころは、あなたにとって、まっすぐで狭い道である。自分の歩みを語るとき、その道からそれたところを、ひょいひょいと飛び越えてしまいたくなったことはないだろうか。実生活で省くべきだったことを、クリスチャンとしての歩みを語るときに、飛び越えて省きたいと思ったことはないだろうか。そう、それがまさに私の場合だった。

もしこれが、一度もためらうことなく前進し続けた、聞こえのよい物語であるなら、この章は決して書かれなかっただろう。けれども主は、私の歩みの一歩一歩がだれかの祝福と励ましになるようにと、願う心を与えてくださった。勝利のうちに生き、天への競走を一度も転ばずに走り、神が私たちを祝福し、祝福としてくださったときのことを語るのはたやすい。けれども、道の途中で暗やみの中につまずいた敗北のときこそ、ほかのどんな経験にもまさる祝福となるかもしれない。手探りで光へ戻る道を探している、信仰から離れた哀れな人にとってである。

夫の死という試練のときも、その後のできごとのときも、故国に帰るときも、主はすばらしく私とともにいてくださった。それでも、私が歩いて渡った孤独の恐ろしい水は、ときに頭の上まで押し寄せるように思えた。けれどもそのたびに、主は私とともにいて、慰め、支えてくださった。

翌年、私は、逆らって速く流れる潮と戦っていた。足を踏ん張り、途切れた人生の糸を、切れたところからもう一度つなごうとものがいていた。集会での働きのために、私は弱い小さな娘を連れて歩かなければならなかった。夜中の十二時まで、ときには朝の二時まで外にいることもしばしばだった。そのうち、娘はひどい病気になった。娘の弱った体について専門家の助言を受けると、こう言われた。「静かな家とふさわしい食べ物を与えないなら、子供のいのちはあなたの責任になる。いつも移動して食べ物が変わっていては、この子は死んでしまう」

私は、傷ついた小鳥のように中国から帰ってきた。血を流す私の心は、善意の人々の好奇心からの問いに、絶えず刺し貫かれた。その人たちは、私たちが中国へ召されたことに、神のみこころを見ることができなかった。ロバートの急な死か、私の帰国か、どこかに間違いがあったにちがいないと感じていたのである。私には答えられなかった。私自身、まだそのすべてに神のみこころを見ることができなかったからである。私たちを中国へ送り出す手助けをしてくれた、愛する人々がいる。その人々のあいだでは、どこへ行っても、問いただすような空気を感じるようだった（口に出されても、出されなくても）。それが少しずつ私をすり減らした。やがて私は、自分が何か罪を犯した者で、ここにいるべきではないように感じ始めた。どこか遠くにいるべきなのだ。それがどこなのかは、わからなかったが。

ああ、私をわかってくれる人、私を腕に抱いて、人生のこの重大なときに助けてくれる人を、どれほど求めたことか。ところがちょうどそのときに、主はあることを許された。私が最も愛していた人たちが、それまであれほど力強く頼りに

なった腕を、引っ込めるかのように見えたのである。私たちのあいだには遠慮という小さな幕が下り、私は赤ん坊とともに外に取り残された。

人間の目で見れば、私がハガルのように子供を連れて出て行き、荒野をさまよい、声をあげて泣いたのも、無理のないことだった。ペンテコステの人々は、私につらく当たる女主人のように思えた。そして神は、私のために間に入ってくれないように見えるアブラハムのように思えた。

そのころ、人生の機（はた）は、もつれた迷路にすぎないように思えた。その色合いは、日に照らされた栄光の山の頂から、果てしなく思える谷の、途方に暮れるような暗がりの底へと、急に落ち込んでしまったのである。その後の年月、私は、運命の杼（ひ）が絶えず行き来するのを見守ってきた。杼はいつも、神の御手の優しい知恵に導かれていた。今になってようやく、主の御顔とお姿が、私の人生の機に織り出されているのが見え始めているのである。

私が再婚したのは、ちょうど最も途方に暮れていたときだった。霊的に後退し始め、主から迷い出て、赤ん坊のために家庭を作りたいと切に願っていたときである。けれども結婚の前に、私は一つの条件を出した。夫にこう言ったのである。私の心と魂のすべては、本当は主の働きにある。だから、いつか主が、アフリカやインドへ、あるいは海の島々へ行くようにと、私を召されるかもしれない。そのときは、それがどこであっても、いつであっても、私は何よりもまず神に従わなければならない、と。夫はこれに同意し、私たちはこの条件で結婚した。そして家具付きのアパートに落ち着いた。

心を乱し、悩みながら、私は主の働きから身を引き、再びこの世に向かった。私の王の宴の食卓に、もう一度迎えられたいという切なる思いを、押し殺そうとしたのである。

信仰から離れた人ほど、本当にみじめな者が、この地上にいるだろうか。集会に行かなくてもすむのは、とてもほっとすることだった。それなのに、集会から離れているのは、とてもつらいことでもあった（この気持ちが分析できるものなら）。私は二つの相反する力のあいだで引き裂かれていた。聖徒たちの中には、私が信仰から離れ、この世へ流されていくのを見る人もいた。それで、私の立場はいっそう耐えがたいものになった。

夫が母親から、ロードアイランドの家に来るようにと招かれたとき、私は進んで船に乗ることに同意した。『主の前を離れてタルシシへのがれ』ようとしたのである（ヨナ一・三）。

けれども、ああ、読者のみなさん、主はなんという大風を海の上に起こされたことか。海には激しい暴風があって、私たちの家庭というもろい小舟は揺さぶられ、船が破れるほどになった（ヨナ一・四）。

日ごとに、事態はよくなるどころか悪くなっていった。私は、私のイエスと、主のうちにあったかつての場所とを求めて、悲しみ、嘆き、泣いた。周りの人々にとって、私はわけのわからない存在であり、絶えず居心地を悪くさせるもとだった。

地上のもの、家庭、安楽。ああ、それが何だというのだろう。私は主の尊いみこころの外にいた。そして私の魂は、慰められるのを拒んだ。

私は部屋に閉じこもっては、ベッドの陰の隅の床に座った。祈ろうとしても、たった一つの言葉しか言えなかった。私はそれを何度も何度も叫ぶのだった。

「ああ、ああ、イエスさま！　イエスさま！　イエスさま！！　イエスさま！」

私の不幸で憂鬱な様子を見て、義母は、自分たちの家を借りて家具をそろえるようにと勧めた。そうすれば、その仕事で気がまぎれて、自分のことばかり考えずにすむだろう、と言うのである。そのとおりにした。双方の親の助けと私たちの稼ぎで、家具のよくそろった家ができた。心の望むものは何もかもそろっていた。ただ、し、イエスを除いては。ああ、イエスがおられなければ、何もかも意味がない。

「どうして幸せになって、ほかの人たちのようにふるまい、悩みを忘れることができないのか」と、私は何度も何度も言われた。私は何度も、無気力と落ち込みから自分を揺り起こそうとし、家事に忙しくしようとした。落ち着かない熱に浮かされたようになり、家具や床をあまりにたびたび磨くので、つやがすり減ってしまうのではないかと思えるほどだった。日に十回以上も、鏡に映る涙にぬれた顔が目に入ると、私は自分を叱りつけて言った。

「さあ、いいこと、お嬢さん。こんなことではだめよ。こんなふうにくよくよとやつれていく権利が、あなたのどこにあるというのか。ほら、ぴかぴかに磨いた床を見なさい。柔らかいアクスミンスターやウィルトンの敷物が敷いてある。マホガニーの客間の家具も、向こうの大きな真鍮のベッドも見なさい。青と白でしつらえたりっぱな浴室、スチーム暖房、柔らかい笠をかぶった電灯、ふわふわの飾りとリボンのついたかわいいベビーベッド、子供用の高い椅子、揺り木馬。ほかの母親ならだれでも喜ぶように、どうして子供たちのためにこんな家があることを喜ばないのか」

「まったく、また世の中に出て行こうと考えるなんて、ばかげているわ。それに、いいこと、前に赤ん坊一人でも大変だったのなら、今度は二人も抱えて、いったいどうするつもりなのか」

こうして自分と話をつけると、私は仕事に戻った。数分のあいだは半ば納得して、こう言うのだった。

「そうね、そのとおりだわ。そんなことはすっかりあきらめて、腰を落ち着け、今の生活に慣れたほうがいい」

けれども、ああ、神の召しが私の魂の上にあり、私はそれから逃れることができなかった。そのために、私はこの世に生まれてきたのである。心臓が脈打つたびに、こう言う声が聞こえた。

「みことばを宣べ伝えよ！　みことばを宣べ伝えよ！　行くか。行くか」すると私はひざまずき、涙ながらにすすり泣いて言った。

「ああ、主よ、私が行けないことは、ご存じでしょう。ここには二人の子供がいて、家があります。それに夫もいます。夫はバプテスマを受けていませんし、求めてさえいません。私はこの土地の伝道所で働きます。それで十分でしょう」

けれども、そうではなかった。答えはなおも、天からはっきりと返ってきた。

「行け！　伝道者のわざをなせ。みことばを宣べ伝えよ！　時は縮まっている。わたしはすぐに来る」

「ああ、主よ、福音を宣べ伝えるのに、なんとふさわしいありさまでしょう、この私は。だって、私はこんなにもみじめで、落ち込み、打ちひしがれているのです。ほかの人を助けるどころか、私のほうがだれかに助けてもらわなければなりません」ときどき、祈りのあとでさっと目を上げると、悪魔が手をこすり合わせ、いやらしい目つきで私を見て、こう言っているのが見えるような気がした。

「望みはない。あきらめたほうがいい。おまえが信仰から離れたことは、だれでも知っている。だれもおまえを信用しないさ」そして、またひとしきり激しく泣くのだった。

夫と義母は、よくこう言った。

「ねえ、エイミー。これ以上何がほしいのか、わからない。何があっても、あなたは幸せにならないと思う。きっと性分なのね」（なんと、主をほめたたえよ、主のみこころのうちにいるとき、私はとても幸せで、喜びに満ちている。足も心もとても軽くて、踊らずにはいられないほどである。地上のだれも、私ほど幸せにはなれないように思える）

私の神経はひどく参ってしまい、こんろの上でやかんが鳴る音や、人の話し声にさえ耐えられなくなった。私は小さな娘に、ささやき声で話してほしいと頼んだ。日の光が憎く、よろい戸を閉め、ブラインドをぴったり下ろしておきたかった。医者たちは、何か手を打たなければ正気を失うだろうと言った。体もひどく悪くなり、一年のうちに二度の大手術を受けた。メスの下に入る前に毎回、そのほかにも死ぬかと思うほど危ない病のときに何度も、私は聖徒たちを呼び、病から救い出されるように祈ってもらった。けれども、彼らが祈るたびに、主がこう言われる声がはっきりと聞こえた。

「行くか。みことばを宣べ伝えるか」もし「はい」と言えば、主がいやしてくださることはわかっていた。けれども、どうして「はい」と言えるだろうか。困難が山のように行く手にそびえていた。ああ、今の私は知っている。どんな障害があろうと、イエスが「行け」と言われ、私が歩き出すなら、障害のところに着くまでに、私は持ち上げられてそれを越えるか、障害のほうがなくなっているのである。神は不可能なことを私たちに求められない。主が何かをするようにと言われたら、それがどんなに難しく見えても、とにかくやり始めればよい。そうすれば、昔の『天路歴程』のクリスチャンのように、獅子が鎖につながれていて、行く手を妨げられないことがわかるだろう。

一度目の手術のあと、私はよくなるどころか悪くなった。合併症が起こった。心臓の病、胃からの出血、激しい神経過敏などである。医者たちは、もう一度手術が必要だと言った。

ああ、楽しもうと思っていたあの家！　楽しみといえば、ほとんどベッドから見えるものだけだった！　ヨナが逃げ出して神に背いたとき、私ほど荒れた航海をしただろうか。とにかく、ヨナの旅は私の旅ほど長くはなかった。ヨナは船賃を払ったと書いてあるが（ヨナ一・三）、私も最後の一コドラントまで、確かに自分の船賃を払ったのである（マタイ五・二六）。

神に信頼しようというぼんやりした望みから、二度目の手術は延ばしに延ばされた。けれども、みこころの外にいて、どうして神に信頼できただろうか。祈るたびに、答えが返ってきた。その答えは、脈打つたびに私の全身に響き、打ちつけた。

「行くか。行くか。みことばを宣べ伝えよ！　みことばを宣べ伝えよ！」

とうとう、ほかのすべてに加えて虫垂炎になり、私は悲鳴を上げて体を二つに折った。そして再び、急いで病院に運ばれた。手術台に上がる準備をされているあいだ、私は絶望の谷底から熱心に祈った。

「ああ、神よ、どうか私をみもとに召して、あなたとともにいさせてください。戻ることはできそうにありませんし、このまま続けていくことには、とても耐えられません。私は自分にとっても、周りのだれにとっても、みじめなお荷物です。どうか、どうか私をみもとに召して、あなたとともにいさせてください」けれども、ああ、神が私を生かしておいてくださったことを、私はとてもうれしく思う。主の尊い御名をほめたたえよ。

エーテル麻酔とメスによる手術が終わった。一度に五つの手術が行われたのである。意識のない哀れな「私の残りかす」はベッドに戻された。目を開けると、病院の白い壁が見えた。私は頭から足の先まで痛みに震えていた。その痛みはよくなるどころか、ますますひどくなっていった。

母は二度も、私の死に目に会うようにと電報で呼ばれた。汽車の車輪が線路の上を走るあいだ、母の心は引き裂かれ、間に合うようにと祈った。駅から病院へと急いで運ばれた。今もこうして私のそばに座り、エーテルのにおいの立ちこめる部屋に入ったときの気持ちを語ろうとすると、母は声を詰まらせる。枕の上に横たわる小さな姿を見たときの気持ちである。その子は、あれほど多くの望みといのちと幸せの場面の中心にいたのだった。

母は思い出した。世に出てみことばを宣べ伝える女の子を求めて祈った日のこと。「血と火」の旗のもとでの献児式の日のこと。喜びに満ちた奉仕の、黄金の未来のこと。それなのに、ここにあるのは、この残骸だった。これがすべてだったのだろうか。

母のうちの何かが、神と、私についての神の約束を手放すことを拒んだ。外の部屋では、医者や看護婦たちが、私が生きられない科学的な理由を重々しく説明していた。私のは非常にまれな症例なのだと説明し、母に私の死を受け入れさせようとしていた。そのあいだも、母の心は苦しみもだえる祈りとなって神に向かい、娘のいのちが助かるようにと願っていた。

母は途切れ途切れに泣いて祈った。そして神への誓いを新たにし、いっそう固くした。娘が働きに戻り、そこにとどまれるよう、あらゆる仕方で助けます。何が起ころうとも、力の及ぶかぎり、子供たちのことでも、どんな苦闘のときにも、娘を助けます、と。

長い訓練で鍛えられていた看護婦たちも、隠しもせずに涙を流していた。私がエーテルから覚めかけると、医者は「うおっほん」と咳払いをして、この病院でこんな場面は見たことがない、と言った。私が説教をしていたからである。麻酔から覚めるときの患者に特有の、高く強い声で、イエスのことを語り、失われた魂にイエスのもとへ来るよう懇願していたのである。体も心も打ち砕かれていたが、理性が支配を失ったまさにその瞬間、私の魂は、愛するイエスに向かって歌い、説教し、祈り始めたのである。

あとで母が私の部屋に入ってきて、ひざまずき、私の目をのぞき込んで言った。

「お母さんがここにいるわ、いい子ね。お母さんが助けてあげる。お母さんはわかっているし、あなたの味方よ」そのとき交わしたまなざしの中で、望みと理解の火花が、私たち二人の魂にともされ、輝いたように思えた。その火花は一度

も消えることなく、炎となって燃え上がり、日がたつにつれて、ますます高く上っている。

ある晩、看護婦と医者が午後じゅうほとんど付きっきりだったあと、三人の若い研修医が入ってきた。そして私をそっと腕に抱え、マットレスごと別の部屋へ運んだ。死にかけた人が運ばれる部屋である。

朝の二時ごろ、私の手をなでながら「かわいそうな子、かわいそうな子」と言っていた白衣の看護婦が、遠ざかっていくように思えた。かすかに吸える息は、痛くて、のどより深くは入らなかった。何もかもが暗くなった。だれかが言った。

「もうだめです」意識を失う直前、生と死のあいだをさまよっていたとき、主の御声が聞こえた。私が驚くほど大きな御声だった。

「今、あなたは、行くか」そして私は悟った。どちらにしても「行く」のだ、と。魂を勝ち取る者として働きに入り、神のみこころに戻らないなら、イエスは私をみもとに引き取られるだろう。私が主なしで歩み続けて滅びることを、許されはしないのである。

ああ、女は福音を宣べ伝えるために召されることはない、などと決して私に言わないでいただきたい。神のみこころと働きから離れていたあの数か月、私はこの世の地獄に生きていた。その百分の一でも味わった人なら、二度とそんなことは言わないだろう。

残ったわずかな力を振りしぼって、私はやっとのことであえぎながら言った。

「はい、主よ、私は、行きます」そして、私は本当に行ったのである。

意識を失っていたのは、ほんの一瞬にすぎなかったはずである。けれども目を開けると、痛みは消えていた。それまではごく小さな息にも激しい痛みが伴ったのに、苦しまずに深く息をすることができた。痛みなしに寝返りを打つこともでき、看護婦がひどく驚くのもかまわずに、そうしてみた。二週間後には、みなが驚いたことに、体は弱っていたものの、私は起き上がって元気になっていた。その日から今日まで、痛みらしい痛みはほとんど覚えがない。

退院の前にも後にも、私は何度か、すぐにぶどう園へ出て行くという決心を、それとなく打ち明けようとした。

「まあ、そんなことを考えるだけでも、なんてばかげた思いつきでしょう。どうしてほかの若い女の人たちのように、満足して家にいて、家事をしないのか」家の人たちの同意を得ようと、おずおずと、けれどもきっぱりと切り出すたびに、決まってこのような言葉が爆発するように返ってきた。

言い争う力もなかったが、神に背こうなどと考える力もなかった。あの大きな白い鯨、手術台が、私を岸に吐き出したのである。主は、私が主に仕えるというはっきりした約束のもとで、私のいのちを助けてくださった。その考えがどんなに愚かで不可能に見えようと、私はためらうことなく、ニネベへ向けて出発するつもりだった。生きるにせよ死ぬにせよ、沈むにせよ泳ぐにせよ、神の導きを祈り求め、あの召しに「はい」と言おうと固く決意していた。

「行くか。行くか」どのように、どこへ行くのかはわからなかった。それでも、とにかく出発するつもりだった。それも今すぐに。主の足もとに身を投げ出し、ひたすら主に信頼して。紅海を分け、ヨルダンの波を押し返された主が、どうにかして私のために川も山も取り除き、火の中を焼かれずに通らせてくださることを、私は確信していた。

母はそのころカナダにいたので、私はそこへ電報を打ってお金を頼んだ。そしてある夜、家にだれもいないときに、電話でタクシーを呼んだ。十一時、二人の子供を急いで車に乗せ、運転手が二つのスーツケースを屋根に積み上げた。そして、故郷の母のもとへ行く真夜中の汽車に乗るため、私たちは急いで走り去った。新しく出直して、すべてをやり直すには、前に出発したその出発点に戻るのが、世界でいちばん自然なことに思えた。

神は私とともにおられ、一歩ごとに主の導きと支えを感じていた。片方の腕に小さな赤ん坊を抱き、もう片方の腕にロバータを眠らせて、私は二人をしっかりと抱き寄せた。自分のしていることの大きさが、押し寄せてきたのである。駅へ向かう道すがら、通りは暗く、ほとんど人けがなかった。

こうして私は、人生で二度目に、みことばを宣べ伝えよという大いなる召しに従うために出発しようとしていた。けれども、一度目とはなんと違っていたことか。なんと場面が変わってしまったことか。

第一の場面。一度目は真昼だった。暖かく親しげな太陽が、空からほほえみかけ、照りつけていた。いのちと望みが、ばら色のほおをした小さな花嫁の前に、衣を広げていた。花嫁は、涙ぐみながらも愛と思いやりに満ちた友人や親族に、手を振って見送られた。田舎の芝生には百人以上が集まり、何マイルも離れた所から見送りに来た人もいた。みな花や米を浴びせ、「神の祝福がありますように」と言ってくれた。あのとき私は、力も知恵も導きも、何もかも夫の力強い腕に寄りかかって出て行った。魂は祝福され、勝利に満ちていた。奉仕の開かれた門が、私たちの前にあった。私たちは足もとが確かで、どこへ行くのかもはっきりわかっていた。

第二の場面。一人で出発する。真夜中に。ほとんど逃げ出すようにして。二人の子供を連れて。体は弱り、魂は空っぽでやせ細っている。寄りかかる地上の腕はない。目の前に見える開かれた門もない。愛する友人もいない。花も「神の祝福がありますように」の言葉もない。けれども、ああ、この経験をイエスに感謝する。何を差し出されても、あのつらい所で教えられた教訓を手放す気にはなれない。そこで私は、イエスとただ二人で切り抜け、信仰と依り頼みと確信と信頼の根を、主ご自身のうちに深く下ろしたのである。

以前の働きの生活は、たくましい樫の木に巻きつくつる草のようだった。けれども、私のすがっていたその支えが取り去られ、天の園に移し植えられた。つかんでいた手がゆるみ、離れてしまった。そのとき、あれほど高く伸びていたつる草は、哀れに折れてくしゃくしゃになり、地面にもつれて崩れ落ちた小さな塊にすぎなかった。けれども今、私はすがりつき、しっかりつかまることのできるかたを見いだしていた。そのかたはレバノンの香柏のように、永遠に立ち続けておられる。私がそのかたから引き離されることはない。決して死ぬことがなく、私を離れることもなさらないかた。ああ、それはイエスだった。イエスだった！！

そうだ、つらい所を、風を、冬の嵐の凍りつく突風を、神に感謝する。ああ、そこで私は初めて、根ざし、基を据え、不動のものとされることの意味を、少しばかり学んだのである。自分に死に、十字架の谷を通ることの意味も学んだ。その谷は、復活の力と栄光へと続いていた。

真っ暗で果てしなく思えるトンネルや地下鉄を、乗り物で通ったことがあるだろうか。すると突然、はるか遠くに小さな光が見える。それはトンネルの出口で、日の光にちがいないとわかる。私はちょうどそんな気持ちだった。まだトンネルの暗やみの中にいたが、扉が見えていた。神の尊い日の光の、道しるべの光、主のよしとされるほほえみである。そして私は、それに向かって走っていた。

「さあ着きましたよ、奥さん、ちょうど間に合いました！」車が駅の前の縁石に止まると、運転手の声が割って入った。

眠っている二人の子供とすべての荷物を、どうやって汽車に乗せたのか、今では覚えていない。けれども、数分後に汽車が夜の中へ蒸気を上げて出て行き、畑や眠った町々を走り抜けていったとき、私たちはみな乗っていた。子供たちは、真っ白なプルマン寝台車の寝台で、生まれてからいちばん安らかに眠っていた。

私は神に従っていた。敵はなおも、責め立てる言葉や、これから起こる災いの不吉な予感で、私のあとを追い回そうとしていた。けれども敵は、どういうわけか、私をつかむ手と、私を倒す力を失っていた。敵は、私の魂のやせ細って不毛なことをあざけった。それは本当にそのとおりだったので、何よりもこたえた。けれども私の心は、うちでこう歌った。

「かまわない。リベカは井戸へ向かっている。泉の源へ、確かな供給の源へ、王の宴の食卓へ。私たちはまもなく満たされる」

第十一章　立ち返り

『あなたがたは、羊のようにさ迷っていたが、今は、たましいの牧者であり監督であるかたのもとに、たち帰ったのである』（第一ペテロ二・二五）

十一時五十五分の汽車がインガソルの駅に着くと、父と母が迎えに来ていた。私が昔乗っていたポニーも来ていた。そのころはまだほんの若駒だったが、私のことを覚えていて、うれしそうにいなないた。

「おまえのことがわかるのかな」と父が言った。

「もちろんよ」と私はほほえんだ。そのことに少しの疑いも残すまいとするかのように、フリッツィーは右の前足を上げて握手をした。そして、ビロードのような鼻を私のほおにすり寄せて、全身を震わせた。口をもぐもぐさせ、昔のように角砂糖を探すふりもした。どちらも、ずっと前に私が教えた芸である。まあ、それがなんと遠い昔に思えたことか。何百年もたったのだろうか、それともほんの数年だったのだろうか。

いつものフリッツィーはとてもおとなしかったのだが、その日はなんと勢いよく駆けたことか。早く家に帰って馬具を外してもらい、私と遊びたくてたまらないようだった。私たちがよく柵を跳び越えたことを、フリッツィーは覚えているだろうか、と思った。それに、私のあとについて台所までまっすぐ入ってきて、足を踏み鳴らして歩き回り、母をあわてさせたときのことも。

家へ帰る道すがら、なつかしい野原は、なんと見慣れていて、安らかで、緑に見えたことか。ここに、昔ながらの料金所があった。その一マイル先は、私がイエスに心をささげた場所だった。フリッツィーの母馬の引くそりの鈴が鳴るなか、私はそこで「主よ、罪人の私をあわれんでください」と叫んだのである。そのまた一マイル先には、角に建つ小さな白い校舎があった。道の一歩一歩に、少女時代の思い出が結びついていた。

何の説明も求められなかった。けれども母は、次の日に私がキッチナー（当時はベルリンと呼ばれていた）のペンテコステのキャンプ集会へ出かけることに、もう決めてあると告げた。母自身も行くつもりだったが、私の電報を受け取るとすぐに、行くことはすっかりあきらめ、私のために宿を申し込む手紙を書いていたのである。

「でも、お母さん！　子供たちが。それに、私にできるかどうか」

「子供たちのことは心配いらないわ」と母はさえぎった。「前にも子供の世話はしてきたし、どのみちロバータの世話は、ほとんどずっとお母さんがしてきたんだもの。ロルフとおばあちゃんは、うまくやっていけるわよね、坊や」うれしそうにのどを鳴らす声と、生えたばかりの乳歯を見せる大きな笑顔が、坊やの返事だった。

「そうとも、この子をぐんぐん大きくする、国一番のジャージー種の牛乳もあるしな」と、話はこれで決まりとばかりに、父が自慢した。

「でも、でも、霊の力がすっかり漏れ出てしまったように感じているのに、どうやってキッチナーに戻れるのか。前にあそこへ行ったのは、ダーラム兄弟とロバートといっしょだったわ。あのときは本当に祝福されて、求める人たちのために祈ったのよ。みんなはどう思うだろうか」

「でも、行くわ、お母さん。ああ、本当にうれしい。こんな機会をもらえて、とてもありがたいわ。でも、仕事が増えても、本当にお母さんの重荷になりすぎないだろうか」

「重荷になりすぎるかですって。とんでもない！　ああ、エイミー、あなたが神のもとへ、神があなたを置きたいと思っておられる場所へ戻るのを見るためなら、どんなことも重すぎはしないし、つらすぎもしないわ。この集会で神のもとに戻ると、約束してちょうだい。私たちがあなたの味方になるし、神が助けてくださるわ」

けれども私には、なだめも勧めも要らなかった。私は顔を火打石のようにしていたのである（イザヤ五〇・七）。たとえ全世界が反対の方向に引っ張ろうと、

私はどうしても貫き通さなければならなかった。ほかの道はみな死を意味した。

次の朝キャンプ集会へ出かける前に、夫にこう電報を打った。

「あなたの道を歩もうとしたが、できなかった。今度はあなたが来て、私の道を歩んでくれないか。きっと幸せになれる」

キッチナーでは、乗客と荷物をキャンプ場へ運ぶ馬車が迎えに来ていた。まもなく私は、森の木々の緑の葉の下に、雪のように白く張られた小さな天幕の町に降り立った。歓迎の手と見慣れた顔が集まってきて、私の帰りを迎えてくれた。けれども私は、良心と義務に迫られて、一人一人に、きまり悪そうに、しかし手短に説明しなければならないと感じた。私は以前の私ではない、と。そして、こう言った。

「私は、祈りが必要な人のために祈ってきました。今は私が、だれかに祈ってもらわなければなりません。私の心の祭壇に、神の祝福と火を取り戻せるよう、助けてほしいのです」

そのときの私の気持ちを、想像できるかたもあるだろう。私は会衆席に座り、壇上を見上げていた。そこには、ほんの数年前、聖霊のバプテスマを受けるときに私がいっしょに祈った人たちが、何人も座っていた。彼らは神の力に打たれて震え、顔を輝かせ、ハレルヤの声を響かせていた。そして私はここに座り、ぬれたハンカチで目を押さえながら、こう言っていた。

「ああ、イエスさま、あなたは以前、あんなふうに私を祝福してくださいました。私も以前は、あんなふうに神の力に打たれて震え、あなたを賛美していました」

「ああ、今こそ祝福してください、わが救い主よ。私はみもとに参ります」

（神に背いていたあの数か月のあいだも、聖霊は決して私を離れず、何度も私を通して異言で祈ってくださった。まことに、とどまってくださる助け主であった。ああ、神のあわれみと寛容よ。私はなんとそれに値しなかったことか！）

祭壇での祈りへの招きがあったとき、私はほかの人たちに混じってそっと前に出て、祭壇の前にひれ伏した。祭壇の床になっている粗い板の一枚にさえ、触れる資格がまったくないと感じた。私にできるのは、頭を垂れて泣くことだけだった。責任者の兄弟がやって来て言った。

「さあ、姉妹、両手を上げて主を賛美しなさい。以前、ほかの人にそうするように言っていたとおりに」けれども、ああ、そうはできなかった。まず主との間で正さなければならないことがたくさんある、と私は感じていた。主にゆるしを請い、おわびをし、主の前でちりの中にへりくだらなければならない、と。結局のところ、私たちは、神の大きな愛の心をなんと知らないことか。昔、父が放蕩息子を迎えに走って行ったように、神は悔い改める魂を迎えに走って来られるのである（ルカ一五・二〇）。

私は途切れ途切れにすすり泣き始めた。

「ああ、主よ、私をおゆるし」言い終わらないうちに、主が私の口に御手を当てて、こう言われたように感じた。

「さあ、わが子よ、もういいのだ。そのことはもう何も言わなくてよい」あまりに突然で思いがけなかったので、私には理解できなかった。何かの間違いにちがいない、と思った。きっと何時間も請い願わなければならないはずだ。あれほど背いて迷い出たあとで神のもとに戻るのは、とても難しいはずだ、と。そこで私は姿勢を正して、もう一度やってみた。

「ああ、主よ、愛する主よ、こんな私を、ゆるしていただけるでしょうか」すると再び、主が私の口をふさいで、こう言われるような不思議な感じがした。

「もういいのだ。すべてゆるされている。そのことはもう言わなくてよい」それはちょうど、だれかが何かで私を傷つけ、ゆるしを請いに来たとき、私がこう言うようなものだった。

「ええ、もういいのよ。二度と考えないで。忘れてちょうだい」

この心からの歓迎の突然さと大きさに、私はすっかり圧倒された。それは私の心を砕き、どんなむち打ちよりも強く、私を主に結びつけた。これほどの愛は、私の心には受けとめきれなかった。気がつくと、私は神の力に打たれて、わらの上にあおむけに倒れ、こう言っていた。

「愛する主よ、どうか私を雇い人の一人のようにしてください（ルカ一五・一九）。私は証しをする資格も、祭壇で働く資格も、説教する資格もありません。

ただあなたを愛させてください。あなたの家に住まわせてください、私の救い主よ」

次に気がついたときには、御霊が私を通して異言で語り、私に解き明かしを与えておられた。ロンドンから来た一人の兄弟が異言のメッセージを語ると、主はその解き明かしを私に与えてくださった。すると、その兄弟は神の力に打たれてあおむけに倒れた。私は笑い、泣き、震えていた。小さな人の輪ができて、私といっしょに喜んでくれた。御霊が私を立ち上がらせてくださり、私は行ったり来たりしながら、罪人のためにほふられた小羊を賛美した。それからひざまずき、もう一度主を礼拝した。

長年バプテスマを求めてきた、年老いた愛するメノナイトの説教者が、壇上の向こうの端でひざまずいていた。私たちが中国へ発つ前の晩、私は、この人の兄弟のために祈る恵みにあずかっていた。そのとき、その兄弟はバプテスマを受けたのである。主は今、私をこの老説教者のところへ導かれるようだった。両手を前に差し伸べ、ひざで歩いていくと、私のうちの何かが語った。

「イエス・キリストの名によって、聖霊を受けよ」たちまちその説教者は地面に倒れ、地面に着くか着かないうちに、もう異言で語っていた。長年待ち望んだ末に、助け主が栄光のひらめきのように入って来られ、いつまでもとどまってくださることになったのである。

以前のような力と、求める人たちといっしょに祈るための油注ぎが、私の上にとどまった。ほかにも多くのことが起こったが、ここでは触れない。けれども、ああ、求める人たちのために祈ったとき、主がこうしたすばらしい答えをくださったのは、私を高ぶらせるためではなく、励ますためだった。それは、傷つき悩んでいた私の魂にとって、いやしの香油だった。

私たち自身の集会でも、あのキャンプ集会のときほど、祭壇での祈りに打ち込んで働いたことはない。私たちは夜中の十二時まで、ときには朝の二時まで求める人たちのために祈り、また早朝の集会のために起きた。主は私の魂をいきかえらせ、緑の牧場へと導き出してくださっていた（詩篇二三・一～三）。私は神にお会いするためにこのキャンプ集会に来たのだが、ああ、主はなんと私にご自身を現してくださったことか。

キャンプ集会が終わって母の家に戻ると、母はベランダで楽しそうにミシンを動かし、子供たちの服を縫っていた。子供たちは、りんごの木の下につるしたハンモックで笑っていた。主が私の魂に注いでくださった祝福のことは、すでに手紙に書いていたが、私は喜んでもう一度話した。そして、こう付け加えた。次のキャンプ集会の準備のために、衣類を洗ってアイロンをかける時間が、一週間しかない。次の集会は、二十マイル離れたロンドンで開かれる。何年か前、主がロバートと私を、ペンテコステのメッセージを携えて遣わされた、まさにその町である。

救い主の働きを進めるためなら、何でも喜んでした。私は、集会を知らせるために、長さ七メートル半ほどの大きな横断幕に字を書く役目を任された。ロープを付けて、通りの向こう側まで渡せるように準備するのである。

家の中には、小さな手紙の山があった。すぐに帰ってきて『皿を洗い』『家の世話をし』『ほかの女たちのようにふるまえ』と求める手紙である。けれども私は、福音のすきに手をかけていたので、引き返すことはできなかった（ルカ九・六二）。私は貫き通すつもりだった。そして、主が夫も連れてきてくださるという確信があった。ほかのやり方では、決して夫を勝ち取ることはできなかっただろう。それに、もし私が死んでいたら、夫は永久に私と別れなければならなかったのである。働きから離れたままでいたら、私は確かに死んでいただろう。私は貫き通すつもりだった。イエスがともにおられ、世の中のどんなものも、もうどうでもよかった。私の心は神の前に正しかった。

敵は、『天路歴程』の哀れなクリスチャンにしたように、あの手この手で私をくじけさせ、おびえさせ、引き返させようとした。試練は厳しく、敵の策略は巧妙に練られていた。けれどもイエスは私をしっかりと支え、私が道からそれることも、途中でつまずくことも許されなかった。

祝福に満ちたロンドンのキャンプ集会が終わると、主は私に、ある招きに応じるよう強く示された。オンタリオ州マウント・フォレストのシャープ姉妹からの招きである。「勝利伝道所」という小さな会館で、聖書の集会を開いてほしいというのだった。主の力と栄光が、尊く下った。伝道所はまもなく、人々が入りきらなくなった。そこで、姉妹の家と伝道所のあいだの広い芝生で、集会を開かな

ければならなかった。信仰復興の霊が人々の上に下り、まもなく天幕が買われた。飢え渇いた人々が夜ごとに天幕を満たし、入れなかった人たちは、その周りを幾重にも取り巻いて立っていた。

そして、力が下る日が来た。朝の十時半、私は自分の部屋で祈っていた。

「ああ、主よ、今日、あなたの大いなる力を送ってください。主よ、力を送ってください。力を送ってください、主よ」

外の天幕では、二人の兄弟が握手をして言った。

「主をほめたたえよ」そう言ったとたん、神の力が二人を打った。一人はこちらに、一人はあちらに倒れ、神の力に打たれて長々と横たわり、叫んで神をあがめた。小さな子供たちが、何事かと通りから入って来始めた。一目見ればそれで十分で、ほかの人たちにもその不思議な光景を見せようと、走って行った。

シャープ夫人の母親は、足がひどく痛み、ひどく化膿していた。この人が、ひざを椅子にのせ、それを乗り物代わりにして、家からよろよろと出てきた。天幕に着くやいなや、神の力が彼女を打った。彼女は（椅子ごと）ひっくり返り、いやされた。そして後には、踊って主を賛美した。

シャープ姉妹が天幕に駆け込んで来ると、倒れてしまった。町の触れ役も入って来た。劇場や球技の試合などを知らせて、鐘を鳴らして回っていた人である。彼も鐘を持ったまま倒れ、神の力に打たれて横たわったまま、ほかの人たちといっしょに、いと高き神を賛美する声を上げた。

この集会でイエスがどんなにすばらしく働かれたかを、これ以上語る必要はないだろう。町じゅうが揺り動かされたこと、私たちの姉妹が治安判事の前に引き出され、釈放されたこと、百人を超える人が救われ、何十人もがバプテスマを受けたことなどである。愛するシャープ姉妹自身が、この集会の記録を書いていて、それが本書の第二部の第一章に載っているからである。

けれども、何よりもうれしい知らせは話さなければならない。マウント・フォレストで開かれていた集会の、まさにただ中に、夫がスーツケースを提げて、集会に出るためにやって来たのである。

私はすっかり変わっていた。晴れやかに幸せそうで、神の力と聖霊の油注ぎに満ちていた。それで夫も、これこそ本当に私の生涯の召しであり、働きであると認めないわけにはいかなかった。何時間もたたないうちに、夫自身も聖霊のバプテスマを受け、異言で語り、神をあがめた。

主は、主とともに貫き通す者を、なんと正しいと認め、重んじてくださることか。夫は聖霊の働きを見た。罪人が救いを求めて祭壇に来て、信者が聖霊を受けるのを見た。そして、私が御霊の力のもとでメッセージを語るのを聞いた。まことに、生きているのは私ではなく、キリストが私のうちに生きておられたのである（ガラテヤ二・二〇）。夫は私に言った。神があなたをこの働きに召されたことがわかった。世の中の何と引き換えにしても、あなたにこの働きをやめてほしくない、と。それからの年月、夫は私とともにいることもあれば、ほかの所にいることもある。けれども主は、夫がいっしょにいてもいなくても、私が働きを続けることを、夫が心から喜んで認めるようにしてくださった。

主はすばらしく祝福し、私の必要と二人の子供の必要を、食べ物も着る物も旅費も、すべて満たしてくださった。私たちは良い物に何一つ欠けたことがない（詩篇三四・一〇）。道は日ごとにますます輝きを増している。魂の刈入れは月ごとに増えている。働きは広がり、網はおびただしい魚で満ちている。栄光あれ！　栄光あれ！！　栄光あれ！

第十二章　信仰復興の火が下る

『エリヤは（中略）こわれている主の祭壇を繕った。そのとき主の火が下って燔祭を焼きつくし（中略）。民は皆見て、ひれ伏して言った、「主が神である」』（第一列王一八・三〇、三八、三九）

マウント・フォレストの集会のあと、主は私たちをアメリカ合衆国へ呼び戻された。わずかばかりの地上の持ち物を処分するためである。また、私が自分の手足で働いて、新しい福音天幕を買う資金づくりを助ける機会を与えるためでもあった。十二×二十四メートルほどのその天幕を私たちが持つのが御心であることを、主ははっきりと示しておられた。天幕の代金を払うときまでに残りの額はそろう、という確信が私たちにはあった。そして主の言葉どおり、小さな集会で、私たちに献金が手渡されるようになった。

ロードアイランド州プロビデンスの天幕集会

新しい天幕は、六月一日に始まるキャンプ集会に間に合うはずだった。けれども主が介入され、期日までに仕上がるのを許されなかった。天幕集会の場所を選ぶときには、風や自然の力を考えに入れなければならない。私たちはそれをほとんど知らなかった。それで、無知なまま、湾に面した崖の上の、見晴らしのよい高い丘を選んだ。集会に来る人たちが、風と水辺の景色を楽しめるようにと思ったのである。風があったことは、その場にいて天幕が倒れるのを見た人ならだれも否定できないだろう。その場所にほかに何が欠けていたにせよ、風だけはいつもあった。もし天幕での働きに私たちをくじけさせるものがあったとすれば、それは確かにプロビデンスでの経験だっただろう。けれども主をほめたたえよ。主は私たちの新しい天幕が仕上がるのを許されなかった。そのため天幕会社は、もう寿命の尽きかけた自分たちの古い天幕を張ってくれた。それが受けた損傷の代金を、私たちは一銭も払わずに済んだのである。

風は吹き、杭を打ち、綱を結び、天幕を立てておこうと何時間も格闘した。それでも主は何千もの人々をキャンプ集会に送ってくださった。尊い魂が数多く、泣きながらイエスの足もとに来て、祝福に満ちた聖霊を受けた。イエスが遣わされた助け主である。

近所の人たちは、初めはまったく無関心だった。けれども、私たちが風や嵐と勇ましく格闘するのを見て、助けに来ていっしょに骨を折ってくれた。そして、あれほど苦労して立てておいた天幕に、自分たちもかかわりがあるように感じて、中に入ってメッセージを聞くようになった。こうして彼らは主に導かれた。一晩で一家族全員が救われたこともあった。

集会の日程がほとんど終わりかけていたある午前、最後の嵐が来た。私たちがどんなに手を尽くしても、大きな天幕は倒れてしまった。古くて腐った縫い目が、あちこちで裂けていた。ついこのあいだ、何時間もかけて縫い合わせたばかりの縫い目である。夫はそのたびに忠実に働いてくれていたが、気を落として、あの天幕はもう二度と立てられないと言い切った。夫は勤め口を得て世の仕事に戻っていたので、その日は帰って来ない。けれども、夜の集会には何百人もの人が来ることが、私にはわかっていた。あの大きな天幕を私一人で扱うことはできない。そこで一人の小さな男の子の手を借りて、真昼の暑さのなかで仕事に取りかかった。会場のあちこちに、三×三・六メートルほどの小さな天幕が十張りあった。立ててあるものもあれば、まだ袋に入ったままのものもあった。私たちはそれを一つずつ運び、柱に掛けて立て、布を張って杭を打ち、柱と柱を縛り合わせて、まっすぐ一列に並べた。すると、長さ三十メートル、幅三・六メートルほどの一張りの長い天幕のように見えた。（それがどんな格好だったか、想像していただけるだろうか。）それから椅子を運び込んだ。そのころには人々がやって来始めていて、みな手伝ってくれた。

主は私たちの骨折りを、なんと祝福してくださったことか。この天幕はとても低かったので、風も倒すことができなかった。魂が次々と御国に招き入れられた。多くの人が踊り、神の力に打たれて震え、聖霊を受けた。

ケープコッドのオンセット・ベイから来て集会に出ていた二人の姉妹が、天幕をそちらへ送ってほしいと私たちに頼んだ。私たちはプロビデンスでの経験にもひるまず、天幕を送った。それ以来、自分たちで天幕を下ろしたことは何度かある。けれども、その日から今日まで、風に天幕を倒されたことは一度もない。

オンセットへ行く前に、マサチューセッツ州のモントウェイトのキャンプ場で短い集会を開いた。主は祝福に満ちて御霊を注ぎ、飢え渇いた魂を救い、バプテスマを授けてくださった。敵はなおも私の信仰を試し、私を働きから引き戻そうとしていた。けれども神に感謝する。一人で貫き通さなければならないことが何度もあったが、私の足はすべらないように守られた。モントウェイトでの集会がほとんど終わるころ、主はロードアイランド州プロビデンスにいる夫に、三度の夢で語りかけられた。勤めていた工場での世の仕事をやめて、天幕の働きで私を助けに来るように、と召されたのである。

オンセット・ベイ

オンセットでは、新しい天幕をホーリネスのキャンプ場に張った。戦いは激しかったが、イエスが勝利をくださった。心霊術やクリスチャン・サイエンスや悪霊の力との戦いは、激しく厳しかった。けれども私たちは、イエスの血を歌い、宣べ伝えた。そしてついに突破口が開け、主が御霊を注いでくださった。

ニューヨーク州ロングアイランドのコロナ

まだオンセットにいるころから、主は私にコロナのことを語り始められた。祈っていると、何度も「コロナ」という言葉を私の前に示された。私は主にタイプライターを求めていた。それで、その言葉が耳の中で鳴り続けるのは、主がコロナ印のタイプライターをくださるからだと思っていた。ところが、一通の手紙が郵便で届いた。愛する黒人の姉妹からだった。ロングアイランドのコロナ（ニューヨーク市のすぐ外）に私たちを招いて集会を開くよう、主がじきじきに導かれた、と書いてあった。主がしるしを与えてくださり、これこそ主が語っておられたことだとわかって、私の霊は内側で燃え立った。

東部は、もう天幕集会には寒すぎる季節になっていた。そこで私たちは、冬の伝道ができるほど暖かいフロリダへ天幕を送る費用を備えてくださるよう、主に求めた。そして、そのために祈り続けながら、コロナへ向かった。

着いたばかりのころ、そこはひどく気落ちのする伝道地に思えた。使徒行伝二章四節のとおりに聖霊のバプテスマを受けたと知られている人は、この尊い黒人の姉妹のほかに一人もいなかった。何ブロックも歩き回ったが、借りられる会館は一つも見つからなかった。けれども私は祈り続けた。ほかの人はみな私の召しを疑ったが、神が私を遣わされたことを、私は知っていた。ついにスウェーデン人の教会から、週日にそこで集会を開いてもかまわない、という知らせが来た。

二日目の夜、教会は戸口までいっぱいになった。教会の信徒たちは、自分の牧師から、ペンテコステの人々には近づくな、異言で話す連中とはかかわるな、と警告されていたのにである。集会を始めた日からちょうど一週間で、突破口が開けた。最初にバプテスマを受けたのは、ある大きな教会の日曜学校の教師だった。確かなキリスト者として、長年知られてきた人である。二人目は町の有力者の妻だった。そして祭壇への招きをすると、会衆の中から何十人もが祭壇の周りに集まった。会衆はみな、教会の信徒だった。

この人たちはペンテコステの集会を見たことがなかった。それでとても堅苦しく、どうすれば本当に主にすがって求められるのかを知らなかった。けれども、これはみな催眠術だと牧師たちから警告されていることを、私は知っていた。それで、求める人たちに手を置いたり話しかけたりしないよう、細心の注意を払い、自分の椅子のそばで熱心に祈った。

「ああ、主よ、力を送ってください。主よ、今こそ、あなたのみことばのとおりにしてください」

すると、祭壇から立ち上がって会衆席に戻っていたジョン・レイク夫人が、突然、神の力に打たれて倒れ、夫の肩に頭をもたせかけた。人々は驚いて言った。

「気を失ったんだ。走って水を取ってきて」けれども私には、彼女が気を失ったのではないことがわかっていた。それで祈り続けた。

「主よ、力を送ってください。今、この人にバプテスマを授けてください」

彼女の周りにはかなりの人だかりができていた。けれども、水を持って戻るより先に、主をほめたたえよ、彼女の胸が神の力で大きく波打ち始め、あごが震え始めた。そして彼女は他国の言葉で語り出し、みなを驚かせ、喜ばせた。

彼女は語りに語った。とても澄んだ、美しい言葉だった。その顔は主の栄光に輝いていた。人々は互いに言い合った。

「どう思いますか」すると、ほかの人たちが言った。

「ああ、なんてすばらしい、不思議なことでしょう。私も同じ経験ができたら、どんなにいいか！」

よく知られたこの姉妹がバプテスマを受けたという知らせは、たちまち町じゅうに広まった。次の夜には三人が神の力に打たれて倒れ、異言で語るまでに至った。こうして集会は、夜ごとに力も人数も実りも増していった。

その教会で一週間説教したあと、W・K・ボウトン牧師が、木曜の夜に自分の教会で説教するよう私たちを招いてくれた。（牧師は自分の教会の人たちに、私たちの集会に近づくなと警告しておきながら、自分では来ていたのである。）

主は牧師に、自分にも自分の教会にも、もっと深いものがまだあるという真理を悟らせておられた。

その教会で語る夜、私は主に願わなければならなかった。私の後ろの壇上に座っている、よそから来た牧師たちを恐れたり、その威厳に気おされたりしないようにしてください。みことばを宣べ伝える自由と力をお与えください、と。そして主は、決して期待を裏切ることのないかたである。主は私たちの弱さを覚えていてくださる。御名をほめたたえよ。

私が語っていると、教会じゅうから心のこもった「アーメン」や「ハレルヤ」の声が上がった。この教会には二度と呼ばれないかもしれない。だから、せめて一度はここで、妥協も恐れもなく真理を宣べ伝えなければならない、と私は感じた。語り終えると、私は自分の席に着いた。人の教会で、出すぎて祭壇への招きをするつもりはなかった。

牧師が立ち上がって言った。

「マクファーソン姉妹の話は真理だと信じ、聖書のとおりの聖霊のバプテスマをまだ受けていないと感じ、この経験を受けたいと願う人は、どれくらいいますか。手を上げてください」

人の話では、教会じゅうの手が一つ残らず上がったそうである。（私の目は喜びの涙でいっぱいで、本当のところはわからなかった。）

人々は席を立ち、通路をどっと進んできた。聖壇の手すりをすっかり取り囲み、聖壇の中にも、説教壇のすぐ後ろにも集まった。そして、座席のあいだでも、教会じゅうどこででも、聖霊のバプテスマを求めて祈った。なんと栄光に満ちた光景だったことか！　この教会は、音楽会や夕食会や世俗の娯楽から清く守られてきた。献身した牧師を通して、人々は、御霊の力の満ちあふれる中へ今にも押し流されようとするところまで、導かれていたのである。

その夜は三人がバプテスマを受けた。一人の婦人はオルガンのそばで倒れ、もう一人は教会の反対側で倒れた。それから、一年以上も口をきかない間柄だった二人の兄弟が、教会の真ん中で話し合っているのが見えた。一人が目に涙を浮かべて、もう一人にゆるしを請うたのである。すると、ゆるしを請うた兄弟はたちまち聖霊の力に打たれて、相手の腕の中にあおむけに倒れた。相手の兄弟は驚いて、彼を床に横たえた。

あの愛する教会の光景は、天国に行くまでは言い表せないと思う。だれかが神の力に打たれて倒れるたびに、人々は教会のそちら側へ走って行った。反対側でだれかが倒れると、向きを変えてそちらへ行った。何もかもが、まったく新しく不思議なことだった。

けれども牧師は、ほかの人たちのように走って見に行きはしなかった。説教壇のそばにひざまずき、両手で顔を覆っていた。そしてときどき指のあいだからのぞいて、成り行きを見張っていた。（のちに牧師がバプテスマを受けてから、いっしょにこのことを笑い合った。私は牧師に言った。あなたは『目をさまして祈っていなさい』（マタイ二六・四一）という聖句を、「見張りながら祈りなさい」という意味で信じておられたようですね、と。）牧師は神の力を慕い求めて

いた。それでいて、自分の教会の人たちが混乱と誤りに導かれはしないかと、無理もないことだが恐れてもいた。

神の力が人々の愛する者を打ち倒すのを見て、人々は口々に問い、興奮していた。それを見て、敵がささやいた。

「さあ、これでもう、この教会に二度と招かれることはないぞ。あの緑のじゅうたんの上に、神の力に打たれて長々と横たわった者など、これまで一人もいなかったのだ。おまえは二度とここに呼ばれはしない」

『信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか』（マタイ一四・三一）。

真夜中、集会が少しずつ散り始めたころ、牧師が私の腕に触れて言った。

「姉妹、役員たちと話し合いました。この教会は、あなたがお望みのあいだ、お望みのときにお使いください。次の集会はいつにしましょうか」

「明日の夜に」と私は答えた。

次の夜、教会は戸口までいっぱいになったばかりか、小礼拝室も日曜学校の部屋も人で埋まった。この夜は七人がバプテスマを受けた。牧師は私に、バプテスマの聖書的なしるし、つまり御霊が語らせるままに他国の言葉で語ることについて説教するように頼んだ。そして、何事もまったく自由にしてよいと言った。

祭壇での祈りのあいだ、牧師はひざまずいて、ときどき指のあいだからのぞいていた。威厳のある自分の会衆の中で、不思議な出来事が起こっていたのである。罪人たちは心を砕かれ、泣きながらイエスの足もとに来た。プロテスタントもカトリックも同じだった。あまりに激しく祈り、主の名を呼び求めるので、治安を乱したとして人々が逮捕されるのではないかと、牧師は心配した。

三日目の夜には十九人が聖霊のバプテスマを受けた。座席のあいだで、通路で、聖壇の手すりの前で、壇上で、人々は右に左に倒れていった。ああ、栄光あれ！

ある夜、バプテスマを受けようとしている若い婦人といっしょに祈っていたとき、見ていた牧師とふと目が合った。私は、本当に見聞きできる所まで来るよう、手招きした。牧師はその若い婦人のそばにひざまずいた。彼女が献身的なキリスト者の働き手であることを、牧師はよく知っていた。まもなく、彼女が御霊に満たされ、他国の言葉で語り出して主を賛美すると、その顔が天の栄光に包まれるのを、牧師は見た。見て聞いているうちに、兄弟の顔に、何かを慕い求める表情が浮かんだ。そして一言も言わずに説教壇へ回ってひざまずき、目を閉じて両手を上げ、祈り始めた。

「ああ、主よ、私を満たしてください。ああ、主よ、私を満たしてください」

牧師は主の前に、真剣に、へりくだって、この素朴な祈りを何度も何度も繰り返した。御霊は、行って彼のために祈るよう、私に繰り返し示された。私は自分がふさわしくないと感じて、初めはためらった。けれども、ついに行って彼の後ろにひざまずき、彼と同じように素朴に祈り始めた。

「主よ、この人を満たしてください」

「主よ、私を満たしてください」と牧師は叫び続けた。

「主よ、この人を満たしてください」それが、私の魂を満たしていた祈りだった。

どれほど長くこうして祈り続けたのかはわからない。けれども、目を開けたとき、あまりにもすばらしくて信じられないほどだったことは、よく覚えている。牧師は体を左右に揺らしていた。そして、まもなく神の力に打たれてあおむけに倒れ、小さな段から転がり落ちた。そして、聖壇の手すりのすぐ内側で、主の栄光に満ちた力のもとに横たわった。

会衆席に座っていた牧師の妻に、だれかが話しかけて言った。

「まあ、ウィリアムさんが倒れたわ！」

これには彼女も耐えられなかった。ひと跳びで通路に出ると、前へ走って行き、すすり泣きながらすがるように言った。

「ああ、ウィル、ウィル、何か言って。何か言ってちょうだい」

私は彼女のそばにひざまずき、この愛する牧師にバプテスマを授けてくださるよう、力のかぎり主に祈っていた。それは教会全体にとって、いや町全体にとって、大きな意味を持つことだった。彼女が牧師のじゃまをしてはいけないと心配して、私は言った。

「まあ、あなた、神の力のもとにいるご主人のじゃまを、まさかなさりはしないでしょうね」

「ああ、でもあの人は死にかけているのよ。死にかけているの！」と彼女は泣き叫んだ。「死んでしまうに決まっているわ！」

「いいえ、死にかけてなんかいませんよ」と私は急いで説明した。「これは聖霊の力なのです。ご主人はイエスの御腕に安らかに抱かれています。少し見ていてごらんなさい。きっと聖霊を受けられますから」

「ああ、でも死にかけているに決まっているわ！　前にも一度幻を見て、そのときも死にかけたのよ。ウィル、ウィル、何か言って」と彼女は懇願した。

これ以上彼女を引き止めておけたかどうか、わからない。会衆は息をのんで幾重にも輪になり、聖壇の手すりから身を乗り出していた。前の人の肩越しに見ようと、座席の上に立つ人までいた。けれども、まさにその張りつめた瞬間に、W・K・ボウトン牧師は祝福に満ちた聖霊に満たされた。そして、澄んだはっきりした他国の言葉で語り始めた。主はその解き明かしを、メッセージの一つ一つについて私に与えてくださった。

会衆のあちこちで、人々が床に倒れた。屈強な男たちが赤ん坊のようにすすり泣いた。ついに牧師は立ち上がると、壇上を行ったり来たりしながら言った。

「ああ、みなさん、私は説教しないではいられない！」そして、聖霊の霊感を受けて本当に説教した。「これこそ預言されていたこと」だと人々に語り、御霊に満たされよ、あかりに油を用意して主の来臨に備えよ、と命じたのである。

それに続く二週間のうちに、説教壇から戸口まで、会衆のほとんど全員が聖霊のバプテスマを受け、他国の言葉で語った。ほかの教会から来た信徒たちもそうだった。

役員たちも、一人を除いて全員がバプテスマを受けた。この一人は、しばらく距離を置いて、こう言っていた。

「いや、こんなに騒いだり叫んだり、神の力に打たれて倒れたりするのが必要だとは思えません。聖霊は信じますが、こんなふうに叫んだり異言で話したりするのは信じません」

「では、兄弟、今は全部わからなくてもかまいませんから、後ろの席に座っていないで、祭壇に来てください。イエスをもっと求めるのはかまわないと、お思いでしょう」

「ああ、それはいいですとも。主をもっと求めましょう」と彼は答えた。そして、ほかの人たちといっしょに祭壇に着いた。

ほんの数分後のことだった。私たちは求める人たちといっしょに祈っていた。天から吹きつける疾風の、激しい風のもとで、人々は一人また一人と倒れていった。そのとき、大きな叫び声が聞こえ、何かがどしんと床を打った。

この大きなどよめきがどこから聞こえてくるのかと、できるだけ急いでその場所へ行ってみた。するとその出どころは、ほかでもない、あの役員だった。ついさっき、こんな騒ぎや叫び声は必要ないと言い切った人である。教会じゅうで、この人ほど大きな声を出していた人はいなかったと思う。彼は頭から足まで震えていた。かかとは床を太鼓のように打ち鳴らしていた。御霊が語らせるままに、彼は他国の言葉でまさに大声を張り上げ、とどろかせていた。その顔は喜びと栄光に満ちていた。

異言で語る必要などないと思っていた一人の兄弟は、満たされたあと何時間も語り続けた。私が帰ろうとして歩道に出ると、彼がやって来て、神の力に打たれて震えながら言った。

「マ、マ、マクファーソン姉妹、ぼ、ぼ、僕はまた、え、え、英語で話せるように、な、なるんでしょうか」そしてまた他国の言葉で語り出した。ああ、ハレルヤ！　いちばん疑っていた人が、いちばん大きなバプテスマを受けることがある。騒ぎを嫌っていた人が、この昔ながらの力を受けると、だれよりも大きな声を出すのである。

多くの病んだ体がいやされた。カトリックの家の娘である一人の若い婦人が、タクシーで教会に運ばれ、松葉杖をついてよろよろと入って来た。リウマチで体が不自由になり、両手を上げることも、こわばった肩の関節を動かすこともできなかった。

次に掲げるのは、私たちの月刊誌『ブライダル・コール』に載せるために彼女が書いた証しである。

いやしの証し

この六年間、私は「関節リウマチ」と呼ばれる、最もひどい部類のリウマチに苦しんできました。けれども神をほめたたえます。神が私をいやしてくださいま

した。四年間、私は松葉杖を使わなければなりませんでした。こわばりは、関節の一つ一つを少しずつ締めつけていきました。去年の十二月まで、私は自分で体を洗うことも着替えることもできませんでした。だれかが手を貸そうとしてくれるだけで、痛みに泣いてうめきました。あごもひどくこわばり、食べ物をとても小さくちぎらなければ、一口も口に入れられないほどでした。けれども神をほめたたえます。「イエスに栄光あれ」と言えるようになってから、あごのこわばりはすっかり消えました。愛するマクファーソン姉妹がコロナのフリー・ゴスペル教会に来られてから、私は一度も松葉杖を使っていません。姉妹の祈りが、その教会の愛する人たちの祈りとともに聞かれたのです。イエスに栄光あれ。私は聖霊と火のバプテスマを受けました。

私は日ごとに力を増しています。今では洗濯も、アイロンかけも、掃除も、ミシンかけもできます。母がどうしても家を空けなければならない日には、二度の食事を作ります。今日、コロナにペンテコステの教会があることを、神に感謝します。また、神が私たちのただ中に、愛する牧師ボウトン兄弟を置いてくださったことを感謝します。兄弟は、いつでも喜んで私たちの主に仕え、自分の群れを「狭く細い道」に導いてくださいます。（署名）ルイーズ・メスニック

この教会で日々働きが進んでいる、そのすばらしいありさまを描こうとは思わない。ボウトン兄弟が、自分のことを少し書いている。第二部の第二章を見ていただきたい。

ここでの働きがこうしてみごとに進んでいたので、主は私たちに、フロリダへの旅を始めるときが来たと告げられた。私たちは、まもなく出発することを人々に知らせた。天幕を送り、旅費を払う費用を主に求めていることは、だれにも話さなかった。けれども集会の最後の夜、ボウトン兄弟がテーブルを出して、私たちのために献金を募ろうとしていた。ところが、そのとき歌っていた歌が終わらないうちに、また兄弟が献金を呼びかける間もないうちに、人々が動き出した。通路を一人また一人と進んできて、開いた聖書の上に献金を置いていったのである。

主は、この愛する聖徒たちを通して、ちょうど必要な額を送ってくださった。私たちは、貧しい人々のあいだで説教し、ペンテコステのメッセージをまだ聞いていない人々のところへ行くように召されている、と説明した。すると人々は、貧しい人たちに配る衣類を一箱、できるだけ早く送ると約束してくれた。

コロナとそこの愛する聖徒たち、そこで私たちが味わった尊い経験は、決して忘れられることはないだろう。

第十三章　天幕に住むよう召されて

フロリダの天幕伝道（一九一七年）

『わたしは（中略）家に住まわず、天幕から天幕に、幕屋から幕屋に移ったのである』（第一歴代一七・五）

フロリダで最初の天幕集会は、南部の奥への玄関口であるジャクソンビルで開いた。町の中心にある一区画の土地を、無償で貸してもらえた。私たちはすぐに仕事に取りかかった。天幕を立て、材木を買って座席と壇を作り、明かりを取り付けた。どの天幕集会にも欠かせない準備である。集会の始まる二十四時間ほど前には、すべての用意が整っていた。最後の勘定も払い、ピアノも運び込んだ。手もとに残ったのは五セントだった。ちょうど必要なだけを主がご存じで、与えてくださったことが、私たちにはどんなにうれしかったことか。

神のこのすばらしい備えについてまだ話していると、貧しい年老いた黒人の婦人が入って来た。自分と子供たちのために、服かお金か食べ物を恵んでほしいというのである。あげられる食べ物がなくて本当に申し訳ない、と私たちは言った（私たち自身、集会が始まって献金が入るまでは断食するつもりだった）。服も今はなかった。けれども、残っていた五セントを彼女にあげた。

彼女が帰ってまもなく、一台の自動車が天幕の前に止まった。ジョージア州アトランタから来た働き手たちが乗っていた。彼らはおなかをすかせていて、すぐにでも夕食をとりたがっていた。お金も食べ物もないとは言いたくなかったので、私はそっと自分の天幕に入り、ひざまずいてそのことを主に申し上げた。

「ああ、主よ、明日集会が始まるまで私たちが断食して祈ることがあなたのお望みなら、アーメン、そのとおりにいたします。けれども、この人たちに出すものを私が持つことがお望みなら、どうか食べ物を備えてください」

立ち上がると、天幕の前の通りで、男の人の太い、しわがれた声がした。

「どうどう、止まれ！」

男の人は荷馬車から飛び降りると、にこにこしながら入って来た。腕に抱えた箱には『送料前払い』と書いてあった。彼はそれを地面に下ろして言った。

「えらく重たい箱だね。この線のところに署名を頼みますよ」そして帰って行った。

「まあ、コロナの聖徒たちが、貧しい人たちのために送ると約束してくれた服の箱だわ。これで、あの愛する年老いた黒人の婦人と子供たちに、服をあげられる」そんな思いが、うれしく私の頭にひらめいた。そのため、夕食のことはしばらく忘れてしまった。

金づちを取りに走り、箱のふたをこじ開けた。思ったとおり、コートがあり、服も何着かあった。コートがとても重かったので、試しに振ってみた。すると、袖とポケットから、とうもろこしやえんどう豆や鮭の缶詰と、クラッカーが一箱転がり出てきた。さらに箱の中を探すと、オートミールや砂糖や練乳など、夕食に必要なものがほとんど何もかも出てきた。ああ、イエスに栄光あれ！

主の子供たちが、財布も袋も持たずに出かけ、何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと思いわずらわないとする（ルカ一〇・四、マタイ六・三一）。そのとき主がどんなにすばらしく備えてくださるか、これはそのほんの一例である。主は私たちの夕食を、ロングアイランドのコロナからフロリダのジャクソンビルまで、はるばる送ってくださった。しかも、時刻もぴったりに届けてくださった。ちょうど六時の鐘が鳴っていたのである。主は決して遅れられない。ああ、主が時間どおりに来られるのが、うれしくはないだろうか。愛するみなさん、主は再び来られるときも、時間どおりに来られる。まもなく天の床が巻き上げられ、主が現れてくださる。

町にある二つのペンテコステ伝道所が、私たちと手を組んでくれた。天幕集会は大勢の人を迎えて始まり、人の数は日に日に増えていった。祭壇は何度も、救

いとバプテスマといやしを求める人たちでいっぱいになった。そして主は、飢えている者を空腹のまま帰らせはされなかった。

ここに集まった旅行者たちは、合衆国のほとんどすべての州から来ていた。多くの人が、聖霊の力を見て、また感じて、驚いた。異言のメッセージとその解き明かし、天からの音楽と歌声を聞いた。聖徒たちが祭壇で神の力に打たれてひれ伏し、バプテスマを受け、生まれてから一度も学んだことのない言葉で語るのを見た。

一人の兄弟はヘブライ語で語った。その場にいたヘブライ語の学者が、それを聞いて理解した。ハレルヤ！

二人の若い男の人がいやされた。一人は腕の骨が三か所で折れ、手首が脱臼していた。もう一人は手の骨が折れていた。二人とも会衆の前でギプスと添え木を外し、自分たちが全身すっかり丈夫にされたことを、みなに納得させた。ある姉妹は、がんをたちどころにいやされた。

（注）一九一七年と一九一八年に開いた、出来事に満ちた多くの集会のことを、記憶をたよりに書くのは難しい。そこで、ペンテコステ派の新聞に載った報告から、いくつかの段落を選んで載せる。

タンパのキャンプ集会（一九一七年）

イエスに栄光あれ！　栄光あれ！　遠く北のほうでも、私たちが叫び、主を賛美する声が、ほとんど聞こえるにちがいないと思う。私たちには、なんとすばらしい救い主がおられることか。主は知者をはずかしめるために愚かな者を選び、強い者を敗走させるために弱い者を選ばれた（第一コリント一・二七）。主はその力ある御腕をあらわしておられる（イザヤ五二・一〇）。主はご自分の民を選り分けておられる。そうだ、民の中から一つの民を呼び出しておられるのである。御名がほめたたえられるように！

主はタンパで祝福してくださっている。集会は人数も力も着実に増してきた。昨夜は天幕のいちばん奥の隅までぎっしり埋まり、多くの人が立ち、さらに多くの人が入れずに帰った。

この集まりは、またとない状況のもとで開かれた。この国は苦難の暗雲の下にあり、戦争の瀬戸際に立っている。旅行者たちは、イエスがまもなく来られることと、後の雨として御霊が注がれることを、初めて聞いた。多くの人が喜んでメッセージを受け入れ、バプテスマを受けた。そして、自分の町や都市に帰って真理を告げ知らせる、と言った。ミネアポリスから来た一家族が全員、同じ夜にバプテスマを受けた。

神の力が下ると、会衆は大きな驚きに満たされる。多くの人が神の力に打たれて倒れ、異言で語り、預言し、解き明かしをし始めた。

ある婦人は、祭壇まで行く時間がなかった。立ち上がったとたんに神の力が下り、通路にたどり着く前に、歩いているうちに主が彼女にバプテスマを授けられた。最初の一文は、こう解き明かされた。「イエスはまもなく来る、まもなく来る。備えよ」

罪人たちはあわれみを求めて叫び、促されなくても祭壇に来た。若い人も年寄りも、パイプや紙巻きたばこや刻みたばこやトランプを取り出して置いて行き、顔を輝かせて帰って行った。

一人の兄弟は、何年もキリスト者だと言い、教会の信徒でもあったが、救いを受けていなかった。神の力が下ると、彼は人々の前で罪を告白した。そして祭壇に駆け寄り、ビールもたばこも、ほかの多くのものも捨てた。年老いていたが、それまで味わったことのない喜びに満たされて、踊り、叫び、泣いた。近所の人たちはたいへん驚いた。彼は天幕の真向かいの美しい家に住んでいるのである。これは働きのためのすばらしい機会である。イエスが地上に戻って来られる直前の今、この国全体が、何かはわからないものを、息をひそめて待っている。そして私たちには、主が切に願われる声が聞こえる。「急げ！　みことばを宣べ伝えよ。イエスはまもなく来るのだから」

主は私たちに福音自動車を与えてくださった。これを使って、一日に八回から十回の集会を開くことができる。何千枚もの伝道文書とちらしを配り、天幕集会を知らせる大きな看板を載せて回っている。

デュラントのプレザント・グローブのキャンプ集会

デュラントはタンパから二十マイル離れていて、ここの人々の多くはとても貧しい。読み書きのできない人もいる。けれども、なんと神に飢えていることか。昨日は、周り三十マイルから乗って来た人たちの馬や荷馬車や自動車で、会場が埋め尽くされた。主は魂を救い、バプテスマを授け、病人をいやしておられる。異言のメッセージがあり、解き明かしがある。祭壇での祈りのあいだ、人々が前へ押し寄せて来て、ベンチの上につま先立ちで立ち、不思議な光景を見ようとする。男も女も神の大いなる力に打たれて倒れ、御霊に満たされて異言で語っている。それは見るもすばらしい光景である。

セント・ピーターズバーグ

フロリダ州セント・ピーターズバーグから、勝利の叫びを一言送る。ペンテコステが一度も宣べ伝えられたことのない、悪の町である。

私たちの集会が始まったとき、大きな祭りの最中だった。人々は歩道のそばのテーブルでトランプをし、賭け事をしている。公園と市役所の脇の通りは、夜になると綱で仕切られて踊り場になった。楽隊が演奏すると、人々は仮面をつけ、仮装して、公道で踊った。

私たちの雪のように白い天幕は、場所もよく、人を引きつけるようにやしの葉や花で飾ってあった。けれども、これほど世俗的な群衆を呼び寄せるには、まるで力不足だった。私は通りに立ってちらしや伝道文書を配りながら、パレードで次々と通り過ぎていく自動車や乗り物の長い列を眺めていた。この週は謝肉祭のようなもので、車は持ち主の州や商売を表すように飾られていた。

突然、主が私に語りかけて言われた。「あなたの車を飾り、パレードに加われ！」初めは、そんなことはできないように思えた。飾りつけには、きっとたいへんなお金がかかるにちがいない。けれども主は、どうすればよいかを示してくださった。私たちは、ちょうど天幕の形をした木の枠を作った。それから白いシーツを一枚取り（それは私たちの天幕暮らしでのぜいたく品の一つだった）、その枠にかぶせて、小さな天幕を作った。張り綱にはひもを、杭には大きな釘を使った。小さな天幕の一方の側には、次の言葉を書いた。

『イエスはまもなく来られる』反対側には『イエスは救ってくださる』、もう一つの側には、

『私はペンテコステのキャンプ集会に行きます。あなたも行きますか』

福音自動車の幌を下ろし、長さ二メートル、幅一・五メートルほどのその小さな天幕を持ち上げて、運転手の席だけを空けるように車にかぶせた。車も、やしの葉や、道すがら摘んだ野の花で飾り、薄紙の吹き流しで結んだ。

私は小さなオルガンを天幕の中に隠し、その下に座って、群衆から見えないようにした。主は警官の目を閉ざしてくださった。それで、私たちは車の大パレードにそっと入り込み、宣伝を載せたまま大通りを端から端まで通ることができた。天幕集会に会衆を集めなければならなかった。たとえ旗をなびかせて敵の領地へ乗り出してでも、魂を救う私たちの商売を宣伝しなければならなかったのである。

次の朝早く、私たちはほかの車といっしょに列に並んだ。吹奏楽団が通って行った。酒屋も、電話会社も、小麦商も、花屋も、自分の商売を宣伝していた。肉屋もパン屋も、それぞれの州を代表する旅行者たちも、みな車を登録して参加していた。私たちがそっと入り込む番が来ると、警官は背を向けていた。そして、後ろ手に私たちに来いと合図をしながら、反対側から来る車を手で止めていた。それで私たちは入って行った。楽団からは十分に離れていたので、私たちの小さなオルガンとチャイムの音がはっきりと聞こえた。奏でていたのは、次の賛美歌である。

「ありのままで、何の申し開きもなく、
ただ、あなたの血が私のために流されたことを頼みとして」

ほかにも、次のようなよく知られた賛美歌を奏でた。

「ああ、備えよ、ああ、備えよ、さばきの日のために」

「あなたのために祈っている、
あなたのために私は祈っている」

何千もの人々が長い通りの両側に並び、窓から身を乗り出し、屋根の上に立っていた。人々は初め、驚いて目を見張った。けれどもそれから笑い出し、手をたたいて歓声を上げた。その夜、天幕はぎっしり埋まった。それからは、人を集めるのに苦労することはもうなかった。罪人は救われ、信者はバプテスマを受けた。救世軍は自分たちの兵営を閉め、太鼓や楽器を持って、私たちといっしょに働きに来てくれた。

（注）働きは続いているか。この集会から二年たった今も、ジャクソンビルやタンパやセント・ピーターズバーグから手紙が届いている。これらの集会のあいだに救われ、バプテスマを受けた人たちからである。今日まで堅く立ち、主とともにますます深く進んでいる、と書いてある。

ジョージア州サバンナ

この大きな都市には、何千、何万もの生きた魂がいるのに、ペンテコステの伝道所が一つもなく、後の雨のメッセージを聞いたこともない。この都市のことが、私たちの心に重くのしかかってきた。

幕屋と天幕と野営の道具は鉄道で送った。軍需品の輸送のために、貨物便は麻痺していた。それで私たちは荷に手を置いて、まっすぐ届けてくださるよう主に願った。私たち自身は、働き手と伝道文書を載せて福音自動車で旅をした。天幕は、私たちとほとんど同時に着いた。主は、無償で貸してもらえる一区画の土地へ、まっすぐ導いてくださった。最初の夜、何人かが救いを求めて前に出た。二日目の夜、最初の夜に救われた人の一人がバプテスマを受けた。これほど飢え渇き、ひたむきに真剣な人々を、私たちは見たことがない。私たちはとどまることはできないが、伝道所を開くことにした。ベンチと備品はここに残し、フロリダ州デュラントのスウィフト姉妹に託す。働き手として車に乗せて連れてきた人で、夫といっしょに働きを世話してくれる。

綿畑で説教する

ジョージア州サバンナから、私たちは福音自動車でサウスカロライナ、ノースカロライナ、ケンタッキー、メリーランド、ニュージャージーを旅した。行く先々で説教し、何千枚もの伝道文書を配った。これは、比較的お金のかからない、人々に届く方法である。ほかのどんな方法でも届かない人々にも届くのである。

ペンテコステの伝道所から遠く離れた、綿畑やたばこ畑の地方の貧しい人々も、こうして伝道文書と証しを受け取っている。

夜になると、静かな野原や森の、小川のそばに車を乗り入れる。天幕を張り、たき火をおこし、野営用の簡易ベッドを広げて夜を過ごす。そして日の出とともに起きて、また天の父の仕事に励むのである。

次のキャンプ集会の地は、ニュージャージー州ロングブランチである。サバンナからそこまでの旅に、私たちの手もとには十八ドルしかなかった。けれども主は、その十八ドルか、ガソリンか、どちらかを伸ばしてくださった。目的地に着いたとき、まだお金が残っていたのである。

第十四章　ブライダル・コール

『この幻を書き、これを（中略）明らかにしるし、走りながらも、これを読みうるようにせよ』（ハバクク二・二）

ジョージア州サバンナにいたとき、私たちの月刊誌『ブライダル・コール』（花嫁への呼びかけ）の最初の号が刷り上がった。主はそれまで、そのような雑誌を編集することを、私の心に示し続けておられた。そして、主ご自身が『ブライダル・コール』という名を与えてくださった。表紙の図案も与えてくださった。主が雲のうちに現れ、御使たちがラッパを持っている図である。主は何度も何度も私に語られた。

『この幻を書き、これを明らかにしるし、走りながらも、これを読みうるようにせよ』（ハバクク二・二）

初め、私はためらって言った。

「ペンテコステの雑誌はたくさんあります。この仕事に時間と思いのすべてを注げる、もっと有能な書き手もいます。私には事務所もなく、とどまる町もありません。たくさんの集会を開き、福音自動車で旅をし、子供たちの母親の務めもあり、ほかにもいろいろあります。その私が雑誌を書いたり、雑誌の重荷を負ったりすることはできません」主は答えられた。

「わたしには、できないことは何もない」主は『ブライダル・コール』についての、ご自分の細かな計画を示してくださった。その雑誌のメッセージは、論争や争いのためのものであってはならず、大きな知恵や雄弁を示すものであってもならない。ただ、その名が表すとおり、天の花婿を迎える備えをするよう、花嫁に呼びかけるものでなければならない。それで、雑誌にどんな報告や証しやほかの記事を載せるにしても、三つの記事を欠かさないように努めている。救いの道を明らかにする記事、聖霊のバプテスマについての記事、主の来臨と主に会う備えについての記事である。

主はとてもはっきりと語られ、書くべき記事を与えてくださった。啓示があふれるように与えられたので、私は涙を流しながら、指をタイプライターのキーの上に走らせた。

サバンナでのキャンプ集会のあいだに、主は献身したF・A・ヘス兄弟に、数か月間の印刷を引き受けるよう命じられた。私たちからは何も頼んでいなかった。兄弟が請求したのは紙代だけだった。私たちは最初の号から、二千部に宛名を書き、無料で郵送した。のちに雑誌は、マサチューセッツ州フラミンガムで刷られるようになった。

新しい伝道地へと突き進み、ときには何千人もの会衆を迎えるなかで、私たちは何千もの新しい読者の名を得た。ペンテコステの文書がそれまで一度も届いたことのない、遠く離れた地方の人たちである。

『ブライダル・コール』は、二年のあいだ欠かさず発行されてきた。ほとんど毎日のように手紙が届く。この小さなつつましい愛の労苦、『ブライダル・コール』を通して起きたことの知らせである。人々が祝福され、救われ、バプテスマを受け、いやされ、喜びながら旅を続けている。雑誌を出すために、何時間も、しばしば夜遅くまで働かなければならなかった。けれども、これらの手紙は、注いできた骨折りのすべてを償って余りある。

主は今、私たちのためにブライダル・コール出版所を開いてくださっている。カリフォルニア州ロサンゼルスの町の中心、サウス・スプリング通り一二五番地である。また、主はここで一人の兄弟に、雑誌の印刷を任せてくださった。これで、決まった日にきちんと雑誌を送れるようになる。発行部数は驚くほど増えている。時はもう縮まっている。小羊の婚宴への最後の招きは、妨げられることなく、何倍にもなって出て行かなければならない。

読者のみなさんには、毎月、何部かをまとめて友人に送っていただきたい。その人たちも呼びかけを聞いて、主に会う備えができるようにである。今、私たち

は主が費用を備えてくださるのに応じて、毎月何千部もの雑誌と伝道文書と小冊子を送っている。送り先は、刑務所、施設、病院、それに苦労しながら続いている辺地の伝道所である。

国内でも有数の大きな刑務所の教誨師から、このような文書をもっと送ってほしいという手紙が来た。クリスチャン・サイエンスやニューソートはいらない。罪を犯した男女が神のもとに立ち返る助けになる、昔ながらの福音がほしい、というのである。神が『ブライダル・コール』を、はしごとしてくださるように。多くの人がそれを登って、いのちと望みと天国に至るように。どうか私たちとともに祈っていただきたい。囚人たちから届く手紙は、とても哀れなものである。

神に感謝する。このような特権と機会にふさわしいとされるとは、なんとすばらしいことか。このような働きは、費用が足りないからといって、切り詰められてはならない。何千部でも送れる扉が、たくさん開かれている。悪魔の文書は惜しみなく出回っている。主が私たちの心に示される飢えた人々みなに、この『ブライダル・コール』を送る費用を、主は備えてくださると信じている。関心のあるかたは、「編集者」あてに直接お便りをいただきたい。

第十五章　東部の夏の天幕伝道（一九一七年）

ニュージャージー州ロングブランチへの召し

『主なる神の霊がわたしに臨んだ。これは主がわたしに油を注いで、貧しい者に福音を宣べ伝えることをゆだね、わたしをつかわして心のいためる者をいやし、捕われ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げ、主の恵みの年とわれわれの神の報復の日とを告げさせ、また、すべての悲しむ者を慰め、（中略）灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与えさせるためである』（イザヤ六一・一～三）

私たちがロングブランチへ行くことについて主がしるしを与えてくださったのは、ジョージア州サバンナにいたときだった。私は、主がじかに導いてくださるのを待ち望んでいた。祈る私の前には、何通もの手紙が広げてあった。どれも、どこかの町へ来てほしいという招きだった。

「ああ、主よ、あなたの望まれるとおりに私を導いてください。どんなことでも、私たちが御心から、またあなたが私たちを置こうとされる場所から、一歩もそれないようにしてください。ニュージャージー州ロングブランチからのこの招きについては、私の魂のうちにしるしがあるように思えます。主よ、もしこれがあなたから出たものなら、何かの方法で私に語ってください。そうでないなら、私から取り去ってください。その町のことや人口のことなどを、もっと知ることができたらいいのですが」

そう言っていると、ニューヨークの新聞がひと吹きの風に巻き上げられて、天幕を横切って飛んで来た。私はなおも、ロングブランチについて導き、語ってくださるよう主に祈っていた。そうしながら、かがんで、何気なくその新聞を拾い、ひざの上で広げて伸ばした。すると、驚いたことに、紙面の半分ほどにわたる大きな文字の広告が目に飛び込んできた。『ニュージャージー州ロングブランチへぜひお出かけを』

その広告の下には、その町のこと、宿のこと、人口のことなどが詳しく書いてあった。そして最後は、目立つ文字でこう結んであった。『今すぐニュージャージー州ロングブランチに、行くと手紙を書こう』

このニューヨークの新聞が、はるばるジョージア州サバンナのこんな所まで来ていたのである。それが天幕の中に運ばれ、ちょうどこの箇所を開いて私の足もとに届いたとは、なんとすばらしいことか。主は私の上に力を臨ませ、これはただの偶然ではなく、主が導いておられるもう一つのしるしなのだと、あかしてくださった。

（報告の切り抜きとメモを縮めたもの）

ロングブランチに祝福の雨が降り注いでいる。ここでは七人の小さな群れが、何年ものあいだ、信仰復興と御霊の注ぎを求めて祈ってきた。W・マーティン兄弟夫妻が会場を用意してくれていたので、まもなく天幕が立ち、主の栄光で満たされた。

ほかの町や都市から働き手や求める人たちが集まり、人の数は日ごとに増えている。日曜日には、入りきれずに帰る人もいる。多くの人が聖霊のバプテスマを受け、何十人もが救いを求めて祭壇に来た。神は一人残らず、どの人にも出会ってくださっている。教会から出てきてバプテスマを受け、主とともに尊い歩みを続けている人も何人かいる。私たちは毎日、福音自動車で出かける。車の一方の側には大きな字で『イエスはまもなく来られる』、もう一方には『あなたはどこで永遠を過ごすのか』と書いてある。毎日二十マイルから三十マイルの地域を回って、伝道文書を配り、路傍集会を開き、集会を知らせている。

海辺で水のバプテスマ式をしていると、主の力が下った。バプテスマを受ける人たちは水の中で跳び上がり、踊り、叫んだ。見物の人たちは岸で泣き、主を賛美した。

若い人たちの多くが、すばらしい、心を奮い立たせる幻を見た。私たちの罪のために十字架にかかっておられる救い主を見た人もいた。また、待ち望む民を引き上げるために主が雲のうちに下って来られるのを見た人もいた。

驚くべきいやしがたくさんあった。そのうちの一つを話そう。ある説教者が、主が昔のようにいやしてくださるとは信じないまま、松葉杖をついてやって来た。祈りにこたえて、神は集会の最中に、たちどころに彼をいやされた。彼は松葉杖なしで天幕の中を踊り回り、叫んだ。「なんと、主は今もいやしてくださる！　昔のようにいやしてくださるんだ！」

彼の妻はうれしさのあまり、通路を行ったり来たりして走り、壇上にまで駆け上がって来た。そして私の手を握り、私をいっしょに壇上で踊らせた。人々の叫ぶ声で、しばらくは集会を続けることができなかった。

マサチューセッツ州ボストンのハイド・パークのキャンプ集会

輸送禁止令が出ていたので、ニュージャージーからマサチューセッツ州ボストンへ天幕を送るのは無理だと思えた。けれども主が道を開き、トラックを手に入れさせてくださった。道具は大急ぎで運ばれ、期日までに天幕が立った。神をほめたたえよ！

押し寄せる群衆を座らせることはとてもできなかった。ペンテコステの聖徒たちは、神の栄光と火に満たされてやって来た。その証しと、高らかに響く賛美の歌を聞いて、近所じゅうの人が駆けつけた。そして、『これは、いったい、どういうわけなのだろう』と尋ねた（使徒二・一二）。教会から座席を借り、使える場所は隅々まで人で埋まったが、人々を座らせるのはとうてい無理だった。毎晩、何千人もが天幕の周りを取り巻いた。道路のずっと先、説教がやっと聞き取れるところまで、いや、それより遠くにまで人が立っていた。

初めのうち、カトリックの一部の人たちが、集会をかき乱し、つぶそうと手を尽くした。けれども主をほめたたえよ、主が私たちに勝利を与えてくださった。

天幕の近くに部屋を借りていた一人の警官が、署長に苦情を言った。人々が夜中じゅう祈ったり叫んだりする騒ぎで眠れない、というのである。兄弟たちは警察署に呼び出された。彼らは福音自動車で行き、車を入り口の前に止めて中に入った。苦情を言った警官はいなかったので、署長は、戻るまで座って待つように言った。署長は床を行ったり来たりしていたが、ついに窓のところへ行って、文字の書かれた車に目をやった。そして、ぎくりとして身を引き、言った。

「『イエスはまもなく来られる』か。まもなく来るだって。まあ、そうかもしれん。わからんな」

「もしイエスが来られたら、お会いする備えはできていますか」と兄弟たちは尋ねた。

「あなたは新しく生まれましたか。自分の罪が洗い流され、死からいのちに移ったことを知っていますか」

「いや、いや、そうだとは言えないね」兄弟たちはさらに、イエスに心をささげるよう勧めた。けれども署長は、今はそうできないわけをいくつも挙げて、断った。（私たちの天幕集会に、警察の当然の保護を与えようとしなかったのは、この署長だった。）

署長は何度も窓のところへ行き、考え込むような声で読み上げた。「『イエスはまもなく来られる』か。ふうむ、そうなのかもしれんな」そして実際、イエスはこの人のもとに、ほどなく来られたのである。その夜、騒ぎを起こす連中は、だれにも取り締まられないのを見て、天幕の周りでこれまでになく乱暴にふるまった。

次の日、署長は机に向かっているときに心臓発作に襲われ、数時間のうちに死んだ。

そのとき開かれていた福音の集会に、署長が保護を与えなかったという話が、町のその地域一帯に広まった。それからは、どの集会にも三人の警官が天幕のそばに配置され、すっかり秩序が保たれた。

何十人もが救いを求めて来た。主の力に打たれて倒れた人々は多く、深い罪の自覚が人々の上にとどまっている。

学校の教師をしている一人の若い婦人が、あざけりに来た。あんな人たちの仲間には決してならない、と言っていた。ところが突然ひざをついて、救いを求めて叫んだ。そしてすばらしく救われ、次の夜には聖霊のバプテスマを受けた。

異言のメッセージとその解き明かしが語られていたときのことである。あざ笑っていた若者たちが突然、恐ろしいほどの罪の自覚に打たれた。先頭に立って祭壇へ進んだ若者は、顔が真っ青になり、ひざも手も震えていた。彼は叫んだ。「主よ、罪人の私をあわれんでください」（ルカ一八・一三）友人たちも後に続いた。みなすばらしく救われ、今はバプテスマを求めている。

足がまひし、ひざがこわばった小さな女の子が、いやしを求めて両親に連れて来られた。片方の足が、もう片方より五センチほど短かった。主はたちどころに彼女をいやされた。ひざは曲がるようになり、短かった足は伸びて、もう片方と同じになった。

日曜日の朝には、神の力が下って、だれも説教することができなかった。聖霊ご自身が、マクファーソン姉妹を通して預言で語られた。それから姉妹は御霊のうちにピアノを弾き、幕屋じゅうに天の賛歌が響き渡った。

ニューヨーク州ロングアイランドのハンティントンのキャンプ集会

キャンプ場は美しい眺めだった。白い天幕がたくさん、高いニセアカシアの木々の下に寄り添うように並んでいた。

集会は十日間続いた。魂が救われ、信仰から離れた人たちが立ち返り、病人がいやされ、二十六人が聖霊のバプテスマを受けた。バプテスマを求めて祭壇に来た一人の娘は、重い鋼の装具を腰に巻いていた。装具は片足の両側に沿って下り、重い靴の底に留めてあって、やせ衰えて動かない足をしっかり固定していた。主は彼女に聖霊のバプテスマを授け、その足をいやしてくださった。彼女は装具も添え木も靴も外して立ち上がり、行ったり来たり歩いた。足はすっかり丈夫になり、痛みもなかった。母親は泣き、聖徒たちは叫んだ。これほどすばらしいイエスがおられるのだから、叫ぶのは当然ではないか。

町の外からキャンプ集会に来た人たちの中に、一人の婦人がいた。教養があり、上品で、ホーリネスを熱心に信じる人だった。十一歳ほどの小さな息子を連れて来ていた。ペンテコステを研究しに来たのである。異言で語るという聖書的なしるしを伴う聖霊のバプテスマを、その結果や現れなども含めて分析しようというのだった。この婦人はいつも質問ばかりしていた。神の力に打たれて横たわり、バプテスマを受けようとしている人たちのあいだを、一人また一人と回っていた。ときには顔がやわらぐこともあった。けれども、またすぐ疑い深いトマスのような目つきになり、手でさわって確かめたがるのだった。

ある日の午後、その息子が神の力に打たれて倒れた。この子は何の疑いも持たずにバプテスマを求めていたのである。いつも明るかった顔が、突然、天の輝きを帯びた。全身が変えられたように見えた。そして、澄んだ美しい他国の言葉で、詩の形で歌い出した。主はその歌の解き明かしを、私に与えてくださった。

母親は、調べたり聞き回ったりしていた手を止めて振り返り、わが子を見た。自分が疑っていたものを、この子は幼子のような信仰で受けていたのである。それは彼女の心を溶かした。彼女自身も神の力に打たれて倒れ、異言で語るまでに至った。

ある夜、激しい嵐で天幕の明かりが消えた。私たちは福音自動車を天幕の端まで寄せ、横の幕を上げて、車の前照灯で照らした。これは、この一連の集会の中でも、とりわけすばらしい集会の一つだった。御霊が場を導かれ、説教することはとてもできなかった。

ある聖書学校から、二人の婦人が来た。その一人は、長年キリスト者の働き手として、また宣教師として働いてきた人で、体をこわしていた。聖霊のバプテスマのことはあまり知らなかったが、食堂の天幕での朝食のときに、いやしのために祈ってほしいと頼んだ。

私たちが祈ると、彼女は椅子から落ちて、小枝や木の葉の散らばる地面に横たわった。その周りでは、いつも料理番を困らせていたアヒルたちが、があがあ鳴いていた。主はまことに、ご自分の民をへりくだらせられる。どんなに偉い働き手であっても、だれもが低くならなければならないのだ。ハレルヤ！

数分のうちに、この愛する姉妹は聖霊のバプテスマを受けた。頭から足まで震え、喜びに笑い、異言で語っていた。

最後の日曜日には、床一面が、神の力に打たれてひれ伏した人たちで覆われた。解き明かしを伴うメッセージが数多く語られた。

マサチューセッツ州モントウェイト

ここには尊い聖徒たちが遠近から集まり、祝福に満ちた自由のうちに集会を持った。最初の夜に三人が御霊のバプテスマを受け、罪人たちが救いを受けた。日曜日には九人がバプテスマを受け、何人かが救われ、多くの人がいやされた。愛するメソジストの牧師と、その妻と娘もバプテスマを受けた。十日間の集会で、三十人以上が聖霊を受けた。

メイン州ウォッシュバーンのキャンプ集会

この報告の見出しを書いてから、私はタイプライターの前に座ったまま、どこから、どう書き始めようかと考えている。何もかもがあまりにすばらしくて、とても書き表せない。けれども、集会から遠く離れている、貧しく飢えた多くの聖徒たちを励ましたいと切に願うので、精いっぱい書いてみよう。

主は初めから私たちとともにおられた。最初の数日で五十四人ほどがバプテスマを受けた。その数は日ごとに増え、二週間半のうちに、百人を超える人が受けたと言って差し支えない。かたくなな罪人たちが、泣きながら祭壇に来た。多くの人が座ったまま、罪の自覚に頭から足まで震えていた。祭壇へ向かう途中で、通路に倒れる罪人もいた。説教ができないこともしばしばで、聖霊が集会を導かれた。多くの空の器から、異言のメッセージと解き明かしが出てきた。栄光の波と、すばらしい歌声が、会衆の上に押し寄せた。

聖霊の力のもとで演じられた劇

ある夜、御霊のうちに一つの劇が演じられた。十人のおとめの劇である。おとめたちは初め、白い衣をまとって花婿を迎えに出て行った。彼女たちは言った。

「花婿は来られるのがおくれている。休みましょう」

初めは、来るべきかたはすぐに来られるのだから、みな目を覚ましていなければならない、と言い張る者もいた。けれども、ついにはみな眠ってしまった。

突然、大きな叫び声がした。

「さあ、花婿だ、迎えに出なさい！」（マタイ二五・六）すると、おとめたちはみな目を開けて、あわてて自分のあかりを調べた。思慮深いおとめの役を演じていた五人の姉妹は、油があるので喜んで踊った。けれども思慮の浅いおとめたちは、油を分けてくれるよう思慮深いおとめたちに頼んだ。思慮深いおとめたちは、それはできないと言い、油を売るかたのところへ買いに行かせた。

それから、次のような場面が続いた。思慮の浅いおとめたちは、そこにあるつもりの戸をたたき、油の代価をめぐって長いあいだ値切った。彼女たちは、不便を感じたり犠牲を払ったりしなくて済むだけの代価しか払いたくなかった。けれども油を売る人は、油を手に入れる前に、だれもが百パーセントの犠牲を払うよう求めた。ついに思慮の浅いおとめたちは立ち去った。ところが戻ってみると、思慮深いおとめたちは主に会うために引き上げられたあとだった。思慮の浅いおとめたちは地に倒れ、髪をかきむしって声をあげて泣いた。

これに続いて、すべての人に向けて、高らかに警告する訴えがあった。すべてを明け渡し、代価を払い、今、油を買え。花婿は戸口まで来ているのだから、と。

これは、私たちのただ中で演じられた、言葉に尽くせない多くのすばらしいメッセージと劇の、ほんの一つにすぎない。日曜日には何百台もの自動車と馬と馬車が野原を埋め、人々のほんの一部しか座らせることができなかった。祭壇は、救いを求める罪人と、バプテスマを受けるキリスト者でいっぱいだった。何人もの牧師とその妻たちがバプテスマを受けた。教会の信徒や働き手も大勢受けた。集会の最中に、自分の席に座ったまま受けた人も何人かいた。

秋が近づき、北部と東部での伝道は終わりに近づいている。農夫たちの荷馬車が、刈入れの畑と納屋のあいだを忙しく行き来して、夏の労働の実りを集めている。農夫たちは、汗の流れる熱い顔をぬぐい、疲れてはいるが満ち足りた吐息をつく。

重い一日のあと、祭壇で何時間も、ときには明け方まで働いたことが何度もあった。すべてが終わって椅子に崩れるように座るとき、私たちは、刈入れの主も私たちのために疲れられたことを思い起こした。けれども、ああ、その喜びよ。救い、聖霊のバプテスマ、神によるいやし、神とのいっそう親しい歩みを求

める飢えた魂が、何列も何列も並んでいた。打ち場は穀物で満ち、石がめは油とぶどう酒であふれた（ヨエル二・二四）。契約の箱が私たちのただ中にあった。

過ぎた夏の伝道の光景を思い返しながら、私たちは主にあって魂を喜ばせている。

第十六章　二度目の南部伝道と福音自動車の働き

『その時、足なえは、しかのように飛び走り、おしの舌は喜び歌う。それは荒野に水がわきいで、さばくに川が流れるからである』（イザヤ三五・六）

メイン州の最北の町からフロリダ州の最南の都市へ

私たちがウォッシュバーンを発ったとき、車は働き手でいっぱいだった。田舎道を走りながら、私たちは歌い、主を賛美した。兄弟たちはメガホンで、救いのメッセージと、主がまもなく来られることを叫んだ。車には大きな金文字で、イエスがまもなく来られることと、『あなたはどこで永遠を過ごすのか』という問いが書いてあった。それが人々の目を大いに引いた。旅の途中で何百もの町や村を通り抜けるとき、私たちは歌ったり、証ししたり、伝道文書を配ったりする。そして多くの飢えた魂に出会うのである。

私たちは一日じゅう旅をし、夜は道ばたで眠った。主はいつも場所を備えてくださった。福音自動車は、前の座席を後ろへ倒して、車の中で眠れるようにしてある。広い野外が私たちの家である。夜には、車のステップのそばに喜んでひざまずいて祈った。ほかの方法では行き着けない所にまで、広く福音を宣べ伝えることができる。この栄光ある機会を与えてくださったことを、天の父に感謝したのである。

ああ、南部で集まって来てみことばに耳を傾ける、あの飢えた顔を見ていただけたら。路傍集会の最中に、男の人が群衆の中から進み出ることがよくある。そして車のステップのところにひざまずいて泣き、それから立ち上がって、イエスとともに貫き通す決意を証しするのである。

バージニア、ノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージアを回った。私たちは多くの貧しい家や、綿畑、たばこ畑などを訪ね、愛のメッセージを伝えた。貧しい黒人の人々は、なんと熱心にみことばを聞き、新聞を受け取ったことか。こうして、貧しい人々は福音を聞かされている。ほかのどんな方法でも聞くことのできない人々が、イエスがまもなく来られることを聞くのである。尊い魂がかかっている。一刻も無駄にはできない。それで私たちは叫ぶ。

『ここにわたしがおります。主よ、わたしをおつかわしください』（イザヤ六・八）。私たちが忠実で、自分を捨て、へりくだり、機敏であるように祈っていただきたい。時が良くても悪くても、イエスがまもなく来られることと、主に会う備えができているとはどういうことかを説教する。その機会を決して逃さないように。主が私たちのためにいのちを捨ててくださったように、私たちも主のためにいのちを捨てたい。

『自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう』（マタイ一六・二五）

道ばたや湿った天幕の中で眠っていると、敵がリウマチのことなどをささやくことがある。けれども私たちはこのみことばで敵に立ち向かう。すると敵は消えうせる。敵は、居心地のよい家と暖かい寝床を持つほかの人々の姿を描いて見せる。そして、家庭の快適さなど何もない私たちの硬い帆布の簡易ベッドを、あざけるように指さす。煙たいたき火を指さして、代価が大きすぎると言う。けれども、イエスに栄光あれ。私たちの心には、引き返したいという思いは少しもない。イエスさえおられれば幸せだからである。神を求める人たちでいっぱいの祭壇をひと目見るだけで、十分すぎるほど報われる。

愛する皆さん、私たちのために祈っていただきたい。私たちは、次のように言われたかたとともに、信仰の生活へと出て行くのである。

「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと思いわずらうな。あなたがたの神である主は、これらのものがあなたがたに必要であることをご存じである」（マタイ六・三一～三二）

ジャクソンビル

最初の集会で救われ、バプテスマを受けた回心者たちがいた。彼らが今もイエスとともに歩み、恵みのうちに成長しているのを見て、私たちは喜んだ。二度目の集会の結果は、最初のときにまさった。救いを求める罪人で、祭壇がすっかり埋まることもあった。多くの人が御霊のバプテスマを受け、多くの人がいやされた。

＊　＊　＊

主はそれから、私たちを大西洋からメキシコ湾へと導かれた。私たちは説教し、伝道文書を配りながら、フロリダ州デュラントまで行った。そこで次の集会を開くためである。

プレザント・グローブのキャンプ集会

神に導かれて、私たちは行進し、歌いながらキャンプ場を巡った。そして座席や祭壇などに手を置き、それらをイエスのものとして求めた。主の栄光が私たちのただ中にあった。幕屋はあふれるほど満ち、林には周り四十マイルから来た自動車や馬車が散らばっていた。やさしい一致とへりくだりの霊が満ちていた。預言や預言の歌による、すばらしいメッセージがあった。異言と解き明かしを伴って、劇が演じられた。天の音楽がその場を満たし、御使の聖歌隊の歌声が聞こえた。

深い罪の自覚が多くの人の上にとどまり、祭壇は救いを求める罪人で満ちた。バプテスマを受けた一人の愛らしい小さな女の子は、神の力に打たれたまま、異言と英語でみなに訴えた。あの美しい神の都に来てください、と。

フロリダ州タンパ

着くとすぐ、私たちは大きな信仰をもって、意気込んで仕事に取りかかった。大天幕といくつかの小さな天幕を立て、座席を作り、電気の設備を取り付け、看板を描き、広告を出した。住宅地と商業地区を、ちらしを持って回った。神は私たちの働きを祝福してくださった。天幕は満員になり、大勢の人が外に立った。毎晩、新しい顔が多く見えた。彼らは『これは、いったい、どういうわけなのだろう』と尋ねた（使徒二・一二）。そして前へ前へと近づいて来て、多くの人がまもなく泉に飛び込んだ。

町でたいへん尊敬されている家の、年配の婦人がいた。彼女は、ペンテコステが迫害するような口調でそしられるのを聞き、自分の目で確かめようと来た。初めから関心を持ち、欠かさず集会に通った。のちには息子と息子の妻もいっしょに来た。まもなく彼女は、栄光のうちに聖霊のバプテスマを受けた。続いて、息子の妻もたいへん熱心に聖霊を求め始めた。愛らしく、やさしいキリスト者である。その夫は、席にじっと座っているのがやっとだったと言った。彼の魂を救おうとする神の力が、それほど強く臨んでいたのである。

タンパとイーボー・シティのあちこちで、トラックや福音自動車の上から路傍集会を開いた。市役所の前の野外音楽堂からも集会を開いた。

横断の旅　伝道文書と良い知らせを携え、タンパからオキーチョビー草原を経てマイアミへ

タンパを発ったとき、車には伝道文書がたっぷり積んであった。フロリダの西海岸から東海岸まで、三百五十マイルの道のりを、私たちは忠実に文書を配った。目的地まであと数マイルというところで、すべて配り尽くした。それでも人々は車の周りに押し寄せ、もっとほしいと求めた。

この旅で、私たちはオキーチョビー草原とプレーリー・シティを通った。そして一軒一軒を訪ね、人々が初めて目にするペンテコステの文書を届けた。

この旅では車の荷が重かったので、寝るための天幕は持って行かなかった。そして、イエスが次のように言われたことの意味を少し学んだ。『きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない』（マタイ八・二〇）。最初の夜は車の中で過ごした。二日目の夜は、オキーチョビーに近い草原で、毛布にくるまってたき火のそばで過ごした。オキーチョビーは草原にできた新しい町で、私たちはそこでペンテコステの知らせを広めた。三日目の夜

は、パームビーチ近くの漁師の小屋で過ごし、そこでもイエスを証しした。次の夜は、たたきつける雨を避けて、小さな鉄道の駅舎で過ごした。

まわりの家々には、どこもクリスマス・ツリーとごちそうがあった。けれども私たちの天幕はまだ届いていなかった。主のお金を部屋代に使いたくもなかった。それで浜辺にヤシの葉で小屋を建て、近くに生えていた小さな木に、ささやかなクリスマスの贈り物をつるした。私たちはその周りにひざまずいて、イエスの誕生の物語を読んだ。そして祈ってから、小さな贈り物を開けた。主をほめたたえよ！　ここには家も永遠の都もない。けれども私たちは、神がもくろみ、建てられた都を求めている（ヘブル一三・一四、一一・一〇）。

フロリダ州マイアミの天幕集会

マイアミで開いた最初の天幕集会は白人のあいだで、二度目は黒人の聖徒たちのあいだで開かれた。最初の集会には、裕福で流行に敏感な人々が、自動車に乗り、立派な服を着て押し寄せた。天幕集会が珍しかったのである。彼らは面白がるつもりで来たが、多くの人が残って泣き、祈った。それは美しい光景だった。素朴なメッセージにこたえて、人々は涙を流しながら、へりくだって進み出た。そして祭壇にひざまずき、心と生涯をイエスにささげたのである。

人種の隔てが強かったので、愛する黒人の人々は、白人の集会に気軽に来ることができなかった。主は私の心に、黒人の人々へのたいへんな愛を注いでくださった。通りで彼らのだれかとすれ違うと、心に愛があふれてきて、素通りすることはほとんどできなかった。私は近寄って、こう尋ねずにはいられなかった。

「後の雨の聖霊の注ぎのことを聞いたことがありますか。異言で語るという聖書的なしるしを伴う聖霊のバプテスマのことや、イエスがまもなく来られることを聞いたことがありますか」彼らは、私の愛を感じ取っていたに違いないと思う。彼らの住む地域を訪ねて伝道文書を配っていると、みな私の周りに群がってきたからである。こうして、白人のキャンプ集会のあと、私たちは道具を、町の反対側の、この尊い人々のもとへ移した。

マイアミの黒人のキャンプ集会

幕屋は毎晩満員だった。イエスのために集められるべき、尊い黒真珠たちである。想像していただきたい。長さ十メートル、幅三メートル半ほどの大きな壇がある。その壇は、バプテスマを受けた黒人の聖徒たちでいっぱいである。彼らは踊り、歌い、手をたたき、油注ぎをもって証しする。その澄んだ響きは、聞く者に罪の自覚をもたらす。また想像していただきたい。神の力が下り、伝道者はしばしば語ることができず、御霊がすっかり導かれる会衆を。黒人の聖徒たちが老いも若きも通路で踊るさまを。罪人たちが泣きながら祭壇へ向かい、求める人たちが聖霊を受けて異言で語るさまを。それを想像しても、この集会のほんの片隅を見たにすぎないだろう。

ときには神の力が下って、みなが天の光に輝く顔を上げた。そしてただ叫び、罪人のためにほふられた小羊をほめたたえた。その声は何ブロックも先まで聞こえた。人々が駆けつけて来て、『これは、いったい、どういうわけなのだろう』と叫んだ（使徒二・一二）。

またあるときは、聖なる静けさが会衆を包んだ。泣く霊と、深く心を探りへりくだる思いとが、人々を席から押し流した。彼らは通路や座席のあいだや祭壇でひざまずいた。そして今では、吹き寄せられた雪よりも白くきよめられている。『お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように』と言われたイエスのために、清く聖い生活を送っているのである（ヨハネ八・一一）。

酒飲みたちは酒から解放されたことを、ばくち打ちたちはばくちから自由にされたことを証しした。罪深い娘たちや恥ずべき生活をしていた女たちは、主が自分たちを救い、罪からきよめてくださったと証しした。

通りを長く行進することもあった。彼らは黒人の人々にしかできない歌い方で歌い、楽器を鳴らし、叫んだ。それで人々は、何が起こったのかと駆けつけた。多くの人が行進しながら踊り、『言葉につくせない、輝きにみちた喜び』とはこういうものだと、だれの目にも示した（第一ペテロ一・八）。

マイアミでは二百人ほどの黒人の聖徒たちが、御霊のバプテスマを受けている。さらに多くの人が求め、受けている。

人々はたいへん貧しく、エプロンや作業着のまま集会に来る。献金はごくわずかだった。愛する友人たちが手紙に献金を入れて送ってくれなかったら、私たちの財政は実際よりもっと赤字になっていただろう。貨物の運賃、ガソリン、オイル、材木、照明、食料品、衣服と、重い出費をどうまかなおうかと思ったことが何度もあった。そのたびに、次の郵便で、必要な額がだれか神の子供から届いた。天の父がその人に電話をかけておられたのである。物価が高騰している今の時代でも、信仰の生活を送ることができる。そのことを神に感謝する。それには自己犠牲が伴った。私たちは報告では、明るい面を描くように努めている。集会から遠く離れて暮らす多くの人を励ますためである。けれども、もう一方の面はたぶん描けていない。たたきつける雨の中で、寝るための天幕がくるぶしまで水に浸かり、寝具がぬれていることもある。煙を出す石油こんろで苦労して料理しながらも、私たちは歌い、ほほえみ、信仰の戦いを戦い続けているのである。

キー・ウェストをイエスのために

キー・ウェストの島では、至る所で戸が開かれた。多くの人が、天幕をここに送って、島の隅々まで届く伝道集会を開いてほしいと頼んだ。彼らは手伝いと祈りを申し出た。こんなに辺鄙な所まで来る伝道者はめったにいない、町じゅうが集会に出てくるだろう、と言うのだった。

美しい所にあるハリス中等学校の校庭が、天幕集会の場所に選ばれた。毎晩、座席はすべて埋まり、大勢が立っていた。新しい座席を三度手に入れて天幕の外に並べたが、大勢の聴衆を座らせることはできなかった。集会の始まる二時間前に、天幕が満員になることもたびたびあった。この飢えた魂たちは、それほど席を取ろうと必死だったのである。男も女も、救いと聖霊のバプテスマを求めて祭壇に来た。病人はいやされた。主は、今の時のメッセージを宣べ伝える祝福に満ちた自由を、私に与えてくださった。

私の魂は、愛する黒人の人々のために重荷を負っていた。それで私は公の壇上から告げた。主にあって、島の白人の人々に対する務めは果たした。今は、皆さんの不興や反対を受けることになっても、貧しい黒人の人々のところへ行き、同じ話を伝えなければならない、と。いさめる人もいた。けれども、私の心の熱意と切なる願いを見て、ほとんどの人が助けることに同意してくれた。そして、その集会のために用意してくれたのは、ほかでもない、裁判所を囲む広い敷地だった。

それから、黒人の人々のあいだで熱心な訪問が始まった。初めは、これが本当に次のような集会なのだとは、なかなか信じてもらえなかった。

黒人のキャンプ集会

中に入って席に着いてよいのだと、納得してもらうこともできなかった。けれども、それが本当だとわかると、彼らはなんと大勢押し寄せたことか。

一人の愛する黒人の兄弟がいた。黒人も白人も、だれもが神の聖徒と認める人だった。彼は通路をやって来て私を見ると、顔に表れた驚きをそのまま声に出した。それで、かなりの騒ぎになった。

「なんとまあ、主よ、お慈悲を！　主が幻で見せてくださった、まさにあの女の人じゃないか！　まったく同じ服を着ていなさる。髪もまったく同じように結っていなさる！　そうだ、主が幻で見せてくださったのは、まさにこの女の人だ」彼はのちに、私たちに説明してくれた。何週間か前、主が彼に幻を見せてくださった。一人の白人の姉妹がやって来て、彼の手を取り、川の水の中を連れて行く。そこで鳩が下って、彼の上にとどまる。それから姉妹は、彼を主の御前に導いて行く。そういう幻だった。

白人の人々を遠ざけておくことはできなかった。こうして、この島で初めて、白人と黒人が同じ礼拝の場に集まり、並んで同じ主をあがめた。私たちは白人の人々のための席を両側に設け、中央を黒人の人々のために取っておいた。けれども人々は集会に夢中になり、席を分けることなど忘れてしまった。

ここの愛する人々にとって、聖霊のメッセージは新しいものである。聖霊のことをまったく聞いたことのない人もいた。聖霊が手で触れるほど確かな助け主として来られたことを知っていたのは、黒人の姉妹ただ一人だった。

この四日のあいだに、黒人の働き手と説教者のうち、とりわけ霊的な七人が聖霊のバプテスマを受けた。

救われる人や、神のもとまで祈り抜く人の数を、私たちはいちいち数えてはいない。けれども、その名は小羊のいのちの書にしるされている。

貧しい人々、さげすまれた人々が福音を聞かされている。神はご自分のみことばを重んじてくださる。みことばは素朴に宣べ伝えられているが、力の現れとともに、しるしを伴っているのである。

聖霊を受ける多くの人が、すばらしい幻を見ている。ある姉妹は、バプテスマを受けた直後に、主の来臨の幻を見た。彼女は跳び上がって、大声で叫んだ。

「ああ、見えないのですか。見て！　イエスさまが来られる！　美しい星が、山々と丘の上に昇るのが見えます。イエスさまはその星の真ん中におられます。ああ、見て、栄光と力のうちに輝き出ておられます！　イエスさま！　イエスさま！！　イエスさま！！！」

救いを求めて来た別の姉妹は、遠くまで聞こえるほどの声で叫んだ。それで人々が駆けつけた。

「主よ、罪人の私をあわれんでください！」（ルカ一八・一三）

まもなく彼女は跳び上がり、踊り、手をたたいた。その顔は救いの喜びに輝いていた。

バプテスマを求めていた一人の黒人の説教者が、だれもそばにいないのに倒れ伏した。そしてまもなく、異言で語り、神をあがめ始めた。突然、彼の顔が苦しみもだえるようにゆがんだ。主が彼に、十字架の場面を通らせてくださったのである。彼はイエスの死と愛を語り、その傷から血がしたたる様子を語った。

十四歳の少年がすばらしく救われた。そして毎晩、驚くほどの仕方で人々に訴え、勧めている。幕屋のあちこちで、多くの人が泣き崩れる。

昨夜（三月十日、日曜日）で、ここの集会を終えるつもりだった。けれども、みなが集会を続けてほしいと頼んだ。自分たちのペンテコステの伝道所を開けるだけの人数が、御霊を受けるまで続けてほしいというのである。

この厳しい冬のあいだ、私の体力は驚くほど持ちこたえてきた。けれども今は体がたいへん弱っていて、集会のたびに力を求めて神にすがりついている。聖徒の皆さん、私が神の期待を裏切らないよう祈っていただきたい。魂がイエスのもとに帰って来ている。周りには何千もの飢えた魂がいる。『収穫は多いが、働き人が少ない』（マタイ九・三七）。夫のマクファーソン兄弟がまた留守なので、私は一人で奏楽も司会も歌も説教もし、祭壇で祈っている。そのうえ『ブライダル・コール』の準備もある。私を支えることができるのは、神の力だけである。キー・ウェストで一人残されたとき、主が私を助けてくださったありさまは、今も私の目には驚きである。私は杭を打ち込み、重い張り綱を結び、風雨の中で天幕を立てておこうと戦った。一日じゅう説教したうえに、夜の大半を起きていたこともあった。三日続いた北西の強風のあいだ、夜通し天幕を見張った。そして、風が杭を引き抜くそばから、重い大槌で打ち込み続けたのである。

風はやみ、集会は勝利のうちに大成功で終わった。主は、大きな幕屋を取り壊すのを手伝う兄弟を一人送ってくださった。また黒人の姉妹を二人送ってくださり、長い大きなベンチ二百脚ほどの解体を手伝ってもらった。照りつける太陽の下で、釘を抜き、材木を積み、大きな帆布を巻いて袋に詰め、次の場所へ送った。神の民が御心の真ん中にいるとき、神はまことに超自然の力を与えてくださる。

駅での別れの光景は、楽しい思い出である。駅のホームは、白人と黒人の聖徒たちでいっぱいだった。最後の別れを言うために、朝早く起きて来てくれたのである。運賃の足しにと、ささやかな献金を持って来て、手を振って見送ってくれた。私が列車の昇降段に立っていると、何十人もが上がって来て私の手を握り、集会でどんなに祝福を受けたかを話してくれた。

私がキー・ウェストを発とうとしていたちょうどそのとき、愛する母が私のもとに来てくれた。母が世話をしてくれていたロバータもいっしょだった。私がこの働きに入ったとき、母は言ってくれていた。もし私に助けが要るときがあれば、それが何であっても助ける、と。そして今、私はかつてないほど母の助けを必要としていた。私はあまりにもしばしば一人で残され、天幕と集会の世話をしなければならなかった。増える一方の手紙のやりとりもあった。本当なら、一人が全部の時間をかけるべき量である。そのうえ『ブライダル・コール』の購読者名簿、貨物の発送、新しい集会の手配もあった。私の体力は尽きかけていた。

Z姉妹（天幕の仕事を手伝ってくれていた人）と私は、夜、大きな裁判所の中庭に二人きりだった。酔った男たちや兵士たちが、明け方近くまで、天幕のそばをよろめきながら通って行った。神は驚くほど私たちを守り、世話してくださった。だれ一人近寄って来ることもなく、いやがらせを受けることも少しもなかった。それでも私は、母に電報を打って助けに来てもらうよう、強く心に示された。母がいてくれることで守られる必要があっただけではない。働きの事務の面を引き受けてもらうためでもあった。そして今、祈りと電報の訴えにこたえて、母がここにいた。列車は、島から島へと海にかかる長い橋をいくつも渡り、百マイル先のフロリダの海岸へ走っていた。その列車の中で、母は私のそばに座っていたのである。

母はその日から、これを書いている今まで、ずっと私とともにいる。母は、働きから負わされた務めや責任を、一つとして怠ったことがない。手紙のやりとりの重荷をすべて私の肩から取り除き、『ブライダル・コール』の長い購読者名簿を管理してくれた。子供たちの世話を監督し、荷造りをし、旅をし、そのほか数えきれない務めをしてくれた。それで私は、祈りとみことばの奉仕と執筆に、絶えず身をささげることができた。母はいつも、私を励まし奮い立たせてくれる存在だった。なんとすばらしいことだろう。初めに召しを受けたのは母で、母の召しを通して私がこの働きに導き入れられた。そして二度目には、私の召しを通して、母が再びこの働きに導き入れられたのである。

ウェスト・パームビーチの黒人の人々のあいだで短い集会を開き、マイアミの黒人のキャンプ集会を終えた。そのあと、天幕をフロリダ州オーランドへ送り、私たちも福音自動車でそこへ向かった。海岸沿いを北へ上る道すがら、ずっと伝道文書を配り、イエスを証しした。

オーランドの天幕集会

貨物は輸送禁止令のために遅れた。私たちの時間も限られていた。ペンシルベニア州フィラデルフィアの全国キャンプ集会の準備のため、二週間あまりで北へ向かわなければならなかったのである。

車でメイン・ストリートを走りながら主に尋ねていると、大きな茶色の天幕が目に入った。私たちの幕屋より、少なくとも五百人は多く座れる天幕である。中には立派な床があった。以前はスケート場として使われていたのである。主が持ち主の心を動かしてくださり、持ち主は一連の集会のあいだ、わずかな料金でその天幕を貸してくれた。貨物が止められたせいでキャンプ集会が遅れたのは、これが初めてだった。けれども天の父は、もっと良い天幕を床まで付けてすっかり立て、空のまま私たちを待たせておいてくださったのである。

オーランドは上流の人たちの町だから、天幕集会に人が来るとは思わないほうがいい、と人々は私たちに忠告した。けれども私たちは、神が私たちを遣わされたことに間違いはないと確信していた。それで仕事に取りかかった。新聞に告知を出し、座席を手配し、ちらしを作り、集会を始めた。ちらしで、また何度も路傍集会で、根気強く宣伝した。車で通りを行き来し、天幕に来てもっと話を聞くよう人々を招いた。周囲数マイル以内に、オーランドで天幕集会が開かれていることを知らない人がいたかどうか、疑わしいほどである。

初めのうち、多くの人は天幕の周りの通りに車を並べ、威厳を保てるだけの距離から耳を傾けるだけだった。けれどもまもなく火が下り始め、氷が溶け始めた。人々は車を降りて天幕に入った。そして、神をほめたたえよ、多くの人が祭壇に来た。

群衆は、数も関心も日ごとに増した。最初の集会で六人が救いを求めて祭壇に来た。どの集会でも、罪人が救われ、信者が御霊のバプテスマを受けた。毎晩、長い祭壇のベンチは埋まり、飢えた心も満たされた。

これほどの愛と敬意をもって迎えられたことはなかった。だれもが競うように、私たちを助け、励まそうとしてくれた。まず、私たちの住むための小さな天幕がまだ届いていなかったので、湖のほとりの小さな家が提供された。ガレージ付きで、滞在中はただで使ってよいという。町でいちばんのパン屋は、配達の荷車をよこしてくれた。パン、パイ、ケーキ、クッキーの大きなかごをいくつも積んでいて、私たちの集会の人たちにも分けられるほどだった。

オレンジ園を持つ人たちは、果物を大かごに何杯も持って来てくれた。食料品店は、缶詰と野菜、小麦粉と砂糖を、縁までぎっしり詰めた箱を送ってくれた。

人々は私たちの戸口まで来て、集会で受けた祝福のことを話してくれた。ああ、神の御心の真ん中にいることは、なんと大きな意味を持つことか。主は戸を開き、戸を閉じ、力ある者を倒し、敵をもあなたと和らがせてくださる。主をほめたたえよ。

千五百人近く座れるその天幕は、あふれるほど満ちた。通りには自動車やそのほかの乗り物が列をなした。さまざまな教会の牧師や働き手も来た。ある人たちは、これこそ自分たちの教会がかつて持っていた、長く失われていた力だと言った。あざけり笑う人たちもいた。

とにかく悪魔は、自分の側の人々を何人か失うのではないかと恐れたのである。そこで悪魔は、天幕から数ブロック離れた所に住む一人の婦人を警察に行かせ、夜眠れないと訴えさせた。次の晩、一人の警官が天幕に書類を持って来た。集会は十時で終えなければならない、と書いてあった。説教の終わり近く、私は時計を手に持ち、話しながら何度もそれに目をやった。できるだけ早口で話した。そして十時五分前に、人々にこう告げた。皆さんが飢え渇いていて、祭壇に来たいと思っていることはわかっている。ここには救われるべき魂がいる。けれども、ある婦人が騒がしいと苦情を言った。だから全員立ち上がって解散する。どうか立ち止まったり歩き回ったりせず、できるだけ早く静かに出ていただきたい、と。

あの人々の顔つきを、私は忘れることがあるだろうか！　中には、町をほとんど自分のものにしているような人たちもいた。その人たちが、十時に集会を終えなければならないと言われたのである。男の人たちの中には、考えただけで鼻を鳴らす人もいた。そして出て行きながら言った。

「このままにはしておかんぞ！」

「とんでもない！　ここはスケート場として何か月も開いていて、夜中の十二時まで営業していたんだ。それが福音が説かれるようになったら、十時で閉めろというのか」

「市長は私の友人だ。私が話をつけよう。心配はいらないよ、奥さん。明日の晩までには、すっかりけりがついているさ」

近所の人たちもやって来た。それまで距離を置き、私たちを認めてよいものかどうか決めかねていた人たちも、もうためらわなかった。そのときから、彼らは私たちの温かい友となった。

彼らは約束どおり、通りのあちこちで集まって相談した。次の日、大きな下宿屋を営む一人の婦人が近所を回り、この命令の取り消しを求める請願書に署名を集めた。騒ぎなど迷惑ではない、というのである。次の日、オーランドのある新聞の一面に、次の記事が載った。

ルーニー夫人、教会を助ける

ベティー・ルーニー夫人は、信仰の自由を愛するすべての人から感謝されてよい。大天幕で一連の集会を開いているマクファーソン夫人の救援に駆けつけ、助けたのである。

いきさつはこうらしい。ある人が、話し声や歌声で眠りが妨げられるというので、市の役人に集会を早い時刻に打ち切らせた。ルーニー夫人によれば、その人は遠くに住んでいるという。すると、善良なキリスト者の婦人であるルーニー夫人は、すぐに請願書を作った。福音集会のすぐ近くに住む二十五人の市民が、それに名を連ねた。市民たちは、集会をそんなに早い時刻に打ち切らせることに、市長へ抗議したのである。もちろん、これは聞き入れられた。不満を抱く人たちは、集会を責めるのに何かほかのことを探さなければならないだろう。

この集会に対する本当の言いがかりはただ一つ、昔ながらの福音を、歯に衣着せずに宣べ伝えていることである。それが、一部の気取ったフロックコートの連中をねたませているのだ。彼らは講壇から上流の会衆に向かって弁舌をふるい、片眼鏡をかけ、絹のつまらない飾りを身に着けている。そして空いた長椅子ばかりが目立つので、ねたんでいるのである。

一部の説教者は、本物の信仰を得て、この人たちがしているようにそれを人に伝えれば、ためになるだろう。

すぐに命令は取り消され、集会は続けられた。夜中の十二時まで続くこともたびたびあった。

上流の家の人たちと連れ立って来た、一人の若い婦人がいた。彼女は不信仰でいっぱいだった。ところがある夜、主が私の上に力を臨ませ、スペイン語で異言のメッセージを与えてくださった。私はスペイン語を一語も知らなかった。それで彼女は驚き、すっかり確信したのである。次は彼女の証しである。

（ここにはアニー・L・トレッドウェルの証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

集会を終えて、バージニアとペンシルベニアへ向かうときが来た。人々は高慢で、私たちに目もくれないだろうと言われていた町である。その町が、最後の集会には総出で来てくれた。市民の一人が町の人々を代表してあいさつをした。彼は、私たちが愛をもって労したことに感謝し、また来てほしいと招いてくれた。そして、自分たちにできるかぎりのことをして助けると言った。北への旅の費用の足しにと、いくらかのお金が贈られた。

第十七章　バージニアの集会と福音自動車便り

『彼女には束の間でも穂を拾わせなさい。とがめてはならない。また彼女のために束からわざと抜き落しておいて拾わせなさい。しかってはならない。こうして彼女は夕暮まで畑で落ち穂を拾った。そして拾った穂を打った』（ルツ二・一五～一七）

バージニア州に近づいたのは、夜もふけてからだった。州に入っても、まだ二百マイルほど旅を続けなければならなかった。私たちはみな、先へ進んで、懐かしいバージニアの土の上で夜を過ごしたいと言った。バージニアの人々は心が温かいと聞いていて、それが本当かどうかと思っていたのである。州境を越えて、寝静まった小さな町に入った。道ばたの木の下に車を止め、自動車のベッドを広げ、天幕の覆いを張って夜を過ごした。

朝早く目を覚まし、その場所を明るい中で初めて見ようと、守ってくれる幕の下からのぞいた。すると驚いたことに、すぐ近くに家が二軒あった。一軒は通りのすぐ向かいに、もう一軒は少し右手にあった。向かいの家のベランダに男の人とその妻が立ち、こちらを見ながら熱心に話していた。私たちがだれなのかと思っていたに違いない。

旅を続ける支度をして、道ばたでの身支度をちょうど終えたときだった。男の人が銀の盆を持って、急いで通りを渡って来た。盆には大きなガラスの鉢があり、熟した真っ赤な苺が縁までいっぱいに盛ってあった。濃いクリームの入った水差しと、粉砂糖の鉢もあった。続いて、もう一軒の家から小さな女の子が走って来た。湯気の立つ熱いビスケットの皿と、牧場のジャージー牛からしぼったばかりの牛乳を一リットルほど持っていた。どちらも、相手がしたことを知らなかった。これが、名高いバージニアのもてなしを私たちが初めて受けた経験だった。

バージニア州プラスキ　裁判所の階段での説教

N・セシル兄弟の美しい家に、私たちは町での十日間の集会のあいだ泊めてもらった。できるだけ短い時間で、できるだけ多くの人にメッセージを届けたい。そこで、ペンテコステ・ホーリネス教会での定例の集会のほかに、毎日路傍集会を開くことにした。セシル兄弟が、通りで説教する許可をもらいに町の役人のところへ行った。すると役人たちは親切にも、裁判所の階段と広い芝生を使うよう招いてくれた。

最初の夜は土砂降りの雨だったが、出かけて行って説教した。少しくらいの雨でやめるには、時はあまりにも短いと思ったのである。大勢の群衆が集まり、神の力が下った。群衆は毎晩増え、ついには大集会となった。通りの両側には自動車がぎっしり並んだ。神の大きな野外で私たちが説教し、人々がこの広い建物の周りの芝生に座っている。それは美しい光景だった。

このような場所で神の力が下るのは、前例のない光景だった。聖徒たちは裁判所の階段で、また下の歩道で、歌い、踊った。人々は心を動かされ、顔に涙が流れた。そして群衆は、次の集会の場所までついて来た。

ペンテコステ・ホーリネス教会で

教会には群衆が入りきらず、人々は庭や通りのあちこちに立って、聞こうとし、見ようとした。何年も聖霊のバプテスマを求めていた何人かが、それを受けた。救われたばかりの新しい回心者たちも、助け主を受けて喜んだ。

二つの伝道所が聖書的なしるしに納得する

集会が終わったら、二日休むことにしていた。けれども、黒人の教会でいくつか集会を開いてほしいという招きが来た。そこで神は、バプテスマの聖書的なし

るしについて語るよう導いてくださった。神はそれをみことばからはっきりと示してくださったので、疑いはすべて一掃された。良心に従って遠く離れて立っていた人たちも、立ち上がって人々に赦しを求めた。そして、今は光がわかった、何が起ころうと二度と妥協はしない、と言った。

もう一つの伝道所の指導者が、次の晩に自分のところへ来てほしいと招いてくれた。彼は言った。

「姉妹、今夜のあの説教で、私は確信しました。御霊が語らせるままに他国の言葉で語ることは、御霊が入って来られるときに必ず伴う、聖書的なしるしです。私はこの光を受け入れました。どうか私の会衆にも説教してください。彼らも受けることができるように」次の晩、彼の集会所は、始まる時刻よりずっと前から戸口まで人でいっぱいだった。神は働いてくださり、ご自分のみことばを重んじてくださった。ハレルヤ！

この町の心の広い人々は、心と財布を開いてくれた。私たちの必要と旅費は、十分すぎるほど満たされた。

バージニア州ロアノーク

プラスキを発つ前に、ロアノークのペンテコステ・ホーリネス教会の牧師が訪ねて来て、自分の教会に来てほしいと頼んだ。聖徒たちは集会を天幕で開きたがったが、牧師は譲らなかった。ロアノークに着くと、私たちはようやく牧師館の前に車を止めた。そこに泊まる手はずになっていたのである。ベランダに一人の紳士が座っていた。その顔は暗く、近寄りがたく見えた。彼は私たちを少しも歓迎しなかった。のちに私たちが牧師夫妻とともにベランダに座り、彼も「何々兄弟」と紹介された。そのあとでも彼は、「ハレルヤ」とも「神の祝福がありますように」とも、ひと言も言わなかった。

最初の集会は教会で開かれた。主は私に、講壇にも、壇上にさえも上がらない知恵を与えてくださった。それで私は前のほうに静かに立って、主の来臨と、主に会うための花嫁の備えについてメッセージを語った。会衆からは熱のこもった「アーメン」が上がり、多くの人の目に涙があふれた。

この兄弟は最前列に座っていたが、一度も顔を上げなかった。その顔には、相変わらず、雷雲のような暗い、皮肉と不快の色が浮かんでいた。私が席に着くと、彼は立ち上がって話をした。それは私の話に劣らないほど長かった。だれかがささやいた。

「あの人は州の監督です。この集会のことを聞いて、やめさせに来たんです」

彼の話を言葉どおりに繰り返すことはできないが、その要旨は次のようなものだった。たとえ天から御使が下って来て説いたとしても、自分たちの教会の規則と規定に定められた教理と違うものなら、信じてはならない。今夜のメッセージはたいへん結構だった。けれども聞くところによれば、マクファーソン姉妹はこう教えているという。実際に犯した罪も内在する罪も、血の泉に入るとき一度にすべて取り除かれる、と。彼は言った。

「私たちには、守るべき教会の規則と規定があります。恵みの第二の明確な働きとしての聖化という、私たちの力強い教えを取り去ってごらんなさい。私たちの教会が建てられている土台と柱を、壊すことになるのです」

会衆は、みじめさとあわれみの入り混じった顔で座っていた。けれども私は主をほめたたえ、こう言っていた。

「ああ、イエスさま、ありがとうございます」主が私の魂に祝福を注いでくださっていたのである。

この愛する人が話し終えると、私は立ち上がって言った。この教会で私が何か反論するのは、礼儀にかなわない。私は皆さんのたっての招きでここに来たのである。外でなら、喜んで説教しよう。福音自動車の上からでも、空き地でも、聖徒たちが用意してくれる所ならどこでもよい、と。

私は彼らに話した。私はカルバリの完成された御業を信じている。罪は罪である。実際に犯した罪でも、アダムの罪でも、内在する罪でも、どんな凝った名で呼ぼうと、罪は罪である。人は外の顔かたち（いわゆる実際に犯した罪）を見るが、神は心（内在する罪）を見られる。そしてきよさについて言えば、『きよくならなければ、だれも主を見ることはできない』（ヘブル一二・一四）。私たちは救われなければならず、聖化されなければならない。けれども、それはすべて、

イエス・キリストの尊いあがないの血によるのである。『御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめる』（第一ヨハネ一・七）。

何人かが跳び上がって、すぐに外に場所を探そうと言った。（二人の牧師は「いいえ、集会の期間中は教会にとどまってください」と言った。）主は多くの人にしるしを与えてくださった。日曜日の集会がすでに告知されていたので、彼らは土地を探しに出かけた。

教会から少し離れた、大通りに面した空き地がいくつか見つかったが、借りることはできなかった。ほかの場所はどこもふさがれていた。ただ一つ空いていたのは、ペンテコステ・ホーリネス教会のちょうど向かいの土地だった。それが無償で提供された。（あの尊い聖徒たちが、あの土曜日一日、どんなに働いたことか！）

天幕が手に入らなかったので、大きな帆布を二枚手に入れ、できるだけ広い範囲に張り渡した。三つの会衆が座席を貸してくれた。材木が大急ぎで運び込まれ、壇が組み立てられた。

みなが、この急ごしらえの集会場を建てるために、何かを差し出した。ある兄弟は、電灯の電線と器具を提供した。もう土曜日の昼過ぎだったのに、電力会社は特別に車を出して、メーターを取り付けてくれた。

ある姉妹は、この野外集会のために自分の美しいピアノを貸してくれた。そして「家じゅうのものを何でも使ってください」と言い、ピアノの運送料まで払ってくれた。ああ、このように献身した人々がもっといてくれたら！

使える座席はすべて埋まり、祭壇もいっぱいになった。何千人もが、何時間も天幕の周りにぎっしり立っていた。聖徒たちは壇の床にまで座り、私はだれかを踏まずに動き回ることがほとんどできないほどだった。

男の人たちが救われた。ハレルヤ！　病人がいやされた。御霊の注ぎに反対して戦っていた二人の牧師が言った。

「もうあなたがたとは戦いません」そして祭壇に来た。

毎晩、いちばんにぎやかな街角で、福音自動車の上から路傍集会を開いた。町じゅうがかき立てられた。人々は車の周りに立って泣いた。一人の愛する男の人が、顔に涙を流しながらやって来て、車のステップにひざまずいた。ドハティ兄弟（すべての集会の手配をした人）がいっしょに祈ると、その人は泣きながらカルバリへと祈り抜いた。

セーラムの会衆が助けに来る

セーラムで午後の集会を開いていたとき、セーラムの教会の牧師が、残りの集会の期間は自分の教会を閉じることに決めた。そして妻と娘たち、群れの人々とともに、私たちを助けに来てくれた。彼らは楽器を持って来て、音楽を受け持ってくれた。それはみなにとって祝福となった。

集会を終えるときが来ると、多くの実業家やキリスト者の働き手が申し出てくれた。もう一週間とどまってくれるなら、何千人も座れる大講堂を借りよう、というのである。けれども私たちは、デラウェア州バイオラに行く約束をしていた。それで日曜日の夜に集会を閉じた。何千人もの人が神に飢え渇いていた。長い祭壇のベンチは、何度も人で埋まった。

バージニアはすばらしい伝道地である。山と谷と、もてなしの家々のあるこの美しい州を、また訪ねることができるよう願っている。

福音自動車便り（一九一八年七月）

「これほど勝ち誇った足取りで、これほど忠実な心を胸に脈打たせて帰還した勇敢な戦士はなかった。この公の賛辞にこれほどふさわしい者もない。それが、私たちの忠実な『ペンテコステの福音自動車』である」

カナダとの国境に近いメイン州の最北の町から、アメリカ合衆国全体で最南の都市まで、この車は山にも谷にもひるまなかった。使者たちだけでなくメッセージをも、着実に無事に運んできた。それはまことに、燃える伝道者であった。金文字で宣言するその言葉は、見る人々の驚いた目に、しばしばきらめいた。その衝撃は、昔ベルシャザルの宮殿の壁に現れた文字に劣らなかった。

何千もの人や乗り物が、福音自動車のそばを流れるように通り過ぎた。けれども福音自動車は人を恐れる霊から自由で、批判にも動じない。時が良くても悪くても、あかりを枡の下に隠したことは一度もない。華やかな花嫁の一行が、笑い

さざめき、香り高いオレンジの花を飾って駆け抜けて行くときも。黒い羽根飾りの霊柩車と、黒い服の会葬者の葬列が通るときも。子供たちが踊りはしゃいで通り過ぎるときも、老人が弱々しく杖にすがって行くときも。この車は、だれにでもおごそかに問いかけてきた。『あなたはどこで永遠を過ごすのか』と。そして『審判の日が来る』と宣言し、『神に立ち返れ』と勧めてきた。

混み合った町の車の流れの中で速度を落とすと、福音自動車の暮らしを知らない人には、こう見えるかもしれない。歩道の通行人の多くは、いつもはまじめな顔をして、それまで静かに日々の務めに向かっていた。その人たちが突然、思わず知らず、火のような路傍説教者に変えられたように見えるのである。彼らは我を忘れ、町の人々をはっとさせるような声で、だれにでも問いただす。「あなたはどこで永遠を過ごすのか」声の届く所にいる人々は、ぎょっとして話し手の目を見上げる。そして自分たちも車に目をとめ、あの大きな問いを口にするのである。「どこで」

ときには用事で車を離れ、戻ってみると、忠実な車の周りに人だかりができていることがある。車はひとりで路傍集会を開き、説教しているのである。それが永遠にどんな結果をもたらすか、だれに言えるだろうか。

私たちの一行のうちで、福音自動車ほど活発に働き、あらゆる務めでこれほど有能に、従順に仕える者はいない。千枚の伝道文書を、道やかきねのあたりで配ったり、地方の郵便受けに入れたりしなければならないか。福音自動車が用意できている。路傍集会を開くのか。いつでも頼りになる説教者が一人いる。福音自動車である。

講壇が要るか。幌を下ろせば、車が講壇になる。書見台が要るか。風よけのガラスを開けば、聖書と歌集を置ける。悔い改める者が泣きながらカルバリへ向かうための祭壇が要るか。ステップが立派に務めを果たす。求める人と働き手がともにひざまずいて流す、あふれる涙を、いつでも受けとめるのである。

年老いた夫婦や、赤子を抱いて何時間も立って話を聞いていた母親を、家まで送らなければならないか。福音自動車が用意できている。重い荷を運ぶのか。使いに走るのか。メガホンで通りにメッセージを響かせるのか。福音自動車が用意できている。道中、たき火でこしらえたささやかな夕食を広げる食卓が要るか。皿や、缶詰が要るか。福音自動車がその必要を満たす。

疲れた旅人に、寝床と寝具が要るか。福音自動車は、ステップに折りたたみのベッドを一つ載せている。もう一つのベッドは前の座席でできる。座席が蝶番でそっと後ろに倒れ、前と後ろの座席がつながって、わりあい快適なベッドになるのである。たき火の揺らめく明かりのもとで祈りと（おやすみの）あいさつがすむ。すると福音自動車は、ささやく松の木の下で守りと休みを与えてくれる。四方から追い立てられている編集者が、聖書かタイプライターとともに静けさと休みを求めることもある。そのとき編集者を群衆から離れた静かな場所へ運んで行くのも、福音自動車である。

死にゆく花嫁

集会が終わり、キャンプの最後の明かりが消える。これで福音自動車の務めは終わりか。もう休んでよいか。否！　急ぎ足の音がして、切迫した知らせが届く。若い花嫁の死の床に、すぐに来てほしいというのである。彼女はほんの数時間前に私たちのメッセージを聞いていた。そのあと突然倒れ、今まさに息を引き取ろうとしていた。そこは何マイルも先で、暗く危ない田舎道を行かなければならない。どうすれば間に合うだろうか。福音自動車が用意できている。車はあわれみの使者となって速く走る。一度も止まらず、ついに粗末な小さな家の戸口に着く。真夜中の明かりと影のような人の姿が、死の御使がそこにいることを告げている。御使はすでに翼を広げ、美しい若い花嫁のほっそりした体を運び去ろうとしている。

待つ時間が続いた。死にゆく人も生きている人も、力と慰めを求めて、私たちの手と言葉にすがった。やがて最後の別れが告げられた。その美しい声は、「天国で会いましょう」という言葉とともに静かに消えていき、最後の息がそっと去った。それから朝までの時間、悲しむ両親は慰めを受けた。若い夫は、愛する人の動かなくなった体のそばにひざまずき、心をイエスにささげた。見守る御使たちはそれを喜んだ。そのあいだずっと、福音自動車は夜露に濡れて静かに立っ

ていた。星明かりに柔らかく輝きながら、近所の人たちが帽子を取ってうやうやしくその家を出て行くたびに、一人一人に勧めていた。あなたがたにも『審判の日が来る。神に立ち返れ』ということを忘れないように、と。

福音自動車が、今度は葬儀の説教をするために、私をまたその家へ連れて来た。白い、花輪に飾られた棺に安らぐ、その愛らしい顔をのぞき込んだとき、私には彼女の言葉のこだまが聞こえるようだった。彼女は私の顔を見てほほえみ、こう言ったのである。

「マクファーソン姉妹、来てくださってうれしいわ。天国で、あなたに、お会い、しましょう」

それから私たちは、霊柩車と馬車を引く足の確かな馬のあとについて行った。石だらけの山道を越えた（ほかの車には難しすぎると思われた道である）。坂はあまりに急で、車の鼻先が天を向いた。上には切り立った崖がそびえ、下には絶壁が口を開けていた。それから谷へ下ると、山の流れが増水していた。水が車のステップの上まで来たので、だれかが叫んだ。

「もうこれ以上は進めない！」けれども、そうではなかった。福音自動車はエンジンを決然とうならせ、すばやくギアを切り替えて、水の中から抜け出した。しずくを垂らし、あえぎながらも、勝ち誇っていた。

小さな亡きがらは、山頂の松の木の下に葬られた。涙がぬぐい去られるあの国で、栄光ある復活にあずかるという、確かな望みのうちにである。福音自動車は、あらゆる困難を乗り越えてきた（車軸まで泥に沈むこともあれば、とがった岩でタイヤを無残に切り裂かれることもあった。至る所で試され、おびやかされた）。それでも帰り道もずっと走り続け、目的地に着いて務めを終えた。そのとき、長い、息絶えるようなため息をついて、疲れたタイヤが一つ、ゆっくりと地面にへたり込んだ。それでもなお（どんなに洗い、磨いても）、福音自動車は、ほかのすべての真の鋼の戦士と同じく、戦いの名誉の傷を帯びている。その傷なしには、どんな英雄もまことの勲章を受けたとは言えない。私たちはその戦いの傷の一つ一つを見つめ、喜びの心で、それぞれの傷が物語る場面を思い起こすのである。

何マイルもの旅のあいだ、エンジンは一瞬たりとも私たちを困らせたことがない。けれどもタイヤは何度もつぎを当て、またつぎを当て、繕い、補強してきた。やがて励ましの手紙が献金を添えて届き、差し迫った必要を満たしてくれる。この献金は福音自動車の働きのために、と書き添えてあるのである。

福音自動車に救われたいのち

親愛なるマクファーソン姉妹

あなたと福音自動車を私たちの町に遣わしてくださったことを、神に感謝します。あなたが来てくださらなかったら、兄と兄嫁、それに兄嫁の姉妹は、たぶん撃たれて地獄に落ちていたでしょう。兄は、二人を撃って自分も死のうと決めていたのです。けれども兄はベランダにいるとき、神の車が通り過ぎるのを見ました。そして『あ、な、た、はどこで永遠を過ごすのか』という文字を読んだのです。それが兄をつかんで離しませんでした。兄は家に入って妻に話しました（妻はたいへん邪悪な女で、酒場の主人の娘です）。妻は「ふん」と鼻であしらい、心をかたくなにしました。兄が追いつめられていることは知っていたのにです。そのほんの少し前にも、兄は午前二時に地下室で、ガスの栓を開けたまま意識を失っているところを見つけられたのでした。医者は、あと五分遅ければ、この世のどんな手当ても間に合わなかっただろうと言いました。

兄はすばらしく罪の自覚を与えられ、その後救われました。今は聖霊のバプテスマを求めています。祈りは報われます。母が五十五年祈り続けて、兄はついに神に身をゆだねました。御名をほめたたえます。（C・A・S）

デラウェア州バイオラ

約束の日に間に合うよう、私たちは夜も昼も車を走らせなければならなかった。行ってみると、聖徒たちは信仰と良い行いに満ちていた。集会はどれも、霊的に生き返らされ、建て上げられるときとなった。会堂はかつてないほど、熱心な群衆で込み合った。人々は、人類の救いのための代々にわたる神のご計画が説き明かされるのに、熱心に耳を傾けた。罪の自覚は大きかった。あるカトリック

の兄弟は、これ以上ここにいたら祭壇に行かなければならなくなると言って、会堂から走り出た。

集会が終わると、私たちはフィラデルフィアとニューヨークへ向かった。夜通し車を走らせ、夜明け前にフィラデルフィアに着いた。そこで止まらず、アトランティック・ビーチまで進んだ。そこで一時間、砂浜で休み、神の御手の業の偉大さを思いめぐらした。それからまた進んでロングブランチへ行き、愛する聖徒たちの何人かに会った。そしてそこからニューヨークへ行き、ようやく眠ったのである。

第十八章　フィラデルフィアの全国キャンプ集会

『ラッパ吹く者と歌うたう者とは、ひとりのように声を合わせて主をほめ、感謝した（中略）とき、雲はその宮すなわち主の宮に満ちた。祭司たちは雲のゆえに立って勤めをすることができなかった。主の栄光が神の宮に満ちたからである』（第二歴代五・一三〜一四）

一九一七年の秋、私たちはフロリダへ向かう途中でフィラデルフィアを通った。そのとき、そこの愛する聖徒たちと二日間を過ごし、大きな天幕で開かれていた集会に出る恵みにあずかった。主は恵み深く、一人一人に御霊を注いでくださった。何十人もの聖徒たちが、また来て一連の集会を開いてほしいと頼んだ。主は、それが御心から出たことだと、私たちの心にしるしを与えてくださった。多くの祈りと手紙のやりとりのあと、全国キャンプ集会が計画された。天の父は私に、人々を収容できるほど大きな幕屋天幕を買うお金を、熱心に祈り求めるよう言われた。『ブライダル・コール』に知らせを載せた。友人たちが力を合わせ、献金が届いた。

問題は、天幕がどこにあるかだった。政府が大きな天幕製造会社を徴用していたのである。主は、ふさわしい天幕を用意してあり、期日までに届けると請け合ってくださった。それでも、全国キャンプ集会の日が近づくにつれて、私たちは気をもんだ。正直にそう言わなければならない。

主のもとに行くたびに、主は言われた。

「だいじょうぶだ。あなたは天幕を得る」けれども、そのあいだにあちこちの人に出した手紙からは、何の望みも得られなかった。私の求める条件に少しでもかなう天幕は、ニューヨーク市にある一つだけだった。それは三千五百ドルの値がついていて、とても手が出なかった。ときどき、敵がささやいた。

「おまえは天幕のために人々のお金を受け取った。あの大きな天幕が手に入らなかったら、何と言うつもりだ」けれどもイエスは言われた。

『あなたがたは、心を騒がせないがよい』（ヨハネ一四・一）

二年の経験から、私は、ほしい天幕の種類、大きさ、形、座席数、布地、作りについて、自分なりの考えを持っていた。雨をはじき、かびに強く、ロープと張り綱がしっかりしていて、滑車の仕掛けで上げ下ろしができる天幕である。そのような天幕を、どこで買えるだろうか。

夏の働きの地となる都市に着いてみると、まさに私が夢に見、祈り求めていた天幕がそこにあった。町の中心にある建物の屋根裏の倉庫に、袋に入れて縛られ、柱も杭もそろって、すぐ立てられるようになっていた。ハレルヤ！　私たちはそれを見に行き、階段を上った。空に向かって上って行くにつれて、私たちの心も高く上った。天幕の大きさと布地の説明を聞いたのである。布地は十オンスの合衆国陸軍用ズックで、横糸も二重、糸の撚りも二重、縫い目も二重、ロープは上等で、滑車などもそろっている。しかも一度も立てたことがない。今なら二千五百ドルの値打ちがあり、現金なら千八百ドルで買えるという。けれども私は、主がこの天幕に払うよう望んでおられるのは千五百ドルだけだと感じた。初めは、先方はこれを受け入れなかった。けれども、その男の人が戸口に立って『審判の日が来る。神に立ち返れ』という看板の文字を読むと、考え込む顔になった。そして、あとで返事をすると言った。もちろん、天の父が道を開いてくださった。

この天幕は、ある伝道者のために注文され、作られたものだった。神がその奉仕に祝福して用いておられた人である。聖霊のバプテスマが宣べ伝えられると、この伝道者は光を拒み、御霊の注ぎに反対する立場を取った。そして何か月も重い病に倒れた。

神がペンテコステのためにと定めておられたその天幕は、天幕製造業者の事務所に、袋に入ったまま新品で残っていた。宗教上の目的のためにだけ売るように、という指示がついていた。千五百ドルで譲ってもよいという知らせが届いた。天幕はまもなく立てられ、満員になった。大勢の人が天幕を取り巻き、メッ

セージをむさぼるように聞いた。尊い血による救い、聖霊のバプテスマ、イエスがまもなく来られることのメッセージである。

もしこの天幕をほかの都市で買っていたら、送ってもらうことはまずできなかっただろう。そのころは輸送禁止令のために、国じゅうで貨物が麻痺していたからである。たとえ送ることができたとしても、時間があまりにも短かったので、急行便で送らなければならなかっただろう。そうなれば運送料は莫大になったはずである。それで天の父はすべてを計画して、集会が開かれるまさにその都市に、天幕を置いておいてくださったのである。

天幕の町に現れた神の栄光

美しいキャンプ場は、川の近くの丘の上にあり、高い木々の木陰に守られていた。雪のように白い帆布の、大きな新しい福音天幕の周りに、小さな天幕が何列も何列も、四角く区画を作って立てられた。

食堂の天幕、宿舎、読書と休憩の天幕が立てられ、まもなくキャンプ場は、よく整ったキャンプの姿になった。指導者たち自身が腕まくりをして、ほかの人々がこれから快適に過ごせるよう、喜んで手を貸した。重いトラックが、簡易ベッド、寝台、座席、食器、キャンプ用具を山と積んで、次々とやって来た。けれども、あらゆる騒ぎと準備のさなかにも、兄弟も姉妹も、叫んで神をほめたたえる時間を見つけた。木々には聖徒たちのハレルヤがこだました。新しく着いた人たちも、次々に腕まくりをして働き始めた。キャンプ集会が始まる前の晩から、神の栄光がその場にとどまっているようだった。私たちは大きなかがり火の周りに集まり、楽器を奏で、歌い、主を礼拝した。主が私たちのただ中でこれからなさろうとしていることのためにである。

（注）以下は、一九一八年の『ブライダル・コール』九月号に載った報告である。

何百人もの聖徒たちが立ち上がり、天に向かって手を上げ、目を閉じている。上を向いた顔には涙が流れ、彼らはいわば新しい歌を歌っている。聖霊が彼らの唇を通して、愛と感謝の驚くべき和音で天の賛歌を響かせられる。それは決して忘れられない光景である。天で、いと高き神の御座の前にいるとはどのようなことかと、私はいつも思い描いてきた。この光景は、その姿によく似ている。

ああ、彼らの祈りを聞いていただけたら。私がこれまで聞いたことのない祈り方で、彼らは祈る。一人一人が隣の人のことを忘れ、祈りにこたえてくださる主のほかは、すべてを忘れている。何百人もが一度に、力の限り声に出して祈るので、その中でだれの声とも聞き分けられない。すべての声が、一つの大きな心の鼓動に溶け合うのである。それは愛の鼓動であり、神が思いのままになさるようにという願いの鼓動である。それはすぐに、あがめる思いに変わり、賛美の川となって、まっすぐ神の御座へと流れていく。言うまでもなく、祈りが終わる前に、たいてい答えが来る。

キャンプ場では毎晩、心を揺さぶり、奮い立たせる光景が見られる。食堂の天幕での夕食のあと、人々は夜の集会の支度に出て行く。二、三人の小さなグループが、小道や木の下にひざまずいているのをよく見かける。心にあることを何でも、神の前に差し出しているのである。やがて夕方の影が長くなると、大きな幕屋天幕に明かりがともり、聖徒たちはまもなく輝く天幕の中を満たす。そして夜の空気に、神の愛にあふれる心からの歌と賛美が響き渡る。集会のあとも、天幕の中で祈りと賛美の声が続いているのを聞くのは、珍しくない。

これを書く前の晩には、多くの人の心を溶かす光景があった。大きな婦人用宿舎の天幕の一方の端で、子供たちの集会が開かれた。そこで幼い子供たちが、御霊にすばらしく用いられた。多くの幼子が、他国の言葉で語りながら神をあがめた。親たちも何人かいて、聖霊が子供たちに働かれるのを見て、胸がいっぱいになった。決して忘れられない集会だった。

神が獅子の口を閉ざされる

天と地が触れ合うかのようなこの美しい丘に、天幕の町が初めて立てられた。そのとき、そこが住民の七十五パーセントがローマ・カトリックの地域だとわかった。近くにはカトリックの施設や学校もあった。少年たちの群れが昼も夜もキャンプ場を見回り、何にでもだれにでも目を光らせていた。彼らは物心ついた

ころからこの丘を自分たちのものとしてきたので、私たちが丘に入り込んだことにひどく腹を立てていた。やがて集会が始まって、神の力が下り始めた。叫ぶ者、踊る者がいて、多くの人が神の力に打たれて倒れた。すると地域全体が根底から揺さぶられた。彼らはそんなものを見たことがなかったのである。

次の晩、大群衆が天幕を満たし、外もぐるりと取り巻いた。御霊の現れがあるたびに、彼らはどっと笑い出し、あざけり、ばかにした。祭壇での祈りを始めようとすると、ならず者たちが一団となって天幕になだれ込んだ。そして求める人たちの上にかぶさるように立って、あざけり、やじった。二度目の月曜日の夜には、それまでで最悪の群衆がやって来た。人々は怒り狂っているようで、多くの者が棍棒を手にして来た。頭に率いられた組織立った一団もいて、笛を持ち、仲間に合図を送っていた。あとで刑事たちが話してくれたところでは、その夜、天幕を一つ残らずなぎ倒す計画が前もって立てられていたという。そのための公然の脅しもあったのである。

悪魔は用意周到に計画を立てていた。その夜、町の中心部で白人と黒人のあいだに暴動が起こった。それで、キャンプ集会の場で秩序を保つ警官が一人もいなかった。暴徒は天幕の周りを、あちらへこちらへと押し寄せた。話すことはできず、私たちにできるのは、歌って神にすがることだけだった。私たちはみな祈りの霊を保ち、聖徒たちは多くの賛美歌を歌った。『わがために裂かれた千歳の岩よ』『わが神よ、あなたに近く』『わが魂は安らかなり』『イエス、ああ、その名の甘さよ』などである。

集会は早めに解散し、祭壇での祈りはしなかった。群衆はスズメバチの群れのように、天幕の中やキャンプ場じゅうを押し寄せた。ようやく一人の警官がキャンプ場に来たが、事態を収めることはできなかった。

主は私に、徹夜の祈りを呼びかけるよう示されたように思えた。この問題をきっぱりと解決するためである。聖徒たちは快く同意して、私の周りに集まった。私たちは次々に、この少年たちと男たちの救いのために祈り始めた。信仰復興を求めて祈り、神が思いのままになさるよう祈った。

このときから、外の人々とのいざこざは一つもなくなった。反対は、夏の日差しの前の雪のように溶け去った。

この外からの騒ぎのおかげで、さまざまな教会の聖職者たちが私たちを支えてくれるようになった。あるバプテストの説教者は壇上に立ち、最後まで私たちの味方をすると約束した。もう一人、聖公会の聖職者は、自分の教会の少年たちに行儀よくするよう言った、と話した。そして、救いを求めて前に出たいと思ったら、そうしなさいと言ったという。教会の信徒、組会の指導者、牧師たちが、私たちのもとに続々と来ている。この集会が始まってから、多くの人が聖霊を受けた。

また、どこの教会にも属していない人々や、教会に行ったことのない人々が大勢いることもわかった。この人々は驚き、関心を持って集まっていて、神はこの人々の上にも力強く働いておられる。かつての敵も友人も、今では私たちの文書を求めている。伝道文書や小冊子がたくさん配られている。

大群衆の扱いに慣れた警官たちが、日曜日の夜にはキャンプ場に八千人から一万人の人がいたと話してくれた。そして、これほど秩序の保たれた集会を私は見たことがない。

あざけりに来た二人の若い婦人がいた。私たちのように人々を神の力に打たれたまま横たわらせておくのは恥ずべきことだ、と言っていた。ところが突然泣き出し、救いを求めて大声で叫んだ。そして十五分もたたないうちに、神の力に打たれてあおむけに倒れ、異言で語り、神をほめたたえていた。別の若い婦人もあざけりに来た。祭壇への招きがしばらく続いたあと、彼女は深い罪の自覚に打たれ、前へ進み出た。この力が突然彼女を打ち、祭壇の前のわらの上に倒れ伏させた。彼女は救われた。まもなく、あまりに澄んだ異言をとうとうと語り出したので、多くの人がそのことを口にした。それから彼女は解き明かしをし、神の栄光に満たされた。

見物人の中から一人の男が飛び出して、自分の子を返せと言った。連れて行きたいなら、自分で娘に手をかけて連れて行くがよいと言われた。すると、男は恐れに満たされて立ち去った。娘を連れて行ってくれる人を見つけて来る、と言い捨ててである。その言葉どおり、男は娘のおばを連れて戻って来た。おばは娘の手を乱暴に取って席に連れて行き、きつく叱って、顔を平手で打った。その瞬間、神の力がおばを打ち、よろめかせて床に倒した。この人が、どうして神に逆

らうことができようか。おばは神の御手を身に受けたまま、二人の友人に支えられて集会から出て行った。最後に聞いたところでは、たいへん重い病で床に就いているという。

この若い婦人がバプテスマを受けるのを見ていた一人の旅回りのセールスマンが、はっきりと言った。これが神の力であることを、もう疑わない。自分も同じ経験を求め始める、と。

あらゆる教派の人々が、祈ってもらうために病人を連れて来る。ある父親は、やせ衰えた幼い子供を連れて来た。体が弱く、歩くことができないのである。その幼子のために祈り、足で立たせてみると、子供は何か月ぶりかで歩き出した。父親の顔は、誇らしい喜びと幸せに輝いた。

ある子供は、ひどい皮膚の病で全身ができものに覆われ、見るも痛ましい姿だった。その子は、イエスの力によってたちどころにいやされた。

ある若い婦人は、手紙にこう書いている。「何か月ものあいだ、舞踏病とひどい神経の病に苦しめられてきました。顔と目がひきつるので、集会で座っているのも恥ずかしいほどでした。祈ってもらい、悪霊が叱りつけられて、私は全身すっかり丈夫になりました。ひきつりも神経の病もありません。ああ、なんという安らぎでしょう！　なんという解放でしょう！　なんという救い主でしょう！」

ある夜、ポーランド人の若い娘が祭壇へ駆け寄った。まもなく彼女は跳び上がり、栄光に輝く顔で叫んだ。

「とても幸せです。受けました」のちに彼女はバプテスマを受けた。そして、見つけたばかりのこの栄光あるイエスについて、同胞に彼らの言葉で話させてほしいと願い出た。それから同じ話を英語でもした。そのあいだ、主の栄光が天幕を満たした。見物に来ていた近所の一人の婦人が、天幕を出ようとしたちょうどそのとき、神の力に打たれて倒れた。見物人たちがすぐに集まり、息子が彼女を連れて帰った。けれども主はすでに御業をなさっていた。彼女は連れて行かれながら叫んだ。「受けました」

集会が始まってまもなく、二人の働き手が到着した。コネティカット州ニューロンドンのエリザベス・シソン姉妹と、ミルウォーキーのサイラス・B・フォックラー兄弟である。神は二人のメッセージを、集会ですばらしく用いてくださっている。

ある朝の集会のあと、ほとんどの人が昼食に行ってしまったころ、十二歳の少女がだれにも気づかれずにわらの上に横たわっていた。けれども一人の兄弟が、彼女がメッセージを語り、それを解き明かしていることに気づいた。彼が少女のそばに寄ると、ほかの人たちもみな心を合わせてそれに続いた。続く静けさの中で、少女は三十分近く、異言で語ってはメッセージを解き明かした。勧め、警告、慰めのメッセージが、その唇からあふれ出た。組み立ても整い、欠けたところのない、美しいメッセージだった。少女が集会を開いたのである。

ある男の人は、前の晩、神が夢を与えてくださったと証しした。その夢では、小さな子供たちが、刈ったとうもろこしを束ねて立てていたという。まことに神は、このようにして幼い者たちを用いておられる。

六歳の別の小さな女の子が、突然神の力に満たされ、かわいらしく子供らしい仕方で踊り出した。マクファーソン姉妹は御霊に導かれて、その子を祭壇の手すりの上に立たせた。すると二十分ものあいだ、その女の子は、神の御業を見に来た群衆にイエスを宣べ伝えた。それは決して忘れられない光景だった。愛らしい小さな顔は神の栄光に輝き、子供の声が罪人たちに呼びかけていた。自分の知っているこのイエスを知ってほしい、と。

二人の若い婦人がいた。一人はカトリック、一人はメソジストだった。二人は座ってあざけり、ひどく面白がっているふりをしていた。心の中にある本当の罪の自覚を隠そうとしていたのである。私が二人に話しかけたほうがいいと言う人もいたが、私たちはただ祈った。そのあと二人は少しおとなしくなったようで、私は二人のことをすっかり忘れていた。ところが祭壇で祈っていると、だれかが来て言った。

「姉妹、あそこに、あなたと話したいという若い婦人が二人います」

会衆のあいだを通って行ってみると、あの二人の娘がいた。顔つきがすっかり変わっていた。笑いはすっかり消え、目は泣いて赤くなっていた。私は二人を招いた。

「ねえ、お嬢さんたち、今夜イエスに立ち返りたいと思いませんか。ひざまずいて罪を告白し、心をイエスにささげませんか」すると二人は椅子から落ちるようにひざまずき、声をあげて祈り、叫び始めた。

「主よ、お赦しください。神よ、罪人の私をあわれんでください（ルカ一八・一三）」

天幕の別の所に呼ばれたので、この娘たちといっしょに祈ってくれる人はいないかと、私は見回した。すぐ近くで見ていたのは、メソジスト教会の組会の指導者で、日曜学校の校長をしている人だった。ほんの少し前に私が話をしていた人で、ペンテコステを調べに来ていた。この叫びや異言にいったい何かあるのかどうか、確かめに来たのである。

「兄弟、こちらに来て、この愛する娘たちが救われるよう、いっしょに祈ってください」と私たちは頼んだ。彼らはためらわずにひざまずき、すすり泣く若い婦人たちのために祈り始めた。

次にこちら側に戻って来たとき、私の目に入った光景を、皆さんに見ていただけたらどんなにいいだろう！

二人のメソジストの兄弟が目を閉じて祈っているあいだに、神の力が下っていた。二人の若い婦人は神の力に打たれて倒れ伏し、聖霊のバプテスマを受けて、他国の言葉で語り始めていたのである。

娘たちを取り巻いて立つ小さな人だかりには、罪人も多かった。その人たちは、神の力と、娘の一人が語る幻に、深く心を打たれていた。娘が語る尊い血のことを私たちが歌うと、カトリックの警官までが手を上げて、いっしょに歌った。

御霊は私に、メソジストの組会の指導者に閉会の祈りをしてもらうよう示された。彼はへりくだった祈りの中で、こう言った。

「ああ、主イエスよ、これがこの終わりの時に私に与えられる新しい光でしたら、どうか私にそれを示し、私にバプテスマを授けてください。イエスの御名によって。アーメン」

私は、自分の天幕に戻る支度として、聖書を取りに大天幕へ入ろうと向きを変えたところだった。そのとき、背後で何かがどさりと地面に倒れる音と叫び声がした。人々はみな駆け寄って叫んだ。急いで戻って何事かと見ると、あのメソジストの組会の指導者が、神の力に打たれてあおむけに倒れていた。いや、あおむけとさえ言えない。実際には頭とかかとだけが地面についていて、体は神の力で地面から持ち上げられ、足はぐるぐる回っていたのである。

私たちがそばに行く前に、彼は御霊が語らせるままに、異言で叫び、主をほめたたえていた。しばらくすると彼は跳び起き、跳びはねて神をほめたたえながら、天幕を回った。

次の晩、彼は自分の教会から十二人近い人を連れて来た。そして、南アメリカへの宣教師になるために学んでいる息子が、バプテスマを求めるつもりだと言った。

ベント姉妹の報告から

（ここにはP・ベント姉妹の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

罪人たちを祭壇に来させるのに、説き伏せる必要はなかった。たくましい男たちが、顔に涙を流しながら文字どおり通路を走って来る。そしてイエスの足もとに身を投げ出し、すすり泣いてあわれみを求める。それは珍しい光景ではなかった。ここには、さまざまな国の生まれの聖徒たちがいる。イタリア、ロシア、リトアニア、ドイツ、スウェーデン、ポーランド、フィンランド、オランダ、カナダ、アイルランド、イギリス、エジプトである。みな、イエスの御名をあがめるために来たのである。

証し

私はカトリック教会で育てられました。家の近くの丘に天幕の町が立てられていると聞きました。そこの人たちは、叫んだり、踊ったり、神の力に打たれて倒れたり、異言で語ったりしているというのです。それで、いったいどういうことなのか見ようと、幕屋までずっと走って行きました。

丘のふもとに来て、木々のあいだから見上げると、天幕にはすっかり明かりがともっていました。ブラスバンドが演奏していました。コルネット、トロンボーン、ピッコロ、ピアノ、大太鼓と小太鼓、タンバリンが、みな私の聞いたことのない新しい歌を奏でていました。その歌は『勝利』という歌で、今では私も歌っています。丘の上まで来ると、群衆の頭越しに、大勢の人が壇上や会衆の中で踊ったり跳びはねたりしているのが見えました。歌が終わると、みな立ち上がって、叫びに叫び、とても不思議な音楽を歌いました。あとで知ったのですが、それは御霊のうちに歌われる天の賛歌だったのです。

大群衆のために天幕のそばまではなかなか近寄れなかったので、近くにいた人に尋ねました。

「これはいったい何なんですか。この人たちは気が狂っているんですか。何をそんなに踊ったり叫んだりしているんですか」

その紳士はうなずいて、そうだ、みんな気が狂っているに違いないと思う、と言いました。こんな集会、こんな騒ぎは、生まれてこのかた聞いたことがない、というのです。一人や二人が気が狂っているのならわかります。けれども、どうしてこんなに大勢が正気を失うことがあるでしょうか。踊っている人は五十人、叫んでいる人は五百人はいたに違いありません。

ちょうどそのとき、もっと近くへ押し進むことができました。すると、驚くべき光景が目に飛び込んできました。祭壇の前の、天幕の幅いっぱいに、また壇上にも、人々が倒れ伏していたのです。天幕の一方の側には男の人たちが、もう一方の側には女の人たちが、この大いなる力に打たれていました。

私の近くで、一人の若い婦人が大粒の涙を流して泣きながら、こう言っていました。

「ああ、イエスさま、私を救ってください。過去を赦してください。そうすれば私はとこしえにあなたに従います」まもなく、彼女の顔が喜びに満ちるのが見えました。彼女はわらの上に倒れ、まもなく異言で語り出しました。知らない言葉でしたが、ああ、なんとはっきりと澄んでいたことでしょう。天幕の前のほうでは、あちこちでこういうことが起こっていました。泣く人、歌う人、叫ぶ人、踊る人。私はあっけにとられて見ていました。それから、病人のために祈っていた壇の端のほうから、何人かの人が踊りながらやって来ました。いやされたと叫んでいたのです。

足の不自由だった一人の男の人は、とても高く跳びました。いや、あんなに跳ぶ人は生まれてこのかた見たことがありません。彼は叫び、神をほめたたえていました。真夜中になっても集会はまだ続いていましたが、私は思い切って帰らなければなりませんでした。

次の晩も、私はまたそこにいました。もう行かずにはいられないのです。今では救われ、聖霊のバプテスマも受けて、ああ、とても幸せです。笑われているのは知っています。けれども私も笑っています。とても幸せなのですから。

（次は別の人の証しである。）

私は長年、熱心なキリスト者で、教会の信徒でした。けれども、いつも何かが欠けていると感じ、自分の生活にもっと力がほしいと願っていました。このキャンプ集会が私たちの近所に来たとき、私は証しを聞き、聖霊と、異言で語るという聖書的なしるしについての説教を聞きました。これこそ自分に必要なもの、助け主だとわかりました。私は祭壇に行って求め始めました。

担当の姉妹が私のところに来て、賛美の門を通って入るようにと言いました。また、心を尽くして主を求める日に、主は見いだされる、と言いました。私は心を尽くして主を賛美し始めました。姉妹は私に手を置いて祈り、次の人のところへ行きました。けれども私は神の力に打たれて床に倒れ、大きな御使を見ました。広げた翼は、地の果てまで届くかのようでした。それから、十字架にかかっておられるイエスと、流れ落ちるその血を見ました。私は聖霊を受けました。聖霊は他国の言葉で、イエスへの賛美を語られました。ハレルヤ！　長いあいだ感じていた必要が満たされて、とても幸せです。

私は長年、目を患ってきました。分厚い眼鏡をかけていましたが、それでも刺すような痛みがあり、視力も衰えていました。三日前にこの天幕で祈ってもらい、すっかりいやされました。眼鏡はケースごと捨ててしまい、どんなに細かい字でも読めます。すべての栄光をイエスにお返しします。

第十九章　マサチューセッツからニューヨークまでの集会

『朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない（中略）よく言っておく。あなたがたがイスラエルの町々を回り終らないうちに、人の子は来るであろう』（伝道一一・六、マタイ一〇・二三）

何か月ものあいだ、主はこのメッセージを私の心に焼きつけておられた。

「急いで道やかきねのあたりに出て行け。人の行かない所へ行き、イエスはまもなく来ると告げよ」

カリフォルニアという名が、耳の中で鳴り響いていた。主はしばらく前から私たちに、「伝道文書を配りながら大陸を横断する福音自動車の旅」をするよう語っておられた。主はこれまで、まことにはっきりと私たちを導いてくださったので、それが主の声であることがわかった。夫は全国キャンプ集会の後半に出ていたが、またフロリダへ行ってしまっていた。私たちの車は、ずいぶん使い込んだものだった。その車を自分で運転して、これほど長い旅をすると考えるのは、私にとってたいへんな企てに思えた。

私は主にしるしを求めて、こう願った。もし私がこの旅をするのが御心なら、新しい、もっと力の強い車を手に入れられるよう助けてください、と。キャンプ集会の会計をすべて扱っていた委員会の話では、献金は多かったが、費用もたいへんかさんだという。大勢の働き手で分ける分は、ほとんど残っていなかった。それで、私たち自身の費用を払ってしまえば、車のためには何も残らないことになる。

母にこのことを話すと、母は言った。「それなら、古い車がいい値で売れるよう、主にお願いしなさい。足りない分はお母さんが払うわ」

言うまでもなく、私はすぐさま通りへ出て、その手はずをつけに行った。三十分もたたないうちに、古い車は、初めに買ったときの値段とほとんど変わらない額で売れた。そして数時間のうちに、新しい福音自動車に、十五センチの金文字が描き入れられていた。『イエスはまもなく来られる。備えをせよ』『あなたはどこで永遠を過ごすのか』という文字である。

カリフォルニアへ出発する前に、マサチューセッツとコネティカットからニューヨークまで、一続きの集会を開いた。最初は次の町である。

コネティカット州ロング・ヒル

そこでは天幕が立てられ、週末の集会の広告が出されていた。周りの町々から聖徒たちが集まり、主は私たちの上に御霊を豊かに注いでくださった。何人かが救われ、数人がバプテスマを受けた。

その中には、何年も求め続けていた一人の若い男の人がいた。

モントウェイトのキャンプ集会

ここで、愛するエリザベス・シソン姉妹が私たちに加わった。フィラデルフィアの全国キャンプ集会で、終わりまで忠実に働いてくれた人である。姉妹はこの一続きの集会のあいだずっと私たちと旅をともにし、主にすばらしく用いられた。

主の栄光が下った。フィラデルフィア、ニューヨーク、ボストン、コネティカット、ニューハンプシャー、ロードアイランドから聖徒たちが来ていた。多くの人が救われ、聖霊のバプテスマを受けて、聖書的なしるしである他国の言葉を語った。

マサチューセッツ州ウースター

H・T・カーペンター長老が責任者を務めるペンテコステ伝道所で、三日間の大会が開かれた。町の外から聖徒たちが押し寄せ、ウースターの聖徒たちととも

に声をあげて賛美した。すると主の栄光が下って人々の上にとどまり、人々は御霊の力を受けて踊り、叫び、歌った。主は罪人を救い、信者に聖霊のバプテスマを授けてくださった。

コネティカット州ハートフォードのユニティ・ホール

聖徒たちは牧師のW・G・ニールソン兄弟とともに、町でいちばん美しいホールの一つを借りていた。七百人ほどが座れるホールである。主はニールソン兄弟に、この集会で御霊を注ぐと約束しておられた。主の御名をほめたたえよ。主はその言葉を守られた。神はすばらしく御霊を注いでくださった。四、五人がバプテスマを受け、同じほどの人が救われた集会もあった。

ニューヨーク市のハーレム・カジノ

（報告）

ニューヨークに着いてみると、ボンドラン兄弟夫妻の信仰は、自分たちの集会所の枠をはみ出していた。二人は大会の主な五日間のために、大きなハーレム・カジノを借りていたのである。ボンドラン兄弟は、百十五丁目とマンハッタン・アベニューの角にあるホテルに、私たちを泊めてくれた。マウント・オリベット集会所は、この建物の一階にある。聞けば、そこは以前、ダンスホールとトランプ部屋に使われていたという。二人が心をイエスにささげたとき、この部屋は、魂の救いと信者のバプテスマのための、主の尊い奉仕に明け渡された。ハレルヤ！

最初の集会から、主の栄光がさっと下って、集会所を満たした。ボンドラン兄弟夫妻は、美しく素朴な信仰をもって、自由献金のやり方で聖徒たちをもてなした。のちに、カジノの借り賃などの費用をすべて払い終えてから、二人は証しの中で私たちにはっきりと語った。大会を始めたとき、会計にはちょうど六ドル半しかなかったというのである。

ニューヨーク市でペンテコステの大会を開くのに、ハーレム・カジノほどよい場所はなかっただろう。地下鉄、高架鉄道、路面電車、バスで、たやすく行けるのである。ホールには七百人ほどが座れた。十月六日の日曜日の午後、カジノで集会が始まると、ほとんどすべての席が埋まり、椅子が運び込まれた。そのあいだにも、神の栄光が聖徒一人一人の上に下った。

私たちは市内の教会からも招きを受け、ジョン・ストリート・メソジスト監督教会の、実業家たちの昼の集会で毎日話した。そこでは、聖霊のバプテスマと、異言で語るという聖書的なしるしを、自由に宣べ伝えさせてくれた。この集会には、キリスト教の働き手や牧師たちが大勢来ていた。それで広い範囲に届いた。これらの集会はまことに、静かな水に落とした石のようだった。波紋が四方八方に、遠く広く伝わっていったのである。

日曜日の午後にバプテスマを受けた人々の中に、「希望の扉」の働きのエマ・M・ホイットモア夫人がいた。祝福された神の子として、また長年熱心に働いてきたキリスト教の働き手として、世界じゅうに知られた人である。まことに神は、この終わりの日々に、大いなる栄光ある御業をなしておられる。

夜によって十人、十二人が、ある夜には十四人が、救いを求めて前に進み出た。

ニューヨークの大会の最高の喜びの一つは、W・K・ボウトン牧師の妻のことだった。夫人は、コロナに神の力が下って以来二年間、熱心に求め続けていた。その夫人が壇上で神の力に打たれて倒れ、バプテスマを受けるまでに至ったのである。ボウトン兄弟夫妻が祝福に満ちた聖霊を受けたとき、私たちは二人のそばにひざまずいていた。喜びで胸が張り裂けそうだった。ボウトン兄弟は、喜びのあまり跳びはね、踊った。すべての栄光をイエスに！

リウマチに苦しんでいた一人の婦人は、たちどころにいやされ、若い娘のように踊った。今はやっているあの恐ろしい流行病から、二人がいやされた。ほかの病や苦しみからいやされた人も大勢いた。そのすべての栄光と賛美を、イエスにお返しする。救われた人やバプテスマを受けた人の数は数えていなかった。けれども、大勢だったことはわかっている。主をほめたたえよ。

十月十日の木曜日は集会の最後の夜だったので、大きな合同集会が計画されていた。半径三十マイル以内のいろいろなペンテコステの集会から、若い人たちが代表として出る集会である。

四十二丁目のロバート・ブラウン兄弟が、この部の司会を務めた。歌か「燃える」証しを出したのは、次の集会である。四十二丁目のグラッド・タイディングス・ホール、ニュージャージーのビューラ・ハイツ集会、ブルックリンのロビンソン姉妹の伝道所、ブルックリンのライトハウス・ペンテコステ集会、ベテル集会、トッテンビル、ニューロシェル、ウェスト・ニューブライトン、アズベリー・パーク、フィラデルフィア。

（ここには、マウント・オリベットを代表したボンドラン兄弟と、コロナを代表したW・K・ボウトン牧師のあいさつが載っているが、話し手の没年が確かめられないため訳していない。）

ブラウン兄弟は、締めくくりの言葉で次のように語った。

「すべての集会を代表して申し上げます。伝道者が来てくださると、私たちの心は喜びます。神が伝道者を教会に置かれたのです。ここにいるすべての集会が、私たちの姉妹が来てくださったことを喜んでいると確信しています。全能の神が、男も女も子供も一人残らず助けて、今夜のうちに、イエスに会う備えができるようにしてくださるよう祈ります」

説教が終わると、多くの罪人が立ち上がり、席を離れて祭壇へ行き、イエスに身をゆだねた。求める人たちが二列になって、ホールの前の端から端まで並んだ。何人かがバプテスマを受け、ほかの人たちはいやされた。「ニューヨークの大会は、イエスが来られる日まで大切に覚えておかれる、輝かしい一点となるだろう。多くの輝かしい回心と、バプテスマを受けた魂と、聖徒たちの尊い交わりのゆえである」

ニューヨーク州ニューロシェル

そこにいた八日間、不協和音にも、意地の悪い言葉や批判にも、告げ口にも、一つとして出会わなかった。ただイエスとその賛美だけが、皆の心を占めているようだった。初日の集会がまだ本格的に始まらないうちに、席はすべて埋まった。聖徒たちは壇上の床に座り、通路に立った。けれども、だれも少しも気にしなかった。聖徒たちが天の賛歌を歌い、御霊のうちに楽器を奏でたりすると、神の力が流れとなって下った。

集会が進むにつれて、多くの人が救われ、バプテスマを受けた。多くの体がいやされた。最後の日も、教会はまた戸口までぎっしり詰まり、控えの間さえいっぱいになった。

インフルエンザは、ほかの所と同じく、この町でも猛威をふるっていた。けれども主は驚くほど私たちに良くしてくださった。メッセージを告げ知らせることを、一時も妨げられないようにしてくださったのである。私たちが去った直後に、町々の教会が閉鎖された。ほかの町では、私たちが着く直前に教会が再開された。聖霊が私たちのために描いてくださった予定を妨げるようなときに、閉鎖された集会は一つもなかった。

ニューロシェルで、私は土曜の夜にこの病にかかった。けれども主は、日曜の三度の集会のあいだ、私を支えてくださった。日曜の夜には激しい悪寒に襲われ、高い熱が出た。けれども聖徒たちが祈ってくれ、私も素朴な信仰によって断固として起き上がった。主はそれにこたえて、その週の集会を私にやり遂げさせてくださった。まるまる休んだ集会は、一回だけだった。

けれども私は、厳しい試練を通った。幼い娘がこの流行病にかかり、それがすぐに両側の肺炎になったのである。二日のあいだ、私にとってかけがえのない、いとしい幼いいのちが、この世を去ってイエスのもとへ行ってしまうに違いないと思われた。

聖徒たちが娘のために祈ろうと集まった。私は、喉にこみ上げるものと胸の重さをこらえて、説教を続けなければならなかった。娘は前に、ハーレム・カジノで私のもとに来て、こうささやいたことがあった。

「ママ、お願い。今夜、証しをしていいですか」私が「いいわよ」と言うと、娘は壇上に立ち、こう証しした。

「主が私を救い、血で洗い、義の白い衣を着せてくださったことを感謝します。二年前、主は私に聖霊のバプテスマを授け、私を通して他国の言葉で語ってくださいました。私は、雲の中で主にお会いするまで、どこまでもイエスとともに貫き通します」

私たちは、暖房も家庭の快適さもない、家具付きの貸間に泊まっていた。私は、娘をちゃんと世話できる小さな家を切に願った。そして、意識をなくす前に娘が言ったことを思い出した。

「ああ、ママ、学校に行ける小さなおうちがあったらいいのに」私は言った。

「ねえ、ママが働きをやめて、なんとか小さなおうちを持つことにしようか」娘は言った。

「ううん、ママ、働きをやめてほしくない。自分で勉強するようにするから」いとしい小羊！

ある日の午後、階段の上でだれかが私を迎え、ロバータがひどく弱っているとささやいた。私はそこにとどまって娘を見ていることに、耐えられなかった。床にひれ伏して、娘のいのちを助けてくださるよう神に祈った。主は、娘を起き上がらせるという確信を与えてくださった。それだけでなく、次のように語って、私の悩む心に香油を注いでくださった。

「あなたに小さな家を与えよう。あなたの幼子たちのための巣を、カリフォルニアのロサンゼルスに与えよう。そこで子供たちは遊び、幸せに過ごし、学校に通い、ほかの子供たちと同じように家庭の環境を持つことができる。あなたは前に一度、わたしの意志の外で家を整えた。そして、それは取り去られた。今度は、わたしの意志のうちで家を与えよう」

主は私に、アブラハムのことを示された。アブラハムはひとり子イサクを惜しまず、いけにえの祭壇の上に横たえた。そして、子が死ぬのを見る苦しみを免れた。それから主は、私のことを示された。私は一人ではなく、二人の子供をささげてきた。この何か月も子供たちを連れて、町から町へ、村から村へと旅してきた。家もなく、子供たちを寝かしつけるベッドもなかった。そして主は、アブラハムにイサクを残されたように、私にも二人の子供を残してくださる。私が主の優しい守りを喜ぶようにしてくださる、と。

すべてがあまりにも現実のことのように思えたので、小さなバンガローも、その床も庭も、ほとんど目に見えるようだった。

ブラウン兄弟とトンプソン兄弟がロバータに手を置いて祈ると、主は娘の体に触れてくださった。娘はまもなく目を開いた。まだひどく弱っていたが、私たちみなを見分け、また笑顔を見せることができた。私はひざまずき、娘の耳に唇を寄せてささやいた。

「ああ、ロバータ、神さまがママに、小さなおうちをくださるっておっしゃったのよ。お花やばらがあって、あなたが学校に行けるおうちよ」

娘の顔は明るくなり、細い小さな声で答えた。「ママ、カナリアも飼っていいですか」聞いていた幼いロルフも言った。「ぼくは、ばらの木と庭をもらえますか」

それに続く何週間も、四千マイルの車の旅のあいだもずっと、幼い子供たちは話し合い、計画を立てた。神が小さなバンガローをくださったら何をしようか、と。ときどき敵が私を試そうとして、こう言った。

「いいか、おまえがこんなふうに子供たちに望みを持たせるのは、ひどいことだ。もし当てが外れたら、どうするのか」けれども天の父は、失望させることも、みことばをたがえることもなさらない。主の御名をほめたたえよ！

第二十章　大陸横断の福音の旅（その一）

『主人が僕に言った、「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい」』（ルカ一四・二三）

オクラホマ州タルサのS・A・ジェイミソン牧師から、タルサに来て伝道集会を開いてほしいという手紙が届いていた。主も、行くべきだというはっきりしたしるしを与えてくださっていた。

ところが、いよいよ福音自動車で出発しようとしたとき、電報が届いた。

『来訪を延期されたし。教会はすべて閉鎖。各地を旅するのは危険なり』

このことで主のもとに行くと、主ははっきりと私に語られた。

「恐れるな。一日もむだにしてはならない。すぐに行け。あなたが着くその日に集会の禁止は解かれ、教会は開かれる」

（旅日誌から）

今朝九時、最後の留め金がかけられ、最後のベルトが締められた。荷物も、福音書も、証しの文書も、伝道文書も、所定の場所に収まった。最後の「さようなら」と「神の祝福がありますように」が交わされた。エンジンが静かにうなった（グリースカップはすべて満たし、タイヤも点検し、ガソリンタンクもいっぱいにしてあった）。そして車は、静かに手際よく走り出した。私たちが何日もこの旅の支度をしてきたことを、車も知っているかのようだった。多くの聖徒たちがおごそかに祈って車をささげ、その上に手を置いてくれたことも、知っているようだった。車は、前途の長い旅で自分に何が期待されているかを、わきまえているようだった。自分の使命の大切さも、わきまえているようだった。愛の大いなるメッセージにふさわしい先触れとなる、という使命である。車のいのちにも私のいのちにも、大きな機会が訪れた。その思いに、車の心臓と私の心臓が一つになって脈打っているかのようだった。

出発点の百十五丁目から七番街を百十丁目まで進み、そこからリバーサイド・ドライブに入った。のんびりと交通整理をしていた大柄な警官が、福音自動車に目を留め、大声で言った。

「『あなたはどこで永遠を過ごすのか』だって！　いやはや、こいつは驚いた」

私たちは心の中でほほえんだ。そして思わずにはいられなかった。もしこの警官が、上流の人々の住むリバーサイド・ドライブで説教をするとしたら、これ以上よい説教の題は選べなかっただろう、と。

スタテン島へ渡り、そこからニュージャージーへ渡った。船の上で、切符売り場で、また道行く人々に、伝道文書を配った。

五時間走って、フィラデルフィアに着いた。ここで愛する聖徒たちにまた会えて、喜んだ。カリフォルニアへ送る貨物の手配を済ませてから、ニュージャージー州カムデンへ渡った。そこでは医師のシャープ姉妹が、美しいバンガローを開けて暖め、私たちを迎えてくれた。

幼い娘ロバータも私も病気をしたあとで、その日は百マイルも運転してきた。それで、ここで受けた暖かさと明るさ、愛ともてなしのおかげで、この家はまさに憩いの港となった。

ペンシルベニア州ゲティスバーグ（十月二十六日）

イエスに栄光あれ！　福音自動車は、百二十マイルにわたって伝道文書の跡を残してきた。人々はなんと飢え渇いていることだろう！　人々は、救いについて、また私たちの教えについて、鋭い問いを投げかける。その問いが、心の中の渇きを表している。ランカスターでは交通が混雑していて、主は私たちを大通りに十分間とどめられた。そのあいだに、何十人もの男女が車の周りに押し寄せ、看板の文字を読み、文書を求めた。

さらにマウントビル、ヨーク、ニューオックスフォードを通り、名高い古戦場を過ぎて、ゲティスバーグに着いた。ちょうど非番の兵士たちが通りにあふれて

いて、伝道文書を配る絶好の機会になった。今はアレゲーニー山脈の近くで、道ばたにキャンプしている。

ペンシルベニア州ピッツバーグ（十月二十七日）

今日、絶えず配ってきた伝道文書は、百七十五マイルにわたって、白い糸のように後ろへ続いている。一日じゅう、アレゲーニー山脈を登ってきた。昼には、標高六百八十メートルほどのタスカローラ峠に着いた。今はピッツバーグの郊外にいる。幹線道路のわきにキャンプを張った。名高い鉄鋼王カーネギー氏の地所である。今夜客がいることを、氏はきっと知らないだろう。けれども主が、ここにキャンプするよう導いてくださったのである。今日は日曜日だったので、教会の信徒たちや、思慮深く活動的なキリスト者たちに文書を配る、またとない機会に恵まれた。エンジンの故障もタイヤの故障もなかった。

ペンシルベニア州クレイズビル（十月二十八日）

今日は、昨日ほど距離を稼げなかった。けれども主をほめたたえよ、主のためにたいへん忙しく働いた。前に書いたとおり、主は私たちを、人目につかない所ではなく、幹線道路のすぐわきにキャンプするよう導かれた。主をほめたたえよ！　今朝キャンプをたたんでいると、軍隊が来るようなどろきが聞こえた。目を上げると、迷彩を施した政府の自動車トラックが、兵士と物資を満載して、長い長い列をなして道をやって来た。私は「福音書」と伝道文書を持って、道へ駆け出した。主は兵士たちの心にも働いてくださった。どの車も一台残らず止まり、兵士たちは福音書と伝道文書に手を伸ばした。そして礼を言い、読むと約束した。言葉どおり、すぐに仲間に向かって声に出して読み始めた。

ピッツバーグでも、主のために忙しく働いた。今日は悪い道、ぬかるみ、回り道に悩まされた。明日もそれが待っている。けれども主はすばらしく守ってくださり、事故は一つも起こらなかった。

セシルとクレイズビルを通って、大きな炭鉱地帯を抜けた。ちょうど男たちが、暗い地の底から上がって来るところだった。顔は石炭とすすにまみれ、地下の仕事で使っていた電灯が、まだ帽子の上で灯っていた。私たちは男たちにイエスのことを語り、証しをする恵みにあずかった。そして伝道文書やほかの文書を手渡した。

オハイオ州コロンバス（十月二十九日）

今朝は、近くの町の人たちが警告してくれていた、ひどく悪い道に乗り出した。そして道に迷い、たいへん危険な山道に入り込んだ。ある所では、車輪がやっと通れるだけの幅しかなかった。下には数十メートルもの切り立った崖が口を開け、上には岩が突き出ていた。道はぬれて滑りやすかったが、御使たちが車を道にしっかりとどめているようだった。一人の男の人がいたので、車を止めて道を尋ねた。その人は正しい道を教えてくれた。主は私たちに、この人に会わせるためにこの道を通らせてくださったのだ、というしるしを与えてくださった。私たちがメッセージを伝えて文書を渡すと、その人は顔を輝かせたのである。そして、丘の上の自分たちの教会のことを話してくれた。牧師さんは「後の雨のことを知ったら」えらく喜ぶだろう、というのである。何十台もの車がぬかるみにはまり、たいへんな費用と手間をかけて馬に引き出してもらった所があった。けれども主は、そういうぬかるみと泥の中を、何の故障も横滑りもなく通してくださった。私たちはいつも、御使の護衛が車のそばを進み、車を守ってくれているのを、はっきりと感じている。

さらにウェストバージニア州ホイーリングへ、それからオハイオ州ゼーンズビルへ進んだ。今夜は、オハイオ州コロンバスの郊外の、風をよけられる美しい場所で、道ばたにキャンプしている。ふだんは小川や流れが洗面器の代わりになる。けれどもここには、雨水をためた樽が二つ、閉めてある夏の別荘のわきに置いてある。元気を取り戻し、休むことができると信じている。

インディアナ州インディアナポリス（十月三十日～三十一日）

何年も前から、私はエター姉妹に会いたいと願ってきた。ここ数か月は、そのことをいっそうよく口にしていた。姉妹の説教を聞き、その集会に出たいと願っ

てきたのである。けれども、新聞を読んだ人たちに尋ねてみると、集会の禁止はまだ解かれていないという。

主の御名は、とこしえからとこしえまでほむべきかな。ああ、私たちの心の願いをかなえてくださる主は、なんと恵み深いことだろう。今日は二百マイルほど走ったが、それでも多くの人に文書を配る時間があった。地方の郵便受けにも入れておいた。

オハイオ州スプリングフィールドを通り、そこからインディアナ州リッチモンドへ進んだ。今はインディアナポリスの快適な部屋にいる。ハレルヤ！　なんとぜいたくに思えることだろう！　神はなんと恵み深いことだろう！　神がしてくださった驚くべきことを、お話ししよう。実は昨日、インディアナポリスの役人たちの特別会議があって、今夜の真夜中に禁止を解くことに決めたのである。それは、私たちが着いてちょうど一時間半後だった。明日はエター夫人の幕屋が開かれ、私は心の願いをかなえていただける。栄光あれ！

休息と賛美の一日。エター夫人を訪ね、今夜はその幕屋の集会に出た。私たちはともに喜び、主をほめたたえた。神の力が下った。集会に来ていたのはごくわずかだったが、主はそこにおられ、私たちの上に祝福を注いでくださった。明日は旅を続ける。道やかきねのあたりに出て行けという主の命令が、文字どおりに果たされている。ニューヨークからフィラデルフィアまでは「リンカーン・ハイウェイ」を通った。フィラデルフィアからインディアナポリスまでは「ナショナル・ハイウェイ」である。明日は「パイクスピーク・オーシャン・トゥ・オーシャン・ハイウェイ」に入り、そこから「ビッグ・フォー・ハイウェイ」でカンザス・シティに向かう。

タスコーラ（十一月一日）

イエスのための、栄光に満ちた一日だった。百二十マイルにわたって証しをし、文書を配った。今は大草原の農場と、広大な小麦地帯を通っている。今夜は木の下でキャンプしている。ひどく寒く、霜が降りている。けれども神は一行の一人一人を守ってくださっていて、だれも苦しんだり、かぜをひいたりしない。

イリノイ州スプリングフィールド（十一月二日）

今日は八十七マイルしか走らなかった。昼過ぎにスプリングフィールドに着き、愛するオステン姉妹の家に行ったからである。姉妹は愛のこもったもてなしで、その日の残りのあいだ私たちを引き止めた。今夜は姉妹の家の客間で集会を開いた。明日の朝、姉妹は私たちを送り出してくれる。私たちは元気を取り戻し、休み、食べさせてもらって、弁当箱には旅の食べ物を詰めてもらう。ハレルヤ！

この美しい都市は州都なのに、ペンテコステの集会が一つもない。ただこの愛する人たちが、自分の家の客間で小さな光をかかげているだけである。私たちはこの都市のために重荷を負っている。半径百マイル以内に集会は一つも知らない、とこの人たちは言う。ここにとどまって、今の時の燃えるメッセージを人々に告げたいと、どんなに願うことか。

イリノイ州バリー（十一月三日）

今日はわずか八十三マイル。けれども、ああ、福音書と伝道文書を配り、主のために証しをする機会は、栄光に満ちていた。福音書を喜んで受け取った何人かの若者は、生まれてから一度も聖書を持ったことがないと言っていた。

今日、長い葬列が福音自動車のそばを通った。霊柩車の運転手から会葬者まで、ほとんどすべての人が、重い黒のベールを上げて窓に顔を寄せた。そして『イエスはまもなく来られる。備えをせよ』と声に出して読んだ。

今夜は、すばらしい泉のそばでキャンプしている。大きな高い岩から、水が絶え間なく流れ出ている泉である。農夫たちが周り何マイルもの所から、タンクや桶を持って来て、その水を満たしていく。伝道文書を渡しながら尋ねてみると、長い日照りで、どの家の水槽も干上がっているという。この岩から出る水だけが頼りなのである。イエスについて証しできるのは、なんという恵みだろう。イエスこそ、その裂かれたわきから、決して涸れることのないいのちの水が流れ出る岩である。

ミズーリ州メーコン（十一月四日）

福音自動車は今日、百マイルにわたって証しをし、文書を配った。ああ、人々の顔に浮かぶ表情を見ていただけたら！　ぞっとした顔、ぎょっとしておびえた顔で見る人がいる。疑いの顔で歩道につばを吐き、「そんなことは信じない」と言う人もいる。ほかの人々の顔には、信じる思いと、もっと聞きたいという熱い願いが書かれている。こう言う人もいる。「いや、これこそ私が考えていたことだ。この戦争も、こういう疫病も、みな主の来臨のしるしに違いない。奥さん、文書をください」

ミシシッピ川を渡ってハンニバルに入ると、ほとんどあらゆる職業の人々が車の周りに集まった。それで食事に止まったときも、一行の一人が車に残って、文書を配り、証しをし、質問に答えた。酒場の主人、警官、旅回りのセールスマン、店の主人たち、教会の信徒たち、ホーリネスの婦人、そのほか大勢が集まって来た。そして質問をし、文書を受け取った。酒場の主人はたいへん真剣だった。私たちはその人の救いのために祈っている。この旅でまかれた種がどれほど実を結ぶかは、永遠だけが明らかにするだろう。ハレルヤ！

遅くまで走り続けた。夜は冷え冷えとして寒かった。寂しい広場で車を止め、どこで寝ようかと思案していた。一人の紳士が車を見て、自分から教えてくれた。あとでわかったのだが、その人は町長だった。文書を渡すのを忘れて、たいへん残念だった。

ミズーリ州ブレイマー（十一月五日）

今朝、食堂の窓から、車の周りを歩く人々を眺めていた。人々は看板の文字のことをあれこれ言い、『これは、いったい、どういうわけなのだろう』と首をかしげていた（使徒二・一二）。一人の愛する年老いた黒人の兄弟は、とても興味を引かれて、私たちが戻るまで車から離れられなかった。そして『ブライダル・コール』やほかの刷り物をもらって大喜びし、こう言った。

「ペンテコステの人たちのことはよく聞いていたが、会うのは初めてだ。この刷り物がもらえて、ほんとにうれしいよ」

出発しようとしていると、町長がまたやって来た。きっと主が、刷り物を受け取らせるためにこの人を遣わされたのだ。町長はロープを結ぶのを手伝い、私たちの働きを励ましてくれた。そして渡した文書を、喜んで受け取った。ああ、主よ、どうかこの愛する人たちの心に、驚くべき御業をなしてください。

今日はもっと距離を稼ぎたかった。けれども車の調整のために、ここブレイマーで足止めされている。

カンザス州オレイサ（十一月六日）

今朝、私たちは悟った。『神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる』のである（ローマ八・二八）。昨日足止めされたおかげで、私たちはミズーリ州ポロという小さな町を、明るいうちに通ることになった。そうでなければ、暗闇の中をだれにも気づかれずに通り過ぎていただろう。この町を通るとき、私たちは向きを変えて給油所に車を寄せた。人々は通りを私たちの後からぞろぞろついて来た。店や家からも出て来て、車の周りに詰めかけたので、私たちは息をのむほどだった。私たちは、文書を配ったり、イエスと私たちの教えについての数々の質問に答えたりして、休む間もなかった。

ある若者の話では、母親が窓から車の看板の文字を見て、こう言いつけたという。あの車に追いつくまで走って行って、道ばたに落としている伝道文書を持って来ておくれ、と。若者は、私たちの持っている文書を全種類一つずつくださいと頼んだ。

この旅のどこでも、これほど熱心に迎えられたことはなかった。ここの人々はあまりにも熱心だった。断られるくらいなら、車じゅうを探し回り、ドアのポケットも箱も残らず引っかき回しかねない様子だった。「異言で語るペンテコステの人たちだ。うわさは聞いている。読んでみたい」という叫びが、車の四方から上がった。

一人の愛する婦人が、顔を震わせながら、私たちが主をほめたたえるのを聞いていた。それから私の手をつかんで言った。

「ああ、どうしたらバプテスマを受けられるのか、教えてください。ペンテコステの文書は前に読んだことがあります」婦人は、シソン姉妹やエター姉妹などのことを知っていた。けれども、シンプソン兄弟はこのような聖霊の受け方を支持しているのか、と尋ねた。婦人は文書をどっさり抱えて帰って行った。そのとき、こう叫んだ。

「ああ、今日はなんというごちそうでしょう！　腰を落ち着けて、一語残らず読みます」

一人の男の人が車に走って来て言った。明日戦争に行く若者がいて、まだ救われていない。その若者のために、この刷り物をいくらかほしい、と。

さらにミズーリ州カンザス・シティへ進み、そこからカンザス州オレイサに来た。今夜はここで泊まる。

カンザス州オレイサ（十一月七日）

今日は雨で足止めされた。けれども静かに祈り、霊的に元気づけられるときを持った。

カンザス州アイオラ（十一月八日）

今日は、ぬかるんだ道を百七マイル走った。福音自動車は大きな関心を集めている。日刊新聞の編集者が、自分の新聞に書くために取材を申し込んできた。そして伝道文書と『ブライダル・コール』と小冊子を喜んで受け取った。全部読み終えるころには、この問題のかなりの権威になっているでしょう、と言った。それでも、全部読むと約束してくれた。

オクラホマ州ウーロガー（十一月九日）

百十九マイル走って、オクラホマ州ウーロガーに着いた。油井の立ち並ぶ大草原を、延々と通って来た。目的地は近いが、今夜はタルサへ急がず、ここに泊まる。川が増水して、通らなければならない道の上を流れているからである。けれども主は約束してくださっている。私たちが水の中を過ぎるとき、主は共にいてくださる。川の中を過ぎるとき、水が私たちの上にあふれることはない、と（イザヤ四三・二）。

第二十章　大陸横断の福音の旅（その二）

オクラホマ州タルサ（十一月十日、日曜日）

ハレルヤ！　主は、増水した川の低地を、何事もなく通してくださった。主はまことに御使たちに命じて、私たちを支えさせてくださったのだ。タイヤの足さえ、石に打ちつけることのないようにである（詩篇九一・一一～一二）。この千五百マイルのあいだに、小さなパンクが二度あっただけで、エンジンの故障は一度もなかった。主はまことに、毛を刈られた小羊たちに吹く風を和らげてくださった。

水は道の上を流れ、両側の溝も満たしていた。どこが道でどこが溝なのか、見分けがつかなかった。けれども主は、二百メートルほどのあいだ、私たちを道のまん中にとどめてくださった。そして車は、しずくを垂らしながらも意気揚々と、向こう側に出た。（人生の水の中を通るときも、主がいつもこのように、私たちを王の大路のまん中にとどめてくださるように。）

昼ごろ、大草原のはるか向こうに、タルサの町が見えてきた。失望の沼を渡ってきたあとで、空を背にした町の輪郭や建物、舗装された通りを見ると、私たちは叫んで主をほめたたえた。魂が天に近づき、旅の最後の一区間を上って行くときも、きっとこのようだろうと思えたのである。目の前には、碧玉の城壁をめぐらした美しい都がそびえている。よけなければならない石も泥も、深いわだちも溝も、もうない。あるのは、金で舗装された平らな通りである。暗闇の中を道ばたでキャンプすることも、もうない。永遠の昼があるからである。

着いた日に教会が再開される

その日曜日の朝、私たちが町の通りに車を乗り入れたとき、アッセンブリーズ・オブ・ゴッドの幕屋では、最初の礼拝が開かれていた。ハレルヤ！　大きな福音自動車を自分で運転し、世話をしてきたので、私たちはおなかがすき、疲れ、ほこりまみれだった。けれども、集会の時刻が来るまでに、食事をとる時間はほとんどなかった。

大きな幕屋は、人々と主の栄光とで満ちていた。ここで私たちは、しっかりしたペンテコステの集会に出会った。みことばに深く教えられて根を下ろし、清く、誤りがなく、御霊のうちに自由で、愛に満ちた集会である。

信仰復興に先立つ祈り

何週間ものあいだ、タルサの聖徒たちは、来たるべき信仰復興のためにはっきりと祈っていた。断食と祈りの日も守られた。このような祈りがあったのだから、主が私たちを無事に通してくださったのも不思議ではない。神が私に与えてくださった約束のとおりに、集会の禁止が解かれたのも不思議ではない。神を知らない十七人の男女が祈ってほしいと手を上げ、最初の夜から罪人たちが祭壇に来始めたのも、不思議ではない。後の雨があれほど激しく降り注いだのも、病人がいやされ、死の戸口から起き上がった人がいたのも、不思議ではない。私たちの疲れた体が休まり、元気を取り戻したのも、不思議ではない。おかげで私たちは、自分の時間などほとんどないまま、昼も夜も働き続けることができた。まるで、電流の通じた電線に触れたかのようだった。その電線とは、この愛する人たちの信仰と飢え渇きと祈りである。集会は力を増し、私たちはあふれるほどの会衆に説教した。罪人も聖徒も祭壇に押し寄せ、救いと御霊のバプテスマを求めた。

病人がいやされる

流行病はまだ猛威をふるっていて、多くの人が弱り、苦しんでいた。私たちは何時間も続けて立ったまま、病人のために祈った。イエスは、みもとに来た人々を助けてくださった。主の御名をほめたたえよ。リウマチで体が不自由になり、動けば激しく痛む男の人がいた。この人は歩き、走り、踊り、ついには踊りながら跳びはねた。すっかりいやされたのである。ひどい胃の病の男の人と、膿の出るできものと内臓の病のある姉妹もいやされた。インフルエンザ、心臓の病などもいやされた。

私たちは、何軒もの家に呼ばれた。そこでは気の毒な人たちがひどく弱って横たわり、目はガラスのようにうつろで、喉はぜいぜいと鳴っていた。けれども主は、驚くべき仕方で彼らを起き上がらせてくださった。主の御名をほめたたえよ！

御霊が導かれる

主への賛美がその場を吹き渡り、集会を導くことができなくなることもあった。私たちは、このうえなく驚くべき聖餐式の一つを目にした。心が溶かされ、涙とともに打ち砕かれ、血がほめたたえられた。パンとぶどう酒が配られるあいだ、異言のメッセージと解き明かしがあった。それから主の来臨が宣べ伝えられ、父の御国で主とともに新しくぶどう酒を飲むその日のことが語られた（マタイ二六・二九）。すると聖なる笑いと賛美の叫びが起こった。

天の賛歌も、聖霊の力のもとでの楽器の演奏も、歴代志下五章十三節と十四節に記されているとおりだった。

みことばの説教の直前にも、最中にも、あとにも、御霊はしばしば異言のメッセージと解き明かしをほとばしらせられた。心を揺さぶり、探り、励ますメッセージである。人々は一斉にさっと立ち上がり、手を上げて、主をほめたたえて叫んだ。天そのものが鳴り響くかと思われるほどだった。

火が下る

ある夜、祭壇での祈りのあいだに、何人かの若者の上に、すばらしい仕方で神の力が下った。一人は、神の栄光で顔が変わり、だれの心をも刺し貫く声で「イエスはまもなく来られる」と叫んだ。もう一人も御霊のうちにあって、こう叫んだ。

「備えをせよ。備えをせよ。備えをせよ！」

それから御霊のうちにメッセージが語られ、人々に警告した。時は短く、なすべき働きはまだ途方もなく大きい。自分を犠牲にし、すっかり献身した働き人が、今日、かつてないほど必要とされている、と。それから主は多くの人を召して、主の命じられることをするために、新たに自分を聖別し、ささげるようにされた。神の力が下った。力を着せられるよう祈った人たちもいて、働き手たちがその人たちに手を置いた。五十人を超える人が、神の力に打たれてひれ伏した。たくましい男たちが、わらのように倒れた。

主は多くの人に、ご自身とその愛を、かつて知らなかった仕方で現してくださった。刈入れの畑と、刈る者を必要としているその姿を幻に見た人もいた。血の流れる手と足のイエスを見て、失われた人々への愛とあわれみで張り裂けた御心を、いっそう深く示された人もいた。天の大きな幕が引き開けられ、イエスが目の前に現れて立っておられるのを見た人もいた。妙なる音楽を聞いた人もいた。また、神が心を探り、神の喜ばれないことを示されたので、神に叫び求める人もいた。ピアノが神の力のもとで弾かれ、天の音楽が旋律の流れとなってあふれ出た。聖徒たちは立ち上がって、ピアノの周りに集まった。歌は皆に受け継がれ、ときには旋律がほとばしり、ときにはこのうえなく柔らかく聖なる調べとなった。歌は、いと高き神のきよさと威厳をたたえて、ふくれ上がっていった。ついには、勝利の歌の威厳に、建物全体が震えた。勝利の王が、勝ち誇る軍勢を率いておられるのが見えるようだった。大隊が次々と続き、旗はひるがえり、よろいはきらめいていた。最後の震える音が消えていくと、すべての人が静まり返った。動くことも話すこともできないように思われた。目を開けることも、地

上に戻ることも、気が進まなかった。聖徒たちは、つま先立ちで散って行った。私たちは、全能の王の王の御前にいたのである。

イエスのために走る福音自動車

タルサで、福音自動車は忙しく過ごした。昼も夜も、流行病に倒れた人々を見舞ってほしいという呼び出しが絶えなかった。どこへ行っても、看板の文字が通りで大きな注目を集めた。日曜版の新聞は、金文字の看板をつけた車の写真を載せた。新聞の上のほうに、『イエスは来られる』の文字がはっきりと見えた。伝道文書を配る日もあった。七人乗りの車に、働き手と伝道文書とちらしを満載して、近くの町や村を回った。そして、張れるかぎりの窓や柱に、集会と、イエスがまもなく来られることを知らせる張り紙をした。伝道文書は、農家の郵便受けや大きな油井などにも置いてきた。

福音自動車は昼の集会にも出かけた。タルサ鉄工所では、私たちが鋳造工場の中で、工員や鋳物師にイエスとその愛を説いた。そのあいだ、車は外で自分の説教を忠実に語っていた。その男たちの何人かとは信仰復興の集会でまた会い、のちに、彼らが心をイエスにささげるのを見る喜びにあずかった。

タルサでの福音自動車の働きのうち、いちばん大切だったのは、おそらく路傍集会だろう。町でいちばんよい街角の一つを確保すると、車の幌を下ろした。そして歌い手たちが、楽器を持って車いっぱいに乗り込んだ。あの愛する人たちは、なんと熱心にイエスのことを歌い、証ししたことだろう。台から絵入りの図表が掛けられ、その図表が四方から群衆を引き寄せた。

路傍集会で、これほど敬虔な態度を見たことはなかった。男たちは帽子を取り、頭を垂れて立っていた。女たちは目に涙を浮かべていた。それから呼びかけがあった。罪に疲れ、イエスを救い主として求める人は、祈ってほしいと手を上げるように、と。最初の夜は十八人、二晩目は二十九人が手を上げ、イエスを救い主として求めていることを表した。

続いて、前に出て、歩道の「私たちの悔い改めの座」、つまり車のステップのそばにひざまずくよう呼びかけた。町の人々の前で、公にイエスに身をゆだねるようにである。多くの人の顔に涙が流れていた。二人の婦人が群衆の中から進み出て、ひざまずいた。その涙がステップにしたたり落ち、悔い改めた罪人たちを喜ぶ私たちの涙も、それに混じった。最後の集会が終わると、何百人もの聖徒たちが幕屋から通りへ行進して出て来て、車の周りに幾重にも輪を作った。聖徒たちが歌い、祈ると、御霊が下られた。聖徒たちは車に手を置き、車と乗る人たちを守ってくださるよう神に願った。あらゆる危険から車を守る御使の護衛を、車につけてくださるようにとも願った。そのあいだに、異言と解き明かしがあった。また、車がいつもいのちの使者となり、決して死の使者とならないように祈った。この愛する人たちは、ガソリンと油と伝道文書のための献金も、車の中に入れてくれた。神が彼らを祝福してくださるように！

大陸横断の旅の続き

タルサを出ると、福音自動車は南南西に向かい、オクラホマ・シティを目指した。その夜はそこで集会を開くことになっていた。タルサに来ていた聖徒たちが、この集会の手はずを整えるために、汽車で先に行っていた。私たちは道を急ぎながらも、広大な油田でも、村や町ごとでも、伝道文書を配る時間を見つけた。

引き止められ、待ち伏せされる

一刻もむだにすまいと急いでいた私たちは、ストラウドという小さな町で、給油所に寄らなければならなかった。車を止めると、一人の男の人が戸口から飛び出して、車のほうへ跳んで来た。「主をほめたたえよ」と叫びながらである。ほかの人たちも駆けて来た。たちまち車は、主をほめたたえる熱心な聖徒たちに取り囲まれた。彼らの話では、九マイルから十五マイルもの道のりをやって来たという。この町は幹線道路沿いにあるので、私たちが今日ここを通るに違いないと知ったのである。彼らは、あちこちの角や戸口に見張りに立ち、朝早くから一日じゅう待っていた。十マイル離れたケンドリックの伝道所に来て、集会を開いてほしいと頼むためである。私たちは首を振り、それはできないと言った。その夜

はオクラホマ・シティの伝道所に行くと約束していたからである。そして代わりに、伝道文書や文書を差し出した。けれども彼らは、車をつかんで放さなかった。一人の姉妹は目に涙をため、熱い願いと飢え渇きのあまり震えていた。ケンドリックは小さな町で、本道からはずれていた。伝道者もペンテコステの働き手も、そちらへはだれも来たことがなかった。それで彼らは、できることなら、私たちが寄らずに通り過ぎるのを許すまいとしていたのである。

最初の約束を守らなければならない、という私たちの言い分は、彼らの絶え間ない懇願の攻撃を受けて、しだいに弱っていった。とうとう私たちは、試しにオクラホマ・シティに電話をかけることに同意した。もし向こうの聖徒たちがよいと言うなら、とどまることにしたのである。

オクラホマ・シティの聖徒たちの返事は、火曜日でもまったくかまわない、そのほうが時間もあって、もっと大勢を集められる、というものだった。私が電話をしているあいだ、聖徒たちは並んで祈っていた。福音自動車が幹線道路をそれて、十マイル先の田舎へ向かうと、彼らの顔はなんと輝いたことだろう！　そこでは温かい夕食が食卓で湯気を立て、私たちをくつろがせる用意がすっかり整えられていた。

そこはほんの小さな村だったが、伝道所の建物は村でいちばん大きいようだった。着く前から、中にも外にも明かりがともり、人々が外に立って戸口から中をのぞいているのが見えた。私たちがともに歌い、主をほめたたえるころには、席は埋まり、後ろに立っている人もいた。素朴なメッセージのあと祭壇への招きをすると、一人の愛する姉妹が聖霊のバプテスマを受け、澄んだ美しい言葉で語った。

翌朝、伝道文書と『ブライダル・コール』をたっぷり置いて、オクラホマ・シティへと先を急いだ。走りながら私たちは、国じゅうで、また人里離れた所で、働き手がどんなに必要とされているかを語り合い、驚いた。

オクラホマ・シティ

聖徒たちは準備を整えて、私たちを待っていた。主は尊い集会を与えてくださり、私たちの上に限りなく御霊を注いでくださった。その夜、また一人の愛する姉妹が聖霊のバプテスマを受けた。とどまってインディアンのあいだで集会を開いてほしいという招きが、たくさんあった。借り賃なしで円形の集会所を使わせてくれるという申し出もあった。けれども季節はもう遅く、天気は寒くなっていた。この先の山地では大雪が降っていると伝えられていたので、私たちは道を急いだ。

私たちが最初に目指したのは、オクラホマで最後の町のアマリロだった。アマリロからニューメキシコ州トゥクムキャリへ、そこからサンタ・ローザへ進んだ。旅をしながら、B姉妹と私の愛する母が伝道文書を配った。綿畑を通りながら、道路工事の人夫たちや、橋を架ける人たち、農夫たち、道ばたの天幕の野営地、また、のろのろと進む白い幌馬車の列に配ったのである。

一週間前に大雪が降ったばかりで、道はぬかるんでいた。それでもトゥクムキャリを出るまでは、何の苦労もなく進んだ。ところがここから、サンタ・ローザへ向かう道は、ますます危険になった。泥、雪、深い峡谷、険しい山道である。あとで知ったのだが、もし止まってこの先の道のことを尋ねていたら、運転する人たちは、雨や雪のあとは、この道は通れないと言っただろう。

何マイルも何マイルも走った。いのちあるもののしるしといえば、ときおり見かけるプレーリードッグか、転がっていく回転草だけだった。車輪は柔らかい泥に、深く、さらに深く食い込んでいき、ついには泥が車の上まで飛ぶようになった。私は車を降りて滑り止めの鎖を付け、また進んだ。サンタ・ローザまでは、もうわずか九マイルだった。私たちは距離計から目を離さず、一マイル進むごとにほっと息をついた。

もう暗くなっていたが、車の明かりがよかったので、低速ギアでそろそろと進んだ。二人の姉妹は歩いていた。私の二人の子供、ロバータとロルフは、どうしたら運転を手伝えるかと尋ねていた。凍るような風が大草原を吹きすさんでいたそのとき、車はとうとう泥よけまで沈み込んでしまった。

最初に考えたのは、車をジャッキで持ち上げるための材木を探すことだった。けれども、この百マイルのあいだ、木は一本も見かけなかった。とうとうB姉妹と私は、助けを求めて平原を歩き出した。主は私たちを、一人のメキシコ人の家へ導いてくださった。その人は馬を連れて来て、夜中の二時まで働いてくれたが、むだだった。主は私たちがその夜先へ進むのを望んでおられないのだと、ようやく私たちは気づいた。私たちはいつも、主を愛し、ご計画に従って召された者には「万事」が共に働いて益となる、と教え、信じてきた（ローマ八・二八）。けれども、これがその「万事」の一つだとは、とても思えなかった。

二人の姉妹は、二マイル離れたメキシコ人の日干しれんがの家で夜を過ごした。私と子供たち（もう眠っていた）は車の中で過ごした。私は夜通し祈った。ちょうど夜明けに、メキシコ人たちが、もっと板を積んで荷馬車でやって来た。そして最初に試みたとき、車は泥から抜け出し、私たちはまた道を進み始めた。

一マイルも行かないうちに、神が私たちを引き止められたわけがわかった。水で深くえぐられた所や峡谷を、いくつも渡らなければならなかったのである。明るい昼の光と注意深い運転がなければ、車も乗っている者も助からなかっただろう。けれども主は私たちとともにおられ、御使の護衛がこれほど身近に感じられたことはなかった。ときには水が泥よけの上まで来たが、もう一度も止まらずにすんだ。

サンタ・ローザ

寒く、おなかをすかせ、ぬれて泥まみれで町に着くと、主はすばらしい驚きを用意していてくださった。広場に着くと、一組の若い夫婦が通りを駆けて渡って来て、叫んだ。

「主をほめたたえよ！　すぐ私たちの家に来てくださいませんか。ああ、ペンテコステの聖徒に会えて、ほんとうにうれしい。もう二年以上、一人にも会っていないんです。一週間泊まっていってくださいませんか」

なんとすばらしいことだろう。聖霊を受けた人に会えるなどとは思いもしなかった、この荒野でのことである。二人は私たちを迎え入れ、食べさせ、暖めてくれた。泥だらけの車を洗い、私たちの服を洗うあいだ、乾いた服を貸してくれた。姉妹の靴さえ私たちの足に合い、その子供たちの服も、うちの幼い子たちに合った。私たちはどんなに歌い、祈ったことだろう。そして神の力が下った。二人の心は飢えていた。二人には私たちが必要で、私たちにも二人が必要だった。そして私たちみなに主が必要で、主はその必要を満たしてくださった。ハレルヤ！

サンタ・ローザから、ソコロを経てニューメキシコ州を横断した。北の道を通ってダティル山地を越えるつもりだったが、峠は雪でいっぱいだった。それで南の道へ下り、ニューメキシコ州デミングへ、そこからツーソンへ、さらにアリゾナ州フェニックスへ進んだ。

何マイルも何マイルも、いのちあるもののしるしのない砂漠が続いた。巨大なサボテンが車の上にそびえ、ときおり遠くをコヨーテがこそこそと歩いていた。家と家とは六十マイルも八十マイルも離れていた。それで、優しく思いやりのある天の父は、この長い道のりを、ほかの三台の自動車といっしょに通らせてくださった。一行は全部で四台になった。ほかの車の人々は旅慣れていて、心の優しい男女だった。道中ずっと手を貸し、励ましてくれた。その一人は、私の腕を休ませるために、二日間車を運転してくれさえした。

フェニックスからは、北のカリフォルニア州ニードルズへ行くよう勧められた。そうすれば、またナショナル・トレイルの古い道に出られる。ユマなど南の地方の深い砂も避けられる。この砂と石の道のりが、悪い道の最後だった。ニードルズからは、大通りが砂漠を抜けて山の頂まで通じていたのである。道は山の峠を抜け、長い下り坂へと続いていた。曲がりくねった坂と美しい景色の中を、何マイルも惰性で下って行くことができた。そしてカリフォルニア州サンバーナーディーノに着いた。

大草原や平原、砂漠や山々のあとでは、ここは新しい世界のようだった。この一週間、大きな鉱山地帯を通ってきた。そこでは山々が、金、銀、アマルガム、亜鉛、鉄、銅などの鉱物を産していた。けれども今はそれもすべて過ぎ去り、何百ヘクタールもの土地に美しい果樹が茂る所に来ていた。オレンジ、レモン、グレープフルーツなどが、たわわに実っていた。

私たちはリアルト、アップランド、グレンドーラ、アーケーディアを急いで通ってパサデナへ、パサデナからロサンゼルスへ進んだ。土曜日の昼に着くと、聖徒たちが用意を整えて、私たちを迎えようと待っていた。主のこの尊い子供たちが、私たちが快適に過ごせるよう、宿のことまですべて手配してくれていた。そして日曜日に、信仰復興の集会が始まった。

長い旅、イエスのために伝道文書を配る旅を終えて、私たちは家庭の快適さに囲まれて、くつろぐことができた。美しい土地を見渡し、聖徒たちの顔に輝く歓迎の光を見た。そして最初の集会に出ると、神の力が雨のように下った。そのとき私たちは、手を上げて、心からこう言うことができた。

「道のりの苦労も、旅路の終わりに着いた今は、何ものでもないように思える」

第二十一章　ロサンゼルスに降り注いだ大雨

『呼ばわりなさい。主はこの町をあなたがたに賜わった』（ヨシュア六・一六）

（注）以下の集会の記録は、ロサンゼルスの信仰復興のさなかに、ペンテコステ派の新聞のために書いた報告から採ったものである。

これこそ本物の信仰復興

本物の信仰復興の霊が、人々を満たしている。ほかのすべての信仰復興と同じく、この信仰復興も、確かで深い根から芽生えた。主の前でささげられた、産みの苦しみのような多くの祈りと、とりなしである。そして、神の答えがたいていそうであるように、突然にやって来た。ここで聖徒たちが祈り、主に大いなることを願っていたとき、主は答えておられたのである。

「そうだ、そうだ、わが子らよ、そうだ。わたしは弱い者を用いて、強い者をはずかしめる。無きに等しい者を用いて、有る者を無力にする。わたしは虫を用いて、山を打つ」

主はそのことばのとおりに、ちりの中の弱く小さな虫に語られた。神の子供たちのうちでいちばん弱いと感じている、この私にである。そして、ロサンゼルスへの召しを私の心に焼きつけられた。その召しがあまりに強く迫ったので、私たちは出発した。御使の一団が、道中ずっとついて来てくれたようだった。石の多い所では私たちを抱え上げ、増水した川では支え、旅の終わりまで無事に連れて来てくれたのである。けれども、この信仰復興については、すべての栄光を父と子と聖霊にお帰ししたい。パウロが植え、アポロが水を注いでも、成長させてくださるのは神である（第一コリント三・六）。

クリスマスの週は、備えの週だった。集まる人はしだいに増え、週の終わりには、人々が会場に入りきれなくなった。祈りの部屋は満ち、壇も席も階段も埋まり、何十人もの人が帰されていった。なんという涙、なんという歌、なんという踊りだったことだろう！

天の窓が開かれた（マラキ三・一〇）。罪人が救われ、信じる者が聖霊のバプテスマを受けた。一度の集会で、十二人から二十人に及ぶことも多かった。人々の叫びと天の歌声が、それに伴う栄光の雲とともに、幕屋に満ちた。ときには、祭司たちも主に仕える者たちも、勤めをすることができないほどだった（第二歴代五・一四）。

建物は大きかったのに、入れないという苦情が人々から出た。そこで借りたのが、次の会場である。

テンプル・オーディトリアム

ここには、一階席と大きな壇のほかに、何段もの階上席があり、三千五百人ほどが座れた。借り賃は三時間ごとに百ドルだったが、日曜日の大きな集会のために、少しもためらわずに借りたのである。フィッシャー牧師とブレーク兄弟は、働き手の一団とともに、どんな費用も苦労もいとわなかった。そして、身も心もこの働きに打ち込んだ。

大みそか

外では、世の人々が鳴り物を鳴らして浮かれ騒いでいた。そのころ中では、主の鳴り物とでもいうべき幾人かの人たちが、ほ、ん、と、う、の祝いをしていた。ビクトリア・ホールは、戸口までぎっしりと人で埋まった。

その夜、主は私を導いて、枯れた骨の谷について説教させてくださった（エゼキエル三七章）。干からびた魂の一人一人に、力と祝福のある所へ戻る道を示すためである。祭壇での祈りへの招きをすると、祈りの部屋はあふれるほどに満ちた。壇も、祭壇の全体も埋まった。場所を作るために席を後ろへ下げたのに、それでも足りなかった。建物じゅうで、また通路で、何十人もの人が救いを求めて

祈っていた。信じる者は聖霊のバプテスマを受け、病人はいやされた。失われていた人々が神のもとに帰って来ると、なんという踊りと喜びが起こったことだろう！

この一夜だけで、百人を超える人が神の力に打たれて倒れたと見積もられた。多くの人が、激しく泣きながら罪を言い表した。聖徒たちが互いに抱き合うと、わだかまりは溶け去った。愛の涙と賛美の涙が混じり合った。

初めの愛から離れていた多くの人が、祈ってもらうために来た（黙示録二・四）。神の力をみなぎらせていただき、来たるべき信仰復興で主のための働き手となるためである。働き手たちが祈ってもらうと、右に左に倒れていった。神が取り扱い、語りかけておられるあいだ、何時間も神の力のもとに横たわっている人もいた。彼らは音楽も叫びも、自分の横たわっている会場さえも忘れた。そして昔のパウロのように、第三の天にまで引き上げられた（第二コリント一二・二）。その多くが幻を見た。刈入れの畑が色づいているのを見た人たちもいた。重い穂が、拾い集める者の手を待って低く垂れていた。その人たちは、刈る者たちへの大いなる呼びかけを聞いた。鋭い鎌で互いに争うのをやめ、畑に出て行って穀物を刈り集めよ。イエスがまもなく来られるのだから、と。

魂が神もなく望みもなく、永遠の滅びへ落ちて行く幻を見た人たちもいた。その人たちは、魂の叫びと悲鳴を聞いた。そして主は彼らに、行って滅びゆく者を救え、罪人たちを火の中から燃えさしのように取り出せと命じられた。ある人は、主が斧を手に果樹園を歩いておられるのを見た。主は実を結ばない木を根もとから切り倒して火に投げ込み、その跡に実を結ぶ木を植え替えておられた。その人は、御霊のうちにメッセージを語った。

またほかの人たちには、神が驚くべき仕方で語り、ご自身を現してくださった。その人たちは、愛といつくしみに満ちた神の大いなる御心の、その深みまでのぞき見たと言った。そして、失われた人々を慕い求める思いに、自分の魂がかつてないほど、神の御心とともに脈打ったという。たくましい男も女も、子供のように泣いた。砕かれ、悔いた、和らいだ霊が、すべての人を満たしているようだった。

ちょうど真夜中が近づいたころ、ある人が御霊のうちにピアノに向かい、『行く手に勝利』を弾いた。聖徒たちは歌に加わり、建物の中をぐるぐると行進して回った。その数があまりに多かったので、通路はふさがってしまった。こうして聖徒たちは、その場所を神のために勝ち取ったのである。みなが手をつなぎ、会場全体をひと続きの輪で囲んだ。そして熱心に、燃えるように祈った。天そのものが、あふらと蜜をしたたらせるかと思われるほどだった。宣教師、伝道者、牧師、キリスト者の働き手たちが、何百マイルも離れた所でこの大いなる注ぎのことを聞いた。そして、汽車や船でやって来た。自分たちも新たにされ、ほかの人々の祝福となるためである。

フィッシャー牧師の主催で、ビクトリア・ホールとテンプル・オーディトリアムでひと月のあいだ集会が開かれた。そのあいだ、雨季だったのに、外には雨が一滴も降らなかった。きしみを感じることもなく、一致や愛に欠けるところが現れることもなかった。御霊が、集会をすっかり治めておられたのである。

大オーディトリアムでの日曜日の午後の礼拝が終わると、会衆はビクトリア・ホールへ押し寄せた。夕食も待たずに来る人が多かった。それで五時には席がすべて埋まった。六時には立つ場所もほとんどなくなり、七時には何百人もの人が戸口から帰されていた。入れなかったのを残念がって泣く人もいた。異言のメッセージと解き明かしがあった。天の歌声と、御霊のうちに奏でられる音楽があった。説教の前に、祈りの部屋で入りきれない人たちの集会が開かれ、そこで何人もの人がバプテスマを受けることも多かった。また説教のあいだにも、異言で語り、神をあがめるまでに至る人たちがいた。

この信仰復興は、まことに男の造ったものでも、女の造ったものでもない。光の父から下って来たものである（ヤコブ一・一七）。というのも、メッセージが聖霊の燃えるような霊感のうちに語られても、結果は同じなのである。救いと、御霊のバプテスマと、主の来臨とを説き明かす、わずかな素朴でわかりやすい言葉で語られても、同じである。説教がまったくなくても、やはり同じである。何十人もの人が祭壇に来て、信じる者が聖霊を受けるのである。

私たちの神が働かれるのを見た、多くのすばらしい出来事を、とても書き尽くすことはできない。七年間別れて暮らしていた夫婦が、二人とも救われ、駆け

寄って抱き合った。妻は聖霊のバプテスマを受けた。何年も口をきいていなかった別の夫婦も、主のもとに立ち返った。その小さな娘は、とても喜んでやって来た。パパとママがこれから幸せな家庭を作るのだと、知らせに来たのである。

また、見るからにりっぱな男の人が、赤ん坊のように泣きながら来た。救われたいので祈ってほしい、と言うのである。私たちが祈ると、その人の顔は涙にぬれた。そして十五分もたたないうちに、その人は神の力のもとにあって、他国の言葉で語っていた。

バイオリンを美しく弾く若い婦人が、音楽の手伝いに来た。その人はすばらしく救われ、主の力のもとに長々と横たわった。聖霊のバプテスマまで、あと一歩だった。ここに来ていた多くの人たちが言う。後の雨が降り始めてからの十二年のあいだ、世界じゅうを旅し、大きな信仰復興をいくつも見てきた、と。けれども、だれもが口をそろえて、このような信仰復興は見たことがないと言う。昔のアズサ通りのすばらしい日々さえしのぐと、みなが認めている。アズサ通りのことを話すとき、彼らはみな、うっとりとした顔になるのである。働き手たちがこれほど一つになり、溶け合っている。言葉尻をとらえる議論や、細かいことにこだわる教理を、これほど脇に置いている。哀れな失われた罪人たちのために、これほど共に出て行っている。神は祝福せずにはいられないのである。

ベテル・テンプル（G・N・エルドリッジ牧師）

一月十九日の日曜日の午後、テンプル・オーディトリアムでの集会が終わったあと、美しいベテル・テンプルで集会が始まった。楽団全員が、バイオリン、コルネット、ギターなどを持って、ビクトリア・ホールから来た。集会が始まる三十分前には、もう人々が、入りきれない人たちの集会や地下室へ回されていた。地下室では、熱心な祈祷会が開かれていた。天の歌声が立ちのぼり、ふくれ上がって栄光の雲となった。礼拝の外套が人々を包んだ。六歳の子供から、七十八歳の誕生日を迎えたと誇らしげに言う老人まで、次々に人々が立ち上がった。そして、短く、燃えるような、はっきりとした証しをした。

みことばからの素朴なメッセージと熱心な祭壇への招きのあと、罪人も信じる者もいっしょに地下室へ向かった。そこでは席が取り払われ、祈りと待ち望みの集会のために、広い床が空けてあった。まもなく床は、主の力に打たれて倒れた人々で覆われた。大勢の働き手や伝道者や宣教師が、一人から一人へと回っていた。そして、バプテスマに至ろうとしている人たちとともに祈り、喜んだ。

ベテル・テンプルでの一週間のあと、私たちはまたビクトリア・ホールで信仰復興の集会を続けた。席は集会のずっと前に埋まり、それから人々は、何時間もすし詰めになって立っていた。案内係は、消防の規則に従って通路を空けておこうと苦労した。子供や若い人たちは、祭壇の前の床に座った。壇の上にまで座った。使える場所はわずかな隙間まで埋まり、話し手はだれかを踏まずに行き来するのにも苦労した。人々は窓を開けて、窓の敷居の上に立った。洗礼槽を覆う高い台の上にも席が置かれ、玄関や廊下にも大勢が立った。建物のほかの場所でも、入りきれない人たちの集会が開かれた。その一つは祈りの部屋でのものだった。そこで信じる者がバプテスマを受けると、歌と賛美が大きな会場の私たちのところまで響いて来た。ある夜には、説教のあいだに十一人がバプテスマを受けた。フィッシャー牧師は、四部屋からなる自分の事務室を、入りきれない人たちの集会のために開放していた。ここで多くの人が聖霊に満たされた。ほかの人たちは、大きな礼拝の会衆全体に罪の自覚が臨むよう、神の前で熱心に祈っていた。

祈りの部屋の床はいっぱいになった。病人のために祈る壇の上でも、人々は倒れた。多くの罪人が救いを求めて通路を進んで来て、前方の祭壇に幾重にも並んだ。そして、ひざまずいたとたんに救われ、神の力に打たれて倒れた。ある夜、救いを求めて祭壇に来た十二人の一団のうち、十一人が救われただけでなく、聖霊のバプテスマも受けた。見ていた働き手たちの多くが、これは驚くべきことだと思った。

天の聖歌隊の歌声も、異言のメッセージと解き明かしも、言葉に言い表せなかった。一致と愛の麗しい霊があふれていた。礼拝と賛美の外套が人々の上に下って、包みこんだ。そのため、説教ができないことが何度もあった。証しさえも、講壇から戸口まで吹き渡る賛美と歌のほとばしりに、かき消されてしまうの

だった。また会衆は立ち上がり、手を上げて、栄光のかたをほめたたえ、礼拝した。砂漠をばらのように花咲かせ、荒野に池をわき出させ、かわいた地に流れを注いでくださったかたである（イザヤ三五・一、四一・一八、四四・三）。ハレルヤ！

異言のメッセージと解き明かしは、主の来臨のこともありありと描いた。闇が迫って地を覆っていくこと、獣が海から上って来ること（黙示録一三・一）も語った。また、大きな赤い手が地平線の上に現れることも語った。その手は空に昇り、地の上に伸びて地をつかむ。あまりに強く握りしめるので、指のあいだから血がにじみ出るのである。

メッセージが、罪人たちには耐えられないほどのことも多かった。主の苦しみが語られると、すすり泣きが聞こえた。建物のあちこちから男や女が立ち上がり、救いを求めて祭壇に来た。これらの集会で救われた人やバプテスマを受けた人の数を、数えようとはしなかった。けれども、ある夜、四十人の男女がこの栄光ある救いを求めて祭壇に来た。その光景を見て御使たちが喜んだことを、私たちは知っている。同じ夜、カトリックの一家がそろって救われた。

酒に酔って入って来て、午前一時に救われた二人の女がいた。この二人は集会のたびに、罪と恥の生活から救われ、聖霊に満たされたことを神に感謝し、ほめたたえた。言うまでもなく、聖霊を受けた人はみな、御霊が語らせるままに他国の言葉で語った。生まれつき耳が聞こえず、口のきけなかった男の人さえそうだった。

この人は来る日も来る日も集会に来て、鉛筆と帳面で筆談した。彼は聖霊のバプテスマを求めた。もちろん、この人にバプテスマを授けるには、主は彼が話せるようにしてくださらなければならない。五晩求めたあと、聖霊がたちまちご自身の宮に来られた（マラキ三・一）。この人は聖霊を受け、耳に聞こえる声で他国の言葉を語るまでに至った。そのとき周りに集まった人たちの叫びと喜びは、言い表しようがない。神の力のもとから起き上がったときにも、声はまだ彼から去っていなかった。神をほめたたえよ！　いやしと解放の多くの出来事のゆえに、私たちは神をほめたたえる。集会のあいだじゅう、賛美は父と、その御子イエス・キリストと、聖霊にささげられてきた。男も女も、だれも栄光を自分のものにせず、人から栄光を受けることもなかった。すべては明らかに、弱い土の器を通して、神がなさったことだからである（第二コリント四・七）。

第二十二章　「神が建てられた家」

『すずめがすみかを得、つばめがそのひなをいれる巣を得る』（詩篇八四・三）

ベテル・テンプルでの一週間のあいだに、主は約束とともに、次のように命じておられた。

「日曜日の夜、ビクトリア・ホールへ行け。日曜日の夜、わたしはビクトリア・ホールで驚くべきことをする」ああ、主はまことにそのことばを守ってくださった！

このあいだずっと、主は私に、子供たちのための小さな家を備えよう、と請け合い続けてくださった。主は町じゅうのほかの人たちにも、同じことを語っておられた。それで、その人たちから電話がかかってくるほどだった。幼い子供たちには家と、通う学校があるべきだと、神が示してくださった、と言うのである。

さて、私たちがビクトリア・ホールに戻ったその日曜日の夜、会場は戸口までぎっしりと人で埋まっていた。そのとき、一人の若い婦人がさっと立ち上がって言った。

「マクファーソン夫人に土地を一区画差し上げるようにと、主が示しておられます。私は土地を四区画持っていますが、全部は要りません。私は福音を宣べ伝えるように召されてはいませんが、この人は召されています。土地を差し上げれば、小さな子供たちには家ができ、この人は主の働きのために自由に行き来できます。そうすれば、私もこの人の報いにあずかれるのです」一人の兄弟が、さっと立ち上がって言った。

「そうだ、それなら私は地下室を掘るのを手伝おう」ほかの人たちも口々に言った。「そうだ、私は土台を据えるのを手伝おう」「私は木ずりを打とう」「私はしっくいを塗ろう」「私は食堂の家具をそろえよう」こうして話は続き、ついには小さなカナリアまで約束された。

ある婦人は、ばらの木を約束した。このカナリアとばらの木が、何よりも私の心にしみ、私は叫んで主をほめたたえた。小さなことに見えるかもしれないが、私はそこに神を見ることができた。カナリアとばらの木こそ、子供たちが何よりも欲しがっていた二つのものだったのである。天の父は、お忘れになっていなかった。

すべての手はずが整うと、土地を主にささげる式と鍬入れの日が決められた。歌と祈りのあと、聖徒たちは長い列を作り、一列になってその土地の周りを行進した。そして、小さな家を建てるのに必要な資金を与えてくださるよう、主に願った。

ずっと昔、神の御心からはずれていたころ、借りていた小さなアパートに家具をそろえるのに、私はどんなに苦労したことだろう。どんなにみじめな思いをしたことだろう。けれども今は、神ご自身が、私たちのものとなる家を計画してくださっている。聖徒たちがささげ、建ててくれる家である。金づちのひと打ちごとに、愛の釘がその建物に、また私たちの心に打ち込まれていった。読者の中には、幼い子供たちのためにいつも家があり、夜には子供たちに自分の枕があった人もいるだろう。そういう人はだれも、子供たちのためのこのすばらしい喜びを、私とともに味わうことはできないかもしれない。

ブレーク兄弟は建築を仕事にしていて、小さな家を建てる工事の監督を引き受けてくれた。まもなく兄弟たちが地下室を掘り始めた。まったくのただか、ごくわずかな賃金で働いてくれたのである。手伝いを申し出た一人の兄弟は、敵に試みられた。敵はこう言った。

「なあ、わかっているだろう。おまえはどこかよそで働いて、一日分のちゃんとした賃金を稼ぎ、妻子のところに持って帰るべきなのだ」

けれども、その兄弟は神が自分に語られたことを知っていたので、土台の仕事に精を出した。ある夜、家に帰る途中で雨が降り出した。すると、ちょうど足もとに十五ドルが落ちていた。神は、彼の二日分の働きに、たっぷりと報いてくださったのである。ハレルヤ！

これは、この小さな家についてのあらゆる企てを神が祝福してくださった、多くの例の一つにすぎない。もう一つすばらしかったのは、その土地のある場所である。ロサンゼルスのすぐ郊外で、都会の影響から離れているうえに、通りをはさんだ真向かいに、よい学校があったのである。これを読むみなさんも、「栄光あれ」と言っていただきたい。私たち自身、感謝と賛美に満ちあふれているので、ダビデとともにこう叫ぶことができる。

「ああ、わが魂よ、イエスの御名をたたえるのに、どこから始めたらよいのか」

第二十三章　ロサンゼルスからサンフランシスコへ

『耕す者は刈る者に相継ぎ、ぶどうを踏む者は種まく者に相継ぐ。もろもろの山にはうまい酒がしたたり、もろもろの丘は溶けて流れる』（アモス九・一三）

昼にロサンゼルスを出て、サンフェルナンド・バレーを通った。柑橘とオリーブの農園を抜け、ニューホール・トンネルをくぐって、ソーガスへ進んだ。ソーガスには、山のふもとに抱かれるように、広い油田が広がっていた。そのあいだも、伝道文書や文書を配る機会を一つも逃さなかった。

ソーガスからは、サンフランシスキート峡谷の山の坂を上り、広大で寂しいモハーベ砂漠の縁を回った。砂漠は、果てしない静かな空っぽの広がりのように、青くかすむ遠くまで続いていた。それから、岩の崖と絶壁のそびえる雄大なテホン峠を、上へ上へと上った（遠くにはホイットニー山が見えた）。雪の頂から平原へ下ると、まっすぐな道が、長く輝くリボンのように目の前に延びていた。この幹線道路を飛ばして、日の沈むころにはベーカーズフィールドの町に着いていた。

ベーカーズフィールドにはペンテコステの働きがなかったので、そこで一夜を過ごすことにした。伝道文書を配り、また、大通りの角の一つで、福音自動車から野外集会を開いた。ここではとくに小さな福音書が必要とされていたので、惜しまずに配った。

オークランドとサンフランシスコへ向かう途中、前も見えないほどの雨になり、運転は難しいばかりか危険になった。横の幌をしっかり留め、滝のような雨で風よけのガラスが曇る中を、私たちは急いでいた。そのため、近づいて来る貨物列車に気づいたのは、線路まで六メートルほどの所だった。列車は速すぎて止まれなかった。もし私が急ブレーキを踏んでいたら、車は滑って前へ進み、列車にぶつかっていただろう。そのとき主は、一瞬のうちに、私に落ち着きを与えてくださった。私は車を左へぐいと回し、線路わきの土手に乗り上げた。こうして列車を避け、だれもけがをせずに止まることができた。ハレルヤ！

私たちが晴れるよう祈ると、まもなく空は晴れ上がった。オークランドからサンフランシスコへフェリーで湾を渡るころには、澄んだ青空から、太陽が私たちにほほえみかけていた。この町にいるあいだ、主が私たちの上に祝福の雨と、ご自分の愛の日の光とを注いでくださる、という約束のようだった。

ロバート・J・クレイグ兄弟夫妻が、働き手たちとともに待っていてくれた。福音自動車と、喜びにあふれた七人の乗り手を迎えるためである。

グラッド・タイディングス・ホール

最初の集会から最後の集会まで、神の栄光が人々の上にとどまっていた。御霊の力の現れは日ごとに増した。飢え渇いた魂が遠くからも近くからも来て、天の父の食卓の良いもので満たされた。集まる人は日ごとに増えた。階上席を一つ建て増したのに、最後の集会では、人々が歩道にまであふれて立っていた。

祭壇への招きにこたえて、罪人たちが立ち上がり、階上席や会場のあちこちから祭壇へ来た。その光景は、魂を勝ち取る者ならだれの心をも温めるものだった。説教の礼拝が終わるたびに、細長い祈りの部屋は、端から端まですぐにいっぱいになった。聖霊のバプテスマを熱心に求める人たちである。求める人たちと働き手たちの祈りが、心を一つにし、声をそろえて立ちのぼった。その声は、大水のとどろきのように響いた。多くの人が、バプテスマを受けるとき、神の力に打たれて床にひれ伏した。ひざまずいたまま、あるいはまっすぐに立ち、手と顔を天に向けたまま、御霊に満たされる人たちもいた。

こうした集会後の集まりは、朝の五時、六時まで続くことも多かった。この集会のあいだに、大勢の人が聖霊のバプテスマを受けた。その中には、二人の牧師、教会の信徒たち、近くの救世軍の小隊の何人もの人がいた。

水の中に火が下る

新しく信じた人たちが、主のために堅く立ち、バプテスマを受けて水の下に葬られた。すると、洗礼槽の中に火が下った。牧師も新しく信じた人たちも、踊り、叫び、異言で語った。解き明かしもあった。

私たちはどこの集会でも、魂への奉仕を第一にし、体への奉仕をその次にしてきた。それでも、ほとんどすべての集会で、いやしの奇跡が起こってきた。

サンフランシスコの集会でいやされた人の中に、翌日、喉の手術を受けることになっていた子供がいた。この子は、祈りにこたえて、たちまちいやされた。医者は、すっかり治っていると言い、子供を家に連れて帰るよう母親に命じた。

十八年間、内臓の病とヘルニアに苦しんできた婦人がいた。信仰の祈りにこたえて、この人は大いなる医者イエスによって、たちまち治された。ヘルニアバンドはもう外され、痛みからすっかり解放されて、跳びはね、踊り、主をほめたたえている。

ひどい事故のために、ひざと足首がこわばってしまった兄弟がいた。この人は神の御手に触れられ、関節がほぐれて、喜びのあまり踊り、跳びはねた。その脚は、元どおりすっかり丈夫になったのである。

頭と顔の神経炎に苦しむ年配の婦人がいた。そのために何年も、一晩もぐっすり眠れなかったという。この人が、祈ってほしいと来た。頭と顔がひどく痛むので、私たちが祈るあいだ、両手でそこを覆っていた。指がほんの軽く触れることさえ恐れているかのようだった。この人はたちまちいやされた。そして残りの集会のあいだずっと、痛みもうずきもすっかり消えたことを、神に感謝し、ほめたたえ続けた。苦しみから解放されて、ぐっすり眠れるようになったのである。

私たちの罪ばかりか病までも、十字架の上でご自分の身に負ってくださったかたは、なんとすばらしい救い主だろう。その打たれた傷によって、私たちはいやされたのである（第一ペテロ二・二四、イザヤ五三・五）。次は、ある姉妹の証しである。

腫瘍がいやされる

私は何年も手首の腫瘍に苦しんでいて、今まで、いやしが長続きしたことはありませんでした。マクファーソン姉妹と一人の兄弟が祈ってくださり、すっかりいやされました。毎日速記の仕事をしていますが、夜になっても手首が痛みません。完全にいやされた証拠です。主をほめたたえます。生活をみじめにしていた内臓の病もいやされました。神経が弱っていたために悪くなっていた目も、いやされました。こうして私は今、すっかり健やかにされています。

（B・L・L）

クレイグ兄弟夫妻は、七年間この働きの牧師として立ってきた。火で試された、主の尊い聖徒である。この終わりの時に、敵は主の子供たちに向けて、さまざまな教理の争いや逆流を押し寄せさせてきた。その中を通って、二人は堅く、忠実に立ち続けてきた。サンフランシスコの愛する人たちが私たちに示してくれた親切ともてなしと愛は、決して忘れない。

送別の礼拝のあと、聖徒たちと牧師が福音自動車の周りに集まった。そして、私たちが次の働きの地へ出発する前に、祈り、歌ってくれた。

カリフォルニア州オークランド

キャリー・ジャッド・モンゴメリー夫人は、オークランドのほかの聖徒たちとともに、サンフランシスコの集会の多くに出ていた。夫人たちはオークランドの働きを心にかけていた。それで夫人は、その町で一続きの信仰復興の集会を開いてほしいと、私たちに頼んだ。けれども、日程はずっと先まで約束で埋まっていて、それはとてもできなかった。そこでモンゴメリー姉妹は、午後の特別集会を二回用意してくれた。私たちはそれを、サンフランシスコの集会の妨げにならないように、合間に挟んだのである。

最初の集会はエベル・ホールで、二回目はホテル・オークランドの大舞踏室で開かれた。

どちらの集会にも、あらゆる教派の信徒が大勢集まった。来ていた何人かの牧師は、もっと深い働きがなされ、自分たちの教会の冷たさが溶かされることを切

に願っている、と言った。メソジストの牧師とメソジスト監督教会の説教者が、二人とも、次の日曜日の朝に来て説教してほしいと、心から招いてくれた。

サンノゼ（「庭園の町」）

J・H・スパークス牧師とその集会は、何か月も前から、この特別伝道のために備え、楽しみにしていた。そして、すっかり準備を整えていた。リバティー・ホールは人で満ちた。みなが集会に飢え渇き、手伝おうと意気込んでいた。

このカリフォルニアの聖徒たちが集会を知らせるために働くさまには、大いに励まされる。町の路面電車のほとんどすべてが、車内の広告札のほかに、外にも信仰復興の集会の大きな横断幕を掲げている。商店街の窓という窓に、張り紙がしてある。町は区域に分けられ、一軒一軒が訪ねられた。口頭で、また刷った招待状で招いたのである。

毎日の路傍集会に加えて、看板や横断幕をつけた自動車が通りを走る。車には、ギターやバンジョーや大太鼓を持った歌い手たちが乗っている。一人の兄弟がエンジンの上にまたがって、メガホンで、イエスがまもなく来られることを叫ぶ。そして驚く町の人々に、リバティー・ホールに来てくわしく聞くようにと勧めるのである。

最初に回心したのは、土曜日の夜を留置場で過ごした、哀れな老人だった。日曜日にその人は救われた。そして次の月曜日には、最前列の席に座り、顔を輝かせて、喜びの証しをした。仕事も見つかり、イエスに忠実であり続けると約束した。

集会のことを聞いた一人の愛するカトリックの婦人は、救われるために五十マイルもの道のりをやって来た。この人は手を上げ、顔を輝かせて、建物の中を回る行進に加わった。そして、新しく見いだした救い主を叫んでほめたたえた。

新聞記者が毎回の集会に来て、どの説教も大部分を日刊紙に載せた。牧師も教会の信徒も、メッセージを聞きに来た。魂が救われ、栄光が下った。

家に迎えられる

「いつ家に帰って来ますか。お迎えに行きます」最近、ロサンゼルスの集会から、電話でこう伝えてきた。「家」とは。何年ものあいだ、このような知らせを受けたことも、ほんとうに家と呼べる所を持ったこともなかったのである。

こうして今週、急いでロサンゼルスへ行ったときに、私たちはあの小さな家を初めて目にした。土地が主にささげられたその日から、信仰の目で見てきた家である。その家は、私たちに必要なものそのものになりそうだ。どこにも凝ったところはないが、家庭という巣になるだろう。愛する聖徒たちは、忠実に働いてくれた。彼らはあまりに御霊に満たされていたので、のこぎりの音や金づちの音とともに、賛美と勝利の歌が立ちのぼった。神が祝福をもって私たちに伴い、無事に家へ連れ帰ってくださるようにという祈りも、立ちのぼった。

それはまことに愛の労苦だった。私たちの心は、尊い天の父への感謝にあふれている。父は、はしための卑しさを心にかけ、約束を果たしてくださった（ルカ一・四八）。私たちが求め、また思うところのすべてを、はるかに越えてかなえてくださったのである（エペソ三・二〇）。幼い子供たちは、学校から家に帰って来るだろう。小さな家の周りで楽しく歌い、遊ぶだろう。そして、母のために祈るだろう。母は、死の床から自分を起こして、みことばを宣べ伝えるようにと命じられた主に従い、主の奉仕のために行き来するのである。それを思うと、私たちは今日、かつてないほどの勇気と軽やかな心で、これからの働きを待ち望んでいる。魂を勝ち取り、主がまもなく来られるというメッセージを広める働きである。今日まで私たちを優しく守ってくださった主に、すべての栄光がありますように。

私たちは今、愛の手が備えてくれたこの憩いの港に、子供たちを連れて行く日を待ち望んでいる。そして、知っている。もう少しのあいだ忠実であれば、いつの日か、無線電信の知らせを受けることを。私たちの主が備えに行かれた、かなたの家に来なさい、という知らせである（ヨハネ一四・二）。そのとき私たちは、私たちが従ってみことばを宣べ伝えたことによって、あがなわれた魂たちとともに引き上げられる。それは私たちの霊の子供たちである。そしてかの地で、

ともに楽しむのである。人の手によらない、しぼむことのない、天にある永遠の建物を（第二コリント五・一、第一ペテロ一・四）。

第二部　集会で神に触れられた人々の証し

オンタリオ州マウント・フォレストに現れた神の大いなる力

（ここにはマウント・フォレストのシャープ姉妹による集会の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

E・シャープ姉妹

牧師W・K・ボウトンの証し

（ここにはコロナの教会のW・K・ボウトン牧師の証しが載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

ニューヨーク州コロナ、フリー・ゴスペル教会

キャンプ集会の思い出

ジョージ・ロイド長老

（ここにはフィラデルフィアのキャンプ集会についてのジョージ・ロイド長老の回想が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

月曜の夜の集会

フィービー・C・ベント

（ここにはフィラデルフィアの全国キャンプ集会の一夜についてのフィービー・C・ベントの報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

私が見たいくつかのこと

エリザベス・シソン

そう、マクファーソン姉妹の天幕で私が見たことである。

自動車の事故でけがをし、何か月も片方の脚が使えなかった兄弟がいた。信仰の祈りとともに手が置かれると、彼はたちまちいやされ、壇上で跳びはね、踊った。

目の見えない兄弟は、天幕や敷地を歩き回れるほどに回復した。婦人の服のボタンや飾りが見えるようになった。見えるものがどんどん増えていく、と彼は言った。

つえをついてキャンプに来た姉妹がいた。彼女はがんも患っていた。その姉妹は、もう何日もつえなしで歩いている。いやしの震えが、がんの隅々まで貫いて走るのを感じた、と私に話してくれた。重い心臓病でひどく弱っていた姉妹は、祈ってもらうために前へ進み出たとき、たちまちいやされた。手が置かれる前に、いやしが来たのである。もう一人の姉妹は眼鏡を外した。針に糸を通せるほど、目が見えるようになったのである。また、歯がみなぐらぐらしていたが、しっかりと丈夫になった。

ローマ・カトリックの婦人が、祈ってもらいに来た。彼女は心をイエスにささげ、いやされた。けれども、いやされた人を一人一人書き留めておくことはできない。私たちの手の中で、あまりにも増えていくからである。

天幕には二千の椅子があった。説教の礼拝が始まる一時間ほど前には、それがみな埋まった。それから天幕の周りじゅうに、人々が十重、十五重に立った。そして一時間半から二時間も、じっと聞き入っていた。群衆は、あらゆる国の人々から成っていた。プロテスタントのすべての教派の人、ローマ・カトリックの人、かなりの数の聖職者、教会に通っていない大勢の人がいた。確かに、神ご自身がこの品の宣伝をしてくださったのである。御霊の力と現れは、すばらしかった。「私たちの力」である「主を喜ぶこと」が会場を満たし、すべての顔に輝き、すべての聖徒の目に躍っていた（ネヘミヤ八・一〇）。「主の力に打たれて倒

れた者は多かった」。祭壇は、端から端まで彼らで埋まった。毎日、実にすばらしい御霊のバプテスマがあった。夜の祭壇は、救われていない人たちでいっぱいだった。彼らは救いを求め、そして見いだしたのである。

ビクトリア・ホールに降り注いだすばらしい大雨

W・W・フィッシャー牧師

（ここにはロサンゼルスのビクトリア・ホールの集会についてのW・W・フィッシャー牧師の報告が載っているが、書き手の没年が確かめられないため訳していない。）

サンフランシスコの信仰復興

ロバート・クレイグ牧師

主が、私たちのエイミー・センプル・マクファーソン姉妹を導いて、サンフランシスコで一続きの集会を開かせてくださった。その日は、この地のキリストの御国にとって喜ばしい日だった。

ペンテコステ運動に対する偏見は、文字どおり山のようにそびえていた。それが、完全な福音のメッセージの主張を率直に力強く示すことによって、押し流されてしまった。教会の人々が、何度こう言ったことだろう。

「これこそ私たちが求めていたものです。異言を語ることのほかは、五十年前に神の力が下ったときとそっくりです」

教派の教会の冷たさと無関心に、心が弱りかけていた人が大勢いた。その人たちが、このペンテコステの火で心を喜ばされ、霊を元気づけられ、温められた。

ああ、どれほど多くの教会の信徒が、押し流されるようにしてバプテスマを受けるまでに至ったことか。その中には、愛するスカンジナビアの人たちも大勢いた。

救世軍の多くの人々も御霊の力に触れられ、来て、聖霊のバプテスマを受けた（使徒二・四）。その中には、何人かの士官と元士官もいた。そのために除名されるかもしれない。それでも、神をほめたたえよ。彼らは喜んでそのそしりを負っている。主の苦しみのなお足りないところをこうして補うことを、特権と考えているのである（コロサイ一・二四）。

あらゆる面で、グラッド・タイディングス伝道所の講堂での主の働きは、大いに強められ、深められ、確かなものとされた。そのことで、私たちは天の父をほめたたえている。

あるりっぱなバプテストの牧師がバプテスマを受けた。彼はこれから、生涯をペンテコステの働きにささげる。伝道者のA・C・スティーブンスもバプテスマを受けた。彼の証しは今、ペンテコステのために、はっきりと力強く響いている。

この三十三日のあいだに、どれほど多くの人がすばらしく回心したかは、永遠だけが明らかにするだろう。深い働きだった。その実はいつまでも残ると、私たちは信じている。

あがないの中に備えられたいやしの力も、恵み深く現された。

町の牧師たちも、かなりの数が聞きに来た。大きな祈りの部屋には、夜ごとに、主の力に打たれて倒れた人たちが横たわっていた。牧師たちは目をみはって

神の驚くべき働きを見つめ、その人たちが新しい異言で語り出すのを聞いた。自分の教会に帰って、天から送られたこの恵み深い信仰復興に逆らって戦う人は哀れである。その人は、自分の墓碑銘を書いているのである。

集会の終わりが近づくと、祈りの部屋はまったく狭すぎるようになった。建物のあちこちで、小さな祈りの群れが罪人たちをキリストに導いているのが見られた。そのうえ、祭壇もたびたび人でいっぱいになっていた。

さあ、もし、しかし

『主は言われる、さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ。

もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる。

しかし、あなたがたが拒みそむくならば、つるぎで滅ぼされる。これは主がその口で語られたことである』（イザヤ一・一八～二〇）

「さあ」「もし」「しかし」。上の三つの節の初めの三つの言葉に、なんと多くのことが言い表されていることだろう。神のこの簡潔で平明な言葉のうちに、福音のすべてが込められ、言い表されている。まず初めに、次の言葉を取り上げよう。

さあ

愛する罪人よ、イエスはあなたを愛しておられる。御腕はあなたに向かって差し伸べられ、御声はあなたを呼んでおられる。主はあなたの体と魂と霊のために、栄光に満ちた救いを備えてくださった。主の大きな心と愛といのちは、愛に満ちた一つの大きな言葉でできている。さあ、来なさい！　さあ、来なさい！　さあ、来なさい！

あなたがどれほど深く罪に落ちていても、イエスは言われる。「来なさい。わたしはあなたをゆるし、降り積もった雪よりも白く洗おう」

あなたの心がどれほど黒く汚れていても、思いがどれほど悪く、欲がどれほど汚れていても、罪の習慣がどれほど強くても、来なさい。わたしは、罪に満ちたあなたの心を取り去り、新しい心を与えよう。清く聖なる思いに満ちた、清い心である。わたしはあなたの思いを天上の思いで満たし、あなたの口を賛美で満たそう。悪い習慣の鎖をすべて断ち切り、キリスト・イエスにある自由な者として歩み出させよう。

「あなたは品行の正しい信仰告白者で、自分なりに正しく生きようと努めてきたかもしれない。それでも、ありのままでわたしのもとに来なければならない」とイエスは言われる。「あなたは新しく生れなければならない（ヨハネ三・七）。血のほかに救うものはない。あなたの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである（イザヤ六四・六）」

小さな子供たちも来なさい。白髪になり、年をむだに過ごしてきた老人も来なさい。黒人も白人も、黄色い人も褐色の人も来なさい。地の果なるもろもろの人よ、わたしのもとに来て救われよ（イザヤ四五・二二）。来なさい！　来なさい！！　来なさい！！！　この招きは、王座にある女王にも、囚人の独房にいる最も哀れな者にも、等しく向けられている。『すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって』いる（ローマ三・二三）。すべての人に、主の大いなる救いが必要なのである。

さあ、泣いている人は涙をぬぐいなさい。落胆して望みを失った魂は、新しい勇気を得、新しい望みを見いだしなさい。イエスは望みのない者の望みだからである。主の傷ついたわき腹から流れた紅の流れに、身を沈めなさい。そうすれば、ギレアデにはまことに乳香があり、主の家には喜びがあることを、あなたは知るだろう（エレミヤ八・二二）。

地獄の縁で踊っている、浮ついて笑う、考えのない罪人も、正気に返って、悔い改めてイエスのもとに来なさい。自分の罪を告白しなさい。そうしなければ、笑いも踊りも決して知られない国で、永遠に滅びることになる。招きは、人種、信条、肌の色、年齢にかかわりなく、すべての人に差し伸べられている。すべての人が等しくイエスを必要としており、イエスがなければ滅びるほかはない。全

世界をもうけても、自分の魂を失ったら、なんの得にもならない（マルコ八・三六）。主は言われる。『さあ、われわれは互に論じよう。たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ』（イザヤ一・一八）。あなたの罪が大きくても小さくても、イエスはすっかりゆるしてくださる。さらに良いことに、まだ時のある今日、あなたが主に立ち返るなら、主はもうあなたの罪を思い出されない。

もし

『もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる』（イザヤ一・一九）。「もし」。愛する罪人よ、イエスはご自分の分を果たされた。「来なさい」という大いなる招きを、全世界に送り出された。あなたをあがなうために、いのちを捨て、血を流された。大いなる栄光の宴を備え、あなたが住むための、栄光に満ちた天の都を建ててくださった。けれども今、私たちはこの聖句の真ん中の大事な言葉、「もし」に来た。読んでみると、たいして大きな言葉には見えない。けれども、これはとてつもなく大きく、山のようにそびえ立つ言葉である。あなたの魂が永遠に救われるか滅びるかは、すべてこの小さな一語、「もし」にかかっているのである。

神はあなたを、自由な意志を持ち、自分で善悪を選ぶ者としておかれた。神はあなたに来るよう嘆願し、あなたを救いと愛へ導こうと努められる。けれども、それを受け入れるよう強いることは決してなさらない。あなたの側に、進んで受け入れる心がなければならない。この救い主を自分の主、自分の王として受け入れようとする心である。主に新しい心をいただき、私たちの偉大な模範であるイエスにならって、生活を形づくっていただこうとする心である。それでは、ここにこの問題を解く鍵のすべてがある。

『もし、あなたがたが快く従うなら、地の良き物を食べることができる』（イザヤ一・一九）。第一に、快く受け入れること。第二に、従うこと。そうすれば、地の良き物を食べることができる。主の子供たちにとって、良すぎるものなど何もない。主は『わたしのものは全部あなたのものだ』と言われた（ルカ一五・三一）。また、『直く歩む者に良い物を拒まれることはありません』とも言われているではないか（詩篇八四・一一）。地の良き物、その喜び、川のように流れる平安、永遠の天国が、あなたのものになる。もしあなたが、主の招きと命令に快く従うなら。ああ、主のくびきは負いやすく、主の荷は軽い（マタイ一一・三〇）。ハレルヤ！

しかし

けれども、次に来るのは、残されたただ一つの道である。悪人に下る、厳かで暗く恐ろしい刑罰である。『しかし、あなたがたが拒みそむくならば、つるぎで滅ぼされる。これは主がその口で語られたことである』（イザヤ一・二〇）。道は二つしかない。一つはいのちに通じ、もう一つは終わりのない死に通じる。一つは望みと喜びに通じ、もう一つは絶望と真っ暗な闇に通じる。

神は悪人の死を喜ばれない（エゼキエル三三・一一）。むしろ、すべての人が誤った道から立ち返ることを切に願っておられる。「さあ、来なさい」という言葉に言い表された、主の大いなる永遠の招きに耳を傾けてほしい。快く従い、永遠のいのちを受け継いでほしい。そう願っておられるのである。けれども、もしあなたが主の招きを拒み、従うかわりにそむくなら、自分で自分の道を選ぶことになる。そうして自分の滅びを決め、自分の死刑執行令状に署名するのである。そして必ず、神のさばきのつるぎに追いつかれる。そのつるぎは、キリストであるイエスを拒んだすべての者の上に下るのである。

もしあなたが快く従い、新しく生まれて主の救いを受け入れ、王なるイエスの子供となるなら、主の栄光の大庭に永遠に住むことになる。

しかし、もしあなたが拒みそむき、むしろ罪のうちにとどまることを選び、悪魔の子として歩み続けるとする。そのときは当然、悪魔の住まいと報いを分け合い、つるぎで滅ぼされる。主がその口で語られたのである。拒みそむく者に滅びは来ない、悲しみも追いつかない。だれかがあなたにそう言おうとしたかもしれない。けれども、その人たちは、まことの事実を変えることはできない。主がその口で語られたからである。

ああ、愛する罪人よ、今日、この単純なメッセージに耳を傾けなさい。ありのままでイエスのもとに来なさい。今この瞬間、いるその場にひざまずいて、こう叫ばないか。「ああイエスさま、あなたは私たちを招いてくださいました。貧しく、みじめで、罪深く、汚れたままで来るようにと。ああ神の小羊よ、私は参ります。私の罪をゆるし、私のうちに新しい心を造ってください。私をいつまでもあなたに従順で、忠実な者にしてください。世と肉と悪魔を求める思いを、私の生活から取り去ってください。私のうちに正しい霊を造ってください。愛する救い主よ、そうすれば、あなたが導かれる所へどこへでも、私はついて行きます」

イエスをどうしたらよいか

「イエスをどうしたらよいか」（マタイ二七・二二）さばきの広間に集まった群衆の騒ぎを越えて、ピラトの声がはっきりと、有無を言わせず響いた。

「イエスをどうしたらよいか」。この問いが、狂ったように顔を上げる暴徒の上に投げかけられた。

正面から、ただちにはっきりした答えを迫りながら、この重大な問いは法廷に響きわたった。そして、張りつめ、悲劇をはらんだ空気の中に、宙づりになって漂った。怒りに揺れる告発者たちのざわめく海から、抑えようのない、わめきと怒号の大嵐が生まれた。険しい顔は、血に飢えた怒りでいっそう険しくなった。その怒りは、流れるような白い衣をまとい、柔和に、優しく、静かに落ち着いて立っておられる方に向けられていた。

それはイエスだった。この清く穏やかな方が、わめき立てる群衆のただ中に、友もなくひとりで立っておられた。なんと場違いに見えたことだろう。いばらとおどろの中に咲く、背の高い、かぐわしい百合のようだった。牙をむいた飢えた狼の群れの中にいる、清い小さな小羊のようだった。尊い神の小羊は、罪なく、逆らうこともなく、ポンテオ・ピラトの大いなるさばきの座の前に立っておられた。そして、ご自分に敵対する者たちの評決を待っておられた。

そう叫ぶなら、あなたは主の清める血が注がれるのを感じるだろう。御霊が、あなたの霊とともに、あなたが神の子であることをあかししてくださる（ローマ八・一六）。主の大いなる永遠の御腕に抱かれて、新しいいのちがあなたの前に開ける。そして、あなたの足が、真珠の門を通って金を敷きつめた通りへと続く道に、置かれているのに気づくだろう。

神があなたを祝福し、この大いなる招きをすぐに受け入れるよう助けてくださるように。今日こそ救いの日だからである（第二コリント六・二）。ああ、心をかたくなにしてはならない（ヘブル三・八）。

「イエスをどうしたらよいか」。彼らはこの問いに、どんな決定を下すのだろうか。この重大な問い、世の始まりから決められてきたどの問いよりも大きく、大切な問いである。答え方は二つしかなかった。取りうる道は二つしかなかった。中立の場所はなかった。主は、こう宣言しておられたではないか。

『わたしの味方でない者は、わたしに反対するもの』（マタイ一二・三〇）。彼らは、イエスを天の王、自分たちの救い主として受け入れるか、十字架につけて自分の心から追い払うか、どちらかしかなかった。イエスを自分たちのメシヤ、あがない主として受け入れるか、拒んでさらしものにするか、どちらかしかなかったのである。

人々の叫びは、ますます大きく、ますます頑固に、高まっては低まった。

「除き去れ！　十字架につけよ！　十字架につけよ！　わたしたちには、カイザル以外に王はありません」（ヨハネ一九・一五）彼らは決定を下し、選びをすませた。取り消すことのできない答えを出し、自分たちの主を十字架につけ、さらしものにすることに決めたのである。

荒々しい手が、柔和なナザレ人をつかみ、法廷から引き立てた。彼らは容赦なく主の衣をはぎ取り、尊い背中を、打つ者たちの前にさらした。主は、むごいむちを柔和に耐えられた。最後の刺すような一打ちまで耐えられた。その打たれた

傷によって、私たちがいやされるためである（イザヤ五三・五）。いばらの冠が額に押しつけられ、あざけりのために紫の衣が着せられた。主は十字架を負ってカルバリの丘へ引かれて行き、残酷な人々によって十字架につけられた。

彼らは自分たちの主を十字架につけた。主に酢いぶどう酒とヒソプを飲ませた。最後まで主をはねつけ、拒んだ。そして主は頭を垂れて息を引き取られた。主は、彼らをふところに集めようとされた方だった。彼らの王となり、彼らを引き上げてご自分の王座でともに治めさせようとされた方だった。

ピラトのさばきの広間。その名を聞くだけで、あの恥ずべき光景が思い出される。そして私たちの心は叫ぶ。

「ユダヤ人たちは、なんと残酷で愚かだったのだろう。自分たちの主を拒んで十字架につけるとは。だれ一人主を受け入れず、主の側に立つ者もないまま、主をひとりさばきの場に立たせておくとは！」

けれども、立ち止まって考えたことがあるだろうか。ピラトのさばきの広間の境は広げられ、その壁はどんどん広がって、今日ではこの全世界がさばきの広間になっている。イエスは今もさばきにかけられておられる。そして御霊は、何度も何度もこの問いを響かせておられる。

「あなたはイエスをどうするのか」

全世界がこの問いに答えなければならない。昔のユダヤ人たちがそうしたようにである。生きている魂はみな、人種や肌の色や信条にかかわりなく、イエスの味方につくか敵につくか、どちらかを選ばなければならない。昔のあの日と同じように、今日も、取りうる道は二つしかない。一人一人の心が、自分ではっきりと答えなければならない。自分もまた、こう叫ぶのか。

「除き去れ！　十字架につけよ」それとも、心の戸を開いて、王の王としてイエスを迎え入れ、愛と忠誠をもって冠をささげるのか。

ある読者は、ぞっとして叫ぶかもしれない。

「ああ！　私たちは決してイエスを十字架につけたりしません。主の手に釘を打ち込むなど、考えもしません」けれども、愛する人よ、少し考えてみなさい。もしあなたが、すべての罪と不義から救ってくださる救い主として、主を受け入れていないとする。悔い改めて主のもとに来て、心に血を注いでいただいていないとする。それなら、あなたはまさにそれをしたのである。自分の主を新たに十字架につけ、さらしものにしたのである（ヘブル六・六）。主の味方でない者は、主に反対する者であることを覚えなさい。中立ではいられないのである。

救われないまま集会から出て行くたび。悔い改めないまま床に就くたび。朝日が昇って、祈りもせず、自分の魂の救いを考えもしないあなたを見いだす日ごと。そのたびに、あなたはこう叫んでいる。

「除き去れ！　除き去れ！」ああ、言葉ではそう言わないかもしれない。けれども、行いは言葉よりも雄弁である。たとえ口では大いに愛を語っても、心と生活を無条件に主に明け渡していないとする。心の王座で主に治めていただいていないとする。それなら、あなたは知らず知らずのうちに答えを出しているのである。

「イエスをどうしたらよいか」という問いに、こう答えているのである。

「除き去れ！　十字架につけよ！　私には、自分と世のほかに王はない。私は自分の思いどおりにしたい。除き去れ！　救いなど除き去れ」こうして、イエスを拒む群衆に、また一つの声が加わる。

「どんなふうに、私が『除き去れ』と言っているというのですか」とあなたは尋ねる。

愛する救われていない魂よ、わからないのか。イエスを離れて踏み出す一歩一歩、時の回廊に響く足音の一つ一つ、罪の中で世俗へ向かう一歩一歩。それが、あなたが口で語るよりも大きな声で、こう叫んでいるのである。

「除き去れ。私は世を選ぶ。私には自分のほかに王はない」あなたは救いを先に延ばすたびに、こう言う。

「今夜はやめておこう」そのたびに、あなたは自分の生活で編んでいる冠に、とげをもう一本加えている。そしてその冠を、主の尊い額にかぶせているのである。

私たちはみな、日々の生活で、イエスのために冠を作っている。そしてそれを主の額にかぶせている。それは二つのうちのどちらかである。犠牲と礼拝の宝石をちりばめた、金の、神聖な愛の冠か。それとも、不信仰や自己中心や罪のむごいおどろでいっぱいの、いばらの冠か。

主に対して聖く生きる新しい一日、賛美の新しいいけにえの一つ一つは、王冠にまた一つ加わる宝石である。クリスチャンはその王冠を、自分の心の王座に至高の方として座しておられる王に、絶えずかぶせているのである。

罪のうちに、イエスに無関心に生きる新しい一日は、また一本のとげ、また一本のむごいおどろである。罪人の生活は、それを冠に編み込んでいる。そしてその冠を、自分が拒んで心から追い払った友であり王である方の額にかぶせているのである。

それから彼らは主に紫の衣を着せ、「ユダヤ人の王イエス、ばんざい」と叫んで、平手で打った（ヨハネ一九・二〜三）。今日も多くの人が、偽善とあざけりと見せかけの生活を続けている。多くの人が、外側だけの形式という紫の衣をイエスに着せている。彼らは教会へ行って、『イエスの御名の力をたたえよ』と歌う。けれども生活によって、手で主を打っているのである。

それから主は十字架を負って、ゴルゴダへ出て行かれた。そこで彼らは主を十字架に釘づけにした（ヨハネ一九・一七〜一八）。大きなごつごつした十字架が地面に横たえられ、イエスの尊い体がその上に伸ばされた。ああ、罪人よ、その人を見なさい。神の御子が、優しく、すべてを受け入れた、いつくしみ深い目をして、あなたの罪のために釘づけにされるのを待っておられる。見なさい。荒々しい重い手が釘をつかみ、イエスの手のひらに当てるのを。聞きなさい。鎚の大きな音が響き、釘が深く打ち込まれていくのを。肉と筋と骨を砕き、あなたのとがのために、十字架の木の奥深くまで打ち込まれていくのを。尊い御手。群衆に食べさせた手、子供たちを祝福し、病人をいやし、死人をよみがえらせた手。あなたが今まさにこの言葉を読んでいるあいだも、あなたの心の戸をたたいている忠実な手。彼らはその手を十字架に釘づけにしたのである。主をそこに釘づけにしたのは、あなたの罪と私の罪だった。あなたは今もなお、自分の生活から主の御手を押しのけ、あざけりと不信仰と高ぶりの釘で、その手を刺し通しているのか。

それから彼らは、主の足に釘を打ち通した。望みと励ましと光を運ぶために、何マイルもの疲れる道を歩いてこられた足である。そして主は、十字架の上に高く上げられた。上へ上へと、あのむごい釘にぶら下がって上げられ、ついに十字架は、そのために掘られた穴に、どすんと落ち込んだ。こうして栄光の王は、地と天のあいだに、恥を受け、ひとりで、私たちのためにかかっておられたのである。

愛する罪人よ、あなたはどれほど高く主を上げ、さらしものにしてきたことか。ほかの人たちは、あなたがイエスを拒むのを見てきたのである。ああ、今すぐ主を救い主として受け入れないか。まずあなたを愛してくださった方を、愛さないか（第一ヨハネ四・一九）。

その美しい顔を見なさい。だれよりもそこなわれた顔を（イザヤ五二・一四）。主の叫びを聞きなさい。

「見よ、わたしは渇く。飲ませてほしい」彼らは主に、酢いぶどう酒とヒソプを差し出した。自分たちの憎しみと不信仰の、最も苦いものだった。けれども、ああ、主は、彼らの愛と礼拝と受け入れの甘さに渇いておられるのである。あなたはイエスに何を飲ませているのか。甘いものか、苦いものか。愛か、拒絶か。私たちの生活は海綿のようなものである。世と悪魔から酢いぶどう酒とヒソプを吸い込むか、イエスとそのみことばから、甘さとかおりといのちの水を吸い込むか、どちらかである。

イエスは今日も、新たに呼んでおられる。

「見よ、わたしは渇く」愛する人よ、あなたは今日、自分の生活から、主に何をささげるのか。受け入れか、拒絶か。

イエスは叫ばれた。『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』（ルカ二三・三四）。ああ、罪人よ、イエスを受け入れることを拒み、こう叫び続けていたとき、あなたが自分のしていることをわかっていたとは思えない。

「除き去れ！　十字架につけよ！」たぶんあなたは、はっきりとは気づいていなかったのだろう。自分がいばらの冠を主にかぶせ、主を新たに十字架につけていたことに。主のために築き上げない者は、壊しているのだということに。

今日、あなたはイエスをどうするのか。この永遠の問いに、どう答えるのか。イエスはあなたの前に立って、評決を待っておられる。あなたがさばかなければならない。賛成か反対か、イエスか世か、いのちか死か、あなたが決定を下さな

ければならない。さばきなさい。そして、きょう選びなさい（ヨシュア二四・一五）。まもなく、この場面はすっかり、永遠に変わってしまうからである。罪人はあわただしくさばきの座から降ろされ、イエスがさばきの座に着いて、国々をさばかれる。墓は開かれ、海はその中の死人を出す。そして、死んだ者はみな、大いなる者も小さき者も、自分たちがさばいた方の前に立つのである（黙示録二〇・一二～一三）。

そのときには、すべてがまったく逆になる。罪人一人一人の前に立ちはだかる問いは、「イエスをどうしたらよいか」ではなく、「イエスは私をどうされるのか」になる。その大いなる日に、イエスを受け入れ、自分の生活の支配者とした人たちは、主に受け入れられ、主とともに王座に着く。けれども、主を拒んだ者はみな、こう叫んだのである。

「私の生活から除き去れ。私にはイエスのための時間などない」その者たちは、そのときイエスに拒まれる。主ご自身が、罪人の言葉をそのまま返されるのである。

「その者を除き去れ。『わたしを離れて行け。わたしはあなたを全く知らない』（マタイ七・二三）。悪魔とその使たちのために用意された所へ行ってしまえ（マタイ二五・四一）」

甘いぶどう酒のような愛を主に飲ませた人たちは、主の父の御国で、主とともに新しくぶどう酒を飲む（マタイ二六・二九）。けれども、拒絶と苦い胆汁のほかは何も主に与えなかった者たちは、自分の罪と死の杯を、かすまで飲み干さなければならない。

あなたはイエスをどうするのか。ああ、今、主を受け入れなさい。『主にお会いすることのできるうちに、主を尋ねよ。近くおられるうちに呼び求めよ』（イザヤ五五・六）。悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、善を行うことをならいなさい。身を洗って、清くなりなさい（イザヤ一・一六～一七）。今すぐ、主を自分の主、救い主として受け入れなさい。主は、罪に疲れ、病んでいるあなたを呼び、優しく捜しておられる。主はささやいておられる。『すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう』（マタイ一一・二八）。『わたしに来る者を決して拒みはしない』（ヨハネ六・三七）。今日こそ救いの日である。明日では遅すぎるかもしれない。主はまもなく、力と大いなる栄光とをもって、再び地上に来られるからである（マタイ二四・三〇）。主に会う備えをせよ。

どちらの道か

人生の道は二つしかない。あなたはどちらの道にいるか

広い世界のどこを探しても、この人生に見つかる道は二つしかない。

一つの道は天国に通じ、もう一つの道は地獄に通じる。初めの道は永遠のいのちに、二つ目の道は永遠の死に通じる。一方は喜びと平安と永遠の昼に、もう一方は永遠の悲しみと真っ暗な夜と滅びに通じている。

この世のすべての男、女、子供は、人種や肌の色や信条にかかわりなく、今この瞬間も、二つの道のどちらかを旅している。言い換えれば、生きている人はみな、天国といのちへの道にいるか、地獄と死に通じる道にいるか、どちらかである。

私は飾り気のない人間で、平明な事実は平明な言葉で語るものだと信じている。説教者たちは、神のみことばを甘くくるんだり、曲げて解いたりするのを、もうやめるべきである。政治やカキ料理の夕食会を説くのをやめて、こうした平明な事実を説き始めるべきときである。愚かな者でさえ迷うことのないほど、単純な事実である（イザヤ三五・八）。

まず初めに聖句を挙げよう。そして、この二つの道と、その行き先と、そこを歩く人々について、主が何と言っておられるかを見よう。イエスは言われる。『滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない』（マタイ七・一三〜一四）。

この言葉がわかれば、いわゆる心の広い多くの人々の考えは、きっと根底からくつがえされるだろう。その人たちはずっと、道徳的な生活を送るか、教会の信徒であれば、それが天国に入るのに十分な旅券になると信じてきた。教会の信徒であることは、もはやさげすまれる道ではない。むしろまったく逆で、今では流行にかなった、ふさわしいことと考えられている。主が私たちに求めておられるのはそれだけだと、多くの人が思っている。けれども、この誤った考えの上に、神のみことばが驚くべき一撃となって下る。そして、そのような偽りの安心を、すべてくつがえすのである。

いのちに至る道は細く、それを見いだす者は少ない（マタイ七・一四）。ああ、罪人も、冷えた信仰告白者も、またクリスチャンも、この事実が現実であることに目覚めてほしい。神もなく望みもなく、毎日永遠へなだれ込んでいく、数え切れない幾百万の人々を、一目でも見てほしい。そうすれば、安楽の床から跳ね起きるだろう。道やかきねのあたりへ駆け出して、人々を無理にでも細い道に入らせるだろう（ルカ一四・二三）。手遅れにならないうちに、神に立ち返らせるだろう。

神のみことばは、この二つの道がどこから始まるかを示している。「すべての人は罪のうちに生まれ、不義のうちに形づくられた」（詩篇五一・五）。『すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなって』いる（ローマ三・二三）。また私たちは、こうも教えられている。神は「罪を少しも大目に見ることがおできにならない」。それで、『罪を犯した魂は必ず死ぬ』のである（エゼキエル一八・四）。しかし、イエスが私たちの身代わりとなり、私たちに代わって死んでくださった。こうして、父の御前に至る新しい生きた道、細い道を開いてくださったのである（ヘブル一〇・二〇）。

ああ、今夜ここにいる、罪人である友よ！　ああ、疲れて重荷を負う旅人よ！しばし立ち止まって考えなさい。あなたはどちらの道にいるのか。天国に向かって旅しているのか、それとも地獄に向かっているのか。私たちはみな、同じ一つの道から人生に入った。つまり、みな罪のうちに生まれ、不義のうちに形づくられたのである。

図の一番は、地球を表す円の、ほんの一部を示している。人はみな罪ののろいのもとに生まれ、新しく生まれる必要がある。『だれでも、水と霊とから生れな

ければ、神の国にはいることはできない』からである（ヨハネ三・五）。そして人はみな、図の二番に示した広い道で、人生の幼い時期に入る。

心配した多くの母親が、こう尋ねる。

「姉妹、善悪の責任を問われる年になる前に死んだ赤ん坊や子供たちは、どうなるとお思いになりますか」私はすぐに、少しもためらわずに答える。

「その子たちは、愛といつくしみに満ちたイエスのもとに引き取られていると、私は信じています。イエスはこう言われました。『幼な子らをそのままにしておきなさい。わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である』（マタイ一九・一四）」

けれども、やがてある日が来る。小さな心と頭が、善と悪の違いを知り始める日である。みなさんの多くは、時の道を振り返って、自分にもその日があったことを思い出せるだろう。幼い旅人は、幼いころから気ままに走ってきた。ところが突然、遠くに、大きく古びた、荒削りの道しるべを見つける。何世代もの嵐に耐えてきたが、今もしっかりと動かずに立っている。この道しるべ、カルバリの十字架は、ちょうど道の分かれ目に立っているのである。

十字架の不思議な、すばらしい形に気づいたことがあるだろうか。十字架の足は、地とへりくだりを指している。また、血に満ちた泉を指して、こう言っているかのようである。

「さあ、哀れな、疲れて悩む、罪に病む魂よ。重荷を下ろしなさい。血に満ちた泉に飛び込みなさい。ここには、汚れた者に清めがあり、罪深い者にゆるしがある。疲れた者に休みが、悩む者に平安が、しいたげられた者に助けが、捕らわれた者に自由がある。ただイエスの足もとに身を投げ出しなさい。そうすれば、主はあなたをすっかりいやしてくださる」

十字架の上の端は、空と天を指して、こう言っているかのようである。

「哀れな、疲れた旅人よ、頭を上げなさい。上にある天に目を上げなさい。なえた手を上げ、弱くなっているひざを強くしなさい（ヘブル一二・一二）。弱い人たちに言いなさい。『強く、また雄々しくあれ。木の上で死なれた方は、栄光の雲のかなたへ上って行かれた。あなたがたのために場所を用意し、ご自分のおられる所にあなたがたもおらせるためである（ヨハネ一四・二〜三）』」

十字架の二本の腕は、大きく差し伸べられている。こう言われた方の愛の腕の中へ、全世界をかき集めようとするかのようである。

「地の果なるもろもろの人よ、わたしのもとに来て救われよ」（イザヤ四五・二二）

罪に病む魂に、ゆるしの道を示し、天に向かう細い道を指し示してくれる。このような道しるべがあることを、神に感謝しよう。

図の三番は、二つの道が分かれる所を示している。ああ、愛する人よ、この道の分かれ目で、足を止めなさい。間違えてはならない。これは、あなたが一生のうちに迫られる、最も大切な決断だからである。あなたはどちらの道を行くのか。一つは左に、もう一つは右に曲がる。一つは天国に通じ、もう一つは地獄に通じる。

図に描かれた二つの道をよく見なさい。滅びに通じる広い道は、曲がりくねった道である。あまりに曲がっているので、そこを歩く者には、すぐ先に何があるかがいつも見えない。道が曲がるたびに、彼はいっそう汚れた罪を犯している自分に気づく。一か月前、一年前なら、良心が許さなかったような罪である。もし道が曲がっていなかったら、彼には地獄の炎が見え、失われた者たちの泣き声と苦しみの叫びが聞こえるだろう。彼らはこう呼んでいる。

「引き返せ！　引き返せ！」それが聞こえたら、彼は必死に走って、十字架という避け所へ逃げ込むだろう。

「なぜ道が曲がっているのですか」とあなたは尋ねる。それは、へびの通った跡だからである。園でエバを惑わしたのと同じへびが、今日、諸国の民を惑わしているのである。

「なぜ曲がっているのですか」それはもちろん、へびはまっすぐに這うことができないからである。悪魔は曲がっている。そして、最後にあなたを滅びに突き落とすまで、道の曲がり角ごとにあなたを惑わすのである。

へびの通った跡は地獄に通じている。けれども、十字架の道こそ、ふるさとである栄光の天国へ通じている。ああ、十字架の陰を歩むなら、天国へ行く道のりが、すでに天国である。ハレルヤ！

滅びに通じる広い道は、あなたの足を誘うように見える。花と世の楽しみが一面にまかれている。広い道に住む、いわゆる心の広い人は、道の曲がり角ごとに見つかるものを語ってくれるだろう。世の楽しみ、劇場、ダンスホール、流行、金銭を愛する心、人気、音楽、そして罪である。

その気になれば、彼らは別のことも語れるだろう。傷ついた心、大酒飲み、遊女、むなしい心、むだに過ごした生涯のことである。青ざめた顔とおびえた目で、ささやくこともできるだろう。自分が見てきた、身の毛もよだつ死のことである。その人たちは、罪の報酬が死であることを知った（ローマ六・二三）。そして、自分たちの父である悪魔の前に出て、悪魔とその手下の小鬼どものために用意された住まいへ行ったのである。

けれども、彼らはそうした本当の事実を語ろうとしない。ただ上っ面の軽い面、金ぴかに飾り、うわべを塗りたてた面だけを語るのである。

広い道

その下り坂の道（図の四番）は広く、入るのはたやすい。ほんの少しの不従順、ほんの小さなうそ、祈りを忘れること、神から離れてさまようこと。何であれ、最初にあなたの生活に入ってきたもの。あなたは覚えているはずだ。そのときあなたは、滅びに通じる広い道で、下り坂の歩みを始めたのである。たぶんあなたは、その下り坂を遠くまで行くつもりはなかったのだろう。けれども、なぜかすべてがとてもたやすく思えた。一つの罪がもっと大きな罪を招いた。やがてあなたはすっかりからまり、あまりに速く滑り落ちて、止まって引き返すことなどできないように思えたのである。

地獄と滅びへ下って行くのは、とてもたやすい。そりで滑り降りるようなものである。そしてついに目覚めると、もう手遅れになっている。今この警告に耳を傾けて立ち止まり、十字架へ引き返さないかぎり、そうなるのである。あの尊い、古びて風雨にさらされた道しるべへ引き返し、イエスの足もとで、すべてを泣いて吐き出しなさい。

その終りは死である

罪深い広い道の果てまで行くのは、恐ろしいことである。私は目を大きく見開き、おののきながら、かすんだ罪深い目と、むくんだ顔をのぞき込んだことがある。顔に、いや、もっと多くは心に刻まれた罪のしわを見てきた。欲望の大きな鎖、悪の牢獄の扉を見てきた。キリストを拒んだ人々の死の床のかたわらにも立った。今あなたが聞いているようなメッセージを拒んだ人々である。彼らが神なしに暗闇へ去り、報いを刈り取りに行くとき、私は身震いしながらその手を握っていた。それまで一度も、まじめに考えようとしなかったような人々がいた。死の床でイエスを受け入れるよう勧められて、彼らがこう叫ぶのを私は聞いた。

「遅すぎる！　遅すぎる！　私は滅びた！」彼らが泣き叫び、歯がみをしながら死んでいったことを、私は語ることができる。

高ぶって傲慢な罪人がいる。不信者がいる。学問をたのんで、神も地獄も天国もないと言い放った者たちがいる。彼らも、大酒飲みや遊女とともに、死のあご（図の五番）を通って行かなければならない。悪魔とその使たちのために用意された、あの恐ろしい住まいへである（マタイ二五・四一）。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりする（マタイ八・一二）。そんな所があるとは信じなかったからといって、その所が動いたり、なくなったりするわけではない。『罪の支払う報酬は死である』（ローマ六・二三）。

救われない者の臨終の言葉

救われない者の臨終の言葉を、いくつか挙げよう。

「あなたの怒りの御顔から私を隠してくれるなら、地獄でさえ避け所だ」（アルタモント）

「地獄がないと証明してもらえるなら、喜んで三万ポンド出すのだが」（チャーテリス）

「もっとアヘンチンキをくれ。永遠のことや、これから来ることを考えずにすむように」（ミラボー）

「ああ、私の哀れな魂よ。おまえはどうなるのか。どこへ行くのか」（マザラン枢機卿）

無神論者ホッブズの最後の言葉は、こうだった。「私は暗闇の中へ、恐ろしい跳躍をしようとしている」

ボルテールは名の知れた裕福な不信者だった。それでも、その最後の言葉はこうだった。「私は神にも人にも見捨てられた。私は死んで地獄へ行くのだ」

その恐ろしい所での死。そこでは、うじがつきず、火も消えることがない（マルコ九・四八）。

「ああ」とあなたは言う。「神が愛の神なら、魂を地獄に投げ落とされることなど、決してないでしょう」そのとおり、神は進んで罪人を滅びに投げ込まれることはない。罪人が地獄へ行くなら、イエス・キリストの体と血を踏み越えて行かなければならない。キリストは、その人を救うために死なれた方である。救い主は、できるかぎりのことをすべてなさった。血の最後の一滴まで流して、その人をあの所からあがない出そうとされた。あの所は、罪人のためではなく、悪魔とその使たちのために造られたのである。地獄へ行く罪人は、その救い主の愛を拒むのである。

この世で罪のうちに生き、悪魔を父としている者がいる（ヨハネ八・四四）。その者は、悪魔のために用意された住まいでも、悪魔を父として生きることになる。けれども、この地上で神を自分の父と認めた、神の子供たちがいる。その人たちは、神の住まいで、平安と喜びのうちに、神とともに永遠に生きるのである。

細い道

もう一つの道（図の六番）、細い道、光といのちの祝福された道は、十字架から始まる。イエスは門である（ヨハネ一〇・九）。主によるほかに、また私たちの罪のゆるしのために主が流された血によるほかに、入る道はない。それは細い道で、地上のものを持って行く余地はない。ただイエスとあなたが入る余地があるだけである。だれでもわたしについてきたいと思うなら、日々自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい（ルカ九・二三）。それは回れ右をすることである。新しく生まれ、キリスト・イエスにあって新しく造られた者となることである（第二コリント五・一七）。そうして、かつて愛したものを今は憎み、そして、ハレルヤ！　かつて憎んだものを今は愛するようになるのである。

天国に通じるこの細い道に入るには、すべての罪を悔い改めなければならない。償うべきことを償い、できるかぎり過去の足跡を正しなさい。すべての罪と不義から清めてくださるよう、イエスに願いなさい（第一ヨハネ一・九）。そうすれば、『たといあなたがたの罪は緋のようであっても、雪のように白くなるのだ。紅のように赤くても、羊の毛のようになるのだ』（イザヤ一・一八）。「主のもとに来る者を、主は決して拒まれない」からである（ヨハネ六・三七）。

この道は絶え間ない上り坂である。そこを上って行く人たちは、言い尽くせない喜びを語ってくれるだろう。世が与えることも奪うこともできない平安を語ってくれるだろう（ヨハネ一四・二七）。傷ついた心がいやされたこと、悲しい生涯が喜びに変えられたことも語ってくれるだろう。すべての罪からの救い、あらゆる束縛からの解放を、あなたに証しするだろう。断ち切られた鎖のこと、キリスト・イエスにあって自由にされた捕らわれ人のことを証しするだろう。聖霊のバプテスマのこと（使徒二・四）、自分の生活にある御霊の賜物と実のことも語ることができる。

私はこの道でも、多くの目と顔をのぞき込んできた。けれども、それらは神の栄光と愛に満ちていた。悪や貪欲のかわりに、優しさと感謝の涙に満ちていた。日を追うごとにいっそう慕わしくなられる、祝福された救い主への感謝である。栄光あれ！　栄光あれ！　栄光あれ！　この道で踏み出す一歩一歩が、あなたを天国に一歩近づける。片方の足が「栄光あれ！」と言えば、もう片方の足は「ハレルヤ！」と言う。そうして清い心と曇りのない良心をもって、あなたは天国への道を進んで行くのである。ああ、罪人よ、あなたはどこで、これほどの喜びを得ているのか。

その終りはいのちである

ここでも私は、死の床のかたわらに立ってきた。そこで見たのは、罪人たちの引きつった、おびえた顔ではない。イエスの御腕に抱かれて、今まさに休みに入ろうとする人々の、穏やかで安らかな顔だった。主にあって死に、喜び叫びながら栄光のふるさとへ帰って行く人々は、幸いである（黙示録一四・一三）。

救われた人々の臨終の言葉を、いくつか挙げよう。

『主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい』（ステパノ、使徒七・五九）

『わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。

今や、義の冠がわたしを待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。わたしばかりではなく、主の出現を心から待ち望んでいたすべての人にも授けて下さるであろう』（パウロ、第二テモテ四・七～八）

「何よりも良いのは、神がともにいてくださることだ」（ウェスレー）

「私は小羊の血に洗われて、門をさっと通り抜けて行く」（クックマン）

「私は完全な平安のうちにいる。ただキリストの血に寄り頼んでいる。神の御前に出るには、これで足りるとわかった」（トロッター）

「戦いは終わった。戦いは終わった。勝利は得られた」（ペイソン博士）

十字架の横木（図の七番）は、死の川を表している。数多くの聖徒たちの足が渡ってきた川である。ああ、主に支えられて、大水にも押し流されずにいられるのは（イザヤ四三・二）、なんとすばらしいことだろう。キャサリン・ブースとともに、こう叫べるのである。

「水かさは増している。けれども、私も上っていく。私は沈まずに、越えていくのだ」

死の波のすぐ向こうに、栄光の冠が待っている。あなたの冠に星はあるだろうか。あなたは、イエスのために魂を勝ち取る者になりたいと願わないか。あの終わりの日に、こうなったらどんなに哀れなことだろう。生涯の大部分を悪魔のために生き、人生の短い一日の、最後のわずかな時間だけをイエスにささげる。そして、一つの魂も携えずに、手ぶらで主にまみえなければならない。主の足もとに置く冠を飾る、戦利品も宝石も一つもないのである。

その向こうに、栄光に満ちた天の都がある。その十二の門は、それぞれ一つの真珠でできている。都の大通りは、すきとおったガラスのような純金である（黙示録二一・二一）。都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られている。城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガラスのような純金で造られている（黙示録二一・一八～一九）。都は、日や月が照らす必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである（黙示録二一・二三）。

そこには病も叫びもなく、痛みも死も悲しみもない（黙示録二一・四）。誤解もなく、心の痛みもない。汚れた者や、忌むべきこと、偽りを行う者は、決してそこに入ることができない。入ることができるのは、小羊のいのちの書にしるされている者だけである（黙示録二一・二七）。

ああ！　道の労苦といばらも、あの美しい都で私たちを待つ栄光を一目見ることに比べれば、ものの数ではない。その都では、イエスがすべての顔からすべての涙をぬぐってくださり、もはや夜もない（黙示録二一・四、二二・五）。ハレルヤ！　イエスにお会いすると思うだけで、私の魂全体が燃え上がる。

罪人がこう言うのを、だれが聞いたことがあるだろうか。「ああ、うれしい。いつかこの人生が終わって、私は死んで地獄と滅びに行くのだ」とんでもない！　罪人たちが、死と刑罰のことを語りたがるのを聞くことは決してない。けれども、まことの神の子供は、十字架を下ろして冠を受ける日のことを思うのが好きなのである。

天国と地獄のあいだには、大きな淵がおいてある（ルカ一六・二六）。死んだ後に、一方から他方へ渡ることはできない。木は倒れた所に横たわる（伝道一一・三）。今日こそ救いの日である（第二コリント六・二）。明日では、永遠に遅すぎるかもしれない。

さあ、罪人よ、立ち止まりなさい。そして今すぐ、自分がどちらの道にいるのかを見きわめなさい。これから先どちらの道を選んで旅していくのかを決めなさい。永遠にどちらの住まいに住むのかを決めなさい。火が消えず、うじがつきな

い所か（マルコ九・四八）。それとも、泣き声は決して聞かれず、歌と歓喜と、言葉に尽くせない喜びが、永遠にある所か。

あなたは自由な意志を持つ者である。自分で決めなければならない。イエスは道を開き、今まさに、あなたのために門を大きく開いて待っておられる。ああ、愛するみなさん、今夜来なさい。今すぐ来なさい。決して、決してイエスを責めてはならない。イエスが自分を地獄に送られたなどと言ってはならない。もしあなたが救われて入ることを拒むなら、自分で自分をそこへ送るのである。イエスはご自分の分を果たされた。あなたが主にまかせさえすれば、主はなんとよくあなたを助け、最後まで運び通してくださることだろう。今、あなたがどこにいても、主はささやいておられる。

「見よ、わたしはあなたの心の戸の外に立って、たたいている」（黙示録三・二〇）今すぐ主に戸を開きなさい。「立って、父のところへ帰ろう」と言いなさい（ルカ一五・一八）。今日こそ救いの日である。あなたは明日を約束されてはいない。今すぐ来なさい。

「御使たちは近くにとどまり、
いとしい心から祈りが昇る。
ああ、さまよう者よ、来なさい」

見よ、この人だ

『イエスはいばらの冠をかぶり、紫の上着を着たままで外へ出られると、ピラトは彼らに言った、「見よ、この人だ」』（ヨハネ一九・五）

イエスはみことばの中で、ご自分が地から上げられるなら、すべての人をご自分のもとに引き寄せると約束しておられる（ヨハネ一二・三二）。今日この題に入る前に、私は主に叫び求めた。私が人の目から隠れて見えなくなり、主を地の上に高く上げることができるように、助けてくださいと。あなたがイエスのほかには、だれも見なくなるまでである（マタイ一七・八）。

この人を見なさい！　この人を見なさい！　私はこの言葉を、何度も何度も繰り返したい。さまよう心をみなとらえ、迷い出た思いを一つ残らずとりこにするまで（第二コリント一〇・五）。この人を見なさい。ほんのしばらく、ほかのすべてのものに目を閉じなさい。

自分の仕事を見るのをやめなさい。自分の楽しみ、家庭、地上の気苦労や務め、隣人を見るのをやめなさい。何であれ、これまであなたの心を奪ってきたものから目を離しなさい。そして、この方、キリスト・イエスを見なさい。

あなたは忙しい生活の中で、これまで一度も立ち止まって、この方を見たことがないかもしれない。神の小羊であり、地上のどんな友よりもあなたを愛してくださる方である。それなら、今こそこの方を見てほしい。

私は確信している。万人にぬきんでて麗しいあの御顔を、一目でも見ることができたなら（雅歌五・一〇）。大水の音のように慕わしいその御声の響きを、一度でも聞くことができたなら（黙示録一・一五）。理解と思いやりと愛に満ちた、あの優しい目の奥を、ほんのしばらくでものぞき込むことができたなら。あなたの目には愛と感謝の涙があふれ、心は賛美で満たされるだろう。そして、この方、キリスト・イエスを見つめ、あがめ、礼拝することを、決してやめたくなくなるだろう。義の太陽の光によって、暗闇と不信仰の影は追い払われる（マラキ四・二）。そうしてこの方を見つめていると、見るたびに新しい美しさが現れてくるのに気づくだろう。新しいご性質と恵みが、驚きあがめるあなたの目の前に開かれていくのである。ついには、あなたの心はほとばしるように歌い出す。

「イエスに目を据えてから、
ほかのすべては見えなくなった。
わが霊の目は、それほどに高められた、
十字架につけられた方を見つめて」

幾世紀の幕を払いのけ、曇りのない過去の回廊を振り返ってみよう。すると、父とともに王座に着いておられるこの方が見える。この方は初めから父とともにおられた。天で最も輝く宝石、父の喜び、御使たちの楽しみ、宮の光、ひとり子であり、金の竪琴で賛美されるにふさわしい方である。この方が王の衣と輝きをまとって御使たちの中に座しておられると、御使たちはその足もとにひれ伏した。

見なさい、父とともにおられるこの方を。父が言葉によって世界を存在させ、太陽と月と惑星を空に置かれたときにも、この方は父とともにおられた。

見なさい、悲しみに満ちたこの方を。あの忘れがたい日、私たちの始祖が罪に落ち、その罪のために死の刑罰のもとで神の御前から追放されたときである。あわれむ目もなく、救う腕もなく、彼らのあがないの代価を払える者もいなかった。そのとき、私たちは

こう言われるこの方を見る。「父よ、わたしを遣わしてください。わたしが代価を払います。血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ません（ヘブル九・二二）。父よ、わたしが血を流します。わたしが、人と神とのあいだの淵に架ける橋になります」それから、こう書かれている。『神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである』（ヨハネ三・一六）。

見なさい、父に別れを告げようと立ち上がられるこの方を。御使の軍勢の歌と礼拝をあとにし、王の衣と笏と冠を脱ぎ、王座から降りて、天から地まではるばる来てくださった。あなたと私のためである。私たちが滅びないで、永遠のいのちを得るためである。

見なさい、聖霊によってみごもり、おとめマリヤから生まれたこの方を。この方が来られた世界では、宿屋にこの方のための余地がなかった（ルカ二・七）。見なさい、最もみじめで卑しい環境の中、飼葉おけに生まれた方を。最も低く、最も貧しい罪人にまで手を届かせるために、来られたのである。

見なさい、母マリヤとヨセフとともに大工の仕事場で暮らし、成長していかれるこの方を。三十歳になり、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受け、務めを始めようとしておられる方を見なさい。水の墓から上がって来られるこの方を見なさい。そのとき天が開け、聖霊がこの方の上に下られた。そして神の御声が、はっきりとこう告げた。『これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である』（マタイ三・一七）。こうしてこの方は、神の権威をもって務めに入られた。神性の力がこの方の上にとどまり、ともにあったのである。

見なさい、荒野で四十日のあいだ試みられたこの方を。すべてのことについて私たちと同じように試錬に会われたが、罪は犯されなかった（ヘブル四・一五）。見なさい、水をぶどう酒に変え、御国の福音を宣べ伝え、病人をいやし、らい病人を清め、死人をよみがえらせる方を。目の見えない人の目を開き、耳の聞こえない人の耳を開き、飢えた群衆に食べさせ、荒れる海を静める方を。エルサレムのために泣き、罪人をゆるし、渇く者に水を与え、心の砕けた者をいやす方を。

見なさい、栄光の王であるこの方が、へりくだってこの地上を歩まれるのを。足を痛め、疲れておられる。見なさい、夜ごと山腹でひとり祈っておられる方を。愛する人よ、あなたのために祈っておられるのである。また、決して感謝することも理解することもない、眠っている世のために祈っておられるのである。鳥には巣があり、きつねには穴があった。しかし、人の子にはまくらする所がなかった（マタイ八・二〇）。

見なさい、最後の晩餐の席にいるこの方を。この方の心は痛んでおられた。ご自分を裏切る手も、ご自分を知らないと言う弟子も知っておられた。弟子たちがみなご自分を見捨てて逃げ去ることも知っておられた。それでも、この方の思いは、あなたと私に向けられていた。この方は、父の国で私たちとともに新しく飲むその日までは、もうぶどうの実から造ったものを飲まないと誓われた（マタイ二六・二九）。そして、こう言われたのである。

「これを行うたびに、あなたがたは、わたしが来るときまで、わたしの死を告げ知らせるのである」（第一コリント一一・二六）ああ、主が死なれた日から主が来られる日まで、長く静かな年月に架け渡された、栄光の橋である。

見なさい、弟子たちがまどろみ眠っているあいだ、園でひとり祈っておられるこの方を。この方の苦しみと、魂の苦悩を見なさい。この方はこう叫ばれた。『しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください』（ルカ二二・四二）。『イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた』（ルカ二二・四四）。

見なさい、悲しみのうちに弟子たちの上にかがみ込まれるこの方を。ともに目をさましていてくれる、わかってくれる心を、一つでも求めておられた。けれども、弟子たちが眠っているのを見て、こう言われた。「なぜ眠っているのか。起きて祈っていなさい」（ルカ二二・四六）『イエスがまだそう言っておられるうちに、そこに群衆が現れ』（ルカ二二・四七）、灰色の夜明けの中を押し寄せて来た。棒と剣を持って、この方を、あなたと私のこのイエスを、捕えに来たのである。

見なさい、ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かれなかったこの方を（イザヤ五三・七）。見なさい、侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っておられた方を（イザヤ五三・三）。見なさい、私たちの病を負い、私たちの悲しみをにない、私たちのとがのために傷つけられ、私たちの不義のために砕かれた方を（イザヤ五三・四～五）。この方は、捕らわれ、さばかれて、取り去られた（イザヤ五三・八）。

見なさい、ご自分が愛し、腕に集めたいと切に願っておられた群衆によって、死に定められたこの方を。見なさい、むちで打たれ、十字架に釘づけにされた方

を。いばらの冠が額にかぶせられ、ローマの槍がわき腹を刺し通した。けれども、ああ、愛するみなさん、この方の叫びを聞きなさい。『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』（ルカ二三・三四）。やがて負債は支払われた。この方は私たちの刑罰（死）を、十字架の上でご自分の身に負われた（第一ペテロ二・二四）。そのとき、喜ばしい勝利の言葉が空に響きわたった。今日もなお地に響いているその言葉を、聞きなさい。

『すべてが終った』（ヨハネ一九・三〇）。それから、この方を見なさい。岩が裂け、空が暗くなる中で、この方は首をたれて息をひきとられた。

見なさい、墓の中で、死の冷たい静けさに包まれて横たわっておられるこの方を。やがて三日目の明け方になった。朝の最初の金色と紫の光が、喜ばしい勝利のうちに、エルサレムの丘の上に昇った。そのとき、天から一人の御使が、大きな白い翼を広げて地へ舞い降りてきた。そして、墓の入口から大きな石をころがしたのである。

見なさい、よみがえられたこの方を。この方は起き上がり、再び出て来て世界をご覧になった。ご自分の世界、ご自分の血で買い取られた世界である。見なさい、再び生きて愛しておられるこの方を。ご自分の民とともに歩き、語り、飢えた者に食べさせ、うなだれた者を励ましておられる。

見なさい、とりこを捕えて引き行き、人々に賜物を分け与えるために、高い所に上られるこの方を（エペソ四・八）。この方はこう言われた。「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になる。わたしが去って行かなければ、助け主はこないであろう。しかし、去って行っても、わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。ほかの助け主、すなわち聖霊を遣わそう。去って行くなら、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである」（ヨハネ一六・七、一四・一八、一四・一六、一四・三）。そしてこの方は、雲に迎えられて、その姿が見えなくなられた（使徒一・九）。

見なさい、再び父なる神の右に座しておられるこの方を。見なさい、御霊が示されるとおり、今まさにあなたのかたわらに立っておられるこの方を。そして、こう言われるのを聞きなさい。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでも戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」（黙示録三・二〇）。愛する人よ、この方を迎え入れなさい。主に近づきなさい。そうすれば、主はあなたに近づいてくださる（ヤコブ四・八）。あなたをあらゆる真理に導くために、主が遣わされた聖霊を受けなさい（ヨハネ一六・一三）。もう少しのあいだ、忠実でありなさい。そうすれば、まもなく、そうだ、すぐにも、あなたは

この方を見るのである。力と大いなる栄光とをもって、天の雲に乗って来られる方を（マタイ二四・三〇）。この方は、あなたをご自分のもとに迎えに来られる。そこでは、海の波のように限りない喜びのただ中で、私たちはガラスの海のほとりでこの方を見る（黙示録四・六）。そして、私たちのあがない主、永遠に私たちの花婿である方を、その王座のもとで礼拝し、あがめるのである。愛する人よ、今すぐ目を開きなさい。ああ！

この人を見なさい！

バラバ

『ところが、彼らはいっせいに叫んで言った、「その人を除き去れ。バラバをゆるしてくれ」。

このバラバは強盗であった。都で起った暴動と殺人とのかどで、獄に投ぜられていた者である』（ルカ二三・一八～一九、ヨハネ一八・四〇）

バラバというこの男について聖書が語るのは、ただこのいくつかの、生々しく心をつかむ出来事だけである。それ以上は何も語られていない。

彼の生涯の初めも終わりも、深い神秘の厚い覆いに包まれている。聖書の光も、その覆いを払ってはくれない。けれども、この数滴の鮮やかな紅のしずく

は、言わば彼の物語の心臓そのものからしぼり出されたものである。それが、次のような物語を声高に語っているように思われる。

無垢のあとを、誘惑が追う。
誘惑に、罪が追いつく。
罪に律法が襲いかかり、死を言い渡す。
厳しい律法は、イエスに打ち負かされ、その手をゆるめる。罪人の代わりに死なれた、身代わりであり、あがない主である方に。

バラバは、人類全体の、また私たち一人一人の、まことにきわだった型である。彼の生涯の未完の物語を見下ろしていると、それは人生の機（はた）に張られた、不思議な、心を引きつける、織りかけの織物のように思われる。その奔放な色は、日なたと日陰、喜びと悲しみ、悲劇と勝利を物語っている。終わりからは糸がほつれて垂れ下がり、初めからも糸がゆるんでぶら下がっている。まるで見る者を誘っているかのようである。その糸を拾い上げ、バラバを学ぶうちに見えてくる人類全体の歴史を、もう一度織り上げなさいと。

幼い日々

どの子供の春の季節にも、私たちは無垢の白い糸を織り込みたいと思う。神を敬い、祈る母と、母のひざもとで祈ることを覚える、白い衣を着た小さな姿の絵である。祈る母を子供たちから奪った家庭は、与えることのできる最も豊かな宝の一つを、子供たちから取り上げたのである。それは、金では決して買えず、時も決して壊すことのできない思い出である。

バラバに祈る母がいたかどうかは、私たちにはわからない。けれども、こう思いたい。母は彼に昔の律法と預言者を教えた。彼が悪い仲間と誘惑の道にさまよい込んだときには、彼のために泣き、祈った。成長してから彼が結婚していたかどうかも、わからない。けれども、愛の金の糸で、妻と美しい男の赤ん坊が、彼の人生の機に織り込まれていたかもしれない。しかし、一つだけ確かなことがある。彼は罪へと導かれ、ますます深く落ちていった。そのあいだも、神は彼に語りかけておられ、御使たちは彼に警告して、こう言っていた。「バラバよ、あなたの罪は必ずあなたの身に及ぶことを知れ」（民数記三二・二三）

きっとバラバは、近いうちにどこかで立ち止まるつもりでいたのだろう。捕えられ、獄に投げ込まれ、死に定められるほど、深く罪に入り込むつもりはなかった。主は警告の黒い雲を、いくつも彼の行く手に置かれた。けれども悪魔は、その一つ一つを、金の富と報酬を約束するばら色に染めたにちがいない。こうして彼は、一つの罪から次の罪へと、どこまでも導かれていった。ついに、こう書かれるに至ったのである。

『バラバは強盗であった』（ヨハネ一八・四〇）

おそらく彼の盗みは、一見なんでもない、ささいなことから始まったのだろう。子供のころの小さな盗みで、良心が彼を悩ませ、責めた。二度目の盗みは前より少し大きかったが、良心はそれほど彼を悩ませなかったようである。そして信じられないほどすぐに、彼の魂はかたくなになった。ついには盗賊の一団の頭となり、都で暴動を起こすまでになった。彼はひとりほくそ笑み、仲間たちに言ったかもしれない。おれたちは律法の目をくぐり抜けるほど賢い。決して捕まりはしない、と。ほかの多くの罪人も、そう自分に言い聞かせるのである。けれども、もう一度、最後の、これきりの警告が来た。

「悔い改めよ。あなたの罪は必ず身に及ぶことを知れ。
人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。
罪を犯した魂は必ず死ぬ」（民数記三二・二三、ガラテヤ六・七、エゼキエル一八・四）

（ああ、バラバよ！　あなたは私たちの始祖の、なんときわだった型であることか。エデンの園で、初めてこの同じ罪に誘われたとき、彼らは禁じられた木から実を盗んで食べたのである（創世記三・六）。きっとサタンは、へびの姿で、エバの耳にささやいたように、あなたの耳にもささやいたのだろう。

「それを食べなさい。決して死ぬことはない」（創世記三・四）そして、あなたは罪を犯し、罪深い者となって、欺きの木の陰に身を隠そうとした。そこなら神も律法も自分を見つけず、罰しもしないと、自分に言い聞かせようとした。

けれども、アダムとエバは、覆いの陰にやましく身を縮めていた。そのとき、日の涼しい風の吹くころ、園を歩いて会いに来られる全能の神の、確かな足音を聞いた（創世記三・八）。それが確かであったように、神が呼びかけてこう言われたのも確かである。

「アダムよ、あなたはどこにいるのか」（創世記三・九）神が彼らの罪を見つけ出し、罪に定め、罰されたのも確かである。それと同じように確かに、律法の足音はあなたを捜し求め、あなたに追いついたのである。ああ、バラバよ！）

悪魔は巧みに、彼をどこまでも導いた。そしてある日、彼は都の通りで起こった暴動の首謀者となっていた。悪魔のような怒りに目がくらみ、血管の中で血が荒れ狂うように騒いだ。理性はその境を越え、稲妻のようにすばやく、重い一撃が加えられた。犠牲者のぐったりした体が、胸の悪くなる鈍い音を立てて地に倒れた。人生の機に張られた織物に、深く染まった紅の糸が一本、通されたのである。そして、

バラバは人殺しとなった。

すばやく、律法の重く容赦のない手が、罪深いみじめな男の肩をつかんだ。彼は自分の手のしわざを、恐れおののいて見つめていた。逃げることはできなかった。あわれみなど問題にもならなかった。律法は定めのとおりに執行されなければならなかった。そのあとの裁判は、きっとあらゆる点で公正で正当だったにちがいない。バラバは、ゆ、う、ざ、い、だった。強盗としても人殺しとしても、彼の罪を証明する証人が大ぜいいた。律法の刑罰を避けることも、それが彼の上に下るのを妨げることも、どんな力にもできなかった。

時の杼（ひ）は、人生の機の上を、行きつ戻りつ飛び交った。今は暗く、陰鬱で、悲しげな糸を織っていた。彼は息を殺し、ほおを青ざめさせて、自分に下される恐ろしい判決を聞いたのだろうか。それとも、うわべだけの虚勢を張って聞いたのだろうか。

「バラバよ、おまえは、おまえの指図のもとで働こうとたくらんだ二人の盗賊とともに、死刑に定められた。カルバリの丘で三本の木の十字架にかけられ、死ぬまでつるされる」

ピラトのさばきの広間の下にある、真っ暗な地下牢に投げ込まれたとき、彼は声をあげて叫んだのだろうか。湿った敷石の上で鎖を鳴らし、悔恨の苦しみにもだえながら。

「ああ、律法の苦い革ひもよ！　ああ、正義のなわめと鎖よ！　自分の恐ろしい過ちに気づき、今こうして悔い改めても、おまえから逃れるすべはないのか」そして、火打ち石のような顔をした、確かで容赦のない律法の声が、母の教えのつきまとう記憶の中から響いたのだろうか。「目には目、歯には歯。人を殺した者は必ず殺されなければならない」（出エジプト二一・二四、民数記三五・一六）罪の暗闇の中に座り、自分ではどうすることもできず、死すべき人間の助けも届かない。迫りくる報いの鎖は、すでに彼の体の肉に食い込んでいる。望みもなく死に定められ、行く手には死のほか何もない。バラバはなんと、人類全体の姿を表していることだろう。

人類の姿としてのバラバ

アダムによって罪が入った。記録された最初の罪は盗みだった（創世記三・六）。記録された二番目の罪は人殺しだった（創世記四・八）。限りなく聖なる神は、罪を少しも大目に見ることがおできにならなかった。罪を犯した魂は必ず死ぬ（エゼキエル一八・四）。罪の跡には、死と永遠の絶望が続いた。人と神とのあいだには大きな淵が置かれ、律法の強い腕が人類の上に重く下った。公正な裁判のあと、ゆ、う、ざ、い、の評決が下された。「死」の判決が言い渡された。人は、さばきの広間の下にある捕らわれの暗い牢獄に投げ込まれ、自分にさばきが執行されるときを待っていた。

ああ！　縛られている者のために、牢獄の戸を開きに来る人があればよいのに（イザヤ六一・一）。ああ！　救う腕があればよいのに。罪に打たれた人類の病を負い、悲しみをになう方がいればよいのに。罪人のとがのために傷つけられ、罪人の負債を払う方がいればよいのに！

その後の日々、バラバのうずく頭の中を、どんな思いが脈打っていたかを、だれが知ろう。悔恨の突き刺すような痛み、昔の日々の思い出、こうであったかも

しれないという思い、眠れない夜、望みのない昼。闇を貫く光は一筋もなかった！　さばきの広間で判決を言い渡したあの恐ろしい声は、彼の耳に鳴り響き続けていたのだろうか。

「おまえは、二人の盗賊とともに、カルバリの丘で木の十字架にかけられ、死ぬまでつるされる」彼は時の感覚をすっかり失い、いつも耳をそばだてていたのだろうか。自分の名が呼ばれ、大きな戸が開け放たれるのを聞こうとして。暗い静けさが破られ、群衆のわめき声と突き刺すような昼の光の中で、あの恥ずべき不名誉な死へと引き出されて行く、そのときを待って。独房の静かな暗闇の中で、聞こえる音といえば、ぽたり、ぽたりという汗のしずくの音だけだった。天井からしたたり、足もとの敷石に涙のように落ちるしずくである。そこで、十字架の幻が、自分の十字架が、彼の前に現れたのだろうか。十字架につけられるときが近づくにつれ、それはますます近づいて来たのだろうか。

杼は、陰鬱でわびしい色合いで、機の上を絶え間なく飛び続ける。

ああ！　これは何だ！　激しい恐れとおびえの糸が、機の上に通されていく！　バラバはまっすぐに身を起こし、石になったかのようにこわばって、全身の神経を張りつめて聞き耳を立てる。聞こえるか。また聞こえる。人々が叫んでいるのは、彼の名である。

「バラバ！　バラバ！　バラバをゆるしてくれ。バラバを出せ！　バラバ！　バ、ラ、バ！」

それは大ぜいの群衆の声で、ますます大きくふくれ上がっていく。けれども、この地下牢の奥で、どうしてそれが聞こえるのだろうか。戸が開いているにちがいない。そうだ、彼の独房に通じる石の廊下に、足音が響いている。足音はますます近くなる。剣が鳴り、輪につけた鍵がじゃらじゃら鳴る。その背後には、いつも上のさばきの広間から、群衆の有無を言わせぬどよめきが聞こえてくる。そのどよめきは今、否応のない、一定の調子で繰り返す叫びに変わりつつある。

「バラバ！　バラバ！　バラバをゆるしてくれ！！！！」

兵士たちの足音が、ますます大きく、はっきりと聞こえてくる。そして、鋭い号令とともに、独房の前で止まる。戸の中で重い鍵ががちゃりと鳴り、錠がきしり、重い戸がきしみながら開く。そして、予期していた言葉が来る。

「出て来い、バラバ。今日、ほかの者がおまえの代わりに死ぬのだ。おまえは自由の身だ」

教えてほしい、ああ、機を織る者よ。かすかな望みの光が、彼の心にさしたのだろうか。それとも、彼はしりごみして、魂の苦しみから叫んだのだろうか。

「ああ！！　私の災いを笑わないでくれ。恐れが来るときに、あざけらないでくれ（箴言一・二六）。私は公正な裁判を受けたことを知っている。罪があると証明され、死に値することも知っている。私は十字架の上の死へと行こう。だが、ああ！　どうか、どうか私の災いをあざけらず、悲しみの時をばかにしないでくれ」そして、獄吏はこう答えたのだろうか。

「冗談でもあざけりでもないぞ、バラバ。本当だ。おまえは自由の身だ。イエスという名の者が、今日、カルバリの丘で、二人の盗賊のあいだで、おまえの十字架にかけられるのだ。おれはこの目で見た。その人は外の中庭でむち打ちの柱に縛られ、打つ者たちに背中をさらしていた。むごいむちが、その肩に雨のように打ち下ろされていた。今、その人は十字架につけられるために、丘へ引かれて行くところだ。出て来い！　バラバ！　出て来い！　おまえは自由だ！　その人はおまえの不義のために砕かれ、おまえの平安のための懲らしめを受ける（イザヤ五三・五）。その人がおまえの代わりに死ぬのだ」

自由の身

自由の身だというのか。自由の身だと！　じ、ゆ、う、だと！　自分の耳が正しく聞いているはずがない！　これはきっと、自分を苦しめるために現れた、何か恐ろしい夢にちがいない。

「急げ、バラバ、出て来い！」

ああ！　足の鎖はゆるんでいた。手は自由だった。長いあいだ肉を裂いてきた、食い込む鉄はなくなっていた。震える一歩、二歩、三歩。もう戸口のすぐそばまで来た。けれども、引き止める手は彼の上に下りてこなかった。こうあざける声もなかった。

「ああ、バラバ、出て来て代価を払え。おまえの罪がおまえの身に及んだのだ」四歩、五歩、六歩。彼は戸口にたどり着き、そこを通り抜けた。七歩、八歩、九歩。彼は廊下を手探りで進み、はるか向こうの一筋の光のほうへ、やみくもによろめきながら歩いて行った。確かに兵士たちが後ろから進んで来ていた。けれども、彼を捕えようとはしなかった。これはいったいどういうことなのか。最後の瞬間に、きっと捕えられるにちがいない。しかし、そうではない。兵士たちは別の方向へ曲がって行き、彼はひとり残される。そして、慣れない目を刺す、ますます強くなる光の中へと歩いて行く。

ついに彼は、口を大きく開けた戸口にたどり着いた。震える片手で門柱にしがみつき、もう一方の手を目の上にかざした。再び日の光を見つめ、再び鳥の歌と、周りの子供たちの声を聞いたとき、彼はどんなことを思ったのだろうか。とまどいのただ中にあっても、望みと新しい決意の金の糸が、すでに織物に織り込まれ始めていたのだろうか。

ああ、織物の端からゆるんで垂れ下がっているこの糸よ、教えてほしい。物語はいったいどう終わったのか。バラバは、カルバリの丘へ向かって進む群衆を目にしたのだろうか。群衆のやじとあざけりを聞き、白い衣をまとったあの麗しい方が、十字架の重みの下に倒れられるのを見たのだろうか。もしかすると、彼は古い田舎家に走って帰り、驚く妻と幼い息子の手を握って、こう叫んだのだろうか。

「ああ、いっしょに来てくれ。私の代わりに死のうとしている人を見に行こう。今日は私の死刑の日だった。今日、私は十字架にかけられて、重罪人として死ぬはずだった。それなのに、ほかの人が、罪のない人が死のうとしている。私のために死のうとしているのだ。ああ、いっしょに行って、その方の顔を見よう。そのような愛の神秘を、知ることができるように」

さあ、その人を見に行こう

そして二人は、群衆をかき分けていっしょに丘を登り、十字架のもとに着くまで一度も立ち止まらなかったのだろうか。そこでは、私たちの悲しみを負われた方の苦しみを、すすり泣く女たちが嘆いていた。そしてバラバは、あの最も麗しい御顔を見つめたのだろうか。釘を見、額と手と足から流れ落ちる血のしずくを見たのだろうか。深い、言葉に尽くせない愛をたたえたあの目をのぞき込んだのだろうか。そのとき、彼は聞いたのだろうか。

苦しみにゆがむあの唇から、「父よ、おゆるしください」という言葉がこぼれるのを。そして、こう叫んだのだろうか。

「ああ、イエスさま、あなたの愛が私の心をとらえました！　向こうに二人の盗賊がいる。一人は右に、一人は左に。けれども、真ん中にあの十字架がある。私が死ぬはずだった十字架だ」そして彼はかがんで幼い息子を抱き上げ、十字架を指さして、その耳にすすり泣きながら、こう言ったのだろうか。

「ああ、坊や、ごらん。あれが、お父さんが死ぬはずだった十字架だよ。あそこが、お父さんがかかるはずだった場所、お父さんが死ぬはずだった死なんだ。でも、あそこの麗しいお方、イエスと呼ばれているお方が、お父さんの代わりに死んでくださっている。ああ、妻よ、息子よ、ああ、わが心よ、私のためにご自分をささげてくださったこのイエスを、いつまでも愛し、このイエスのために生き、働こう」

バラバがイエスの目をじっと見つめていると、主の御顔が彼のほうに向けられたのだろうか。二人の目が合い、二人のあいだに、通じ合うまなざしが交わされたのだろうか。それがバラバの心を砕き、愛の鎖で彼を永遠にとりこにしたのだろうか。彼はひざまずいて、こう叫んだのだろうか。

「イエスさま、どうしたらあなたに感謝しきれるでしょうか。悲しみの涙では、決して返せません、
私の負う愛の負債を。
主よ、ここに私自身をおささげします。
それが私にできるすべてです」

イエスの傷ついたお体が十字架から降ろされ、墓に納められたとき、彼はそこにいたのだろうか。イエスがご自分の民に現れ、雲に乗って父の王座へと上って行かれた朝、彼はそこにいたのだろうか。ペンテコステの日に聖霊の賜物を受

け、イエスのメッセージとイエスの救う力を宣べ伝えに出て行った百二十人の中に、彼はいたのだろうか（使徒一・一五、二・四）。

確かなことはわからない。けれども、一つだけ確かに知っていることがある。この世界全体が闇に包まれ、罪と死に閉じ込められていたとき、主の御霊がイエスの上に臨んでおられた。主はイエスに油を注ぎ、貧しい人々に福音を宣べ伝え、心の砕けた者をいやすようにされた。捕らわれ人に解放を、目の見えない人に見えるようになることを告げるようにされた。打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるようにされたのである（ルカ四・一八～一九）。また、確かに知っている。バラバは、この失われた罪人の世界全体より大きな罪人でも、より望みのない者でもなかった。そしてイエスは来られて、私たちのとがのために傷つけられ、私たちの不義のために砕かれた。みずから懲らしめを受けて私たちに平安を与えてくださり、その打たれた傷によって、私たちはいやされた。私たちがみな羊のように迷って、おのおの自分の道に向かって行ったとき、主は私たちすべての者の不義を、この方の上に置かれた（イザヤ五三・五～六）。この方はしいたげられ、苦しめられたけれども、口を開かれなかった。捕らわれ、さばかれて、取り去られた。生けるものの地から断たれた。民のとがのために打たれた。悪しき者とともに、また死においては富める者とともに、墓を設けられた。暴虐を行わず、その口には偽りがなかったのにである（イザヤ五三・七～九）。この方はとがある者とともに数えられ、多くの人の罪を負い、とがある者のためにとりなしをされたのである（イザヤ五三・一二）。

絶望の地下牢で死を待つ人類

『ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである』（ローマ五・一二）

人は罪と神への不従順によって、なんと望みのない、みじめな地下牢に自分を閉じ込めてしまったことだろう。どれほど探しても、出口はなかった。ただ一つの望みは、大きく重いあわれみの戸だった。けれども、厳しい獄吏である律法は、その戸を開くことを拒んだ。ひとりの人の罪のために、アダムからモーセまで、死が王座に着いて思うままに支配したのである（ローマ五・一四）。

絶望の獄屋の中に座っていると、ある日が来た。暗黒の中に住んでいる民は大いなる光を見、死の地、死の陰に住んでいる人々に、光がのぼったのである（マタイ四・一六）。

時の廊下を、解放の足音が近づいて来るのが聞こえた。恵み（天から遣わされた鍵番）が、神の犠牲の愛という鍵を携えて来た。その鍵が罪の宣告の錠を回し、重いあわれみの戸を大きく開いたのである。

あわれみと愛（離れることのない二人）が獄屋に入って来た。そして、絶望のなわめを解き、罪の強い鎖の力を打ち砕いて、全人類に呼びかけた。

「出て来なさい」

「あなたがたは自由の身です。ほかの方が、あなたがたの代わりに死なれたのです。イエスという名の方が、あなたがたの十字架を負い、あなたがたのあがないの代価を払われたのです。出て来なさい。出て来なさい。ああ、おののく魂よ、なぜいつまでも死の陰の谷に座っているのですか（詩篇二三・四）。わからないのですか。戸は開いています。鎖は砕かれています。バラバよ、バラバよ、出て来なさい！」もしバラバが地下牢から出ることを拒み、自由と光よりも鎖と闇を選んだとしたら、あなたはバラバをどう思うだろうか。もしバラバがそれほどの恩知らずで、感謝の心がまるでなかったとする。自分のために死なれたこのイエスに会って感謝しようと、祝福されたカルバリの丘を登る手間さえかけなかったとする。あなたはそのバラバをどう思うだろうか。

イエスはあなたのために死なれた。あなたの獄屋の戸は大きく開いている。御霊が呼んでおられる。「出て来なさい。神の愛とあわれみの日の光が、あなたを待っている。ゆるしと平安は、受け取りさえすればあなたのものだ。今すぐカルバリへ向き直り、十字架へと歩んで行かないか。あなたの救い主の御顔を見つめないか。どの人の顔よりもそこなわれた、あの御顔を（イザヤ五二・一四）」

そこには、あなたの昔からの二人の仲間、罪と死が、あなたの主のかたわらの二本の十字架にかかっている。一人目の盗賊、罪に対しては、少しも大目に見ることはできず、どんな言い訳もありえない。罪はあなたに対して死に、あなたは

罪に対して死ななければならない。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか（ローマ六・二）。

二人目の盗賊については、最後の最後になって、彼にゆるしが来た。死が勝利にのまれたときである（第一コリント一五・五四）。死のとげは罪である（第一コリント一五・五六）。私たちの昔の仲間である罪が死ぬとき、死からとげが抜き取られる。そして、あがなわれた魂はこう叫ぶことができる。「ああ！　死よ、おまえのとげは、どこにあるのか」（第一コリント一五・五五）体が眠っていても目覚めていても、かまわない。肉体から離れることは、主とともに住むことである（第二コリント五・八）。よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう（ルカ二三・四三）。

そうだ、愛する罪人よ、イエスがすべてを払ってくださった。あなたはすべてを主に負っている。今すぐ主に向き直りなさい。主の大いなる愛と、尊い血を流してくださったことを感謝しなさい。主を見つめていると、あなたの心は溶かされ、目から涙がこぼれ、あなたはほとばしるように歌い出すだろう。

「わがイエスよ、あなたを愛します。あなたは私のものと知っています。
あなたのために、罪の愚かさをすべて捨てます。
恵み深いあがない主、わが救い主はあなた。
もし私がかつてあなたを愛したとすれば、わがイエスよ、それは今です」

ある人が下って行った

（ルカ一〇・三〇〜三五）

主が私の心に示し、あなたがたに届けるようにと託されたメッセージは、すべての罪人に向けられたものである。けれども、とりわけ信仰から離れた人のためのものである。

ああ、世には信仰から離れた人が、なんと多いことだろう。かつて主とともに歩みながら、どういうわけか主の御手を放し、遠くさまよい出てしまった人が、なんと多いことだろう。地の面に、哀れな、信仰から離れた人ほどみじめな男や女はいない。かつては主の御前と喜びのうちを歩み、主の豊かな御手からごちそうをいただいていた。それなのに罪に落ちて、慕い求める心のうずきを、この世のけばけばしい金ぴかの楽しみの渦の中に、おぼれさせようとするのである。

信仰から離れた人の心には、声にならない苦しみと恥と慕わしさがある。一度も信仰から離れたことのない人には、それを十分に理解することも、思いやることもできないだろう。私は回心してから一度だけ、哀れな、落胆した、信仰から離れた者になったことがある。だから、みじめに慕い焦がれる心、主の尊いほほえみの日なたに戻りたいと叫ぶ心を知っている。霊の力が漏れ出していくこと。周りの人々に、信仰から離れた自分の状態を隠そうとすること。世に飛び込んで、落ち着かない渇きを押し殺し、満たそうとすること。それは、主ご自身のほかには何も満たすことのできない渇きなのである。

私は、心の中に入って来て、思いやり、助けてくれる人を、どれほど切実に求めたことだろう。本気で手を差し伸べ、私を勝利と主の愛の安全な所へ連れ戻そうとしてくれる人がいたなら、と思う。そうすれば私は、多くの苦しみと、敵の手による打撃を受けずにすんだだろう。

だから今夜、私の心はすべて、信仰から離れた人に向かっている。あなたの手を取り、イエスとエルサレムの都へ連れ戻す手助けをしたいと、切に願っている。

イエスのもとに戻る第一歩は、自分が信仰から離れた者であることを悟り、率直に認めることである。

今夜私たちは、下って行ったある人について読む。彼の旅をたどりながら、一人一人よく見ていてほしい。彼の場合が、あらゆる点であなた自身の場合とよく似ていないかどうかを。まず初めに、話の全体を読んで記憶を新たにしよう。それはルカによる福音書十章三十節から始まっている。

イエスは言われた。『ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。

するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。

同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。

ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところに来て、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

翌日、出発するとき、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、「この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、わたしがまた来るときに支払います」と言った』（ルカ一〇・三〇〜三五）

さて、これから一語一語たどり、図の絵を追っていこう。信仰から離れた人も罪人もみな、自分を「ある人」の立場に置き、この絵の中に自分の居場所を見つけなさい。今夜この部屋には、「下って行った」ある男たちが、また女たちが大ぜいいる。けれども、互いのことは忘れなさい。この部屋にほかの「ある人」がいることを忘れて、この言葉を自分ひとりの場合に絞って聞きなさい。

ある人が下って行った

ああ、今夜ここにいる「ある人」よ、神から離れてさまよってきたあなたよ、下って行くのはなんとたやすいことだろう。滅びと、地獄の永遠の悲しみへの道は、長く速い、そりの滑り降りにすぎない。罪人であること、信仰から離れた者であることに、誇るべきものは何もない。下って行くことはだれにでもできる。どんな臆病者でも罪人になれる。けれども、天への険しい坂を上って行くには、本当の勇気と神の恵みが要る。あなたのうちにある男らしさ、女らしさの火花を、一つ残らず要する。死んだ魚でも、流れを浮かんで下って行ける。けれども、流れに逆らって泳ぎ上るには、生きた魚でなければならない。霊的に死んだ哀れな魂はだれでも、滅びへと浮かんで下って行ける。泳ぐことも逆らうことも要らない。しかし、その魂を再び上へ連れて行けるのは、主の神聖ないのちと力のほかにはない。

下って行った！　ああ、「く、だ、る」というこの一語に、罪の断崖と穴の、なんという深さが込められていることか。

エルサレムからエリコへ

図のエルサレムは、聖く清く、キリストに似たもののすべてを表すとしよう。まもなく神のもとを出て天から下って来る、新しいエルサレムに込められたもののすべてである（黙示録二一・二）。そしてエリコは、罪深く、汚れた、不敬虔なもののすべてを表すとしよう。

愛する「ある人」よ、あなたがどうしてエルサレムの門を出て、下り坂の長い旅を始めることになったのか、私にはわからない。祈りが足りなかったのかもしれない。神のみことばを読まなかったのかもしれない。（息をせずに生きられないのと同じように、祈りとみことばなしに主の御前にとどまることはできない。祈るとき、あなたは神に語っている。みことばを読むとき、神があなたに語っておられるのである。）あるいは、この世の気苦労が重くのしかかるのを、許してしまったのかもしれない。

私の場合は、私をイエスに導いてくれた愛する人が取り去られたことだった。私はいつもその人の強さに寄りかかっていた。主に教えていただいて主のうちに成長し、嵐に耐えられるようになろうとはしなかったのである。地上の支えが突然天の園へ移し植えられたとき、私は、すがっていた樫の木からはぎ取られたつたのように取り残された。ああ、私はなんと哀れな、倒れて崩れ落ちた、小さなかたまりだったことだろう！　けれども今は、主の尊い御名をほめたたえる。私はイエスにすがり、寄りかかることを学んだのである。決して死ぬことも、私をひとりにすることもない支えである。

最初の原因が何であれ、事実は変わらない。ある人は、エルサレムからエリコへ下って行った。

そして落ちた

ああ、どれほど強くても、何年クリスチャンであっても、イエスなしには一歩も歩けない。主の尊い御手を放したその瞬間に、あなたは立っていられなくなる。そして、落ちてしまう。

強盗どもの手に

信仰から離れた人は、下り坂の旅を始めてまもなく、自分もまた強盗どもの手に落ちたことに気づく。

私たちが読んでいるこの強盗どもは、ある人を置き去りにする前に、彼に二つのことをした。

一、その着物をはぎ取った。

二、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。

そして、それこそまさに、強盗どもがあなたにしてきたことなのである。

エルサレム（救いの都）であなたが着ていた着物が、何でできていたか、立ち止まって考えたことがあるだろうか。敵があなたからはぎ取った、このかけがえのない着物と装いである。

図を見て、エルサレムでの聖い生活がどんな着物を表しているか、あなたが何を失ったかを見よう。

清く聖なる神の御子の御前を歩み、そこに生きる者は、清く白い着物をまとっていなければならない。それは聖徒たちの正しい行いである（黙示録一九・八）。

小羊の婚宴に入る者はみな、イエスが用意された婚礼の礼服を着ていなければならない（マタイ二二・一一）。世の衣や、自分の義と道徳の外套では足りない。それらは主のまなざしの前に消え失せてしまう。

「J」は「イエス」（JESUS）を表す。私たちがイエスとともに歩むとき、イエスは私たちにご自身を着せ、ご自身の義の衣を着せてくださる（黙示録三・一八）。

「E」は「喜び」（ENJOYMENT）を表す。主の御前には満ちあふれる喜びがある（詩篇一六・一一）。主はご自分の民の頭に、とこしえの喜びの油を注がれた（イザヤ三五・一〇）。

「R」は「休み」（REST）を表す。こう言われた方の御前には休みがある。『わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう』（マタイ一一・二八）。「疲れた者は、その魂のために安息を得る」（エレミヤ六・一六）。

「U」は「役に立つこと」（USEFULNESS）を表す。救い主はこう言われた。「まだ昼のあいだに働け。夜が来る。すると、だれも働けなくなる」（ヨハネ九・四）。この救い主とともに歩む者は、魂を勝ち取る者になりたいと切に願い、奉仕の外套を身にまとう。

「S」は「救い」（SALVATION）を表す。ああ、愛する、信仰から離れた人よ、覚えていないか。あなたは以前、美しい救いの衣を喜んで身にまとい、出かけて行ったではないか（イザヤ六一・一〇）。それを着せてくださったのは、「あなたの光、あなたの救い」である方だった（詩篇二七・一）。

「A」は「礼拝」（ADORATION）を表す。栄光に満ちたあがない主を見て、その足もとにひれ伏して礼拝し、賛美せずにいられる魂が、どこにあるだろうか。強盗どもが、あなたからあがめと礼拝の衣をはぎ取ったとき、あなたは大きな喪失を感じなかったか。

「L」は「愛」（LOVE）を表す。私たちが愛である神のうちに住むとき（第一ヨハネ四・八）、神は「その愛を私たちに注いでくださる」（詩篇九一・一四）。そのとき私たちは、神のご性質を吸い込み、それにあずかる。そしてついには、御霊の実の最初のもの、愛が、私たちの生活から芽生えてくる（ガラテヤ五・二二）。

「E」は「富むこと」（ENRICHMENT）を表す。キリストは、ご自分の貧しさによって私たちが富む者になるために、貧しくなられた（第二コリント八・九）。このキリストのうちに見いだされる、大きく尽きることのない富の蓄えは、死すべき者の舌では語り尽くせない。

「M」は「あわれみ」（MERCY）を表す。血の下にとどまる神の子供は、「天にまでおよぶ」大きなあわれみに、衣のように覆われている（詩篇一〇八・四）。また、詩篇八十五篇十節のまこと（衣を身に締める帯）にも覆われている。この二つがともに会って、主の衣を形づくるのである。

強盗どもがほかでもないあなたから着物をはぎ取ったのは、なんと恐ろしい喪失だったことか。主の愛の都の、安全な城壁の外へ出て、エリコへ向かう下り坂の旅を始めたなら、あの美しい衣を失わずにすむはずはなかった。キリストに似た衣をはぎ取られたあの日は、まことに悲しい日だった。あなたのイエスは去った。あなたの喜びも、休みも去った。役に立つことも、救いの衣も、礼拝も、愛も、富むことも、あわれみも、取り去られた。

このような衣をはぎ取ってあなたを裸にした、敵の最初の一撃も、十分にひどかった。けれども、ああ、「ある人」に起こった二つ目のことは、もしそんなことがありうるなら、それよりはるかに、はるかに悲しいことだった。というのは、

強盗どもは彼に、き、ず、を、お、わ、せ、半殺しにしたまま逃げ去ったのである。

悪魔とその手下の小鬼どもは、信仰から離れた人と罪人に、なんとひどい傷を負わせることだろう！　彼らこそ、この世でも来たるべき世でも、あなたから救いと休みと幸せを奪う強盗どもである。イエスは、ご自分の血によって罪人のたな

めに衣を買い取ってくださった。その衣が取り去られると、敵が雨のように浴びせる打撃から、罪人を守るものは何も残らない。

こうして衣をはぎ取られ、傷を負わされて、神から遠くさまよう信仰から離れた人は、まことに危険な状態にある。たちの悪い強盗どもは、うなずき合い、目くばせし合いながら獲物を拾い上げる。そして、彼を半殺しにしたまま、逃げ去るのである。

道の里程標は、今やエリコを指している。ある人が下り坂の道で里程標に着くたびに、新しい傷がまた一つ増え、彼の魂の奥まで焼き焦がしていく。

もう一度図を見て、エリコへ続くこれらの里程標が何を表すかを見よう。まず初めは、

「J」は「浮かれ騒ぎ」(JOLLIFICATION)を表す。「たいした傷ではない」とあなたは言う。「ちょっとした楽しみで、たいした害はない。ちょっとしたうわさ話、むだな冗談、劇場、小説、玉突きの一勝負くらいだ」「若い者には楽しみがなくてはならない」と敵は言う。その声に耳を傾ける者は、浮かれ騒ぎが傷を残し、自分を二つ目の里程標へと急がせたことに気づくだろう。

「E」は「悪」(EVIL)を表す。私は、その深い傷が、罪人の目と顔のしわに映っているのを見てきた。冒涜の言葉が、彼の心から湧き上がるのを聞いてきた。けれども、ああ、神の目は、その魂の奥底まで見通される。神からは何一つ隠されていない。

「R」は「落ち着きのなさ」(RESTLESSNESS)を表す。かつて彼には休みがあった。「神とただ二人きり」で過ごす静かな祈りの時を愛していた。けれども今は、昼も夜も彼を駆り立てる、いらだたしい落ち着きのなさがある。自分の思いから逃れられるものなら、何であれ歓迎すべき気晴らしとなる。

「I」は「無関心」(INDIFFERENCE)を表す。かつては主の導きの一つ一つに応え、主の呼びかけに飛び立つように従った心が、今は主の御声に無関心になっている。

「C」は「無感覚」(CALLOUSNESS)を表す。無関心な心は、やがて無感覚になり、かたくなになる。かつては主の前で悔い砕けて溶けるほど、優しい心だった。けれども今は、十字架の優しい物語も、来たるべき怒りを警告する雷鳴も、心を動かされずに聞いている。

「H」は「憎しみ」(HATRED)を表す。悪魔は、犠牲者をこんな所まで引き込む。危険に目覚めさせようとしてくださる御霊を憎み、善を憎み、悪を愛する所である(ミカ三・二)。そこまで来ると、悪魔は邪悪な手をこすり合わせ、悪魔の喜びの笑みに顔をゆがめる。だまされた哀れな魂が、永遠の嘆きの都に近づいて行くからである。

「O」は「強情」(OBSTINACY)を表す。この傷を受けた者は、自分の危険を警告されることも、来たるべき怒りから逃れることも、強情に拒む(マタイ三・七)。彼は集会から出て行き、家に帰って床に就く。かたくなで、譲らず、強情なままである。

悪魔はなんと人を欺く、たちの悪い裏切り者だろう! 魂にいのちと力と財産があるうちは、ほほえみ、だまし、たぶらかしながら連れ回す。けれども、魂が落ちぶれ果て、助けもなく、死にかけて、ひとりになると、悪魔は友であるふりをする手間さえかけない。

半殺し。神に感謝しよう、彼はまだすっかり死んではいない。いのちのあるうちは、望みがあるからである! 助けもなく、救いの都へ向かって痛む一歩を引きずることもできず、罪に病む魂は道に倒れたまま置き去りにされる。『その頭はことごとく病み、その心は全く弱りはてている。足のうらから頭まで、完全なところがなく、傷と打ち傷と生傷ばかりだ。これを絞り出すものなく、包むものなく、油をもってやわらげるものもない』(イザヤ一・五~六)。

一人の人だけでなく、神から離れてさまよった人類全体の、なんという姿だろう。『するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきた』(ルカ一〇・三一)

り、っ、ぽ、う、を表すこの祭司なら、罪に病む魂を起こし、いやし、元どおりにすることができるにちがいない。けれども、そうではない。彼には何も望めない。なぜなら、

向こう側を通って行った

パウロは私たちに、『律法は、何事をも全うし得なかった』と説明している（ヘブル七・一九）。そのうえ、律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである（ローマ五・二〇）。

「同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきて、彼を見た」（ルカ一〇・三二）善い行いと自分の義に満ちたレビ人なら、助けてくれると期待しても当然だろう。けれども、そうではない。みことばは私たちにこう教えている。私たちの正しい行いはみな、『汚れた衣』にすぎない（イザヤ六四・六）。また、「人は律法の行いによって義とされるのではない」（ガラテヤ二・一六）。心を入れ替えたり、誓約書に名前を書いたりしても、あなたを起こすことも、罪深い魂の傷をいやすこともできない。だから、レビ人についてもこう書かれている。『向こう側を通って行った』（ルカ一〇・三二）。

人類は、なんと嘆かわしい、危うい状態に置かれていたことだろう。助けのない魂が、こう叫ぶのも無理はない。

「わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」（ローマ七・二四）救う腕はないのか。あわれむ目はないのか。ああ、ある。イエスに栄光あれ。見ておられる方が、遠くから近づいて来られる。

このよきサマリヤ人は、イエスのほかにだれがありえようか。イエスは、屈辱と絶望のちりの中に這いつくばる、失われたみじめな人類を思い、あわれみと優しい愛に満ちておられる。

ああ、滅びの道で傷つき血を流して倒れている、哀れな、落ちた魂に届くために、イエスはなんという旅をされたことだろう。なんという旅だろう！　天から地まで、はるばる来られた。飼葉おけから十字架まで、はるばる歩まれた。そして墓から父の王座まで行かれた。

「旅をして」。どれほど遠い所でも、遠すぎることはなかった。どれほど道からそれた魂でも、イエスが愛と助けを差し伸べられても届かないほど、遠くそれた魂はなかった。

この人のところに来て

そうだ。このよきサマリヤ人は、栄光の王にほかならなかった。この方は、世の堕落した有様を一度ご覧になると、休むことをなさらなかった。冠を脱ぎ、王の衣を脱ぎ捨て、人の姿をとられるまでは（ピリピ二・七）。それどころか、罪人のかたわらに立つだけでは満足されなかった。罪人のいる所まで来ずにはおられなかった。罪人の身代わりとなり、罪人の十字架にかかり、罪人の刑罰を払い、罪人の死を死なれたのである。

『律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。

これは律法の要求が、肉によらず霊によって歩くわたしたちにおいて、満たされるためである』（ローマ八・三〜四）

このような愛、このようなあわれみが、この宇宙でかつて知られたことがあっただろうか。「この人のところに来て」。愛する罪人よ、愛する、信仰から離れた人よ、イエスが来てくださらないほど遠くさまよい出た者は、あなたがたのうちに一人もいない。どれほど忌まわしく恐ろしい傷を負っていても、イエスはあなたのいる所まで来てくださったのである。

人類は貧しかったか。イエスはだれよりも貧しくなられた。

さげすまれた者がいたか。イエスはだれよりもさげすまれた。

友もなくひとりぼっちの者がいたか。この方は山腹で祈り、園でひとり大きな血のしずくのような汗を流し、木の上でうめかれた。

罪に満ち、不義を負った者がいたか。この方は、その人たちの罪と病を、十字架の上でご自分の身に負われた（第一ペテロ二・二四）。

ああ、私はこの言葉がなんと好きなことか。何度も何度も繰り返したくなる。

「旅をして、この人のところに来て」。罪人よ、見なさい！　今、この方が見えないか。この方は、あなたのすぐかたわらに立っておられる。手を伸ばせば、触れることができ、そば近くにおられるのを感じることができる。『こうして、人々が熱心に追い求めて捜しさえすれば、神を見いだせるようにして下さった。

事実、神はわれわれひとりびとりから遠く離れておいでになるのではない』（使徒一七・二七）。

声に出しても出さなくても、助けを求めるほんのかすかな叫び一つで、この方は大きな御腕を伸ばして、あなたを抱いてくださる。御名をほめたたえよ！

『すべて主の名を呼ぶ者は救われる。それは主が言われたように、シオンの山とエルサレムとに、のがれる者があるからである。その残った者のうちに、主のお召しになる者がある』（ヨエル二・三二）

『わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す』（エレミヤ三三・三）

彼を見て

イエスは心の奥底まで、人の思いの意図までも見通される。何一つ主に隠されておらず、すべてが主の目に裸であらわにされている（ヘブル四・一三）。それを知るのは、なんと恐ろしく、しかもなんとすばらしいことだろう。

ああ、このよきサマリヤ人は、あなたの心の奥をご覧になって、どうされるだろうか。あなたが恐ろしい罪を告白すると、首を振って立ち去ってしまわれるだろうか。いいえ、とんでもない。みことばはこう告げている。この方は彼を見て、

気の毒に思い

あなたの過ちや失敗が何であっても、あなたの罪がどれほど汚れたものであってもかまわない。本当に悔い改め、主のみことばに従いさえすれば、主はあなたをあわれんでくださる。もし人があなたをさばくのなら、罰のほかに望みも期待もほとんどないだろう。けれども、主の心はあわれみに満ちている。主は、あなたが枕をぬらして泣いた幾たびもの夜を知っておられる。心の痛みも、慕い求める思いも知っておられる。主はあなたの造られたさまの弱さを覚えておられる。そして、父がその子供をあわれむように、あなたをあわれんでくださる（詩篇一〇三・一三～一四）。エルサレムのために主を泣かせ、十字架の上でこう叫ばせたのも、あわれみに満ちたあの大きな心だった。

『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』（ルカ二三・三四）

近寄ってきて

イエスはあなたを迎えに来られた。半分でも、四分の三でもなく、道のりのすべてを来てくださった。今まさに、嘆願と優しいあわれみをもって、あなたのもとに来ておられる。ただ一言でいい。そうすれば、この方は望みと助けを携えて、すぐあなたのかたわらにおられる。

傷にほうたいをしてやり

そうだ、あの痛む、ただれた傷こそ、最初に主の手当てを必要とするものである。膿はすべて切り取られ、罪は滅ぼされなければならない。主は、心の打ち傷の一つ一つを、オリブ油とぶどう酒を注ぎながら、実に優しく包んでくださる。

「でも、ああ！」とあなたは言う。「私には、救い主に対して持つべき思いも、優しく慕う心もないようです。心はかたく、良心は鈍っているようです」そうだ、わかっている。それは、あの恐ろしい傷のせいである。無関心、無感覚、強情という傷である。けれども、そのために落胆して、主を呼び求めるのをやめてはならない。主が来られるときには、油のつぼを携えて来られる。そして、かたくなった傷の一つ一つを柔らかくし、あなたの心を優しくし、昔の愛であなたの魂を満たしてくださるのである。

「ああ、でも私には、少しも力がないようです。霊の力がすっかり弱って、潮が引いたように衰えているようです」それなら、主をほめたたえよ！　主はぶどう酒も携えて来られる。御霊によって生かし、いのちと力を取り戻させてくださる。

自分の家畜に乗せ

気の弱い哀れな魂が、なんと多くいることだろう。彼らは二つのものの間に迷い（第一列王一八・二一）、目の前に口を開けた穴を見て震えている。それでも、主の優しい御手に自分をゆだねるのを恐れて、こう言う。

「ああ、クリスチャンになりたいと心から願っています。でも、最後まで持ちこたえられないのではないかと恐れています。信仰告白を守り通せないのではないかと恐れています」ハレルヤ！　あなたに伝えたい、すばらしい知らせがある。これは、あなたがしがみついていなければならない救いではない。救いのほうが、あなたにしがみついてくれるのである。これは、あなたが支えて倒れないようにしなければならない救い主ではない。あなたが信頼しさえすれば、この方があなたを支え、守ってくださるのである。

『主に信頼する者は、動かされることなくて、とこしえにあるシオンの山のようである』（詩篇一二五・一）

もしこのよきサマリヤ人が、傷ついた人のほうを向いて、こう言われたとしたら、あなたはどう思うだろうか。

「さあ、きみ、傷にはほうたいをしてやった。オリブ油とぶどう酒も注いでやった。ここ、きみのそばに、小さな家畜（救い）がいる。いちばん険しい山でも、滑ったり足を踏みはずしたりせずに登れる、足の確かな小さな動物だ。この家畜を持ち上げて、傷ついたきみの哀れな背中に載せなさい。この荷を肩に負って、エルサレムまでの長い疲れる道のりを歩いて帰りなさい。落とさないように気をつけるのだよ」

この方はそう言われただろうか。とんでもない、決してそうではない！　この方は、その人に家畜を運べとは言われなかった。家畜を連れて来て、その人を運ばせられたのである。だから、ご自分の家畜に乗せられたのである。

宿屋に連れて行って

宿屋とは、避け所であり安全な所であって、そこで彼の傷が手当てを受ける。言い換えれば、神の教会である。彼を宿屋に連れて行ったのは、よきサマリヤ人ご自身だった。彼は、自分の奮闘や弱い努力によってそこへ運ばれたのではない。あなたのことをイエスの御手にゆだねなさい。そうすれば、主はご自分の御手であなたを連れ出し、あなたの知らない道に導いてくださる（イザヤ四二・一六）。自分の力では越えられないと思えた山も越えられる。あなたは、わしのような翼に乗せられて、あらゆる困難の上を越えて行くのである（イザヤ四〇・三一）。

介抱した

あなたはこの歌を歌ったことがあるだろうか。

「神はあなたを守られる、
日ごとに、道のすべてに、
神はあなたを守られる。
恐れるな、何が起ころうとも。
神はあなたを守られる。
その愛の御腕のうちにとどまれ。
神はあなたを守られる」

よい羊飼は小さな小羊を、よきサマリヤ人は傷ついた魂をいたわり、世話する。その優しく愛に満ちた気づかいは、とても言い表せない。主の忍耐と愛には限りがない。主は、体と魂と霊のあらゆる必要を満たしてくださる（ピリピ四・一九）。

翌日、出発するとき

そうだ、その日が来た。イエスは天から地まで、飼葉おけから十字架まで、はるばる旅をされた。群衆に食べさせ、病人をいやし、心の砕けた者を慰め、罪人の身代わりとなられた。失われた世をあがなうために血の最後の一滴まで流し、死と墓に打ち勝たれた。そのあと、弟子たちに語っておられた言葉を成就されたのである。こう言われた言葉である。

『「わたしは去って行くが、またあなたがたのところに帰って来る」と、わたしが言ったのを、あなたがたは聞いている。もしわたしを愛しているなら、わたしが父のもとに行くのを喜んでくれるであろう。父がわたしより大きいかたであるからである』（ヨハネ一四・二八）

『わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう』（ヨハネ一六・七）。こうして翌日、『イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった』（使徒一・九）。けれども、去って行かれる前に、いつも私たちの益を備えてくださる思いやり深い救い主は、

デナリ二つを取り出して

（救いと聖霊のバプテスマである。）当時、デナリ二つは一日分の賃金だった。だから主は、この一日全体の必要を満たすのに十分なものを残してくださったのである。御名をほめたたえよ。

宿屋の主人に手渡し

あなたの宿屋の主人、つまりあなたの教会の牧師は、このデナリ二つを忠実に使い、宣べ伝えてきただろうか。二つが備えるものを、あなたの慰めのためにすべて分け与えてきただろうか。多くの主人は、デナリを一つ出し惜しんでいる。救いと悔い改めを宣べ伝えれば、その人に必要なもの、その人の益になるものは、すべて与えたと思っている。もしあなたの牧師がそうしてきたのなら、牧師のところへ行って尋ねなさい。もう一つのデナリをどうしたのか、なぜ使徒行伝二章四節のとおりに、聖霊のバプテスマを宣べ伝えないのかと。

ペンテコステの日に三千人の宿屋の主人を務めたペテロは、二つのデナリを惜しみなく分け与えた。彼はこう言ったのである。

『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい』。これが一つ目のデナリである。

『そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう』。これが二つ目のデナリである（使徒二・三八）。

「この人を見てやってください」と言った

家令たち、宿屋の主人たち、牧師たちよ、あなたがたは、みことばをどう宣べ伝えるかについて、神に対して責任がある。神のみことばには、十分な力と励ましと恵みがある。あなたがたの教えのもとに来るすべての人を世話し、支えるのに十分である。ただし、あなたがたがみことばを余すところなく宣べ伝え、人々がそれに従いさえすればである。

費用がよけいにかかったら

この言葉は、私たちの前に、なんという栄光の眺めを開くことだろう。約束の地の、限りなく広がる土地がある。御霊の実、みずみずしいぶどう、乳と蜜の流れる地がある（出エジプト三・八）。底知れず果てしない祝福の海がある。神の大いなる測り知れない愛の、高さと深さ、長さと広さがある（エペソ三・一八）。私たちは思わず叫ぶ。

「その半分も、まだ語られていない」

「費用がよけいにかかったら」。愛する人よ、救いと聖霊のバプテスマは、ほんの始まりにすぎない。生まれたばかりの子が御霊の領域に踏み出す、最初のよちよち歩きの数歩にすぎない。福音のいろはにすぎない。イエスの血による救いも、使徒行伝二章四節のとおりの聖霊のバプテスマもなしに生きる。それは、神のみことばのどこにも記されていない、異常な状態である。あなたの前には、御霊の賜物と実と恵みがある。また、主が栄光から栄光へと変えたいと切に願っておられる生活がある（第二コリント三・一八）。主は私たちを完全にまで導き、しみもしわもない、傷のない者として、父の前に立たせてくださるのである（エペソ五・二七、ユダ二四）。

わたしがまた来るときに

ああ、愛するみなさん！　主は再び来られる！！　約束を決してたがえないことで知られる方が、こう言われたではないか。

「もし行けば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」（ヨハネ一四・三）また、弟子たちは、雲に迎えられて見えなくなるまで主を見つめていた。そのとき、白い衣を着てそばに立っていた二人の人が、こう言ったではないか。

『ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』（使徒一・一一）

使徒パウロは、こう宣言したではないか。

『主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、

それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう』（第一テサロニケ四・一六～一七）。これらの言葉をもって互いに慰め合いなさいと、私たちは言われているではないか（第一テサロニケ四・一八）。パトモス島でヨハネを通して語られた主は、こう言われたではないか。

『しかり、わたしはすぐに来る』（黙示録二二・二〇）。また今日、御霊は、身をゆだねた器を通して、全世界にこう語っておられるではないか。

「見よ、イエスはまもなく来られる。主に会う備えをせよ」

「わたしがまた来るときに」。ああ、その日はなんと栄光に満ちた日だろう。私たちは顔おおいなしに、よきサマリヤ人、私たちのあがない主、神なる救い主の麗しさを見つめるのである（第二コリント三・一八）。「そして、わたしがまた来るときに」

わたしが支払います

ああ！　百合よりも麗しく、太陽よりも輝く、あの麗しい御顔を一目見るだけでいい。あの優しい目のほほえみ一つ、「よくやった」の一言でいい（マタイ二五・二一）。それだけで私たちは、どんなささやかな愛の労苦も、百万倍に報いられるだろう。結局のところ、その労苦は、私たちが当然なすべき奉仕にすぎないのである。

ああ、愛する、信仰から離れた人よ、ああ、愛する罪人よ、今すぐこう言わないか。

「主よ、お救いください」主はあなたのすぐかたわらに立っておられる。どんなかすかな叫びも聞いてくださる。主の栄光に満ちた救いは、あなたを宿屋の安全な避け所まで運ぼうと備えている。主はあなたを世話し、見守ろうと待っておられる。そしてついに、再び来られるときには、あなたを連れて行き、ご自分とともに永遠に住まわせてくださる。

「来なさい、罪に打ちひしがれた、疲れた魂よ。
主のもとにはあわれみがある。
主は必ずあなたを休ませてくださる、
主のみことばに頼るなら。
ただ主に頼れ、ただ主に頼れ、
今、ただ主に頼れ。
主はあなたを救われる、主はあなたを救われる、
今、あなたを救われる」

わたしがわかっていないのか

先日の夜、説教を終えたすぐあとのことである。祭壇での祈りの時間に招きの歌が歌われているあいだ、私は会衆の中へ下りて行き、罪人たちを祭壇へ招いていた。何人かと話しているうちに、一人の若い男のところに来た。イエスに心をささげるようにと招くと、彼はこう答えた。

「ああ、姉妹、できるものなら、信じることさえできたら！　でも私は、生まれてこのかた、主の臨在を見たことも感じたこともないのです。主の声を聞いたことも、主が私に働きかけていると感じたこともありません」

そのすぐあと、主は異言のメッセージとその解き明かしを与えてくださった。それは、私に多くのことを考えさせた。主の臨在と導きと御業を見分けることにかけて、全世界は、なんと心が鈍く、悟りが遅かったことだろう！

『牛はその飼主を知り、ろばはその主人のまぐさおけを知る。しかしイスラエルは知らず、わが民は悟らない』（イザヤ一・三）。何千年ものあいだ、神はご自分の民とともに歩んでこられた。けれども民は、神の臨在を悟らず、それに気づかなかった。今日の世も、また主の子供たちの多くさえも、王の威厳ある足取りに気づかずにいる。

はるか昔、エデンの園で、神はアダムとともに歩まれた。神はアダムとともに歩み、途切れることのない交わりのうちに語り合うことを望まれた。けれども、アダムもエバも、神の大いなるご計画と目的を悟らなかった。そしてみじめにも神にそむき、エデンの園を失ったのである。

モーセがイスラエルの人々を導いて紅海を渡らせたとき、神は彼らとともに歩まれた。荒野でも彼らとともに歩み、火の柱と雲によってご自分を現された（出エジプト一三・二一）。天からのマナとして彼らのもとに来られた。また、彼らについてきた岩としてご自分を現された（第一コリント一〇・四）。その岩からは、澄んだ生ける水、いのちの水がほとばしり出た。神はシナイ山から雷のように声をとどろかせられた。けれども神の民は、どこにでもおられる大いなる神の導きと現れを、本当には悟らず、それに気づかなかった。彼らはつぶやき、そむき、ぐずぐずと遅れて、ついに約束の地に入りそこなった。

神はパロを訪れ、その国を歩まれた。宮殿の中を歩み、いちばん貧しい家をも訪れられた。パロが御声に耳を傾けようとしないと、神は災いと疫病によって語られた。神はためらいのない足取りでその国を歩み、すべての家にご自分の足跡を残された。けれども、だれもエホバの御業と臨在を悟らず、それに気づかなかった。

ある人は言う。「ああ！　でも、主を見ることさえできたら、信じられるのに。はっきりした、まちがえようのない現れが目の前で起こってくれたら、信じられるのに」けれども、愛する人よ、みことばによっても、今日の現れによっても主がわからないのなら、たとえ死人の中からよみがえる者があっても、あなたは信じないだろう（ルカ一六・三一）。

イエスは来て、ご自分の民とともに歩まれた。父の王座を離れ、天から地まで、はるばる来られた。肉体をとった目に見える現実として、この地の人々のあいだを歩まれた。けれども世は、イエスを認めようとも、信じようともしなかった。

イエスは飼葉おけの中に生まれられた。三十年のあいだ父の家で暮らされたが、周りの世は心を動かされて信じることがなかった。悟らなかったのである。十二歳のとき、イエスは宮で教師たちのただ中に入って行かれた。教師たちはその言葉に驚いた（ルカ二・四六～四七）。けれども、あれほどの知恵と学問がありながら、彼らでさえ自分たちの主に気づかなかった。イエスは群衆の中を通り、ヨルダン川に入って、ヨハネからバプテスマを受けられた。御霊がはとのような姿をとってイエスの上に下られた。父の御声が天から高らかに、『これはわたしの愛する子』と語られた（ルカ三・二二、マタイ三・一七）。それでも人々

は悟らなかった。心が鈍く悟りの遅い彼らは、「御使が話しかけたのだ」とか、「雷が鳴ったのだ」とか言ったのである（ヨハネ一二・二九）。

それから三年のあいだ、イエスはご自分の民のただ中を歩まれた。しるしと奇跡を行い、病人をいやし、らい病人をきよめ、死人をよみがえらせられた。それでも、不信仰な世はそのすべてを見ながら、自分たちのただ中で動いておられる、清くしみのない神の小羊を悟らず、信じず、認めなかった。イエスは町の群衆の中を通り、寂しい家に入って行かれた。陸でも海でも群衆に宣べ伝え、井戸のそばのひとりの女にも語られた。けれども、イエスを認め、それが主であると信じた人はわずかだった。ああ、なんとわずかだったことか。

イエスは、いばらの中のゆりのように、おおかみの中の小羊のように（雅歌二・二、ルカ一〇・三）、騒ぐ群衆のただ中で、だれの目にも見える所に立っておられた。けれども、人々は悟らなかった。ポンテオ・ピラトは、『あなたは、ユダヤ人の王であるか』と尋ねたとき（ヨハネ一八・三三）、真理の近くにいた。大祭司は、『あなたは、ほむべき者の子、キリストであるか』と尋ねたとき（マルコ一四・六一）、光の近くにいた。しかし、二人とも、イエスの答えの意味を本当には悟らず、イエスが神の子であることを知らなかった。

イエスは十字架を負って、カルバリの丘を上って行かれた。天と地のあいだに高く上げられ、こう祈られた。『父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです』（ルカ二三・三四）。岩は裂け、地は震えた。神殿の幕は上から下まで真二つに裂けた。多くの墓が開け、眠っていた聖徒たちのからだが生き返った（マタイ二七・五一～五二）。太陽は顔を隠し、天は暗やみに満ちた（ルカ二三・四四～四五）。それでも、信じがたいことに、エルサレムの見物人たちはおおむね、このイエスが神の子であると悟らず、信じなかった。

彼らは、なんと哀れな無知と、まったくの無理解のうちに、天と地の主の墓を封印したことだろう。その入口を見張らせるために、ローマの兵士たちを置いたのである（マタイ二七・六六）。そのあと、石はころがされ、大地そのものが死人を出し、兵士たち自身も神の力に打たれて倒れた（マタイ二八・二～四）。それでも、周りの人々は主を認めようとしなかった。

マリヤでさえ、復活のあと園で初めてイエスに会ったとき、自分の主に気づかず、園の番人と思い違いをした（ヨハネ二〇・一五）。今日でも、主が何よりもいとしい人々でさえ、主が自分の生活の園を歩いて来られるとき、その姿にも足取りにも気づかないことが、どれほど多いことだろう。

イエスは道々、弟子たちとともに歩まれた。けれども、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった（ルカ二四・一六）。道々イエスが話しかけられたとき、心が内に燃えていたのに、それでもイエスに気づかなかった（ルカ二四・三二）。トマスは自分の目の証拠を信じようとしなかった。イエスは、手をさし入れ、ご自分にさわって、本当にご自身であることを確かめよ、と言われなければならなかった（ヨハネ二〇・二七）。そうしてようやく、トマスは信じたのである。

復活のあと、イエスは五百人以上の兄弟たちに同時に現れられた（第一コリント一五・六）。天に上げられ、下で見つめる人々の目から、雲に迎えられて見えなくなられた（使徒一・九）。それなのに、結局のところ、聖霊を待ち望むために本当に屋上の間までついて行ったのは、百二十人ほどにすぎなかった（使徒一・一五）。

主は、私たちの愚かさと、鈍く不信仰な心を、なんと忍耐してこられたことだろう！　今日でさえ、世は十字架につけられた主のからだを踏み越えて、やみくもに滅びへと突き進み、悟ろうとしない。そのとき、主の心はどれほど痛んでおられることだろう。主がこう言われるのを聞きなさい。

「ああ、エルサレム、エルサレム。めんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようとしなかった！」（マタイ二三・三七）

今日、主は幾千万の大砲の声をもって語っておられる。災いと疫病によって、血と火と立ちこめる煙によって語っておられる（使徒二・一九）。主の足音は、ためらいのない足取りで、山々の頂にも谷々にもこだましている。主は町の通りを歩いておられる。邸宅では、主の御手がまたも初子を取り去っておられる。そして貧しい長屋では、つるぎに倒れた息子たちを思って、母親たちの心が血を流している。主の足音は、砲弾と銃弾に苦しめられる人々のあいだで、戦場を重く

踏みしめている。血とうめきと死に満ちた、長く暗い病棟を、主の足は静かに踏んで行かれる。主は丘をおどり越えておられる。私たちの壁のうしろに立っておられる。格子からのぞいておられる（雅歌二・八～九）。あなたがこの言葉を読んでいる今、主はあなたのかたわらに立っておられる。そして、あなたの心にこう語っておられる。「わたしを信じなさい。そうすれば、あなたは救われる」（使徒一六・三一）。

あなたは悟らずにいたのではないか

神の御子に気づかず、あなたの生活の中での主の御業に気づかずにいたのではないか。主はときには病によって、ときには愛する者を取り去ることによって、ときには試練と悲しみによって語られる。ああ、こんなに長くあなたとともにおられた主が、あなたにはわかっていないのか（ヨハネ一四・九）。

自由公債、「かなた」

（一九一八年四月、第三次の自由の貸付を募るわが国の呼びかけに触発されて）

世界を巻き込む大戦。犠牲と資金の必要。愛国の言葉では足りず、実際に文字どおり与えることが要る。第一次、第二次、第三次の自由の貸付の募集。自由公債か、悪魔の束縛か。自由公債と利付きの証券。「かなた」へ行くただ一つの道。

今日、どこを見ても、世界大戦とその恐ろしさを、そしてこの試練の時に犠牲と忠誠が必要であることを、厳しく思い起こさせるものがある。愛する者が「かなた」（海の向こうの戦地）へ旅立って行った家々の戸口からは、出征旗が私たちに向かって揺れている。店や事務所の窓からは、ポスターが呼びかけている。どの新聞の全面広告からも、自由公債（リバティ・ボンド）を買えという呼びかけが声高に語りかけている。私たちの美しい国の市民に、犠牲を払い、政府に自由の貸付をすることが、どうしても必要であると思い起こさせているのである。

国に金を貸す自由の貸付の一口ごとに、応募者には自由公債が渡される。この自由公債は利付きの証券で、アメリカ合衆国がその後ろ盾になっている。この戦争は犠牲と金なしには遂行できないことが、日ごとにますます知られてきている。今フランスへ渡って行くこの国の大軍は、この戦争の嵐をすべて受け止める大きな防壁として立っている。その大軍の後ろには、合衆国の財力があるからである。そして、その財力を、実際に生きて働く数字で表したものが自由公債なのである。実際に与えることが必要である。どれほど愛国的な言葉も、戦争で生じた借りを払いはしない。犠牲と与えることが、どうしても欠かせないのである。

主は今、あなたを悔い改めに招いておられる。あなたの悪い行いを除き（イザヤ一・一六）、小羊の血で洗われるようにと招いておられる。御霊に満たされ、空中で主に会う備えをするようにと招いておられる。いったん目が開かれれば、あなたはいたる所に主を見るだろう。

世が今のこの危機のうちに主を見ることができず、戦いのとどろきの中に今その御声を聞くことができないのなら、世は決して悟らないだろう。目覚めて、生きている者と死んだ者とをさばく方の前に立つ、そのときまでは（第二テモテ四・一）。そのとき人々は、岩と山とに向かって、自分たちの上に落ちて、御座にいます方の御顔から隠してくれと叫ぶだろう（黙示録六・一六）。

ああ、愛する人よ、悪魔があなたの目にかぶせた目隠しを引きはがし、今こそイエスを見なさい。耳を開いて、主がほかでもないあなたを呼んでおられるのを聞きなさい。耳があっても聞かず、目があっても自分の救い主、のがれの門であるイエスを見ない人々がいる（マルコ八・一八）。あなたは、その人々の刑罰にあずかってはならない。

今、世の領域で繰り広げられている大奮闘、死に至るまでの戦いは、今、霊の領域で繰り広げられている戦いとよく似ている。義と不義のあいだの、太古からの大いなる戦いが、この終わりの時に最後の頂点に達しようとしている。私たちが戦う相手は、力強く、悪賢く、人を欺く敵である。できることなら、選民をも惑わそうとする敵である（マタイ二四・二四）。

敵は、エデンの園でへびに姿を変えてエバに現れ、うまい言葉を語り、うそを織り上げた。そのとき以来、ずっと戦い続け、その言葉に耳を傾ける者をみな、うそで欺いてきた。敵は初めから絶え間なく戦ってきた。けれども、今日ほど、その悪霊の軍勢が動員され、密集した隊形を組んで戦っているときはかつてなかった。たちの悪い悪魔の時は短く、その支配と力の日々は数えられている。王なるイエスがまもなく悪魔の地上の王座を倒し、その力をはぎ取り、鎖で縛って、底知れぬ所に投げ込まれるからである（黙示録二〇・一～三）。それまでのあいだ、戦いはますます熱と激しさを増して荒れ狂うだろう。打ちのめされた世界を吹き抜けながら、勢いを増していくつむじ風のように。

私たちは、イエスの兵士として、またかなたの国の市民として、この戦争に加わっている。この戦争は、勝利を得る者一人一人の力を、極限まで試すだろう。私たちが勝てるのは、イエスのうちにとどまり、自分自身を、自分のすべてを、惜しみなく主への奉仕にささげるときだけである。私たちは勝つ。けれども、たやすくではない。代価を払い、信仰の戦いをりっぱに戦わなければ勝てない（第一テモテ六・一二）。私たちは、御霊の力によって、かなたに着くまで勝ち抜き、征服すると決めた。その私たちは、心からの犠牲によって勝たなければならない。すなわち、主に大きな「自由の貸付」をし、「かなた」の約束の地の永遠の担保として、「自由公債」を受け取るのである。

私たちの王イエスは、忠実な臣民すべてに、自由の貸付を呼びかけておられる。冠を受けた勝利者として、「かなた」へ行って治め、王となるつもりの臣民である。だから、

わたしから火で精錬された金を買い（バイ）なさい（黙示録三・一八）。

義の冠を。それは、かの日に主があなたがたに授けてくださるものである（第二テモテ四・八）。

だから、キリストが与えてくださった自由（リバティ）のうちに、堅く立ちなさい（ガラテヤ五・一）。

これらいっさいのものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯（ボンド）である（コロサイ三・一四）。

主に貸す者は賢い。主はご自分の民に、惜しみなく応じるよう呼びかけておられる。自分の時間、愛、財産、賛美を、主の御国への忠誠と愛国心を、自分のからだと魂と霊をささげるようにと。わが国は今日、第三次の自由の貸付を呼びかけている。それと同じように、霊の領域でも、聖霊によって、第三次の自由の貸付と、自由公債の買い入れの呼びかけが出されているのである。

第一次の自由の貸付の募集

これは、父の時代に出された。多くの人が、自分のいのちと愛と犠牲を惜しみなくささげて応じた。そして引き換えに、永遠の自由公債を手にした。「かなた」の栄光の国で、限りない千倍の利子を約束する公債である。父の呼びかけに応えて、多くの人が進み出た。どんな犠牲も、どんな貸付も、大きすぎるとは思わなかった。

アブラハム。神の召しに、揺るがない忠誠と従順をささげるよう求められたとき、彼はひとり子イサクを祭壇に載せた。それによって、この上ない愛と、犠牲を払う心を表したのである。

ダニエル。獅子の穴に入った。

三人のヘブル人の若者。火の燃える炉に入った。

ヨセフ。獄屋の苦しみに耐えた。

ヨブ。苦しみと、子供たちを失う悲しみに耐えた。父の時代に、第一次の自由の貸付の呼びかけに応え、引き換えに、永遠に利子を生む自由公債を受け取った人々を、このように次々と数え上げていくことができる。また、これらの公債には、この世においてさえ莫大な利子が支払われたことも思い起こされる。アブラハムは自由の貸付をした。彼は自分の自由を手もとに置いて、こう言いはしなかった。

「いや、イサクは私のものだ。私の時間も私のものだ。この自由を手放したりはしない。息子もいのちも時間も、自分のために取っておく」そう言う代わりに、彼は自分のすべてを、自由の貸付として神にささげた。そして引き換えに、ただちに利子を生み始める自由公債を受け取った。御使がこう告げたからである。

『あなたがこの事をし、あなたの子、あなたのひとり子をも惜しまなかったので、わたしは大いにあなたを祝福し、大いにあなたの子孫をふやして、天の星のようにする。地のもろもろの国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう。あなたがわたしの言葉に従ったからである』（創世記二二・一六〜一八）

ダニエル。ダニエルは、からだも魂も霊も、自分のすべてを神に貸し出し、獅子の穴に入った。この大きな犠牲の自由の貸付と引き換えに、彼は自由公債を、利付きの証書を受け取った。この利子はすぐに付き始めた。彼は自由にされただけでなく、誉れを与えられ、「ダリヨスの世と、クロスの世において栄えた」のである（ダニエル六・二八）。

三人のヘブル人の若者。三人のヘブル人の若者もまた、自由の貸付にすぐ利子を受け取った。彼らはネブカデネザルの縄目（ボンド）に縛られて、火の燃える炉に入った。けれども、その犠牲と従順によって縄目は解け落ちた（ダニエル三・二五）。炉から連れ出されたとき、彼らを縛るボンドは、自由公債（リバティ・ボンド）のほかに何もなかった。その利子は、王が彼らの位を進めてバビロン州におらせたときに、ただちに付き始めた（ダニエル三・三〇）。

ヨセフ。ヨセフは犠牲を払い、自由の貸付をした。自由を失い、獄屋に投げ込まれたのである。それによって彼は自由公債を手に入れ、これもまたすばらしい利子を生んだ。パロはヨセフに言った。

『あなたはわたしの家を治めてください。わたしの民はみなあなたの言葉に従うでしょう』などと言った。そしてパロは指輪を手からはずして、ヨセフの手にはめた（創世記四一・四〇、四二）。

ヨブは神に忠実だった。痛みと悲しみを通して、死別と地上の財産の喪失を通して、大きな自由の貸付をした。そしてついに、彼もまた利子付きの自由公債を受け取った。『主はヨブのすべての財産を二倍に増された』からである（ヨブ四二・一〇）。『主はヨブの終りを初めよりも多く恵まれた。彼は羊一万四千頭、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭をもった。また彼は男の子七人、女の子三人をもった』（ヨブ四二・一二〜一三）。やがて『ヨブは年老い、日満ちて死んだ』（ヨブ四二・一七）。そして「かなた」へ行って報いを刈り取り、永遠に喜びのうちに住むことになった。

ハンナ。父の時代に出された、あの第一次の自由の貸付の呼びかけを思うと、ハンナが息子サムエルを主に貸したときの大きな自由の貸付が心にあふれてくる（第一サムエル一・二八）。そのほか、数えきれないほど多くの例も心にあふれてくる。

第二次の自由の貸付の募集

御子の時代には、第二次の自由の貸付の呼びかけが出された。これに応えて、すべてを捨ててイエスに従った人々は、その犠牲にただちに利子を受け取った。漁の網を捨てた人々は、はるかにすばらしいものを受けた。人間をとる漁師になったのである（マタイ四・一九）。イエスに従うために家や畑や友を捨てた人々に、イエスはこう言われた。

『おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、妻、子、もしくは畑を捨てた者は、百倍を受け、また永遠の生命を受けつぐであろう』（マタイ一九・二九）。イエスの弟子たちと従う人々は、この世での肉の自由を、自己中心の生活を送る自由を、自分の権利として主張しなかった。その代わりに、主に自由の貸付をした。大いなる戦いが繰り広げられるため、そして自分たちが「かなた」のこの上なくすぐれた栄光に達するためである。

招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない（マタイ二二・一四）。この呼びかけは多くの人に出されたが、応えた人は比較的少なかった。富める青年は、持ち物をみな売って貧しい人々に施し、それからは柔和でへりくだったイエスに従うことによって、自由の貸付をするよう招かれた。けれども、『悲しみながら立ち去った』のである（マタイ一九・二二〜二二）。

ユダは、地上のわずかな利益のために、永遠の自由公債を受ける権利と、「かなた」で治める権利を売り渡した。

けれども、救い主がこの世で働かれた短い期間にも、自由の貸付の呼びかけを聞いて応え、すべてを捨ててイエスに従った人々が、わずかながらいた。その中から、みことばに記されているほんのいくつかの例を挙げよう。ペテロは、自分の自由を主にゆだねた。すべてを捨てて主の導きに従い、自由公債を、すなわちイエスとともに治めるという保証を手に入れた。むち打ちも、数々の打ち傷も、投獄も、十字架に逆さまにかけられる死でさえも、彼にその自由公債を、「かなた」へ行く望みを手放させることはできなかった。

ステパノは主に自由の貸付をし、死に至るまで、「かなた」での自由と解放のために戦った。それは、イエスが十字架の上で買い取ってくださった自由と解放である。彼が地にひざまずき、石が宙を飛んで、その雄々しいからだに鈍い音を立てて雨のように降り注ぐ少し前のことである。彼の魂は、幻の窓を通して見つめ、『天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになる』のを見た（使徒七・五六）。彼は「かなた」の国の幻を見たのである。

パウロは主に自由の貸付をした。自分の生活を送り、自分の国の人々のあいだで好意と誉れを受けて歩む自由を、取っておくことはしなかった。その自由を、救い主のために手放したのである。『月足らずに生れたような』彼を召してくださった救い主である（第一コリント一五・八）。彼は引き換えに、担保として自由公債を受け取った。そしてこう宣言した。「死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしを引き離すことはできない」（ローマ八・三八～三九）。パウロは自分の自由公債を手放そうとはしなかった。それは、神のみことばに示された、「かなた」の朽ちない資産を約束する証書である（第一ペテロ一・四）。それを手放すくらいなら、天の祖国と王に不忠実になるくらいなら、むちも、獄の鎖も、地下牢も、裸も、危難も、そうだ、死そのものさえも耐え忍んだ。彼は兄弟たちに、自分のからだを生きた供え物としてささげるように勧め、それが彼らのなすべき霊的な礼拝であると請け合った（ローマ一二・一）。

第二次の自由の貸付の呼びかけのあいだに、愛と賛美と時間と財産を惜しみなくささげて、主に自由の貸付をした人々の例を、このように次々と挙げていくことができる。

第三次の自由の貸付の募集

今日、わが国で第三次の自由の貸付の呼びかけが出されているように、霊の領域でも、第三次の呼びかけが出されている。

聖霊の時代の幕開けとともに、霊の自由の貸付の第三次の呼びかけが鳴り響き始めた。千九百年のあいだ、御霊は呼びかけを送り続けてこられた。自分自身を主にささげる男たち、女たちを求めてである。主の御業のために自分の自由を犠牲にする男たち、女たちである。自分の自由を、好き勝手にふるまい、自分のためだけに利己的に生きることに使わず、その自由を手放して、主への自由の貸付とする男たち、女たちである。彼らは、自分が自分のものではなく、代価を払って買い取られた者であることをわきまえている（第一コリント六・一九～二〇）。その代価は銀や金ではなく、イエスの尊い血である（第一ペテロ一・一八～一九）。

今回は、おそらくわが国の政府が出す最後の自由の貸付の呼びかけではないだろう。けれども、天の王が出される呼びかけとしては、まちがいなくこれが最後である。

この時代が閉じると、永遠のために自由公債を買う時は満ちてしまう。家の主人が立って戸を閉じてしまえば、だれも二度とそれを開けることはできないからである（ルカ一三・二五）。銀行の営業時間は終わり、主はこう言われるだろう。

『では、なぜわたしの金を銀行に入れなかったのか。そうすれば、わたしが帰ってきたとき、その金を利子と一緒に引き出したであろうに』（ルカ一九・二三）

主に自由の貸付をし、この永遠の自由公債を手に入れる時は、もうほとんど終わろうとしている。主の恵みによってあらゆる困難を乗り越え、勝利者の報いを

と、「かなた」の小羊の婚宴を目指して進もうとする人がいる。その人は今日、できる限りのものをささげて応じるべきである。持ち物も、時間も、愛も、賛美もである。そうして自由公債を手に入れなければならない。十字架の勇敢な兵士たちが新しいエルサレムの金の通りを行進して来るとき、その数に加わる資格を与える公債である。主のために父と母、家と畑を離れようとしない者は、主の弟子と呼ばれるにふさわしくないからである（ルカ一四・二六）。

この大いなる第三次の自由の貸付の呼びかけが、御霊の力によって鳴り響いてから、何千もの人々が応え、イエスのためにすべてを捨ててきた。殉教者たちは火あぶりにされ、獅子のえじきにされ、闘技場で雄牛に投げ与えられた。拷問台で手足を引き裂かれ、断頭台にかけられ、目を焼かれ、言いようのない仕方で拷問された。それでも彼らは、あらゆる危険の中で堅く立ち、信仰の戦いをりっぱに戦い、栄光の軍隊として「かなた」へと進んで行った。

闇の軍勢と光の軍勢との最後の大いなる戦いが、今日、かつてないほど激しく荒れ狂っている。私たちの主であり救い主であるイエス・キリストによって、勝利が来ようとしている。『この世の国』は『われらの主とそのキリストとの国』となり、「主は世々限りなく支配なさる」からである（黙示録一一・一五）。

兵士たちが門を通って押し寄せ、金の通りを凱旋して上って行く。天の御使の軍勢が歓呼し、楽隊が凱旋の行進曲を高らかに奏で始める。そのとき、かなたにいたいと切に願うなら、

あがなわれた者たちの永遠の歌に加わりたいなら、

イエス・キリストの血に染まった旗に敬礼する資格が、少しでも自分にあると言うなら、今日、イエス・キリストの御業のためには、どんな代価も大きすぎることはない。どんな犠牲も高すぎることはない。どんな自由の貸付も大きすぎることはない。

あなたは、『自分の利益を求めない』愛をもって（第一コリント一三・五）、惜しみなく自由の貸付をするだろう。今日、からだも魂も霊もすべて主への奉仕にささげ、自分の自由公債をしっかりと握るだろう。そうだ、「キリストが与えてくださった自由のうちに、堅く立ち」、二度と奴隷のくびきにつながれることはないだろう（ガラテヤ五・一）。（自由公債（リバティ・ボンド）か、悪魔の束縛（ボンデージ）か、そのどちらかである。）あなたが自由公債を手に入れるのは、大きな利子が付くからではない。地上でいちばん安全な投資だからでもない。あなたのために死に、あなたをあがなうためにご自分を惜しみなく与えてくださった方を、愛するからである。その方こそ、天の最大の自由の貸付、イエスである。

現代の戦争、「突撃」

（一九一八年三月）

入隊。すべてのものへの別れ。衣の着替え。訓練所。「信仰」の戦艦への乗船。敵の船。潜水艦。飛行船。弾薬と補給品。塹壕掘り。重砲を据える漆喰。毒ガスとガスマスク。突撃して勝利へ。

敵がこれまでに仕掛けた中で最大の戦いが、今日、戦われている。この戦いは、イエスとともに貫き通すと決めた神の子供たちと、地獄のすべての悪霊とのあいだで荒れ狂っている。今、すべての悪霊が神の子供たちに向かって陣を敷いているからである。敵は、自分の時が短いことを知っているので、力の及ぶ限りのあらゆる手を尽くしている。私たちがその恐ろしい猛攻に耐えられるのは、イエスの足もとに低く身をかがめ、その血の下にとどまるときだけである。

今日のこの大いなる最後の戦いには、現代の戦争で知られているあらゆる戦術と仕掛けが用いられている。世の終わりは迫っており、敵がしようとすることは何であれ、すぐにしなければならない。だから今こそ、かつてないほど、目をさまして祈らなければならない（マタイ二六・四一）。眠らずに見張り、私たちの指揮官である聖霊に従わなければならない。聖霊は、この最後の大奮闘のあいだ私たちに力を着せるために、父から遣わされた方である。

入隊

今日、どこを向いても、陸軍と海軍への入隊を呼びかけるポスターが目に入る。神の子供たちは聖霊から、王なるイエスの軍隊に入隊し、確かな勝利を確信する良い兵卒として戦うようにと呼びかけられている（第二テモテ二・三）。主は、ご自分の軍隊に徴兵や強制の兵役を求めてはおられない。自分から進んで、心から主に仕える入隊を求めておられるのである。

すべてのものへの別れ

呼びかけを聞き、それに従おうとする者は、別れを告げなければならない。昔の世界に、昔の罪の領域に、世の仲間に、別れを告げなければならない。楽しみにも、仕事にも、親類にも、別れを告げなければならない。何にも妨げられずに主の軍隊へ出て行くのを、邪魔し、引き止めるものすべてにである。

現代の戦争

それは、分離の生活への呼びかけである。世の中にいながら、世の俗っぽさや浮ついたことにはあずからない生活である（ヨハネ一七・一五～一六）。

衣の着替え

昔の交わりに別れを告げたあと、私たちは民間の服をすべて脱ぐように求められる。地上の罪深い衣は、一つ残らず永遠に脱ぎ捨てなければならない。それが罪のしみに深く染まった衣であっても、道徳という白く塗った外套であっても、置いていかなければならない。私たちの神の武具をすべて身につけるのは、そのあとである。

『それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当を胸につけ、平和の福音の備えを足にはき、その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。また、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい』（エペソ六・一三～一七）

訓練所

次に来るのは、訓練所での生活である。この訓練所は、台所にも、事務所にも、店にも、畑にもあるだろう。けれども、兵舎と練兵場がいっぱいに並んでいるのと同じように、まことの訓練の学校なのである。長く退屈な日々が続くかもしれない。教練と行進の日々。練習と学習の日々。同じことを何度も何度も繰り返す日々。それを上手に、神のほかの兵士たちと完全に一致し調和してできるようになるまで繰り返すのである。敵に立ち向かうことに慣れていない霊の筋肉が痛み、休ませてくれと叫ぶ日々もある。けれども、あらゆる試しと最も厳しい試練を通して、主の御手は導き、案内してくださる。それを見るなら、また目を上げて、「私たちの上にひるがえる主の旗は愛」であることを見るなら（雅歌二・四）、平安と満足が生まれる。教えをよく学びたいと願うようにもなる。そして、良い兵卒となり、あらゆる戦いに勝つようにと駆り立てられるのである。ああ、あの厳しい訓練所の日々！　私たちはそこで、「自分の心を治める者は、城を攻め取る者にまさる」ことを教えられる（箴言一六・三二）。私たちの隊長は、一人一人にこの経験を通らせておられる。

「信仰」の戦艦への乗船

ついに、「信仰」という戦艦に乗って船出する日が来る。陸地はすっかり見えなくなり、私たちはかつてないほど、自分の無力さと、主にまったく頼るほかないことを感じる。御霊は私たちに警告される。向こうの疑いと不注意の霧の陰に、敵の船が潜んでいる。だから、絶えず見張り、絶えず番兵を立てておかなければならない、と。

敵の船

見分けと用心の双眼鏡で見つめていると、突然、一隻の大きな戦艦がこちらへ迫って来るのが見える。くすんだ色に塗られ、いかにも罪のない様子で周りの景色に溶け込んでいる。御霊の警告がなかったなら、気づいたときには手遅れだっただろう。

戦艦は、すべての砲門から死と敗北を吐き出しながら迫って来る。けれども、「信仰」と「謙遜」という大砲から神のみことばの片舷斉射で撃ち返すなら、その弾は十分に強く恐ろしい。神の子供たちに向かって来るどんな船でも沈めることができる。

潜水艦

敵は、ときには私たちの日々の生活の波の上に乗って、公然とやって来る。けれども、危険な悪い日々が続くにつれて、もっと多くの場合、波の下に隠れ、ひそかに、潜水艦のようなやり方で近づいて来る。敵は射程を見定め、落胆と疑いと圧倒する誘惑の魚雷を放とうとする。そのとき小さな潜望鏡が浮かび上がるのに気づくのは、波に目を凝らしている、熱心で目をさました神の子供だけである。けれども、イエスにハレルヤ！　主は、悪魔のあらゆる策略をそらし、爆破することのできる駆逐艦を何隻か持っておられる。

「祈り」という駆逐艦がある。「望み」「信仰」「愛」という駆逐艦がある。「賛美」という駆逐艦があり、大いなる神のみことばがある。これらはすべての敵を敗走させる。この護衛がなければ、この終わりの時に、敵の攻撃を一度でも防ぐことはできない。

今日、私たちの周りのいたる所で、船が遭難信号を上げ、沈んでいる。見張りが足りないため、祈りが足りないためである。逃げ道はない。勝利を得る者のゴールに通じるほかの道はない。ただ一つの道は、戦闘地帯を通っているからである。神が、ご自分とともに御座について治めるようにと呼んでおられるのは、勝利を得る者であって、臆病者ではない（黙示録三・二一）。

目をさまして祈りなさい。『絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい』（第一テサロニケ五・一七～一八）。あなたの目に、霊の見分けの油を塗っていただきなさい（黙示録三・一八）。そうすれば、敵が自分の船や領土をどれほど偽装しようとしても、あなたは決してだまされない。

飛行船

ときには、陸でも海でも、あなたの頭上の空が敵の飛行機で埋めつくされることがあるだろう。空中のもろもろの支配と権威が、今日、かつてないほど私たちに向かって陣を敷いているからである（エペソ二・二、六・一二）。けれども、私たちが主のうちにとどまり、へりくだって主に従うなら、敵はみな撃ち落とされる。どれほど低く襲いかかって来ても、欺き、悪い誘い、偽りの教え、落胆の爆弾を落としても、同じである。イエスの御名の力の上に据えられ、天に向けられた、見張りと祈りの砲によって、炎に包まれて敗れ落ちるのである。

陸に着き、弾丸に引き裂かれた戦場を越えて進む日々もある。そこで私たちは、かつての多くの戦友のなきがらが周りに散らばっているのを、悲しい心で見る。けれども、私たちの指揮官は語られる。たとえ千人がかたわらに倒れ、万人が反対の側に倒れても（詩篇九一・七）、私たちが主の御顔を求め、主のうちに隠れるなら、必ず通り抜けさせてくださる、と。

弾薬と補給品

大いなる戦場に入る前に、弾薬をたくさん、しっかりした栄養のある食物をたくさん持って行くことを確かめなければならない。表面だけの軽い祝福や、泡のように消える喜びは、兵士が戦うための良い食物にはならない。小麦と脂肪が必要である。だから、神のみことばの小麦をたっぷり持って行きなさい。そして、肥えた牧場で神の深みを食べていなさい（エゼキエル三四・一四、第一コリント二・一〇）。

塹壕掘り

へりくだりと祈りのうちに低く下り、主のうちに隠れながら、塹壕を掘る長い日々が何日も続くだろう。何もしていないように見える日々もある。そのときできるのは、見張ることと、主の深みにますます近く隠れることだけである。すばやく動き、敵の塹壕を襲う日々もある。けれども、主の民が今日このように戦いに組み合っていても、イエスは敵のすべての力に打ち勝たれる。そして、ご自分に信頼する者たちを、勝ち得て余りある者としてくださる（ローマ八・三七）。

漆喰と重砲

私たちは、すべてのことにおいて、御霊の導きと力をなんと必要としていることだろう。信仰ととりなしの祈りという長距離砲で戦うときも、つらい境遇の中で、忍耐と寛容と愛の銃剣で白兵戦をするときも同じである。重砲を撃つときには、しっかりした漆喰の土台を据えたことを確かめなさい。信仰と祈りの砲がぐらついて定まらないなら、的に当てることも、敵を敗走させることも、期待してはならない。利己心や自己中心の目的の上に砲を据えてはならない。その土台は決してもたないからである。

毒ガスとガスマスク

霊の眠りと怠惰の毒ガスに気をつけなさい。それは、敵の塹壕から欺きの風に乗って漂って来る。この毒を含んだ煙はみことばに預言されている（使徒二・一九）。それは、昔の十人のおとめや、園の弟子たちのように、あなたを眠らせてしまう（マタイ二五・五、二六・四〇）。そしてついには、目をさまして祈ることを忘れさせ、絶えず見張ることをやめさせる。この不注意の毒ガスの雲が向かって来るのを見たら、目をさましていること、祈り、賛美の三重のガスマスクをつけなさい。そうすれば、害を受けることはない。

塹壕の中で、決して自分を高く上げてはならない。頭が地面の上に出たら、あなたは敵の弾の確かな的になる。イエスの足もとに低く身をかがめていなさい。そうすれば安全である。

突撃して勝利へ

最後に、戦友たちよ、勇気を出しなさい。目をさまして祈り、私たちの指揮官の命令に従って生きるかぎり、恐れるものは何もない。指揮官は必ず勝利を収め

られるからである。

いつの日か、まもなく、戦いは終わり、最後の恐ろしい敵は征服され、冠は勝ち取られる。いつの日か、主は私たちを凱旋のうちに連れて行き、ご自分とともに御座について、とこしえに治めさせてくださる。ただし、それは私たちが忠実であり、主が勝利を得られたように勝利を得ていればの話である。

いっさいの重荷を、いっさいの眠りを捨てて（ヘブル一二・一）、進みなさい。「突撃せよ」。そうだ、終わりは見えている！　勝利はもう目の前にある。

赤十字

無人地帯。砲弾に引き裂かれた戦場。高性能爆薬と死の手段。負傷者のただ一つの望み、赤十字。担架兵。応急手当の用具。「祈り」の救急車。カルバリの丘の頂の赤十字病院。開いた門、清潔さ、熟練した優しい手。汚れて泥にまみれた衣を脱がせる。負傷者を洗う。柔らかな白い衣。手術、切断、埋まった弾丸と榴散弾を探ること。絶えることのない見守り。赤十字の食物と休み、愛と安全。「この私を赤十字の働き手に」

義の軍の最前線の塹壕と、悪魔とそのサタンの軍勢の最前線の塹壕とのあいだに、細長い一帯の土地が横たわっている。荒涼として不毛で、深い砲弾の穴だらけである。敵の要塞から何トンもの高性能爆薬が注ぎ込まれ、絶えずかき回され、掘り返されている。ここは無人地帯と呼んでよいだろう。この地にいる者は、イエスのものではない。けれども、厳密な意味では、悪魔もまだ彼らを完全に自分のものにしてはいない。悪魔が彼らのからだと魂と霊を征服し、地獄の暗い永遠の牢獄に投げ込むまでは。

この大いなる戦い（サタンが天から投げ落とされたときに戦端が開かれ、最初の一発が撃たれた〔黙示録一二・九〕。二発目は、サタンがエデンの園で、神の最もいとしい被造物である人類を、容赦なく攻撃したときだった）は、一度も衰えたことがない。竜巻のように、力と勢いを増し、激しさを募らせながら、どこまでも吹き進んできたのである。

霊の「戦闘地帯」全体を見渡しても、これほど危険に満ち、これほど守りがなく、これほど弾丸と砲弾が吹き荒れる地域はない。王なるイエスの兵士は、救い主の愛と力のとりでに深く掘り下げ、しっかりと塹壕を構える（詩篇六一・三）。けれども罪人は、無人地帯にひとり取り残され、敵のなすがままにされている。敵の重砲、機関銃、榴散弾、弾幕射撃、火炎、毒ガスは、届く範囲に来る者をみな、粉々にし、焼き焦がし、窒息させる。

はるか頭上では、悪魔の重砲から放たれた、圧倒的な悪と圧力と影響の砲弾が飛んで行く。破壊と死の任務を帯び、金切り声を上げながら空を引き裂いて行くのである。絶え間ない誘惑の速射機関銃から撃ち出された弾が、四方でうなりを上げ、土ぼこりを跳ね上げる。「住むのに快い所ではないね」とあなたは言うだろうか。けれども、これこそがすべての罪人の置かれている所なのである。主の大隊の戦線の外で過ごす一瞬一瞬が、死のこの上なく重大な危険をはらんでいる。そうだ、永遠の死の危険である。

悪魔は、罪人のほうへ吹く追い風（悪い影響や仲間）をつかまえると、すぐに毒ガスを放つ。イエスの御名によって逆らうというガスマスクに守られずにそれを吸い込む者は、みな息が詰まり、ついには眠りに落ちる。その眠りから目覚める者はわずかである。煙の立ちこめる空気の中に、死者と負傷者が見える。死者は冷たくなって、じっと横たわっている。負傷者は、苦しみながら、なすすべもなく手足を投げ出している。引き裂かれ、血を流している。榴散弾で目をつぶされた者もいる。手足をもぎ取られた者、肩や太ももを砕かれた者、頭に傷を負った者もいる。弾丸が肉の奥深くに埋まっている者もいる。彼らはそこに横たわったまま、自分を助けることも、互いに助け合うこともできない。彼らのもとに助けと救いを届けるには、自分のいのちを犠牲にする覚悟が要るだろう。だれが行くのか。

カルバリの丘の赤十字病院

負傷者の多くは、ずたずたにされ血を流しながら、長い時間横たわってきた。だれかが来て苦しみを和らげ、どこか避け所へ運んでくれないかと願いながらである。避け所か。この苦しみと死の修羅場から行ける所に、さ、け、ど、こ、ろ、などがあるのだろうか。ああ！　ある。義の軍の戦線のすぐ後ろに、カルバリと呼ばれる丘が立っている。その頂には栄光に満ちた病院が冠のようにそびえ、そこでは悲しみがぬぐい去られ、ギレアデの乳香が塗られる（エレミヤ八・二二）。この病院は、赤十字として知られている。それは、あの古い荒削りの十字架にほかならない。その十字架は、私たちを生かすために死なれた方の血で赤く染まっている。その方は、すべての砕かれた心をいやすために、ご自分の心を砕かれた。血に染まった十字架の上で傷を負われたのは、ご自分のもとに来るすべての傷ついた者を、その傷によってとこしえにいやすためだった（エレミヤ三〇・一七）。そうだ、その「開いた門」には（黙示録三・八）、大いなる医者ご自身が立っておられる。けれども、無人地帯の、砲弾に引き裂かれた大いなる戦場から、傷つき死にかけている者たちを捜し出して連れて来るのは、だれだろうか。

赤十字の働き手が切に求められている

戦線の後ろで傷ついたり倒れたりした者を救い出すのは、たやすいことである（詩篇三七・二四）。けれども、営所の外に、戦線の外に出て行こうとする者はだれだろうか（ヘブル一三・一三）。傷ついた兄弟を救い出すために自分のいのちを捨て、赤十字の働き手になろうとする者はだれだろうか。病院のほうから負傷者のところへ行くことはできない。だから、どうしても人の手が要る。額と左腕に赤十字のしるしを付けた、赤十字の働き手が要るのである。彼らは、包帯、リント布、ガーゼ、ひとそろいの止血帯、添え木、気付け薬などを備え、「祈り」の救急車と「信仰」の担架を携えて進んで行く。

あの向こう、無人地帯の罪の野には、何百、何千という傷ついた魂が横たわっている（イザヤ一・六）。信仰と祈りによって彼らをイエスのもとへ運ぶ赤十字の働き手がいないために、見回し、呼び求め、滅び、死にかけている。負傷者の中には、霊の苦しみのあまり大声で叫ぶ者もいる。食いしばった歯の間で苦しみの叫びをこらえる者もいる。見ている人に、ひそかな苦しみを知られないためである。また、自分の重大な危険にも、イエスのいない永遠の暗い夜が迫っていることにも気づかずに、横たわっている者もいる。

救急車が来る

弾丸と炸裂した砲弾の破片が、いたる所に降り注いでいる。いのちと望みの最後の火花を消してしまいそうである。だれもこの呼び声に耳を傾けないのだろうか。「ああ、来た！」と一つの声が叫ぶ。「カルバリの丘から、小さな列が下りて来るのが見える。救急車と助けを連れて来るぞ」

「弾薬か補給品の運搬車じゃないって、どうしてわかるんだ」と、長く待たされて疑い深くなった別の負傷者が尋ねる。

「急いで助けが来るのがわかるのは、車の横にしるしが見えるからだ。真っ白な地（イエスのしみのない義と清さ）に、大きな赤十字（コロサイ一・二〇）が描いてある」

救急車はしだいに近づいて来る。ほかの車や補給品のトラックは、目もくれずに向こう側を走り去った（ルカ一〇・三一～三二）。けれども、救急車は負傷者の横たわる場所まで、まっすぐにやって来る（ルカ一〇・三四）。赤十字の働き手たちは車から飛び降り、信仰の担架を担いで、もう助けようのない死者のそばを通り過ぎ（ヤコブ一・一五）、負傷者のもとへ急ぐ（マタイ二一・三二）。彼らは「応急手当」の用具を開き、悪魔に傷つけられて苦しむ魂のかたわらにひざまずく。

まず第一に、そして最も大切なものとして、赤十字の働き手は、あらゆる大きさの止血帯をひとそろい携えている。負傷者のからだのどこで動脈が血を噴き出しても、そこに合わせられるように作られている。担架兵は負傷者を一目見て、危険なほど血が失われているかどうかを知る。この道具が使えるところでは一秒もむだにするなと、担架兵たちは指示されている。打ち勝つ祈りを、神のみこと

ばと、すべての名にまさる力ある御名（ピリピ二・九）の権威と力とに結び合わせて、傷ついた手足にしっかりと巻きつける。そうすれば、引いていくいのちの流れを止めることができる。どんな状態や境遇にあっても、からだや魂のどの部分にも合う、神の永遠のみことばの一節と、打ち勝つ祈りがあるのである。

担架兵の背嚢の二番目には、信仰と望みと愛でできた、心の添え木がそろっている。負傷者はひどく砕かれていて、ずたずたの手足に支えを当てなければ、動かしたとたんに死んでしまうことがよくある。リント布、ガーゼ、包帯（エゼキエル三四・一六）がこれを補う。担架兵はみな、包帯の巻き方を徹底して訓練されていなければならない（ローマ一二・一五、イザヤ一・六）。気付け薬（エレミヤ三〇・一七）を与えたら、負傷者を「信仰」の担架にそっと寝かせ、「祈り」の救急車へ運ぶ。そして、御霊の油で動く「愛」のエンジンをかける。車はカルバリの丘の赤十字病院へ向かう。優しく巧みな扱いと運転が必要である。手荒な扱いや思慮のない手当てが、患者に残った小さないのちの火花を消してしまうことがよくあるからである。

負傷者は祈りの救急車に乗せられ、丘の上のいとしい古い赤十字病院へ、上へ上へ、近く近くへと運ばれて行く。そしてついに、「開いた門」に着く（黙示録三・八）。そこには大いなる医者が（マルコ二・一七）、苦しむ、罪に病む魂を迎えようと、優しいほほえみを浮かべて立っておられる。中は、すべてが一点の汚れもなく清らかに輝いている。この「からだと魂と霊をいやす病院」は、インマヌエルの血管から流れ出た「血の泉」にほかならないからである。

そこでは、優しくも力強い手が待ち構えていて、弱った魂を助け、この避け所の奥へと支えて行く。そのあいだ、彼の罪に病む魂は、こう祈りを脈打たせている。

「ほむべきかな、血の泉、
罪人の世に現された泉。
ほむべきかな、尊い神の御子、
ただその打ち傷によって、私たちはいやされる。
救い主よ、あなたのその泉へ、
あなたの約束に頼って私は行きます。
あなたのその洗いによって私をきよめてください。
そうすれば、私は雪よりも白くなります」

赤十字病院（イエスの血に染まった十字架から流れ出た血の泉）に着くと、十分な手当てをしたり傷の包帯をしたりする前に、まず罪と汚れの衣を脱がせなければならない。虫がわき、しみがつき、泥にまみれた衣である（ユダ二三）。世の衣を一枚ずつ、そっと脱がせ、あるいは切り取る。（赤十字の働き手は、この仕事を非常に注意深く、優しく行わなければならない。この仕事は、医師長であるイエスご自身にゆだねるのがよいことも多い。私たちのやり方は、良心的ではあっても粗雑で思慮に欠ける。そのやり方で手荒に扱い、地上の衣と習慣をはぎ取ったりすれば、弱った人を死なせてしまうかもしれないからである。患者が主の尊い御手に素直に身をゆだねるなら、イエスは罪に染まった衣を一枚一枚取り除き、ほとんど痛みを与えずに脱がせることがおできになる。）

手術室

古い世の衣を脱がせるとすぐに、患者は頭から足まで洗われ、すっかり清められる。まことに、イエスの血は「すべての」罪からきよめるのである（第一ヨハネ一・七）。負傷者を手術台に載せなければならないことも多い。肉の中に埋まった弾丸や悪魔の榴散弾のかけらを、どれほど痛くても探り出さなければならない。異物がすべて取り除かれるまでである。けれども、医者はメスと探り針を当てながら、こうささやかれる。「静かにしていなさい、わが子よ。愛する者が傷つけるのは、まことからである（箴言二七・六）。わたしは、いやすために傷つけるのだ」そして、砲弾のかけらに届いて取り出すまで、深く深く探っていかれる。

切断

からだのどこか、腕か足を、切断しなければならないときもある（私たちの霊の生活を損ない、妨げてきたもの、もしかすると愛する人や大切な持ち物）。けれども、手や足が切り取られているあいだ、その痛みの中で、医者は説き聞かせ

てくださる。「両手、両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片手、片足になって命に入る方がよい」片目がひどく見えなくなったり傷ついたりして、取り除かなければならなかった人も多い。けれども、そのあいだずっと、救い主の御声は続く。「両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって命に入る方がよい」（マタイ一八・八〜九）。

ときには、こういうことがある。主の尊い御手が、傷ついた人を手当てしておられるときである。主は傷を清め、ご自分の軟膏を塗り、傷をいやしてやろうと請け合ってくださる（エレミヤ三〇・一七）。そして、包帯を巻いてくださる。詩篇百四十七篇三節に、『主は心の打ち砕かれた者をいやし、その傷を包まれる』とあるとおりである。そのとき患者は、見上げて、大いなる医者ご自身の御手が傷ついているのを見る。そして驚いて叫ぶ。「あなたの手のその傷は何ですか」すると主は答えられる。「これはわたしの友だちの家で受けた傷だ（ゼカリヤ一三・六）。手だけではない。わたしの足も、わきも、額も、あなたのとがのために傷つけられたのだ」患者は、主の大きな犠牲と愛の前に恥じ入って、つぶやきはやむ。そして叫ぶ。「ああ、主よ、どうぞ手当てを続けてください。それがどういうことであってもかまいません。主よ、あなたに信頼します」

休みと食物

手術室での経験が終わると、患者はまもなく寝床に寝かされて休む（詩篇二三・二）。けれども、その前に、汚れのない白い麻布の衣を着せられる（黙示録一九・八）。疲れた人は休みを得る。傷は包まれて、もういえ始めている。からだも魂も清くなった彼は、こうささやく。「わたしは安らかに伏し、また眠ります。主よ、わたしを安らかにおらせてくださるのは、ただあなただけです」（詩篇四・八）

この赤十字病院には、食物と休みと愛と安全がある。医者はいつでも呼べばすぐに来てくださり、患者をいつも見守っておられる。この方は、まどろむことも、眠ることもなさらないからである（詩篇一二一・三〜四）。

（看護する人は覚えておかなければならない。回復期の患者には、健康な人に与えるほど強い食物を、たびたび与えてはならない。みことばの乳、御国のぶどう酒、いのちのパンを与える。そしてのちに、患者が強くなるにつれて、大いなる医者の指示と監督のもとで、堅い食物を与えてよい〔第一ペテロ二・二、ヨハネ六・三五、ヘブル五・一二〕。）

血の泉は、イエスの赤い、血に染まった十字架のもとにある。それはまことに、悲しみが和らげられ、砕かれた心がいやされる病院である。その中に住む者は安全で、危険から守られている（ローマ八・三八〜三九）。その上には、十字架の血に染まった旗が風にひるがえっている。イエスの真っ白なきよさを地にした、赤十字の旗である。悪魔の飛行船、空中のもろもろの支配と権威が、私たちの頭上高く舞うかもしれない。悪霊どもが荒れ狂い、大きな長距離砲が強力な爆薬を撃ち込んで、私たちの周りじゅうを砲撃するかもしれない。それでも、血の守りのもとに、ひるがえる十字架の旗のもとに、自分の主イエスの守りのもとにとどまる者は安全である。

「この私を赤十字の働き手に」

それから（日ごとに強くなって）力が戻ってくると、赤十字への大きな、あふれるほどの愛が湧いてくる。赤十字が自分にとってどれほどのものであったかを思う愛である。自分が救い出されてきた戦場を思うと、身震いがする。大砲のとどろき、戦いの煙、うめき声、胸を引き裂くような苦しみの叫び。それを思うと、彼の魂は新しく生まれた願いと決意で満たされる。自分も赤十字の記章を付けたい、という願いと決意である。祈りの救急車と信仰の担架を備え、神のみことばと、負傷者のための応急手当の用具を携えて、彼はいのちさえも犠牲にしようと出て行くだろう。彼の心からの叫びはこうである。「ああ、私が十字架へ運ばれたように、私も行って、ほかの魂を運んで来られたら！　ああ、ほかの人々も、ギレアデの乳香と、祝福されたカルバリの丘の頂の病院を知ることができたら！　ああ、愛する救い主よ、この私を赤十字の働き手にしてください！」

二つの家

砂の上の家と岩の上の家

この世のすべての男、女、子供が、一つの建物を建てている。『主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなしい』（詩篇一二七・一）。

家を建てる大軍は、二つの種類に分かれる。すなわち、罪人と聖徒である。（ここではっきりさせておこう。一人一人は、罪人か聖徒か、どちらかである。両方であることはできない。どちらでもないこともできない。神に対して中途半端なことはありえない。あなたは主の子供であるか、悪魔に仕えているか、どちらかである。中間の領域はない。）

家を建てる者が二種類しかないのと同じように、土台も二つしかない。悪魔の領地にある、罪と不義という砂の土台と、イエス・キリストという堅い岩である。

砂の上の人が材料を集める

罪人は日ごとに建てている。土台がないことに、心を悩ませはしない。深く掘ることなど少しも必要だと思わず、人生という建物を建て始める。悔い改めないことと、わがままの石を運んで来る。罪と不信仰の石を運んで来る。そして、それを一瞬ごとに、一時間ごとに、一日ごとに、一年ごとに、この人生の砂の上に積み重ねていくのである。

悪い思いと疑い深さの石が、日ごとに積み上げられていく。高ぶりと利己心と、神に対するかたくなな心の石が、建物の中にそれぞれの場所を占める。こうして建物は一瞬ごとに育っていき、一つの人生、一つの構造物になる。それは、神のさばきが世に注がれるあの大いなる日に、必ず倒れるのである。

岩の上の人が土台を掘り、建築の材料を集める

しばらく前にニューヨーク市にいたとき、私は世界に名高い大きな摩天楼に、強い印象を受けた。何週間も、いや、何か月も、ある一区画の周りに高い板塀が建てられているのを見ていた。その板塀の向こうに、塀の上にそびえて、大きなクレーンや起重機が見え、鋼鉄のドリルの音が聞こえた。

そこでは何十人もの男たちが働いていた。堅い岩盤に穴をあけ、掘り、爆破しながら、下へ、下へ、下へと進んで行った。まもなく建てられる大きな鉄骨の摩天楼の、土台を掘っていたのである。男たちの一人が、私に請け合った。建物が高くなるほど、土台を堅い岩盤の深くまで沈めなければならないのだ、と。

しばらくよそを訪れてから再び町に戻ったとき、私は驚いて目を見張った。鉄骨の建物があまりに早く形を成し、堂々とした威容で周りの建物の上にそびえていたからである。まったく、土台を造るほうが、建物の鉄骨を組み立てるよりも時間がかかったように思えた。

これは、キリスト・イエスという堅い岩の上に建てようと備えるクリスチャンの生活を、まことによく表すたとえだと私には思える。

土台

まず初めに、彼は悔い改めの深い土台を掘り、へりくだって自分の主イエスのうちへと下って行く。血に満ちた泉に飛び込む。主の尊い、刺し貫かれた足もとにひれ伏す。まことに、私たちの霊の生活では、下る道が上る道だからである。『自分を低くする者は高くされるであろう』（ルカ一四・一一）。

隣人たちは彼を笑い、そんなに深く掘ることも、罪のために泣き悲しむことも、少しも必要ないと言うかもしれない。けれども、工事は続く。妨げとなる大きな岩は、神の愛と力によって爆破されなければならない。あらゆる障害物を取

り除き、堅く据わった土台を造らなければならない。クリスチャン生活という建物を建てる前に、イエスのあがないの御業の中へ深く掘り下げなければならないのである。『どういうふうに建てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである』（第一コリント三・一〇～一一）。

土台が据えられると、建物は形を成し始める。悔い改めと神を恐れる心の石の上に、あわれみと神聖な優しさの石が載せられる。イエス・キリストの限りない恵みと愛、誠実と真実の石、救いの主への感謝と栄光に満ちた賛美の石が、建物に加えられる。愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制が（ガラテヤ五・二二～二三）、一瞬ごとに、一日ごとに、一年ごとに、積み重ねられていく。

これらの上にさらに、愛と無私の石が加えられる。魂を慕い求める心、神のみこころに身をゆだねること、主のように生き、主の御前にとどまりたいという願いも加えられる。こうして工事は続いていく。一つ一つの言葉と行いと思いによって、ここにも少し、そこにも少し、教訓に教訓、規則に規則（イザヤ二八・一〇）、一段また一段と積み上げられていくのである。

『キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、霊なる神のすまいとなるのである』（エペソ二・二〇～二二）

戸

家で次に大切なのは、家に入るための戸である。砂の上に建てる罪人の場合、「罪が門口に待ち伏せている」（創世記四・七）。彼の意志の力を支配している悪魔が、門番をしている。こうして戸は蝶番の上で開き、世の俗っぽさと罪と、悪い思いと悪い仲間を迎え入れる。それらが中の部屋を占めるのである。

その戸は、キリストの大いなる愛によって現される神に対して、いつも閉ざされ、鍵がかけられている。御霊の求愛にも、あの優しい御手が戸をたたく音にも、いつも閉ざされ、かんぬきが掛けられている。彼の耳は、こう語っておられる御声に閉ざされている。『見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでも戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう』（黙示録三・二〇）。救い主の警告にも閉ざされている。救い主は、この砂の土台と、決して嵐に耐えられない朽ちる建物を離れるようにと、彼に嘆願しようとしておられる。そして、こちらに来て、キリスト・イエスという堅い岩の上に建てるようにと招いておられる。その招きにも、彼の耳は閉ざされているのである。

岩の上に建てる神の子供の戸は、そうではない。御霊の力によって、義が門番として立っている。ほふられた小羊の血が、入口の柱とかもいに塗られている（出エジプト一二・七）。その戸は、主の導き、御霊の御業、主の義、主の祝福されたみこころのすべてを迎え入れるために、いつも開いている。そして、彼の造り主である主の喜ばれない、世と肉と悪魔のものを締め出すために、閉じられる。こうして、彼の部屋は信仰と望みと愛に占められるのである。

窓

次に大切なのは、二つの家の窓である。罪人の窓は、この世のものでかすみ、彼の視力は損なわれている。自分の危険に気づくことができず、ものの見方もゆがんでいる。まもなく襲いかかる恐ろしい怒りの嵐を、前もって見ることができない。『その日になると、家を守る者は震え、力ある人はかがみ、ひきこなす女は少ないために休み、窓からのぞく者の目はかすむ』（伝道の書一二・三）。

聖徒の窓は、御霊によって現された神の栄光に照らされている。彼が未来を見つめるとき、その眺めは澄みわたっている。そして、見るのである。

「昼よりも麗しい国がある。
信仰によって、彼は遠くからそれを見ることができる。
父が道の向こうで待っておられるから、
そこに彼の住まいを備えようとして」

彼の壁の外に立つ人々には、主の光が中から輝き出ているのが見える。こうあるからである。

『見よ、彼はわたしたちの壁のうしろに立ち、窓からのぞき、格子からうかがっている』（雅歌二・九）

食堂

砂の上に建てている罪深い人は、自分の食堂で、この世のものを食べて楽しんでいる。彼は自分の魂に言う。『たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。けれども、神は彼にこう言っておられる。『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』（ルカ一二・一九～二〇）。彼が食べて楽しんでいるものは、神を慕い求める魂の飢えを、決して満たすことのできないものである。彼は、「食べている夢を見ても、目がさめると、その魂はむなしい」者のようである（イザヤ二九・八）。

神の子供は、自分の食堂で、乳と蜜とぶどう酒を食べて楽しんでいる。目の前にはカナンの実りが並べられている。いのちのパンは彼のものである。彼のために、神の御座から、水晶のように輝く栄光の水が流れている（黙示録二二・一）。花婿がこう語っておられる声が聞こえる。

『わが妹、わが花嫁よ、わたしはわが園にはいって、わが没薬と香料とを集め、わが蜜蜂の巣と、蜜とを食べ、わがぶどう酒と乳とを飲む。友らよ、食べよ。飲め、愛する者たちよ、大いに飲め』（雅歌五・一）

罪人が仲間の喝采とこの世の宝を食べて楽しんでいるあいだに、いと高き方の子供たちは、主の食卓で食事をしている。主の義と愛を、御霊の喜びと実を食べているのである。主がみことばの緑の牧場に彼らを伴われるので（詩篇二三・二）、その魂はあふれるほどに満たされる。

踊りの広間

砂の上に建てられた家の住人たちは、この世の調べと喝采に合わせて踊っている。地上の人気と自己中心の目的の旋律に合わせて踊っている。外では、死の暗い夜の不気味な嵐雲が集まり、とどろく雷鳴は声高に警告を叫んでいるかのようである。神の怒りはまもなく注がれる。けれども、彼らは気にも留めずに踊り続け、滅びと地獄の縁へと、ますます近づいて行く。

岩の上の家の住人たちも踊っている。放蕩息子の兄が父の家に近づいたとき、音楽や踊りの音が聞こえたことを覚えているだろう（ルカ一五・二五）。踊りと喜びはすべて悪魔の独り占めだと思っているらしい人々がいる。けれども、踊りと喜びは本当は神のものである。悪魔はそれを盗むことができないので、偽物を作ろうとしてきたのである。

キリストとその義という堅い土台の上に望みを建てた人の心のうちには、言葉につくせない、輝きにみちた喜びがある（第一ペテロ一・八）。「その嘆きは踊りに変えられた」からであり（詩篇三〇・一一）、「そこでは、おとめたちは舞って楽しみ、若い者も老いた者も共に楽しむ」からである（エレミヤ三一・一三）。彼らは『鼓と踊りとをもって主をほめたたえ』（詩篇一五〇・四）、こう叫ぶ。

「踊りをもって主のみ名をほめたたえよ」（詩篇一四九・三）

「主の子供たちには、叫び歌う権利がある。
道はますます明るくなり、私たちの魂は翼を広げている。
私たちはやがて王の宮殿へ行く。
神に栄光あれ、ハレルヤ」

寝室

罪人の場合、その床は短くて身を伸べることができず、かける夜具は狭くて身をおおうことができない（イザヤ二八・二〇）。夜、床に就いても、心は落ち着かない。自分の神に会う備えができていないからである。神の御霊が彼と争われ、『人は自分のまいたものを、刈り取ることになる』（ガラテヤ六・七）と言い聞かせられるので、良心は乱れる。自分の義と言い訳の夜具は、神の目から彼をおおい隠すことができない。

神の子供の場合、主のうちにある休みは甘い。彼は、詩篇の作者の声が時代を越えて響いてくるのを聞く。『わたしが床の上であなたを思いだし、夜のふける

ままにあなたを深く思う』（詩篇六三・六）。『聖徒を栄光によって喜ばせ、その床の上で喜び歌わせよ』（詩篇一四九・五）。

ああ、神の子供のものである平安よ。たとえ二度と目が開かなくても、「肉体から離れることは、主と共に住むこと」であり（第二コリント五・八）、『生きることはキリストであり、死ぬことは益である』（ピリピ一・二一）と知っているのである。

宝の部屋

みことばはこう告げている。『あなたの宝のある所には、心もある』（マタイ六・二一）。世の人は、この世の財産という宝をたくわえ、富と家と土地を自分のために積み上げている。倉を取りこわしてもっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をしまい込む。長年分の財産がたくさんたくわえてあるので、自分の魂に、安心せよと言う（ルカ一二・一八～一九）。けれども神は、みことばを通して彼にこう語っておられる。『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』（ルカ一二・二〇）。彼は自分のために宝を積んだが、神に対して富んではいない（ルカ一二・二一）。『人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか』（マルコ八・三六）。

世の人は、大いなる明日のことを少しも考えない。一銭も持って行くことはできないことに、気づいていないようである。裸で一銭も持たずにこの世に生まれた彼は、同じありさまで次の世に入って行かなければならない（ヨブ一・二一、第一テモテ六・七）。

神の子供は、天に宝をたくわえている。『虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない』所である（マタイ六・二〇）。いちばん貧しい神の子供が、谷間のいちばん粗末な小屋に住んでいるかもしれない。それでも、かなたの世に宝をたくわえているなら、きらびやかな王座に座る不信心な王よりも富んでいる。その富は天にしまってあり、永遠の果てしない世々を通して、過ぎ去ることがないからである。

見張りの塔と探照灯

罪人の見張りの塔と、聖徒の見張りの塔とは、まったく違う。どちらも人生を見渡しているが、まったく違う見地から見ている。罪人のまなざしの探照灯は、全地を照らし回って、地上の財産、地上の宝、地上の楽しみと人気を探している。罪人の目の探照灯は、見張りの塔から、期待し、探るように、国の端から端までいつも向きを変えている。探して、探して、探しに探して、いつまでも探している。新しい娯楽を、新しい楽しみやもうけを探している。心を食い荒らしていく、あのうずくような飢えを静めるものを、いつも探し求めている。魂の渇きを満たそうと、いつも努めている。彼は知らずにいるが、その渇きを満たせるのは神のほかにないのである。

迫り来る嵐の暗雲、神の怒り

迫り来る神の怒りの嵐の暗雲が、罪人の頭上の空を覆いつつある。彼はそれを見ようとしない。地上のものにしか目がないからである。戦争と患難のこの終わりの日々に、雷が耳をつんざくとどろきで彼の周りに鳴り響き、稲妻がひらめいて周りに落ちる。それでも彼は、これが通り雨以上のものだとは信じようとしない。そして、彼の探照灯は、新しい手柄と誉れを求めて、なおも落ち着きなく全地をさまよい続ける。

岩の上に家を建てた賢い人は、探照灯をいつも上に、天に向けている。神は彼の高きやぐらであって（詩篇一八・二）、その中で彼は敵から守られている。彼は城壁の上に、「警戒」と「祈り」という夜回りを置き、いつも尋ねている。「夜回りよ、今は夜のなんどきですか」（イザヤ二一・一一）夜回りの答える声が聞こえる。「神の怒りの暗い夜が、全世界に襲いかかろうとしている。嵐と患難の時が迫っている。神の愛の大海は、罪と不信仰の幾世紀ものあいだ、川のように穏やかに、海のように深く流れてきた。それが今、かき回されて、怒りの大嵐になろうとしている」

嵐の信号はすべて掲げられ、危険信号が上がっている。砂の上に家を建てた人はわざわいである。震われるものはすべて震われ、震われないものだけが残る

（ヘブル一二・二七）。

「夜回りよ、今は夜のなんどきですか」すると、再び答えが返ってくる。「戦争と戦争のうわさ、災いと疫病、血と火と立ちこめる煙」（マタイ二四・六、使徒二・一九）嵐は荒れ狂っている。けれども、主の子供たちは、自分たちのあがない主が来られるのに備えている。

神の子供の探照灯は、上へ、いつも上へと向けられ、探し、いつも探している。罪人に悲しみをもたらす新しい雲の一つ一つに、彼は主の来臨のしるしをまた一つ見る。主はこう言われたではないか。「これらのことが起こるのを見たら、喜びなさい。主の来臨が近づいているのだから」（ルカ二一・二八）

雨が降っている

雨が降っている。正しい者にも正しくない者にも降っている（マタイ五・四五）。雨は激しくなって土砂降りになる。砂の上に家を建てた人には、雨は恐怖と滅びを、神の怒りの始まりをもたらす。けれども、岩の上に家の立っている人には、あふれるほどの祝福をもたらす。彼にとって、それは地に降る後の雨であり、「その心は歌と賛美と喜びに満ちる」のである。

罪人の上に集まる暗やみの雲は、聖徒にとっては輝く雲である。彼は、イエスが雲に乗って来られるのを待ち望み、雲に包まれて引き上げられ、主に会うことを、心から期待している（第一テサロニケ四・一七）。

罪人に確かな滅びをもたらす神の怒りの稲妻は、神の子供には力と栄光をもたらす。神は御座に着いておられる。東から雷鳴と稲妻が発する（黙示録四・五、マタイ二四・二七）。罪人はこの力の下でおじけづく。けれども、岩の上に家を建てた人は、声高らかに歌う。

「ああ、主よ、今こそ力を送ってください。
そして、私たちを一人残らず満たしてください」

嵐のあいだずっと、神の子供は祈りと警戒の見張りの塔にいて、その探照灯はいつも上を見つめている。

「彼はイエスが栄光から来られるのを待ち望む。木の上で死なれたあのイエスを。
輝く御使の群れが彼をふるさとへ運ぶのを、
あの栄光の永遠へと」

彼は、長く砂の上に建ててきた人に警告しようとする。けれども、その人は警告を受け入れようとしない。ああ、その人に見えさえしたら！　今日すでに、大波がこの地に押し寄せている。それは、彼のぐらつく土台の石を打ちたたき、王国や王座さえもよろめかせ、倒しているのである。

小さな者も大きな者も、すべての罪人、すなわち、神を拒み、キリスト・イエスという堅い岩の上に建てなかったすべての魂は、必ず不名誉な恥と死のうちに倒れる。彼の立っていた場所も、もはや彼を知らない（ヨブ七・一〇、詩篇一〇三・一六）。そして彼は、永遠の果てしない世々を通して、堅い岩の上に建てることを怠った、取り返しのつかない愚かさを嘆き続けるだろう。『人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか』（マルコ八・三六）。

岩の上の家は永遠に揺るがない

風が吹き、嵐がその家に打ちつけても、その家は倒れない。岩を土台としているからである（マタイ七・二五）。

「神に信頼する者はみな、
決して動かされることがない。
シオンの山のように揺るがずに立つ、
幾代にもわたって確かめられた山のように。
激しい嵐が猛り狂って打ちつけ、
恐ろしい雷がとどろいても、
力ある神の子供たちは、
とこしえに安全である」

罪人の家が地獄のいちばん深い穴へ沈んで行くあいだに、岩の上に建てられた義の家は、天に永遠に立ち続ける。嵐の決して来ない、涙の決して流れない、あ

の国にである。

聖霊について

失われたものと回復されたもの

次のメッセージは、イングランドのロンドンで、聖霊の霊感のもとに与えられたものである。御霊が与えてくださった聖句は、次のとおりであった。

私が幻のうちに見たとおりに

『かみ食らういなごの残したものは、群がるいなごがこれを食い、群がるいなごの残したものは、とびいなごがこれを食い、とびいなごの残したものは、滅ぼすいなごがこれを食った』（ヨエル一・四）

失われたもの

『わたしがあなたがたに送った大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う』（ヨエル二・二五）

そして回復されたもの

イングランドのロンドンで、中国へ渡る船を待っていたときのことである。ある日、一人の説教者から、その晩、自分の会衆に話をしてもらえないかと頼まれた。主に伺うと、それが主のみこころだと感じたので、その人に、行きますと答えた。その晩、お仕着せを着た従者の乗った立派なリムジンが、私を迎えに来た。私は気後れしながら、おぼつかない足取りで乗り込み、叫んだ。「ああ、主よ、どうか今夜、みこころを行えるように助けてください」道すがら、私は美しい街並みと建物を眺めていた。やがて車は、堂々とした広い建物の前に止まった。

この巨大な建物の階段を上り、横の戸口から入って行くとき、私はその大きさをちらりと見たのを覚えている。そして、この中のどこか小さな部屋が伝道所に使われているのだろうか、とぼんやり考えた。だから、戸口を通って壇上に案内されたときには、本当に驚いた。この建物全体が人でぎっしり埋まっていて、私はすぐにその人々に話をすることになっていたのである。付き添いの人が、遅れてしまいました、と私の耳にささやいた。それから、壇上の人がこう言う声が聞こえた。「それでは、姉妹にお話をしていただき、メッセージを取り次いでいただきましょう」

気がつくと、私は、それまでに話したことのあるどの集会よりも大勢の聴衆の前に、ぼうぜんとし、うろたえて立っていた。天井桟敷も、バルコニー席も、一階席も、演壇も、すべて埋まっていた。そのうえ私をなおうろたえさせたことに、ちょうどそのとき、私の周りで脚光がぱっとまばゆく輝いた。ほんの小娘の私が、震える手に聖書を持って、そこに立っていたのである。その場で神が私を通して語ってくださると信じて、説教は何も準備していなかった。けれども、一つの考えも浮かんでこなかった。私は黙って祈り、神に心を向けて、こう言った。

「神よ、これまで一度でも私を助けてくださったことがあるなら、今こそ助けてください！」

ちょうどそのとき、あることが起こった。神の力が私の体をうねるように貫き、栄光と賛美の波が私の魂を洗ったのである。やがて私は、ついさっきまで目の前で揺れ動いて見えた、熱心な顔の群れを忘れた。脚光も、燕尾服を着た学識のある人々も忘れた。自分がまだ十八歳の子供にすぎないことも忘れた。そこにいる白髪の人々の多くは、私がふつうなら一生かかって知る以上のことを、すでに知っていた。そのことも忘れた。そして、「私は御霊のうちにあった」のである。

こう書くと長くかかるが、これは一瞬のうちに起こった。神に信頼する者は、決してはずかしめられることがないからである。私の口が開いた。主が私の舌と唇と声の器官を治め、私を通して、異言ではなく英語で語り始められた。御霊が預言によって語られたのである。御霊が語っておられるあいだ、私には、次の言葉が何になるのかわからなかった。まことに、水が流れ出た。それは私の頭からではなく、私という者のいちばん奥深いところから流れ出たのであって、私は何一つ手を加えていなかった。

こうして私は一時間十五分語ったが、あの大勢の聴衆のうちに、身動きする人は一人もいないようであった。語っているあいだに、私は一つの幻を見た。前のページの図に示したような、十の小さな円からなる大きな円である。この大きな円はあまりに大きく、その頂は天に届いているように思えた。それは聖霊の時代であって、ペンテコステの日に始まり、主イエスの来臨のときに終わるものであった。この幻は消えることなく私の心に刻みつけられたので、私が説明して、夫にそれを描いてもらった。主が私に示してくださったとおりに、すべての人がそれを単純にはっきりと見ることができるようにするためである。話し始める前に、私は聖句を神にゆだねて、目を閉じたまま聖書を開いた。すると、私の指はある節へと導かれた。目を開けて読むと、主が私に与えてくださったのは、この節であった。

『かみ食らういなごの残したものは、群がるいなごがこれを食い、群がるいなごの残したものは、とびいなごがこれを食い、とびいなごの残したものは、滅ぼすいなごがこれを食った』（ヨエル一・四）

同じように、円のいちばん下まで来て、暗黒時代がその恐ろしさのままに描き出されたときのことである。私の手はひとりでにページをめくって第二章を開き、次の節の上に指を置いた。

『わたしがあなたがたに送った大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う』（ヨエル二・二五）

次のページから、そのメッセージを、与えられたとおりに書き記した。とこしえに賛美を受けるにふさわしいのは、私ではなく、主である。

三つの時代（その一）

神のうちに父と子と聖霊の三つがおられるように、はっきりと分かれた三つの時代、すなわち時期がある。

第一に来たのは、父の時代である。それは神のみことばのうち、創世記からマラキ書までの旧約聖書の全体に記されている。父の時代を通じて、父は、この時代の終わりに大いなる賜物をこの地に授けると約束された。それはひとり子イエスであって、私たちのあがない主、私たちの罪のためのなだめの供え物である。その時期の終わりに、父なる神は言葉を守り、約束のとおりにイエスを与えてくださった。罪人への大いなる愛の贈り物としてである。

第二に来たのは、御子の時代である。それはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書に記されている。父が世に授ける賜物を持っておられたように、私たちの救いであるイエスも、ご自分を信じるすべての者に賜物を授けたいと切に願っている、と私たちに繰り返し語っておられる。それが聖霊の賜物である。この地での働きのあいだずっと、イエスは、ますます力を込めて、弟子たちにこう説き明かされた。ご自分が去って行くときに授ける賜物を彼らが受けることが、どれほど大切か、と。

イエスの働きは、ある程度、その範囲を限られていたように見える。イスラエルの家の失われた羊のところにだけ遣わされ、一度に一つの場所にしかいることがおできにならなかった、などである。そして、ヨハネ十六章七節でこう言われた。『わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう』。明らかにイエスは、ご自分がこの地にとどまるよりも、私たちが聖霊を受けるほうが大切だと考えておられたのである。こうして、父が約束を守って、罪人への愛の贈り物であるイエスを遣わされたように、今度はイエスが言葉を守り、信じる者への賜物である聖霊を遣わしてくださるよう、父に願われたのである。

第三に来たのは、聖霊の時代である。それはペンテコステの日に始まった（使徒二章）。私たちは今もこの時代に生きており、待っている花嫁をイエスが迎えに来られるときまで、この時代に生きるのである。

地上でのイエスの優しい働きの日々は終わった。イエスは最後の晩餐を食べられた。罪人に代わってさばかれ、罪人の身代わりに死なれた。寂しい墓に納められ、力と勝利のうちによみがえり、よみがえりの後、四十日のあいだ地上を歩まれた。イエスは最後にもう一度、こう約束された。ご自分の小さな者たちを孤児とはしない。父にお願いして、別の助け主、すなわち聖霊を遣わしていただく、と。聖霊は来られると、その務めとして次のことをしてくださる。イエスのものを受けて、それを彼らに知らせる（ヨハネ一六・一四）。あらゆる真理に彼らを導く（ヨハネ一六・一三）。ご自分のことではなく、イエスについて語る（同一三）。きたるべきことを彼らに知らせる（同一三）。イエスに栄光を得させる（同一四）。罪と義とさばきとについて、世の人の目を開く（同八）。彼らにすべてのことを教える（ヨハネ一四・二六）。イエスについてあかしをする（ヨハネ一五・二六）。上からの力を彼らに着せる（ルカ二四・四九）。言葉にあらわせない切なるうめきをもって、彼らを通して祈る（ローマ八・二六）。イエスが天に上げられる前、雲に迎えられて彼らの目から見えなくなる前に語られた最後の言葉は、ルカ二十四章四十九節と使徒行伝一章八節に記されている。それは、ご自分が遣わす助け主を待ち望み、受けることがどれほど大切か、ということであった。

聖霊の降臨を待ち望む

「上から力を授けられるまでは、とどまっていなさい」という主の命令は、まだ彼らの耳に響いていた。百二十人ほどの小さな群れは、燃える心で、エルサレムの「屋上の間」へ向かった。そこで聖霊の到来を待つためである。それは、天

から遣わされた御霊の、この大いなる新しい時代の幕開けであった。十日のあいだ、彼らは待った。彼らは「心を合わせて一つ所にいて、ひたすら祈り願っていた」（使徒一・一四）。心を合わせて。ああ、この単純な言葉に、なんと乱れのない調和が描かれていることだろう！　トマスはペテロに、こう言ってはいなかった。

「ペテロ、君はここで何をしているのか。君は主を三度も知らないと言った。のろいの言葉を口にして誓いさえした。主が君に御霊のバプテスマを授けられることなど、決してないさ」ペテロもトマスに、こう言ってはいなかった。

「おや、トマス、君こそここで何をしているのか。君はいつだって疑ってばかりいたじゃないか。主から何か受けられるなんて思わないことだ」ああ、そうではない！　彼らは心を合わせて一つ所にいて、ひたすら祈り願っていたのである。

聖霊の降臨

（使徒二・一～四）

「五旬節の日がきて、みんなの者が心を合わせて一緒に集まっていると、突然、天から音が起ってきた」（神をほめたたえよ。それからこのかた、御霊が下って入って来られるときには、いつも音がしている）。「天から」（そうだ、神に感謝しよう。人が何と言おうと、この音は確かに天からのものである）。「激しい風が吹いてきたような音で、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した」

百二十人の男女が聖霊に満たされ、叫び出し、他国の言葉で語り出したとき、エルサレムの通りには、にわかな驚きと興奮が押し寄せた。彼らは満たされるあまり、酒に酔った人のようにふるまったのである（使徒二・一三）。私はたびたび、その様子を思い描こうとしてきた。目に見えるような気がする。群衆が、この通り、あの通りと駆けて来る。窓がぱっと開き、頭が突き出され、戸が開き、だれもかれもが駆けて来る。信仰深い人々も、長い聖職者の衣をたくし上げ、威厳を忘れて、ほかの人たちといっしょに駆けて来る。そして、一つの大きな問いを、ますます大きくしていくのである。

これは、いったい、どういうわけなのだろう

『この物音に大ぜいの人が集まってきて』（愛するみなさん、聖霊があなたがたのうちに下っておられるなら、群衆を集めるのに、牡蠣の夕食会も、弁当の競り売りの会も、クリスマスツリーもいらない。困るのは、人々の座る席を見つけることだけである）、『あっけに取られた』。たぶん、あなたがたがそうであったのと同じようにである。「だれもかれも、使徒たちが自分の生れ故郷の国語で話しているのを聞いたからである」（使徒二・六）。彼らは驚き、怪しみ、惑った（使徒二・七、一二）。まじめな人々は、こう問いかけた。

『これは、いったい、どういうわけなのだろう』（使徒二・一二）あざける人たちは、こう言い放った。

『あの人たちは新しい酒で酔っているのだ』（使徒二・一三）ああ、なんという騒ぎ！　なんという興奮！　混乱を嫌い、何事も『適宜に、かつ秩序を正して』（第一コリント一四・四〇）行うよう求める愛するみなさんなら、さぞ眉をひそめたことだろう。

「しかしペテロは」、それはもはや人の思わくを恐れない新しいペテロであったが、「立ちあがり」（聖霊は、あなたに力を着せてくださるとき、イエスのために本当に立ちあがる霊をあなたのうちに入れ、臆病を取り去ってくださる）、こう言った。「この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。これこそ、預言者ヨエルが預言していたことである。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう』」（使徒二・一四～一七）それからペテロは、聖霊の力のもとで、あの力強い説教をした。そのなかで、大ぜいの聞き手にこうも告げた。

「悔い改めなさい。そして、ひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい」。そうすれば、彼らもま

た『聖霊の賜物を受けるであろう』と（使徒二・三八）。さらにペテロは、きたるべき年月のはるか先を見通して、あなたがたのうちのある人の心にある疑いを見たかのように、こう言いきった。『この約束は』、『あなたがた』にだけでなく、『あなたがたの子らと、遠くの者一同とに』与えられている、と。兄弟よ、姉妹よ、それはあなたのことである。ペテロは続けて、『われらの主なる神の召しにあずかるすべての者』に、と言っているからである（使徒二・三九）。だから、神があなたを召しておられるなら、この約束はあなたに与えられているのである。御霊がペテロを通してこれらの釘を打ち込み、裏側で先を折り曲げて留めてくださったことを、私はなんとうれしく思うことだろう。あなたが疑いのくさびを差し込むすき間は、影ほどもないのである。

第一の円　大いなるしるしと奇跡を伴った聖霊の時代の幕開け

ペンテコステの日には、三千人ほどの魂が救われた。次に私たちは、ペテロとヨハネが祈るために宮に上って行く姿を見る。二人が「美しの門」で足のきかない人のそばを通ると、その人は二人に施しを求める。ペテロは答える。

『金銀はわたしには無い』（ペンテコステの人々が金銀にあり余るほど恵まれたことは、これまでもなかったし、これからもないだろうと思う）。「しかし、わたしにあるものをあげよう。イエス・キリストの名によって、立って歩きなさい」（使徒三・六）足のきかない人はたちまちいやされた。宮の祭司たちが御霊の現れを信じていたかどうか、私は知らない。けれども、ともかくその人は、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、あの宮にはいって行ったのである（使徒三・八）。

使徒行伝五章十六節では、エルサレム付近の町々から、大ぜいの人が、病人や汚れた霊に苦しめられている人たちを連れて来る。そして、その全部の者が、ひとり残らずいやされた。病人は大通りに運び出され、寝台や寝床の上に置かれた。ペテロが通るとき、せめて彼の影なりと、そのうちのだれかにかかるようにするためである（使徒五・一五）。いたるところで、使徒たちの手によって、しるしと奇跡が行われた。こう言われた方の言葉のとおりであった。

「これよりも大きいわざを、あなたがたはするであろう。わたしが父のみもとに行くからである」（ヨハネ一四・一二）

第一の円に見える木が完全な姿で立っていたあいだ、教会は、聖霊のペンテコステの力と栄光に満ちあふれ、燃え輝いて立っていた。イエスの言葉は成就し、彼らはまことに、実際に、上からの力を着せられていた。かつて、イエスを知っているかと尋ねた一人の小娘を恐れた臆病なペテロは、もう臆病ではなかった。無学な男女が、燃える福音の使者に変えられた。

聖霊の注ぎは、ユダヤ人にだけでなく、異邦人にも与えられた。使徒行伝十章で、私たちはペテロの姿を見る。幻を通して語られた主の声に答えて、異邦人にイエスを宣べ伝えに下って行くのである。「ペテロがまだ語っているうちに、みことばを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった」（使徒一〇・四四）。ペテロについてきたユダヤ人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたことに驚いた。『それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである』（使徒一〇・四六）。

また、聖霊が前の雨として注がれたこのすばらしい日々に、私たちはサウロの姿を見る。クリスチャンを迫害しにダマスコへ向かう途中、御霊の力に打たれて道に倒れ伏し、こう言われるイエスの声を聞くのである。

『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』（使徒九・四）後に私たちは、パウロの姿を見る。パウロは回心し、他国の言葉で語るという聖書的なしるしを伴って、聖霊のバプテスマを受けた（第一コリント一四・一八）。それだけでなく、自分でも救いと聖霊のバプテスマを宣べ伝えているのである。使徒行伝十九章では、パウロがエペソで幾人かの弟子に出会い、信仰にはいってから聖霊を受けたのかと尋ねる。彼らは「いいえ」と答える。聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがないのである。「パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、彼らは異言を語った」（使徒一九・六）。そして、神をあがめたのである。他国の言葉で語るというこの驚くべき現れは、どこでも、信じる者が聖霊に満たされるときに伴った。シモンは、自分が見聞きしたものを授ける力を得ようとして、金をさし出したのである（使徒八・一八～一九）。

完全な実を結んだ木

御霊のあらゆる賜物と実が教会に現れ、ついに御霊の九つの賜物と九つの実が、十八の完全なりんごとして、完全な木に実った。『ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている』（第一コリント一二・八～一〇）。病人はいやされ、奇跡が行われた。集まりで他国の言葉のメッセージが与えられると、だれかがその解き明かしをした（第一コリント一四・二七）。九つの実も、一つ残らず教会にあった。愛、喜び、平和、慈愛、善意、忠実、柔和、自制、寛容である（ガラテヤ五・二二～二三）。こうして、図の「第一の円」に描かれた完全な姿ができあがる。

こうして、初代教会の歴史の第一章が終わる。木はイエスの信仰に根ざし、それに基を置いている。幹から出た大枝も、小枝も、葉も、実も、一つ残らず完全な力と強さのうちにある。

第二の円　かみ食らういなごの働き

ああ、調和のとれた愛と一致の栄光に満ちた日々よ。だれひとりその持ち物を自分のものだと言わなかった日々、主の子供たちがいっさいの物を共有にしていた日々、獄の鎖が断ち切られ、しるしと奇跡が行われた日々よ。それが続いていたらと、私たちはどれほどたびたび願ったことだろう！

私たちのちっぽけな頭は、過去の出来事でさえ弱々しくしかつかめず、未来を覆う奥義の深みを探ることは、まったくできない。けれども、全能の神の大いなる御心と御目は、私たちとは違い、未来を過去と同じようにはっきりと見ておられる。神の燃える炎の御目と、その臨在の栄光の前では、やみは昼に変わり、どんなに深い霧も巻き去られる。こうして、澄んだ、誤ることのない目で先を見通して、神は見ておられた。教会が、この力に満ちた栄光の状態をいつまでも保ってはいないことを見ておられた。そればかりか、預言者ヨエルを通して、それを預言された。かみ食らういなご、群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなごが、賜物と実をつけたこの完全な木を荒らし、はぎ取り、傷つけ、滅ぼすことを見ておられたのである。教会、すなわちこの木が、だんだんに多くのものを失っていき、ついには荒れ果て、不毛になり、絶望のうちに取り残されることを、神は見ておられた。完全な木の衰えと滅びは、一日で起こったのではない。それは一日ごとに、一段また一段と進んでいった、ゆるやかな衰えであった。

ある日、かみ食らういなごが現れ、行く先々で食い荒らし、滅ぼしていった。年月がたつにつれ、ついに御霊の賜物と実が見えなくなり始めた。昔ほど多くの病人がいやされなくなり、昔ほど多くの奇跡が行われなくなった。信仰は衰えていった。集まりでだれかが異言のメッセージを語っても、解き明かしの賜物を持つ者はだれもいなかった。預言のメッセージも、昔ほどたびたびは与えられなくなった。無私の愛と喜びと平和の実も、かみ食らういなごに襲われた。いなごは日ごとにますます大胆になっていった。まっすぐで頑丈なその木は、ペンテコステの日から何年ものあいだ、あれほど栄光に満ちて、実をたわわにつけて立っていた。その木から、十八のりんごがだんだんに消え始めた。

この実のない状態は、まことに嘆かわしいものであった。けれども、何よりも悲しいことに、荒廃はかみ食らういなごの荒らしたところで止まらなかった。別の年月が来て、別の虫が、かみ食らういなごのやめたところから滅ぼす働きを引き継いだ。『かみ食らういなごの残したものは、群がるいなごがこれを食い』とあるとおりである（ヨエル一・四）。

第三の円　群がるいなごの働き

群がるいなごの働きは、言うまでもなく、葉に対してなされる。広大な国土を襲い、触れるものすべてをはぎ取り、不毛にする。こうして、信じる者の大多数が、御霊の賜物と実を見失っただけではなかった。他国の言葉で語ることを伴って、聖霊が一人一人のうちに入って来て住んでくださることも、大きく見失われたのである。求める人たちの昔ながらの集会や、熱心な祈りと賛美の集会は姿を

消しつつあった。その代わりに、形式主義と分派主義がその場所を占めつつあった。

謙遜と敬虔と聖霊の現れが消えていくと、迫害とそしりも消えていった。昔ながらの集会が、もっと正統的な形の、いかめしい礼拝に変えられていった。そのなかで、柔和な鳩のような聖霊は、消され、悲しませられ、押さえつけられた。ついに聖霊は、奇跡を行うご自分の現れを、黙って引き揚げられた。そして、喜びと楽しみは人の子らから取り去られたのである。

聖霊のバプテスマは、昔のようには受けられなくなった。それには、あまりに大きな犠牲が要ったからである。神の前で自分をすっかり空にし、ちりの中にへりくだることも、求めて待つことも、あまりに多く要ったからである。すると、新しい形で聖霊を受けていると公言する人々が現れた。すなわち、御霊が語らせるままに他国の言葉で語るという、聖書的な証印、聖書的なしるしなしに、である。これで事はずっと簡単になった。口で唱える者が、実際にそれを持つ者である必要はもうなくなったのである。こうして、聖霊のバプテスマは多くの人に見失われた。それでも、御霊に満たされた忠実な聖徒たちは、わずかながらいつも残っていた。神は、その人々を通して、ご自分を本当に、超自然的な形で現してくださったのである。

こうして木から葉がはぎ取られ、群がるいなごがその働きを終えた日は、悲しい日であった。けれども、さらに悲しい日々が続くことになっていた。『群がるいなごの残したものは、とびいなごがこれを食い』とあるからである（ヨエル一・四）。

第四の円　とびいなごの働き

実と葉が滅ぼされると、すぐにとびいなごが現れ、木の枝と柔らかな若枝に働きかけ始めた。主の子供たちが長いあいだ喜んで歩んできた、世と罪を超えた、神を恐れるきよさの歩みを、むしばみ、損なっていったのである。木のいのちである樹液が食い尽くされ、枝はますますむしばまれ、損なわれていった。かつて罪深く思われたことが、もう罪深くは見えなくなった。かつて教会の戸の外に締め出されていた世は、今や、ふかふかの座席に満足げにけだるくもたれかかり、あるいは聖歌隊で歌っていた。

クリスチャンたちは、高く掲げてきた「主へのきよさ」という高い旗を、ますます下ろしていった。今やその旗は、だれにも気づかれず、泥にまみれて、ちりの中を引きずられていた。とびいなごの跡を追って、すぐに滅ぼすいなごがやって来た。『とびいなごの残したものは、滅ぼすいなごがこれを食った』とあるとおりである（ヨエル一・四）。

第五の円　滅ぼすいなごの働き

私たちは今、大きな円の底に近づいている。完全な木は、もう完全ではない。実をはぎ取られ、葉を奪われ、枝は白くされ、すっかり裸にされた。まもなく幹と根が朽ち始め、滅ぼすいなごは、木の朽ちて腐ったうろに巣を作った。

どんな木も、息をするための葉や、いのちの樹液を管に巡らせるための枝と大枝がなければ、長くいのちをつなぐことはできない。信じる者も同じである。いのちの息である聖霊なしに生きるのは、乏しい、不毛な生をかろうじてつなぐことである。御霊によって現されるイエスの聖なるいのちを、血管に巡らせずに生きるのも同じである。そんな生き方は、神のみことばのどこにも記されていない。そして今、第五の円に、私たちはこれまでに描いたうちで最も嘆かわしい状態の木を見る。実はなくなり、葉もなくなり、枝は裸になり、幹は朽ちて腐り、滅ぼすいなごの巣になっている。言いかえれば、御霊の賜物と実はなくなり、聖霊のバプテスマもなくなり、世からの分離ときよさもなくなり、信仰による義認もなくなったのである。御使たちが天の胸壁から身を乗り出して泣いたとしても、無理はない。かつて聖霊の力と栄光をまとって立っていた気高い教会、あの完全な木に、今は名のほか何も残っていなかった。かつての輝きの名残さえなかった。こうして教会は、暗黒時代に入って行ったのである。

第六の円　暗黒時代

暗黒時代と呼ばれるのも、もっともである。ああ！　イエスのいない夜は、まことに暗い。イエスは世の光である。教会が信仰による義認を見失い、あがないを、イエスの血を見失ったとき、皆既食が起こり、義の太陽の面は覆い隠された。それに続く年月が、暗黒時代として知られているのである。

この深いやみの中を手探りする男女は、天国への道を自分の力で勝ち取ろうとした。苦行をし、地下牢に自分を閉じ込め、真っ赤に焼けた鋤の刃の上を素足で歩き、自分に、また互いに、名状しがたい責め苦を加えた。カルバリの粗削りの十字架の上ですでに支払われた負債を、自分の何かのわざや行いによって支払おうと、やみくもに努めたのである。彼らは、次の事実をまったく見失っていた。

「イエスがすべてを支払われた。
私たちはすべてを主に負っている。
罪は紅の染みを残したが、
主はそれを雪のように白く洗われた」

図に見える大きな矢は、私が幻のうちに見たとおり、下へ、下へと、容赦なく、休みなく下り続けていた。いつまでも底に着かないのではないかと思えるほどであった。そして今、矢は底に達した。教会はすべてを失い、木は死んだのである。

御使たちは泣いたかもしれない。人々は手をもみしぼり、まったくの絶望のうちに魂が衰え果てたかもしれない。けれども、神は、ハレルヤ、なおも未来を見通して、預言者ヨエルを通してこう語っておられた（ヨエル二・二五）。

『わたしがあなたがたに送った大軍、すなわち群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年をわたしはあなたがたに償う』ああ、愛するみなさん、わかるだろうか。それなら、声を上げて主をほめたたえなさい。なんと、それはすべてであった。すべてである。考えてもみなさい。失われたすべてが、回復されることになっていたのである。ハレルヤ！　人にはできないことも、神にはできる。

さて、教会はこの「すべて」を一度に失ったのではなかった。回復も、『時に応じて』与えられる食物のように（マタイ二四・四五）、規則に規則、教訓に教訓、ここにも少し、そこにも少しと（イザヤ二八・一〇）、少しずつ来た。そして今日、私たちはこの回復の完成に近づいている。イエスはまもなく来られて、ご自分の完全な教会、ご自分の花嫁、実をたわわにつけたご自分の木を、みもとに迎えられる。そこで、地から天に移し植えられた木は、大いなるいのちの川のほとりで、とこしえに花を咲かせ、実を結ぶのである。

そうである。神は、教会が失ったものを、一度に回復されたのではなかった。確かに神は、そうしようと思っておられた。けれども、そのころの人々には、まだ光がなかったのである。だから、最後に失われたものが、最初に回復された。彼らは、生きているという名はあっても、実は死んでいた（黙示録三・一）。だから、さらに高い段へ進む前に、悔い改めて、初めのわざをもう一度行わなければならなかったのである（黙示録二・五）。

三つの時代（その二）

第七の円　滅ぼすいなごの食った年が回復される

矢が上り始め、回復の働きが始まる直前には、ヨエル書の第一章にヨエルが描いた荒廃の光景が、その恐ろしさのままに見える。素祭と灌祭は絶え、畑は荒れ、穀物は荒れはて、新しい酒は尽き、倉は荒れ、穀倉はこわされる。家畜はうめき、牛の群れはさまよい、羊の群れも滅びうせる。水の流れはかれはて、火が荒野の牧草を焼き滅ぼしたのである（ヨエル一・九～二〇）。やがてある日、この荒廃のただ中で、神が動き始められた。神の足音が聞こえたのである。そして第七の円に、私たちは、木の根が再び地中に深く下ろされ、信仰による義認が回復されるのを見る。それは、次のようにして起こった。

マルティン・ルター

ある日、マルティン・ルターは、割れたガラスの散らばる大聖堂の階段を、両手とひざで上っていた。苦行をして、それによって自分の罪を償おうとしていたのである。こうして、割れたガラスで切れた手とひざから血をしたたらせ、苦しみながら骨を折って階段を上っていたとき、彼は天からこう告げる声を聞いた。

「マルティン・ルターよ、義人は信仰によって生きる（ローマ一・一七）」

その言葉とともに、天から大いなる光が下った。その光は、やみと疑いを追い払い、マルティン・ルターの魂を照らした。そして、カルバリの完成された御業と、罪をあがなうことのできるただ一つのものである血とを、彼に示したのである。

「私には良いものが何一つない。
御恵みを求めることのできるものは。
私は自分の衣を白く洗おう、
カルバリの小羊の血で」

それに続く日々は、多くの出来事に満ちた日々であり、新しい時代を開く日々であり、自己犠牲と苦しみに満ちていた。主は語られ、食われた年をすべて回復すると約束しておられた。信仰による義認が宣べ伝えられると、産みの苦しみと苦難の海がそれに続いた。そして、その海の中から、血で洗われ、火で試された旅人たちの小さな群れが生まれた。主の御名のために、喜んで迫害を受ける人々である。

たぶん、あなたも読んだことがあるだろう。マルティン・ルターとその従う者たちは教会から追い出され、偽りの悪口を言われ、ありとあらゆる悪事のかどで訴えられたのである。マルティン・ルター、カルバン、ノックス、フレッチャー、そのほか多くの祝福された主の子供たちは、救いと罪のない生活という真理のために堅く立ったので、ありとあらゆる迫害を受けた。神のみことばは、『信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける』と言っている（第二テモテ三・一二）。（もし、あなたやあなたの教会が、信心深く生きていると公言しながら、少しも迫害を受けないなら、もし人気者になって、十字架の恥とそしりがなくなっているなら、どこかに根本的な誤りがある。信心深く生きる者は、今も迫害を受けるからである。）

気高い木は、義認の根を、信仰という肥えた土に再び下ろした。いのちが再び木の幹と大枝にみなぎり始めた。すると、地獄のあらゆる悪霊が、救いの光を見て受け入れた人々に向かって、荒れ狂い、ほえたけっているかのようであった。殉教者たちは、火あぶりにされ、石で打ち殺され、公衆の前で絞首台につるされ、異端審問の拷問を受けた。焼けた鉄で目をつぶされた。背中に大きな裂け目ができるまで打たれ、その傷に塩をすり込まれ、暗い地下牢に投げ込まれた。それでも彼らは、イエスに忠実で、ひるまなかった。言葉にできない仕方で責めさ

いなまれ、首をはねられ、断頭台に送られた。盟約者たちは丘から丘へと追われ、行く先々で狩り立てられ、悩まされた。祈るにも、主への賛美を歌うにも、しばしば洞穴に身を隠さなければならなかった。

けれども、神は「食われた年を、わたしは回復する」と言っておられた。燃える火刑の柱にもかかわらず、血と火と苦難の深い水にもかかわらず、地獄の悪霊の荒れ狂いにもかかわらず、あれほど長く下り続けていた大きな矢は、ついに上り始めていた。そして、頂に達し、木が再び完全な姿に回復されるまで、決して止まることはないのである。

迫害は神を止めることができない。洪水も神の歩みを阻むことはできない。火も神の進みを遅らせることはできない。こうして、規則に規則、教訓に教訓、ここにも少し、そこにも少しと（イザヤ二八・一〇）、回復の働きは進んできた。主は、滅ぼすいなごの食った年を回復されただけではなかった。

第八の円　とびいなごの食った年が回復される

完全な献身と、主へのきよさが宣べ伝えられた。神は、さらに世から分かたれた民を召し出された。すっかり主にささげ、主に献身した生活を送るとはどういうことかを、もっと深く悟った民である。一段低いところにいる人々は、いつも一段高いところにいる人々と戦うもののようである。それでも、ふるい分けと分離の働きが進むにつれ、神はご自分の民を、さらに高いところへと導き出された。

ある教会が冷え、初めの愛から離れ（黙示録二・四）、あるいはさらに高い真理と戦うと、その教会は霊的に後退した。ある教派が、主から与えられた光のうちを歩むのを拒んだり、組織を作って人による支配を打ち立て始めたりすることがあった。すると主はすぐに、ただその壁をまたいで出て行かれた。そして、彼らを形式と儀式のうちに置き去りにし、「召し出された者のうちから、さらに召し出された」小さな群れを連れて行かれたのである。多くの場合、記録する御使は、はやりの教会の戸にこう書かなければならなかった。

「あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる」（黙示録三・一）、あるいは「あなたがたは信心深い様子をしながら、その力を否定している」（第二テモテ三・五）。けれども、働きは止まらなかった。どこかで人々が祈っていた。どこかで、飢え渇いた心の人々が、小さな家での祈祷会や街角に集まっていた。そして、木には柔らかな若枝と枝が伸び出していた。献身ときよさが宣べ伝えられ、とびいなごの食った年が回復されつつあったのである。

ジョン・ウェスレー

ウェスレーは、メッセージを託された人であった。彼もまた迫害を受けた。そのころ、忠実な従う者たちは、街角で説教をして、石を投げられ、腐った卵をぶつけられた。攻撃されても、打ち負かされはしなかった。神の力は、なつかしい昔のメソジスト教会に、またチャールズ・フィニーの集会に、驚くべき仕方で現れた。男も女も神の力に打たれて倒れた。ときには、床一面に、主の力に打たれて倒れた人々が横たわっていた。「時に応じて」与えられる食物を宣べ伝えた人々には、しるしと奇跡が伴った。

これらの教会は、イエスにあって、信心深く、祈りに満ちた、力強い生活を送っていたあいだは、迫害を受けた。けれども、彼らもまた、前の人たちと同じ冷えた形式的な状態に流れ始めると、御霊の力と現れは、彼らのところから引き揚げ始めた。屋上の間が夕食会の部屋に、祈祷会が音楽会に取って代わられるとき、御霊は悲しんで去って行かれる。それぞれの群れが組織を作り、違いの壁を築き始めると、神はまたその壁をまたいで出て行かれ、別の分かたれた民を召し出された。神のために、喜んで苦しみ、犠牲を払う民である。

やがて、ウィリアム・ブースが決断を迫られる日が来た。妥協するか、それとも神が与えてくださったさらに大いなる光に従うか、である。彼が一瞬ためらったとき、人であふれたその教会のバルコニー席から、妻が呼びかけた。「いいえと言いなさい！　ウィリアム」

そして、ウィリアム・ブースは「いいえ」と言い、妥協を拒んで、自分に与えられたメッセージを宣べ伝えに出て行った。救世軍の初めのころ、彼らは人気が

なく、迫害を受け、風変わりな民であった。前に述べたほかの人々が、初めはそうであったのと同じである。彼らもまた、石を投げられ、牢に入れられた。殉教した者さえいた。けれども、悪魔もその使たちも、神と、その回復の働きを止めることはできなかった。救世軍の初めのころには、男も女も神の力に打たれて倒れるのを見るのは、珍しいことではなかった。彼らのうちのある人々は、聖霊を受けて、他国の言葉で語った。夜通しの祈祷会があり、主の前で踊ることがあり、彼らのうちには大いなる力が現れた。預言のとおり、彼らが世から分かたれたこの聖なる生活を送っていたあいだは、迫害を受け、世の人気がなかった。次に、神に豊かに祝福されたホーリネス教会が起こった。主はそのうちで力強く働かれた。

この愛する人々の多くは、主が教会に回復しようとしておられたものを、もうすべて回復されたと思った。そして、主が自分たちのために備えておられるものを、すべて持っていると信じた。けれども、そうではない！　神はこう言っておられた。

「群がるいなご、とびいなご、滅ぼすいなご、かみ食らういなごの食った年を、わたしは回復する」これは当然、す、べ、て、を意味していた。ところが、ここまでで回復されたのは、滅ぼすいなごととびいなごの食った年だけであった。群がるいなごとかみ食らういなごの食った年は、どうなるのか。神が「すべて」と言われるとき、それはすべてという意味なのか、それとも半分だけなのか。もちろん、すべてという意味である。だから、次はこうなった。

第九の円　群がるいなごの食った年が回復される

それまでの年月にも、幾人かの聖徒たちが、聖書の時代のように聖霊を受けて異言を語っていた。けれども、教会全体には、群がるいなごの食った年（第三の円）、言いかえれば聖霊のバプテスマは、たいして回復されていなかった。だから、これが次に回復されることになった。ペテロは預言者ヨエルの言葉を引いて、こう言っている。

『終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう』（使徒二・一七）ヨエルは言う。私たちに「前の雨」をほどよく賜った方が、私たちのために雨を、すなわち前の雨と「後の雨」とを、初めの月に降らせてくださる、と（ヨエル二・二三）。

後の雨

この後の雨が降り始めたのは、ほんの数年前のことであった。たぶん、あなたもウェールズの大いなる信仰復興を覚えているだろう。そこでは、エバン・ロバーツの説教のもとで火が下った。多くの人が救われ、聖霊のバプテスマを受けた。助け主である聖霊を受けた人たちは、他国の言葉で語った。

インドのムクティでは、宣教師のパンディタ・ラマバイが、インドの少女たちの一団といっしょに祈っていた。彼女たちが幾日も幾夜も祈りを続けていたとき、突然、御霊が彼女たちのただ中に注がれた。ペンテコステの日に注がれたのと同じようにである。ある少女の寝床の上に、目に見える火が現れたという。ほかの少女たちが火を消そうと水を汲みに行くと、それは聖霊の火であることがわかった。モーセが見た、燃えているのになくならないしばの火のようなものである（出エジプト三・二）。聖霊を受けたこの愛するインドの少女たちは、聖霊を受けたとき、御霊が語らせるままに、他国の言葉で語った。一人の少女は、英語で語った（彼女は一度も英語を学んだことがなかった）。彼女を通して語られたのは、次のメッセージであった。

「イエスはまもなく来る。主に会う備えをせよ」そして、この大いなる信仰復興は、どこまでも広がっていった。ほとんど同時に、御霊は、私たちのアメリカ合衆国に、イングランドに、カナダに、アフリカに、中国の宣教師たちの上に、また海の島々に注がれた。世界じゅうに及ぶ信仰復興が、これほど速く、これほど同時に広がったことは、かつてなかった。御霊は、数えきれない場所で、祈る群れの上に注がれた。聖霊が人のうちに入って来られることなど、それまで一度も聞いたことのない人々である。どの場合にも、一つの例外もなく、聖霊を受け

た人々は他国の言葉で語った。聖書の時代に受けた人々とまったく同じであった。後の雨が地に降っていたのである。

聖霊を受けるには、自分を空にし、へりくだらなければならなかった。貧しい者も富んだ者も、黒人も白人も、女主人も女中も、へりくだって心を尽くして求めたとき、同じように聖霊を受けた。受けた人々は、御霊に満たされた聖徒のほかにはだれにもできない仕方で、主をほめたたえ、その御名をあがめた。聖霊を受けた集まりの上を、栄光の波が、賛美の洪水が押し寄せた。この大いなる信仰復興を止めるすべはないように思われた。

攻撃される後の雨の真理

悪霊と人は、滅ぼすいなごとびいなごの食った年が回復されることと戦った。同じように今度は、群がるいなごの食った年が回復されることと、新たな勢いで戦った。またも歴史は繰り返した。一段低いところにいる聖徒たちは、へりくだろうとせず、一段高く進んだ人々と戦った。そして多くの人が、光のうちを歩むことを拒んだ。失われたものを「すべて」回復すると約束されたとき、神は本当にそのとおりの意味で言われたのだということを、彼らは悟らなかった。主が、あらゆる力と御霊の栄光をまとった完全な教会を迎えに来られるという事実を、彼らは見失った。聖霊のバプテスマは今の時代のためのものではないと言いきる人さえいた。その人々は、私たちが今も聖霊の時代に生きており、イエスが来られるときまでそうであることを、わかっていなかったのである。

説教者たちは説教壇に駆け上がり、聖書のとおりに聖霊を受けた人々を非難し始めた。「狂信の火だ！　興奮だ！！　催眠術だ！　偽りの教えだ！」などと叫んだのである。ありとあらゆる呼び名が、彼らに投げつけられた。ああ、責め立てるこの愛する人々の目の、なんと見えていないことか。ほんの数年前に、自分たちが受けた光のために迫害されていた人々が、今度は自分たちが、さらに大いなる光へと進んで行く人々を迫害していたのである。御霊の注ぎを非難する刷り物が印刷され、名高い説教者たちが演壇に上ってそれを糾弾した。けれども、神が聖霊のバプテスマを回復され、後の雨を注がれるのを、彼らは止めることができなかった。以前の迫害者たちが、救いと主へのきよさの回復を止められなかったのと同じである。

聖霊と戦う者は霊的に後退する

聖霊と戦い、戸にかんぬきを掛け、不信仰の傘を広げた人々は、たちまち霊的に干からび始めた。かつて神のために燃え、きよさを宣べ伝えていた集会や教会があった。「それがなければ、だれも主を見ることはできない」きよさである（ヘブル一二・一四）。その集会や教会も、聖霊を拒んだとたんに、力を失い始めた。ああ、後の雨としてのこの御霊の注ぎこそ、自分たちに必要なもの、自分たちが待ち焦がれてきたものだということが、なぜ彼らにはわからなかったのだろう！　なぜ、ただへりくだって、彼らと「共に」おられた御霊に、今度は彼らの「うちに」来ていただき、自分を聖霊の宮としていただくことができなかったのだろうか（ヨハネ一四・一七、第一コリント六・一九）。けれども、どんな攻撃も迫害も、清くへりくだった心で熱心に求める人々の上への御霊の注ぎを、消すことはできなかった。

使徒行伝二章四節のとおりに、他国の言葉で語るという聖書的なしるしを伴う聖霊の注ぎと戦うのは、ちょうど、ほうきを手にした人が、大西洋の大波を掃き返そうとするようなものであった。一か所で掃き返しているあいだに、波は数えきれないほかの場所から押し寄せる。そればかりか、満ち潮の押し寄せる所に長くとどまって引き下がらなければ、波はまもなく彼を呑み込み、彼も「その仲間」になってしまう。ハレルヤ！

ほうきで大洋の潮を止めることはできない。同じように、攻撃によって後の雨が降るのを阻むこともできない。神がこう語られたからである。『終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう』（使徒二・一七）。ああ、神と戦うのをやめなさい。そして、心を開いて、神の賜物である聖霊を受け、迎え入れなさい。

この十二年のあいだに、何十万という飢え渇いた求める人たちが聖霊を受けた。そして、いつでも、どこでも、聖霊が入って来られると、聖霊を受けた人々は異言を語り、神をあがめた。

こうして、図の第九の円で、群がるいなごに食われた葉が再び木に回復されるのを、私は幻のうちに見た。第七と第八の円で、多くの人が、主が完全な救いときよさを回復されたとき、自分たちのためのものはすべて手にしたと信じた。それと同じように、今、御霊のバプテスマを受けた多くの人が、主が自分たちのために備えておられるものを、すべて持っていると信じた。彼らはまじめに信じた。いったん御霊に満たされて他国の言葉で語ったからには、主が自分たちのために備えておられるものを本当にすべて持っているのだ、と。そして、それ以上を求めるのをやめてしまった。

けれども、これは教会が失ったもののすべてではなかった。だから、回復されるもののすべてでもなかったのである。

第十の円　かみ食らういなごの食った年が回復される

父は、ひとり子イエスという賜物を世に授けられた。イエスは、父の約束である聖霊という賜物を、信じる者に授けてくださる。それと同じように、今度は聖霊が、ご自分を受ける者に授ける賜物を持っておられる。第一の円に見える御霊の九つの賜物と実が、今、再び木に回復されつつある。祝福された主の子供たちの多くは、救いと献身のところで止まってしまい、聖霊を受けずにいる。また、聖霊を受けた人の多くも、そこで止まってしまい、さらに大いなる賜物を熱心に求めずにいる。

聖霊を受けたあと、神のみこころがもっと自分の生活のうちに行われるよう求めるとき、もっと多くの聖霊をくださいと願ってはならない。聖霊を受けたのなら、聖霊のすべてを受けているからである。聖霊は分けられる方ではない。あなたは聖霊を受けたか、受けていないか、どちらかである。だから、聖霊が入って来られ、住まいを定められて、使徒行伝二章四節のように、あなたを通して他国の言葉で語られたのなら、内に住んでおられる御霊に、もっと身をゆだねることができるように祈りなさい。

ある人は言う。「ああ、賜物を求めてはいけない。与え主を求めなさい」けれども、愛するみなさん、御霊を受けたのなら、あなたは与え主を受けたのである。そして、パウロはこう言っている。

「更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。教会の徳を高めるために、それを豊かにいただくように励みなさい。異言を語る者は、教会の徳が高められるように、自分でそれを解くことができるように祈りなさい。預言することを熱心に求めなさい」など（第一コリント一二・三一、一四・五、一二～一三、三九）。敵がそれをまねようとしてきたとしても、本当の、本物の預言の賜物はある。霊を見わける力が必要である。いやしの賜物なども、私たちのうちにあるべきである。異言の賜物もまた与えられる。聖霊のバプテスマを受ける人はみな、御霊が語らせるままに異言を語る。けれども、外国の人に思いのままに語ることができるほどの、本当の異言の「賜物」を受ける人は、ごくわずかである。それでも、この賜物はある人々に授けられてきた。私たちは、この賜物を受けた人々に会ったことがある。その人々は、一生に一度も学んだことのない言葉で外国の人に語り、それが通じるのである。そういうとき、メッセージは、イエスと、その近い来臨についてである。

賜物と実が再び木に現れつつある

第十の円の実は、まだ十分に熟していないかもしれない。けれども、私たちが祈り、御霊に身をゆだねるなら、御霊は思いのままに各自に分け与えてくださり（第一コリント一二・一一）、御霊の賜物と実を、私たちのうちに目に見えるものとしてくださる。

イエスはまもなく来られる

力と栄光をまとった完全な教会を迎えに来られるのである。その枝に、あらゆる賜物と実が、甘く、豊かに熟し、完全に育ってたわわに実っている、あの完全な木を迎えに来られるのである。ああ、目を覚まして、完成を目ざして進もうではないか（ヘブル六・一）。冬は過ぎ去り（雅歌二・一一）、前の雨の降る春も過ぎた。夏も過ぎようとしており、後の雨はもう長く降り続いている。刈入れは近く、主は、熟して育ちきった実を探しておられる。救いという根と幹のゆえに、

神をほめたたえよ。きよさと献身という、堅く強い大枝と枝のゆえに、神をほめたたえよ。緑の葉のゆえに、聖霊のゆえに、神をほめたたえよ。けれども、来臨の前のこの終わりの日々に、主はご自分の木に実を求めておられる。青い、未熟な実ではなく、完全な実である。主は今、こうささやいておられる。

「わたしは、食われた年をすべて回復する」

愛するみなさん、行く手には、まだ取るべき地がある。あなたの生活のうちに、愛の実を、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制とともに結ばせていただきなさい（ガラテヤ五・二二～二三）。ペンテコステに立ち返り、さらに、神のみことばに記されたペンテコステの力と栄光の満ちあふれるところまで進もうではないか。イエスはまもなく、本当にまもなく、待っているご自分の完全な教会を迎えに来られるからである。それは世に汚されていない主の花嫁、傷のない完全な実をつけた主の木である。まもなく主は私たちを引き上げ、天の園に移し植えてくださる。そこでは、私たちの葉はしぼまず、実も朽ちることがない。

矢は今、ほとんど頂に達している。イエスが星のちりばめられた天の床を突き破り、愛する者たちのために下って来られるときが近づいている。時の大時計は、定められた時刻にほとんど届いている。あなたの生活のうちで、何ものにも備えの働きを妨げさせてはならない。御霊を消すことのないように気をつけよう（第一テサロニケ五・一九）。

かつて神に用いられたほかの人々が陥ったのと同じわなに陥らないように、気をつけよう。それは、形式主義のわな、冷たさと組織のわなである。自分の周りに壁を築き、自分のからだのほかの肢体を認めないことである（私たちは皆、一つの御霊によってバプテスマを受け、一つのからだとなったのだから）。もし私たちが壁を築き、こうした形式主義のわなに陥るなら、神は、昔そうされたのと同じように確かに、私たちの壁をまたいで出て行かれ、別の民を選ばれるであろう。神はご自分の栄光をほかの者に与えることはされない（イザヤ四二・八）。愚かな者を選んで力ある者をはずかしめ、弱い者を選んで強い者をはずかしめられるのである（第一コリント一・二七）。

だから、完成を目ざして進みなさい。神の最善に届かないところで止まってはならない。あなたが冠を下に置くなら、ほかの人がそれを取る（黙示録三・一一）。数は満ち、一人も欠けることはない。神の基準まで、どこまでも進み続けた人々だけが引き上げられるのである。あなたが神を疑ってきたのなら、もう疑うのはやめなさい。神は、食われた年をすべて回復しようと待っておられる。そして、あなたを、イエスを待ち望んで備えのできた、あの栄光に満ちた完全な木の群れのうちに、立たせようと待っておられるのである。アーメン。

あなたには聖霊が必要である

私たちは今日、聖霊の時代の最後の時刻を生きている。だから、助け主の働きと、助け主が入って来られることとを、宣べ伝えるだけでなく、理解し、受け入れることが何よりも大切である。

今日の聖徒も聖霊のバプテスマを受ける必要があるのか、とあなたは尋ねるだろうか。

バラには、日の光だけでなく雨も必要ではないか。

花にとっての太陽、それが、血で洗われたご自分の子供たちにとってのイエス、義の太陽（マラキ四・二）である。渇いて干からびた庭にとっての雨、それが、成長していく神の子供にとっての聖霊である。

救いは、聖霊のバプテスマではない。

聖化は、聖霊のバプテスマではない。

救いと聖化は、イエスと、その尊い、罪をあがなう血とによって成し遂げられる。きよさを一度の、あるいは二度のはっきりした体験として教えられてきたかどうかは別として、このことには、だれもが同意するはずである。

バプテスマのヨハネ（マタイ三・一一）とペテロ（使徒二・三八）が語ったバプテスマとは、きよめられた空の器に助け主が来られることである。それによって、受ける人のからだが聖霊の宮となる（第一コリント六・一九）。聖霊が来られるのは、イエスをあがめ、イエスに栄光を帰すためである。また、魂を奉仕のために整え、上からの力を授けてくださるためである。その力とは、あかしをする力、祈る力、これまでになく打ち勝つ力である。さらに、その魂を主の来臨に備えさせてくださるためである。すべての罪からきよめるのは、イエスの血である（第一ヨハネ一・七）。聖霊は、きよめられて待っている心に入りたいと切に願っておられる。

ある人々は、軽々しくこう言いきってきた。

「私にはイエスがおられる。だから聖霊は必要ない」けれども、愛する人よ、あなたには聖霊が必要なのである。イエスご自身がこう言われた。

『聖霊を受けよ』（ヨハネ二〇・二二）、また『もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう』（ヨハネ一四・一五～一六）

内に住まわれる御霊が必要であることを認めずに、ひとりで主に会おうと出かけるのは、どういうことか。それは、子供が、自分には知恵も学問も十分にあるから、読み書きを教えてくれる先生はいらないと言い張るようなものである。あるいは、リバプール行きの船に乗り込んで、船長の慣れた手も海図もいらないから自分で舵を取ると言い張るようなものである。

愛するクリスチャンよ、文字どおりの、手で触れるほど確かな仕方で聖霊が入って来られること。それこそ、あなたに必要なもの、あなたが何年も待ち焦がれてきたものである。これは疑いのないことである。救いのゆえに、尊い血を流してくださったイエスのゆえに、主に感謝しなさい。けれども、覚えておきなさい。ノアとその家族を波の上に持ち上げた箱舟は、三つの階がそろって完成した（創世記六・一六）。それと同じように、三位一体の神、父と子と聖霊が力を合わせて、一つの箱舟を造り上げられたのである。まもなくこの地を襲う患難の波の上に、ご自分の民を引き上げる箱舟である。

創世記からマラキ書までの旧約聖書に記されている父の時代は、過ぎ去った。四つの福音書に記されている御子の時代、御子がこの地を歩まれた時代も、終わった。聖霊の時代は、ペンテコステの日に始まった（使徒二章）。この時代は、教会とからだの肢体が証印を押され、主に会うために引き上げられるまで終わらない。その聖霊の時代が、今、完成に近づいている。この聖霊の時代は、旧約聖書の預言者たちを通して、父が約束しておられたものである。イザヤ書二十

八章十一節は、主が「どもる唇と異国の舌とをもってこの民に語られる」と告げている。また、私たちの神は、預言者ヨエルを通して語り、聖霊のバプテスマを約束して、こう言われた。

「終わりの時には、わたしの霊をすべての人に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をする。（中略）わたしの霊をしもべ、はしために注ぐ。主はあなたがたのために雨を、前の雨と後の雨とを、初めの月に降らせられる」（ヨエル二・二八～二九、二三）

「後の雨の時に、雨を主に請い求めよ」と、別の預言者は書いている。「主は輝く雲を送り、野の青草をおのおのに賜わる」（ゼカリヤ一〇・一）

バプテスマのヨハネはその幻をとらえ、ヨルダンの岸辺に押し寄せた群衆に向かって預言した。

『わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人は（中略）聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』（マタイ三・一一）

主がなさることについて、ヨハネがほかでもないこの預言を選んだことは、なんと意味深いことだろう。ヨハネはこう言うこともできたはずである。

「この方は来られると、病人をいやし、死人をよみがえらせ、群衆を養われる。あるいは、打たれて木にくぎづけにされる」これらのことはどれもすばらしく、これほど非凡な説教者が告げるにふさわしいことであった。けれども、神が、霊感を受けたヨハネの口を通してイエスについて語られたのは、次のことであった。

「この方は来られると、聖霊と火とによってあなたがたにバプテスマをお授けになる」

それから、イエスが来られた。イエスは聖霊によって宿られ、その生涯は、誕生から復活まで、御霊に優しく包まれ、御霊と結ばれていた。そのイエスが、ヨルダンでヨハネからバプテスマを受けられた。そのとき、御霊が『はとのような姿をとって』下られ、イエスの上にとどまられたのである（ルカ三・二二、ヨハネ一・三二）。

イエスでさえ、働きを始められる前に、この力を授けられることが必要であった。それなら、今日のあなたや私には、なおさら御霊が必要である。多くの人がこう尋ねてきた。

「イエスは聖霊を受けられたとき、なぜ異言を語られなかったのか」語られたかどうか、私たちは知らない。イエスは、『天においても地においても、いっさいの権威を授けられた』方であった（マタイ二八・一八）。けれども、確かにわかっていることがある。使徒行伝二章に記されているペンテコステの日に、聖霊の時代の幕が上がるまで、だれかが異言を語ったという記録は一つもないのである。そして、聖霊が来られたまさにその瞬間に、聖霊を受けた人々は『御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』のである（使徒二・四）。

四つの福音書を読んでいて、主が聖霊を受ける必要をますます強調しておられることに気づき、心を打たれたことはないか。実際、主がこの地から足を離され、彼らから天に上げられる前に語られた最後の言葉は、聖霊についてであった。ルカはこう記している。

『見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい』（ルカ二四・四九）マルコはこう記している。

『信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り』など（マルコ一六・一七）。使徒行伝一章には、こう記されている。

『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。（中略）ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』（使徒一・五、八）次の節は、イエスがこれらのことを語り終えられると、『彼らの見ている前で天に上げられ』たと告げている（使徒一・九）。

主のお心に最後まであったこと、主が弟子たちの心に刻みつけようとされたことは、聖霊を受ける必要であったかのようである。ああ、愛するクリスチャンよ、どうしてこれ以上ためらっていられようか。今日、急いで主のもとに行きな

さい。尊い血のもとで、主に向かって心を上げ、賛美と感謝をささげなさい。求めなさい。そうすれば受ける。捜しなさい。そうすれば見いだす。門をたたきなさい。そうすれば、あけてもらえる（ルカ一一・九）。地上の親が子供に良い贈り物をするよりも、主は本当にもっと喜んで、求める者に聖霊をくださるからである（ルカ一一・一三）。

受けるまでとどまっていなさい

使徒は十二人しかいなかったが、主には、この地におられたあいだ、多くの弟子や従う者がいた。主はこの弟子たちに、全世界に出て行って福音を宣べ伝えるように命じられた（マルコ一六・一五）。けれども、上から力を授けられるまでは、まずエルサレムにとどまっているようにと言いつけられた（ルカ二四・四九）。

復活ののち、主は多くの人に姿を現され、その命令を繰り返された。

「行きなさい。けれども、わたしが天の父のもとから遣わす聖霊を受けるまでは、とどまっていなさい」

その命令を聞いた人がどれほどいたのか、私たちは知らない。少なくとも五百人はいた（第一コリント一五・六）。けれども、その五百人のうちでさえ、三百八十人が、もっと良い道を知っていたことは確かである。彼らはイエスとともに歩んだではないか。病人がいやされ、奇跡が行われるのを見たではないか。彼らには自分の体験で十分であった。約束されたこの力のために、なぜわざわざエルサレムに上って、十日もとどまらなければならないのか。

けれども、百二十人ほどの忠実な少数の人々がいた（使徒一・一五）。彼らは、主をひたすら信じ、主の言葉をそのまま受け取るほど素直であった。そして、助け主が来られるまでそこにとどまるために、急いでエルサレムに入ったのである。

その小さな群れが、右にも左にも目をくれず、屋上の間に向かって通りを急いで行く姿を、思い描いてみたことがあるか。彼らの心にあったのは、ただ一つの思い、ただ一つの願いであった。主が命じられたとおり、聖霊を受けることである。

目を閉じて、思い描くことができないだろうか。ペテロが急いで角を曲がって来る。その目には、期待と希望の光が宿っている。だれかが彼を呼び止めて、こう言ったかもしれない。

「ペテロ、そんなに急いでどこへ行くのだ」

「屋上の間へ行くところだ。聖霊の賜物を受けるまで、そこにとどまるのだ」

「なんだって、ペテロ、まさか自分に聖霊が必要だと言うのではあるまいな。あなたの手で大いなる奇跡が行われたではないか。イエスのために国じゅうを宣べ伝えて回ったではないか。病人があなたのところに連れて来られ、あなたが命じると悪霊が出て行ったではないか。きっと思い違いをしているのだ。あなたに聖霊は必要ない。それに、何か新しい体験を求めてひざまずいているところを人に見られたら、あなたは立場を失うかもしれない。信仰から離れたと思われるだろう」けれども、ペテロがこう答えるのが聞こえるような気がする。

「いや、必要なのだ。本当に聖霊の力が必要なのだ。私の生活には、ひどく欠けたところがある。私が主を否んだことを聞かなかったのか。いちばん大事な試練の時に、私はつまずいたのだ。止めないでくれ。行かなければならない。私には聖霊が必要なのだ」こうして、ペテロは「受けるまでとどまる」ために、階段を上って行く。

まもなく、ほかの足音が聞こえ、角を曲がってトマスがやって来る。

「トマス、けさはそんなに急いでどこへ行くのだ」

「屋上の間へ行って、そこで聖霊を受けるのだ。わが主は父のもとに上って行かれた。私たちの上に聖霊を注いでくださるためだ」

「だが、トマス、まさかあなたのような根っからの疑い屋が、そんな体験を受けられると思っているのではあるまいな」

「受けられるとも。イエスに栄光あれ。約束は私にも与えられているのだ。過去はすべて血におおわれている。これこそ、私の心と思いから疑いを永久に追い払うのに必要な力なのだ」そう言って、トマスは通りを急いで行き、屋上の間の階段へと曲がって入って行く。

トマスの姿が見えなくなるかならないうちに、柔らかで熱のこもった二つの声が聞こえる。長く流れるような衣をまとって、マリヤとマルタが角を曲がって来る。その目の光と声の優しさから、二人が愛するイエスのことを話しているのは、すぐにわかる。

「マリヤ姉妹、マルタ姉妹、ちょっと失礼します。けさはどちらへ行かれるのですか」

「私たちはエルサレムに来ました。主のご命令に従い、飢え渇いたほかの人たちと集まって、待つためです。主が上から必ず遣わしてくださる助け主を受けるまで」

「ああ、マリヤ」と、だれかがいさめる。「まさか、認めるつもりではないでしょうね。あなたはイエスのあれほどおそば近くで暮らし、その足もとにすわって教えを受けた人です。そのあなたが、ほかの体験のためにとどまる必要があるなどと。マルタならまだわかります。でも、あなたがですか、マリヤ！」

「ああ、そうなのです、兄弟。私のからだのすみずみまでが、父が約束されたこの賜物を必要として叫んでいるのです。これは体験以上のものです。聖霊が入って来られることなのです。聖霊は私たちを導いて、あらゆる真理に入らせ、『言葉にあらわせない切なるうめき』をもって、私たちを通して祈ってくださいます。イエスのものを受けて私たちに知らせ、きたるべきことを示し、上から力を授けてくださるのです（ヨハネ一六・一三〜一四、ローマ八・二六、ルカ二四・四九）。

急いでいてごめんなさい。むだにする時間はないのです。さあ、マルタ、行かなければ」

あの小さな百二十人の群れは、なんという行列をなしたことであろう。向こうにはマグダラのマリヤが行く。反対の方からはヤコブとヨハネが来る。アンデレとピリポ、バルトロマイとマタイ、ヤコブとユダもいる。だが、耳を澄ませ！またも声と、敷石を踏む足音が聞こえる。角を曲がって来るのは、イエスの母マリヤである。イエスの兄弟たちの腕にすがっている。頭は少し垂れ、青ざめた顔のしわには、近ごろその心を刺し貫いた苦しみとつるぎが表れている（ルカ二・三五）。けれども、その目には、新しい光と栄光に満ちた希望が輝いている。

「わが子たちよ、うなだれてはなりません。気を落としてはなりません。あなたがたの兄であり、私の子であるイエスが、はっきり告げられたのですから。私たちを捨てて孤児とはしない、と。自分が去って行けば、ほかの方を、すなわち聖霊を送る、と。その方が来られたら、私たちをあらゆる真理に導いてくださる、と（ヨハネ一四・一八、一六・七、一三）」

「でも、マリヤ、清いおとめよ、まさか、あ、な、た、が聖霊を必要とするはずはないでしょう。あなたは神のみこころにすっかり身をささげ、ゆだねきっていました。だから、誤解も、そしりも、迫害も、ものともしませんでした。当時の習わしどおり市場の広場に引き出され、石で打ち殺されるおそれさえあったのに、御使の顔を見上げて、こう言うことができたのです。

『わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように』（ルカ一・三八）

苦しみと主の死とを通してきよめられたあなたが、マリヤ、この聖霊のバプテスマが必要だと本当に感じていると言うのですか」

「ああ、そうなのです。イエスが父のもとへ行かれた今ほど、助け主を必要と感じたことはありません。でも、私が御霊を必要と感じていることを別にしても、私には主のご命令だけで十分です。主は、私に御霊が必要だと言われました。御霊が来られるまでとどまっているように命じられました。イエスがいちばんよくご存じだったのです」マリヤたちは気品のある会釈をして先へ進み、まもなく屋上の間で、ほかの人々とともに声をあげて、祈りと願いをささげる（使徒一・一四）。

イエスが天に上げられてから続いた十日間に、どれほど心が探られ、へりくだらされたことか。神の愛する御子のみこころに沿う者にしていただこうと、どれほど叫び求めたことか。だれがそれを言い表し、思い描くことができようか。聖書には、彼らが『心を合わせて』いたとある（使徒一・一四）。ペテロはトマスの失敗を指さしはしなかった。また、だれかがペテロに告発の指を突きつけて、こう言ったとも書かれていない。

「あなたにここにいる資格はない。主を否んだのだから」

過去はすべて血におおわれている。過去の失敗は認められ、告白され、ゆるされている。地上の気苦労も、務めも、外の忙しい世の重圧も、締め出されている。彼らは心を開いて、ただ素直に、へりくだって、祈りと願いをもって主の前で待っている。主のみことばは決してむなしくならないこと、求める者は必ず受けることを知っているからである。

『五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、

突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。

すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』（使徒二・一～四）

彼らは条件を満たしていた。主はみことばをたがえられなかった。助け主が来られたのである。

信じる人よ、あなたは今日、父の約束を求めて主の前にとどまっているか。自分の力の尽きるところまで来ているか。空になり、きよめられ、へりくだって、イエスの尊い血のもとに低く身を伏せているか。昔の聖書の聖徒たちのように、祈りと願いをもって待っているか。そうなら、主はすぐにあなたに会ってくださる。神の時は今である。あなたがいつとも知れない明日まで御霊を待つことは、神のみこころではない。あなたが心を尽くして神を求める日に、あなたは神を見いだす（エレミヤ二九・一三～一四）。

あなたは過去に失敗したことがあるか。いちばん忠実に立つべきときに、主を否んだことがあるか。疑い深いトマスであったか。強さと力が必要だと感じているか。あなたの魂は、イエスとみことばについてのさらに大いなる啓示と、さらに大いなる幻と、さらに広い視野とを求めて叫んでいるか。それなら、上から力を授けられるまで、とどまっていなさい。

信じる人よ、あなたは過去に、魂を勝ち取ることに力強く用いられてきたか。あなたの祈りに答えて、病人がいやされ、悪霊が追い出されたか。昔のマリヤのように、イエスの足もとにすわって学んできたか。救いの喜びが、尊いものに思えてきたか。あなたとともにいて、ときには魂が喜びにあふれるまで喜びの油を注いでくださる御霊の臨在が、尊いものに思えてきたか。

それなら、神に感謝しなさい。けれども、あなたもまた、ペテロとヨハネ、トマスとバルトロマイ、ほかのすべての使徒たち、イエスの母マリヤ、ほかの婦人たちやイエスの兄弟たちと同じように、聖霊が必要なのである。ああ、あなたにはどれほど聖霊が必要なことか！　あなたのすぐ前で、戸が開かれつつある。カナンの地、新しい地、力と栄光の地が、すぐ向こうに広がっている。イエスはまもなく来られる。主が現れられる前に、メッセージを広く宣べ伝え、魂を刈り集めなければならない。

主はあなたに呼びかけておられる。行って、福音を宣べ伝え、周りのすべての人にあかしをしなさい、と。行きなさい。けれども、聖霊が入って来られ、住まわれるまで、とどまっていなさい。行きなさい。けれども、上から力を授けられるまで、まずエルサレムにとどまっていなさい。

聖霊のバプテスマ

地上でのイエスのあがないの御業が成し遂げられ、天に上って行かれるお姿が見えなくなったとき、御使の手が雲の幕を引き寄せて閉じた。その幕が、再び開かれた。そして、イエスが「いつまでもあなたがたと共にいる」と言われた聖霊が、父の御前から遣わされたのである（ヨハネ一四・一六）。彼らは聖霊に満たされるやいなや、『御霊が語らせるままに』他国の言葉で語り出した（使徒二・四）。

そして、一同は御霊に満たされた。

その満たしからすぐに生じた結果、外に見えるしるしは何であったか。彼らは他国の言葉で語り出したのである。

ペンテコステの日、聖霊の時代の幕開けより前に、だれかが他国の言葉（学んだことがなく、自分にもわからない言葉である。第一コリント一四・二）で語ったという記録が、一つでもあるだろうか。ない。

そのころ、宗教上の祭りや儀式のためにエルサレムに集まっていた『信仰深いユダヤ人たち』が、大ぜい駆け集まって来た。そして、この素朴で無学なガリラヤ人たちが、自分たちの生まれた国々の言葉を話すのを聞いて、驚き、『あっけに取られ』、当惑した（使徒二・五～一二）。

人々は何に驚いたのか。何を不思議に思ったのか。激しい風の音にか。そうではない。

炎のような舌にか。そうではない。それはその後二度と記されていない。百二十人が満たされたあとに集まって来た人々が、それを見たかどうかさえ疑わしい。

では、何に驚いたのか。人々が驚き、不思議に思ったのは、この男たち女たちの上にとどまっていた超自然の力であった。その力によって、彼らは酒に酔ったかのようによろめき、ふらつき（使徒二・一三）、自分にもわからない言葉で語ったのである。

ペンテコステの日に聖霊の注ぎを見た人々は、今日と同じように、二つの部類に分かれた。

一つは、あざける人々であった。彼らはばかにして言った。「あの人たちは新しい酒で酔っているのだ（使徒二・一三）。さあ、行こう。こんな連中にはかかわらないことだ。狂信者だ。ただ興奮しているだけだ。宗教のことでこんなに騒ぎ立てて興奮するなんて、ばかげている。町じゅうが大騒ぎだ。まったくの狂信の火だ。あいつらは捕まえるべきだ」などと。

もう一つは、考える人々、すなわち思慮深く聡明な男たち女たちであった。彼らはこう言った。

「ちょっと待て。これには、きっと何かわけがあるにちがいない。この人たちの声の響き、魂からの叫び、顔に映っている喜びと愛、礼拝とあがめ。これには何かはっきりした理由があるにちがいない。何のわけもなく、あんなふうによろめき、ふらついているはずはない。見ている人たちにばかにされ、正気を失ったと思われることは、きっと承知しているはずだ。

金のためでも人気のためでもないなら、なぜあんなことをしているのか。みんながみんな愚か者であるはずはない。一人か二人なら、そう思うかもしれない。けれども、ここには百二十人ほどもいる。まさか、みんな気が狂っているはずはない。このことを調べて、その裏に何があるのか確かめてみよう。

教えてください。ああ、教えてください。そこにいる善良で幸せなみなさん、少しのあいだ叫ぶのも喜ぶのもやめて、答えてください。これは、いったい、どういうわけなのか（使徒二・一二）」

そこで、ペテロが立ちあがった。

「ペテロ、なぜ立ちあがるのだ。こわいのか、ペテロ。興奮して問い詰めるこの大群衆から、逃げ出そうというのか。主を否んだあの夜、小さな女中から逃げたように」

「逃げるだと。とんでもない！　もう二度と逃げはしない。私は聖霊と火とによるバプテスマを受けたのだ。聖霊は、上からの力を私に授けてくださった。恐れを取り去り、聖なる大胆さを心に、言葉を口に与えてくださった。だから、私の腹から生ける水が川となって流れ出るのだ（使徒四・一三）」

こうして、ペテロは十一人の者と共に立ちあがり（ああ、聖霊は、臆病な魂のうちに、まことの「イエスのために立て」を据えてくださる）、声をあげて言った。

「ユダヤの人たち、ならびにエルサレムに住むすべての人たちよ、このことを知ってもらいたい。わたしの言うことに耳を傾けてもらいたい。今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。そうではなく、これこそ、預言者ヨエルが預言していたことである。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。そして、あなたがたのむすこ娘は預言をし（中略）その時には、わたしの男女の僕たちにもわたしの霊を注ごう。そして彼らも預言をするであろう。また、上では、天に奇跡を見せ、下では、地にしるしを（中略）そのとき、主の名を呼び求める者は、みな救われるであろう』」（使徒二・一四～二一）

「イスラエルの人たちよ、今わたしの語ることを聞きなさい。ナザレ人イエスを（中略）あなたがたは不法の人々の手で十字架につけて殺した」（使徒二・二二～二三）

「なんだって、ペテロ、こんな大群衆に向かってそんなことを言って、恐ろしくないのか。あの連中はイエスの名を聞いただけで、歯ぎしりをし、しっしっと言うのを知らないのか。捕らえられ、むち打ちの柱に引いて行かれ、着物をはがれ、打たれ、石で打ち殺される危険に身をさらしているのが、わからないのか。あなたは臆病な男で、あの仲間の一人だと知られるのを恥じていたのではなかったか」

「いや、さげすまれ、迫害される、風変わりな少数の者の一人と呼ばれることを、もう決して恥じはしない。聖霊が来られて、私のこの生活のうちに住んでおられるのだ。私が話している言葉は、自分から話しているのではない。私がしている業も、自分からしているのではない。うちに住むために来られた聖霊が、言葉を語り、業をしておられるのだ（ヨハネ一四・一〇）。

このイエスを、神はよみがえらせた。そして、私たちは皆その証人なのである。それで、イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、これを注がれたのである。それは、あなたがたが見ているもの（酔っているように見える人々の、よろめくからだ）、また聞いているもの（他国の言葉で語ること）である（使徒二・三二～三三）」

この変えられた男は、聖霊の大いなる力のもとで、あまりに大胆に語った。それで、聞いた人々は『強く心を刺され』、ペテロやほかの使徒たちに言った。

「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」（使徒二・三七）

『すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。

この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである』（使徒二・三八～三九）

ペテロよ、遠くの者一同、主なる神の召しにあずかるすべての者に与えられている約束とは、何の約束なのか。

聖霊の約束である。あなたがたが見聞きしている、あのものである。

しかし、ペテロよ、その約束のどれほどが私たちに与えられているのか。まさか、異言を伴うこの大いなる力のすべてではあるまい。これは、時代の幕開けのためだけの、ユダヤ人のためだけのものではなかったのか。

けれども、ペテロは、そうではないと言う。「この約束は、遠くの者一同、主の召しにあずかるすべての者に与えられている。今やキリスト・イエスにあっては、ユダヤ人も異邦人もなく、奴隷も自由人もないからだ。私たちはキリストにあって一つであり、一つのからだとなるようにバプテスマを受けたのだ（使徒二・三九、ガラテヤ三・二八、第一コリント一二・一三）」

使徒行伝十章では、ペンテコステの日から八年後に、救いと聖霊のバプテスマの戸が異邦人に開かれる。四十四節でコルネリオの家に入って行くと、集会が開

かれている。コルネリオは、家族と僕たちと隣人たちを集めていた。ペテロが語る言葉、自分たちが救われる言葉を聞くためである。

『ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。

割礼を受けている信者で、ペテロについてきた人たちは、異邦人たちにも聖霊の賜物が注がれたのを見て、驚いた。

それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである』（使徒一〇・四四～四六）

この八年のあいだ、聖霊が入って来られる仕方は変わっていなかった。同じ聖書的なしるし、すなわち異言を語ることが、そのまま残っていた。その場には、ほかの国から来て別の言葉を話し、異言を聞いて益を受ける外国人はいなかった。それでも御霊は、ペンテコステの日と同じように、彼らを通して語られたのである。

使徒行伝十九章では、イエス・キリストと聖霊のバプテスマを宣べ伝える、新しい声が聞こえる。

「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」（使徒一九・二）

おや、あの声と顔には見覚えがあるようだ。この人を前に見たか、その声を聞いたかしたことがあるだろうか。

「失礼ですが、兄弟、あなたはタルソのサウロではありませんか。聖霊のバプテスマを受ける必要を宣べ伝えているのは、本当にあなたなのですか！　あなたはこういうことをすべて非難し、愚かなこと、許してはならないことと考えていたと思っていました。ステパノが石で打たれるのを満足そうに眺めたあと（使徒八・一）、このペンテコステの聖霊の人々をさらに迫害しようと、ダマスコへ馬で向かったではありませんか。そのとき、こんなばかげたことはすべて終わらせてやると言っていたではありませんか」

「そうです。私は以前、このクリスチャンたちを迫害していました。彼らはすっかり間違っていて、根絶やしにされるべきだと思っていたのです。けれども、それは私の目が開かれる前のことでした。

お聞きになりませんでしたか。彼らをさらにひどい目にあわせようと馬で向かっていた途中、主の光が私をめぐり照らしました。私は馬から打ち落とされ、死んだ者のように道のちりの中に倒れました。そして、太陽よりも輝く御顔をし、光よりも白い衣を着たイエスが来られ、私にこう語りかけられたのです。

『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』（使徒九・四）

その輝きを見たために、私は三日のあいだ目が見えませんでした（使徒九・九）。それから私は回心し、名もサウロからパウロに変わったのです。

そうです。今では私も彼らの一人です。あとでまたお話ししましょう。でも今は、集会を続けなければなりません」

弟子たちが水の墓に葬られるバプテスマの式のあと、六節では、パウロが彼らの上に手をおいている。そして、『聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した』と記されている（使徒一九・六）。ここでも、エルサレムやコルネリオの家と同じように、聖霊を受けた魂について最初に記されているのは、彼らが異言を語ったということであった。

使徒行伝八章十七節と十八節には、罪深く邪悪な魔術師シモンが出てくる。使徒たちが手をおいて信者たちが聖霊を受けたとき、そこに現れた大いなる力に、シモンは強く心を動かされた。そして、同じ力を買い取れることを望んで、使徒たちに金をさし出し、こう言ったのである。

「わたしが手をおけばだれにでも聖霊が授けられるように、その力をわたしにも下さい」（使徒八・一九）シモンが、ペンテコステの日に見ていた人々と同じものを見聞きしたことは疑いない。けれども、ああ、この力は金で買えるものではなかった。世界じゅうの金を集めても、買うことはできなかった。けれども、主の前に低く、真実にへりくだる者には、御霊が、『金を出さずに、ただで』、惜しみなく与えられるのである（イザヤ五五・一）。

ああ、教えてほしい、ペテロとパウロよ。教えてほしい、ヨハネとヤコブよ。また、聖霊が力と栄光を伴って力強く入って来られるのを受けた、すべての人々よ。この二十世紀の私たちも、これと同じ尊い賜物を受けることができるのか。それとも、聖霊は使徒の時代に、ご自分の力をすべて使い果たしてしまわれたの

か。あなたがたは、この超自然の驚くべき祝福をすべて使い尽くしてしまったのか。それとも、今日の私たちのために、十分な分を残しておいてくれたのか。

「もちろん、受けられるとも」と、彼らは声をそろえて答える。「天は破産してはいない。天の倉は今も満ちている。聖霊は、その力を少しも失っておられない。約束は、遠くの者一同、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者に与えられているのだ（使徒二・三九）。主は『その方が来ると、いつまでもあなたがたと共にいる』と言われたではないか（ヨハネ一四・一六）。

疑うのはもうやめなさい。心を開いて、後の雨の時に、雨を主に請い求めなさい（ゼカリヤ一〇・一）。預言者ヨエルの言葉を思い出しなさい。『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう』（使徒二・一七）。また、思い出しなさい。大祭司が至聖所に入るときには鈴が鳴り、大祭司が出て来るときにも、また鈴が鳴った（出エジプト二八・三三～三五）。

イエスが高い所に上られたとき、鈴が鳴り、人々は異言を語って神をあがめた。今、私たちの大祭司であるこの同じイエスが、待っているご自分の教会のために、再び出て来ようとしておられる。地上では鈴が鳴り、後の雨が降っている。昔ながらの力を受けた人々が、再び他国の言葉で語っている」

聖霊の働き

父なる神は、旧約聖書の中で、御子が現れられるときの来ることを、ますます力を込めて約束された。それと同じように、イエスもまた、働きの終わりの数か月のあいだに、ご自分が去って行かれるときには世に賜物を、すなわち聖霊を授ける、と約束された。去って行かれるときが近づき、カルバリの十字架の影が、恐れる弟子たちの心に落ちていった。それにつれて、イエスはますます、ご自分の賜物である助け主を受けることがどれほど必要で大切かを、ご自分の民の思いに刻みつけようとされた。

主は何度も御霊を約束し、御霊が来られることの大切さと、私たちの生活の中での御霊の務めを説明された。罪を悟らせることからバプテスマまで、さらに完全に至るまでの務めである。それがあまりにたびたびであったので、今ここでは、時間と紙面の都合で、そのうちのいくつかを引くことしかできない。

ヨハネによる福音書の第十六章で、イエスはこう言われた。『わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、それをあなたがたにつかわそう』（ヨハネ一六・七）。ここでも、ほかの箇所でも、イエスは、私たちが聖霊を受けなければならないさまざまな理由を数え上げ始められる。そして、この世での聖霊の務めを、さらに詳しく説明し始められる。

（一）『それがきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう』（ヨハネ一六・八）

（二）『けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう』（ヨハネ一六・一三）

（三）『それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り』（ヨハネ一六・一三）

（四）『きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう』（ヨハネ一六・一三）

（五）『御霊はわたしに栄光を得させるであろう』（ヨハネ一六・一四）

（六）『わたしのものを受けて、それをあなたがたに知らせる』（ヨハネ一六・一四）

（七）『わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、それはわたしについてあかしをするであろう』（ヨハネ一五・二六）

（八）『しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう』（ヨハネ一四・二六）

（九）『ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて』（使徒一・八）

死と復活ののち、イエスは父のもとへ上って行かれた。刺し通された御足が地から上がっていくとき、ご自分の小さな群れに語られた別れの言葉は、はっきりと響き渡った。『見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい』（ルカ二四・四九）。

使徒行伝一章十二節には、忠実な従う者たちの小さな群れ（その数は百二十人）が、エルサレムへ向かう姿が描かれている。主の言いつけを守り、約束の賜物を受けるまでそこにとどまるためである。『彼らは、市内に行って、その泊まっていた屋上の間にあがった。その人たちは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポとトマス、バルトロマイとマタイ、アルパヨの子ヤコブと熱心党のシモンとヤコブの子ユダとであった。彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた』（使徒一・一三～一四）

ペンテコステ

父は、言葉に忠実に、世をあがなうために約束の賜物であるイエスを与えられた。それと同じように、イエスも、ご自分の時代の終わりに言葉を果たし、いつまでも私たちとともにいてくださる聖霊の賜物を授けられた。『五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっぱいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』（使徒二・一～四）

カイザリヤ

カイザリヤでも、同じ聖書的なしるし、すなわち他国の言葉（つまり、学んだことのない言葉）で語ることが、聖霊が入って来られるのに伴った。ペテロが彼らにイエスを宣べ伝え、その死と葬りと復活とを語っていたときのことが、こう記されているからである。『ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった。（中略）それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである』（使徒一〇・四四～四六）

エペソ

エペソでのパウロの働きのあいだにも、聖霊が入って来られるのに、この同じしるしが伴った。こう記されているからである。『アポロがコリントにいた時、パウロは奥地をとおってエペソにきた。そして、ある弟子たちに出会って、彼らに「あなたがたは、信仰にはいった時に、聖霊を受けたのか」と尋ねたところ、「いいえ、聖霊なるものがあることさえ、聞いたことがありません」と答えた。（中略）そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した』（使徒一九・一～六）

魔術師シモンは、使徒たちが手をおいて聖霊の賜物が授けられるのを見て、使徒たちを通して現れる力のために、金を払おうとした。

父なる神と御子イエス・キリストは、世に賜物を与えられた。それと同じように、今度は聖霊が、ご自分を受け、ご自分にすっかり身をゆだねるすべての者に、ご自分の賜物を授けてくださる。御霊の賜物は、コリント人への第一の手紙十二章八節から十節に記されている。

（一）知恵
（二）知識
（三）信仰
（四）いやし
（五）力あるわざ

（六）預言
（七）霊を見わける力
（八）種々の異言
（九）異言を解く力

これらはみな、彼らのただ中に現れていた。今日、私たちのただ中に現れているのを見るのと同じである。

私たちは今も聖霊の時代にいる。ペンテコステの日からずっとそうであり、主の来臨までそうである。聖霊は今もここにおられ、罪人にその罪を悟らせてくださる。御霊が引き寄せてくださらなければ、だれも父のもとに来ることはできないからである（ヨハネ六・四四）。聖霊がここにおられるのは、悔い改めた魂をイエスのもとに導き、その心に血を注いでくださるためである。また、その人の霊とともに、その人が今や神の子であることをあかししてくださるためである（ローマ八・一六）。その人がやみから光へ、束縛から自由へ、死からいのちへ移ったことをあかしし、カルバリの完成された御業を、その人とともに喜んでくださるためである。

御霊は、罪人とともにおられて、罪人を罪に定め、その不義を悟らせてくださった。それと同じように今は、新しく生まれた心とともにおられる。そして、その人を義のうちに導き、聖霊のバプテスマを授け、完全への働きが始まったことをあかししてくださる。イエスは、あなたがたとともにおられる方が、あなたがたのうちにおられるようになる、と言われた（ヨハネ一四・一七）。また、ペテロはこう言った。『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである』（使徒二・三八～三九）

御霊があかしをしておられる、血で洗われた心は、今や、三位一体の第三の位格が入って来られるための、きよく空の宮である。私たちがへりくだり、祈り、賛美しながら、心を尽くして求めるとき、聖霊は入って来られて住まわれ、『あがないの日のために』私たちに証印を押してくださる（エペソ四・三〇）。そして、昔と同じ聖書的なしるし、すなわち御霊が語らせるままに他国の言葉で語ることを、今日も私たちに与えてくださるのである。

聖霊は、住むために入って来られると、からだと魂と霊を治めてくださる。私たちの腹から、『生ける水が川となって流れ出る』（ヨハネ七・三八）。声を出す器官、あの制しにくい器官である舌さえも（ヤコブ三・八）、聖霊はとらえて治めてくださる。御霊が『麗しく飾った王』を現してくださるとき（イザヤ三三・一七）、イエスは本当に確かな方となり、私たちの魂は賛美にあふれる。そのため、ここで私たちの言葉は尽きてしまうように思われ、私たちは叫ぶ。「わが魂よ、どこからイエスの御名をほめたたえ始めようか！」すると、聖霊ご自身が内に立ちあがり、私たちの知らない言葉でイエスをあがめてくださる。聖霊がご自分で語っておられるのを聞くと、喜びの洪水と栄光の大波が、私たちの全存在を押し流す。そして私たちは、聖霊が、私たちには思いつくこともできなかったほど美しい賛美で、私たちの花婿をほめたたえておられることを悟るのである。

ああ、イエスに栄光あれ！　ポンプでくみ上げる必要も、呼び水を差す必要もない賛美の井戸と川があるからである。それは、抑えきれない、我を忘れるほどの栄光と感謝となって、ほとばしり出る。

聖霊のバプテスマとは、偉大な指揮官である御霊が入って来られることである。御霊は、地から天まで私たちを導き、私たちが空中で主に会うまで（第一テサロニケ四・一七）、決して私たちを離れることのない方である。私たちが御霊に身をゆだねると、御霊は私たちを、さらに高い高みへ、さらに深い深みへと導き、こう歌われるとおりにしてくださる。

「栄光から栄光へと変えられ、
ついに天に私たちの座を占め、
ついに主の前に冠を投げ出し、
驚きと愛と賛美に我を忘れるまで」

ああ、愛する人よ、まだ聖霊を満ちあふれるほどに受けていないなら、心を尽くして聖霊を求めなさい。聖霊が入って来られるとき、あなたも、聖書の時代の人々が受けたのと同じ聖書的なしるしを受ける。御霊が語らせるままに、他国の

言葉で語るのである。主は、二十世紀だからといって、人々に聖霊のバプテスマを授ける新しい仕方を持っておられるわけではない。今も、初めのころと同じ仕方で満たし、証印を押してくださるのである。

後の雨が、地に降っている。

『そこでわたしはあなたがたに言う。求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである。あなたがたのうちで、父であるものは、その子がパンを求めるのに、石を与えるだろうか。魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか』（ルカ一一・九～一三）

求める人たちへの率直な話

『求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである。あなたがたのうちで、父であるものは、その子がパンを求めるのに、石を与えるだろうか。魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか』（ルカ一一・九～一三）

全国キャンプ集会での午後の話から

主が私に与えてくださった、へりくだった小さな務めがあるとすれば、それはおもに、聖霊のバプテスマを求める人々のために祈ることであった。からだの肢体は、それぞれ自分の特別な務めを持っているはずである。ある人々は、病人のために祈る方面に、はっきりと導かれている。だれかが病気でからだが苦しんでいるという知らせが来ると、その神の子供のうちには、その病人のために祈りたいという大きな願いが躍り上がる。またある人々は、悪霊を追い出す方面に、はっきりと導かれている。御霊が彼らのうちに立ちあがられ、大いなる油注ぎと力をもって彼らを用いられるのである。

私自身について言えば、だれかが心を尽くして聖霊のバプテスマを求めていると聞くたびに、うちに大きな引き寄せる力を感じる。ほかの人たちをみな跳び越えてでもその人のところに行き、受けることができるように祈りたくて、自分を抑えられないほどである。遠くや近くの集会にたびたび招かれたが、その招きに特に心を引かれないこともあった。ところが、こういう知らせが来ると違った。

「ああ、ここには、聖霊のバプテスマに飢え、それを求めて叫んでいる人が大ぜいいます。どうか来て、その人たちのために祈ってください」すると、たちまち私のうちに、行ってその尊い求める人たちのために祈りたいという強い促しがわき上がるのであった。神は私たちに、求める人たちが御霊に満たされるのを見たいというこの願いを与えてくださる。それなら、父ご自身は、ご自分を待ち望むすべての人に御霊を注ぎたいと、なおさら願っておられることだろう。

聖霊のバプテスマを求めてとどまっている、愛する求める人たちみなに、私の心は向かう。主からのメッセージを、あなたがたにどれほど届けたいことか。励ましと教えのメッセージである。それは、『なえた手と、弱くなっているひざとを、まっすぐに』する助けとなる（ヘブル一二・一二）。そして、あなたがたを、この栄光に満ちた領域へ、聖霊に満たされ、聖霊に治められるこの生活へと進ませるであろう！

神の時は今

まず初めに、はっきりさせておこう。神は与える側におられ、あなたが受けようとする以上に、喜んで与えようとしておられる。神の時は今であることを覚えよう。明日ではなく、今である。

神の時を待つ

多くの人がこう言う。「まあ、神の準備ができたら、私の時が来たら、神は私に聖霊のバプテスマを授けてくださるだろう」愛するみなさん、主は何年も前から準備ができておられる。準備ができていなかったのは、ほかでもない、あなたのほうである。主は今、あなたの上で待っておられ、あなたの魂に栄光の大洪水を注ぎ込み、あなたを聖霊の宮にしたいと切に願っておられる。悪魔は、あなたが主に満たしていただくのを待っているのだと、あなたに思い込ませようとする。はっきり求めることを、一日、また一日と先延ばしにさせようとする。そし

て、イエスが来られたとき、あなたがまだ御霊に満たされずに待っているようにできたら、悪魔は目的を果たしたことになる。

ああ、愛する人よ、こんな言いわけをするのは、もう永久にやめなさい。今日あなたが聖霊に満たされないなら、それはあなた自身のせいであって、主のせいではない。主は、あなたが受けようとする以上に、喜んで与えようとしておられるからである。

備えができていない

ほかの人々は言う。「聖霊を受けたいのですが、まだ備えができていないのではないかと心配なのです」それなら、愛するみなさん、神があなたの備えを整えてくださるのに、どれほどかかるだろうか。ほんの一瞬である。あなたが血のもとに身を置くのにかかる時間だけである。私は、罪と不義を重く背負った罪人たちが、私たちの天幕の祭壇に来るのを見てきた。彼らがひざまずき、両手を上げ、神にあわれみを求めて大声で叫ぶのを見てきた。彼らが死からいのちへ移り、罪が洗い流されるとき、光がその顔に差し、栄光が魂に押し寄せるのを見てきた。救いを求めて祭壇に来てから十五分もたたないうちに、そういう悔い改めた人々が御霊の力に打たれてひれ伏すのを見てきた。彼らは聖霊を受け、御霊が語らせるままに他国の言葉で語り出したのである。私はその後の年月、そういう人々の生活を見守ってきた。彼らが今日も、神のみことばのすべてを言い表し、神の前にきよい生活を送って立っていることを知っている。神にはえこひいきがない。神は『人をかたよりみないかた』である（使徒一〇・三四）。私たちはみな神の前で同じ足場に立っている。神がほかの人々にしてくださったことは、あなたにもしてくださる。

自分はふさわしくないと感じるなら、それは求め始めるのにすばらしい、へりくだった場所である。空のままで来て、満たされなさい。ただ、天の父に何も話しなさい。今日、尊い血で新たにおおってくださるように願い、その血のおおいのもとで、聖霊で満たしてくださるように願いなさい。聖霊があなたの生活のすべてを導かれ、指図され、満たして、神の誉れと栄光とを現してくださるためである。

何年も求めてきた

また、ある人は言う。「でも、私は何年も求めてきたのに、一度も受けたことがないのです」けれども、ああ、私たちの幕屋で、求める人たちでいっぱいの長い祭壇の腰掛けを見渡すと、求めているつもりで、実はのんきに腰を下ろしているだけの人がとても多い。両手で頭を支え、ひじを祭壇の腰掛けについて、神を賛美するために口を開くこともほとんどない。必死の熱心さも、百倍の賛美もない。それなのに、それを求めることだと言うのである。上を見なさい。良い贈り物はみな上から来るのである（ヤコブ一・一七）。

水差しとコップ

私は手に一つのコップを持っている。空のコップである。もう一方の手には、冷たくさわやかな水で満たされた水差しを持っている。あなたがそのコップで、イエスが水で満たされた水差しを持っておられるとしよう。水は聖霊のひな型である。私たちはコップを水で満たしたい。ところが、コップは逆さになっていて、口が下を向いている。ちょうど、求めるあなたがたの多くが、顔を上げずに頭を下げているのと同じである。コップの底に、好きなだけ水を注ぐことはできる。けれども、コップが満たされることは決してない。注がれる水の下から、前と同じく空のまま出て来る。そして、ほかのコップはみな満たされたのに、なぜ自分だけ空のまま残されたのかと不思議に思うのである。

では、コップを正しい向きにしよう。水差しから水を注ぐと、コップは満ちて、満ちて、満ちていき、ついには水があふれて、周りの乾いた地面にこぼれる。愛するみなさん、このコップと同じようにしなさい。上を見なさい。天に向かって顔を上げ、両手を上げ、魂を尽くして神を賛美し始めなさい。そうすれば、神はあなたをあふれるほどに満たしてくださる。

心の中だけで賛美する

また、ある求める人は言う。「ああ！　でも、私はあふれ出したり、感情を表に出したりはしないのではないかと思います。私は深い人間で、とても物静かなたちなのです。心の中で主を賛美すればよいと信じています」愛するみなさん、神が満たすことのおできにならないほど深い人は、あなたがたのうちに一人もいない。自分は大きくて深いと感じているかもしれない。けれども、神はあなたよりも大きく、深い方である。神があなたをいっぱいに満たされると、あなたはあふれ出して、御霊が語らせるままに、イエスの栄光に満ちた賛美を語らずにはいられなくなる。

たとえば、水で満たされたこの水差しを見なさい。コップより大きい。水差しの水を全部、コップに入れることはとうていできない。あふれるしかないのである。同じように、神はあなたより大きい方である。神が聖霊をあなたの心に注がれると、あなたは神への賛美にあふれずにはいられない。

神に向かって開く

今度は、作るときにしくじって、ゆがんでしまったコップがあるとしよう。それを満たす方法はない。けれども、口が広く開いたコップなら、すぐに満たすことができる。次に、口の小さな瓶を取ってみよう。それを満たすには、コップよりもずっと長くかかる。求める人たちよ、『あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう』と主は言われる（詩篇八一・一〇）。

私たちは、後の雨を仰ぐように、口を広く開く（ヨブ二九・二三）。ああ、ハレルヤ！　あなたの存在のあらゆる通り道、魂のあらゆる水路を開きなさい。賛美のために唇を開きなさい。『とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王がはいられる』（詩篇二四・七）。

求めよ、そうすれば受ける

求めなさい。そうすれば受ける。これは、神からのはっきりした約束である。あなたが求めるなら与えられると、神は約束しておられる。不義な裁判官のところへ行ったやもめを思い出しなさい（ルカ一八・一～八）。裁判官は初め、彼女の願いを退けた。けれども、彼女が毎朝、帽子をかぶり、道を歩いて裁判官の事務所へ行き、戸をたたき、自分の番を待って、こう叫ぶ姿が目に浮かぶ。「ああ、裁判官さま、どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守ってください」退けられても、彼女はまだひるまなかった。次の朝も、彼女は帽子を整えてピンで留め、道を歩いて裁判官の事務所へ上がって行き、また自分の番を待って、こう言った。「ああ、裁判官さま、どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守ってください」

また退けられても、彼女はまだ気落ちしなかった。次の朝、彼女はまた控えの間にいた。きっと裁判官はこう言ったであろう。「あの女がまた来て、わたしを悩ますのか」それでも、彼女はまた自分の訴えを願い出た。

ああ、私はこう思う。不義な裁判官は、彼女の願いを聞き入れたとき、急いでペンと紙をつかみ、命令書を書き上げて、こう言ったのだ。「さあ、女よ、早くこれを持って、わたしの前から消えうせろ。たびたびやって来て、わたしを悩ますのだから」

ああ、愛するみなさん、不義な裁判官でさえやもめの願いを聞いたのなら、私たちの正しい父は、なおさらあなたの叫びを聞いてくださる。求めるなら、あなたは必ず受ける。そうだ、すぐに受けるのである。『思いがけない時に』、主はたちまちご自分の宮に来られ、それを満たしてくださるからである（マタイ二四・四四、マラキ三・一）。

捜せ、そうすれば見いだす

これも、はっきりした約束である。床を掃き、あかりをつけて、なくした銀貨を見つけるまで掃き続けた女を覚えているか（ルカ一五・八）。ああ、愛するみなさん、朝早く起きて求めることをいとわないでいなさい。必要なら、あかりを

つけてでも求めなさい。食事を忘れるまで、寝床を忘れるまで求めなさい。神の賜物を受けるまで、ほかのことはすべて忘れなさい。

門をたたけ、そうすれば、あけてもらえる

戸があなたに開かれていないなら、それは神のせいではない。たぶん、あなたのたたき方に、何かまずいところがあったのである。パンを求めて友人の家の戸をたたきに行った人を覚えているか。彼はこう言った。「友よ、起きてパンを三つください。友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから」（ルカ一一・五〜六）

けれども、家の中の人は答えた。「面倒をかけないでくれ。子供たちもわたしと一緒に床にはいっている。もう夜も遅い」

たぶん、敵はあなたにこうささやいたことだろう。「さあ、もう十一時だ。寝る時間だ。朝は早く起きなければならないのだから」

あなたは、何度こんなふうに考えて、休みに行ってしまったことか。けれども、聖書の中で戸をたたいた人はそうではなかった。『門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう』（ルカ一一・九）ああ、私は、私たちの神のこうしたはっきりした保証が大好きである。「天地は滅びるであろう。しかし、ことごとく全うされるまで、一点、一画もすたることはない」（マタイ二四・三五、五・一八）

「トン！　トン！　トン！」その人が戸をたたいているのが聞こえる。

「面倒をかけないでくれ」と、上から声がする。

「トン！　トン！　トン！」「ああ、友よ、起きてパンを三つください」

「もう夜も遅い。パンなら、また今度来ればいいだろう」

「トン！　トン！　トン！」「友だちが旅先から着いたのですが、何も出すものがないのです。起きて、パンを三つください」

こうして、その人はたたきにたたき、戸を打ち、呼び、頼み続けた。とうとう、上にいた人は寝床から足を下ろし、ろうそくをともし、食料棚へ行って、パンを三つひっつかみ、隣人の手に押しつけて言った。「さあ、これがあんたのパン三つだ。友人だからではない。あんまりしきりに願うからだ。持って行ってくれ（ルカ一一・八）」

それなら、私たちの友であり、どんな友にもまさる友であるイエスは、なおさら起き上がられ、約束された祝福の聖霊を私たちに与えてくださる。

心を尽くして

あなたは今日の午後、自分の求め、捜し、たたくことが弱々しい見せかけにすぎなかったことを、神の前に恥ずかしく思っているか。愛するみなさん、立ちあがって、心を尽くして神を求めなさい。ここに、揺るがず疑わずに、両足でしっかり立つことのできる約束があるからである。「あなたがたが心を尽くしてわたしを求める日に、あなたがたはわたしを見いだす」（エレミヤ二九・一三〜一四）だから、こ、こ、ろ、を、つ、く、し、て、思いと力と声を尽くして神を求めるなら、あなたは神を見いだす。『すべて求める者は得』るからである（ルカ一一・一〇）。

聖霊は自分のためのものではない

私たちは、多くの人がこう言うのを聞いてきた。「ああ、姉妹、聖霊は私のためのものではないのではないかと思うのです」さあ、愛するみなさん、神のみことばを見なさい。あなたは神を信じることができないのか。『すべて求める者は得』る（ルカ一一・一〇）。神は『人をかたよりみないかた』である。あなたは、ほかのどの子供とも同じように、神にとって愛しい子供である。「すべて」である。そうだ、愛する、気落ちした魂よ、それはあなたのことである。『捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえる』（ルカ一一・一〇）。

偽物を恐れる

すると、ある人は言う。「ええ、聖霊を受けたいのです。でも、神の力が下ったとき、それが自分の思いか、肉か、悪魔ではないかと、とても心配なのです」

「偽物で、神から出たのではないものを受けてしまうのではないかと、とても心配なのです」愛する、臆病な魂よ、あなたのための約束がここにある。『あなたがたのうちで、父であるものは、その子がパンを求めるのに、石を与えるだろうか。魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか』（ルカ一一・一一～一二）東洋の国々では、茶色のパンのかたまりは石によく似ていた。魚の仲間であるうなぎは、へびによく似ている。さそりの卵は、家庭料理に使う卵によく似ている。私たちは、偽物があることを否定はしない。悪魔はいつも神の御業をまねようとしている。石も、へびも、さそりもあることを否定はしない。けれども、私たちの天の父が、血で洗われたご自分の子供たちに、石やさそりやへびを与えられるということは否定する。

ああ、あなたが尊い血のもとで天の父のところへ行き、こう言うとき、父のお心はどれほど悲しまれることだろう。「聖霊がほしいのです。でも、ここの祭壇でこのペンテコステの人たちといっしょにひざまずいて求めたら、あなたが私にへびを、悪霊を、偽りの霊をお与えになるのではないかと、とても心配なのです」では、あなたは自分の父を恐れているのか。もしあなたの父がそんな父なら、すなわち、信頼するのが恐ろしい父、魚の代わりにへびを、卵の代わりにさそりを与えるような父なら、父を取り替えて、神をあなたの親として受け入れたほうがよい。神は、ご自分の子供たちに良い贈り物をくださる方だからである。

もしあなたが手に十ドルを持っていて、その一枚が偽札だとわかったら、残りの九ドルを投げ捨てて、もう二度とドル札には触れないと言うだろうか。もちろん、そんなことはしないはずである。もし運悪く、本物でない人を見てしまったことがあったとしても、それで神のなさったことをすべて退けるのか。この人は神から受けたのではない間違った霊を持っていたからといって、これからは聖霊の本物の賜物を求めるのをやめると言うのか。

聖霊を見分ける

仮に、あなたが私を夕食に招いてくれたとしよう。あなたは私の書いたものを読み、人々が私のことを話すのを聞いていた。そして今、夕食をともにし、幾日か休んでいくようにと、招きの手紙を私に書いてくれた。私は招きを受け、スーツケースを持ち、何マイルも旅をしてあなたの家に着く。戸をたたくと、あなたは戸を開けて、こう尋ねる。

「どなたですか」私は答える。「まあ、マクファーソン姉妹ですよ。幾日か静かに休みに来るようにと、招いてくださったでしょう」するとあなたは、疑わしそうな様子で私を見て、こう言う。

「でも、あなたは、マクファーソン姉妹はこうだろうと思っていたのと、どうも違って見えます。もっとずっと年配の人だと思っていました。違う姿を思い描いていたのです。服装も、マクファーソン姉妹ならこうだろうと思っていたのとは違います。声も、想像していたのとはどこか違います。あなたは、ご自分で言うとおりの人ではないのではないでしょうか」

私は答える。「まあ、そうですとも、愛する姉妹、私は本当に、あなたがここに招いてくださった者です」けれども、あなたはまだ戸をほとんど閉めたままで、すき間からのぞいて、こう言う。

「いいえ、やっぱりお入れすることはできません。とても心配なのです。あなたは、私がここに招いた人ではないのではないでしょうか。私がただ、そうだと思い込んでいるだけかもしれません。あなただと思っているのは、私自身にすぎないのかもしれません。それとも、ひょっとすると、あなたは悪魔そのものかもしれないのです」

私はどれほど悲しみ、傷つき、驚くことだろう。たぶん、スーツケースを手に取り、ゆっくりと階段を下りて行くだろう。そして次にあなたの家に招かれたときには、たぶん、そちらへ向かうのを少しためらうことだろう。

さて、あなたがたのうちのどれほどの人が、聖霊に対して、ちょうどこのようにしてきたことか。あなたは聖霊について読んだ。聖霊の栄光に満ちた臨在を語ってくれた人たちから、聖霊について聞いた。そして、自分の家に来て、自分を聖霊の宮としてくださいと、聖霊を招いた。ところが、聖霊があなたの戸口に来られたとき、あなたがその力のもとで震え始めたとき、あなたは身を引いて、こう言った。

「ああ、これはたぶん、私自身にすぎない」聖霊があなたの唇の戸を優しくたたき始められ、その力でどもらせ始められたとき、あるいはあなたが床に打ち倒されたとき、あなたはすぐに、悪魔が疑いを耳にささやくのを許した。そして、こう言った。「でも、これは聖霊が来られると想像していたのとは違う。聖霊は静かな小さなはとのように来られると思っていた。あるいは逆に、激しい風のように来られると思っていた。たぶん、これは聖霊ではない。たぶん、これは悪魔そのものだ」ああ、あなたは尊い聖霊を悲しませ、傷つけている。聖霊は翼を広げられ、あなたのそばにひざまずいているほかの人たちのところへ移って行かれ、あなたの代わりにその人たちを満たされる。そして、あなたは、なぜその人たちは満たされ、自分は満たされずに残されるのかと、不思議に思うのである。

聖霊を疑ってはならない

聖霊がどのように自分のところに来られるのかを、頭の中ですっかり決めてしまっている人が、実に多い。ある人々は、聖霊は静かな小さなはとのように、穏やかな仕方で来られると感じている。自分の席にすわっているときか、祭壇で威厳を保ってひざまずいているときに来られる、と。そういう人々には、聖霊はたいてい、激しい風のように来られ、その力のもとに彼らを打ち倒され、力強い現れを与えられる。ほかの人々は、すっかり思い込んでいる。聖霊は大きな、勢いのある、爆発するような力として、激しい風と炎の舌と大いなる現れを伴って来られる、と。そういう人々には、聖霊はときに静かな小さなはととして来られ、静かに満たしてくださる。そして、彼らを通して他国の言葉で、柔らかに、優しく、イエスの栄光に満ちた賛美と、その来臨のメッセージを語られる。けれども、聖霊がどんな形で来られても、聖霊を疑ってはならない。あなたが来てくださいと招いたのである。だから今は、ただ受け入れなさい。

賛美の門を通って入る

祭壇に来るときには、神を賛美すると決心して来なさい。求めるためではなく、受けるために来なさい。聖霊が来てくださるのを、何マイルも何マイルも離れたところに探してはならない。聖霊はあなたのすぐそばにおられるからである。心のすべてを尽くしてイエスの御名を賛美し、あがめなさい。そうすれば、イエスはあなたの上に御霊を注いでくださる。

賛美したいと感じない

ある人々は言う。「でも、賛美したいと感じないときに、主を賛美するつもりはありません。見せかけを着込むようなことはしたくないのです」人が見せかけを着込むのを見るのを、私ほど嫌う者は世界にいないと思う。けれども、主はほむべきかな、神のみことばが私たちに着ることを認めているものが一つある。それは、賛美を衣として着ることである（イザヤ六一・三）。「でも」と、あなたは言う。「賛美したいと感じなければ、主を賛美することはできません」

あなたの霊の生活は、そんなふうに感じに支配されているのか。神を賛美しなさい。神は賛美を受けるにふさわしい方であり、あなたの罪を洗い流してくださったからである。天においても地においても、とこしえからとこしえまで、あらゆる賛美を受けるにふさわしい方だから、神を賛美しなさい。そうすれば、まもなく賛美したいと感じるようになる。その聖なる御名はほむべきかな！　感じに頼ろうとしてはならない。聖書の中で手で感じたものに頼ったのは、イサクただ一人であった。彼がどれほどだまされたかを見なさい。息子の腕をおおっていた毛深い皮に触れた感じで、違う息子をつかんでしまったのである（創世記二七・二二～二三）。感じに頼らず、信仰に頼りなさい。

集会の祭壇が飢え渇いた求める人たちでいっぱいになると、私はしばしば、しばらく演壇に立って人々を見渡し、心の中で思う。「どこから始めようか。だれのために最初に祈ろうか」そして、両手で頭を支えて、いいかげんな様子ですわっている人たちを通り過ぎ、必死に熱心な様子の人を探す。手と顔を上げ、心の底から神を賛美し、力を尽くして求めている人である。そして、私たち働き手は心の中で言う。「あそこに、必死に熱心な人がいる。あの人のために祈りに行こう」実は、主もほとんどそのように見下ろしておられるのだと、私は思う。主は今日の午後、この祭壇のそばに立たれ、喜んで御霊を注ごうと備えておられ

る。心を尽くして求めている人を探しておられるのである。そういう人を、主は必ず満たしてくださる。主の力があなたを支配し始めるのを感じるまで、唇がその力のもとで動き、震え始めるまで、主を賛美しなさい。そうしたら、自分の言葉で話すのをやめて、あとは聖霊にゆだねなさい。あなたがすることは何もない。ただ身をゆだねなさい。そうすれば、聖霊が語ってくださる。

人がやめるとき神が始められる

私自身が聖霊を求めていたとき、聖霊が他国の言葉で語られる前に、どもる唇をもって私に臨まれる日が、来る日も来る日も続いた。バプテスマを受けてから振り返ると、聖霊が他国の言葉で語られるのを、私がどれほど妨げていたかがよくわかる。唇が震え始め、あごが震え出すたびに、私は倍の力を込めて主を賛美し始めた。今こそ賛美しなければ、主は離れて行ってしまわれると思ったのである。これはおそらく間違いであった。二人が同時に話すことはできないので、私が話しているあいだは、聖霊は語ることがおできにならなかったのである。私たちはみな、人が話しているときに口を挟まないだけの礼儀をわきまえている。聖霊も、私たちと同じように礼儀正しい方である。私がすっかり話し終えて、ただ唇と舌と声を出す器官のすべてを明け渡したとき、どもるのがひどくなった。気がつくと、あごが震え、横に、上下にぴくぴく動き始め、舌が口の中で動き始めた。そして、私が声を聖霊にささげると、聖霊は不思議な音を、音節を、言葉を、文の切れ端を出し始められた。それから、大きな奔流のように、私の腹から賛美の川が流れ出した。御霊が語らせるままに、他国の言葉で語ったのである。愛するみなさん、主の力を唇に、声を出す器官に感じるまで、主を賛美しなさい。そうしたら、これまでずっと自分で話してきたのだから、静かにして、聖霊に話していただきなさい。聖霊は、あなたよりもはるかにすぐれた仕方でイエスを賛美することがおできになる。人の思いでは決して測り知ることのできない、栄光に満ちた言葉を持っておられる。賛美の川が流れ出し、高く高く上って、ついには栄光に満ちた感謝のささげ物となって、父の御座にまで上って行くのである。

後の雨

降っている、降っている、後の雨が。
来ている、来ている、再びペンテコステが。
急げ、急げ、今は力の日。
聖霊の雨の下に来よ。

この終わりの日々、後の雨の日々に生きることは、なんと栄光に満ちた特権であろう。聖霊が驚くべき仕方で注がれている。祝福の雨が降っている（エゼキエル三四・二六）。主の御前から、潤いの時が来たのである（使徒三・一九～二〇）。乾ききった地を潤し、実らない畑を、木々を、穀物を潤す。実に、その土砂降りの下に来るすべてのもの、すべての人を潤すのである。

血で洗われた神の子供が、飢え渇きながら、聖霊を慕い焦がれて、実を結ばない荒れたままでいる言いわけも理由も、何一つない。聖霊は天からの雨のように注がれている。空で、飢えていて、口を上に向けた器が見つかれば、どこででも喜んでバプテスマを授けられ、満たされ、入って来て住んでくださる。あなたのコップを正しい向きにしなさい。そして、雨の降っている野外にいるなら、聖霊は今、必ずあなたを満たしてくださる。

主は『人をかたよりみないかた』である（使徒一〇・三四）。老いも若きも、黒人も白人も、黄色人も褐色の人も、しもべもはしためも、人種や信条にかかわりなく、受けるために求めるようにと招かれている。『すべて求める者は得、捜す者は見いだす』のである（ルカ一一・一〇）。

求めさえすれば、後の雨が与えられる。捜しさえすれば、尊い聖霊が与えられる。ハレルヤ！

ペテロは立っていた。ほどよく降った前の雨の土砂降りを浴びて、あふれるほどに満たされていた。彼は目を上げ、御霊による「千里眼」をもって、はるか先を見通した。そして、私たちの世代に後の雨が降るのを見て、声を張り上げて叫んだ。

「これこそ、預言者ヨエルが預言していたことである」（使徒二・一六）そして、『この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているもの』だと言い切ったのである（使徒二・三九）。

『後の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主は輝く雲を造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる』（ゼカリヤ一〇・一）。哀れな魂よ、うなだれ、もがいている魂よ、霊において渇き、しおれている魂よ、上を見なさい。あなたに必要なのは聖霊である。野の草や花に雨が欠かせないように、聖霊が入って来られることは、あなたの霊の成長と健康に欠かせない。御霊は、その土砂降りの下に来るすべての人に注がれている。あなたが満たされないなら、それは何かの覆いの下にいるからである。さもなければ、あなたのコップが逆さになっているか、何かほかのもので満ちているからである。

神学や形式や儀式、先入観や教えの家の中にいるなら、その屋根は厚すぎる。雨を通さないのである。その家の中にいては、決して満たされない。哀れな渇いた魂よ、戸を開けなさい。神の満ちあふれる豊かさという、広々とした野外の自由の中へ出て来なさい。屋根を打つ雨のぱらぱらという音が聞こえないのか。窓ガラスに打ちつける雨が見えないのか。偏見と怠惰の座席や長いすから立ちあがり、雨の降っている野外へ出なさい。頭の上に傘を差そうとして立ち止まってもならない。ただ賛美しながら、天に向かって両手を上げなさい。この祝福された後の雨が降るのを仰いで、顔を上げなさい。声を張り上げて主をあがめ、主の栄光をたたえなさい。『とこしえの戸』を上げなさい（詩篇二四・七）。賛美の水門を広く開け放ち、主にあなたを満たしていただきなさい。

ああ、あなたはこれまでずっと、なんというものを取り逃がしてきたことか。比べるもののない損失である。神のみことばを取り出して、『果してそのとおりかどうか』を調べる代わりに（使徒一七・一一）、疑いと問いの壁の陰に身を寄

せてきたからである。求めて受ける代わりに、あなたは霊的に、ゆっくりとしおれ、干からびてきたのである。

『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう。それゆえ、シオンの子らよ、喜び楽しめ。主はあなたがたに前の雨をほどよく賜い、あなたがたのために雨を、前の雨と後の雨とを、初めの月に降らせられる』（使徒二・一七、ヨエル二・二三）イエスに栄光あれ！　愛するみなさん、私たちはこの終わりの日々にいる。今日、後の雨が地に降っている。それは、いま私たちの国々を荒らしている世界大戦や災いや疫病と同じく、聖書の預言の成就であり、イエスがまもなく来られるしるしなのである。

まだ自分の分け前を受けていないなら、あなたのコップがまだあふれるほどに満たされていないなら、神を責めてはならない。牧師を責めてはならない。「たぶん、神の時がまだ来ていないのだ」と言ってはならない。神の時はいつも今である。責めるべき者は、あなた自身のほかにいない。上を見なさい。頭の上に屋根がないことを、疑いや不信仰や批判の傘がないことを、確かめなさい。自分が空であることを、コップが正しい向きになっていることを、確かめなさい。あなたの存在のすべてを高く上げて、王を賛美しなさい。後の雨の時に、雨を請い求めなさい。そうすれば、あふれるほどに満たされる。

聖霊があなたを満たされ、あなたのうちに住まいを定められると、あなたも今日、前の雨の日々と同じように、他国の言葉で語り、神をあがめる。主が人々を満たされ、その満たしを現される仕方は、聖書の時代と今日とで別々なのではない。そうではない！　これは同じ種類の雨、同じ潤いの雨、同じ聖霊である。主は、二十世紀向けの聖霊の注ぎを考え出されたのではない。今も聖書のとおりの仕方で、聖書的なしるしを伴って、御霊を限りなく注いでくださる（ヨハネ三・三四）。使徒行伝二章四節にあるとおりである。「この昔ながらの信仰で、私には十分」と、あなたは歌ってきた。けれども、それを信じているのか。それなら、自由の中へ出て行き、御霊に満たされなさい。

今日は十年前のようには雨が降っていない、と不平を言うのはやめなさい。そう思えるのは、あなたが不注意や、祈りと確信の不足という、雨を通さない覆いの下に入り込んでしまったからである。愛するみなさん、雨は今日も降っている。干からびた、古びた牧場で満足してはならない。見なさい！『荒野の牧草はもえいで、木はその実を結び、いちじくの木とぶどうの木とは豊かに実る』（ヨエル二・二二）。求めなさい。そうすれば受ける（ヨハネ一六・二四）。『すべて求める者は得』るのである（ルカ一一・一〇）。

「あなたもきっと分け前を受ける、主をほめたたえよ。
主の倉には豊かにある、
百二十人にもあり余るほどに。
あなたもきっと分け前を受ける、主をほめたたえよ」

偽りの牧者とまことの牧者

『わたしは良き牧場で彼らを養う。イスラエルの高い山に彼らのおりがある。その所で彼らは良いおりに伏し、肥えた牧場で草を食う。わたしはみずからわが羊を飼い、これを伏させると主は言われる』（エゼキエル三四・一四～一五）

神のみことばの全体を通して、よい羊飼がご自分の羊の世話をし、養っておられる姿ほど美しい絵は、読む者の前に示されていない。主はいつの時代にも、よい羊飼であられた。主の羊である私たちが、主と主の御声を知るようになると、聖書のどのページをめくっても、優しい羊飼である主の姿が見えてくる。ご自分のおりの羊を導き、手引きし、養い、捜し、懲らしめ、いやしておられる主の姿である。

この羊飼は、実り豊かなエデンの園に初めてご自分の羊を連れて行かれ、草を食べさせられた。その日から、主はご自分にしっかりついて来るすべての者を、豊かに養い、牧してこられた。

罪がその最初の牧場に入り込んだ日、よい羊飼は園の木の間を歩きながら、こう呼ばれた。

「あなたはどこにいるのか」（創世記三・九）その日から、主はさまよう羊を呼び、捜し続けておられる。ページがめくられていくと、主が歩いておられるのが見える。一つ一つの経験を通して、ご自分の羊を導いておられるのである。主がご自分の群れをエジプトの奴隷の身からカナンの地へと導かれる、その堂々とした足音が聞こえる。荒野で彼らを養われるとき、主の御手が現される。主の御声はどのページからも響き、戒め、慰め、正し、励ましておられる。シナイ山から語られる主の御声が聞こえる。カルバリの丘から語られる、よい羊飼の御声が聞こえる。『よい羊飼は、羊のために命を捨てる』とあるとおりである（ヨハネ一〇・一一）。今日も主の御声が聞こえる。心を引き寄せ、呼び、とりなしておられる。そしてまもなく、そうだ、ごくまもなく、あの尊い、愛する御声を聞きたいと私たちは望んでいる。私たちのために備えに行かれた永遠のおりへ、もっと上に上って来なさいと、ご自分の羊を呼ばれる御声である。ハレルヤ！

よい羊飼は、ご自分の羊のために、すばらしい牧場を備えてくださった。その牧場はあまりにも大きく広いので、その蓄えは尽きることがなく、その果てにはまだだれもたどり着いたことがない。主は荒野の牧草をもえいでさせ、さばくをばらのように花咲かせてくださる（ヨエル二・二二、イザヤ三五・一）。青草もクローバーも古びてはいない。しおれてもいない。水晶のように澄んだ水の流れは、今も神の御座からまっすぐに流れ出ている。昔と変わらず、新鮮できらめいている。主の牧場には、すべての罪からの完全な救いがある。獲物をむさぼる獣からの救出がある。それなしにはだれも主を見ることのできない、きよさがある（ヘブル一二・一四）。聖書のとおりの聖霊のバプテスマがある。使徒行伝二章四節のとおりに、他国の言葉で語るというしるしを伴うバプテスマである。これでさえ、主の牧場の豊かさの終わりではない。主の羊が進み続けると、その前には、乳と蜜の流れるカナンの地が横たわっているからである。そこには御霊の実と賜物があり、からだのいやしがある。そうだ、主は、ご自分を愛し、ご自分の導かれる所へついて行く人々のために、栄光を備えられ、蓄えておられる。その栄光は、人の思いも筆も描き尽くすことができない（第一コリント二・九）。

偉大なよい羊飼に雇われて、その下で多くの牧者たちが働いている。偽りの牧者もいれば、まことの牧者もいる。下心から、地上の利益を望んで、羊を養うことを買って出た牧者もいる。また、ただ、よい羊飼とその羊への純粋な愛から、すべてを捨てて、こう言われた方の言いつけに従っている牧者もいる。

「わたしを愛するか。それなら、わたしの羊を養いなさい」（ヨハネ二一・一五～一七）

まことの牧者は、自分の群れを、いつも新しい牧場へ連れ出す。彼は、イエスは『きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない』と言い表す（ヘブル一三・八）。主は今もご自分の民をすべての罪から救われ、祝福された聖霊で満たされ、彼らを通して異言で語られる、と説く。御霊の賜物と恵みを授けられ、祈りに答えて病人をいやしてくださる、と説く。そして、こう言う。

「あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招くがよい。長老たちはその人に手を置き、油を注ぐがよい。そうすれば、主はその人を立ちあがらせてくださる」（ヤコブ五・一四～一五）まことの牧者は、自分の羊たちに、よい羊飼に似た姿に変えられるまで、どこまでも進み続けるようにと勧める。

偽りの牧者は、自分の羊を、自分が行った所より先へは連れ出さない。自分で経験したことも、理解したこともない経験に、ほかの人を導くのは難しい。そこで彼は言い張る。聖書の時代にあったのと同じ青草の牧場、同じ澄んだ水、同じぶどうとざくろを今日期待するのは、愚かでばかげたことだ、と。他国の言葉で語るしるしを伴う聖霊のバプテスマは、今日のためのものではない、まったく必要のないものだと、賢しげに言い張る。言いかえれば、こういうことである。当時の弟子たちとほかの羊たちが、その牧場をすっかり食べ尽くし、その方面の神の蓄えを使い果たしてしまった。私たちは残り物で満足しなければならない。品切れになったからといって、神を責めてはならない、と。

神によるいやしについては、こうである。「これこれ、子供よ！　それは今日のためのものではない。神は私たちに立派な常識を与えてくださり、それを使うことを期待しておられる。病気なら医者を呼びなさい。飲むためでなければ、何のために薬が作られたのか。奇跡の時代は過ぎ去った。初代教会の羊たちが、あ

のクローバーをすっかり食べ尽くし、奇跡的ないやしの力を最後の一滴まで飲んでしまったのだ。あなたがたの中に病んでいる者があるか。その人は医者のところへ走って行き、よく効く強壮剤を一びんと丸薬を一箱もらうがよい。そうすれば、医者がその人を立ちあがらせてくれる。羊たちよ、残っているわずかな古びた牧場や、大ぜいの足に踏み荒らされた濁った水に、つぶやいてはならない。自分の持っているもので足ることを学びなさい（ピリピ四・一一、ヘブル一三・五）」

「さて、踊ったり、叫んだり、神の力に打たれて倒れたり、そういったことは、みな興奮にすぎない」と、偽りの牧者たちは言う。「すべてのことは『適宜に、かつ秩序を正して』行うべきである（第一コリント一四・四〇）。アーメン席はもう時代遅れだ。今どき叫ぶのは品がない（野球の試合か何か、悪魔のためのことなら別だが）。それに、神の力に打たれて倒れるのは、みな催眠術だ。羊たちよ、あの牧場には近寄らないほうがいい。草にはきっと毒が入っているから」こうして、喜びと楽しみがしおれ、神の力が説かれないので、羊は『もろもろの高き丘に』散らされ、『野のもろもろの獣のえじき』となる（エゼキエル三四・五～六）。その獣とは、トランプの集まり、ダンスホール、劇場、教会の催し物、かきの夕食会などである。実に、昔の黄金の時が、今はみじめにも失われている。それを何とか覆い隠そうとする、色を塗っただけの哀れな安物は、何でもその獣である。その昔、夕食会や催し物の代わりに、夜通しの祈祷会が開かれていた。偽物の代わりに本物があった。男も女も、悪魔のためではなく主のために踊り、叫んでいたのである。

あなたは、どうしてあなたの教会の信徒の多くが、祈祷会ではなく、あちこちの娯楽の場にいるのかと不思議に思うのか。それは、群れを養わずに自分自身を養ってきた偽りの牧者たちのせいである（エゼキエル三四・二）。それはまた、羊たちが満たしてくれるものを慕い求めているからである。教会で昔ながらの喜びが見つからなければ、彼らは幸せを求めて世に行き、悪魔の代用品である娯楽を手にする。

けれども、神の牧場がしおれてしまったことは一度もない。主の顧みの日と奇跡の力の日は終わったと主張する人々は、恐ろしく痛ましい間違いを犯している。彼ら自身が奪われてきたのであり、自分の群れからも奪っているのである。主の倉には豊かにあり、百二十人にもあり余るほどだからである。今日、何十万もの主の羊が、ひざまでどころか頭の上まで届く、生い茂った牧場で草を食べている。栄光あれ！　彼らは救いの満ちあふれる豊かさを味わっている。聖霊が彼らのうちに住まわれ、大牧者への賛美を語り出しておられる。彼らは昔の日々と同じように、からだのいやしを味わっている。がん、結核、骨折、らい病さえ、ほかでもない今の時代に、みことばのとおり、祈りに答えていやされてきたのである。

二つの牧場を分ける横木の柵

大きな横木の柵が、二つの牧場を分けている。一方の側では、牧草が青々と波打って誘いかけ、クローバーの花が、神の愛の明るい日差しを浴びてうなずいている。そこでは、羊は肥えて元気いっぱいで、その顔は幸せに輝いている。羊たちは後ろ足を蹴り上げ、跳ね、躍り、喜んで鳴く。（本当に、これほど踊り、叫ぶべきことがあるのだから、人が踊ったり躍り上がったり叫んだりしても、責めることはできない。栄光あれ！）

ところが、偽りの牧者は、柵の自分の側に立ち、不信仰と神学教育のこん棒を手にしている。良い牧場にとどまっている羊たちが喜びを現しているのを見ると、彼は、やせて飢えた哀れな群れに、あのペンテコステの羊には近寄るなと警告する。また、こうも警告する。あちらの草にはみな毒が入っている。もし柵を跳び越えてあの草を食べたら、おまえたちもすぐに、あれと同じように気が狂って、後ろ足を蹴り上げ、「栄光あれ！」と叫ぶようになる、と。けれども、どんなにおごそかに警告されても、何百匹ものやせた羊が、柵のところまでやって来る。あまりにやせているので、「アーメン」とも「ハレルヤ」とも言うのを聞いたことがない。生まれてこのかた、神のために跳ねたり踊ったりするのを見たこともない羊たちである（哀れなものだ、踊ったり叫んだりすることがほとんどないのだから）。彼らは好奇心から、あの「愚かな」ペンテコステの羊たちが喜んで踊り、鳴くのを見に来るのである。そして、疑いと高慢、不信仰、以前の教

え、先入観、世間の評判という横木のすき間から、そこに立ってのぞいている。すると、なぜか柵越しに見えるものでさえ、実に青々として新鮮で、誘いかけてくるように見える。水は実に冷たく澄んで、きらめいて見える。あちらの羊たちは実に幸せそうである。それで彼らは、柵を跳び越えて「あの仲間」になりたいと慕い求める。あの説教者はきっと間違っていたに違いない。あんなに肥えた幸せな羊を育てる草に、全部毒が入っているはずがない。

そして、ときどき、やせて飢えた哀れな羊が一匹、跳び上がる。柵を越えて、青草の牧場へ入って行くのである。ああ！　その羊は、救いの澄んだ水に鼻を突っ込み、いくら飲んでも足りないかのように、ただ飲みに飲む。（「そうだといいが」と願うだけで、自分の力でクリスチャンになろうとする濁った水たまりとは、なんという違いだろう。）それから、青草の牧場に頭を突っ込み、大喜びで木陰に伏す。それからまた食べに食べる。驚いたことに、まもなくその羊も、隣の羊たちと同じように肥えてくる。まもなく、その羊も後ろ足を蹴り上げて踊り始め、このように満ち足りる牧場を備えてくださるよい羊飼への愛と賛美に鳴き始めるのである。

柵の向こう側に立っている偽りの牧者は、今は喜びにあふれているその羊を指さして、残っている飢えた群れに言う。

「ほら、どうだ、言ったとおりだろう。あちらの草には毒が入っている、あちらへ行ったら、あの羊たちもすぐにほかの羊と同じように気が狂ったふるまいをする、と言ったではないか」

けれども、兄弟、姉妹よ、ひとたび御霊の満ちあふれる豊かさを味わった「あの仲間」の一人のところへ、行ってみなさい。良い牧場の草を食べ、生ける水を飲んだ羊である。聖書的なしるしを伴って聖霊を受け、御霊が語らせるままに異言で語った羊である。祈りに答えていやされた羊、こうべに油を注がれ、杯が『あふれ』ている羊である（詩篇二三・五）。その羊を説き伏せて、なまぬるく、いいかげんで、見せかけだけの経験という、古びた牧場と濁った水たまりへ連れ戻せるかどうか、試してみなさい。彼らは「いやだ！　千回でも、いやだ！」と答えるだろう。前には『エデンの園』があり、後ろには『荒れ果てた野』があるからである（ヨエル二・三）。

ああ、今日あちこちで柵越しにのぞいている、哀れな、試みられた、飢えて慕い求める羊たちよ。もう一瞬もためらってはならない。柵を跳び越えなさい。良い牧場へ、よい羊飼のおりの中へ入りなさい。主はあなたの慕い求めるものを、一つ残らず満たしてくださる。そして、偽りの牧者よ、神には昔ながらの牧場がもう残っていないと言い張っているあなたは、実に嘆かわしく危うい立場に立っている。主なる神はこう言われるからである。

「わたしは牧者らの敵となり、わたしの羊を彼らの手に求める」（エゼキエル三四・一〇）

昔、ある鉱夫がいた。金鉱で長い月日を骨折って働いたあと、「大当たり」を掘り当てた。何か月ものあいだ缶詰で暮らしてうんざりしていたので、本物の「まともな食事」がしたくてたまらなかった。そこで、ポケットを金塊でいっぱいにして、大きな町へ向かった。そこなら良いレストランで、待ち望んでいたおいしい食事にありつけるはずである。通りを歩いていると、『レストラン』と書いた大きな看板が目に入った。急いでそこへ行って戸を開け、雪のように白いテーブルに着いた。給仕が上等の陶器の皿と、優雅な銀のナイフ、フォーク、スプーンを持って来た。そして、手の込んだ献立表を差し出した。

『七面鳥のロースト、鴨のロースト、鵞鳥のロースト』と、腹をすかせた男は読んだ。どれにありつけるかと思うと、口につばがわいた。

「七面鳥のローストをもらおうか」と彼は言った。

「いや、申しわけございません、お客さま。鳥は今はこちらでは季節外れでして、ございませんのです、お客さま」と給仕はわびた。

「それなら、ローストビーフをもらおう」と男は言った。「申しわけございません、お客さま。もう一日も終わりに近く、いつもの食事の時間も過ぎましたので、ふだんの肉料理はちょうど切らしております」

「じゃあ、いったい何が残っているのか」と、男はいらだって叫んだ。

「さあ、本当のことを申しますと、お客さま、こんな遅い時間ですので、お開けできる缶詰くらいしか、ほとんど何も残っておりません」

缶詰と聞くと、哀れな鉱夫はいすを後ろへ押しやった。そして、大きな手の込んだ献立表を置くと、もっとましな店を探しに、急いでそこを出て行った。

多くの説教者のみことばの説き方は、なんとこれに似ていることか。看板は今も建物の前に掛かっている。人生の旅路を行く飢えた旅人たちは、今も戸を大きく押し開けて、テーブルに着く。救いと聖霊のメッセージ、神とのより深い歩みのメッセージを聞きたくて、飢えているのである。雪のように白い亜麻布も、上等の銀器も、ステンドグラスの窓も、パイプオルガンもあるかもしれない。堂々とした、食欲をそそる献立表、すなわち神のみことばも差し出されるかもしれない。旅人は、すばらしいごちそうの数々のことを読み、その魂はそれを十分に味わいたいと慕い求める。そこで、給仕である説教者にこう言う。

「どうか、それをいただきたいのです。聖書のとおりの仕方で、聖書の喜びを伴う聖霊のバプテスマをいただきたいのです。昔のダビデのように、『力をきわめて』踊りたいのです（第二サムエル六・一四）。からだのために、神によるいやしをいただきたいのです」けれども、ああ！　偽りの牧者は、献立表どおりのものを出すことができない。こういうものは今日のためのものではない、と教えているからである。

「まことにお気の毒ですが、あなた、弟子たちがその最後の分を食べてしまったのです。あなたがお求めのものは、今は季節外れですし、もう日も傾きすぎています。今、手もとに残っている品はあまりありません。見せかけの救いくらいです。できるだけのことをしなさい。道徳的な生活を送りなさい。私たちの名簿に名前を書きなさい。楽しみとしては、缶詰や、かきの夕食会や親睦会を楽しめばよろしい」

ああ、なんという恥ずかしいことか！　飢えた魂よ、よい羊飼があなたを呼んで、こう言っておられる。

「わたしは良き牧場で彼らを養う（飢えさせるのではない）。イスラエルの高い山に彼らのおりがある。彼らは良いおりに伏す」（エゼキエル三四・一四）ハレルヤ！「彼らはじゅうぶん食べて飽く」（ヨエル二・二六）そして、かなたの、あの輝かしい明日には、よい羊飼が天の雲のうちを歩いて、私たちを迎えに来られる。ご自分の羊と忠実な牧者たちを、備えに行かれた永遠のおりへ呼び寄せに来られるのである。

昔のサウロ、今のサウロ

『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか』（中略）『とげのあるむちをければ、傷を負うだけである』（使徒九・四、二六・一四）

サウロは、ダマスコへ通じる道を急ぎながら、憤りと怒りに満ちていた。サウロは、パリサイ人の中のパリサイ人であった。ガマリエルのひざもとで教えを受けたサウロである（使徒二二・三）。正しく歩み、律法をあらゆる点で守ったサウロである。神の前にきよく歩もうと努めた、きよさを求める人サウロである。すべてのことを『適宜に、かつ秩序を正して』行うべきだと信じていたサウロである（第一コリント一四・四〇）。そのサウロが、すっかり興奮し、心の奥底までかき立てられていた。クリスチャンと呼ばれるあの風変わりな民のことを思うたびに、彼は脅迫の息をはずませた（使徒九・一）。彼らは、イエスの血による救いを教え、聖霊のバプテスマを受け、他国の言葉で語っていたのである。

サウロは高い馬にまたがり、供の者たちを連れて、長い道を急いで下って行った。そのポケットは、彼が脅かしているこの人々に対する書類と訴えでふくらんでいた。

あのペンテコステの人々は、なんとしつこく、ずうずうしく、愚かで、間違っていたことか。いわゆるクリスチャンであるあの者たちは、聖霊に満たされたと言い張り、他国の言葉で語った。ペンテコステの日には酔っ払いのようにふるまい、町じゅうを大騒ぎに巻き込んだ。サウロは、『顔を火打石のようにした』（イザヤ五〇・七）。断固として、あの狂信者たちを迫害し、自分の民に彼らのことを警告し、できることなら彼らを絶やしてしまおうと決めていたのである。彼はステパノの死を見届けたではないか。自分で石を投げはしなかったが、そばに立っていた（使徒七・五八、八・一）。そのような異端を責め立てて打ち砕くのは、神のために良いことをし、自分の教会のために正しいことをしているのだと信じていたのである（ヨハネ一六・二）。

エルサレムでペンテコステの日に、あの人々は前代未聞の恥ずべきふるまいをしでかした。威厳があって礼儀正しいサウロのもとにも、その知らせはきっと届いていただろう。おそらく、大げさな噂が次々に耳に流れ込んだことであろう。その町に起こった大騒ぎと、混乱のように見えた有様についての噂である。小さな屋上の間にいた百二十人が、生まれながらの目から見れば、突然気が狂ったように見えたのである。彼らは叫び、学んだこともない言葉で話し、御霊が語らせるままに異言で語った。御霊の力のもとでよろめき、ふらつき、ついにはあざける者たちがあざ笑って叫んだ。

「あの人たちは新しい酒で酔っているのだ」（使徒二・一三）確かに、ペテロは立ち上がって、彼らが酔っているという言いがかりを退け、大胆にこう言い切った。

「今は朝の九時であるから、この人たちは、あなたがたが思っているように、酒に酔っているのではない。これこそ、預言者ヨエルが預言していたことである」（使徒二・一五～一六）けれども、証拠は確かに彼らに不利であった。彼らは確かに、酔った男や女のようにふるまい、異言で語り、主をあがめた。このことが言いひろめられると、群衆が駆け集まって来て、当惑し、驚き、惑った（使徒二・六～一二）。あの風変わりな民の上の御霊の現れを見て、不思議に思ったのである。

秩序を好むサウロにとって、これはみな、実に不快で、いとわしいことであった。サウロは、礼拝が静かに、『適宜に、かつ秩序を正して』、威厳のある儀式ばったやり方で行われるのを好んだのである。確かに、あのようなふるまいは宗教の恥である。間違ったペンテコステの人々に対しては、どんなにひどいことを言ってもしても、ひどすぎることはない。ペテロの説教のもとで、多くの人が回心したことを思い出すと、サウロは馬に拍車を当てた。サウロの目には、その人々は欺かれ、迷わされたと見えたのである。だからサウロは、その日、持てる

力のすべてをもってダマスコへ下って行くところであった。あのような誤りと偽りの教えをことごとく迫害し、絶やしてしまうことで、神のために良いことをし、自分の教会のために正しいことをしたいと切望していたのである。

今日、反対する者たちや現代のタルソのサウロたちは、ペンテコステの狂信者、異言の人たち、ホーリー・ローラー（聖なる転げ回り屋）など、さまざまな名を投げつけている。これら初代のクリスチャンたちが、そのどれかで呼ばれていたかどうかは、私は知らない。しかし、いずれにしても彼らは、聖霊に満たされた人々であった。学んだこともない他国の言葉で語るという、聖書的なしるしを伴って満たされたのである（使徒二・四、一〇・四六）。

賢く力あるサウロにとって、これはみな、ただ不必要に見えただけではない。愚かで、神を汚すことにさえ見えた。神の知恵は、人には愚かなことだからである（第一コリント一・一八～二五）。礼拝する教会や会堂は十分にあるではないか。わざわざ出て行って、家庭集会などに分かれて集まる必要があるのか。

サウロには、この一件はすべて、狂信的で誤った運動に見えた。彼は『家々に押し入って、男や女を引きずり出し、次々に獄に渡して、教会を荒し回っ』ていた（使徒八・三）。そして、『なおも主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった』（使徒九・一～二）。

ところが、『道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した』。彼は地に倒れ、そのとき、呼びかける声を聞いた。

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」（使徒九・三～四）

そこで彼は「主よ、あなたは、どなたですか」と尋ねた。すると主は言われた。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。とげのあるむちをければ、傷を負うだけである」彼は震え、驚いて言った。「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」（使徒九・五～六、二六・一四、二二・一〇）

ああ、サウロよ！　サウロよ！　何が起こったのか。サウロは、このすべてとあれほど熱心に戦い、独り善がりに反対してきた。それが神から出たものだと、人には決して彼を納得させることはできなかったであろう。人がいつまで理を説き、議論しても、何の役にも立たなかったであろう。ところが、突然、ああ、私はこの言葉が大好きである！　神は本当に、突然ことをなさる。ペンテコステの日には、『突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起って』きた（使徒二・二）。そして今ここでは、疑うサウロに、『突然、天から光がさして、彼をめぐり照した』のである（使徒九・三）。

ああ、愛する読者よ、私はこう書きながら、ひたすら祈っている。神学と学問と知恵の高い馬にまたがって、戦い、迫害しているどこかのサウロが、この言葉を読むとき、突然、光がその人を照らすように。そして、その人もまた地に倒れ、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と言われるイエスの御声を聞くように。

サウロが、ほこりっぽい道の真ん中で、あおむけに倒れている！　そんなことがありうるだろうか。人々が聖霊の力のもとでひれ伏しているのを見て、不必要で恥ずべきことだと思っていたサウロである。そのサウロ自身が、神の力に打たれて長々と倒れ、震え、驚いて叫んでいる。「わたしは何をしたらよいでしょうか」

ハレルヤ！　私はこう書きながら、叫ばずにはいられないほどである。今日の愛するサウロたちよ、これを読むあなたがたにも、神に思いどおりにしていただくなら、まったく同じ力が下るからである。サウロは、自分が迫害していたのは人々ではなくイエスであったと知って驚いたとき、どれほど震え、悔い改めたことだろう！　まことに『とげのあるむちをければ、傷を負うだけである』。

ああ！　神の力のもとにひれ伏していたそのわずかなあいだに、高慢で、かたくなで、独り善がりなサウロの心に、なんという変化が起こったことか！　地から起き上がったのは、なんと柔和で、砕かれ、へりくだったパウロであったことか。神の栄光に目がくらみ、何も見えなくなっていた（使徒九・八、二二・一一）。彼は手を引かれて行き、三日間、目が見えず、断食したあと、元どおり見えるようになり、バプテスマを受けた。そして、柔和に弟子たちとともにとどまり、まもなく自分でイエスとみことばを宣べ伝えるようになった。ところが、これを聞いた人たちはみな非常に驚いて言った。

「あれは、エルサレムでこの名をとなえる者たちを苦しめた男ではないか」（使徒九・二一）サウロは『ますます力が加わ』ったと書いてある（使徒九・二二）。また私たちは、彼が回心しただけでなく聖霊を受け、他国の言葉で語るさげすまれた人々の一人になったことを知っている。彼自身が、コリント人への第一の手紙十四章十八節にこう書いているからである。『わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する』。疑いもなく、パウロはとこしえに「あの仲間」になったのである。

今日のサウロたち

あの日以来、ほかにも多くのサウロがいた。マルティン・ルターや、暗黒時代のすべてのクリスチャンと戦ったサウロたちがいた。信じる者を火あぶりにし、その目をえぐり出し、言葉にできない仕方で拷問したサウロたちがいた。カルバンとノックス、フレッチャー、フィニー、ウェスレー、ブースを迫害したサウロたちがいた。殉教者を拷問台やギロチンにかけ、それで正しいことをしていると思っていたサウロたちがいた。教会が満ちあふれる力とペンテコステの栄光を回復していく、その新しい一歩ごとに、石と苦い言葉を投げつけてきたサウロたちがいた。再臨派の人々が初めてイエスがまもなく来られることを説いたとき、彼らと戦ったサウロたちがいた。きよめ派の人々が、心を尽くした明け渡しと、主に対するきよさを説いたとき、彼らと戦ったサウロたちがいた。今もなお、今日のサウロたちがいる。そして、イエスが来られるまでいるであろう。

今日のサウロたちは、昔のタルソのサウロとまったく同じように熱心に、まったく同じように良心的に、今日の真理と戦っている。今日の私たちのサウロたちは、昔のサウロと同じように、御霊の現れはまったく必要でも、ふさわしくもないと感じている。神の力に打たれて倒れることや、異言で語ることなどである。彼らは、地上の知識や神学、形式主義、儀式ばった聖職者の威厳という高い馬にまたがって、大またに進んで行く。そして、さげすまれたペンテコステの人々に対して、脅迫の息をはずませる。この人々は、今も救いときよさを説き、聖霊のバプテスマを説いている。御霊が語らせるままに他国の言葉で語るという聖書的なしるしを伴うバプテスマである。初代教会の弟子たちとまったく同じように説き、しるしと奇跡がそれに伴うのである（マルコ一六・二〇）。

今日の多くのサウロたちは、自分の務めを果たしていると思いながら、知らずに講壇を行ったり来たりしている。脅迫の息をはずませ、自分の信徒たちに、この同じ聖霊の人々を避けるようにと警告しているのである。この人々は、昔の日々と同じように、今日、聖霊を受けている。彼らの多くも、昔のサウロのように、この人々に対する書類をポケットに入れているのではないかと思う。彼らの多くは、この風変わりな民を非難するトラクトや文書で、ポケットをふくらませている。そして、この人々を迫害し、打ち砕こうとすることで、神に仕え、神のために良いことをしていると思っているのである。

信じる者たちが聖霊の力のもとにひれ伏し、異言で語り、御霊の力強い現れが彼らの上にとどまっている。それを見聞きすることは、生まれながらの人には、まったく愚かなことに見える（第一コリント二・一四）。今日の賢いサウロたちにとっても、昔のサウロたちにとってと同じく、混乱した不必要なことに見えるのである。

まことに、神の知恵は人には愚かなことである。神は今も、無きに等しい者を用いて有力な者をはずかしめられ、愚かな者を用いて知者をはずかしめられ、虫を用いて山を打たれる（第一コリント一・二七～二八、イザヤ四一・一四～一五）。けれども、神の腕は短くはない（イザヤ五九・一）。そして、私たちは今も同じ時代、聖霊の時代にいる。神は、時代を通して一歩一歩、ご自分の教会を、満ちあふれる力とペンテコステの栄光へと回復しておられる。へりくだって明け渡した土の器の上に、またその器を通して、神は再び大いなる力をもってご自分を現しておられる（第二コリント四・七）。

今日の多くのサウロたちは、初めは主と激しく戦った。彼らが戦っているのは個々の人ではなく、主イエスだからである。けれども、彼らは地に倒れ、突然、天から光がさすのを見た。彼らもまた聖霊を受け、聖書的なしるしを伴って、力と大胆さをもってみことばを宣べ伝え始めた。「これこそ預言されていたことだ」と人がどれほど説いても、決して納得しなかった多くのサウロたちが、神の大いなる力を感じた。そして、自分自身が地に倒れ、「主よ、わたしは何をしたらよ

いでしょうか」と叫んだのである。主は、すべてのかたくなな首と、強情なひざが、かがみ、ひれ伏すことを望んでおられる。あなたが馬から降り、へりくだって、主の前にちりの中に低く身をかがめることを望んでおられる。主は、昔のサウロを満たされたように、あなたを満たしたいと思っておられる。そうすれば、あなたの名はもうサウロとしては知られず、『いちばん小さい者』であるパウロとして知られるようになる（第一コリント一五・九）。

使徒行伝十九章で、パウロがエペソの弟子たちの上に手を置き、「聖霊を受けなさい」と言うのを見るのは、なんと栄光に満ちた光景であろう。そして、聖霊が彼らに下られるのを見、彼らが異言を語ったり、預言をしたりするのを聞くのである（使徒一九・六）。

愛するみなさん、主は、タルソのサウロにしてくださったことを、あなたにもしてくださる。なぜ、これ以上主に逆らうのか。天からの、またみことばからの、これほど圧倒的な光を前にして、どうして逆らうことができるだろうか。

「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげのあるむちをければ、傷を負うだけである」（使徒二六・一四）神の御業と神の民、聖霊の注ぎに対してける者は、霊的に干からびてしまうからである。そして、とげのあるむちをければ、まことに傷を負うだけだと思い知るのである。

聖霊のバプテスマを受けた小さな群れと戦い、昔のサウロのように彼らを迫害した教会や説教者は、これまで例外なく、まもなく乾いた荒れ地に陥った。以前は、その畑がどれほど花を咲かせ、実を結んでいたとしても、同じである。彼らは後の雨である聖霊の注ぎを拒んだ。受けた人々を自分たちの中から追い出した。聖書のとおりの仕方で入って来たいと切に願っておられた聖霊に対して、知らずに戸を閉ざした。そうするやいなや、その畑は少しずつ干からび、しおれ始めた。その力は衰え、消え始めたのである。

愛するみなさん、今や天から光が照っている。御霊が来られることと、人々の上に現される御霊の現れと力について、ひざまずいて神のみことばを読みなさい。そして、「主よ、わたしは何をしたらよいでしょうか」と叫びなさい。主はあなたを満たしてくださる。あなたは、昔のパウロのように、この喜ばしい話をほかの人々に教えずにはいられなくなる。あまりに満たされて、主への賛美を大声で叫ばずにはいられなくなる。あなたの存在の奥底から、『生ける水が川となって流れ出る』からである（ヨハネ七・三八）。もうこれ以上、逆らってはならない。

あの現れはどうなのか

踊ること、叫ぶこと、震えること、力のもとにひれ伏すこと、異言で語ること、解き明かし

はじめに

天幕のいたるところで力が下っていた。罪人は救われ、信じる者は聖霊のバプテスマを受けていた（異言で語るという聖書的なしるしを伴って）。病んだからだはいやされ、多くの人が躍り上がり、踊り、神を賛美していた。主の力に打たれて倒れた者も大ぜいいた。それを見て、私の心は喜びではちきれんばかりであった。私は両手を上げ、会衆の中の通路を行ったり来たりしながら、すばらしいあがない主が働いておられるその有様を賛美していた。

突然、キッドの手袋をはめた手が、私を引き止めるように腕に置かれた。品のある絹のガウンを着た婦人が、私を自分のそばに引き寄せてすわらせたのである。その隣には、立派で品のある夫がすわっていた。二人とも髪は雪のように白かった。非の打ちどころのない、よく仕立てられた服の線の一本一本が、洗練と教養を物語っていた。この愛すべき婦人はとても感じがよかった。私は喜びに満たされていたので、思わず両腕で抱きしめて口づけをし、「イエスに栄光あれ」と叫びたくなったのを覚えている。けれども、婦人の困り果てて取り乱した顔つきを見て、私はその思いを抑えた。婦人は早口で私に話し始めた。その胸は、せわしない息づかいと（「憤り」と言おうとしたが、これほど優しく上品な人に当てはまる言葉とは、とうてい思えない）で、上下していた。

婦人は話しながら、ガウンから細い金の鎖で下げた柄付き眼鏡を、かわるがわる使った。それを通して見つめたり、それでいくつかの現れを指したり（聖徒たちは踊り、叫び、神を賛美していたのである）、話に力を込めるために、それで自分の本を軽くたたいたりした。

「もちろん、私も神の力は信じています」と婦人は言った。「でも、ああ、あの騒々しさ、あのひどい現れ！　いったい何の役に立つのでしょう。すべてのことは『適宜に、かつ秩序を正して』行うようにと、パウロは言わなかったでしょうか（第一コリント一四・四〇）。たとえば、あの踊りや震えです。混乱のように見えますし、まったく必要ありません。それに、床に倒れて一時間も横たわっていることです。あれが品があるとか、ふさわしいとか、あなたは思いますか」と婦人は問いただした。「この躍り上がったり叫んだりすることもそうです。どうしてあの人たちは、心の中で静かに、秩序正しく神を賛美できないのでしょう。どうして感謝の静かな賛美歌で、まじめに礼拝を言い表せないのでしょう。ご存じでしょうが」と婦人は付け加えた。「あの人たちがこのひどい現れをやめさえすれば、世間もずっと彼らを重んじて、批判も迫害もやめるでしょうに。ああ！　ああ！　私はほんとうに心が乱れています。どうか教えてください。この現れはどうなのですか」

＊　＊　＊

多くの誠実なクリスチャンが同じ問いを抱いていることを思えば、今日、この大切な事柄を神のみことばの立場から見てみるのがよいのではないだろうか。コリント人への第一の手紙十二章七節から始めよう。そこには、こうある。

『各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』（第一コリント一二・七）

前後の言葉をすべて引くと、こうなる。『霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務は種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである』（第一コリント一二・四～七）。「ええ、でも、この現れは何の役に立つのですか」と、あなたは尋ねる。なんと、パウロは『全体の益になるため』と答えているのである。

「なるほど。でも、叫んだり、踊ったり、震えたり、力に打たれて倒れたりするような現れから、いったいどんな益が生まれるというのですか」と、あなたは尋ねる。

ちょっと待っていただきたい。これらのことを一つずつ取り上げていこう。けれども、まず言っておきたい。聖霊の力が人や集会の上にあるとき、御霊の力を消さずに現れだけを抑えることはできない。それは、火を消さずに空気をすっかり断つことができないのと同じである。水の流れを止めずに水道の栓を閉めることはできない。明かりを消さずに電灯のスイッチを切ることも、通話を断たずに電話線を切ることもできない。それと同じである。

生きた、いのちにあふれた、手で触れることのできる力があるところには、必ず現れがある。

こんろのガスの栓をひねり、マッチで火をつけてみなさい。熱い炎が上がる。ガスの圧力が強ければ強いほど、炎は大きくなる。

やかん

次に、冷たい水を満たしたまま、長いあいだ棚に置かれていたぴかぴかのやかんを下ろしてみなさい。静かで、冷たく、どんな教会の信徒でも満足するほど秩序正しいやかんである。それを熱い炎の上に置き、しばらくそのままにしておくと、まもなくやかんは、どうしても歌い出さずにはいられなくなる（火が弱ければ、やかんは歌うところまでしか行かないかもしれない）。けれども、熱い火の上に置き続けなさい。すると、まもなく湯気と蒸気が立ちのぼる。主の愛に温められた心から賛美が立ちのぼるのと同じである。熱くなればなるほど、やかんの中の現れは多くなり、ついには泡立ち、踊り、そこらじゅうに沸き立つのである。

愛する説教者よ、現れが気に入らないなら、ガスを、すなわち力を止めなさい。そうすれば、現れにそう長く悩まされることはない。あなたのそのやかんは、まもなく十分に静かに、十分に冷たくなり、礼儀と秩序についてのあなたのいちばん厳しい考えにさえかなうようになるであろう。

繰り返して言う。力があるところには、その力の現れがある。あなたの教会や集会や自分自身を、イエスの愛と御霊の力という熱い炎の上に置きなさい。そうすれば、あなたも、あのやかんのように、まもなく歌い出す。賛美の湯気が、外からではなく、あなたの存在のいちばん奥深くから立ちのぼる。そして、火が明るく燃えるにつれて、あなたの魂の中で泡が立ち、踊りが始まる。アーメン。お望みなら、ふたをしっかり閉めてみなさい。けれども、注ぎ口から吹きこぼれるだけである。注ぎ口もふさいで火にかけておけば、爆発が起こって、ふたを吹き飛ばすであろう。そして、やかんが火にかかっているかぎり、泡立ちと踊りは続くのである。ハレルヤ！

風は目に見えない。けれども、そこには力がある。風が木々のあいだを吹き抜けると、現れが起こる。木の葉が揺れ始めるのである。風が強ければ強いほど、力は大きく、現れも大きくなる。小枝も、大枝も、幹さえも揺れる。私は、あなたよりも大きな木々が、目に見えない風のこの目に見える力に打たれて、倒れ伏すのを見たことがある。

自然の働きが御霊の働きに似ている例は、ほかにもたくさん挙げられるだろう。けれども、自然の中のこうしたたとえから、神のみことばへと向きを変えよう。現れという主題について、聖書が何と言っているかを確かめよう。そして、聖書をこの主題についての権威としよう。

踊り

御霊のうちに踊ることは、神のみことばに照らして聖書的だろうか。そうである。みことばはそれに満ちている。踊りは主のものである。悪魔はただそれをまねようとしただけであり、ほかのたいていの偽物と同じく、これもお粗末なまねにしかならなかった。聖書が踊りについて言っていることを注意して読めば、歌と音楽と踊りには、主の教会の中に場所があることがわかる。今日、御霊のうちに踊ることを良しとしないあなたは、出エジプト記十五章二十節と二十一節も良しとしないのだろうか。そこには、こうある。『女預言者ミリアムはタンバリンを手に取り、女たちも皆タンバリンを取って、踊りながら、そのあとに従って出

てきた。そこでミリアムは彼らに和して歌った、「新しい歌を主にむかって歌え、彼は輝かしくも勝ちを得られた」』。大ぜいの女たちと、女預言者であり指導者であったミリアムが、踊りと叫びと音楽をもって主を賛美しながら出て行ったのである。

あなたは、同じように音楽と踊りをもって民を導いたモーセを良しとするのだろうか。サムエル記下六章十四節で『ダビデは力をきわめて、主の箱の前で踊った』とあるダビデを良しとするのだろうか。覚えているだろうが、ダビデの妻は窓の内側に立って、それを良しとしなかった（第二サムエル六・一六）。けれども、私はいつもこう信じてきた。ダビデの妻も、満ちあふれる賛美の潮が流れている外にいて、その音楽を聞くことさえできたなら、踊って主を賛美したくなったであろう。ああ、自我と形式の窓から外へ出て来なさい。そして、ダビデの妻が、現れを良しとせずにそれと戦ったために、死ぬ日まで子のない者とされたことを覚えなさい（第二サムエル六・二三）。神の力の現れと戦って、実を結ばない者、やせ衰えた者とされなかった個人や集会を、あなたは一つでも知っているか。私は一つも知らない。また、契約の箱を押さえようとして手を置いた者が、たちまち神の怒りに撃たれたことも覚えなさい（第二サムエル六・六～七）。

詩篇百四十九篇三節には、こうある。『彼らに踊りをもって主のみ名をほめたたえさせ、鼓と琴とをもって主をほめ歌わせよ』。詩篇百五十篇四節には、『鼓と踊りとをもって主をほめたたえよ』とある。エレミヤ書三十一章十三節には、『その時おとめたちは舞って楽しみ、若い者も老いた者も共に楽しむ』とある。使徒行伝三章八節によれば、足のきかない人がいやされたとき、彼は『踊りあがって立ち、歩き出した。そして、歩き回ったり踊ったりして神をさんびしながら、（中略）宮にはいって行った』。

彼らのあがない主であった同じ方が、今日の私たちのあがない主である。主は同じようにいやしてくださる。このような救い主を、どうして踊って賛美せずにいられるだろうか。

叫び

聖書を学ぶ者が、主の子供たちが主への賛美を叫ぶ権利を、一瞬でも疑うということは、ほとんどありえないように思える。みことばはそれに満ちているからである。覚えているだろう。『主の契約の箱が陣営についた時、イスラエルびとはみな大声で叫んだので、地は鳴り響いた。ペリシテびとは、その叫び声を聞いて言った、「ヘブルびとの陣営の、この大きな叫び声は何事か」』（第一サムエル四・五～六）。また、こうも書いてある。『ダビデとイスラエルの全家とは、喜びの叫びと角笛の音をもって、神の箱をかき上った』（第二サムエル六・一五）。詩篇は言う。『もろもろの民よ、手をうち、喜びの声をあげ、神にむかって叫べ』（詩篇四七・一）。

「陣営に叫びが上がる。ハレルヤ！
神に栄光あれ！
天にこだまが響く。ハレルヤ！
神に栄光あれ！」

まことに、「主の子供たちには、叫び、歌う権利がある」。私たちは今日、ヨシュア記六章五節に書かれているのと同じ戦いの中にいる。そこでは、「祭司たちが雄羊の角を長く吹き鳴らし、民はそのラッパの音を聞くと、みな大声で叫んだ。すると、町の石がきはくずれ落ちた」のである（ヨシュア六・五、二〇）。近いうちに、すばらしい叫び声が上がる。「主ご自身が、叫び声と、天使のかしらの声と、神のラッパとともに、天から下ってこられる」と書いてあるからである（第一テサロニケ四・一六）。なんと、主ご自身も叫ばれるのである。主は私たちの偉大な模範である。

まことに、私たちには叫ぶだけの値打ちのあるものがある。喜びはいつも外に現れる。野球の試合や競馬や政治の祝いの席などでの叫び声は、ふつうの、当然のこととして受け入れられている。叫び声がなければ、その日は気の抜けた日とされ、何かがひどくおかしい、何かが欠けていると思われるであろう。ほかでもないこの私たちの国で、平和の知らせがどのように迎えられたかを思い出しなさい。人々は自動車の警笛や汽笛を、鳴りっぱなしになるように縛りつけた。考え

られるかぎりのあらゆる音の出る道具が持ち出され、祝いの音を大きくした。今、私たちは、かつて戦われたうちで最も大きな戦いに勝利された王から、永遠の平和の宣言を聞いたのである。どうして叫ばずにいられるだろうか。悪魔のために叫ぶ人々は大ぜいいて、だれもそれを妨げない。だからこそ、イエスのために叫ぶ人々がいることを、私たちは神に感謝する。

叫びが御霊のうちにあるとき、それは実に深い所から出て、実に真実に、本物の響きがするので、だれも間違えようがない。悪魔はヘブルびとの陣営の叫び声をまねようとするであろう。けれども、それはうつろで、無理に出した音であって、本物の響きがしない。叫び声の騒がしさを好まない人は多い。けれども、そういう人々にはみな、イエスに同じ力と栄光で満たしていただき、魂の中に叫びを入れていただくように勧める。この世は、彼らがこれから住むどこよりも、はるかに静かな所だからである。天でヨハネは、大群衆の叫びと賛美を聞いた。彼らは「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、救とほまれと権力とは主のものである」と叫び、その民の声と叫びは、『多くの水の音、また激しい雷鳴のよう』であった（黙示録四・八、一九・一、六）。確かに、叫ぶことを嫌う人は天を嫌うであろう。さもなければ、その歌に加わることを学ばなければならない。ああ、これほどすばらしい救い主を仰いで、どうして主の賛美を叫ばずにいられるだろうか。また、地獄に投げ込まれる者たちについては、『そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』（マタイ一三・四二）。そこはきっと騒がしい所であろう。私は、泣き叫ぶ声よりも、叫びと喜びの声の騒がしさを聞くほうが、はるかによい。あなたもそうではないか。

ああ、愛するみなさん、叫びと踊りと喜びの音のゆえに神に感謝しよう。決してそれを恥じないようにしよう。どれほど多くの教派が、かつてはこれと同じように神の力をその上にとどめていたことか。それなのに、高慢に、尊大に、もったいぶるようになって、神のみこころに明け渡したままでいられなくなったのである。まもなく力は去り、アーメン席も去った。そして、ヨエル書一章十二節が言うとおりになった。『ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、ざくろ、やし、りんご、野のすべての木はしぼんだ』。『神の家から喜びと楽しみが絶えた』からである（ヨエル一・一二、一六）。かつて神の力と栄光をその上にとどめていながら、のちにこの力と戦った教会は、どれも今日、実を結ばずにいる。敵は、ペンテコステの人々にも、先に行った人々と同じことをさせたいと思っている。けれども、もし私たちがそのようなことをするなら、神は栄光の雲を私たちの上から引き上げられ、ほかの民を召される。喜んで先へ進み、主に思いどおりにしていただくことを恥じない民である。そして私たちも、先人たちがそうであったように、確かに信条と儀式と形式のもとに取り残されるであろう。

ペンテコステの日の聖霊の注ぎ（使徒二・四）は、神の力の力強い現れを意味していた。男も女もよろめき、ふらつき、異言で語り、酒に酔っていると言われた。それで人々は離れて行ったか。そうではない。その日、三千人ほどが教会に加えられたのである（使徒二・四一）。もし私たちが自分をペンテコステの者と呼び、集会所の戸口に『ペンテコステ』の看板を掲げているなら、その名が意味するすべてを支持しよう。さもなければ、名前を変え、戸口から『ペンテコステ』の看板を下ろし、教会の形式と儀式に戻ればよい。聖霊は、歓迎されない所に押し入ったり、ご自分の道と現れを無理に通したりは決してなさらない。かつて神の力に満たされ、動かされていた多くの栄えた集会が、御霊を消し、現れを批判し、抑えてきた。そして今日では、消すべき現れも、そしりを招く現れもなくなってしまった。神の超自然の力が外に現れるこの働きを、集会から取り除くのは、難しいことではない。ほんの少し批判し、良しとしない様子を見せるだけでよい。そうすれば、優しいはとである聖霊は翼を広げられ、ほかの住まいへと移って行かれる。主に思いどおりにしていただくほどへりくだり、現れを恥じない民の見つかる所へ行かれるのである。

ありがたいことに、私たちは、世に受けよう、世を喜ばせようとしなければならないところにまでは来ていない。たとえ「見せ物」にされ、物笑いの種になっても、どんな犠牲を払っても、神と神の御霊に道をお譲りしよう（ヘブル一〇・三三）。

力のもとで震え、おののくこと

力のもとで震え、おののくことについて言えば、こうである。永遠の、全能の、万物を治める神の大いなる力が、弱い地上のからだにじかに触れるとき、あるいはその上に動くとき、震えとおののきが起こることが実に多い。それは人が考えるような恐れによるものではなく、力によるものである。モーセは「わたしはひどく震え、おののいている」と言った（ヘブル一二・二一）。使徒行伝には、人々の『集まっていた場所が揺れ動き』とある所がある（使徒四・三一）。

ヘブル人への手紙十二章二十六節は言う。『あの時には、御声が地を震わせた。しかし今は、（中略）「わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう」』。パウロが主の御前でどのように震えたかを見なさい（使徒九・六）。ダニエルは、自分がひどく震えおののいたことを語っている。また、ともにいた人々については、彼らが『大いにおののいて』と言っている（ダニエル一〇・七、一一）。教会の歴史によれば、この現れは時代を通してずっと珍しいものではなかった。現代に下ると、クエーカー（震える者）がその名で呼ばれるようになったのは、彼らが神の力のもとで震え、おののいたからであった。震えるメソジストなども挙げられるであろう。これは、今日私たちのただ中に見られるのと同じ力である。

力のもとにひれ伏すこと

「打たれて倒れ、ひれ伏し、力のもとに横たわることについては、どうなのですか」少しも品がなく、ふさわしくも見えない、とあなたは言う。では、ペテロは品があり、ふさわしく見えただろうか。屋上で夢心地になって横たわり、大きな布のような入れ物が降りて来るなどの幻を見たときのことである（使徒一〇・九～一六）。パトモス島のヨハネはどうか。主（イエス）の『足もとに倒れて死人のようになった』ときのことである（黙示録一・一七）。幻のうちに横たわったダニエルはどうか（ダニエル八・一八、一〇・九）。イエスがご自分を現されたとき、馬から道のほこりの中に落ちたサウロはどうか（使徒九・三～四）。それはまるで、イエスが勝利されたとき、サウロの両肩を地に押しつけられたかのようであった。サウロは、その場ですぐに降参した。確かに、それは少しも品のあることではなく、「肉」や「高慢」が誇れるようなことは何一つなかった。私もそう思う。実のところ、「肉」と「高慢」はひどく恥じ入り、屈辱を受けたので、望みを失って降参し、その場で死んでしまった。けれども、ああ、その代わりに来た謙遜の御霊のいのち、神の力を知る知識はどうであろう！

イザヤやエレミヤなど、主の前にひれ伏した人々をさらに挙げることもできる。初期のメソジスト教会や、救世軍や、ウェールズの信仰復興でのひれ伏しを挙げることもできる。今日も、世界じゅうで、神が御霊を注いでおられる所ならどこでもそうである。私は天に行ったら、御使たちと人々が主の前にひれ伏すのを見ると思っている。彼らは「王の冠を持ち出して、主をすべての者の主として冠をかぶせる」のである。

異言で語ることと解き明かしは聖書的である

イザヤ書二十八章十一節には、「どもる唇と異国の舌とをもって、主はこの民に語られる」とある。イエスご自身も言われた。『信じる者には、このようなしるしが伴う。（中略）新しい言葉を語り』（マルコ一六・一七）。使徒行伝二章四節では、聖霊に満たされた人々が、『御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』。使徒行伝十章四十六節と十九章六節も同じである。また、パウロはコリント人への第一の手紙十四章で、こう言っている。『異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい』。また、集会では『もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである』（第一コリント一四・一三、二七）。

本物と偽物

御霊の現れは聖書的だろうか。は、い。すべての現れが聖書的だろうか。い、い、え。どうすれば違いを見分けられるのか。御霊のうちにあれば、本物と偽物を見分けるのはたやすい。顔の輝きが違い、声の響きが違い、威厳と聖さがある。徳を高め、築き上げるものがある（ただし、ここで覚えておきたい。徳を高

める現れについてのあなたの考えと、神の考えとは違うことがある。もしあなたが、百二十人が酒に酔った人のようによろめき、ふらつくのを見ていたなら（使徒二・一三、一五）、徳を高めるものとは思わなかったかもしれない。けれども、そこには神がおられた。ペテロは、彼らが御霊に満たされたのだと言った。そして、その日、三千人ほどが教会に加えられたのである）。

では、私たちはすべての現れが御霊のうちにあると主張するのか、とあなたは尋ねる。私たちは答える。そうではない。悪魔は、ほかのあらゆるものをまねようとしたように、現れもまねようとしてきたからである。また、肉による現れもある。神がご自分を現され、自分を用いてくださることを待ちきれずに、主より先に走ってしまう人々によるものである。

しかし、神から出たのではない現れが集会にあったら、どうすればよいのか

御霊から出たのではないものを恐れて、聖霊を消すべきだろうか。決してそうではない。敵が偽物を作ろうとしたとき、アロンがしたようにしなさい。覚えているだろう。アロンが自分のつえを投げると、それはへびになった。すぐに魔術師たちもおのおの自分のつえを投げ、それらはたちまちへびになった。モーセとアロンは、神に従ったために敵に現れる機会を与えてしまったと、嘆いたり悔やんだりし始めただろうか。とんでもない。彼らの神は悪魔よりも大きな方であった。彼らのへびは口を開け、ほかのへびをみな、すっかり見えなくなるまでのみ尽くした（出エジプト七・一〇～一二）。同じように、私たちが主に思いどおりにしていただくなら、まことの聖霊は、敵のあらゆる策略と手口をのみ尽くされ、だめにしてくださる。主に思いどおりにしていただくなら、あなたがこの戦いで戦う必要はない。主がすべてをしてくださり、何の争いもなかった場合よりも大きな栄光をご自分に帰される。偽物があるので、本物はいっそう明るく輝く。契約の箱がただ中にあるとき、地上の神々はみな、その前に倒れて砕かれなければならない（第一サムエル五・三～四）。ハレルヤ！

敵にまさる方

多くの指導者は、敵をひどく恐れているように見える。まるで、「大きな、大きな、あ、く、ま」の猛攻から「哀れな小さな神さま」を守らなければならないかのようにふるまうのである。けれども、ああ、愛するみなさん、私たちの神は大きく、偉大で、高く、広い方である。神は天に座しておられ、地は神の足台である（詩篇二・四、イザヤ六六・一）。海は神のたなごころにあり、山々は神のはかりの上の小さなちりにすぎない（イザヤ四〇・一二、一五）。神は敵にまさる方である。神が望まれるときに、望まれる所で、望まれる仕方で、神に思いどおりにしていただきなさい。そうすれば、地は震え、神の敵は、つむじ風の前の雲のように、神の前から散らされるであろう（詩篇六八・一）。

主は今日、「しるしと奇跡」の民を得ようとしておられる。世の見せ物となる民である。聖霊は今日、ご自分を知らせる広告係を、ご自分で務めておられる。ペンテコステの日に、群衆が駆け集まって来て、「これは、いったい、どういうわけなのだろう」と叫んだときと同じである（使徒二・一二）。

まもなく来る驚くべき現れ

愛するみなさん、近いうちに、大いなる現れがある。あなたがこれまでに聞いたことも、想像したこともないほど大きな揺れ、大きな躍り上がりと叫びである。主にあって死んだ人々の墓は、揺り動かされて大きく開かれる。そして、その人々とともに、生き残っている人々の解き放たれた魂は、高く躍り上がり、長い長いあいだ、この地に戻って来ることはない（第一テサロニケ四・一六～一七）。そして、叫び声！　ああ、花婿が力と威光をまとって天から下って来られるのをこの目で見るとき、なんと勝ち誇った、勝利の、喜びの叫びが空を裂くことだろう。その日には、なんという現れがあることか！　天のあらゆる楽隊、あらゆる弦楽器がそこにある。聖徒たちが主の御前に引き上げられるとき、どの口も主への賛美の叫びに満たされる。彼らは、その頭にとこしえの喜びをいただき、歌いながら来るのである（イザヤ三五・一〇）。

それまでのあいだ、愛する人よ、主にあなたを思いどおりにしていただきなさい。『御霊を消してはいけない』（第一テサロニケ五・一九）。御霊が望まれるままに、水のおもてを動いていただきなさい。創世記一章で、御霊が水のおもてを動かれ、神が「光あれ」と言われると、光があった（創世記一・二〜三）。そのときから、現れがあったからである。神のことばによって月と星が現れ出たその瞬間から、今日に至るまで、そして永遠に至るまで、そうである。神のおられる所、神の動かれる所、神の語られる所には、神の臨在と力の現れがあるであろう。

聖霊を受けよ

イエスは、『もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである』と言われる（ヨハネ一四・一五）。私たちが『聖霊を受け』ることも、主のいましめの一つである（ヨハネ二〇・二二）。神のみことばは、聖霊が信じる者の生活の中でなさる働きがどれほど大切かを、繰り返し語っている。バプテスマのヨハネも、荒野でこのことを宣べ伝えて言った。「わたしのあとから来られる方がある。わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない。わたしは水であなたがたにバプテスマを授けるが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになる」（マルコ一・七～八）。

私たちは今も聖霊の時代に生きている。そして、イエスが再び来られるまでそうである。このことがよくわかれば、聖霊の働きがどれほど大切かが、すぐにわかる。救い主イエスは、失われた罪人の世をあがなうために血を流された。そして天に昇られ、父の御座に着いておられる（黙示録三・二一）。待っている花嫁が、空中で主に会うために引き上げられる備えのできる日までである（第一テサロニケ四・一七）。けれども、この長いあいだ、主は私たちを孤児のまま捨ておかれたのではない。別の助け主、すなわち聖霊を送ってくださった。私たちをあらゆる真理に導いてくださるためである（ヨハネ一四・一六～一八、一六・一三）。聖霊は、イエスのものを受けて私たちに知らせてくださるために来られた方である（ヨハネ一六・一四）。だから、私たちの生活の中での聖霊の務めを理解し、聖霊に導かれることは、なんと大切なことであろう。

御霊の最初の働きは、私たちがまだ罪人であるうちに、私たちの生活の中で始められる。御霊が引き寄せてくださらなければ、だれも父のもとに来ることはできないからである。だから、聖霊は罪人と共におられて、罪を示して悟らせてくださる。イエスがいなければ自分がどれほど無力で、失われた者であるかを見せてくださる。そして、罪人が悔い改める気になると、聖霊はその悔い改めた人を、罪人のいちばんの友であるイエスの足もとへ導いてくださる。

さて、聖霊は罪人の罪をきよめ去ることも、罪人を救うこともおできにならない。イエスがすべてを支払ってくださったからである。私たちはすべてをイエスに負っている。そして私たちは、信仰によって、『世の罪を取り除く神の小羊』であるイエスに叫び求める（ヨハネ一・二九）。血が罪人の心に注がれる。すると、御霊みずから、その人の霊と共に、その人が今や神の子であることをあかしてくださる（ローマ八・一六）。きよめるのはイエスの尊い血であり、きよめが成し遂げられたことを私たちの心にあかしするのは御霊である。

罪人と共におられて罪を示してくださったその同じ聖霊が、新たに回心した魂とも共におられる。義をあかしして、その人を完全へと導いてくださるためである（ヨハネ一六・八、ヘブル六・一）。さらに聖霊は、きよめられた魂のうちに入り、それを聖霊の宮にしようとしておられる（第一コリント六・一九）。

ここで、御霊が「共に」おられることと、御霊が「うちに」おられることの違いを強調したい。イエスは弟子たちに、あなたがたと共にいる方が、あなたがたのうちにいるようになる、と言われた（ヨハネ一四・一七）。それから、彼らに息を吹きかけて、『聖霊を受けよ』と言われたのである（ヨハネ二〇・二二）。

ある人は言う。「ああ、でも、私は救われたときに聖霊を受けたことを知っています。あれほどの喜びと平安があり、魂の中にあれほどのあかしがあったのですから」いいえ、愛する人よ、あなたが受けたのは、救い主としてのイエスであって、聖霊ではない。救いという大いなる働きを軽く見てはならない。イエスは喜びと平安を与えてくださり、あなたと共におられる御霊はこのあかしを与えてくださるからである。けれども今、救いと献身のあとで、聖霊はあなたのうちに入ろうとしておられる。聖霊がとどまるために入って来られるとき、あなたにはそれがわかる。聖霊は、あなたの存在の隅々までを満たしてくださり、あなたの魂をあふれるほどに潤してくださる。ついには、あなたのいちばん奥深くから

生ける水の川が流れ出る（ヨハネ七・三八）。そして、御霊が語らせるままに、あなたは異言（習ったこともない言葉）で語るのである（使徒二・四）。

聖霊を受けるとき、「受けたと思う」というようなあいまいさはない。あなたは、パウロ、ペテロ、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、そのほかの弟子たちみなが受けたのと同じ、聖書的なしるしを受ける。イエスの母マリヤが受けたのと同じ、エペソやカイザリヤの人々が受けたのと同じしるしである。すなわち、聖霊に満たされたあとに、異言で語ることが伴う。御霊が入って来られることは、まことに確かである。だから、あなたが生きているかぎり、聖霊を受けたことをほんの一瞬でもあなたに疑わせることのできる者はいない。あなたは章と節を指で押さえることができるからである。使徒行伝二章四節を押さえて、「私は百二十人と同じように聖霊を受けた」と言うことができる。十章四十六節を押さえて、「私はコルネリオの家の信者たちと同じように受けた」と言うこともできる。また、十九章六節を押さえて、エペソの弟子たちと同じように聖霊を受けたことは疑いもない、と大胆に言いきることもできる。あなたも同じ聖書的なしるしを受け、異言を語ったのだからである。御霊が入って来られるとき、あなたも今日、昔の日々と同じように、このしるしを受けるのである。

こうして聖霊の宮とされたのだから、いつも聖霊に思いどおりにしていただきなさい。ほかのすべてのものに目を閉じるなら、聖霊は父のものを受けて、あなたに知らせてくださる。聖霊の扱いに謙遜に従い続けるなら、あなたは『上から力を授けられる』（ルカ二四・四九）。聖霊は、『言葉にあらわせない切なるうめき』をもって、あなたを通して祈ってくださる（ローマ八・二六）。聖霊に思いどおりにしていただくなら、聖霊は、『言葉につくせない、輝きにみちた喜び』をもって、あなたを通して喜んでくださる（第一ペテロ一・八）。

ああ、愛するみなさん、あなたがたの生活には、聖霊がこれほどまでに必要なのである。今日、聖霊があなたと共におられるなら、心を開いて、聖霊に入って来ていただきなさい。『捜せ、そうすれば、見いだすであろう』（マタイ七・七）。けれども、聖書の方法で受け、聖書的なしるしを伴う、本物の聖書的な体験に届かないうちに、決して求めるのをやめてはならない。

お言葉どおりに

『そこでマリヤが言った、「わたしは主のはしためです。お言葉どおりこの身に成りますように』』（ルカ一・三八）

上の言葉を語ったのは、処女マリヤ（のちにイエスの母となった）であった。主の御使がマリヤに、マリヤについての神のみこころを語ったのである。すなわち、処女であるマリヤが、幼子キリストを産むということであった。きっと、多くの思いが稲妻のようにマリヤの心をよぎったことであろう。このことが自分に招くそしりと誤解である。母はわかってくれないだろう。父は誤解するだろう。いいなずけの夫ヨセフは、自分を悪く思うだろう。隣人たちは、いわれのない非難を浴びせるだろう。さらに悪いことに、自分の姿が幻のようにひらめいた。当時のならわしのとおり、おそらく広場に立たされ、辱められ、あざけられ、最も恥ずべきやり方で石で打ち殺される自分の姿である。けれども、そのような先行きを前にしながら、マリヤは、御使を通して語られたのが神の御霊であることを知っていた。そして、ひるむことなく神の御顔を見上げ、従順にこう言ったのである。

『わたしは主のはしためです。**お言葉どおり**この身に成りますように』

ああ！　そこに秘訣があったのである。お、こ、と、ば、ど、お、り。私たちに起こることが何であれ、それが神のみことばのとおりであるかぎり、すべては良くなる。今日、夫や妻、父や母、子供たち、隣人や牧師が何と言おうと、あなたは神のみこころに「はい」と言えるか。

「どれほど中傷を招こうとも、たとえ私の名が悪しきものとして捨てられるような立場に置かれようとも、主よ、ごらんください、私はここにおります。お言葉どおりこの身に成りますように」

マリヤは、いつまでも自分の立場を説明して回ったり、自分の潔白を明かそうとしたりする必要はなかった。マリヤがしなければならなかったのは、神のみこころに永遠の「はい」を言うことだけであった。すると神は、ご自分の者の潔白をすばらしく明かしてくださり、マリヤのそしりは栄光に変えられたのである。

今日、私たち一人一人に対する神の最も高い目的は、昔のあの処女のように、私たちが周りの人々にキリストのいのちを生み出すことである。私たちは、私たちの主イエス・キリストのあがないの血によって、清く、心の純粋な処女とされた。けれども、周りの世に真にキリストを生み出し、現すためには、聖霊におおわれなければならない（ルカ一・三五）。また、どんな犠牲を払っても、聖霊の御手に明け渡しきっていなければならない。そうしてこそ、聖霊の尊いみこころが、私たちの生活の中で完全に成し遂げられるのである。

「お、こ、と、ば、ど、お、り」というこの言葉は、クリスチャンの新しい体験の一つ一つの基調を成している。神は、「主のみことばのとおり」以外のやり方では、決して働かれない。罪人がイエスのもとに来るときは、どうしても主のみことばのとおりに来なければならない。罪を悔い改め、世を捨て、尊い血によって新しく生まれるのである。この血がなければ、罪のゆるしはない（ヘブル九・二二）。

罪人は不義をあとにしなければならない。そして、みことばによれば、イエス・キリストは、ただ一つの単純な条件で、私たちの罪をゆるしてくださる。また、すべての不義から私たちをきよめてくださる。真実で正しい方だからである。その条件とは、私たちが自分の罪を告白することである（第一ヨハネ一・九）。

みことばによれば、主は罪をゆるしてくださるだけでなく、すべての不義から私たちをきよめてくださる。実のところ、すべての不義からまだきよめられていない罪人は、まだ救われていない。『不義はすべて、罪である』からであり、『罪を犯す者は、悪魔から出た者である』からである（第一ヨハネ五・一七、三・八）。また、『きよくならなければ、だれも主を見ることはできない』とも言われている（ヘブル一二・一四）。だから、イエスの血によってきよめられ、聖なる者とされていなければ、私たちは天に入ることも、神を見ることもない。それゆえ、みことばによれば、きよさに届かないものは、新しく生まれた体験とは言えない。私たちは義であるか、さもなければ不義であるかのどちらかであって、中間はない。そして、雪のように白くきよめるのは、イエスの血である（イザヤ一・一八）。罪は罪である。内在する罪であろうと、アダムの罪であろうと、実際に犯した罪であろうと、どんな名で呼ぼうと、罪は罪である。そして、そこには「どんな」罪も入ることはできない（黙示録二一・二七）。『御子イエスの血が、**すべての**罪からわたしたちをきよめるのである』（第一ヨハネ一・七）。

主のみことばのとおりにきよめられ、聖なる者とされた信者は、さらに進んで、こう叫び求めなければならない。「ああ、主よ、お言葉どおりに私を聖霊で満たしてください。私の牧師や教会の定めが、私はこう受けるべきだと言うとおりにではなく、**お言葉どおりに、ああ、主よ**」

主のみことばのとおりであり、聖書のラベルが貼られている体験でなければ、ほかのどんな体験にも満足してはならない。主のみことばによれば、聖書の時代に聖霊に満たされた人々は、異言を語って神をさんびした（使徒二・四、一〇・四六、一九・六、第一コリント一四・一八、三九など参照）。また、同じみことばによれば、父なる神は、『主なるわたしは変ることがない』と言明しておられる（マラキ三・六）。イエスは、「わたしは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない」と言われる（ヘブル一三・八）。また、天地は滅びても、主のみことばは決して滅びることがないと、私たちは教えられている（マタイ二四・三五）。

ああ、愛するみなさん、あなたは、主のみことばのとおりの体験を慕い求めていないか。それは、『同じくらい良い品』と記された、何か二十世紀の新しい銘柄ではない。聖書の方法で受け、前の段落に挙げた聖書的なしるしを伴う、本物の、まことの聖書的な体験である。もちろん、慕い求めているであろう。それなら、あなたがこれらの言葉を読んでいる今、昔マリヤの上にとどまったのと同じように、神の御使があなたの周りにとどまっている。主の御顔を見上げなさい。悪魔は、あなたをおびえさせて拒ませようと、そしりや誤解や中傷の幻をあなたの前に持ち出すかもしれない。それでもかまわずに、こう言いなさい。

「はい、主よ、私はここにおります。『わたしは主のはしためです。**お言葉どおり**この身に成りますように』」そして、決して求めるのをやめてはならない。本当にみことばのとおりであり、そこに記されている同じような体験に引けを取らない体験を受けるまでである。こうして、キリストのいのちが世に生み出され、主の星が遠くから見えるようになるのである（マタイ二・二）。

そして、主のみことばによれば、完全に勝利する生活があり、神のいやしがあり、力と栄光があり、言いつくせない富が蓄えられている。「お、こ、と、ば、ど、お、り」に生き、祈り、自分を明け渡す人々のためにである。

若い働き手が出会いがちな二十四の問いと、みことばから示すべき答え

（注）聖霊のバプテスマが、他国の言葉で語るという聖書的なしるしを伴うことは、まったく聖書的であり、神のみことばに基づいている。この主題について、みことばほど明白なものはない。聖書の手引きや用語索引を使って聖書を学んでいくと、聖書全体を通して聖句どうしがぴったりと組み合わさり、対になる聖句を欠いたものは一つもないことがわかる。

問一　聖霊とは、どなたか。何か。

聖霊は、神格のうちで三番目に語られている方である。ヨハネの第一の手紙五章七節を見なさい。

答　「天においてあかしをするものが三つある。父と、言と、聖霊とである」（第一ヨハネ五・七）

問二　聖霊が感化力ではなく人格であることが、どうしてわかるのか。

答　イエスご自身が、聖霊を人格として繰り返し語られた。たとえば、ヨハネによる福音書の十四章、十五章、十六章である。イエスは御霊を一度も「それ」とは呼ばれず、いつも「彼」と呼ばれた。

「彼は、いつまでもあなたがたと共にいる。すなわち真理の御霊である。この世は彼を受けることができない。世は彼を見もせず、彼を知りもしないからである。しかし、あなたがたは彼を知っている。彼があなたがたのうちに住むからである。彼はあなたがたにすべてのことを教え、彼はわたしについてあかしをする。彼がきたら、彼は罪と義とさばきとについて、世の人の目を開く。彼はあなたがたをあらゆる真理に導く。彼は自分から語るのではない。彼はきたるべき事をあなたがたに知らせ、彼はわたしに栄光を得させる」（ヨハネ一四・一六〜一七、二六、一五・二六、一六・八、一三〜一四）

さらに、私たちは、聖霊が次のことをなさるのを知っている。ご自分のしもべを任じられ、遣わされる（使徒一三・二〜四、二〇・二八）。どこで宣べ伝えるべきかを指示される（使徒八・二九）。パウロがビテニヤに行くのを許されない（使徒一六・六〜七）。何を宣べ伝えるべきかをパウロに教えられる（第一コリント二・一三）。慰めてくださる（使徒九・三一）。

問三　聖霊のバプテスマを宣べ伝えるときに、聖霊が感化力ではなく人格であることを証明できることが、なぜ非常に必要なのか。

答　もし聖霊が単なる感化力にすぎないなら、聖霊を少しずつ分けて受けることができることになる。そうなると、信仰を言い表している人々は、エペソ人への手紙四章五節に言われている「一つ」のバプテスマを求めて受けなくても、言いわけが立つことになってしまう。「まあ、私はいくらかの聖霊を受けました」と言えばよいからである。また、御霊の多くの油注ぎを、「一つ」のバプテスマと混同することになる。そして聖霊は、たとえば一杯ずつ、少しずつ受けることのできる、器に入った水のように見なされることになる。これが聖書的でないことは、みことばに記されている聖霊のバプテスマと比べれば、すぐにわかる（使徒二・四、八・一七、一〇・四六、一九・六）。

けれども、聖霊が人格であるという事実を認めるなら、すぐにわかる。聖霊が入って来られ、からだをご自分の宮とされるとき、聖霊はまるごと入って来られる（あるときに一部分、別のときに別の一部分というのではない）。そして人は、聖霊のすべてを受けたか、まったく受けていないかのどちらかである。すな

わち、聖霊が人格として、文字どおり入って来られるという意味においてである。油注ぎは多くあるかもしれない。けれども、バプテスマはただ「一つ」である。

問四　聖霊が来られること、またそれに伴う力の注ぎは、旧約聖書か、新約聖書の四福音書のどちらかで約束されていたか。

答　はい。聖霊が来られることは、旧約聖書でも新約聖書でも約束されていた。父によっても、御子によっても約束されていたのである。

問五　終りの時に聖霊がはっきりと、文字どおり来られることについて述べている聖句のいくつかが、どこにあるかを教えてもらえないか。

答　聖霊の時代について述べている聖句はたくさんあるが、ここにはそのうちのいくつかを載せる余地しかない。この時代について、神は預言者イザヤを通して言われた。

「どもる唇と異国の舌とをもって、主はこの民に語られる。主はさきに彼らに言われた、『これが安息だ、疲れた者に安息を与えよ。これが休息だ』と。しかし彼らは聞こうとはしなかった」（イザヤ二八・一一～一二）

預言者ヨエルを通して、

「シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び楽しめ。主はあなたがたにほどよく前の雨を賜い、またあなたがたのために雨を降らせ、初めの月に前の雨と後の雨とを降らせられる。

打ち場は穀物で満ち、石がめは新しい酒と油とであふれる」（ヨエル二・二三～二四）

『その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る。

その日わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ』（ヨエル二・二八～二九）

ゼカリヤを通して、

「後の雨の時に、雨を主に請い求めよ。主は輝く雲を造り、大雨を人々に賜い、野の青草をおのおのに賜わる」（ゼカリヤ一〇・一）

バプテスマのヨハネを通して、

『わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう』（マタイ三・一一）。福音書には、聖霊が来られることについての約束がたくさんある。

イエスは言われた。

「しかし、わたしはほんとうのことをあなたがたに言うが、わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、彼をあなたがたにつかわそう。

彼がきたら、罪と義とさばきとについて、世の人の目を開くであろう」（ヨハネ一六・七～八）

「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。彼は真理の御霊である。この世は彼を見ようともせず、知ろうともしないので、彼を受けることができない。あなたがたは彼を知っている。なぜなら、彼はあなたがたと**共に**おり、またあなたがたの**うちに**いるようになるからである」『しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう』（ヨハネ一四・一六～一七、二六）「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主、すなわち、父のみもとから来る真理の御霊が下る時、彼はわたしについてあかしをするであろう。

あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのであるから、あかしをするのである」（ヨハネ一五・二六～二七）

『このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか』（ルカ一一・一三）

『信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる』（マルコ一六・一七～一八）

『ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう』（使徒一・五、八）

『見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい』（ルカ二四・四九）

問六　イザヤが二十八章十一節で「どもる唇と異国の舌」と言ったとき、この聖霊のバプテスマと異言で語ることを指していたと、どうして確かにわかるのか。

答　パウロが、コリント人への第一の手紙十四章二十一節と二十二節で、はっきりそう言っているからである。『律法にこう書いてある、「わたしは、異国の舌と異国のくちびるとで、この民に語るが、それでも、彼らはわたしに耳を傾けない、と主が仰せになる」。

このように、異言は信者のためではなく未信者のためのしるしであるが、預言は未信者のためではなく信者のためのしるしである』

問七　使徒行伝に記されているこの聖霊のバプテスマが、バプテスマのヨハネの言ったもの（マタイ三・一一）であると、どうしてわかるのか。

答　イエスご自身が、使徒行伝一章五節に記されている言葉によって、それを明らかにしておられるからである。

問八　イエスが弟子たちに息を吹きかけられたとき（ヨハネ二〇・二二）、弟子たちが聖霊を受けなかったと、どうしてわかるのか。

答　聖霊はまだ与えられていなかったからである。イエスご自身がはっきりと述べておられる。聖霊が遣わされる前に、イエスは高く昇られ、助け主を遣わしてくださるように父にお願いしなければならなかった（ヨハネ一六・七）。また、雲がイエスを彼らの目から隠す前に、イエスが語られた最後の言葉も、このことを疑いの余地なく証明している。みことばにこうあるからである。

『そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」』（使徒一・四、八）

問九　では、イエスが彼らに息を吹きかけて、『聖霊を受けよ』と言われたのは、どういう意味だったのか。

答　イエスは、ほかの多くの箇所（ルカ二四・四九、使徒一・四など）でなさったのと同じように、聖霊を受けるようにと、ただ命じておられたのである。弟子たちは、聖霊が父から遣わされるまで、聖霊を待ってとどまっていなければならなかった。

問十　聖霊の務めとは何か。

答　聖霊の務めには三つの面がある。（一）罪人に対して、（二）新しく生まれた魂に対して、（三）バプテスマを受けた信者に対してである。

（一）罪人に対する聖霊の務めは、次のとおりである。

イ　罪人に罪を示し、責めること（ヨハネ一六・八）。

ロ　イザヤ書一章六節に書かれているとおりの、ほんとうの有様を罪人に見せること。

ハ　使徒行伝二章三十七節でなさったように、罪人の心を刺すこと。

ニ　罪人をイエスのもとに引き寄せること（ヨハネ六・四四）。

（二）新しく生まれた魂に対する聖霊の務めは、次のとおりである。

イ　働きが成し遂げられたとき、あかしをすること。

『御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる』（ローマ八・一六）

『神の子を信じる者は、自分のうちにこのあかしを持っている。神を信じない者は、神を偽り者とする。神が御子についてあかしせられたそのあかしを、信じ

ていないからである』（第一ヨハネ五・一〇）

言いかえれば、罪人と共におられて罪を示してくださった方が、今もなお若いクリスチャンと共におられ、働きが成し遂げられたことをその人と共に喜んでくださる。そして、主の約束を受けることのできる所にまで、その人を導こうとしておられる。その約束とは、「御霊はあなたがたと**共に**おり、あなたがたの**うちに**いるようになる」というものである（ヨハネ一四・一七）。

ロ　使徒行伝二章四節のとおりに、その人に聖霊のバプテスマを授けること。

（三）バプテスマを受けた信者における聖霊の務めは、次のとおりである。

イ　聖霊は教師である（ヨハネ一四・二六）。

ロ　キリストについてあかしをされる（ヨハネ一五・二六）。

ハ　導かれる（ヨハネ一六・一三）。

ニ　キリストに栄光を得させられる（ヨハネ一六・一四）。

ホ　慰めてくださる（使徒九・三一）。

ヘ　深いことをきわめられる（第一コリント二・一〇）。

ト　祈りにおける私たちの助け手である。ローマ人への手紙八章二十六節、またコリント人への第一の手紙十四章二節を読みなさい。

問十一　聖霊を受けることは、今日のすべての信者に与えられた特権か。

答　はい。使徒行伝二章三十八節と三十九節にこうある。『すると、ペテロが答えた、「悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう。

この約束は、われらの主なる神の召しにあずかるすべての者、すなわちあなたがたと、あなたがたの子らと、遠くの者一同とに、与えられているものである」』

神の賜物は変えられることがない（ローマ一一・二九）。イエスは言われた。『わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう』（ヨハネ一四・一六）。

問十二　神の子供はみな、たとえ過去に魂を勝ち取ることや、いやしや、悪霊を追い出すことなどで神に大いに用いられてきたとしても、聖霊のバプテスマを受ける必要があるのか。

答　はい。ペテロやほかの弟子たちは、そのように大いに用いられていたが、それでもなお聖霊と力の授与を必要としていた。それは、引いていく油注ぎのようなものではなく、とどまるバプテスマでなければならなかった。

問十三　このバプテスマを二度以上受けることはできるか。

答　いいえ。『主は一つ、信仰は一つ、**バプテスマは一つ**』である（エペソ四・五）。油注ぎは多くあるが、バプテスマは「一つ」である。

問十四　聖霊が住まいを定めるために入って来られたとき、求める人がそれを知る方法はあるか。あるなら、どのようにしてか。

答　はい。一人の人にただ「一度」だけ来るこの「一つ」のバプテスマは、あまりにも尊く、すばらしいものである。だから、しるしも証印もなしに放っておかれることはない。そのしるしによって、疑いの余地なくそれとわかり、はっきりと自覚して受けるまで求め続けることができるのである。

それは、御霊が語らせるままに「他国の言葉」（いろいろの言語）で語ることによって知らされる。

問十五　聖霊を受ける者はみな、今日も聖書の時代と同じように、他国の言葉で語るのか。

答　はい。バプテスマは「一つ」しかない。このバプテスマの型は変わっていない。使徒の時代に初めて注がれたときと、今日も同じである。

問十六　聖書の時代に聖霊を受けた者はみな、異言を語ったか。そうなら、その体験についての聖句はどこにあるか。

答　はい。次のような聖句がある。

『すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した』（使徒二・四）

『そこで、ふたりが手を彼らの上においたところ、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手をおいたために、御霊が人々に授けられたのを見て、金をさし出した』（使徒八・一七～一八）

『それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである』（使徒一〇・四六）

『そして、パウロが彼らの上に手をおくと、聖霊が彼らにくだり、それから彼らは異言を語ったり、預言をしたりし出した』（使徒一九・六）

問十七　四つの例のうちの一つ、すなわち使徒行伝八章十七節では、サマリヤの人々が聖霊を受けたときに異言を語ったと、はっきりとは書かれていない。あなたの立場からは、これをどう説明するのか。

答　使徒行伝の二章から八章までの八年のあいだ、信者たちがみな、聖霊を受けたときに異言を語っていたのなら、どの場合にも異言を語ったと書き添えるのは、余計なことだからである。

たとえば、今日、私たちは報告を書いたり、「先週の日曜日の夜、十人が聖霊のバプテスマを受けた」などと述べたりする。そのとき、「そして、みな異言を語った」と付け加える必要があるとは考えない。それは当然のこととされているからである。

また、B氏とD嬢が先週結婚したと知らせるときも、牧師が式を執り行ったとか、許可証が出されたとかを付け加える必要があるとは考えない。けれども、信者たちが聖霊を受けたという事実が問われたり、疑われたりするときには、確かなしるしとして、異言を語ったことが述べられる。使徒行伝十章で、ペテロが語っているあいだに聖霊が異邦人に下られたときがそうであった。

『それは、彼らが異言を語って神をさんびしているのを聞いたからである』（使徒一〇・四六）。ちょうど、結婚式が正式なものかどうかが問われるときに、結婚証明書と牧師の名が確かな証拠として持ち出されるのと同じである。

そのうえ、聖霊が入って来られたことには、見まちがえようのない、奇跡的な、外に現れるしるしが伴っていたと確信してよい。そうでなければ、このたちの悪いユダヤ人、魔術師シモンが、それを見て驚き、この賜物を授ける力を金で買おうとすることはなかったであろう。シモンは『苦い胆汁があり、不義のなわ目がからみついている』と言われた者である（使徒八・二三）。

また、パウロが聖霊を受けたときに異言を語ったとは、聖書にはっきりとは書かれていない。それでも、パウロが異言を語ったという見まちがえようのない証拠がある。コリント人への第一の手紙十四章十八節で、こう言っているからである。『わたしは、あなたがたのうちのだれよりも多く異言が語れることを、神に感謝する』。

問十八　パウロがコリント人への第一の手紙十二章三十節で『みんなが異言を語るのだろうか』と言ったのは、どういう意味か。

答　パウロはこの章全体を通して御霊の賜物について語っており、ここでは、ほかの賜物とともに、異言の賜物を直接指している。この賜物は、十四章二十七節と二十八節が示すとおり、預言者に服するものである。御霊が語らせるままにほとばしり出る、聖書的なしるし（異言で語ること）を指しているのではない。使徒行伝二章四節に見られるものがそれである。

問　では、聖霊が入って来られたことの聖書的なしるしとして異言で語ることと、異言の賜物とのあいだには、違いがあるのか。

答　はい。聖霊を受ける者はみな異言を語る。けれども、みなが異言の賜物（すなわち、思うときに語る力）を受けるのではない。パウロが次のように言うとき、語っているのは、この後のほうの賜物についてである。

『もしわたしが異言をもって祈るなら、わたしの霊は祈るが、知性は実を結ばないからである。すると、どうしたらよいのか。わたしは霊で祈ると共に、知性でも祈ろう。霊でさんびを歌うと共に、知性でも歌おう』（第一コリント一四・一四～一五）

これは、パウロが自分にはわからない異言で（御霊によって）歌い、祈り、また知性によっても（すなわち、自分の国の言葉で）歌い、祈る、という意味である。また、パウロは次のようにも言っている。

『もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである。

もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対し（小声で）また神に対して語っているべきである』（第一コリント一四・二七～二八）。パウロがこう語りかけているのは、すでに御霊を受けて異言を語った聖徒たちに対してである。

問二十　パウロは教会の秩序を整えるにあたって、『教会では、一万の言葉を異言で語るよりも、（中略）むしろ五つの言葉を知性によって語る方が願わしい』

と言っている（第一コリント一四・一九）。そのとき、異言で語ることを何らかの意味でおとしめたり、軽んじたりしていたのか。

答　決してそうではない。パウロはその直前に、自分はだれよりも多く異言を語ると述べているし、こうも言っているからである。

『わたしは実際、あなたがたがひとり残らず異言を語ることを望む』（第一コリント一四・五）。また、兄弟たちにこう命じている。

『異言を語ることを妨げてはならない』（第一コリント一四・三九）

パウロはむしろ、人々に『預言することを熱心に求め』るように勧め（第一コリント一四・三九）、こう命じているのである。

『異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい』（第一コリント一四・一三）。そして、預言で語る者と、解き明かす者とは、教会の徳を高めるうえで同じ立場にあると説明している（第一コリント一四・五）。もし説教全体が異言で語られて、解き明かしが続かなかったなら、それは教えにもならず、徳を高めることにもならないであろう。

問二十一　教会に解き明かす者がいないとわかったときにも、語る者は、自分の上に力を感じるなら、声に出して異言で語り続けるべきか。

答　いいえ。『もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対し』（すなわち、説教者の邪魔にならないように、息をひそめて小声で）『また神に対して語っているべきである』（第一コリント一四・二八）。

問二十二　では、解き明かしの賜物を授けられた者が一人もいない集会では、だれも決して声に出して異言で語ってはならない、という意味なのか。

答　いいえ。パウロは同じ章の二十二節で、異言は（解き明かしだけでなく、異言そのものが）『未信者のための』しるしであると言明しているからである（第一コリント一四・二二）。パウロは、コリントの教会の秩序を整えるにあたって、多く異言を語る者たちに、ただこう指示しているにすぎない。自分の語るメッセージが解き明かされていないとわかったときには、勧めをしている者の邪魔にならないように、自分に対し、また神に対して（小声で）語りなさい、と。さらにパウロは、そういう人に、教会の徳を高めるために、解き明かすことができるように祈りなさいと勧めている。そして、『教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている』と説明しているのである（第一コリント一四・五）。

問二十三　異言で語ることが教会に与えられたのは、言葉を学ぶ代わりに、この他国の言葉を使って外国の人々に宣べ伝えられるようにするためか。

答　いいえ。ペンテコステの日のあとで、異言が他国の言葉で宣べ伝えるのに使われたという記録は、聖書にはない。使徒パウロはほかのだれよりも多く異言を語ったと言われているが、その賜物を使って、思うままに他国の言葉で宣べ伝えたことがあるとは、どこにもほのめかされていない。けれども、パウロがそうしたことはあったかもしれない。今日でも、御霊の力強い授与のもとで、外国の人々に語ることができた人は大ぜいいる。けれども、聖書は、それが人の知らない言葉であるとはっきり述べている。『異言を語る者は、人にむかって語るのではなく、神にむかって語るのである。それはだれにもわからない。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである』（第一コリント一四・二）。

問二十四　求める人が聖霊を待ってとどまっているとき、その人の態度は、まさにどのようなものであるべきか。

答　その態度は、次のようなものであるべきである。

祈りつつ神を待ち望むこと。そして、

賛美しつつ期待することである。主をそのまま信じ、主の言葉をそのとおりに受け取る期待である。

ペンテコステの日に、驚いて見ていた人々は、よろめくからだを「見て」（使徒二・一三）、異言で語るのを「聞いて」（使徒二・四〜六）、『強く心を刺され』た。そして、ペテロやほかの使徒たちに、『わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか』と叫んだ（使徒二・三七）。ペテロは簡単な言葉で、彼らにこう言った。

『悔い改めなさい。そして、あなたがたひとりびとりが罪のゆるしを得るために、イエス・キリストの名によって、バプテスマを受けなさい。そうすれば、あなたがたは聖霊の賜物を受けるであろう』（使徒二・三八）

まず何よりも、イエスの尊い血で洗われていることを確かめなさい。あなたのためにご自身をささげられた方に、心を尽くし、何の条件もつけずに自分を明け

渡し、献身しなさい。それから、きよい心で主を賛美し、きよい手をあげて、約束を自分のものとして求めるとき、主はとどまるために、ご自分の宮に入って来られる。

『とこしえの戸よ、あがれ。栄光の王がはいられる』（詩篇二四・七）

主は、『あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう』と言われる（詩篇八一・一〇）。覚えておきなさい。この約束は、あなたがたに、すなわち『わ

れらの主なる神の召しにあずかるすべての者』に与えられている（使徒二・三九）。そして、『すべて求める者は得』るのである（マタイ七・八）。

この満たしは、聖徒たちとともにいる集会で起こるかもしれない。あるいは、ひそかな交わりのうちに主を待ち望んでいる自分の家で、あるいは仕事をしているときに起こるかもしれない。カナンの地はあなたの前にある。そして、イエスは御霊に満たされたご自分の花嫁を迎えに、まもなく来られる。

アーメン。

キリストの来臨

わたしが去って行くなら、また来る

長い幾世紀ものあいだずっと、忠実な少数の人々がいた。彼らは神のみことばをそのまま信じ、主イエス・キリストがまもなく天から来られるという望みをいだいて待ってきた。彼らは慕い求める心と、鎮まることのない熱意をもって、主を待ち望んだ。来るべき方は必ず来られ、遅れることはないと知っていたからである。神が世の初めから、聖なる預言者たちの口をとおして、そう語ってこられたのである。実に、多くの人がこう叫んだ。

「彼が来るという望みは、どこにあるのか。私たちは一生のあいだ、また先祖たちも一生のあいだ、彼がまもなく来ると預言されるのを聞いてきた。その先祖たちも今はちりの中に眠っているのに、彼はまだ来ない。あなたがたは、きっとむなしく待っているのだ。彼が来るしるしを探して、もう天に目を凝らすのはやめなさい。さあ、私たちといっしょに、この世で食べ、飲み、楽しもうではないか」

けれども、不信仰の流れと沈黙の年月のすべてを通して、彼らの信仰は衰えることも、揺らぐこともなかった。彼らの信仰の目はなお曇らなかった。彼らは疲れを知らない望みをもって天を仰ぎ、自分たちのメシヤであるキリストが来られるのを待っていた。

そのとき、神はご自分の忠実な少数の人々に、時が近づいたこと、主が近く、戸口にまで来ておられることを示し始められた。『エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で』、キリストが来られるのを待ち望んでいた。そして『主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた』（ルカ二・二五～二六）。女預言者アンナや、目に油を塗られたほかの多くの人々も、まわりでしるしが成就していくのを見て、大いに喜び始めた。聖霊は、その日その時をではなく、主の来臨が近いことをあかしされた。

『さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿しながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使が現れ、主の栄光が彼らをめぐり照したので、彼らは非常に恐れた。御使は言った、「恐れるな。見よ、大きな喜びを、あなたがたに伝える。（中略）きょう（中略）あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。（中略）あなたがたは、幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう」。するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒になって神をさんびして言った、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」。

御使たちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼たちは「さあ、（中略）行って、主がお知らせ下さったその出来事を見てこようではないか」と、互に語り合った。そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた』（ルカ二・八～一六）

『見よ、東からきた博士たちが言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた』（マタイ二・一～二、九～一〇）

彼らは、足が痛み、疲れきっていることも気にかけず、どこまでも歩き続けた。長い待望の年月も、今はただ一日のように思われた。彼らは山を越え、谷を通って急いだ。宝と贈り物、すなわち黄金と乳香と没薬を携えていた。なおも彼らは急ぎ、喜びの知らせを広めた。田舎でも町でも熱心に捜しながら、あかしをした。そしてついに主を見いだし、ひれ伏して拝み、宝の箱をあけて贈り物をささげた。神は約束を果たされ、疲れた者たちは報いられた。**キリストが来られた**からである。

これはみな、千九百年以上も前に起こったことである。そして今、時という大時計の針は回り続け、みことばが預言しているキリストの再臨の時刻を指すに至った。昔、御使は羊飼たちに、主の最初の来臨について語った。また御使たちは、見つめている群衆に、主の再臨について語って言った。『あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』（使徒一・一一）。そのように、御使たちは今日ふたたび現れ、キリストがまもなく来られることを告げている。

イエスご自身が弟子たちに、ご自分は帰って来ると言われた日があった。戦争と戦争のうわさ、災いと疫病、血と火と立ちこめる煙、民が民に敵対して立ち上がること、ききんと地震が、ご自分の来臨のしるしになると言われたのである（マタイ二四章）。その日からずっと、忠実な少数の人々は、慕い求める熱心な心で、主が現れてくださるのを待ち望み、あこがれてきた。確かに、多くの人があざけってこう叫んだ。「彼が来るしるしはどこにあるのか。彼が来るのは近いと預言されるのを、私たちは何年も聞いてきた。彼の再臨を宣べ伝えた先祖たちは、今は墓の中に眠っているのに、彼はまだ来ない。さあ、食べ、飲み、めとり、とつごうではないか。彼が来るのは近くない」

けれども今日、昔と同じように、主はご自分の忠実な少数の人々に、ご自分の来臨が近く、戸口にまで迫っていることを示しておられる。『主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう』（第一テサロニケ四・一六～一七）。今日ふたたび、油を塗られた目は、主の来臨のしるしがいたるところで、見まがうことのないほどはっきりと成就しているのを見ている。

羊飼たちは野宿しながら、世の光が不在である長い夜のあいだ、羊の群れの番をしてきた。彼らは言い尽くせない願いをもって、長いあいだ熱心に東を見つめてきた。すべての暗やみを払う義の太陽がのぼるのを待ってきたのである。主が最初に来られたときには、星が現れた。けれども今、彼らは義の太陽がのぼるのを待っている。太陽が星よりも明るく輝くように、主の再臨は最初の現れよりも明るく輝く。今度は、布にくるまって飼葉おけの中にお現れになるのではない。王の衣をまとわれ、手に笏を持たれ、勝利の王として意気揚々と進み出て来られる。ご自分の民の望みであり、報いである方として来られるのである。

すでに羊飼たちの心には喜びがあふれている。天は夜明けの最初の光で満ちつつあるからである。沈黙のうちに待ち、慕い求めてきた長い夜は、ほとんど終わろうとしている。そして彼らはふたたび、東に主のしるしを見ている。

博士たち、すなわち、この世が知恵とみなすものによってではなく、上から下る知恵によって賢い人々は、主の来臨を待ち望み、それを早めようとしている。昔の博士たちが群れを残し、黄金と乳香と没薬の宝を携えて主に会いに走った。それと同じように、今日の賢いおとめたちは、愚かなおとめたちをあとに残し、急いで出て行って主を迎える。携えているのは、黄金の宝、すなわちイエスの神の性質である。また、神に受け入れられることと賛美という乳香である。そして没薬、すなわちその香りと、主と共に苦しむ苦しみのにがさである。主と共に苦しむのは、主と共に支配するためである。主の苦難にあずかって主を知った者として、今は主の復活の力のうちに主を知るためである。

愛するみなさん、目をさまして、遠くから主の光を見なさい。立ち上がって、来られるキリストを迎えに出て行きなさい。主は近く、戸口にまで来ておられるからである。主は来られる。今まさに、この世の門口に近づいておられる。主は天を巻物のように巻き取られる。そして、備えのできている人々は、空中で主に会うために上げられる。すでに全地では、税の取り立てが行われている。キリストが生まれたとき、ヨセフとマリヤが税を納めにエルサレムへ上って行ったのと同じである。すべてのしるしは成就した。歴史は繰り返している。主が来られて、待っている人々を連れて行かれるとすぐに、患難がこの世を襲う。主が最初に来られたあとと同じである。今でもすでに、悪い支配者たちの剣に殺された子らのために、嘆き悲しむラケルの声が聞こえている。

目をさましなさい！　起きなさい！　来られる主イエス・キリストを迎えに出て行きなさい。

尋ねる者とみことばが、主の来臨について語り合う

『もしあなたがたが聞こうと思うならば聞きなさい』（イザヤ二一・一二）

尋ねる者　あなたについて、こういう話を聞きました。あなたは、主が文字どおりふたたびこの地上に帰って来られることについて、多くのことを述べ、多くの教えを含んでいる、と。この話はほんとうですか。

みことば　まったくそのとおりである。わたしの新約聖書の二百六十章の中だけでも、主の来臨に触れているところが三百十八ある。すなわち、ほぼ二十五節に一つの割合である。

尋ねる者　ああ、神のみことばよ、主の簡単なお言葉を何か、私の心に語ってください。それによって、主がほんとうに来られることを知ることができますように。

みことば　「わたしが去って行くなら、（中略）また来る」。これは、イエスが弟子たちに言われた言葉である（ヨハネ一四・三）。イエスは去って行かれたか。

尋ねる者　はい。『イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった』（使徒一・九）。

みことば　それなら、イエスはふたたび来られる。

尋ねる者　けれども、それはイエスが今ここにおられるという意味ではありませんか。第一に、聖霊によって示されて、私たちの心の中に。第二に、ふたりまたは三人がイエスの名によって集まる所ならどこでも、その中に。そして第三に、それは死のときにイエスが私たちを迎えに来られることを指しているのではありませんか。

みことば　いいえ。まもなく栄光の雲に乗って来られるイエスは、今、父の右におられる（ローマ八・三四）。イエスの不在のあいだ、イエスを示し、イエスが来られるための備えをわたしたちにさせてくださるために来られたのは、聖霊である。聖霊は心の中にイエスを示され（ヨハネ一四・二三）、会衆の中にイエスを示される（第一コリント一四章）。そして生と死が終わったときには、わたしたちをイエスの御前に引き上げてくださる（ローマ八・一一）。聖霊について、イエスは言われた。『わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない』（ヨハネ一四・一八）。「わたしが父のみもとからあなたがたにつかわそうとしている助け主（中略）が下る時、彼はわたしについてあかしをするであろう」（ヨハネ一五・二六）。また、イエスははっきりとこうも言われた。「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう。もし行けば、彼をあなたがたにつかわそう」（ヨハネ一六・七）。

これらの聖句から、今日わたしたちと共におられるのは御霊であることが、はっきりわかる。一方、わたしのページを開いてテサロニケ人への第一の手紙四章十六節と十七節を見るなら、次のように書いてあるのが、はっきりわかるであろう。『主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い』。また、わたしたちは『力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを』見る、とも書いてある（マタイ二四・三〇）。

尋ねる者　はい、そうです。あなたの教えによって、私にもはっきりわかりました。父のもとに昇られ、聖霊（イエスの不在のあいだとどまるはずの助け主）を注がれたこのイエスが、ふたたび来られるのですね。けれども、どのような有様で来られるのでしょうか。まさか、ある人々があなたの言葉をそう理解したように、イエスがからだをもって帰って来られる、という意味ではありませんね。去って行かれたのと同じ、まことの、手で触れることのできるイエスが帰って来られる、という意味では。

みことば　そうである。まさにその意味である。『あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう』（使徒一・一一）。

天に上げられた『**このイエス**』とは、多くの人が考えているように、からだが滅ぼされて霊にすぎなくなった、別のイエスではない。同じイエスである。よみがえりのあとで『さわって見なさい』（ルカ二四・三九）と言われた方である。弟子たちと語り合われ、いっしょに歩かれ、焼いた魚の一きれと蜜蜂の巣を取って、彼らの前で食べられた方である（ルカ二四・一五、四二～四三）。父の国でわたしたちと共にぶどう酒を新しく飲まれる、この同じイエス、あなたがたを離れて天に上げられた、まことの、文字どおりのイエスが、『**またおいでになる**』のである。『主なるわたしは変ることがない』（マラキ三・六）と言われた方である。備えをして待っている主の民は、去って行かれたときとまったく同じ姿の主を見るのである。

『**同じ有様で**』。主の昇天を見つめていた忠実な弟子たちの群れが、神のラッパを聞いて墓からよみがえるとき（第一テサロニケ四・一六）、彼らの目は同じ主を見るであろう。去って行かれるのを見たときと同じ姿で下って来られる主である。

尋ねる者　この次に来られるとき、イエスの足はふたたび地に触れるのでしょうか。

みことば　いいえ、このときには触れない。備えのできている人々が、雲の中で主に会うために上げられるのである（第一テサロニケ四・一七）。主はそのあとで、ご自分の聖徒たちを率いて帰って来られる（ユダ一四）。そのとき、人の子のしるしが天に現れる。そのとき、地のすべての民族は嘆き、力と大いなる栄光とをもって人の子が天の雲に乗って来るのを見る。そのとき、主の足はオリブ山の頂に立つ（ゼカリヤ一四・四）。そしてオリブ山は、『非常に広い一つの谷によって、東から西に二つに裂け』るのである。

尋ねる者　地上の罪深い人々や、備えのできていない人々はどうなるのでしょうか。イエスが次に来られ、栄光の雲の中に現れるとき、その人々もイエスを見るのでしょうか。

みことば　いいえ。見るのは、備えをして目をさましたまま死ぬ人々だけである。主は夜の盗人のように来られる（マタイ二四・四三）。「ふたりの女がうすをひいていると、ひとりは取り去られ、ひとりは残される。ふたりが一つ寝床に寝ていると、ひとりは取り去られ、ひとりは残される」（マタイ二四・四一、ルカ一七・三四）。

すべての人の目が主を見るのは（黙示録一・七）、主が最後に帰って来られて、御国を立てられ、千年のあいだ支配されるときである（黙示録二〇・四）。

尋ねる者　主が帰って来られる日と時を知ることはできるのでしょうか。

みことば　「その日、その時は、だれも知らない。天の御使たちも知らない、ただ父だけが知っておられる。洪水の出る前、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。洪水がいっさいのものをさらって行く日まで、そうしていた。人の子の現れるのも、そのようであろう」（マタイ二四・三六～三九）。

尋ねる者　私たちがその日、その時を知ることはないと、わかりました。けれども、時期を知ることは許されているのではありませんか。

みことば　そうである。『その時期と場合とについては、書きおくる必要はない』。なぜなら、『あなたがたは暗やみの中にいないのだから、その日が、盗人のようにあなたがたを不意に襲うことはないであろう』（第一テサロニケ五・一、四）。わたしのページには、時期が近いことを知ることのできるしるしが、いくつも示されている。

尋ねる者　わが道の光、わが足の祝福されたともしびであるあなたよ、教えてください。そのようなことは、いつ起こるのでしょうか。あなたが来られるときには、どんな前兆があるのでしょうか。

みことば　多くの者が、自分がキリストだと言って現れ、多くの人を惑わす。あなたがたは戦争と戦争のうわさとを聞く。民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。血と火と立ちこめる煙とがある（ヨエル二・三〇～三一）。

あちこちに、ききんと疫病と地震が起こる。人々が平和だ無事だと言っているその矢先に、突如として滅びが彼らをおそって来る。

不法がはびこり、多くの人の愛が冷える。そのとき、にせキリストたちや、にせ預言者たちが起こって、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも

惑わそうとする。

また、いちじくの木が葉を出すと、あなたがたは夏が近いことを知る。そのように、これらのことが起こるのを見たなら、神の国が近いのだとさとりなさい（ルカ二一・三一）。神は言われる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう！　あなたがたのむすこ娘は預言をするであろう。

尋ねる者　なんと！　これこそ、まさに今日起こっていることではありませんか。戦争と戦争のうわさ、血と火と立ちこめる煙が、海上の船を霧がおおうように、地をおおっています。この数年の戦争と疫病で、六百万の人々が墓へと運び去られました。ほとんどすべての家に、死が入って来ました。アメリカの歴史全体を通じて、この五年ほど多くの家に死の御使が入って来たことはありません。

平和だ無事だという叫び、突然の滅び、迫り来る災い、国の内外の疫病。いちじくの木は葉を出しています。ユダヤ人は今日、幾世紀ぶりかで、自由にエルサレムに帰って神殿を再建できるようになりました。戦車、すなわち自動車や電車は、いなずまのように走っています。そして、その数の多さのために、大路で互いに押し合っています（ナホム二・四）。

私のまわりのいたるところで、多くの人の愛が冷えていくのが見えます。形式と儀式が、力に取って代わりつつあります。いわゆるクリスチャン・サイエンスと心霊術が、にせキリストとにせ預言者で国じゅうをあふれさせました。また、この時代に、聖霊がすべての人に注がれています。どの国でも、霊的な一団が携

時のしるし

「あなたがまたおいでになる時には、どんな前兆がありますか」（マタイ二四・三）

終わりの時についての聖書の預言を読むとき、今日の新聞が伝える状況と神のみことばとが驚くほど似ていることに、強く心を打たれたことはないだろうか。

あなたの記憶を、ほんの数年前にさかのぼらせたい。そのころ、世界じゅうで盛んに平和が論じられていた。あなたはきっと、平和を主題にしたハーグの大会

挙に備えています。確かに、確かに、あなたの言葉と時のしるしによれば、主の来臨は近いにちがいありません。そうです、まさに私たちの戸口にまで来ているにちがいありません。

これらのしるしがみな成就しつつあり、あなたの言葉もこれほどはっきりしているのに、今日の人々がこれほど愚かで鈍く、この真理に気づかないのはなぜでしょうか。

みことば　ユダヤ人は、主の最初の来臨に伴ったしるしに気づかなかった。イザヤ書五十三章のほふられた小羊と、自分たちが十字架につけた主とが同じ方であることも、見いださなかった。それと同じ理由からである。彼らの目は罪によってさえぎられている。彼らは眠り、この世という酒に酔っている。

尋ねる者　主イエス・キリストがまもなく来られることを、私にはっきりと示してくださって、感謝します。この真理を思うと、私たちはこうするべきだとわかります。男らしくふるまい、真理の帯を腰にしめ、足にはサンダルをはいて立つこと。『あかりと一緒に、入れものの中に油を用意して』おくこと。私たち自身は愛に満たされ、賛美を身にまとうこと。御霊の力によって日ごとに神の尊い御子の姿に変えられ、主の来臨を熱心に待って目をさましていること。そうすれば、私も聖書に記されている最後の祈りを祈ることができるようになります。「アァメン、主イエスよ、すぐにきたりませ」（黙示録二二・二〇）。

議を覚えているであろう。世界の平和が絶えず語られていた。ところが、聖書の預言のとおり、人々が平和だ、平和だと叫んでいたとき、突然、暗黒と滅びがやって来た。最近マタイによる福音書二十四章を読んでいないなら、今読んで、今日の時代と比べてみなさい。

『あなたがまたおいでになる時や、世の終りには、どんな前兆がありますか』（マタイ二四・三）。この問いに答えて、主は、その時期を見分けることのでき

る多くのしるしを告げておられる。その中で、**戦争**と戦争のうわさがあり、民は民に、国は国に敵対して立ち上がると言われる。私たちは、この預言が驚くほど文字どおりに成就しているのを見ている。また、**ききん**があると告げられている。もう一度新聞に目を通し、この数か月のききんを振り返ってみなさい。ヨーロッパの食料と衣服の値段に注目しなさい。ベルギー、ブルガリア、ロシアの一部、アルメニア、セルビアを考えてみなさい。ドイツの物価の高さとじゃがいものききんを考えなさい。飢えた女性や子供たちに配られる、わずかな配給のことを読みなさい。かつては穀物や野菜を実らせ、羊の群れを養っていた畑が、砲弾に引き裂かれ、血に染まっていることを読みなさい。そうすれば、このしるしが身の毛もよだつほど現実に成就していることに、あなたも必ず同意するであろう。

主が告げておられる**疫病**について言えば、私はたった今、ノア・ウェブスターの辞書を引いてみた。それによると、この語は、伝染する病気、または接触でうつる病気で、健康と道徳に害を与えるものと定義されている。今日、疫病と**災い**は手を携えてやって来る。戦場に埋められずにいる死体から起こる病気、天然痘の流行、黒死病、小児まひなど、私たちの戸口にまで迫っている話を思い出しなさい。あなたは、私たちの海岸にはびこるサメの災い、海で失われた船、数えきれない火事や爆発や事故と、それに続く物言わぬ犠牲者たちのことを読んできたであろう。また、ヨーロッパで家々が破壊されたこと、罪のない女性と子供たちが恐ろしい運命と滅びに遭ったことも読んできたであろう。それは記すことも、思い浮かべることさえも恐ろしいほどである。ききんと疫病と災いの時が来ていること、またあちこちに地震があることを、だれも認めないわけにはいかない。

にせ預言者がいたるところに起こっている。また、自分がキリストだと主張する者たちのことも、たびたび新聞に載っている。にせ預言者たちは多くの不思議なことを行う力を持ち、できれば選民をも惑わすほどのしるしと奇跡を行うと、私たちは告げられている。今日、私たちは、クリスチャン・サイエンスや心霊術者やそのほかの団体が、奇跡やいやしを行い、選民を惑わそうとしているのを見ている。これらの団体はイエスの血の力を否定するので、私たちはそれが偽りであると見分ける。預言のとおり、私たちはこれらすべてのことに驚いてはならないと告げられている。終わりが来る前に、これらはみな起こらなければならないからである。

ナホム書二章は、この時代について語って、『**戦車はちまたに狂い走り**』、大路で互いに押し合い、たいまつのように見え、いなずまのように走ると言っている。今日、これは私たちの国の通りを走る自動車だけでなく、ヨーロッパの戦場の装甲車にも当てはまった。エルサレムでもそうであった。装甲車はいなずまの速さで通りを駆け抜け、死をもたらす素早い使者を運び、主の来臨についての預言のうち、自分の受け持つ分を成就する役割を果たしていた。

また、天と地にしるしが現れると告げられている。

血。神がご存じのとおり、今日、血は十分すぎるほど流されてきた。

火。殺された者たちの死体を積み上げて戦場で焼く巨大な火や、町々が焼かれたことを伝える記事を見なさい。

立ちこめる煙。空気は煙で満ち、煙が染みとおっている。大砲の口から出る煙、燃える家々の煙、毒ガスの気体である。

預言者ヨエルは、この終わりの時について、すばらしい預言をしている。それはクリスチャンにとって、非常に興味深いものである。覚えているであろうが、ヨエルは**暗く、雲の群がる日**をみごとに描いたあとで、聖霊の注ぎについて語り、それを前の雨と後の雨として描いている。前の雨は、思い出すであろうが、ペンテコステの日に降り始めた。今日、あなたは**後の雨**が地に降っているのを見るであろう。前の雨のときにみことばの宣教に伴ったのとまったく同じしるしが、今の注ぎにも伴っている。ペンテコステの日に、またエペソでもカイザリヤでも、そして神のみことば全体を通して、前の雨のときのように聖霊が人々の上に下られたとき、彼らはみな異言で語った。今日、どの国でも後の雨が降っている。人々は他国の言葉で語り、病人はふたたびイエスの名の力によっていやされ、悪霊は追い出されている。聖霊によってしるしと奇跡が行われ、聖霊はすべての栄光をイエスに帰しておられる。律法にこう書いてある。「わたしは、どもる唇と異国の舌とで、この民に語る。それでも、彼らは信じないであろう」（第一コリント一四・二一）。

ユダヤ人がエルサレムに帰ることについては、それは決して起こりえないと多くの人が言った。けれども、神のひと息で、それは成し遂げられた。今日、いちじくの木は葉を出しつつある。そうだ、主の来臨を示すあらゆるしるしが成就しつつある。ノアが洪水を予告した時代のように、人々はめとり、とついでいる。

『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』という叫びが、私たちの国じゅうに響いている。

マタイによる福音書二十五章を思い出しなさい。目をさまして、自分のあかりを調べなさい。それが聖霊の火によってともされているかどうか確かめなさい。御霊に満たされなさい。これらのことを注意深く考えなさい。神のみことばと、歴史を作りながら目まぐるしく起こる今日の出来事とを比べなさい。そうすれば、私たちが主の近い到来の影の下に生きていることに、あなたもすぐに同意するにちがいない。主はそのことについて、こう語られた。「あなたがたは明け方には『空が曇ってまっかだから、きょうは荒れだ』と言う。愚かな偽善者たちよ、あなたがたは空の模様を見分けることを知りながら、時のしるしを見分けることができないのか」（マタイ一六・三）。同じように、これらすべてのことを見たならば、それが戸口まで近づいていると知りなさい。

小羊の婚宴

幻（モントウェイトのキャンプ集会にて、神の力のもとで語る）

わが愛する方を、だれにたとえようか。麗しい者の中で、最も麗しい方。まもなく私は、その栄光にあずかる。空中での出会いのときに。

『この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか』（黙示録七・一三）

『雲のように飛び、はとがその小屋に飛び帰るようにして来る者はだれか』（イザヤ六〇・八）

今、地上では大いなる動きが起こっている。地上だけではない。天においてもである。すみやかに近づいている大いなる出来事のための、大いなる備えである。花嫁とその友人たちは、絶え間ない興奮に打ち震えている。花嫁は、急ぐあまり震える愛の手で、細かい刺繍をほどこした婚礼の衣を身にまとい、嫁入り道具を念入りに調べている。足にはサンダルをはいている。大いなる出来事が近づくにつれて、彼女は最後の支度を急いでいる。その出来事はあまりに大きく、あまりに近い。それが彼女の上にそびえ立ち、間近に迫るその影のために、ほかのものは何も目に入らないほどである。

あかりの大いなる点検が行われている。油の入れものが調べられている。油が漏れ出てしまった人々や、使い果たしてしまった人々は、息を切らして、売る人のところへ急いでいる（マタイ二五章）。空中での出会いに加わろうとしている人々は、商売や、この世の気苦労や、地上の務めを後にしている。急ぎ足で汽車に乗り、車に乗り、いたるところからキャンプ集会や待ち望みの集会へ駆けつけ、自分のあかりのための油を求めている。小羊の血で衣を洗うことが、盛んに行われている。澄んだラッパのような呼び声が夜を貫き、いたるところで眠っているおとめたちに目をさませと命じて、こう言っている。

『さあ、花婿だ』（マタイ二五・六）

花嫁は花婿を慕い求めている。花婿は花嫁を慕い求めている。妻は自分の用意をしている。主のほかには何ものも満たすことのできない大きな慕わしさが、彼女の魂を満たしつつある。彼女の目は、言い尽くせない慕わしさをもって雲に向けられている。彼女の目は幻をとらえた。主の御顔を一目見たのである。彼女はつま先立ちになり、顔を上に向けている。見張り、待ち、その魂の愛する方を見ようと慕い求めている。彼女の耳は天の賛歌の一節をとらえた。主の御声を聞いたのである。まわりには多くの顔と声がある。けれども、それらは彼女の目をほんの一瞬さえ引きつけることができない。長い夜の暗やみと陰鬱の中で、彼女は待ち、見つめ、空を探している。期待に満ち、涙にかすむ目で、両手を差し伸べて。

神は御子、すなわち天のイサクのために花嫁を捜して連れて来させようと、使者を遣わされた。その使者、すなわち聖霊は、「この人といっしょに行きます」と言った人々を集めておられる（創世記二四・五八）。そして彼らを、聖霊のエレベーターに乗せておられる。このエレベーターは、彼らを主のもとへ引き上げるものである。聖霊は、花嫁が愛する方の腕の中に無事に抱かれるまで、決して花嫁を離れられない。

天においても、大いなる備えが進められている。御使の軍勢が集まりつつある。立琴や弦楽器の調律が盛んに行われている。天の楽団は、その晴れの日のために婚礼の歌を練習している。その日は、天でかつて知られた最も偉大な日である。御子がご自分のふところの妻を、その腕に抱かれる日なのである。天のすべての目が花嫁に注がれている。花婿は彼女への愛に圧倒されている（雅歌六・五）。その日が近づくにつれ、空気そのものが期待に張りつめている。

突然、星をちりばめた天の床が二つに裂ける。花嫁の信仰はむなしくなかった。約束された方が、そのみことばを果たされた。主は約束を守られたのであ

る。天が開け、突然、御座からの光の矢が地の暗やみを貫き、照らす。うっとりと上を仰ぐ彼女の顔は、主の輝きを受けて姿を変える。彼女は、刺し通された主の御足が現れ、下って来られるのを見る。続いて、驚くほど輝かしい光の衣をまとった主の全身を見る。天全体が御使の雲、無数の天の軍勢で満たされる。そして、躍り上がり、高鳴る胸をもって、彼女の目はついに主の御顔を見る。

全天の楽団のあらゆる立琴、あらゆる弦楽器、あらゆるラッパが、一つの長く甘い音を打ち鳴らし、響かせ続ける。その音は静けさを震わせ、歓喜の旋律となってはじける。その響きとともに、大きな揺れとおののきが地を揺り動かす。墓が裂けて開く。イエスを死人の中からよみがえらせられた同じ御霊が、死人たちの死ぬべきからだを生かされる（ローマ八・一一）。そして、その歓喜の音楽の呼びかけに応じて、彼らはよみがえる。主の義の白い衣をまとい、顔を上げ、手を差し伸べて、空中を上へと躍り出て行く。天を輝かせ、栄光で満たしておられる、あの栄光の御姿に向かって行くのである。

もう一つの旋律が、ほとばしり出る。その力はあまりに強く、全天がその威厳ある輝きに震えるほどである。その響きとともに、地上で待っていた人々は変えられる。引力の法則は、彼らを支配する力をすっかり失う。両腕を広げて待っておられる方から、彼らを引き止めることができなくなるのである。主は合図の声をもって下って来られ、こう言われる。『わが愛する者よ、わが麗しき者よ、立って、出てきなさい』（雅歌二・一三）。死ぬものは死なないものを着、朽ちるものは朽ちないものを着る（第一コリント一五・五三）。

彼女の目は主を見た。彼女は空中を飛んで主に会いに行き、主も彼女のほうへ来られる。両腕を広げて、二人は出会う。ああ、空中でのその出会い！　ついに主は、彼女をその腕に抱かれる。主がそのために死なれ、これほど長く待ってこられた彼女を。ついに彼女は、その女王のような頭を主の胸にもたせかける。彼女がそのために生き、夢の中で幾度も思い描いてきた方の胸に。主は彼女の涙をぬぐわれる。抱き合うとき、二人の唇が触れ合う。あらゆる立琴と楽器が、婚礼の歌を力強く、威厳ある輝きをもって鳴り響かせると、全天は揺れ、揺らぎ、震える。その歌は高まっては低まり、空中にこだまし、こだまを返す。

全天が、空中での出会いを見るため、また花嫁を迎えるために出て来て、こう言う。『わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである』（黙示録一九・七）。二人は共に昇って行く。天はふたたび巻かれて閉じる。地にはさらに深い暗やみが降りる。けれども、星をちりばめた天の床のかなたでは、大いなる歓喜がある。御座に至る長い道の両側には、目の届くかぎり、無数の御使の軍勢が幾重にも並んでいる。御座の上には、輝く栄光の雲がとどまっている。あの驚くべき婚礼の行進曲が、言い表しがたい荘厳さで脈打ち、鳴り響く。それに合わせて、主は、ご自分の腕に寄りかかる彼女を御座へと導かれる。そして、しみも傷もなく、輝く清さのうちに、主の義と力をまとった彼女を、父に差し出される。

続いて驚くべき式が行われる。それはあまりにすばらしく、人が語ってはならないほどである。そして小羊の婚宴となる。そこでは、花嫁と花嫁の友人たちが、白い衣をまとった御使の軍勢に給仕され、言葉につくせない喜びにあふれる。二人は共に、御国のぶどう酒を飲む。花嫁の目には、ただひとりの方しか映らない。彼女の主、救い主、王、夫である。

すべての涙は永遠にぬぐわれた（黙示録二一・四）。暗やみは消え去った（黙示録二一・二三）。何ものも、彼女を主から引き離すことはない。彼女は、いつまでも、いつまでも主の御前に住む。

太陽の輝きをまとっているこの方は、だれか。

それはイエス、聖なる方。

平和のにじはその御足の下にあり、

神格の力は、この方のうちに満ちている。

あのすばらしい日

神の御子イエスは、まもなくふたたびこの地上に帰って来られる。聖霊は花嫁に、空中で主に会う備えをせよと、最後の呼びかけを送っておられる。今日、地上では大いなる動きが起こっている。罪深い国々の中だけでなく、主が現れてくださる大いなる日のために備えている、義なる聖徒たちの中でもである。

『主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう』（第一テサロニケ四・一六～一七）

その日は、なんとすばらしい日になることであろう！　最も雄弁な舌も、最も霊感を受けた筆も、その大いなる勝利の日の栄光の、ほんの一端さえ語ることはできない。

時の初めから、すばらしい日はいくつもあった。けれども、この日はそのすべてにまさって輝く。神がことばによって世界を存在させられた日は、すばらしい日であった。神が天に太陽と月と星を置かれた日も、すばらしい日であった。神がご自分のかたちに人を創造された日は、すばらしい日であった。人が罪に陥り、死ぬべき者と定められたとき、神は、御子イエスを遣わすと約束してくださるほどに、この世を愛された。御子が苦しみを受けて死なれ、人を罪の深みから栄光の最も高い所にまで引き上げてくださるためである。その日も、すばらしい日であった。博士たちが東方で主の星を見、イエスが幼子として飼葉おけの中に生まれられた日は、すばらしい日であった。

朝に向かって

夜明けの直前が、いつもいちばん暗い。今日、世界は、かつて知られたことのないほど暗い、真夜中の悲しみのとばりに包まれている。死と悲惨、殺戮と絶望、破壊と荒廃がはびこっている。何十万もの家庭で、母や妻たちが泣き、嘆いている。私がこの言葉を書いている今も、慰められることを拒む者のように嘆いている。昔のエジプトの暗やみのときと同じように、今日、災いと疫病が地上に放たれている。そして今、朝の直前に、長子たちが殺され、血は川のように流れている。死に触れられずにすんだ家庭や炉辺は、ほんとうにわずかである。

イエスの宣教の働きの中には、すばらしい日がたくさんあった。病人をいやし、らい病人をきよめ、死人をよみがえらせ、悪霊を追い出し、奇跡を行い、群衆を養われた日々である。

イエスがピラトの前で裁判を受けられた日は、すばらしい日であった。毛を切る者の前に黙っている小羊のように、イエスは口を開かれなかった。

イエスが十字架に釘づけにされた日、私たちの身代わりとなり、私たちの負債を支払い、私たちの受けるべき罰を、木の上でご自分の身に負われた日は、すばらしい日であった。人々がイエスを墓に納めた日もすばらしい日であったが、イエスがよみがえり、勝利の栄光と力のうちに出て来られた日は、さらにすばらしい日であった。

イエスが、驚き見つめる弟子たちのもとを去って天の父のもとへ昇られ、雲に迎えられて見えなくなられた日は、すばらしい日であった。ああ！　けれども、さらにすばらしい日が来ようとしている。ほかのすべての日の冠となる日である。その日、イエスはふたたび地上に帰って来られる。主は雲を分けて来られ、私たちは、輝かしい衣をまとって天から下って来られる主を見る。今度は、はねつけられ、拒まれ、つばきをかけられ、打たれるために来られるのではない。今度は、勝利の王として帰って来られる。勝利を得る者たち、すなわち最後まで救いを保ち、花嫁への呼びかけに目をさます人々を、目ざめさせてくださるためである。あなたも、その花嫁の行列に加わるように招かれている。償いをしなさい。血におおわれなさい。イエスはまもなく来られるからである。

出エジプト記十二章二十九節にはこうある。『夜中になって主はエジプトの国の、すべてのういご、すなわち位に座するパロのういごから、地下のひとやにおる捕虜のういごにいたるまで撃たれた。エジプトに大いなる叫びがあった。死人のない家がなかったからである』。それから救いが来た。イスラエルの子らは、歌いつつ導き出された。

疲れ、悩み、悲しみに引き裂かれた愛する人よ、目を上げなさい。夜はふけた。長く疲れた道は、ほとんど終わろうとしている。『夜はよもすがら泣きかなしんでも、朝と共に**喜び**が来る』（詩篇三〇・五）。あの太陽が今朝、山々の上にのぼって夜の影を追い払ったのと同じほど確かに、義の太陽であるイエスは、不朽の栄光のうちに山々の上にのぼられる。そして、ご自分の民、ご自分の勝利を得る子供たちを、涙の決して流れることのない国へ連れて行かれる。

今日、暗やみの力が四方から迫っている。悪はますます悪くなっていく。ときどき私たちは、驚くべき事態について読む。最も勇敢で最も優れた者たちが殺されたこと、砲弾に引き裂かれた畑、打ちひしがれた家庭、父のない子供たちの泣き声、焼かれる家々のことである。また、写真家がかなたの戦地から送ってくる写真で、飢えのために黒ずみ、やつれた顔を見る。歩く骸骨のような幼い子供たちが、パンがないために恐ろしい死に方をしていく痛ましい光景を見る。そのようなとき、私たちの頭はそのすさまじい光景の前にくらくらし、すべてが何か恐ろしい悪夢のように思われる。けれども、そうではない。それはあまりにも、あまりにも真実なのである。暗やみが降りた。多くの教会にも降りた。そこでは人々が『神よりも快楽を愛する者』となっている（第二テモテ三・四）。なまぬるい、信仰を言い表している人々が、『信心深い様子をしながらその実を捨てる』所にも、暗やみが降りた（第二テモテ三・五）。けれども、愛するみなさん、目を上げなさい。もうすぐ朝である。ハレルヤ！

『あなたがたは弱った手を強くし、よろめくひざを健やかにせよ。心おののく者に言え、「強くあれ、恐れてはならない。見よ、あなたがたの神は報復をもって臨み、神の報いをもってこられる。神は来て、あなたがたを救われる」と。主にあがなわれた者は帰ってきて、その頭に、とこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る。彼らは楽しみと喜びとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る』（イザヤ三五・三〜四、一〇）

日々の生活の中で、心の痛みや、あなたに加えられる圧力、十字架の重み、道に生えるいばらのために、あなたは途中でほとんど弱り切ってしまいそうになったことがあるだろう。けれども、愛する人よ、もう少しのあいだ堅く立ちなさい。もう少し先へ進みなさい。見なさい！　あのかなたの山々の頂の上に、灰色の夜明けが訪れようとしている。イエスはまもなく来られる。主はすべての人の顔から、すべての涙をぬぐってくださるために来られる。『だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい』（第一テサロニケ四・一八）。疲れた旅人にとって、これほど甘い慰めの言葉がかつてあっただろうか。「イエスはまもなく来られる」。この驚くべき言葉は、うなだれた頭を上げさせる。「イエスはまもなく来られる」。その栄光の望みによって、弱った手は新たな力と望みを得て、高く上げられる。「イエスはまもなく来られる」。この言葉は、あまりにも栄光に満ちた幻をもたらす。そのため、この涙の谷にあってさえ、あの栄光の朝のゆえに、目は輝き、歓喜にうるむのである。

『主ご自身が天使のかしらの声と神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう』（第一テサロニケ四・一六〜一七）

何ものにも、あなたの歩みを妨げさせてはならない。落胆が、越えられない障壁のように、あなたの道に立ちはだかっても、イエスの名によって進み続けなさい。そうすれば、その障壁は、夏の日差しの前の影のように消えうせる。あなたは夜、さびしい田舎道を歩いていて、「人が木のように歩いている」のが見えるように思ったことはないか。あそこの曲がった切り株が、通りかかるあなたに今にも飛びかかろうとしている巨人のように見えたことを覚えているか。あそこの何でもない柵の杭が、何か恐ろしい、口にできないことをしようと身をかがめて構えている、夜の恐ろしい亡霊のように見えたことを。夜の物音さえ、ふだんとは違って聞こえた。牛が鳴いたり、草をはんだりする音に、あなたの胸は激しく

打ち、「あれは何だ！」と叫んだ。朝の光が影を追い払い、物音のもとを明らかにしたとき、あなたは自分の恐れを笑った。愛するみなさん、私たちもそれと同じである。暗やみの中を進み続けるなら、私たちの恐れはみな、ただの愚かさにすぎなかったとわかる。私たちは主のうちに、あらゆる危険から安全に隠されているからである。

ほえたける獅子は、実は鎖につながれている。あなたが主のそば近くを歩いているかぎり、あなたを害することはできない。敵がどれほどあなたをおびえさせようとしても、夜の恐ろしい亡霊を恐れてはならない。進み続けなさい。夜の影がことごとく巻き去られ、私たちが顔と顔とを合わせてイエスを見る時は、もう遠くない。

この古い世で私たちがささげ、苦しんできたものは、すべて忘れられる。そうだ、すぐに来られる私たちの愛する方の目を、ただ一度のぞき込むだけで、それはみな取るに足りないものとなって消えていく。たとえ地上のすべての友を失うことになっても、ひとりで立つことになっても、最後までやり通しなさい。迫害やそしりを受け、自分に死に、日々自分をキリストと共に十字架につけられた者と認めることになってもである。『最後まで耐え忍ぶ者は救われる』からである（マタイ二四・一三）。血におおわれて、へりくだっていなさい。御霊に満たされなさい。衣をしみのないように保ち、足にサンダルをはき、入れものに油を満たしなさい。夜が明けて影が消えうせるまで、そうして備えていなさい。

より深い真理の教え

あがないの計画

私は、ある聴衆に、あがないの大いなる計画を単純にはっきりと示したいと思った。その中には、神のみことばや、罪深い人類を救うための三位一体の神の協力について、ほとんど、あるいはまったく知らない人々が多くいた。その人々の耳と理解を、目が助けるようにしたいとも思った。そこで私は、「あがないの計画」の図を描くことを思いついた。この図は、天地創造と堕落から万物の最終的な回復に至るまでの出来事の連なりを、簡単に、一望できる形で示している。

ご覧のとおり、この連なりの初めの三つの区分は、父の時代、御子の時代、聖霊の時代を表している。これらは、罪深い人類をあがなうための協力によって、互いにつながっている。

父

第一の円の上には、棺が置かれている。それは、アダムからモーセまで、またモーセからキリストまで支配した罪と死を表している。

天から投げ落とされたサタンは、私たちの先祖（地上の最初の住人）を誘惑し、不従順と罪に導いた。こうして、全人類の堕落を引き起こしたのである。神は、その聖さのゆえに、罪を少しも大目に見ることがおできにならなかった。『このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類にはいり込んだのである』（ローマ五・一二）。

創世記の第一章は、いのちと創造がいたるところで脈打つところから始まる。ところが、創世記の最後の章の最後の節は、薬を塗られてエジプトで棺に納められた死人で終わっている（創世記五〇・二六）。『罪を犯す魂は死ぬ』（エゼキエル一八・二〇）。これが神の下された判決であり、神のみことばは破られることがありえなかった。こうして、人類全体は箱の中に、出ることのできない棺の中に入ってしまったのである。

人類は、神ご自身に似せて造られた完全な男と女から始まった。二人は、エデンの園の実り豊かな木々の下で、いのちと清さのうちに神と共に歩んでいた。ところが人類は棺で終わり、女のすえには死の宣告が下された。

神は、そのあがないの計画において、物事の順序をすっかり逆にされた。

神は、墓の中に、死んで動かず冷たく横たわるひとりの人（罪人のために血を流されたイエス・キリスト）から始められた。そして、完全な男と女（キリストとその花嫁）が、新しいエルサレムの決してしおれない木々の下で、永遠のいのちと清さのうちに神と共に歩む姿で締めくくられる。

エバはへびの巧みな言葉にだまされた。けれども、アダムはだまされたのではなく、承知のうえで、自ら進んで禁じられた木の実を取った。それと同じように、全人類が誘惑する者に惑わされ、だまされて、死に定められたとき、私たちの第二のアダムであるイエスは、承知のうえで、自ら進んで下って来られた。そして死の実を食べられ、罪人のかたわらに立たれた。罪人の身代わりとなられ、罪人の追放を負われ、罪人の死を死なれて、罪人を堕落から引き上げてくださるためである。

恵みからのその堕落において、人類はあまりに低く落ち、あまりに深くまで下った。そのため、三位一体の神が力を合わせなければ、人を引き上げることはできなかった。人を『しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく』（エペソ五・二七）、責められるところのない者として、父の御前に回復させることもできなかった。創世記からマラキ書までに記されている父の時代に、神は繰り返し約束されていた。『時の満ちるに及んで』（ガラテヤ四・四）、この罪深い世に愛の贈り物を与えよう、と。その贈り物とは、神のひとり子イエスであった。

イエスはへびのかしらを砕かれることになっていた（創世記三・一五）。そして、十字架の上でご自身の尊い血によって、人と神とのあいだの淵に橋をかけられることになっていた。また、幕を裂かれ、至聖所に入る『新しい生きた道』を開かれることになっていた（ヘブル一〇・二〇）。

旧約聖書に記されている幾世紀もの年月は、いくつかの時期に分けられる。天地創造とアダム、罪の侵入、洪水、モーセがイスラエルの子らを導き出す、カナンの地、小預言者である。その幾世紀ものあいだ、忠実な民は十字架を、そしてイエスが血を流される日を、待ち望んでいた（型と影、すなわち雄牛ややぎや小羊の血が流されたことを見なさい）。ちょうど、今日聖霊の時代に生きている私たちが、十字架と、その上で流された血を振り返るのと同じである。

約束どおり、時が満ちて、『神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである』（ヨハネ三・一六）。

御子

第二の時代（御子の時代）は、新約聖書の四福音書に記されている。図の上では、この時代を十字架がおおっている。古い時代が棺（罪と死）におおわれていたのと同じである。この時代は、小さな準備のつなぎ目、すなわちバプテスマのヨハネの宣教によって、第一の時代につながっている。

バプテスマのヨハネは、「悔い改めよ」（マタイ三・二）と『見よ、神の小羊』（ヨハネ一・三六）という二つの大いなるメッセージを語りつつ、聖霊の時代が来ることを預言している。「わたしのあとから来るかたがある。わたしには、そのくつのひもを解く値うちもない。そのかたが来られると、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」（マルコ一・七、ルカ三・一六）。それはまるで、ヨハネが図の上のこの円、すなわち御子のわざをまっすぐに見通し、終わりを初めから見たかのようである。ヨハネは、イエスについて多くのことを言えたはずであった。

そのかたが来られると、病人をいやされる。そのかたが来られると、死人をよみがえらせられる。飢えた群衆を養われ、らい病人をきよめられ、血を流され、三日目によみがえられる。けれども、ヨハネは御霊の澄んだ目で、これらすべてのことを見通している。それらは驚くべきことであったが、ヨハネはその先を見て、こう叫んでいる。

「そのかたが来られると、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう」（ルカ三・一六）

第二の時代は、イエスの生涯である。そこには、キリストの誕生、少年時代、ヨルダン川でのバプテスマ、宣教の働き、最後の晩餐と園、十字架と埋葬、そして私たちの主の復活が含まれる。この時代は、神と人とのあいだの淵に完全に橋をかけ、主の尊い血によって罪からの救いをもたらした。それでもなお、あがないの計画を最も完全な意味で完成させるには、三位一体の第三の位格である聖霊のわざと時代が必要であった。イエスははっきりと言っておられる。

『わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこないであろう』（ヨハネ一六・七）。箱舟には、三階がなければならなかった。罪にのろわれた群衆がそこに逃れて、地の不法の上に必ず下るさばきの洪水を免れるためである。

聖霊

父は、罪人への愛の贈り物として、御子イエス・キリストを与えられた。それと同じように、今度はイエスが、信じる者への愛の贈り物として、父の約束である聖霊を与えられた。

御霊の時代と御子の時代とのつなぎ目は、主の昇天から聖霊の注ぎまでの十日間である。そのあいだ、百二十人が約束の助け主を待ってとどまっていた。それはまるで、父が御子と手をつながれ、御子が聖霊と手をつながれたかのようである。その一致と、目的が一つであることによって、あがないの計画が成し遂げられるためである。

罪と死が第一の円をおおい、十字架のわざが第二の円のほかのどの出来事よりも高くそびえ立っている。それと同じように、今、聖霊がはとのように聖霊の時代の上にとどまられ、それをおおっておられる。

ペンテコステの日に始まった聖霊の時代に、私たちは今も生きている。実際、イエスが、地と天を隔てている波のような雲を押し開かれ、ご自分の花嫁を迎えられるまで、私たちはこの時代に生き続けるのである。

今日、私たちは聖霊の時代の最後の時刻に生きている。ペンテコステの日からこの時代が包む幾世紀を振り返ると、まず見えるのは、力に満ちた教会である。最初の種まきの日々に伴って降り注いだ前の雨のもとで、しるしと奇跡が行われた。次に、賜物と力が失われ、聖霊の教えが失われた。暗黒時代のとばりが、信仰による義認の光をおおい隠した時代である。それから回復が始まり、聖霊と後の雨の教えが、広くまき散らされている。

今日、私たちは主の来臨の間際に立っている。御霊の力によって、教会はペンテコステの力と完全という水準にまで、余すところなく回復されつつある。勝利を得る者たちの、さげすまれている小さな群れが、血と火をくぐり抜け、勝ち誇って、小羊の血によってきよめられ、白くされて出て来ようとしている。その人々は顔を上げ、腕を差し伸べて、主の来臨を慕い求めている。『輝く明けの明星』（黙示録二二・一六）であり、その翼にいやす力を備えてのぼられる義の太陽（マラキ四・二）である主を、慕い求めているのである。

『主ご自身が（中略）合図の声で、天から下ってこられる。その時、キリストにあって死んだ人々が、まず最初によみがえり、それから生き残っているわたしたちが、彼らと共に引き上げられ、空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう』（第一テサロニケ四・一六～一七）

御子

よみがえった聖徒たちと、変えられた聖徒たちは、携挙によって小羊の婚礼と婚宴へと引き上げられる。そのあいだ、第三のつなぎ目、すなわちかつてなかったほどの患難と悲しみと刑罰が続く。それが、主がご自分の聖徒たちと共に下って来られ、『まつりごとはその肩にあ』る日へとつながっていく（イザヤ九・六）。『なぜなら、キリストはあらゆる敵をその足もとに置く時までは、支配を続けることになっているからである』（第一コリント一五・二五）。

『悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへび』は、千年のあいだつながれ、底知れぬ所に投げ込まれる。御使がその入口を閉じて上に封印し、千年の期間が終わるまで、諸国民を惑わすことがないようにする。その後、悪魔はしばらくのあいだだけ解放されることになっている（黙示録二〇・二～三）。

そのとき、私たちの主の祈りが成就する。『御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように』（マタイ六・一〇）。勝利を得た聖徒たち、すなわち『獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった』人々は、『生きかえって、キリストと共に千年の間、支配』する（黙示録二〇・四）。

黙示録二十章一節から十五節までを読みなさい。千年の期間が終わると、サタンはしばらくのあいだ、その獄から解放され、出て行って諸国民を惑わす。そのため諸国民は、愛されていた都の周りに集まり、聖徒たちの陣営を包囲する。けれども、天から、神のもとから火が下ってきて、彼らを焼き尽くす。彼らを惑わした悪魔は、ふたたび底知れぬ所に投げ込まれるのではない。今度は、獣とにせ預言者のいる火と硫黄との池に投げ込まれ、世々限りなく日夜、苦しめられるのである。

父

それから、大きな白い御座のさばきが来る。死んだ者は、大いなる者も小さき者も共に、神の御前に立つように呼び出される。天も地も、その御顔の前から逃げ去る。

いのちの書が開かれる。死人は、書物に書かれていることにしたがい、そのしわざに応じてさばかれる。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出す。そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受ける。そのとき、イエスは『国を父なる神に渡され』、『万物を従わせたそのかたに従』われ

る。『それは、神がすべての者にあって、すべてとなられるためである』（第一コリント一五・二四、二八）。こうして主は、ご自分の敵を従わせられたのち、手綱をふたたび父の御手に渡される。あがないの計画は完成したのである。

図を左から右へ読みなさい。父、御子、聖霊、御子、父である。今度は右から左へ読みなさい。同じである。

円は閉じられた。けれども、あがないのわざは、まだ完成しない。パトモス島でヨハネが見た幻が実現し、ふたたび完全な男と完全な女、すなわちキリストとその花嫁が、とこしえに緑の木々の下を歩くまでは。その木の葉は枯れず、その実は絶えることがない。悪魔とその力は最後に打ち倒され、罪は決してそこに入ることがない。

ああ、堕落した世界をあがない、父と子と聖霊との途切れることのない交わりを回復するために、三位一体の神が注がれた、限りない愛と忍耐よ。血のしたたりのような汗、思い、労苦、骨折りよ！

型と影のベールに包まれた花嫁

一九一九年二月九日、カリフォルニア州ロサンゼルスのビクトリア・ホールで語った午後の話

『さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう』（黙示録二一・九）

王の王の大いなる婚礼が、まもなく行われようとしている。天でも地でも、この上なく大がかりな備えが進められている。上では御使の軍勢のうちで、地では花嫁の群れのうちで、立琴の調律が行われている。そして、新しい歌、すなわち婚礼の歌の最初のすばらしい調べが、愛に満ちた心から、流れるような賛美となってあふれ出ている。

御霊に満たされた神の子供はみな、すなわち花嫁のからだの一人ひとりは、今すっかり目を覚まし、つま先立ちになっている。まもなく栄光の雲のうちに現れられる花婿が、出て来られるのを待ち望んでいるのである。主が現れられるとき、天にあふれる驚くべき栄光と美しさは、死ぬべき人の思いでは描くことも想像することもできない。

あなたは、早朝のばら色の輝きの中に、心を奪われて立ちつくしたことがあるだろうか。そのとき、のぼる日は夜の影を押し返し、雪のように白い雲の一つ一つに触れて照らし、燃えるような鮮やかな美しさに変えていった。ついには、空全体が、金と火と深紅の御使の翼で満ちたように見えた。

地上の太陽でさえ、これほどの栄光を伴ってのぼるのである。それならば、その翼にいやす力を備えてのぼられる義の太陽が来られるときは、どのようであろうか。そう思いめぐらしたことはないだろうか。

そうだ、小羊の婚姻は近づいている。ご自分の花嫁のために場所を備えに行かれた花婿は、まもなく現れられる。

地上では、花嫁が最後の支度をしている。嫁入り道具に、最後の仕上げが施されつつある。没薬の油と香料とによる彼女のきよめの期間は、ほとんど満ちた。彼女が王のもとに連れて行かれる日が来たのである。

世の常のことでも、花嫁はいつも人の関心を引くものである。ひそひそとささやく声一つで十分である。

「花嫁が来た」と、その一言だけで、百組の目がたちまちそちらを向き、ほほえみを浮かべて見つめる。

霊のことにおいては、花嫁への関心は千倍にも強められる。そして、この関心はきっと御霊によって生み出されたものである。パトモス島で、御使は愛された弟子に語って言った。

『さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう』。そして彼を御霊によって大きな高い山へと連れて行き、そこで花嫁の栄光を彼に見せた（黙示録二一・九～一〇）。それと同じように、今日、聖霊は神の子供たちに語っておられるからである。

「さあ、（神のみことばのもとに）きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう」

ひとたび聖霊が私たちを山の上に連れて行かれ、驚き見張る私たちの目の前でみことばを開き始められると、私たちはそのページに見入る。そして、ほとんどすべての絵の中に花嫁を見るのである。

私たちは、**過去**に、型と影の霧に包まれた花嫁を見る。

私たちは、**現在**に、型と影から姿を現す花嫁を見る。彼女は、生きた、目に見える、御霊に満たされ御霊に導かれる民として出て来る。へりくだって低くありながら、やがて来られる主の威厳と尊厳をもって歩んでいる。

私たちは、**未来**に、花婿と共にとこしえの王座で治める花嫁を見る。そこは栄光の都である。通りはみな純金で、門は一つの真珠でできている。主の大庭には、喜びと賛美がとこしえに響き渡る。

あばら骨の群れである花嫁は、花婿の傷ついたわきから生み出される

（創世記二・二一）

みことばには、花嫁の型と影、また花婿を迎えに出て行く花嫁の型と影が満ちている。その過去を見つめるとき、御霊が最初に示してくださる型の一つは、アダムとエバである。

罪と死を初めてこの世にもたらしたのは、一人の男と一人の女（アダムとエバ）であった。そして、罪と死という最後の恐ろしい敵が征服されるとき、手に手を取って共に出て行き、治め支配するのも、一人の男と一人の女（キリストとその教会）である。主をほめたたえよ。

最初のアダムには、彼の住む美しいエデンの園のどこにも、『ふさわしい助け手が見つからなかった』（創世記二・二〇）。『そこで主なる神は人を深く眠らせ』（創世記二・二一）、彼が眠っているあいだに、そのあばら骨の一つを取られた。そして『人から取ったあばら骨でひとりの女を造り、人のところへ連れてこられた』（創世記二・二二）。ここにすぐ、**第二のアダム**の美しい型が見える。天のセラピムの軍勢の中にも、この方にふさわしい助け手は見つからなかった。それから、死の深い眠りが来た。主なる神は、それがこの方の上に臨むのを許されたのである。この方が十字架の上で眠っておられたとき、そのわきは大きく開かれた。

ハレルヤ！　私たちの第二のアダムであるイエスの傷ついたわきから、今日、あばら骨の群れが形づくられつつある。それはまもなく人なるキリスト・イエスのもとに連れて行かれ、とこしえにその妻となり、そのふさわしい助け手となるのである。

花嫁の衣は血で買われたものでなければならない（創世記三・二一）

それから、アダムとエバが着物の必要に気づく日が来た。彼らは自分たちの力で、いちじくの葉の腰巻を作った。けれども、それは神に認められなかった。人は、自分の行いによっても、自分の義で作った衣によっても、決して父に喜ばれることはない。人のおおいは、血という代価で買われなければならなかった。そのため、罪のない生き物の血が流された。そして主なる神は皮の着物を造られて（皮は、イエスのおおいと義を表している）、彼らに着せられた。

花嫁のささげ物は血によるものでなければならない（創世記四・四～五）

カインは、地の産物のうち最上のもの、すなわち自分の行いと労苦が生み出しうる最上の成果を携えてきた。けれども主は、その供え物を顧みられなかった。しかし、**アベル**がその群れのういご、すなわちほふられた小羊を携えてきたとき、神はその血をご覧になり、この供え物を顧みられた。

良い行いや人間の努力が、神に顧みられることは決してない。けれども、最もへりくだった聖徒であっても、ひざまずき、カルバリの小羊の血によるささげ物を携えて来るなら、その血によって、全天の顧みと承認を得るのである。

箱舟の準備、花嫁の分離と従順（創世記六～八章）

『さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう』と、生けるみことばは叫ぶ（黙示録二一・九）。そのとき私たちは、箱舟と、ノアとの契約と、地をおおった大水に目を向ける。

聖霊は、マタイによる福音書二十四章三十七節から三十九節の探照灯を手に取られる。そして、そのまばゆい光を、霧と影とにまっすぐに向けられる。この霧と影は、それまで創世記の六章、七章、八章をすっかりおおい隠し、過ぎ去った日の歴史にすぎないように見せていた。イエスの照らし出す言葉はこうである。

「ノアの時に**そうであった**ように」

「**そのようになるであろう**」。この言葉が手を伸ばして外側のベールを引き開け、内なる深みをあらわにする。するとページはふたたび生き返ったように見え、今日の押し寄せる罪深い群衆で満ちる。ふたたび人の悪は地にはびこり、地

は腐敗と暴虐に満ちている。ふたたび私たちは、荒れ狂う嵐の中から、戦争と疫病と悪疫の中から、神の警告の声を聞く。

「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。（中略）わたしは彼らを地とともに滅ぼそう」（創世記六・三、一三）。ふたたび私たちは、神の小さな残りの者を見る。限りなく尊い少数の者、神のノアたちである。彼らは正しく全き人々で、その家族を伴って、神と共に歩んでいる。ふたたび私たちは、忠実な人々を見る。彼らの耳は神の呼び声に開かれ、彼らの目は、脅かすような雲におおわれて暗くなっていく空を見分けている。そのとき、彼らのただ中に、三階のある箱舟がぼんやりと姿を現す。その横には一つの戸口があり、上には一つの窓がある。そこへ、次の言葉が響く。

「ノアの時に**そうであった**ように、（中略）**そのようになるであろう**」。この言葉と共に、三階のある箱舟は闇を貫いて燃え輝く。そして私たちは悟る。その三つの階は、ほかでもない、愛に満ちた三位一体の神の、力を合わせ一つとなった三重の働きでできているのである。**御子**の時代は、父の愛という確かな土台の上に建てられた（ヨハネ一六・七）。聖霊の時代は、御子の時代の上に建てられた（ヨハネ一六・七）。

横に設けられた**開いた戸口**は、以前はありふれたものに思えた。けれども今は、私たちの心を愛で満たし、目を涙で満たす。御霊がこうささやかれるからである。

「その戸口とはだれか。イエスのほかに、だれがありえようか。イエスの傷ついたわきを通して、『新しい生きた道』が開かれた（ヘブル一〇・二〇）。その道は、イエスご自身を通って、父の愛の深みへ、また御霊の力の高みへと通じている」

ふたたび、呼び声が耳に鳴り響くのを私たちは聞く。

「あなたと家族とはみな箱舟にはいりなさい」（創世記七・一）。私たちは、花嫁の群れが戸口を通って入って行くのを見る。彼らは外の世界から分けられ、閉ざされて、三位一体の神のがんじょうな、嵐に耐える船の中にいる。この船は、どんな大風をも乗り切るのである。

戸が閉ざされることに、私たちは、あわれみの日が閉ざされることを見る。**雨が降る**こと、海が荒れ狂うこと、地とその中にあるすべてのものをおおう大水が高まること（黙示録一六章）に、私たちは患難と恐ろしい悲しみを見る。それは、まもなくこの世に襲いかかろうとしている。

箱舟が浮かび上がることは、父と御子と聖霊を表している。箱舟はどの波をも乗り越え、選ばれた忠実な小さな群れを風と雨から守る。そのように、父と御子と聖霊は花嫁を包んで引き上げ、来たるべき患難の荒波の騒ぎのはるか上に、彼女を高く保ってくださるのである。

花嫁への警告と、急ぎの逃避と、その脱出（創世記一九・一七〜三〇）

花嫁は、数が少なく（マタイ七・一四）、人にさげすまれ、神に愛されている。御霊がキリストのものを受けられて私たちに示してくださるとき、御霊に満ちたページの一つ一つから、彼女はなんと鮮やかに立ち上がって来ることか。

私たちはソドムとゴモラの滅びに目を向ける。すると、御霊の御手が幕を引き開けられるにつれて、私たちはふたたび、今日の生きた、押し寄せる群衆を見つめていることに気づく。むなしく罪に満ちた地があり、来たるべき患難があり、従順な少数の者の脱出があり、そして神の燃える怒りが下る。

あの悪い町ソドムに、私たちは今日の自分たちの国々を見る。そこでは悪がますます募ってきた。

へりくだった従順なロトに、私たちは、曲った邪悪な時代のただ中に住む花嫁を見る。彼女は世にありながら、世のものではない。

夕暮に**ふたりの御使**が来て、真夜中に警告の叫びをあげたことに、私たちは**「御霊とみことば」**を認める。御霊とみことばは、来たるべき患難を警告し、すぐに逃げるよう促している。ふたりの御使がロトに警告するとすぐに、今度はロトが急いでむこたちに警告しに行き、こう叫んだ。

「立ってこの所から出なさい。主がこの町を滅ぼされます」（創世記一九・一四）。これは、地を去る備えをしている今日の**教会**の叫びである。

むこたちのあざけりと不信仰に、私たちは、神の怒りが迫っていると警告されたときの、今日の世全体の態度が映し出されているのを見る。

彼らがためらっていると、ふたりの御使は、ロトとその妻とふたりの娘の手を取って連れ出し、町の外に置いた。御霊とみことばは今日、神の小さな子供たちの手を取って連れ出され、町の外に置いておられる。主のために真に分離された生活へと導いておられるのである。

「のがれて、自分の命を救いなさい。うしろをふりかえって見てはならない。低地にはどこにも立ち止まってはならない。山にのがれなさい。そうしなければ、あなたは滅びます」（創世記一九・一七）。この叫びは、今日の神の小さな家族への、御霊とみことばの叫びである。「のがれて、自分の命を救いなさい。滅びが来ようとしている。今はうしろをふりかえる時ではない。低地にはどこにも立ち止まってはならない」。主は、召し出された者の中から召し出され、さらにその中から召し出された民を、呼び出しておられるからである。その民は山へとのがれる（神の高みへとのぼって行く）のである。

ロトがためらうと、「急ぎなさい。あなたがそこに着くまでは、わたしは何事もすることができません」（創世記一九・二二）という叫びがあがる。私たちはその叫びに、黙示録七章二節と三節で、日の出る方から上って来る御使の叫びが混じり合っているのを聞く。「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない」

ロトの妻がうしろを顧みて塩の柱になったことに、私たちは、今日の信仰から離れた教会や人々の姿を見る。彼らは、最初にうしろを振り返ったまさにその場所に、こわばり、凍りついて立っている。今はうしろを振り返る時ではない。すみやかに出て行く時である。主をほめたたえよ。

主は硫黄と火とを天からソドムとゴモラの上に降らせ、町々と、その町々のすべての住民と、地にはえている物とを滅ぼされた（創世記一九・二四～二五）。そこに私たちは、神の燃える怒りと憤りとさばきを認める。黙示録に預言されている大患難である。

ロトと娘たちは、山のほら穴に身を寄せた。私たちが身を隠すほら穴はキリストであり、そのほら穴は山、すなわち神の中にある（ダニエル二・四五）。

ロトと娘たちが山のほら穴に安全に身を寄せたことに、私たちは、主の忠実な子供たちを見る。そのいのちはキリストと共に神のうちに隠されており、地に注がれる燃える憤りのはるか上にある。

御霊は花嫁と共にとどまり、花嫁を導かれる

救いの井戸から花婿の腕の中まで

（創世記二四章）

ページをめくると、リベカの物語が開かれる。アブラハムのしもべエリエゼルが、イサクのために選んだ花嫁である。

ふたたび御霊は、啓示の光を高く掲げられる。するとふたたび、印刷されたページは消えて行く。そこに書かれた物語は、一見したところ、地上のイサクとリベカの恋と愛についての興味深い話にすぎないように思えたものである。

私たちは、昨日の鏡をのぞき込んでいることに気づく。その鏡は、今日の姿を映し返しているのである。

リベカは新しい気高さをもって**立ち上がる**。キリストの花嫁の気高さである。

そして出て来て（分離）

井戸に行き（救い）

下りて行き（へりくだり）

水がめを満たし（『あなたがたは喜びをもって、救の井戸から水をくむ』イザヤ一二・三）

上がって来る（下る道は上る道である。『自分を低くする者は高くされるであろう』ルカ一四・一一）

しもべは彼女を迎えに走って行き、遠くにいる栄光の花婿のことを語り、花嫁となる戸を開く。そのとき、理解の光がこのしもべの上に注がれ、私たちはすぐに、尊い聖霊を認める。私たちをあらゆる真理に導くために遣わされたかたである（ヨハネ一六・一三）。

聖霊は、救いの井戸で心の清い人を迎えに**走って行かれ**、

天の花婿の美しさとご性質を明らかにされ、

地上の最も親しい身内やきずなに別れを告げようとする者をみな、**招いておられる**。招かれた者は、日々の試練と苦難という揺れの激しいらくだに乗り（試みられるとき、私たちは金のように出て来ると知っている）、

御霊に**導かれて**、花婿を迎えに出て行くのである（マタイ二五・六）。

イサクが夕暮に野に出て歩き、リベカを迎えたことに、私たちは型として、私たちの花婿イエスの姿を見る。主は雲のうちに出て来られ、巡礼の旅の終わりに、ご自分の花嫁を迎えてくださるのである。

そして、リベカが目をあげてイサクを見、らくだからおりるとき、私たちの心は躍り上がる。花嫁が目を上げて、そのあがない主を見る日の幻を見るからである。そのとき花嫁は、試練と苦難と困難のらくだから、とこしえにおりる。そして、その涙はことごとくぬぐい去られる。

リベカが被衣で身をおおったことに、私たちは、主の来臨のときの花嫁を見る。彼女は世の目から完全に隔てられ、見えなくされるのである。

結びの言葉、「**リベカは彼の妻となった**」は、黙示録十九章七節の、鳴り渡る婚礼の鐘を、私たちの心に響かせる。

『**彼女を愛した**』（創世記二四・六七）という言葉は、私たちの魂を満たし、聖なる喜びと歓喜で圧倒する。私たちがまだ罪人であったとき、主は私たちのために血を流すほどに私たちを愛してくださった。十字架では、私たちの罪を洗い去るほどに愛してくださった。ご自分の御霊で私たちを満たし、細かい刺繍をほどこした婚礼の衣を着せてくださるほどに愛してくださった。それならば、花嫁が（ああ、聖なる、尊い言葉よ）主の妻となるとき、彼女には**愛**が惜しみなく注がれる。その愛を描き出せるほど霊感を受けた、死ぬべき人の筆がどこにあろうか。それを描けるほど境を広げられた人の思いが、どこにあろうか。

生きるにも死ぬにも主にささげる献身、落ち穂拾い、へりくだり、そして花嫁の報い

（ルツ記一～四章）

ルツ記を開くと、私たちはふたたび花嫁を見る。

第一章では、彼女は**故郷を離れ**、ナオミの神に従い、献身をする。それは、生きるにも死ぬにも主にささげる献身であった。

第二章では、彼女は刈り入れの初めから終わりまで、畑で**落ち穂を拾い**、束を集める。そして、花婿ボアズに見守られ、養われる。

第三章では、私たちは彼女の**花婿への愛**を見る。彼の花嫁になりたいという願いと、さらに深い献身も見る。その献身によって、彼女は（三節）**身を洗い**（自分のすべての行いと労苦から）、**油をぬり**（とどまる油注ぎ、すなわち御霊の油）、

晴れ着をまとい（黙示録十九章八節にある『光り輝く、汚れのない麻布の衣』、すなわち『聖徒たちの正しい行い』である。その衣は、詩篇四十五篇十三節と十四節にある縫い取りとこがねで飾られている）、**打ち場に下って行った**（低く、へりくだって、花婿の足もとに、そのあわれみのもとに伏すためである。彼の着物のすそにおおわれ、十三節にあるように『朝まで』、すなわち夜が明けて影が消え去るまで、そこに伏しているのである）。

第四章では、私たちは**花嫁ルツ**を見る。彼女は、最も近い親戚である律法によって締め出されていた。律法は彼女をあがなうことができなかったのである（申命記二三・三）。けれども、ボアズにめとられたとき、彼女は恵みによって迎え入れられた。ボアズは、彼女のあがない主となり、同時に花婿ともなった。なんという絵であろう！　主をほめたたえよ！

燃える試練のただ中でも忠実で、その炎から守られる花嫁（ダニエル三・二一）

ページはふたたびめくられる。今度、私たちは三人のヘブル人の若者、シャデラク、メシャク、アベデネゴを見つめる。

彼らは、この世の神々に対して、礼拝のためにも妥協のためにも、ひざをかがめることをきっぱりと拒む。

恐れることなく、彼らの言葉が響き渡る。唯一のまことの神エホバへの、揺るがない信仰と忠誠を言い表すのである。

私たちは息をのんで見つめる。彼らは外套、下着、帽子、その他の衣服のまま縛られ、火の燃える炉の中に投げ込まれる。けれども、守られ、保たれ、炎の熱から救い出される。

そのとき、たちまち私たちは、驚いてそれと悟り、目を開く。燃える炎が型と影の霧を貫くにつれて、私たちはもう一度よく見る。すると、この**三人**（神の子が彼らのただ中におられる）が、ほかでもない**花嫁**自身、すなわちその**からだと心と霊**であることがわかる。荒れ狂う炎の中で、守られ、保たれているのである。（『あなたがたの霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように』第一テサロニケ五・二三）

誘惑と燃える試練のただ中を、焦げるにおいもなく、害を受けずに歩く者がいる。そこに私たちは、栄光の花嫁の姿を垣間見る。彼女は御霊によって整えられつつある。『その来る日』（マラキ三・二）に耐え、焼きつくす火である私たちの神と共に住むためである。

突然、炉の扉が大きく開き、王の叫ぶ声が聞こえる。

「いと高き神のしもべたちよ、**出てきなさい。ここに来なさい**」。そして私たちは、信仰と望みの目をもって、天に戸口が開かれるのを見る。その戸口は、この世の炉から王の御前へと通じている。そして私たちは、王なる花婿がこう言われる声を聞く。

「良い忠実な僕たちよ、よくやった。**燃える炉**と**地上の試練の中から**、もっと高い所へ**上って来なさい**。わたしの州で位を上げられ、わたしの王座にまで進んで、わたしと共に治めなさい」

祈る花嫁は、口を閉ざされた獅子と共に夜を過ごし、夜明けに引き上げられる（ダニエル六・一〇～二三）

次に私たちは、預言者ダニエルを通して示される、祈る花嫁の姿を垣間見る。彼の見分ける目は、大きく開かれている（ダニエル五・二五～二八）。

彼のへやの窓（彼の魂の目）は、エルサレム（主の来臨、黙示録二一・二）に向かって開かれている。

敵の脅しも策略も、この勇敢で熱心な魂を止めることはできなかった。彼は獅子の穴の深みにあって、目を覚まして祈った。そのあいだ、主の使が獅子の口を押さえて閉ざしていた。

夜明けに、穴の口から石が取りのけられた。そして、王のこう言う声が聞こえた。

「もう十分だ。わたしのところに上って来なさい」。そしてダニエルは獅子の穴から引き上げられ、王のかたわらに自分の足で立った。

王なるイエスの**花嫁**は、この世の暗い夜に閉じ込められ、荒れ狂う獅子、すなわち悪霊と人々に囲まれている。彼らは喜んで彼女に向かって歯をかみならし、その歯で彼女を引き裂こうとしている。けれども彼女は、聖霊（主の使）に守られている。聖霊は、彼女を滅ぼそうとする者すべての口を閉ざしてくださるのである。

彼女は目を覚まし、信頼して目を上げる。その目は澄み、曇りなく、信仰の光に輝いている。そして、今か今かと待ち望みつつ、その目を戸口に注ぐ。

来るべき方は必ず来られ、遅れることはない。彼女はそれをよく知っている。長い夜はまもなく終わることも、よく知っている。夜明けには、王が上から彼女を呼ばれる声が聞こえるであろう。そのとき王は雲を巻き退けられ、天に戸口を開かれる。そしてその戸口を通して、彼女をこの世の獅子の穴からとこしえに引き上げられ、ご自身の栄光の御前に迎えてくださる。そこは、どんな飢えた獣も来ることのできない地である。

二十四節では、私たちは、彼女を試練と迫害の穴に投げ入れた悪い者たちを見る。彼ら自身が、猛り狂う飢えた獣のただ中に投げ入れられるのである。そこには、獣の猛威を押しとどめる御使の手はない。彼らの骨はことごとく砕かれ、彼らは跡形もなく滅ぼされる。

ここにもまた、花嫁が王の御前に引き上げられたすぐ後に続く患難がある。

ほふられた小羊にはほふられた花嫁が、よみがえられた花婿にはよみがえった花嫁がなければならない

みことばの、天を天蓋とする長い回廊を、御霊はどこまでも導いて行かれる。ついに静けさが私たちの魂を包む。私たちは飼葉おけのもとに連れて来られる。敬虔な目でその奥をのぞき込むと、そのやわらかな抱擁のうちに横たわる幼子キリストが見える。

キリストを示してくださる導き手である聖霊が、私たちの耳にやさしくささやかれる。

「主がこの世におられたように、あなたがたもそうなる。（中略）主が現れるとき、あなたがたは主に似る者となり、そのままことの御姿を見る」（第一ヨハネ四・一七、三・二）

その小さな姿をなおも見つめていると、幼子キリストは私たちの視界から消えて行く。そして、その代わりに、花嫁のうちにあるキリストのいのちが見える。それは清い処女の生活から宿され、生み出されたものであり、聖霊の力におおわれている（ルカ一・三五）。

その子は背丈が伸びるにつれ（エペソ四・一五）、乳から堅い食物へと進む（ヘブル五・一三〜一四）。私たちは、その子がいつも十字架の陰と栄光のうちを歩むのを見る（マタイ一六・二四）。

花嫁は、主の苦難にあずかることによって主を知り、地と自我とに対して死んでいく。そしてついには、パウロと共に声をあげて叫ぶ。

『わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。しかし、わたしがいま肉にあって生きているのは、わたしを愛し、わたしのためにご自身をささげられた神の御子を信じる信仰によって、生きているのである』（ガラテヤ二・一九〜二〇）

こうして私たちは、小羊の妻である花嫁を見る。彼女は主の苦難にあずかることによってだけでなく、主の復活の力によっても主を知っている。死人の中から生かされた者として、自分自身をささげている。主と共によみがえり、それゆえにとこしえに主と共に治める者である。私たちの主の昇天の前に、復活の力があった。それと同じように、今よみがえりの栄光のうちに立ち上がり、出て来つつある花嫁は、まもなく引き上げる力を受ける。使徒行伝一章九節と、テサロニケ人への第一の手紙四章十七節にある力である。そして空中へとのぼり、主に会うのである。

これらは、霧に包まれた多くの型のうち、私たちの目の前でベールを取られたほんのいくつかにすぎない。かつておおい隠していた影のうち、御霊の照らしによって今散らされたもののほんのいくつかである。御霊は、驚き見張る私たちの目の前に、花嫁を示してくださるのである（ヨハネ一四・二六、一六・一三〜一四）。

さらに続けて、エステル、雅歌、ともしびを持った十人のおとめ、そのほか多くのものを通して示される、隠された宝を探ることもできよう。

さらに進んで、海に囲まれたあの祝された島パトモスから、「愛された弟子ヨハネ」の目を通して、栄光に輝いて**治める花嫁**を見つめることもできよう。彼女は、王なる花婿と共にその王座に座している。

王が彼女に着せられた王の力と輝きを見つめることもできよう。また、彼女が住む天のエルサレムを見つめることもできよう。そこには金の通り、宝石で飾られた城壁、真珠の門がある。決してしおれない花、決して朽ちない実、ガラスの海がある。金の立琴を持ったあがなわれた群衆がおり、決して薄れることのない光がある。

けれども、私たちの主題がまだ十分に始まりもしないうちに、この午後の話の時間は過ぎてしまった。家に帰ったら、聖書を取り出しなさい。そのページを大きく開き、片手に詩篇百十九篇百五節のともされたともしびを持ち、もう一方の手を聖霊の御手にゆだねなさい。そして、聖霊に導いていただきなさい。神の永遠のみことばの、宝石をちりばめ、天の光に照らされた長い回廊を通って行くのである。その回廊は、創世記の最初の節から黙示録の最後の節まで、途切れることなく続いている。

それから、愛するみなさん、足を速めなさい。帯をしっかりと締め、サンダルを足にしっかりとはきなさい。しみ一つない衣をまとい、燃える心をもって、急

いで主を迎えに出て行きなさい。主はまもなく来られるからである。

イサクとリベカ

キリストとその花嫁の注目すべき型

（イリノイ州シカゴのベテル・テンプルでの説教から）

旧約聖書には、キリストとその花嫁の美しい型が数多くある。その中でも最も尊く、際立った型の一つが、イサクとリベカである。

神のみことばでは、あがないの物語と計画の全体が、四者の一団、すなわち父と御子と聖霊と花嫁を中心にめぐっている。それと同じように、この型でも、物語は四人の中心人物を軸に織りなされている。

アブラハム。父なる神の型である。

イサク。御子イエスの型である。

しもべエリエゼル。花嫁を探し出して連れて来るために神から遣わされた、聖霊の型である。

そしてリベカ。花婿を迎えに呼び出されつつある、花嫁のからだの型である。

長く待ち望まれ、約束の成就として来たイサク、来られたイエス

長い年月のあいだ、サラはイサクの来るのを、激しい思いで待ち望んでいた。自分の恥を取り去ってくれるはずの男の子の誕生である。望みをいだくときもあれば、絶望するときもあった。そうして待っているうちに、ついに神が長い沈黙を破って語られ、約束の成就としてイサクが来た。

幾世紀ものあいだ、人類は御子イエスの来られるのを待ち望んでいた。イエスは、ご自分に信頼するすべての罪人をあがなわれ、その恥を負い去ってくださるはずのかたであった。そして神は御霊によってマリヤに語られた。イエスは父の約束の成就として、また信じるすべての者のためのいけにえの供え物として来られたのである。

アブラハムは、自分の子、ひとり子であり約束の子であるイサクを見つめた。そのとき彼の心を満たしたに違いない愛のあふれを、だれが言い表し、推し量ることができようか。その子が育つにつれ、彼はアブラハムの心の誇りとなり、その家の宝となった。けれども、アブラハムはイサクを深く愛していたが、神をそれ以上に愛していた。

愛の最大の試金石は犠牲である。神は、アブラハムの愛の深さを測るために、彼を試みてこう言われた。

「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、そこで彼を燔祭としてささげなさい」（創世記二二・二）。この節は、ヨハネによる福音書三章十六節に、なんとよく似ていることか。そこにはこう書いてある。『神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった』。

アブラハムはこの試練に耐えた。朝はやく起きて、ろばにくらを置き、ふたりの若者とその子とを連れ、燔祭のたきぎを割り、立って神が示された所に出かけた（創世記二二・三）。それから長い旅が続いた。ひとり子への愛のために心は血を流していたが、父の足取りは決してひるまなかった。彼はどこまでも進み、困難の丘を一つ一つ越えて、ついにはるかにその場所を見た（創世記二二・四）。

その尊い御名をほめたたえよ。私たちの父なる神は、御子イエスをささげるために、なんと遠くまで旅をされたことか！　神はあらゆる丘を越えられた。シナイの山に登られた。決してひるまれなかった。それは、天の最も豊かな宝、ご自分のふところの御子を与えることを意味していた。それでも神はどこまでも進まれ、ついにその場所をご覧になった。カルバリの丘が見えてきたのである。それでもなお、一瞬のためらいもなく、旅を続けられた。『神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである』（ヨハネ三・一六）。

イサクはモリヤの丘にたきぎを負って行き、イエスはカルバリの丘の頂に十字架を負って行かれる

『アブラハムは燔祭のたきぎを取って、その子イサクに負わせ、手に火と刃物とを執って、ふたり一緒に行った』（創世記二二・六）。イサクがモリヤの山に登るとき、アブラハムがささげることになっていたその子の上に、その肩の上に、たきぎを載せたのは、アブラハム自身の手であった。イエスがカルバリの丘に十字架を負って登られるとき、血を流すその背中に木の十字架が載せられるのを、進んで許されたのは、神ご自身の手であった。

やがてイサクは、父アブラハムに「**父よ**」と言った（創世記二二・七）。ああ、イエスの心からの大いなる叫びよ。「**わが父**、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ二七・四六）。イサクは言った。

「父よ、火とたきぎとはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」（創世記二二・七）。アブラハムは言った。

「子よ、神みずから小羊を備えてくださるであろう」（創世記二二・八）。ああ！　神がイエスを私たちの罪のためのあがないの供え物として与えられたとき、なんという小羊、なんという血を流す、しみのない小羊を備えてくださったことか！

雄羊はイサクの身代わりとなったが、イエスの身代わりとなれる者はなかった

ついに丘の頂に着いた。祭壇は築かれ、たきぎは並べられ、アブラハムはその子イサクを縛って、祭壇のたきぎの上に載せた（創世記二二・九）。そして、アブラハムが手を差し伸べ、刃物を執ってその子を殺そうとしたまさにそのとき、主の使が天から彼を呼んだ（そうだ、天のすべての御使が、神への信仰と従順な愛のこのすばらしい現れを見ようと、見下ろしていたと私は信じる）。そして、御使は言った。

「わらべを手にかけてはならない。あなたが神を恐れる者であることを、わたしは今知った。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまなかったからである」（創世記二二・一二）

『この時アブラハムが目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それを**その子のかわりに**燔祭としてささげた』（創世記二二・一三）。雄羊はイサクの身代わりとなることができた。けれども、イエスの身代わりとなり、その位置を満たすことのできる者は、決してだれもいなかった。イエスは木の十字架を負って、カルバリの丘に引かれて行かれた。そしてイサクのように、木の上に横たえられた。刃物を持った手（イエスの場合は、やりを持った手）が、打ちおろそうと振り上げられた。父ご自身が御顔をそむけなければならなかったのに、その一撃を押しとどめようと天から叫ぶ御使はいなかった。一撃は下った。そしてイエスの血が流れ出た。その深紅の流れには、諸国民のいやしがあった。世の初めからほふられた神の小羊イエスは、代価を支払われた。そのいけにえによって、きよめる血のもとに来るすべての者に、とこしえのあがないをもたらされたのである。

アブラハムはその子イサクのために花嫁を探させようと、年長のしもべを故郷に遣わす

神は御子イエスのために花嫁を探し出して連れて来るよう、聖霊をこの世に遣わされる

そのあいだの年月は軽く飛ばして、創世記二十四章に進む。そこには、アブラハムが年長のしもべを呼び寄せ、自分の故郷に帰って、その子イサクのために妻を選ぶよう、おごそかに命じた日のことが記されている。アブラハムはしもべに、自分が当時住んでいたカナンびとのうちから妻を選ばないと誓わせた。そして、こう命じた。

「わたしの国へ行き、親族の所へ行って、わたしの子イサクのために妻をめとりなさい」（創世記二四・四）

神のこの大いなる愛は、私たちの弱い思いをなんとはるかに越えていることか！　次のことを思い起こすとき、神のあふれる恵みの大きさは、なんと私たち

を圧倒することか。神は、天のカナンの御使の軍勢のうちのだれからも、花嫁を選ばせることを許されなかった。そうではなく、助け主である聖霊を、この世へと遣わされた。この世こそ実に神ご自身の国であり、神の親族のいる所である。その親族は、御子の血によって近いものとされたのである。聖霊は、一つの民を呼び出すために遣わされた。その民は、小羊の大いなる婚宴へと聖霊に従って行く。しかも、ただの客としてではなく、しみもきずもない花嫁としてである。ハレルヤ！

しもべは彼に言った。「もしその女がわたしについてこの地に来ることを好まない時は、わたしはあなたの子をあなたの出身地に連れ帰るべきでしょうか」（創世記二四・五）

アブラハムは彼に言った。「わたしの子は決して向こうへ連れ帰ってはならない。その女があなたについて来ることを好まないなら、あなたはこの誓いを解かれる。ただわたしの子を向こうへ連れ帰ってはならない」（創世記二四・六、八）

しもべのあの言葉、「もしその女がわたしについて来ることを好まない時は」を読むと、私はいつも目に涙があふれてくる。ああ、聖霊の、やさしく、願い求め、言い寄るように引き寄せてくださる働きよ。今夜、聖霊はこの通路を行き来されながら、「あなたは行きますか」と尋ねておられる。この花嫁の行列に徴兵はない。あるのは自らの意志による志願だけである。女は「はい」と言うかもしれず、「いいえ」と言うかもしれない。まもなく現れられる天のイサクを迎えに行くことを好むかもしれず、今いる所にとどまることを選ぶかもしれない。けれども、どちらであっても、神の御子がふたたびここに連れて来られて、彼女に願い求められることはない。父が遣わされた御霊によるほかに、御子がご自分のことを訴えられることもない。イエスは、いけにえをささげられた。その尊い足はこの地を踏まれたが、その報いは不信仰と、つばきと、死だけであった。イエスは、打たれ、拒まれ、木に釘づけられるために、ふたたび来られることは決してない。次に来られるときは、『力と大いなる栄光とをもって』来られる（マタイ二四・三〇）。王の衣をまとい、手には王笏を持っておられる。あなたをあらゆる真理に導くために来られた御霊の導きに、喜んで従うかどうか（ヨハネ一六・一三）。それは今夜、あなたにかかっている。この招きに、あなたは何と答えることに決めたか。

世のすべての男も女も子供も、地上の身分や肌の色や信条にかかわりなく、御霊の導きを受け入れ、御霊に従って、天の花婿イエスを迎えに行くよう招かれている。もしこの天の導き手を見いだしたいなら、どこで見いだせるかを教えよう。救いの井戸においてである。

エリエゼルは水の井戸のそばでリベカを待つ

聖霊は救いの井戸で花嫁に会われ、花嫁を選ばれる

アブラハムのしもべは旅をして、井戸のところに来る。そこは、娘たちがいつも水がめを持って水をくみに来る所である。そこで彼は祈り、花嫁の来るのを待って、こう言う。

「わたしは泉のそばに立っています」（創世記二四・一三）。愛する神の子供よ、救いの井戸から喜びをもって水をくんだあなたよ、今夜、目を上げて御霊を見なさい。耳を開いて、御霊がこう言われるのを聞きなさい。

「見よ、わたしはここに立って待っている。あなたにバプテスマを授け、あなたのイエスを迎えに行けるよう、あなたを導くためである」

『彼がまだ言い終らないうちに、見よ、リベカが出てきた』（創世記二四・一五）。この出来事は、使徒行伝十章四十四節に記されている出来事に、なんとよく似ていることか。『ペテロがこれらの言葉をまだ語り終えないうちに、それを聞いていたみんなの人たちに、聖霊がくだった』。聖霊は今、あなたに語っておられる。あなたは聖霊を受けるか。

『見よ、リベカが出てきた』（御霊は今日、出て来る民、召し出され、分けられた民を呼んでおられる）『水がめを肩に載せて。その娘は非常に美しく、男を知らぬ処女であった。彼女は泉に降りて、水がめを満たし、上がってきた』（創世記二四・一五～一六）

あなたがたの顔を見渡していると、今夜ここに来ているリベカたちを、ほとんど見分けられるような気がする。彼女たちは水がめを肩に載せている。空の水がめ、清い水がめを携え、へりくだって下りて行き、この尽きることのない救いの井戸から水をくもうとしている。もしあなたがたの水がめ、つまり頭が、学問や地上の知恵で満ちているなら、この井戸で満たされるために、それを空にしなければならない。どれほど大きく偉い人であっても、みな同じように、へりくだって身を低くし、喜びをもってこの水をくまなければならない。リベカは下りて行って水がめを満たし、上がって来た！　上る道は下る道である。神をほめたたえよ。

しもべは彼女を迎えに走って行ったと書いてある。ちょうど今夜、御霊があなたを迎えに走って来ておられるのと同じである。しもべに求められて、彼女は彼に水を飲ませ、彼のらくだのためにもみな水をくんだ。みことばはこう言う。『彼女は急いでかめの水を水ぶねにあけ、再び水をくみに井戸に走って行って、すべてのらくだのために水をくんだ』（創世記二四・二〇）。愛するみなさん、あなたの水がめは十分に空になっているか。あなたは十分に低くなっているか。この豊かな供給を受けるためである。その供給は、あなた自身の魂の求めを満たすだけでなく、周りの人々のためにも急いで水をくみ、注ぎ出させる。決して涸れることのない隠れた源に、何度でも走って行ってくむことができると、揺るがない確信をもって知っているからである。

彼女は見るからに美しかった。主はあなたの魂の奥深くを見下ろして、「わが愛する者よ、あなたはことごとく美しく、少しのきずもない」（雅歌四・七）と言うことがおできになるか。あなたは、罪と世俗の古い人を知らない、心の清い処女であるか。それなら、御霊はあなたを、花嫁のからだの一員となるように召しておられる。リベカには耳輪と腕輪と尊い贈り物が与えられた。そして彼女はしもべと共に両親の家に帰った。そこでしもべは、銀の飾り（これはあがないを表している）、金の飾り（すなわちイエスの神の性質）、衣服（これはイエスの義を表している）、そして婚礼の衣を取り出した。これらを彼はリベカに与えた。また、その兄と母にも価の高い品々を与えた。すべてをささげ尽くす完全にまで行き着かない者たちにも、価の高い品々は与えられる。けれども、花嫁は最良の、最も美しい贈り物を受ける。両者は比べものにならない。

それからしもべは、食べたり飲んだりする前に、自分の用向きを語った。すばらしい主人イサクのこと、遠くにある彼の美しい家のこと、そしてリベカをその家に連れて行って、その子の花嫁にしたいという願いを語った。

彼らは言った。「娘を呼んで聞いてみましょう」。そして彼らはリベカを呼んで言った。

「あなたはこの人と一緒に行きますか」。彼女は言った。「行きます」（創世記二四・五七～五八）

これが今日の大いなる問いである。あなたがた一人ひとりが今直面している問い、「あなたはこの人と一緒に行きますか」である。男も女も、一人ひとりが自分でこれに答えなければならない。ああ、あなたは昔のリベカのように、『行きます』。主が導かれる所に、私はついて行きます」と言えるだろうか。御霊の御手に自分をゆだねなさい。そうすれば御霊は、あなたがイエスの腕の中に安全に抱かれるまで、決してあなたを離れることはなさらない。

リベカは荒野を旅するとき、道に迷わなかった。行き交う人ごとにどの道を行けばよいかと尋ね回る必要もなかった。しもべが、イサクの家までずっと彼女を案内し、導き、そうだ、運んでくれるために来ていたからである。道々、しもべはどんな話を彼女に聞かせたことだろう。花婿と、彼女を待っているその家について、しもべが輝くように語るのを聞くうちに、彼女の心はどれほど喜び、地上のすべてのものの上に引き上げられたことだろう。揺れの激しいらくだも、ほこりっぽい道も、照りつける太陽も、彼女はきっと忘れてしまったに違いない。花婿と顔と顔を合わせて見る、待ちこがれた瞬間へと、ひたすら進んで行ったのである。

それと同じように聖霊は、ご自分を受け入れて従う者すべてを、あらゆる障害を越え、困難の丘を一つ一つ越えて、導かれ、案内してくださる。そして旅のあいだ、イエスのものを受けて私たちに示してくださる。ついに私たちは、慕い求めて叫ぶ。

「ああ、主イエスよ、あなたの祝された御顔を見るまで、あとどれほどでしょうか」。御霊は『自分から語るのではなく』（ヨハネ一六・一三）、私たちの花婿であり、神聖な愛する方であるイエスについて語られる。そのとき私たちの心は、愛と感謝と、言い表せない慕わしさでふくらむ。

ついに、長い旅の日々の後の、あのすばらしい出会いのことを、私たちは読む。

イサクは野でリベカに会い、イエスは空中で花嫁に会われる

イサクが夕暮に野に出て黙想していると、目をあげて見た。すると見よ、らくだが来るではないか！　ああ、イエスよ！　イエスよ！　イエスは今まさに、この夕暮に目を上げておられる。そして、らくだが来るのを見ておられる。あなたは、主を迎えようと道を急いで上って来るあの小さな一団の中にいるか。愛する旅人たちよ、私たちは着実に、確かに、栄光の日に近づいている。その日、私たちの旅は終わりを迎え、私たちはリベカのように目を上げて、私たちの花婿を見る。そして今でさえ、信仰によって遠くから花婿を見ている私たちは、さらに深い分離という被衣を取って、身をおおうべきである。そうして、まことに主のために分けられた民となるのである。

イサクについては、彼がリベカを母の天幕に連れて行き、彼女をめとり、彼女は彼の妻となり、彼は彼女を愛したと書いてある（創世記二四・六七）。まもなく私たちの救い主は、ご自分を迎えに出発した花嫁のために来られる。次の呼び声を聞いて答えた者たちのために来られるのである。

「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」（マタイ二五・六）。まもなく、大いなる歌が響き渡る。「わたしたちは喜び楽しもう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである」（黙示録一九・七）。食卓は整えられつつあり、婚姻は近い。愛するみなさん、あなたは行くか。聖霊を受け、聖霊に小羊の婚宴へと導いていただくか。

まだ救いの井戸を見いだしていないなら、肩に載せているその水がめを空にして、急いで救いの井戸へ下って行きなさい。そこでこそ、あなたは聖霊に会い、聖霊を受けるからである。あなたが聖霊に従うなら、聖霊は丘を越え、谷を通って、あなたが空中で花婿に会うときまで、あなたを導いてくださる。

ペテロの生涯と成長

神の子供はみな、日ごとに恵みにおいて成長し、愛において広がっていくべきである。それは神のみこころであるだけでなく、どうしても欠かすことのできないことである。私が小さな女の子だったころ、母はときどき私を戸口に立たせたものだった。そして鉛筆を取り、戸の枠の、私の頭のてっぺんのところに小さな印を付けた。それから何週間かたつと、母はまた前の印の上に新しい印を付けた。前の印を付けてから私がどれほど伸びたかを、測って確かめるためである。クリスチャンも、自分を注意深く、たびたび測るのは良いことである。ただし互いに比べ合うのではなく、神のみことばによって測るのである。神のみことばは確かな物差しである。パウロの生涯も、ペテロの生涯も、ほかの多くの人々の生涯もそうである。今日はそのうちのペテロの生涯と成長を取り上げよう。そして、私たちが彼と同じほど速く、同じほど多く成長してきたかどうかを見てみよう。もしそうでないなら、前に向かって進もうではないか。神は『人をかたよりみないかた』だからである（使徒一〇・三四）。神は、ペテロのためにしてくださったことを、私たちのためにもすることがおできになる。それだけでなく、そうしたいと切に願っておられる。

ペテロが初めてイエスを見たのは、思いがけないときであった。ある日、ペテロが海に網を打とうとしていると、イエスはペテロをご覧になり、近づいて来られて、こう語りかけられた。

「わたしについてきなさい。あなたを、人間をとる漁師にしてあげよう」（マタイ四・一九）。ペテロは『すぐに網を捨てて、イエスに従った』（マタイ四・二〇）。愛する人よ、あなたは覚えているか。時の岸辺を歩いてあなたの心へと来られるイエスの麗しい姿に、初めて目が開かれた日のことを。流れる水の音のように快いあの尊い御声を、初めて聞いた日のことを。その御声は、世の気苦労という網と罪の生活を捨てて、ご自分に従うようにと、あなたに命じておられた。その御名をほめたたえよ。あの麗しい御顔をただ一目見ただけで、ほかのすべての顔は、引きつける力も満たす力も失った。御声の響きをただ一つ聞いただけで、地上の声は魅力を失った。ハレルヤ！　ペテロが古い、使い古した漁の網を捨てて従ったのも無理はない。私たちが自分の不義を捨てて、主の義を受け入れたのも無理はない。

ペテロはすぐに網を捨てて、主に従った。彼はなんと熱心に、従うと約束したことか。そして、その従う道がどこへ自分を導くことになるのか、なんとわずかしかわかっていなかったことか。十字架の影は少しも見えなかった。自分の主を否む暗い夜のささやきも聞こえなかった。喜びと悲しみ、勝利と敗北、ほまれとはずかしめを引き連れた将来も、自分自身がかけられる十字架の幻も、彼には見えていなかった。ただ熱心に、喜んで、どこまでも従うと約束したのである。

私たちの心がイエスに「はい」と言い、どこまでも従うと約束したとき、私たちはなんとわずかしか悟っていなかったことか。これから通ることになる変貌の山の頂と試練の谷とを。何よりも大切なことは、イエスに永遠の「はい」を言うことである。幸いであっても災いであっても、私たちが信頼してどこまでも従うなら、ペテロを最後まで導き通されたイエスは、私たちをも勝利のうちに導き出してくださる。

それに続く多くの日々、イエスの御前で過ごしたすばらしい日々、イエスの導きと取り扱いに身をゆだねた尊い日々を通して、ペテロは信仰と信頼の意味を学んだ。彼は、自分のしゅうとめが熱病からたちまちいやされるのを見た（マタイ八・一四～一五）。多くの病人がいやされ、死人がよみがえらされるのを目撃した。群衆に食べ物が与えられるのを見て、それを手伝った。そして今、マタイによる福音書十四章では、ほかの弟子たちとともに舟の中にいて、海の荒れ狂う波にもまれ、押し流されている。

夜の闇を通して、初めはおぼろに、やがてさらにはっきりと、白い衣を着た静かな姿が、波の上を歩いて自分たちを迎えに来るのが見えた。彼らは恐れて「幽

霊だ」と叫んだ（マタイ一四・二六）。ああ、弱った心よ。もろい信仰の小舟で嵐にもまれている人よ。あなたは、あなたの主があなたを迎えに歩いて来られるのを見いだしたことがあるか。主は試練の最も荒い波を越えて来られ、困難と試みの最も高い波頭を乗り越えて来られる。ペテロのように、嵐を通っているあいだ、それがイエスだとわからなかったことはないか。それとも、あらゆる試みのうちにイエスを見ることを学んだか。イエスはそのたびに歩み出られ、何か新しいご性質のうちに、ご自分をあなたにあらわそうとしておられる。これまで知っていたよりも、さらに大きな美しさと力のうちにである。周りのすべてが騒ぎと争いに見え、状況と試練のほかに何も見えなかったとき、あなたは「わたしである。恐れることはない」（マタイ一四・二七）と言われる御声を聞いたことがあるか。波や試みや騒ぎを見るのをやめなさい。そして、その大波の上を歩いて私たちを迎えに来られるイエスを認めなさい。

あなたは、あの愛すべきペテロのように、「おいでなさい」（マタイ一四・二九）というあの言葉に信仰を奮い立たされ、励まされたことがあるか。そして小さな舟のへりから足を出し、むき出しの信仰によって歩き始めたことがあるか。足の下からは、目に見える地上の土台がすべて取り去られている。それでも、ついさっきまで自分を飲み込もうとしていた波の上で、主を迎えようと歩いて行ったことがあるか。もしかすると、あなたもまた風と波に目を留め、イエスの代わりに人や状況や境遇を見て、沈みかけたかもしれない。けれども、イエスの耳はペテロの叫びに開かれていた。そして、従う者一人ひとりの叫びにも開かれている。「主よ、お助けください」（マタイ一四・三〇）とペテロが叫ぶと、イエスは『すぐに手を伸ばし、彼をつかまえて』、その信仰の薄さをたしなめられた（マタイ一四・三一）。

成長し学ぶ、さらに祝された日々が過ぎ、ペテロはなおもイエスに従っている。神の御子の神性を認めたことで、彼は主から「さいわいである」と言われる（マタイ一六・一七）。ところが同じ章で、彼は叱責されている。イエスが十字架の上で恥とはずかしめに満ちた死を苦しむために行かれるのを、思いとどまらせようとしたからである（マタイ一六・二二〜二三）。ああ、尊いイエス。主はペテロに対しても、私たち一人ひとりに対しても、信仰と犠牲の香りのするものを、なんとすぐにほめて励ましてこられたことか。そして人間的なものと自己中心の香りのするものを、なんとすぐに叱責して懲らしめてこられたことか。

『六日ののち、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。ところが、彼らの目の前でイエスの姿が変り、その顔は日のように輝き、その衣は光のように白くなった』（マタイ一七・一〜二）。愛するみなさん、あの物差しはどうだろうか。あなたはここまで、ペテロの体験に達しているか。あなたは変貌の山に登ったことがあるか。そして、驚きと礼拝に満ちたあなたの目の前で、イエスがその美しさと麗しさのうちにあらわされ、姿を変えられるのを見たことがあるか。

まもなく、ペテロがまた信仰の教訓を受けるのを見る。彼は海に遣わされ、最初につれた魚をとるように言われた。その口の中に、自分と主のための貢、つまり税を納めるのに要るお金が見つかるというのである（マタイ一七・二七）。

イエスとともに歩んだ多くの、しかし飛ぶように過ぎていく日々を通して、ペテロは信仰と知恵において成長する。主の説教を聞き、その生き方を見る。奇跡が行われ、病人がいやされ、悪霊が追い出されるのを見る。さらには、自分自身の祈りと信仰によって病人がいやされ、悪霊が出て行くのさえ見る。けれども今や、イエスはますます強く、ご自分の小さな群れに告げられ、その心に刻みつけようとされる。まもなくご自分はいのちを捨て、よみがえって、父のみもとに昇って行く、と。そればかりか、イエスは何度も繰り返して彼らに告げられる。ご自分は去って行くが、彼らを孤児にはしておかない。別の助け主、すなわち聖霊を送り、彼らをあらゆる真理に導き、上からの力を授ける、と（ヨハネ一四・一六〜一八、一六・一三、ルカ二四・四九）。

また、最後の晩餐の席で主とともに座っているペテロを見る。たとい、みんなの者がイエスにつまずいても、自分は決してつまずかない、と彼は言い切る（マタイ二六・三三）。自分は主を知らないと言うだろうという主の警告を聞くと、彼は激しく打ち消す。

「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは、決して申しません」（マタイ二六・三五）。私たちもまた、祝宴と交わりのあの尊いひとときに、もう二度とどんな形でも主を否まないと、なんと主に約束し

てきたことか！　まことに、『心は熱しているが、肉体が弱い』のであった（マタイ二六・四一）。

それからイエスは弟子たちを連れて、ゲツセマネの園へ祈りに出て行かれた。ご自分にのしかかる大いなる重苦しさと、悲しみに満ちた沈んだ思いを、祈り抜くためであった。イエスはほかの者たちに「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここにすわっていなさい」（マタイ二六・三六）と言われて、彼らを残して行かれた。そしてペテロとゼベダイの子ふたりとを連れて行かれ、彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどである。ここに待っていて、わたしと一緒に目をさましていなさい」（マタイ二六・三八）。イエスは少し進んで行かれ、うつぶしになられ、産みの苦しみをもって祈られた。ああ、だれかにいっしょに目をさまして祈ってほしいという、主の魂の切なる願いよ。けれども、弟子たちのところに来られて、彼らが眠っているのをご覧になると、主はほかの者たちには声をかけられず、ペテロに言われた。「なんと、あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか」（マタイ二六・四〇）。主はふたたび祈られた。そして二度目、三度目に戻って来られたときも、彼らが眠っているのをご覧になった。

ああ、愛するみなさん、あなたもまた、この同じ祈りの務めにおいて、みじめにもイエスの期待を裏切ってきたのではないか。あわれみの戸が永遠に閉ざされる前の、この最後の短い時に、かつてないほどとりなす者が求められている。その今、私たちもまた、持ち場で眠っていた罪を犯してこなかったか。私たちもまた怠惰に打ち負かされ、眠りこけた盲目に包まれて、身をかがめて私たちをのぞき込まれるイエスの御顔が見えなくなってはいなかったか。主は、起きて祈るようにと私たちに願っておられる。ほかの人々のためだけでなく、私たち自身が『誘惑に陥らないように』である（マタイ二六・四一）。イエスは、ペテロがとりわけ誘惑に遭うことを知っておられたので、彼を選び出して祈るように命じられた。もし主がこう言われるのを聞いたら、私たちはどれほどうろたえることだろう。

「もう眠って休んでいなさい（マタイ二六・四五）。あなたが祈って救いへと導けたはずの魂は、永遠に失われた。あなたが火の中から取り出せたはずの燃えさしは、今は地獄にある。あなたの祈りととりなしの機会は過ぎ去った。眠り続けなさい」

ペテロは跳ね起きた。今はすっかり目が覚めていた。主が悲しんでおられる。愛する主が。自分の愛を示すために、何ができるだろうか。彼は熱心のあまり、大祭司の僕の耳を切り落とした（マタイ二六・五一）。ただ自分の愛と熱心を証明したかったのである。けれども、ああ、ペテロよ、『従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる』（第一サムエル一五・二二）。その耳はイエスによっていやされた（ルカ二二・五一）。そして、捕らえる者たちと捕らえられた方の小さな行列は、さばきの広間へと進んで行った。イエスはさばかれるために中へ連れて行かれたが、ペテロは外にとどまって、火で手を温め始めた。ああ、この世の火に手を温めに行くのは、危険なことである。ペテロがそこに座っていると、ひとりの女中が、ペテロはイエスといっしょだったと言い立てた（マタイ二六・六九）。けれどもペテロは憤然として、『みんなの前でそれを打ち消し』（マタイ二六・七〇）、イエスを恥じた。

ペテロは入口の方に出て行ったが、人々の目を逃れることはできなかった。私たちがイエスと共にいて、イエスと共に歩んできたなら、世はそれを知るからである。ほかの女中が、あなたはイエスといっしょだったのではないかと彼に尋ねた。そしてまもなく、そこに立っていたさらに多くの人々が、あなたは「彼らの仲間」ではないかと尋ねた。するとペテロは呪いをかけて誓い始め、「その人のことは何も知らない」と言った（マタイ二六・七一～七四）。

ああ、ペテロよ。あなたのことを思い、主を否むというあなたのしたはずかしいことを思って、私たちの心はどれほど痛んできたことか！　けれども、愛するみなさん、私たちのうちのどれほど多くの者が、主を否んできたことか。主が私たちの救い主であることを、忠実に屋上から証しするべきまさにそのときに、私たちは何度、黙って座ったまま、口を開くのが遅すぎたことか。私たちは、自分を否むか、主を否むかのどちらかである。肉を否むか、御霊を否むかである。確かに、ペテロには何か根本的に間違ったところがあった。どうしても必要なものが何か欠けていた。ああ、それは確かに、イエスが彼らに力を授けると言われた聖霊であった。

それから、ペテロにとって苦悶の時と苦しみの日々が続いた。自分の失敗への自責と罪の自覚、主の十字架、埋葬、そしてまったくの孤独と絶望の日々である。主は去られた。やさしい御声は静まり、愛する御顔は死のうちに動かなくなっていた。そして至る所に、だれにも埋めることのできない、大きな、大きな空白があった。そのとき、その暗く、うつろな空白の中から、すばやい、息を切らした使者マリヤが、イエスがよみがえられたという知らせを持ってやって来た。イエスの最初の言葉と思いは、ペテロに向けられていた（マルコ一六・七）。そして今、私たちは彼を見る。立ち上がり、走り、ほかの者を追い抜き、墓の前で身をかがめ、中をのぞき込み、心の中で不思議に思っている彼を（ルカ二四・一二）。

また、ペテロが漁をしているのを見る。主がどこへ行かれたのかわからず、なおも落胆していたのである。イエスの姿がちらりと見えるやいなや、彼は舟から飛び降りて岸へ急ぐ（ヨハネ二一・七）。私たちは、火の上のパンと魚を食べる彼を見る。イエスへの愛を言い表す彼の声を聞く。そして主の任命の言葉を聞く。「わたしの羊を養いなさい。わたしの小羊を養いなさい」（ヨハネ二一・一五～一七）。それから、イエスが父の御座へと去って行かれる日が来た。そのときも、イエスはなお弟子たちに強く言い聞かせておられる。聖霊に満たされるまでエルサレムにとどまれという主の命令に、従わなければならない。そう説かれ、こう言われるのを私たちは聞く。「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受ける」（使徒一・八）

イエスが天に引き上げられた後、ペテロは屋上の間へ急ぎ、ペンテコステの日に聖霊が注がれるまで、そこにとどまっていた。聖霊に満たされた彼の姿を思い描いてみよう（使徒二・四）。彼は『御霊が語らせるままに』他国の言葉で語り、御霊にあまりにも満たされていたので、見ていた人々は彼が酒に酔っていると思った。百二十人の叫びと賛美を聞きなさい。群衆が駆け集まって来て、驚き、あきれ、惑いながら、「これは、いったい、どういうわけなのだろう」（使徒二・一二）と叫ぶのを見なさい。ああ、それは聖霊が来られたということであった。百二十人とペテロが『上から力を授けられ』たということであった（ルカ二四・四九）。彼らは今や立ち上がって、十字架につけられたイエスについて、聖なる大胆さをもって証しできるようになったのである。それはまた、彼らの心の奥底から、今や御霊の川が流れ出ているということであった（ヨハネ七・三八）。だれもせき止めることも、言い逆らうこともできない川である。

「これは、いったい、どういうわけなのだろう」と叫ぶ者たちがいた。ほかの人たちはあざ笑って言った。『あの人たちは新しい酒で酔っているのだ』。しかしペテロは立ち上がって言った。『この人たちは酒に酔っているのではない。これこそ、預言者ヨエルが預言していたことである』（使徒二・一三～一六）。

立ち上がったペテロ！　ああ、身をすくめ、おじけづき、主を否んだあのペテロから、なんという変わりようであろう！　この新しいペテロは聖霊を受けていた。今や彼は、若い女中を恐れるどころか、あざけり疑うこのユダヤ人の群衆の前に大胆に立ち、聖霊によって、イエスについて大胆に説教した。そのあいだに、大ぜいの人々が主に立ち帰り、主を自分の救い主として受け入れたのである。

愛するみなさん、話を進めながら、あなたは物差しで自分を測っているか。もしイエスに従うためにすべてを捨てたのなら、あなたは信じてから、聖書的なしるしを伴って聖霊を受けているか（使徒一九・二）。証しする力のなさを感じたことはないか。主を否んだとき、祈りに失敗したとき、力に欠けていたとき、心がうろたえたことはないか。それなら、あなたに必要なのは聖霊である。それとも、もしかすると山の頂にいて、主が目の前で姿を変えられるのを見たことがあるか。ペテロのように、病人のために祈り、悪霊を追い出すために用いられてきたか。そうした体験を、聖霊のバプテスマと取り違えてはいないか。それなら今日、測ってみなさい。あなたの体験を、御霊が入って来られることの聖書的なしるしと比べてみなさい。

もしあなたがここまで達していて、昔のペテロのように、異言を語ることによって証しされる聖霊を受けているなら、そこで立ち止まってはならない。それはほんの始まりにすぎず、さらに前進し成長するための備えである。そのかた、すなわち真理の御霊が来られると、あなたをあらゆる真理に導いてくださるからである（ヨハネ一六・一三）。

ペンテコステの後の、聖霊を受けたペテロの生涯を見なさい。美しの門で、彼が足のきかない男にこう言っているのを見なさい。

「金銀はわたしには無い。しかし、わたしにあるものをあげよう。立って歩きなさい」（使徒三・六）。使徒行伝五章に記されている病人たちを見なさい。彼らは周りのすべての村や町から運び出され、ペテロの影がかかっただけでも、『ひとり残らずいやされた』のである（使徒五・一五～一六）。

サマリヤとカイザリヤのペテロを見なさい。一方では彼が信者たちに手を置いたとき、もう一方では彼がまだ説教しているうちに、彼らは初めの百二十人と同じように聖霊を受けた（使徒八・一七、一〇・四四）。投獄、むち打ち、恥とそしりを通して、ペテロについて行きなさい。その勇気と信仰、その愛と力ある生涯を通して、彼について行きなさい。十字架の上の死にまで、彼について行きなさい。彼は、主と同じように十字架につけられるのにはふさわしくないと感じて、頭を下にして十字架につけられたのである。ああ、愛するみなさん、物差しを私たちの生涯に当ててみれば、もう今すでに、私たちはみな、はるかに及ばないとわかるのではないかと思う。けれども、神は『人をかたよりみないかた』である（使徒一〇・三四）。ペテロはガリラヤの海辺で、最初の永遠の「従います」を言った。主はそこから、彼がいのちを捨てた十字架まで、彼を最後まで導き通された。その方は、私たちが従うなら、私たちをも最後まで導き通してくださる。

「あなたは、わたしに従ってきなさい」（ヨハネ二一・二二）。将来はまったくわからず、主の御手にゆだねられている。愛するペテロたちよ、あなたがたは自分自身では弱いが、主はあなたがたを、ご自分にあって強くしてくださる。主に従って十字架へ、墓へ行きなさい。復活を通り、屋上の間へ、聖霊を受けることへと進みなさい。さらに御霊の賜物と実へ、完全な成長へ、十字架の上の主の死に主と一つとされることへと進みなさい。そして、空中で主に会うときへと進みなさい。

だから、前に向かって進み、どこまでも従って行こうではないか。神の最善と完全に達しないうちに立ち止まってはならない。

「日ごとにイエスに従って行く。
主が先に立って導かれるあいだ、何ものも害することはない。
日が照っても闇でも、何が起ころうとも、
わが救い主イエスは、わがすべての中のすべて」

神の宮

『あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ』（第一ペテロ二・五）

宮の幻と啓示。イザヤに示された宮。パトモス島でヨハネが見た宮。パウロが示した構造。ペテロが描いた宮。石切り場から宮へと石に起こる変化の驚くべき奥義。石を探し、備えてくださるキリスト。掘り起こし、切り離し、掘り出す。「静まって、わたしこそ神であることを知れ」。切り出し、形づくる。次に来る磨き。精錬する者の火、るつぼ。完成した宮の威厳と壮麗。

驚くべき宮、大いなる壮麗な宮が、六千年近くのあいだ建てられてきた。その宮が今、急速に形をなし、完成に近づいている。

この宮はあまりにも広大なので、神のおられる宇宙のどの果てにも、この大いなる宮の届かない所はない。

この宮はあまりにも壮麗である。神がその設計者、キリストがその大祭司であり、血で洗われた魂からなる生ける石で造られている。その丸屋根とアーチは神聖な愛と礼拝であり、聖徒と教師たちがその柱、礼拝する者たちがその敷石である。この宮には、日や月が照らす必要がない。神の栄光が宮を明るくし、小羊が宮のあかりだからである（黙示録二一・二三）。

この大いなる建物に組み込まれる一つ一つの石は、まことに堅く、壊れることがない。限りなく尊く、火と洪水によって、槌とのみによって、徹底的に試されている。だから、その壁の内では、劣化も朽ちることも永遠に知られない。そして、この宮、大いなる神の宮は、とこしえからとこしえまで立ち続ける。

白い衣を身にまとっている人々が神の御座の前に立つのは、ここである。彼らは大きな患難をとおってきて、その衣を小羊の血で洗い、それを白くした人々である。彼らはここで、『昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれる』。主の民が飢えることもかわくこともなく、太陽も炎暑も彼らを侵すことがないのは、ここである。『御座の正面にいます小羊は』彼らを養い、『いのちの水の泉に導いて下さる』からである。そして神が彼らの目から涙をことごとくぬぐいとってくださるのも、ここである（黙示録七・一三～一七）。

宮の幻と啓示

私たちは御霊のうちに目を上げる。そして、完成した大いなる建物が目の前にそびえ立つのを見て、驚きのあまり立ちつくす。鐘楼と小塔、金の冠をいただく塔と丸屋根が、濃い霧を通して輝いている。その霧とは、永遠の神の大いなる計画について、死すべき私たちが抱く思いである。

私たちの心は天の歓喜の翼に乗せられて、引き上げられる。千の窓から、うねりあふれる大いなる旋律の波がほとばしり出るのが聞こえるからである。歌う者と奏でる者がひとりのようになり、一つの音を響かせて、神をほめたたえ、あがめている。神の栄光が宮に満ちて、祭司たちも主に仕える者たちも、勤めをすることができない（第二歴代五・一三～一四）。

イザヤに示された宮

イザヤは私たちを引き上げて、その宮そのものへと連れて行く。彼はこう告げている。『わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た。その上にセラピムが立ち、互に呼びかわして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」。その呼ばわっている者の声によって敷居の基が震い動き、神殿の中に煙が満ちた』（イザヤ六・一～四）。

パトモス島でヨハネが見た宮

パトモス島のヨハネは、私たちを宮の中の、とどろく賛美と神の壮麗と栄光のただ中へと連れて行く。それは、全能者にして主なる神が大いなる御力をふるって支配されるときのことである（黙示録一一・一七）。ヨハネはこう告げている。『天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒の雹が降った』（黙示録一一・一九）。

パウロが示した構造

パウロは、次の言葉によって、私たちをその建物と土台そのものの、文字どおり手で触れるような吟味へと導く。また、その建物の中での私たち自身の分の吟味へと導く。『あなたがたは神の宮であって、神の御霊が自分のうちに宿っていることを知らないのか』（第一コリント三・一六）。

そうだ、それはまるで、大いなる宮が無数の小さな宮から成り立っているかのようである。「私たちの魂は、やがて、自分を閉じ込めているこの体から出て行く。そのとき主がその魂をどの世界へ運ばれようとも、その世界で私たちの魂は、自分が同じ大いなる宮の一部であることに気づく（もし主の取り扱いに身をゆだねてきたなら）。その宮はこの世だけのものではないからである」。その宮は永遠の時代を通して立ち続ける。

ペテロが描いた宮

ペテロは私たちとともに宮を歩いて巡る。そして、『主が恵み深いかたであることを、すでに味わい知った』人々に指し示す。私たちの主ご自身が『隅のかしら石』であり、『選ばれた尊い石』であって、『人には捨てられたが、神にとっては選ばれた』方である、と。それからペテロは突然、聖徒一人ひとりを指さして言う。「あなたがたも、それぞれ生ける石となって、霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によろこばれる霊のいけにえをささげるのである」。また、「あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである」（第一ペテロ二・三〜九）。

石切り場から宮へと石に起こる変化の驚くべき奥義

生ける石、いのちある石、選ばれた、神につける石。罪と絶望の暗い石切り場の深みから、宮を明るくする小羊の驚くべき光へと召し出された石。

かつてはまったく形も整わず、粗く、醜かった石が、今は形も大きさも完全になり、角はなめらかで、表面は鏡のように磨かれている。

かつては互いに積み重なって乱雑に置かれ、ばらばらで、一つにまとまることもなく、建物らしいものに組み合わされる見込みもまったくなかった。

それが今、大能の名工の熟練した手によって、のみで刻まれ、形づくられ、整えられる。そしてついに、完全に磨かれた石の一つ一つが、隣の石のそばに音もなくすべり込み、そこにとこしえにとどまる。変わることのない、天から生まれた愛というセメントで、しっかりと固められて。

一つ一つの石が、なんという変化を物語っていることか！　なんという忍耐、なんという愛、なんという名工の技であろう。なんという掘削と発破、持ち上げと運搬、のみ入れと磨き、なんという美しさと賛美であろう！　石が声をあげて「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ている」（第一コリント一五・一〇）と叫ぶのも、不思議ではない。

「なんとすばらしいことか」と私たちは叫ぶ。「神の限りない愛は。なんと底知れないことか、大いなる、測り知れない恵みとあわれみは。それは私たち一人ひとりを（罪の暗い石切り場にどれほど深く埋もれていようとも）召し出して、大いなる栄光の宮の中で自分の場所を満たさせてくださる。その宮は、天にある、人の手によらない永遠の宮として建てられつつある（第二コリント五・一）」。次のことを思い起こすとき、感謝と、自分のふさわしくなさを思う涙で、私たちの目があふれるのも不思議ではない。主は私たちに、自分で自分を助けよ

とは求められない。宮の発破も、持ち上げも、槌打ちも、のみ入れも、磨きも、建築も、何一つせよとは求められない。主が求められるのは、ただ一つのことだけである。

「静まって、わたしこそ神であることを知れ（詩篇四六・一〇）。わたしの手の中で、柔らかくあれ。身をゆだね、従順であれ」。あらゆることを（槌の一打ちも、のみの一彫りも）受け入れなさい。万事が、主を愛する者たち、すなわちご計画に従って召された者たちのために、共に働いて益となるのである（ローマ八・二八）。

宮のために石を探し、備える

主の御目はあまねく全地を行きめぐる（第二歴代一六・九）。主はご自分の宮を建てる材料を探しながら、『暗やみの中から隠れた事どもをあらわし、暗黒を光に引き出』される（ヨブ一二・二二）。主の愛の対象が、金であれ銀であれ宝石であれ、主の御手の取り扱いのもとに、進んで従おうとさえするなら、主が下って行かれないほど深い所はない。主が引き受けられないほど込み入った、あるいは大きな苦労や労苦もない。宮の材料を探して地を歩まれる主の御声が、こう言われるのが聞こえる。

「確かに、銀には掘り出す鉱脈があり、金には人がそれを見いだす所がある。神は暗やみに終わりを置かれ、あらゆる果てまで尋ねきわめられる。暗やみの石と死の陰をも（中略）。地はそこから食物を出し、その下は火のようにくつがえされる（中略）。その石はサファイヤのある所、そこには金の粉がある（中略）。神は岩に手を伸ばされ、山を根元からくつがえされる。岩の中に川を掘られ、その御目はもろもろの尊い物をご覧になる（中略）。水をせき止めて漏れないようにされ、隠れた物を光に取り出される」（ヨブ二八・一～一一）

石切り場の底に横たわり、罪と自我の土と泥の下に深く埋もれている、大きな、粗い、醜い石がある。その心は花崗岩のようにかたい。けれども、その石は、ただ願いと心構えを言い表しさえすればよい。掘り出され、取り除かれ、主のかたちに形づくられたいと。そうすれば主はその場に来ておられ、掘り出しの働きを始めようと備えておられる。宮の中の場所にふさわしくされたいという石の切なる願いを、主がご覧になれないほど遠い石はない。ふさわしくない石も、取るに足りない石も、見込みのない石も、大きすぎる石も小さすぎる石もない。

掘り起こし、切り離し、掘り出す

石が主に向かって叫ぶと、主はその瞬間から、石をおおう罪の土に、罪の自覚というすきを突き入れられる。そして、みことばという力強い足で、そのすきをいよいよ深く押し込まれる。ついには、石が主の前に、きれいにむき出しになって横たわる。

けれども、その石はあまりにも大きく、周りのものや環境にあまりにもくっついている。それを動かし、切り離すために、これまで居心地のよかった私たちの環境のただ中に、大量の爆薬を埋め込まなければならないことがよくある。発破に次ぐ発破が続くこともある。大きな割れ目やひびが、四方八方に走ることもある。試練はつらく、別れは鋭く、私たちの心のすぐそばに迫るかもしれない。私たちには理解できないかもしれない。友人たちは批判したり、誤解したり、忠告したりするかもしれない。けれども、主が私たちに求められるのは、ただ一つのことだけである。

「静まって、わたしこそ神であることを知れ」（詩篇四六・一〇）

主が発破のすべてを、切り離しのすべてを行ってくださる。私たちの分は、ただ進んで柔らかくなり、身をゆだね、主のみこころに従うことだけである。

石は、計画を立てたり先を見通したりして思い煩う必要はない。ただ、内に住まわれる神の聖霊と、外からの主の取り扱いと摂理に、自分をゆだねさえすればよい。周りのものからすっかり切り離されたなら、私たちがどれほど形が悪く、ごつごつしていても、ただ上を見上げればよい。すると、偉大な建築の名匠が、ご自分の愛と力という巨大な起重機をその場に運んで来ておられるのが見える。主は、恵みとあわれみの綱をその大石に掛けられ、それを暗やみの深みから、ご自分の驚くべき光の中へと引き上げておられる。

切り出し、形づくる

それから、形づくる作業が始まる。ああ、通りすがりの人の足を切り、傷つける、あの大きな、ぎざぎざの、粗い、とがった角よ。それらは一つずつ消えていく。毎日、毎時、カーン、カーンと鳴る愛の槌が、日々の試みと境遇というのみの上に、着実な打撃となって振り下ろされるからである。あの不親切な言葉、身に覚えのないそしり、受けるいわれのない叱責、思わずこぼれた涙。見たところ敗北のうちに自分の部屋に逃げ込み、主の足もとにうつぶせに倒れたあのとき。善を行う機会。だれにもほめられず、だれにも気づかれない犠牲への召し。これらはみな、粗い角を消し去る、槌とのみの打撃にすぎなかった。

ああ、神のみこころが成し遂げられるのを見ることができたら。打撃と打ちたたきのうちに、涙とほほえみのうちに、励ましと落胆のうちに。荒野の荒れ地とエデンの花盛りのうちに、火と水のうちに、暑さと寒さのうちに。山の頂と谷の深みで、獅子の穴でも自由の平原でも、戦いの最前線でも孤立した地下牢でも！ ああ、今日の取り扱いのうちに主の御手を認めることさえできれば、それこそ最も快いギレアデの乳香である（エレミヤ八・二二）。

かたくなさと自己中心の目当ては消え去る。そして、泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶうちに（ローマ一二・一五）、柔らかなやさしさ、思いやり、兄弟愛がそれに代わる。

磨き

それから磨きが来る。圧力が加えられ、絶え間なくこすられ、摩擦を受ける。同じ試練と境遇、日々の骨折りと決まりきった務めが、果てしなく行き来する。身をゆだねる一日一日が、形づくりと磨きの働きを早める。つぶやき、不平を言う一日一日は、その御手を妨げ、とどめる。そして働きを損ない、時間と労苦によってしか消せない深い傷とかき傷を残す。

石切り場では、発破の作業でも、のみ入れの作業でも、多くの音と動きがある。けれども、ついに石がその場所に運ばれ、大いなる宮の中の定められた所にすべり込むときには、槌の音一つ聞こえない（第一列王六・七）。それはみな、前もって済まされているのである。「主よ、私のうちで働き続けてください。あなたの御手をとどめないでください」

初めから終わりまで、それは神である。罪の石切り場から宮の美しさに至るまで、それは神、**神**、か、み、である。私たちにできる手助けは何もない。主は私たちの生活を境遇で取り囲まれ、その中で毎時、毎日、取り扱いを成し遂げられる。私たちはただ、その取り扱いに、従順に、されるがままに身をゆだねるほかはない。

精錬する者の火、るつぼ

主の宮を飾る金と銀は、すべてのかすが溶け去るまで、るつぼの中で精錬されなければならない。火の中に立っても焼けないものだけが、主の幕屋にとどまることができる。『わたしたちの神は、実に、焼きつくす火である』からである（ヘブル一二・二九）。木も、草も、わらも（第一コリント三・一二）、主の御前に住むことはできない。私たちが求める主が、たちまちその宮に来られるとき、私たちは知る。「主は精錬する者の火のよう、布をさらす者の灰汁のよう」であり、金銀のように私たちを清めてくださる。それは私たちが『義をもって、ささげ物を主にささげる』ためである（マラキ三・一〜三）。

一つ一つの石は、神によって据えられ、その場所にはめ込まれなければならない。この点で人がしてきた努力は、いつも失敗にすぎなかった。金と銀をかぶせた柱と支え、飾りの一つ一つ、宝石をちりばめた金の塔と丸屋根の一つ一つ、金の刺繍のある掛け幕の一つ一つ。敷居から御座に至る建物のすべての部分は、神によってその場所に据えられなければならない。その特定の場所にそれをふさわしく整えてくださった、その神によってである。

今日、建物は完成に近づいている。静かに、すばやく、しかし堅く、この上ない正確さと完全さをもって、最後の仕上げが宮に加えられつつある。最後の部分がその場所にすべり込みつつある。聖なる召し。あなたは宮の中で自分の場所を満たすように召されている。あなたは、主がみこころをあなたの生涯に成し遂げられるのを、受け入れているか。それは、あなたが大きくても小さくても、主が

あなたのために選ばれた小さな場所を、あなたが完全に満たし、飾るためである。

完成した宮の威厳と壮麗

主が私たちを主の家の中のどこに置かれようとも（私たちはそこにとこしえに住むのである）、私たちは『その宮で尋ねきわめる』ことができる（詩篇二七・四）。そして日の老いたる者が、その麗しさのうちに御座に着かれるのを見る。

低くなること

『いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者がこう言われる、「わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕ける者の心をいかす」』（イザヤ五七・一五）

この終わりの日々に、主の前にへりくだりと礼拝のうちに「低くなる」必要について、御霊を通して多くのことが語られてきた。そこで、このことについて『聖書はなんと言っているか』（ローマ四・三）を調べてみるのはよいことである。

ザアカイは下りてきた

みことばには、さまざまな低くなり方が記されている。覚えているだろう、ザアカイがいた。彼は走って行って、いちじく桑の木に登った。イエスはその場所に来られると、上を見あげて彼を見つけ、こう言われた。

「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。『そこでザアカイは急いでおりてきて、よろこんでイエスを迎え入れた』（ルカ一九・五〜六）。

その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりもののない羊の毛のようである。その御座は火の炎、その車輪は燃える火である。御前から出るひと筋の火の流れを見る。主に仕える千々の者と、御前にはべる万々の者を見る（ダニエル七・九〜一〇）。主への賛美のとどろきを聞き、主の御力のいなずまを見て、多くの水のとどろきのように快い主の御声を聞く。確かに、そのような一瞬は、百万倍の発破とのみ入れと磨きにも値する。だから、取り扱い続けてください、主よ、取り扱い続けてください。

今日も、昔のザアカイのように、文字どおり下りて来なければならない人が多くいる。自分自身についての先入観や思い込みから下り、自分の義についての高ぶった考えから下り、古い形式や儀式から下りなければならない。そして『神の力強い御手の下に、自らを低く』しなければならない（第一ペテロ五・六）。イエスはまことにへりくだって歩まれたので、イエスと共に歩む者は低くならなければならない。ザアカイは自分をイエスご自身よりも高い所に置いていた。イエスはその場所に来られると上を見あげられた、と書いてあるからである。まことに主は今日もなお上を見あげて、こう叫んでおられる。

「急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊まることにしているから」。急いで下りて来て、今日、よろこんで主を迎え入れなさい。主はあなたを祝福しようと待っておられる。低くなりなさい！　低くなりなさい！！！

らい病人はひざまずいた

次に私たちは、イエスがいやされたらい病人のことを思い出す。彼がひざまずいたと読むとき（マルコ一・四〇）、私たちの心は、よくわかるという思いと共感とに引き寄せられる。私たちは、あの日のことをよく覚えている。汚れに満

ち、罪のらい病に満ちてイエスのもとに来た日のことを。そして、主の足もとにひざまずいたとき、罪はきよめ去られ、私たちは全くされた。愛するみなさん、まず第一に、あなたは自分の義から下りて来なければならない。それは『汚れた衣』のようなものである（イザヤ六四・六）。そして第二に、主の足もとにひざまずき、へりくだって叫ばなければならない。

「主よ、罪人の私をあわれんでください」（ルカ一八・一三）。そうすれば主はあなたの罪を洗い去り、喜びで満たしてくださる。愛と感謝の涙があなたの顔を流れ落ち、あなたの心は脈打つ。自分が神の子供であり、暗やみから主ご自身の澄んだ光へと移されたことを知るからである。「古いものは過ぎ去り、すべてが新しくなる」（第二コリント五・一七）。新しい世界、新しいいのち、新しい光、義の太陽である。

ペテロはひれ伏した

次にペテロがいた。あなたは変貌の山の頂に登ったことがあるか。そして、うっとりとしたあなたの目にイエスがはっきりとあらわされて、昔のペテロのように、主の足もとにひれ伏したことがあるか（マタイ一七・六）。パトモス島のヨハネはこう書いている。

『わたしヨハネは、その足もとに倒れて死人のようになった』（黙示録一・一七）。エゼキエルもそうであった（エゼキエル一・二八）。昔の日々にイエスと共に歩んだ多くの人々もそうであった。私たちのこのもろい体は、あの時代の預言者たちの体より強くはない。イエスや、その大いなる力にじかに触れるとき、私たちも彼らのように倒れ伏して、主を王とし、すべてのものの主として宣言する。ああ、主の足もとに力なく倒れ伏すときにこそ、私たちは自分の無力なありさまを知る。自分がまったく足りない者であり、まったく主により頼む者であることを知る。そのとき主は私たちの手を取って、引き起こしてくださる。けれども、主はこう言われる。

「わたしは高ぶる者とおごる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを与える」（ヤコブ四・六、第一ペテロ五・五）。へりくだって神と共に歩みなさい（ミカ六・八）。ああ、主の尊い足もとに倒れ伏すことを、決して恥じてはならない。御座の周りでは、無数の御使が主の前にひれ伏しており、二十四人の長老が叫んでいるからである。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神」（黙示録四・八）

次に、マルタの妹マリヤのところに来る。聖書はこう告げている。

マリヤはすわった

ああ、「マリヤはすわった」というこの単純な言葉によって開かれる、甘い交わりのなんと澄んだ光景であろう（ルカ一〇・三九）。

「イエスの足もとにすわって、
ああ、主が語られる言葉を私は聞く。
幸いな所、こんなにも近く、こんなにも尊い。
日ごとに私がそこにいられますように。
イエスの足もとにすわって、
私は過ぎた日々を振り返る。
主の愛はまことに恵み深く、
ついに私の心を勝ち取った」

忙しいマルタたちが私たちの周りを急ぎ回っている。祈ったりみことばを読んだりする時間をめったに見つけないマルタたち、掃く床と洗う皿を抱えたマルタたちである。そのただ中で、私たちは昔のマリヤのように、そっと抜け出して、そこへ行く。そして主と二人きりでこもり、時間を取って「すわり」、主に学ぶ（マタイ一一・二九）。主はなんと私たちに語りかけ、私たちの魂と交わってくださることか。主はなんと、ご性質の黄金の神性という宝を取り出し、賛美の乳香で私たちを満たしてくださることか。そして、ご自分の苦難にあずかることを私たちにゆだね、ご自分の復活の力を私たちにあらわしてくださることか（ピリピ三・一〇）。主がご自分の完全なみこころをあらわされるのは、昔のマリヤの

ように、主の足もとにすわる時間を見つける者たちに対してである。愛するみなさん、時間を取って、イエスの足もとにすわりなさい。

それから、私たちの尊い主のところに来ると、私たちは思い起こす。

イエスはお捨てになった

兄弟たちのために、ご自分のいのちを（第一ヨハネ三・一六）。そして私たちは、主の言葉にこだまのように応えようとする。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない」（ヨハネ一五・一三）

ああ、愛するみなさん、主は今日、ご自分の前に低くなる民を呼んでおられる。低く！　低く！　低く！　私の目が王を見てから（イザヤ六・五）、それが私の叫びとなってきた。

ああ、もはや私ではなく、キリストが私のうちに生きておられるようになりたい（ガラテヤ二・二〇）。「わたしは衰え、彼は栄えなければならない」からである（ヨハネ三・三〇）。低く、低く、十字架までどこまでも主に従い、主の足もとに喜んで自分のいのちを捨てるまで低くなろう。『自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる』からである（ルカ一四・一一）。私たちは、御座の上の主の右にまで高くされる。泥の深みから、イエス・キリストの十字架の栄光へと引き上げられる。血で洗われ、婚礼の礼服である白い衣を備えられ、主の御霊に満たされる。私たちは天上へと引き上げられ、とこしえからとこしえまで、主と語り合い、主と共に歩むのである。

霊の賜物を熱心に求めよ

父なる神は、ひとり子イエスを、罪人への愛の賜物として与えられた。イエスは、信じる者への賜物として聖霊を与えられた。それと同じように、今度は聖霊が賜物を持っておられ、ご自分を受け入れ、ご自分の支配に身をゆだねる人々にそれを授けてくださる。

バプテスマを受けた多くの信者が、重大な誤りを犯してきた。彼らは、神の賜物であるイエスを救い主として受け、イエスが信じる者に与えられる賜物である聖霊を受けた。そのとき、自分に備えられたものはそれで全部受けたと思い込んだのである。彼らは、ある事実をまったく見失ってしまった。さらに大いなる賜物を熱心に求めるすべての人に、御霊が授けてくださる賜物と実があるということである。

彼らは、完全な救いと聖霊のバプテスマを受けた後、手をこまねいて満足し、落ち着いてしまった。私たちをあらゆる真理に導くために御霊が入って来られることは、ほんの始まりにすぎない。カナンの地への入口にすぎない。彼らはそのことを忘れたのである。紅海ははるか後ろに残り、荒野は無事に渡り終え、カナンの地の門をくぐった。けれども、ここまで来ておきながら、私たちが門を入ってすぐの所に座り込むなら、ぶどうとざくろを取り逃がしてしまうのではないか。乳と蜜の流れる地を取り逃がしてしまうのではないか。

真理の御霊が来られると、あなたがたをあらゆる真理に導いてくださる（ヨハネ一六・一三）。さて、聖霊が入って来られることは、導き手が来られることにすぎない。この導き手は、私たちを先へ先へと導いてくださるだけである。そして、私たちがその導きに従い、前へ進むにつれて、ご自分の賜物を私たちに授けてくださる。父は私たちにイエスを与えたいと切に願われた。イエスは私たちに聖霊の賜物を授けたいと切に願われた。それと同じように、今、聖霊は、バプテスマを受けた信者にご自分の賜物を授けたいと切に願っておられる。

コリント人への第一の手紙十二章には、九つの御霊の賜物が語られている。こう書いてある。

『兄弟たちよ。霊の賜物については、次のことを知らずにいてもらいたくない』。『すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている』。『すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである』（第一コリント一二・一、八～一一）

確かに、これらの賜物の一つ一つがどの集会にも現れることが、神のご計画である。私たちは、『更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい』と命じられている（第一コリント一二・三一）。また、『教会の徳を高めるために、それを豊かにいただくように励む』ようにとも言われている（第一コリント一四・一二）。ある人には、次のものが与えられる。

知恵の言葉

教会が知恵を必要としたときがあるとすれば、それは今である。私たちに必要なのは、自分の知恵や悟りではなく、上から下ってくる知恵である。ソロモンは、「知恵は第一のものである。それゆえ、知恵を得よ」と言っている（箴言四・七）。また、自分の知恵に頼るのをやめよとも教えている（箴言三・四）。人の知恵は、神の前では愚かである（第一コリント三・一九）。だから、『あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせずに惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう』（ヤコブ一・五）。

聖霊は、求める者のために、文字どおり本物の知恵の賜物を持っておられる。語るべきときと語らずにいるべきときを知る知恵。与えるべきときと控えるべきときを知る知恵。神のみことばを悟り、神の導きを悟る知恵。肉と御霊を見わける知恵。地上の事柄や境遇を越えて上を仰ぎ、『イエスのほかには、だれも』見ない知恵（マタイ一七・八）。そして、御霊が与えてくださった賜物を用いる知恵である。ほかの人には、次のものが与えられる。

知識の言葉

気性の激しい馬の手綱は、腕のある御者の手に握られている。それと同じように、知恵は知識を御する。多くの人が、知恵のない知識を持っているからである。ホセア書四章六節は、『わたしの民は知識がないために滅ぼされる』と言っている。知識のない熱心は、助けではなく妨げになる。神の子供はみな、知識の言葉が自分の心の奥深くに埋め込まれるよう、主に叫び求めるべきである。神を知る知識が必要である。神を知ることこそ永遠のいのちである（ヨハネ一七・三）。真理の言葉を悟り、正しく教える知識も必要である（第二テモテ二・一五）。それらは、かつてないほど今日必要とされている。パウロは、心の底から知識を求めて叫んだ。『キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり』たい、と（ピリピ三・一〇）。

本物の知識の賜物がある。それは地上の源から得るものではない。神とそのみことばを熱心に知りたいと願うすべての人に、神から教えられるものである。神に教えられた知識がある。それによって私たちは、『真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない』働き人として神に認められるよう、努めるようになる（第二テモテ二・一五）。

エデンの園で、いのちのただ中にあったとき、神は戒めを与えられ、善悪を知る木から取って食べることを人に禁じられた（創世記二・一七）。けれども今、私たちは死のただ中にあり、神は私たちに、知識の木から食べるよう命じておられる。その木とはキリストであり、『キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている』（コロサイ二・三）。ほかの人には、次のものが与えられる。

信仰

『信仰がなくては、神に喜ばれることはできない』（ヘブル一一・六）。『信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである』（ヘブル一一・一）。神を信じる信仰を持つことと、大小の山を動かすことのできる信仰の賜物を持つことは、別のことである（マタイ一七・二〇）。信仰は神を信じ、神のみことばを全面的にそのまま受け取る。そして信仰によって、神の約束が形となって現れ、祈り求めたことが実現するのを見る。信仰は、昔の日々と同じように今日も、神の約束を信じ、自分のものとすることができる。

信仰は信仰の祈りをささげる。すると病人はいやされ、奇跡が行われる。実に、信仰がなければ、御霊の賜物のどれ一つとして受けることはできない。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことは神の言葉から来る」（ローマ一〇・一七）。「信じる者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる」（マルコ一六・一六）。イエスはこう言われる。『信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、（中略）病人に手をおけば、いやされる』など（マルコ一六・一七～一八）。

ああ、愛するみなさん、もし主の子供たちが、救いや聖霊のバプテスマを求めたときと同じくらい熱心に、信仰を求めるならどうだろう。神のみことばを聞いて信じることによって求めるなら、私たちのただ中でしるしと奇跡が行われるだろう。エホバのかいながあらわにされるだろう（イザヤ五二・一〇）。そして主の栄光が、『わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えて』あふれるばかりに輝き出るだろう（エペソ三・二〇）。ほかの人には、次のものが与えられる。

いやしの賜物

昔の日々と同じように、今日もなお、いやしの賜物が授けられている。そして聖霊によって、ゆだねきった器を通して働いている。ヤコブの手紙五章は、『信仰による祈は、病んでいる人を救い』と言っている（ヤコブ五・一五）。けれども、「イエスの名によって、立ちあがって歩きなさい」と言う、いやしの賜物もある（使徒三・六）。このいやしの賜物は、ペテロを通して現れた。使徒行伝五章で、周りの町々や村々から大ぜいの病人が運び出され、寝台や寝床の上に乗せられて大通りに置かれた。ペテロの影なりと彼らにかかって、いやされるためであった。そして、『その全部の者が、ひとり残らずいやされた』（使徒五・一五～一六）。

これと同じいやしの賜物が、今日も現れている。癌、腫瘍、結核、あらゆる病が、私たちの集会のその場で、祈りに答えて一瞬のうちにいやされてきた。私たちはすべての栄光を主に帰する。いやしてくださるのはイエスだからである。主の御名があがめられるために、このいやしの賜物は、どの集会にもあるべきである。ほかの人には、次のものが与えられる。

力あるわざ

びんの油を絶やさず、かめの粉を尽きさせない奇跡は（第一列王一七・一四～一六）、信仰の生活を送る人々の生涯の中で、今もなお見られる。私たちは、祈りに答えて、折れた骨が一瞬のうちに奇跡的につながり、いやされるのを見る。何の不思議があろうか。『イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変ることがない』からである（ヘブル一三・八）。ほかの人には、次の賜物が与えられる。

預言

ヨエル書二章二十八節で、神はこう言われる。「終わりの時に、わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をする」。コリント人への第一の手紙十四章三十九節で、パウロは私たちに『**預言することを熱心に求めなさい**』と教えている。また、『霊の賜物を、ことに預言することを、熱心に求めなさい』とも教えている（第一コリント一四・一）。『預言をする者は、人に語ってその徳を高め、彼を励まし、慰める』からである（第一コリント一四・三）。

パウロは、コリントの教会に語りかけている。この教会は、他国の言葉で語るという聖書的なしるしを伴って、聖霊のバプテスマを受けていた。パウロは彼らに、そこでとどまらず、さらに進んで預言することを熱心に求めるよう強く勧めて、こう言う。『教会の徳を高めるように異言を解かない限り、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている』（第一コリント一四・五）。したがって、預言する者と解き明かす者は、同じ高さに置かれている。

預言においても、異言を語るときとまったく同じように、御霊が発声器官を支配される。ただ、預言では言葉が英語で出てくる。「あなたの心の奥底から、生ける水が川となって流れ出る」（ヨハネ七・三八）。頭からではなく、心の奥底からである。この賜物は今、教会に回復されつつある。この時代、むすこも娘も、昔の日々と同じように、御霊の力と霊感のもとで預言している。ほかの人には、次のものが与えられる。

霊を見わける力

教会の歴史の中で、今日ほど見わける賜物が必要とされたときはなかった。主はほむべきかな。御霊は今もなお、ゆだねきって求める心にこの賜物を授けられ、力を与えてくださる。肉と御霊を見わける力、霊と霊の違いを見わける力、そして、アナニヤとサッピラのときのペテロのように、隠れたことを見抜く力である（使徒五・一～一一）。主の声と敵の声を見わける力、本物と偽物を見わける力は、この終わりの日々に確かに必要である。悪魔が、『できれば、選民をも惑わそう』とするときだからである（マタイ二四・二四）。けれども、神をほめたたえよ。それはできない。主の羊はその声を知っていて、『ほかの人には、ついて行かない』からである（ヨハネ一〇・四～五）。見わける賜物とともに、知

恵の御霊も確かに必要である。主が導かれるときには語ってあらわし、主がそう望まれるときには黙っているためである。ほかの人には、次のものが与えられる。

種々の異言

聖霊のバプテスマを受けた人はみな、御霊が語らせるままに他国の言葉で語る（使徒二・四）。けれども、だれもが異言の賜物、すなわち外国語を思いのままに語る力を受けるわけではない。実際、受ける人は比較的少ない。とはいえ、この賜物は今日もなお与えられている。私たちが個人的に知っている多くの人が、外国人にその人自身の言葉で異言を語り、『救を施す力ある』イエスのことを伝えてきた（イザヤ六三・一）。

ある愛すべき洗濯婦は、生まれてこのかた外国語を一言も学んだことがない。それなのに、ギリシャ人の果物屋や中国人の洗濯屋などに、その人たちの言葉でイエスのことを語る。そして神は、ご自分の真理を彼らの心に届かせてくださる。私たちの知っているもう一人の若い婦人は、学んだこともない中国語で、チャイナタウンの中国人に説教した。そして多くの人が救われた。ほかの人には、次のものが与えられる。

異言を解く力

コリント人への第一の手紙十四章十三節は、『異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい』と言っている。また、同じ章の五節は、『教会の徳を高めるように**異言を解かない限り**、異言を語る者よりも、預言をする者の方がまさっている』と言っている。二十七節は、私たちが集まるときのことをこう教えている。『もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである』。そして、『もし解く者がいない時には、教会では黙っていて、自分に対しまた神に対して語っているべきである』（第一コリント一四・二八）。こうして私たちは、集会に異言を解く賜物がどうしても必要だと、すぐにわかる。パウロの勧めに従い、解くことができるように祈ろうではないか。

これらの賜物がみな教会にあり、御霊が思いのままに各自に分け与えてくださったとする（第一コリント一二・一一）。そのとき、それらの賜物は、御霊の実と結び合わされるなら、完全な有機体をなす。組織ではなく、有機体である。どの肢体も、ほかの肢体がなければ不完全である。手は足にむかって、「おまえはいらない」とは言えない（第一コリント一二・二一）。けれども、どの肢体も、ほかの肢体の務めを認めなければならない。そして全体が一つの完全なからだとして、完全な一致のうちに共に働かなければならない。『肢体は多くあるが、からだは一つなのである』（第一コリント一二・二〇）。私たちは多くの肢体から成っているが、みな、からだのかしらであるキリストに治められなければならない（コロサイ一・一八）。

眠っている、バプテスマを受けた愛する信者たちよ、目を覚ましなさい。カナンの地へと進んで行き、私たちの受け継ぐべき地を所有しようではないか。そして、御霊の賜物と実を受け入れよう。神は、さらに大いなる賜物を熱心に求める者に、それを授けようと待っておられるのである。

枯れた骨の谷

（エゼキエル三七・一〜一四）

このすばらしい章を、第一節の最初の言葉から始めよう。そして、預言者エゼキエルと共に、一歩一歩この谷とその経験の中へ降りて行こう。

主の手がわたしに臨み

主の手が自分の上にあると知ることは、人にとってなんとすばらしいことだろう！　はるか南のフロリダで、愛する黒人の人々に説教していたころ、彼らは好んでこの歌を歌ったものだった。

「子供たちよ、私は主を知っている、
子供たちよ、私は主を知っている、
私は主を知っている、
主はその御手を私の上に置かれた」

ああ、今日の午後、私は主の御手が自分の上にあることを、こんなにもはっきりと感じている。御名をほめたたえよ。

主の手がわたしに臨み、主はわたしを主の霊に満たして出て行かせ

主の手がエゼキエルに臨んだのは、これが初めてでは決してなかった。彼は啓示の山の頂に引き上げられたことがあったではないか。四つの生き物、ケルビム、そして契約の箱を見たことがあったではないか。主の栄光と、その御力の大いなる動きを見たことがあったではないか（エゼキエル一・二八、一〇・四）。

主の手が彼の上に下り、御霊のうちに彼を連れ出された。そのときエゼキエルはきっと、もう一度どこか天上の栄光の高みに引き上げられることを願ったにちがいない。主は彼を連れ出そうとしておられた。今度はどんな驚くべきことを見せてくださるのだろうか。エゼキエルが目を開けて、主が自分をどこに置かれたかに気づいたとき、どんな気持ちだったろうか。あなたはそれを考えたことがあるだろうか。主は彼を、

谷の中に置かれた

山の頂の経験の後で、突然、谷に降ろされるだけでもつらいことである。けれども、それが最悪のことではなかった。この谷には、

骨が満ちていた

私たちのうちのある人は、エゼキエルの気持ちがどんなものであったかを、少しは味わい、理解できるのではないかと思う。私たちもまた、主の御手を自分の上に感じてきた。私たちもまた、幾度となく主の栄光を見、いのちと力のただ中に住んできた。私たちもまた、主の御霊によって、ある集会や家庭、地域や町に置かれたことがある。そこで目を開けて、はっとした。自分が、文字どおり骨が「満ちて」いる谷の「中」に、まさに降ろされていたのである。

彼はわたしにその周囲を行きめぐらせた

見よ、谷の面には、はなはだ多くの骨があり、皆いたく枯れていた

見よ、はなはだ多いのである。ああ、なんと痛ましいことか！　ほんの少しなら、それほど恐ろしくは思えないだろう。けれども、これらの枯れた骨のおびただしい数には、ぼうぜんとさせられる。実に多くの尊いクリスチャンが、実に多

くの教会で、実に多くの地で、谷に沈んでいる。信仰告白の骨組みをおおう霊的な力も肉もなく、骨、骨、骨ばかりである。

谷の面に

私が話している種類の骨を見つけるのに、すきもつるはしも要らない。それは谷の面に転がっているからである。そうだ、今この瞬間に振り返ってみれば、そのいくつかがあなたのすぐ隣の席に座っているのを見つけたとしても、私は驚かない。

皆いたく枯れていた

あまりに枯れていて、「アーメン」とも「ハレルヤ」とも言えない。あまりに枯れていて、この建物に入ってから一度も「主をほめたたえよ」と言っていない。あまりに枯れていて、自分では叫ぶことも手を打つこともできない。そして、できることなら、ほかのだれが叫び喜ぶのも止めたいと思っている（彼らは、かいば桶の中の犬にそっくりである。自分では干し草を食べられないのに、馬にも食べさせようとしない犬である）。あまりに枯れていて、その生活には本当の勝利がなく、その証しには響きがなく、その信仰告白には真の価値がない。枯れている！　枯れている！　枯れている！　彼らが説教したり証しをしたり動いたりするたびに、信仰告白の外套の下で骨がからからと鳴るのが、聞こえてきそうなほどである。

彼はわたしに言われた、「人の子よ、これらの骨は、生き返ることができるのか」

主がエゼキエルに突きつけられたのは、なんとぼうぜんとさせる問いであったことか。それは、骨の転がる谷のひからびたありさまについて彼がつぶやくのを、たちまちやめさせる問いであった。そして、よみがえりの、いのちを与える主の力に対する、限りない望みと信仰を求める問いであった。

あなたは、枯れた骨の満ちている谷に置かれているだろうか（それが家庭であれ、集会であれ、地域であれ、仕事場であれ）。あなたの牧師は枯れているだろうか。あなたの会衆などはどうだろうか。それなら神は今日、はるか昔にエゼキエルの前に立ちはだかったのと同じ問いを、あなたに突きつけておられる。

「人の子よ、あなたには、これらの枯れた骨を生き返らせることのできる信仰があるか」。欠乏と不毛の嘆かわしいありさまについて、あら探しをしたり嘆いたりすることは、一つのことである。けれども、自分の周りにいのちと力とより良いありさまをもたらす、神への祈りと信仰と信頼を持つことは、まったく別のことである。

もしあなたが、自分は枯れた骨の谷の中にいると気づいたのなら、そこにいることを嘆いたりこぼしたりするのはやめなさい。信仰復興の火が燃え、生きた軍勢が行進している丘の頂のような、別の環境に置かれていたらよかったのに、と願うのはやめなさい。**あなた**が生きていること、**神**が生きておられることを感謝しなさい。そして、感謝しなさい。あなたが信じて祈るにつれて、エゼキエルの日と同じように確かに、今日もあなたの周りの人々の中で、いのちが死に打ち勝つのである。あなたがその固く、枯れた、困難な場所に置かれたのは、偶然ではない。神の見落としでも、誤りでもない。主の手は、エゼキエルをあの枯れと死の谷に置かれた。それと同じように確かに、あなたを愛する父の御手が、あなたをその谷に、その立場に、その家庭に、その教区に置かれたのである。

『神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる』（ローマ八・二八）

そして今、あなたをそこに置かれた主は、エゼキエルに突きつけられたのと同じ問いを、あなたに突きつけておられる。

「あなたには、いのちを与える者であるわたしを信じ、わたしをしっかりとつかみ、これらの枯れた骨のためにそのいのちを求める信仰があるか」

エゼキエルは答えた、「主なる神よ、あなたはご存じです」

ここでもまた、多くの人がエゼキエルのためらいに心から共感できるだろう。主の子供たちの多くが、信仰への挑戦に対して、しばしば同じように答えてきたのではないかと、私は恐れる。

「ああ、主なる神よ、あなたはご存じです！　彼らはずいぶんひからびた人々です。いのちの火花も、いのちを慕う思いさえも、ないように見えます。この教会やこの人々が、本当に生きた霊的な所にまで引き上げられることなど、とてもありそうに思えません。けれども、ああ、イエスさま、私の信仰を増してください。不信仰な私をお助けください。主よ、私は彼らが生きるのを見たいのです」

そこで彼はわたしに言われた、「これらの骨に預言して、

言え。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れて、あなたがたを生かす」

哀れな、ひからびた、いのちのない、信仰を言い表している人よ、あなたにさえ望みがある。騒がしい音や叫びを認めない愛するみなさん、小羊へのそれほど熱心な祈りと賛美を認めない人々よ。主は、あなたがたのうちにさえ息を入れてくださる（詩篇百五十篇が『息のあるすべてのものに主をほめたたえさせよ』と言っていることは、あなたも知っている）。そして、あなたがたは生きるのである。

わたしは命じられたように預言した

ああ！　ここに、あの谷でのエゼキエルの預言の力と成功の秘訣があった。おわかりだろうか。め、い、じ、ら、れ、た、よ、う、に、である。自分には賢く、もっともらしく思える、人の『巧みな知恵の言葉』によったのではない（第一コリント二・四）。聞き手を喜ばせ、偽りの安心の中で眠り込ませる言葉でもなかった。彼らのありさまと枯れぶりをただ見せつけるだけの、独り善がりの非難の長談義でもなかった。主の命令にかなった預言だったのである。

ハレルヤ！「みことばが入ると光を与える」（詩篇一一九・一三〇）。いのちと自由をも与える。ああ、今日、もっと多くのエゼキエルがいてくれたらよいのに。わき道の問題や分裂や争いを持ち込まず、主の命令にかなって預言する人々である。そうすれば、枯れた骨の谷に、もっと多くの震い動きを見るだろう。御霊の風が吹き、眠っている者たちにいのちをもたらすだろう。

わたしが預言した時、音があった

エゼキエルが預言していたとき、音があった。ペテロがまだ語っているうちに、『聖霊がくだった』（使徒一〇・四四）。どうか、それと同じように、私がまだ語っているうちに、今ここで、神の力があなたの上に下りますように。ああ、私たちの言葉が神の命令にかなうものとなり、私たちがまだ語っているうちに、私たちもまた、次のような「音」を聞くことができますように。男や女が叫ぶ音である。

「永遠のいのちを受け、聖霊を受けるには、何をしたらよいでしょうか」。賛美ととりなしの音、『大雨の音』（第一列王一八・四一）、山々の上をとどろく主の戦車の車輪の音、そして『バルサムの木の上に』聞こえる行進の音である（第二サムエル五・二四）。

わたしが預言した時、音があった。見よ、震い動きがあり、骨と骨が集まって相つらなった

エゼキエルが預言したとき、枯れた骨の谷ではっきりと区別される三つのことが起こったことに気づくだろう。骨が経てきた三つの時期である。第一に音、第二に震い動き、第三に骨が集まったことである。

第一に、音

一九〇七年に後の雨が豊かな雨となって降り始めたとき、祈りに答えて、御霊が全世界で力強く動かれた。そして、数えきれない枯れた骨の谷を目覚めさせ、生き返らせてくださった。音があったのである。罪人たちは泣きながらイエスのもとに来て、大声で叫んだ。

「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」（使徒一六・三〇）。信者たちは御霊に満たされて叫び、しばしば何時間も、御霊が語らせるままに他国の言葉で語った（使徒二・四）。その喜びに満ちた賛美の音が空に満ちた。信者たちは、からだを垣間見た。教会を、その満ちあふれるペンテコステの力といのちに回復させようとされる神のご計画を垣間見た。そして、その栄光に満ちた幻を前に、大声で叫ばずにはいられなかった。だから、こう言っても、まことに控えめな言い方である。

「音があった」

けれども、待ちなさい！　聞きなさい！　これは何か。この驚くべき、地震のような震い動きは何か。御霊が注がれたときの最初の音の後に、どこでも必ず、すぐに続いて起こるものである。目を開けて、全世界のこの運動を見回してみさえすれば、あなたもまた見るだろう。「見よ、震い動きがあり」である。

第二に、震い動き

あなたの集会、あるいはあなたがいつも共に礼拝してきた群れは、震い動かされるときを通ってきただろうか。あなた自身が、激しく震い動かされてきただろうか。あなたの心は痛んだだろうか。親友であり戦友であった兄弟たちが別れ、離れて行くのを見たとき、あなたもまた、なぜ、なぜ、どうして、と問い続けただろうか。集会が二つに、あるいは場合によっては半ダースもの派に分かれていくのを見たときもそうである。あの人はなぜ戻って来ないのか。この人はなぜ妥協したのか。あの二人はなぜ折り合えず、あれほどかけ離れてしまったのか。あなたはそう思いめぐらしてきただろうか。その理由を教えよう。それは、音の後に続いた震い動きのためだったのである。それは、あらゆる集会の生活の中で続いている。あらゆる信者の生活の中で続いている。大いなる震い動きの時が来ているのである。

神はギデオンの軍勢をふるいにかけて、揺るがない三百人だけを残された（士師記七章）。それと同じように、聖霊は今日、ふるい分け、きよめ、震い動かしておられる。『あの時には、御声が地を震わせた。しかし今は、約束して言われた、「わたしはもう一度、地ばかりでなく天をも震わそう」。この「もう一度」という言葉は、震われないものが残るために、震われるものが（中略）取り除かれることを示している。このように、わたしたちは震われない国を受けているのだから、（中略）神に喜ばれるように、仕えていこう』とあるからである（ヘブル一二・二六～二八）。

愛によって結び合わされているはずの人々の間に、震い動きと分裂と仲違いを初めて見るとき、それは胸の張り裂けるような思いである。けれども、みことばにあらわされている神のご計画が見え始めると、私たちは安息の場所に入る。そして、次の句を読む。

『**骨と骨が集まって相つらなった**』（エゼキエル三七・七）。そのとき私たちは、手を上げて喜び叫ぶのである。

愛する人々よ、震い動きの後には、近いうちに集まるときが来る。そして集まる者たちは、どんなものも二度と引き離すことのできない一致と愛のきずなで結ばれる。そのうえ、からだが集まるとき、それは「**骨と骨が相つらなる**」のである。

これは、継ぎはぎの間に合わせではない。人の作った平和でも、一時の休戦でもない。いつまでも続く一致である。

「骨と骨が相つらなる」。人が自分の知恵でからだを整えようとして、牧師、教師、伝道者、預言者、補助者、管理者などを選んで任じる。そのとき人は、ほぼ間違いなく、違う骨を選ぶか、正しい骨を違う場所に置いてしまう。だから、人の作った組織の多くでは、目があるべき所に耳があり、手があるべき所に足があるのである。

第三に、集まること

神がご自分の教会を整えられることを、あなたはうれしく思わないか。**神**が教会の中で、人々を立てて、『第一に使徒、第二に預言者、第三に教師』などとされるのである（第一コリント一二・二八）。神は、震い動かされるもの、あらゆる風に吹きまわされるものをすべてふるい落とされる（エペソ四・一四）。そして、堅く、真実で、妥協しない、揺るがない骨を集められると、ご自分でそれらを、からだの中の定められた場所に置いてくださる。骨と骨が相つらなるのである。『からだが一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である。なぜなら、わたしたちは皆、（中略）一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け（中略）』。また、『神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。（中略）あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である』（第一コリント一二・一二～一三、一八、二七）。

主の来臨の前に、からだが人の目に見えるような完全な形で集まるのを見ることはないだろう。この運動は、神のみこころならば、決して一つの大きな組織にはならず、むしろ有機体となるだろう。けれども私たちは、からだのさまざまな肢体の間の一致が（かつて見たことのないようなものが）、まさにこの古い世界のここで育っていくことを期待している。

からだの一つの肢体は、多くの関節からできている。それらは心を一つにして、互いにつながりながら調和して働き、愛のきずなで結び合わされている。からだの肢体（すなわち、集会や群れ）を動かし治めるのは、自分の知恵でも互いの命令でもなく、かしらであるキリストである。そして、それぞれの肢体がかしらに動かされて、そのみこころに従うとき、一致と調和と集まりが生まれる。それぞれの肢体は、多くのより小さな肢体からできている。腕には、指、手、手首の骨、前腕の骨、肩の骨がある。今日は、より小さな骨と関節が、肢体を形づくるためにそれぞれの場所についていく日である。イエスが現れるとき、からだの多くの肢体は集められ、最後の大いなる集まりが空中で起こる。ハレルヤ！

わたしが見ていると、その上に筋ができ、肉が生じ、皮がこれをおおったが、息はその中になかった。時に彼はわたしに言われた、「人の子よ、息に預言せよ、息に預言して言え。主なる神はこう言われる、息よ、四方から吹いて来て、この殺された者たちの上に吹き、彼らを生かせ」

そこでわたしが命じられたように預言すると、息はこれにはいった。すると彼らは生き、その足で立ち、はなはだ大いなる軍勢となった

ああ、今夜ここに、かつてはひからびた骸骨のようであった魂がいるだろうか。今はあがなわれ、筋と肉と皮（恵みと救いのおおい）でおおわれ、主の御力の大いなる剣に打たれて倒れた魂である。もしそうなら、あなたに今必要なのは、聖霊のバプテスマである。ペンテコステの日に、聖霊は『激しい風が吹いてきたような音』で家を満たされた（使徒二・二）。それと同じ聖霊が、あなたの上に臨み、あなたに力を授け、あなたをその足で立たせ、このはなはだ大いなる軍勢に加えてくださる（黙示録七・九）。

罪人よ、信仰から離れた人よ、生ぬるい信仰を言い表している人よ。あなたがだれであれ、どこにいるのであれ、もう墓の中や枯れた骨の谷にとどまっている必要はない。主は、冷たさと死の墓からあなたを引き上げ、救いのうちにご自分を知らせようと待っておられる。そして、あなたをご自分の御霊で満たし、カナンの地へと導こうとしておられる。エゼキエル書三十七章の十二節、十三節、十四節を読みなさい。

『わが民よ、見よ、わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓からとりあげて』（罪）、『イスラエルの地にはいらせる』（救い）。『わが民よ、わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓からとりあげる時、あなたがたは、わたしが主であることを**悟る**』（エゼキエル三七・一二～一三）。（主が、あなたがたは**悟る**と言われていることに注意しなさい。あなたの救いについて「そう思

う」などということはない。自分が『死から命に移っている』ことを、あなたははっきりと知るのである（ヨハネ五・二四）。」

十三節は栄光に満ちている。けれども、そこでとどまらず、十四節へと進みなさい。「わたしがわが霊を、あなたがたのうちに置いて、あなたがたを生かし、あなたがたを**自分の**地に安住させる時、あなたがたは、主なるわたしがこれを言い、これを告げたことを悟ると、主は言われる」

（ここにも、あなたがはっきりと悟る、もう一つの確かな体験がある。主は、わたしがそれを、すなわち御霊で満たすというわたしの約束を果たしたと推し量るだろう、とは言われない。信仰によってそう受け取るだろう、とも言われない。わたしがそれを果たしたことを**悟る**、と言われるのである。）だから、主をほめたたえよ。主があなたを救われるとき、あなたはそれを知る。主があなたをイスラエルの地に導き入れてくださったからである。主があなたに聖霊のバプテスマを授け、あなたを通して他国の言葉で語られるとき、あなたはそれを知る。そして主は、あなたを自分の地に導き入れてくださる。それは実り豊かな勝利の地であり、主に従う者たちのために、主が約束の地として備えられた地である。

そして、愛する神の子供よ、あなたのいる谷の骨がどれほど死んで枯れていても、落胆してはならない。あなたを今いる所に置かれた神の知恵を疑ってはならない。かえって、主が送っておられる信仰の呼びかけにこたえ、みことばが命じるとおりに預言しなさい。もしあなたが十字架の陰に隠れてイエスを高く掲げるなら（ヨハネ一二・三二）、主はあなたの周りの冷たく暗い心に光を注いでくださる。いやしといのちをもたらし、御霊で満たしてくださる。そしてついに、その枯れた骨の谷から、造り変えられた勝利の軍勢が起き上がる。そして進み出て、大いなるからだに加わるのである（『肢体は多くあるが、からだは一つなのである』第一コリント一二・二〇）。

同じからだの多くの肢体が一つにされ、からだがかしらと一つにされる、最後の大いなる集まりの日が近づいている。イエスが天から語られる日は、なんとすばらしい日であろう。主が勝利の合図の声をあげられ、その**音**が聞こえる（第一テサロニケ四・一六）。墓は大きく**震い動かされて**開き、死すべき身のかせは震い動かされて解ける。そして地の四方から、死者の中からも生きている者の中からも、一つ一つの骨、からだの一つ一つの肢体が**集まる**。そして起き上がって、そのからだの中の割り当てられた場所を満たす。骨と骨が相つらなるのである。

愛するみなさん、時はもう短い。日が沈むたびに、この勝利のからだが空中で主に会うために引き上げられる時が、一日ずつ近づいている（第一テサロニケ四・一七）。それは、勝利を得る者たちのからだである。試され、震い動かされ、確かめられた人々の群れである。『大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗』った人々である（黙示録七・一四）。あなたがたは、かつてないほど主の取り扱いに身をゆだねないか。そして、自分の生活の中で主が震い動かされることにつぶやく代わりに、主にこう叫ばないか。

「主よ、すべてのものを私からはぎ取ってください。
この世も、自分も、罪も。
来たるべき王を見ることができるように。
栄光の冠を勝ち取ることができるように」

かまの中の死（その一）

『エリシャはギルガルに帰ったが、その地にききんがあった。預言者のともがらが彼の前に座していたので、エリシャはそのしもべに言った、「大きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい」。

彼らのうちのひとりが畑に出ていって青物をつんだが、つる草のあるのを見て、その野うりを一包つんできて、煮物のかまの中に切り込んだ。彼らはそれが何であるかを知らなかったからである。

やがてこれを盛って人々に食べさせようとしたが、彼らがその煮物を食べようとした時、叫んで、「ああ神の人よ、**かまの中に、たべると死ぬものがはいっています**」と言って、食べることができなかったので、

エリシャは「それでは粉を持って来なさい」と言って、それをかまに投げ入れ、「盛って人々に食べさせなさい」と言った。かまの中には、なんの毒物もなくなった』（第二列王四・三八～四一）

「エリシャはギルガルに来たが、その地にききんがあった」。けれども、ギルガルにいつもききんがあったわけではない。

ギルガルは、かつて神からすばらしい祝福を受けていた。祝福と豊かさが手を取り合って、その通りを歩いていた。祭司たちはヨシュアに導かれて、主の契約の箱をそこへ担って来た。そのとき、その通りは叫びと喜びの声、そして四万の戦士の行進する足音で鳴り響いたではないか（ヨシュア四・一三）。

彼らは宿営を張り、ヨルダンの水が分かれたことの記念として十二の石を立てた（ヨシュア四・三、二〇）。そして過越の祭を守ると、その地の穀物とカナンの地の産物を食べたではないか。長いあいだ待ち望んだ約束の地に、ついに着いたのである。もう荒野をさまよう必要はなかった。『その地の穀物を食べた翌日から、マナの降ることはやみ、イスラエルの人々は、もはやマナを獲なかった。その年はカナンの地の産物を食べた』（ヨシュア五・一一～一二）。

主が主の軍勢の将としてお現れになり（ヨシュア五・一四）、ヨシュアが地にひれ伏したとき、主が彼にこう言われたのは、ギルガルではなかったか。

『あなたの足のくつを脱ぎなさい。あなたが立っている所は聖なる所である』（ヨシュア五・一五）

また、サムエルはサウルに油を注いだ後、彼をギルガルへ送ったではないか。それは、サウルがそこで「待つ」ためであった。やがて『主の霊』が彼の上に「下り」、「しるし」が伴って、彼に『新しい心』が与えられ、彼は『変って新しい人』となるはずであった（第一サムエル一〇・六～九を読みなさい）。これはペンテコステのなんとすばらしい型だろう！　後にサムエルは民に言った。

『さあ、**ギルガル**へ行って、あそこで王国を一新しよう』（第一サムエル一一・一四）。それは、初代の使徒たちが御霊の新しい油注ぎを受けるためにエルサレムへ戻ったのと同じである。

その地にききんがあった

けれども、見よ、今、何かが起こった。主の子供たちは冷たくなり、生ぬるくなり、信仰から離れてしまった。ギルガルとその周りの国々には大きなききんが来て、彼らは『歯を清く』され、パンに乏しくなった（アモス四・六）。「とがは増し加えられた」（アモス四・四）。けれども、主はホセア書四章十六節でイスラエルに約束しておられる。もし彼らが主に従うなら、主は彼らを広い所の小羊のように養ってくださる、と。このイスラエルを、主はその不義のゆえに強情な雌牛にたとえ、ギルガルへ行くことを禁じておられたのである（ホセア四・一五）。

聖霊の前の雨の注ぎは、ペンテコステの日に始まった（使徒二・四）。そのあいだ、主の栄光を納めた契約の箱は（霊的な意味で）、昔のギルガルのようにエルサレムにとどまっていた。サウルは、主の霊が彼の上に臨まれ、しるしが起こ

るまで待つように、ギルガルへ送られた。それと同じように、百二十人は、聖霊がしるしを伴って彼らの上に臨まれるまで、エルサレムで待つように命じられていたのである。

長いあいだ待ち望み、長いあいだ預言されてきた約束の地に、ついに着いたのである（イザヤ二八・一一〜一二、ヨエル二・二三、二八、ゼカリヤ一〇・一、マタイ三・一一、ルカ二四・四九、ヨハネ一四〜一六章、使徒一・五、八）。確かに、神は荒野にいるあいだも彼らを守られた。昔の聖なる預言者たちが聖霊に感じて語った霊感の言葉が、マナのように彼らの上に降った。確かに、イエスが肉のからだでこの地上を歩まれたあいだは、そのみことばが天からのマナのようであった。けれども今、今、聖霊が来られたのである。い、ま、である。彼らはカナンの地に入った。マナは取り去られて、もう彼らの上には降らなかった（イエスは父のもとに帰られ、その御声はもう聞こえなかった）。その代わりに、彼らには穀物と油と新しい酒があった（ヨエル二・一九）。御霊が彼らを通して、イエスとその来たるべき御国について語られたのである。『その地の**穀物**を食べた』、『もはやマナを獲なかった。その年はカナンの地の産物を食べた』（ヨシュア五・一一〜一二）。（御霊の実については、ガラテヤ五・二二を見なさい。）

エルサレムは（昔のギルガルのように）主への賛美で鳴り響いた。新しく回心した者たち、新しい戦士たちが、主の軍勢の将に従うために出て行く行進の足音でも鳴り響いた。ペンテコステの日には三千人の魂が教会に加えられた（使徒二・四一）。主の民は、喜びのあふれる清い心で、くつを脱いだ足で、主の御前を静かに歩んだ。そしてひれ伏して礼拝した。十二の部族が十二の石の記念を立てたように、十二弟子は、大いなる聖なる方の偉大な御力の記念として立った。この方は紅海の水を分けられた。それが「救い」である。また、ヨルダンの水を分けて民をカナンの地へ連れて行かれた。それが「聖霊のバプテスマ」である。どちらのときも、主の子供たちが新しい経験へと渡って行く前に、主ご自身が水を分けなければならなかったのである。

人類は紅海を泳いで渡ることも、歩いて渡ることもできなかった。主ご自身が、ご自分の血によって、奇跡のうちに道を開かれた。それが救いである。その道は同時に、悔い改めて信じる者には解放といのちとなり、悔い改めない不信仰な者には死となった。

人類は昔のヨルダンの波のさばきを越えて渡ることができなかった。自分をカナンに入るのにふさわしい者とすることもできなかった。そこで主は、ふたたび水を分けられた（主の**恵み**と主の**ふさわしさ**が両側にそびえ立っていた）。そして、ご自分の民を約束の地へと導き出され、御霊で満たされた。ここに二つの経験がある。救いと聖霊のバプテスマである。私たちは自分の力でそこに入ることはできなかった。だから、主はそのたびごとに水を分けてくださったのである。御名をほめたたえよ。

エリシャはふたたびギルガルに来た

弟子たちと使徒たちが主にあって眠りにつき、聖霊の力と栄光が現された長い祝福の年月が過ぎた。その後、教会の霊性は少しずつ衰えていった。背教と暗黒時代が続いた。けれども、聖なる霊感の預言はこう言っていた。

「前の雨をほどよく賜った方が、あなたがたに雨を、すなわち前の雨と後の雨とを、ひと月のうちに共に降らせてくださる」（ヨエル二・二三）。また『神がこう仰せになる。終りの時には、わたしの霊をすべての人に注ごう』（使徒二・一七）などである。

「エリシャはふたたびギルガルに来た」。ハレルヤ！　終わりの日に起こるはずの、御霊の後の雨の注ぎの時が来た。そしてエリシャは（しるしと奇跡のうちに目に見える形で現れる神の力を表している）、ふ、た、た、び、ギルガルに来たのである。

そして彼が来てみると、「その地に大きなききんがあった」。

ああ、そうだ！　その地には、なんというききんがあったことか！　一九〇五年と一九〇六年、またその少し前には、食物を、煮物を、パンとレンズ豆を求める、なんという叫びがあったことか。

どれほど多くの教会と聖徒たちが、天に向かって叫んだことか。

「ああ、昔ながらの力がほしい！　ああ、もう一度ペンテコステがほしい！」メソジスト教会も、救世軍も、ホーリネス教会も、そのほか多くの教会も、この言葉を何度も何度も歌い、祈った。けれども、ああ、その答えは『布にくるまって飼葉おけの中に』来た（ルカ二・一二）。そのとき、それが答えだと本当にわかった人は、なんと少なかったことか）。それでも、神のみことばはこう言っていた。

あなたがたがわたしを呼ぶなら、わたしは答える。あなたがたが心をつくしてわたしを尋ね求める日に、わたしはあなたがたに会う（エレミヤ二九・一二～一四）。泣き悲しんで主に帰れ（ヨエル二・一二）。（中略）「主は立ち返り、思いかえして、祝福をその後に残される。素祭と灌祭とを残される」（ヨエル二・一四）。

大きなかまをすえて

だから、エリシャはふたたびギルガルに来た。すなわち、定められた後の雨の時に、聖霊は、飢えた聖徒たちが心を一つにし、願いを一つにして御前に座しているのをご覧になった（ちょうど昔、百二十人が待ち望みつつ座していたように）。そのとき、『そのしもべに言った』のである。

『大きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい』（第二列王四・三八）。「飢えかわいている人たちは、さいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう」（マタイ五・六）。

ああ、イエスに栄光あれ！　今夜、開いた聖書を前にしてこれを書きながら、目を閉じるだけで私には見える。ペンテコステの大きなかま（ペンテコステ運動の全体）が運び出され、火の上にすえられるのである。もちろん火は聖霊である。私たちの祈りと賛美は**薪**である（そして、ああ、本当に真っ赤に燃える火を起こすには、やにをたっぷり含んだ、よく乾いた薪が要る。世の俗っぽさと不信仰の、水びたしの腐った薪は、煙を出してくすぶり、火の妨げになるだけである）。

聖霊の火の上につるされると、ペンテコステのかまは、まもなく煮え立ち、ぐつぐつと煮え始めた。飢えた聖徒たちが集まって来て、それぞれ丹精して育てた野菜をささげ物として手に携えて来たのである。

そのかまの中に、なんという混ぜ合わせ、なんという寄せ集めが集まったことか！

これほどさまざまな教え、信条、組織から成り立っている運動は、地上にほかにないかもしれない。それでも、みことばの**水**に入れられ、聖霊の火で煮られると、すべてが溶け合って一つになるのである。

それは、無数の水源から流れ出た無数の流れが出会い、混じり合ったかのようであった。そして**今**は、かつて分かれていたことなどなかったかのように、**一つ**の大きな流れとなって流れていた。

その火は、大きく燃え上がる**薪**の山の火のようであった。薪は多くの所から切り出され、集められたものである。さまざまな種類の木から、遠く隔たった森から集められた薪が、今は愛と献身の一つの大きな炎となって、天に向かって燃え上がっていた。

それは、多くの畑で植えられ、水を注がれ、耕され、育てられ、運ばれて来た多くの**野菜**のようであった。それらが一つのかまに入れられ、今はみことばの堅い食物と、いのちの御霊の水と共に、豊かで滋養のある食物となっていた。その食欲をそそる、心ひかれる香りが、周りのすべての人に漂っていった。それは、喜び踊るかまの中身から立ちのぼる、賛美と証しの湯気に乗って運ばれていったのである。

ペンテコステの信仰復興は、稲妻のような速さで世界を一巡りした。何千何万もの飢えた魂が、御霊に満たされた。

ちょっと待ちなさい！　このいきいきと泡立ち、躍っているペンテコステのかまを調べている人、ものめずらしそうにのぞき込んでいる人よ。ここで立ち止まり、何人かの人々を調べてみよう。この運動に何かの食べ物をささげようとやって来る、果てしなく続く人々の行列である。まず、初穂の野菜とパンをどっさり抱えて、かまのほうへ急いで来るこの人から始めよう。彼が何と言うか、聞いてみよう。

かまの中の死（その二）

メソジスト

問「止まれ！　だれか。どこから来たのか」

答「私は**メソジスト**です。義認の健全な教理と、今も働く神の力への信仰の上に建てられた教会から来ました。それはジョン・ウェスレーに示されたものです。過ぎ去った年月には、その教会に聖霊の力が下ったものでした。聖徒たちは叫び、罪人たちは泣き、喜びに満ちた者たちは主の前で踊りました」

問「ほう。それで、手に何を持って来たのか」

答「丹精して育てた野菜と、初穂のパンを持って来ました。由緒ある大きな畑でとれたものです。少しまばらにしか『水をまかれて』いませんし、それに、まあ、少し『水不足』ではあります。それでも、目を覚ましていることと神のみことばとによって、熱心に耕してきた畑です。

私たちの収穫は、いろいろな園から来ます。そして違う園丁たちが耕しています。その中には『エプワース同盟』『自由メソジスト』『ランターズ』『シェーキング・メソジスト』などの名で知られているものもあります。けれども、高い天からすべての園を照らすのは、同じ義の太陽なのです。

もとの畑から出て来て、私は飢えを抱えています。昔のメソジスト教会で神がかつてどのように働かれたかを、大切に覚えているので、その思い出に飢えがかき立てられているのです。ああ、私たちの畑には欠乏と形式主義が入り込み、そこにいる多くの者が飢えていたのです。

どうか失礼して、通していただきたいのです。この終わりの日に（使徒二・一七）、祝福の大きなかまが御霊の火の上にすえられました。私はそこへ急いでいるのです。昔ながらの力が百倍にもなっているのを見いだしたいのです」

（ほら、行ってしまった！　もう少し引き止めて話ができたらよかったのに。けれども、心を騒がせることはない。見よ、ひとりが去れば、見よ、また別の人が来るのである。）

バプテスト

問「止まれ！　だれか。どこから来たのか」

答「私は**バプテスト**です。ある園から来ました。その園の初めの栽培の計画は（私たちの手引き書に記されているとおり）、神のみことばにならって立てられたものでした。種をまいて芽を出させるには、義認と心の変化が必要でした。若い苗には、たっぷりと水も注がれました。実のところ、育ち始めのころに『すっかり浸され』たのです。ところが、苗が育って大きくなると、収穫を実らせるために、御霊の風と後の雨の降ることが必要になりました。ああ、それなのに、『閉ざされた聖餐』の高い厳重な垣根があり、神学と形式と儀式でできた重い棚が頭上をおおっていました。そのあいだにはさまれて、風も雨も園に届かなかったのです。

そのため、私たちの園丁の多くは、自分たちの労苦の実がひどく『硬い殻』に包まれていることに気づきました。いくらかのいのちと、ひからびたこわばりを破ることとが必要だと気づいたのです。そこで、世の俗っぽさと建物の壮麗さという人工の灌漑を試みました。講演会、音楽会、娯楽が、肥料として勧められ、試されました。けれども、苗の霊的ないのちは、このやり方ではよく育ちませんでした。多くの苗がしおれ、やせ衰えました。そして、その地にききんがあったのです。

私たちの『閉ざされた聖餐』の垣根の陰から出て来て、私はあそこで明るく燃えている火のほうへ急いでいます。大きなかまが炎の上にすえられたのを、私は確かに『見聞きしている』からです（使徒二・三三）。ほら、聞こえませんか。かまが躍り、泡立つ音が。ここからでも、賛美の湯気が立ちのぼるのが見えませんか」

問「それで、ペンテコステのかまにささげるために、手に何を持って来たのか」

答「初穂のパンとして、聖書の知識と健全な教理、そして先祖たちが定めた水のバプテスマに堅く立つことを持って来ました。また、本当に手でさわれるような神の力への飢えを持って来ました。

けれども、ああ！　あそこで湯気を立てている大がまから、かぐわしい香りが立ちのぼって来ます。

どうか通してください。大きなかまから、私の分をいただきたいのです」

救世軍の兵士

問「止まれ！　だれか。どこから来たのか。なぜ来たのか」

答「私は**救世軍**から来ました。救世軍は神の召しに従って、『血と火』の旗のもと、恐れることなく敵の領土のただ中へ進軍しました。そして、王なるイエスのためにとりこを捕らえ、愛の捕虜としてきたのです。

私は、広い栽培の働きの中に『しもべ、はしため』のどちらにも仕事を見いだした人々のところから来ました（ヨエル二・二九）。かつては深く霊的で、よく祈り、世とその地上の知恵からまったく離れていた人々です。

確かに、彼らは迫害と試練のただ中で種をまき、収穫を集めました。それは垣根で囲まれた所の中ではなく、通りや市場で、貧民街やあばら家でのことでした。

私は、かつて御霊の現れを支持していた人々のところから来ました。その中には、叫び、踊り、神の力に打たれて倒れ、神の栄光の幻を見た者が大勢いたのです。

なぜ出て来たのか、ですか。それは、私たちの地にききんがあるからです。昔ながらの力は、今日、悲しいことにひどく欠けています。時勢と仕事にひどく追い立てられ、追い立てられているのです。人気、世界の大きな戦いの中での私たちの戦時奉仕、終わることのない資金の必要、広がった収穫の畑のための新しい倉。それらが、たちまち生い茂る雑草のようになりました。そして、かつての霊性と、心からすべてをささげる献身と、神へのへりくだった信頼を、悲しいことに、ふさぎ、締め出してしまったのです。

私は昔ながらの力を求め、飢えて、食物を得ようと来ました。この聖霊の運動の火の上にすえられた、あの大きなかまのところへ来たのです」

問「それで、手に何を持って来たのか」

答「私たちの労苦の初穂を持って来ました。私たちの野菜の畑は、すばらしい始まり方をしました。植え付けは非の打ちどころがありませんでした。もし私たちの畑が、園丁頭であるイエスの指示どおりに水を注がれていたなら、どの畑もこれにまさることはなかったでしょう。けれども、下働きの園丁たちは、定められた水のバプテスマも、後の雨の注ぎ（使徒二・四に記されている聖霊のバプテスマ）も、必要だとは思わなかったのです。

私たちの野菜には、水がまかれることさえありませんでした。それでも、魂への本当の熱心と、魂を追い求めていく勇気があります。私は、昔の『アーメン席』と、響きわたるハレルヤ、歌と音楽を手に携えて来ました。また、『すべての水のほとりに種をまく』信仰と忍耐を携えて来ました（イザヤ三二・二〇）」

次々と、次々と、彼らはやって来る！　四方八方から群れをなして集まり、それぞれ何かをペンテコステのかまにささげようとしている。ほら、筋金入りの**長老派**の人がやって来る。昔のスコットランドの**盟約派**の人も、**ユグノー**の人も来る。その後ろには、謹厳な**監督教会**の人が、誇りも形式も忘れて付いて来る。

火の上で煮え立つ、かぐわしい信仰復興の湯気をひと息吸うと、思い出がどっと押し寄せる。昔、彼らのただ中にとどまっていた信仰と力の思い出である。堅く立った、迫害された先祖たちが、ほら穴や岩穴や地下牢でひざまずいた日々のことである（ヘブル一一・三八）。そこには、ふかふかした詰め物入りの祈りのひざ布団など、知られていなかった。「信心深く生きる者たちが迫害を受けた」時代に伴った、昔ながらの力と栄光に満ちた祝福の思い出である（第二テモテ三・一二）。祈りのうちに過ごした長い夜の思い出である。救い主とその愛に対する、飾り気のない真実な心からの献身の思い出である。

ああ、そうではない！　金めっきの丸屋根も、フレスコ画の描かれたアーチも、昔ながらの力を慕う思いを静めることはできない。オルガン席で脈打ち、と

どろく響きも、白い衣の聖歌隊も、それを静めることはできない。花に囲まれた天蓋の下から抑揚のある声で語る、大学仕込みの雄弁な「聖職者」（のはずの人）でさえも、できないのである。その力は、ピルグリム・ファーザーズの時代の犠牲と明け渡しと祈りと信仰に、栄光を与えたものである。

ホーリネス教会からは、献身した聖徒たちがやって来る。彼らは心のきよさと主の来臨のメッセージを携えている。神からすばらしい祝福を受けていて、その実りに足りないものは、ただ一つ、後の雨だけである。

アドベンチストの人は、主の来臨についての教え、預言のみことばの深い研究、きよさと世の俗っぽさからの解放の教えを加える。

クエーカーの人が急いでやって来る。その魂には、喜ばしい思い出が深い井戸からわき上がっている。つば広の帽子の下で、その目は輝いている。**自分の**教会が、かつて（ききんの前には）御霊の力に揺り動かされ、治められて、どれほど神の近くを歩んでいたかを思い出しているのである。長いあいだ灰に埋もれてくすぶっていた心の中の燃える炭火が、今ふたたび炎となって燃え上がる。彼は聖霊の火と、その上につるされたペンテコステの大きなかまのところへ急いでいるのである。彼は自分の畑の実りを加える。『純金のような真実』『揺るがない信仰』『御霊の動きに身をゆだねること』である。

そして、信じられるだろうか。**ローマ・カトリック**の人もやって来るのである。一人ではなく、大勢の人々が古い教会を離れて来る。その多くが救い主のもとに来て、あがなわれ、御霊に満たされた。彼らは、聖なる畏れと従順を携えて来る。新たに見いだしたこの現実とイエスにあるいのちへの深い感謝を携えて来る。そして、それをかまの中で泡立つ幸いな混ぜ合わせに加えるのである。

四方八方からあまりに多くの人が来るので、そのすべてを呼び止めて問いただすことはできない。それから、やって来るのは、

罪人である。そうだ、なんと長い長い列だろう。彼らは、本物の現実と御霊の力強い動きに引き寄せられて、悔い改めの実と初めの愛を携えて来る（マタイ三・八、黙示録二・四）。

『エリシャは言った、

「**大きなかまをすえて、預言者のともがらのために野菜の煮物をつくりなさい**」』（第二列王四・三八）

ああ、なんとすばらしいごちそうを、私たちはいただくことになるのだろう！なんとすばらしい煮物だろう！

ふたを持ち上げて、躍り、喜んでいる混ぜ合わせをのぞいてみなさい。**御霊の大いなる火**で、**いのちの水**、**みことばの食物**、決してききめを失わない**塩**と共に煮られる（マタイ五・一三）。すると、かまの中のすべての食材に、なんと大きな変化が起こることか。畑の実りも、野菜も、大麦も、その「硬い殻」を失う。違いや信条や形式の壁から、するりと抜け出す。自分たちが遠く隔たった園から来たことも、やり方について決して意見の合わなかった園丁たちに耕されたことも忘れてしまう。そしてまもなく、心の奥底が愛となって流れ出し、賛美があふれ出すのである。

それから、火が燃え続けるにつれて、それらは溶け、また溶け、と、け、て、ついに煮物は、一つに結び合わされた、味わい深い混ぜ合わせとなる。外側の壁は崩れ落ちる。野菜は、かまに入る前に皮をむかなければならないからである（すなわち、組織の障壁や違いは、外に置いて来なければならない。むいた皮では良い煮物はできない）。それから、火がなおも燃え続け、かまが煮え立ち続けるにつれて、野菜も実りも、溶けていくうちに、それぞれが自分というものを失う。そして、周りの砕かれて溶けていく心とすっかり一つになり、溶け合ってしまう。それらがかつて分かれていたとは、とても思えないほどである。

野うりを一包抱えた男

多くの目と多くの足が、熱心にこのペンテコステ運動のほうへ向けられた。兄弟たちは互いの背中をたたいて言った。

「もう飢えも分裂も欠乏も要らない。ここには、何ものにも損なわれない、永遠に続く一致がある」

しもべもはしためも、飢えて、きれいな皿と光るさじを手に近づいて来た。「なんとすばらしいごちそうを、私たちはいただくことになるのだろう」と彼ら

は言った。

けれども、待ちなさい！　ほかの人々の後ろから、こっそりと忍び込んで来る、あの男はだれか。衣に何かを包んで運んでいる。問いただしてみよう。

問「止まれ！　だれか。あ、な、た、はどこから来たのか」

答「私ですか。いや、どこの園から来たわけでもありません。私は、**『畑に出ていって青物をつんだ』あのひとり**ですよ」

問「それで、その衣の包みには、どんな野菜を持って来たのか」

答「いや、その、つまり、私は、私が持って来たのは野菜ではないのです。野菜は、よく備えた土地に念入りに植えて、耕し、手入れをしなければなりません（『恥じるところのない錬達した働き人になって、神に自分をささげるように努めはげみなさい』第二テモテ二・一五）。あちらをぶらついていたら、よく太った立派な野うりがいっぱいなっているつる草を見つけたのです。耕す手間など、まったく要りません。もうそこになっていたのですから、通りがかりに野うりをもぎ取るだけでよかったのです。ほら、こんなにどっさり一包あります。見事なものではありませんか」

問「確かに『野うり』としては見事だ。けれども、食べてよいものなのか、あそこのごちそうに加えてよいものなのか、私にはどうもわからない。毒があるのではないかと心配だ」

答「いや、いや、毒なんかありません。請け合いますよ」

問「では、このいろいろな野うりは、何という名なのか」

答「ええと、その、これは『偽りの教え』という名です。これは『誤り』です。一方、このとげだらけのものは『教理上の争点』として知られています。このふくれた太ったのは『力と人に認められることを好む心』です。それから、『独善』『形式主義』『先入観にとらわれた考えと教え』『御霊の現れへの恐れ』『肉』『狂信』があります。ほかにもたくさん野うりがあって、その中には『兄弟愛の欠如』『偽りのうわさ』『辛辣な批判』『告げ口』があります」

問「なんということだ！　まさか、こんなものをペンテコステの集まりのただ中に持ち込むつもりではないだろうな！　あなたは間違っている。その野うりには毒がある。一致を壊し、愛をすえさせ、果てしない混乱と面倒を引き起こすだろう。

自分が何をしているのか、あなたはわかっていないのではないか」

答「いや、わかっていますとも。主が（主のはずだが）、これを私に示してくださったのです。この新しい考えだけが正しいと、私は知っています。この野うりにはまったく問題がないと知っていますし、これについて、あなたに教えてもらうことなど何もありません。どうか通してください」

問「待て、待ちなさい、戻って来なさい」。ほら、行ってしまった。彼は内側の輪の中へ入り込み、かまのそばに寄って、包みの野うりを持ち上げる。そして、それが一つ残らずかまの中へ、煮物の中へ入っていく。見物人たちは、何も知らずに、初めはその野うりが自分たちのそばを通るのを許してしまった。それどころか、

『煮物のかまの中に切り込んだ。彼らはそれが何であるかを知らなかったからである。やがてこれを盛って人々に食べさせようとしたが、彼らがその煮物を食べようとした時、叫んで、

「**ああ神の人よ、かまの中に、たべると死ぬものがはいっています**」と言って、食べることができなかった』（第二列王四・三九～四〇）

良いささげ物を携えてかまに来る多くの人々のあいだに、あちこちで男や女がこっそり近寄って来る。旅の途中で、どこかのつる草からもいだ野うりを、一包抱えている。そして、その野うりが、あるときは知らずに、あるときは知っていて、火の上の大きなかまに投げ込まれるのである。

「ああ、なんとひどく大きな、毒のある野うりの一包だろう！」。見物人が叫ぶ。空の皿とさじを持って、食事をしようと近づいて来ていたのに、今は恐れて身を引くのである。

「ひどい。すっかり台なしだ！

あの運動には偽りの教えと誤りがある。かかわり合うのはこわい。

『だれそれ』は『これこれ』のことをしたではないか。もしそれがペンテコステだというなら、もしそれが聖霊のバプテスマだというなら、少なくとも私はご

めんだ。うちの集会にも『だれそれ』氏がいる。それに、聖霊の説教者だと言い表していた、あの人もいる。あの人が何をしたか聞いたか。

あの人が持って来てペンテコステに放り込んだ野うりのことを聞いたか。

いやだね！　かま全体が汚され、毒が入っている。本当に、かまの中には**死**があるのだ」。そして彼らは、二つのあいだで板ばさみになる（ピリピ一・二三）。かまを丸ごとひっくり返そうとするか、それとも、ほかの人々に警告しながら、かまを置いて立ち去るか、である。

ある人々は言う。「さあ、この運動と戦おう。反対するトラクトを書いて、全部ひっくり返すためにできることをしよう」。立ち去るほかの人々は、会う人ごとにこう言って警告する。

「あそこのペンテコステ運動の話を聞いたか。いやはや、『だれそれ』が、とんでもない量の野うりを一包持って来て、ペンテコステに放り込んだそうだ。一致は乱され、愛はすえてしまい、人々は心の底から気分が悪くなっている。あそこには近づくなよ」

多くの見物人に、戸惑いと混乱が降りかかる。ある人々は、とどまって批判する。ほかの人々は、とどまって手をもみしぼって泣く。

あなたと私はどうしたらよいのか。私たちは、この運動が九十九パーセントまで純粋であることを知っている。けれども、ああ、あの一包の野うりが、なんと多くの面倒をもたらしたことか！　もちろん私たちは知っている。「**神の子たちが集まったとき、悪魔も来た**」のである（ヨブ一・六）。どんな運動にも、必ずだれかが入り込んで、そしりをもたらしてきた。十二弟子の中にさえ、一人のユダがいた。また私たちは知っている。基準に達しない一人が、ほかの九十九人の中から取り上げられ、大げさに語られる。そして、迷い出たその一人を指さして論じるうちに、『九十九人の正しい人』は忘れられてしまうのである（ルカ一五・七）。

「まあ、とにかく、このままではよくないことはわかっている。たぶん、立ち去ったほうがいいだろう。残念なことだ」

けれども、ちょっと待ちなさい。

中身の詰まった袋をしっかりと腕に抱えて、こんなに急いでやって来るのは、だれか。

問「だれか。手に何を持って来たのか」

答「私は粉の袋を持った者です。この粉は神のみことばです。私は、これをかまに投げ入れに行くのです。この粉は、静かに煮えながら事の底まで沈んで、あらゆる騒ぎを鎮めます。そして、声高く叫ぶでしょう。

『聖書はなんと言っているか』（ガラテヤ四・三〇）。『測りなわ』を持ち出せ（アモス七・八）。『あらゆる人を偽り者としても、神を真実なものとすべきである』（ローマ三・四）。すべてのものを識別しなさい（第一テサロニケ五・二一）。『悪は憎み退け、善には親しみ結び』なさい（ローマ一二・九）。『悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい』（ローマ一二・二一）」

このみことばは『生きていて、力があり』（ヘブル四・一二）、かまに投げ入れられるなら、必ずきよめ、混乱の中から秩序をもたらす。

粉を、すなわち神のみことばを持って来なさい

『エリシャは「それでは粉を持って来なさい」と言って、それをかまに投げ入れ、「盛って人々に食べさせなさい」と言った。かまの中には、なんの毒物もなくなった』（第二列王四・四一）

ああ、ハレルヤ！　神のみことばはこの運動の中に注ぎ込まれている。そして、そのみことばは、遣わされた目的を果たしている（イザヤ五五・一一）。聖霊は今日、昔のエリシャのように呼びかけておられる。

『**盛って人々に食べさせなさい**』

私には、周りを取り囲む空の皿の輪が見えるようである。愛する人々の飢えた顔が見えるようである。彼らは自分で食べながら、ほかの人々にも、来て『主の恵みふかきことを味わい知れ』と呼びかけている（詩篇三四・八）。

『**盛って人々に食べさせなさい**』。ああ、そうだ。それが、この時の最も大きな使命である。人々に与えて食べさせなさい。

もしあなたが、身の回りのどこかで、あるいは運動全体の中で、野うりのように見えるものを見つけたなら、背を向けてはならない。全体をさばいて、ひとまとめに罪に定めてはならない。かえって、行って粉を持って来なさい（第二列王四・四一）。神のみことばを手に取り、聖書がなんと言っているかを調べなさい。『その企てや、しわざが、人間から出たものなら、自滅するだろう。しかし、もし神から出たものなら、あの人たちを滅ぼすことはできまい。まかり違えば、諸君は神を敵にまわすことになるかも知れない』（使徒五・三八～三九）。

粉を出しなさい。もしあなたが、この聖霊のバプテスマを**みことば**の中に見いだすなら、神を信じなさい。聖書的なしるしである異言を伴い、御霊の賜物と実も伴うバプテスマである。そして、大胆に来て、この聖書の経験を受けなさい。たとえ周りのすべての人が誤っているように見えても、基準に及ばないように見えても、そうしなさい。

「かまの中に死がある」と叫ぶ者になるのではなく、粉の袋を持ったエリシャになりなさい。あなたがたは『聖霊を受けよ』（ヨハネ二〇・二二）。神に、**あなた**をみことばの基準に達する者としていただきなさい。どんなに批判しても、しかっても、どこに問題があるかを言い立てても、それを直そうとしてさえも、決して助けにはならない。役に立つのは、みことばの粉だけである。

盛って人々に食べさせなさい。愛する働き手よ、あなたは飢えた人々に何を食べさせているのか。野うりがかまに入れられた話や出来事を、知っている限り一つ残らず、集会のたびに語り、繰り返していないか。もしそうなら、あなたには罪がある。あなた自身が、疑いと落胆の野うりをかまに入れているのである。

あなたの周りで飢えている客のために食卓を整えるとき、地下室から一番質の悪いじゃがいもや、かびの生えた保存食を持ち出してはならない。食料置き場から、かびの生えたパンを持ち出して、人々をおびえさせ、追い払ってはならない。**人々が聞きたいのは、人の最悪のことではない。神の最善のことを聞きたいのである。**あなたは人々に何を食べさせているのか。人がしたと聞いたことのある最悪のことを語っているのか。それとも、神がなさったと聞いたことのある最善のことを語っているのか。前者は、戦う者の食物としては貧しい。後者は、霊の筋肉を堅くする。そして、強く、成長し、成熟した男や女を造る。彼らはその

ような教えのもとで速やかに成長し、『全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至る』のである（エペソ四・一三）。

覚えておきなさい。過去の過ちなどを語ることで、あなたはそれを犯した人々と同じように罪を負うことになる。そして、「かまの中に死がある」と叫んで、人々をおびえさせ、追い払っているだけなのである。行って粉を持って来なさい。みことばを宣べ伝えなさい。きよい基準を高く掲げなさい。そうすれば、神はご自分のみことばの正しさを明らかにし、それに栄誉を与えてくださる。

人々の前に出せるものがほとんどないように思えることがあるか。自分の足りなさと不十分さを感じているか。覚えておきなさい。あの日、召使もそう感じて、こう言ったのである。

『どうしてこれを百人の前に供えるのですか』。しかしエリシャは言った。『人々に与えて食べさせなさい。主はこう言われる、「彼らは食べてなお余すであろう」』。『そこで彼はそれを彼らの前に供えたので、彼らは食べてなお余した。主の言葉のとおりであった』（第二列王四・四三～四四）

神のみことばは、あらゆる不正を正し、すべての暗やみを追い払い、すべての汚れを取り除き、すべての誤解を解く。それがすべての野うりを溶かしてしまうのか、取り除いてしまうのか、あるいはそれらが実際にどうなるのかは、私にははっきりとは言えない。けれども、とにかく私は知っている。粉がその中に投げ入れられた後、『**かまの中には、なんの毒物もなくなった**』のである（第二列王四・四一）。

もしあなたが疑って遠くに立ち、飢えているのなら、もうためらってはならない。あなたの粉を携えて、来て食事をしなさい。かまの中には、なんの毒物もないからである。

この運動は全世界を包み込み、そこにはあらゆる信条、あらゆる風土、あらゆる肌の色の人々が流れ込んで来た。それを考えれば、野うりは実際わりあいに少ない。そして、たとえ野うりがあっても、火の上にすえられたこの大きなかま、この聖霊の運動は、世界で最も良いものである。地上で最も良い食物を納めているのである。

主にあって喜びなさい

『あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい』（ピリピ四・四）

主のみこころは、ご自分の民が、いつでも、どこでも、どんな境遇にあっても、主を賛美し、主にあって喜ぶことである。その喜びはとても深く、尽きることのない源からわき出る。だから、それは自噴井のように、昼も夜も絶えずわき上がる。夏の暑さにも冬の寒さにも、日の照る日にも曇る日にも、変わることがない。

『あなたがたは、主にあっていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい』（ピリピ四・四）。『絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい』（第一テサロニケ五・一七～一八）。「主への賛美を絶えず口にしなさい」（詩篇三四・一）。これは、気まぐれな賛美のことではない。今日はあっても、明日は消えてしまう賛美ではない。すべてがうまくいき、海が穏やかなときには、喜びにあふれて叫ぶ。ところが、空が暗やみにおおわれ、周りの海が荒れて泡立つと、たちまちいらだち、しおれ、つぶやく。そのような賛美ではないのである。また、祝福の雨が降っているときにだけ流れる喜びでもない。周りが日照りと不毛ばかりになっても、落ち着いて、妨げられずに、まったく同じ水量で流れる喜びである。その量も質も変わらないのである。

なぜ、この流れは、境遇や、外の天候の移り変わりによって変わらないのか。それはもちろん、その源のためである。それが流れ出て来る泉のためである。**主にあって**喜びなさい。境遇を喜ぶのではない。過去や今の祝福を喜ぶのでもない。お金でも、人気でも、人数でもない。良い評判でも悪い評判でもない。**主にあって**喜びなさい。

『いちじくの木は花咲かず、ぶどうの木は実らず、オリブの木の産はむなしくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ』（ハバクク三・一七～一八）

クリスチャンが最も深い平安を見いだすのは、ここである。絶えることなく、乱されることのない喜びのこの地、神に霊感を受けた賛美の川と流れのほとり、ここである。それは『人知ではとうてい測り知ることのできない』平安である（ピリピ四・七）。海の大波のように測りがたく、底知れない平安である。平和の君ご自身から出る平安である。

境遇を超えて

主にあって喜びなさい。あなたはもう、自分の気持ちや境遇という、けちな小さい計量カップで、喜びや賛美を量り分けることはしなくなる。「そう感じない」という言葉は、あなたの語彙から消えてしまう。「これこれのことさえ起こらなければ、喜べたのに」とか、「『だれそれ』がこれこれのことを言わなければ、喜べたのに」とは、もう言わなくなる。「だれそれ」も「これこれ」も、もうあなたの喜びとは何のかかわりもなくなる。あなたの目は、境遇や周りのものより上に上げられ、主にくぎづけになったからである。主が力と麗しさのうちに、あなたの前に現れて立たれる。そのときあなたの目は主にとらえられ、あがめる思いで主から離れなくなる。ほかに喜ぶものが何もないときがある。境遇も、地上の利得も喜べない。自分にも人生にも、喜ぶ理由が何もないように思える。自分の努力も、奮闘も、計画も、周りで崩れていく。王を見て、自分のむなしさと不十分さを悟り、自分を忌みきらう（イザヤ六・五、ヨブ四二・六）。そのようなときでも、揺るがずに目を主に注いでいるなら、あなたはなお頭を上げて、**主にあって**喜ぶことができる。主の義、きよさ、あわれみに目を注いでいるなら、そうできるのである。

夜の中の喜び、困難な場所での喜び、誤解の中での喜び。最善を尽くしたのに失敗したように見えるときの喜び。そのような喜びは、『灰にかえて冠を与え、悲しみにかえて喜びの油を与え、憂いの心にかえて、さんびの衣を与え』るのである（イザヤ六一・三）。ダビデは、この隠れ場の安らかさをよく知っていた。だからこう言ったのである。『わたしはあなたの翼の陰で喜び歌う』（詩篇六三・七）。このような隠れ場からは、主の羽のあいだから外を眺めて、敵のむだな企てを笑うことができる。そして、自分のいのちが『キリストと共に神のうちに隠されている』ことを喜ぶことができる（コロサイ三・三）。

懲らしめ、困難な場所、勝利を得る者

懲らしめのむちが、あなたの上に下ったか。それなら、**主にあって**喜びなさい。主は愛する者をしかり、懲らしめられるからである（ヘブル一二・六、黙示録三・一九）。家庭の生活の中で、試練と困難な場所を通って来たか。あなたに与えられたほど重い十字架を負った肩は、主ご自身の肩のほかにはないように思えるか。それなら、主にあって喜びなさい。主はあなたを、勝ち得て余りある者となれる場所に置いてくださったのである（ローマ八・三七）。勝利を得る者の冠を得られる場所である。打ち勝つものが何もなければ、どうして勝利を得る者になれるだろうか。主が試みをお許しになって、のがれる道を備えてくださらなかったことは、一度もない（第一コリント一〇・一三）。その家庭で、その定められた場所で、何度も何度も失敗したか。ついには落胆の涙が目にあふれ、何をしてもむだだと感じたか。鋭い言葉を口にして、すぐに苦い涙を流して悔いたことがあったか。それなら、起きなさい。捕われたエルサレムの娘よ、衣のちりを振り落としなさい（イザヤ五二・二）。頭と手を上げなさい。そして、**主にあって**喜びなさい。主はあなたに、『後のものを忘れ』て進むように命じておられる。『キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の賞与を得ようと』、『目標を目ざして』進むように命じておられるのである（ピリピ三・一三～一四）。

あなたの手を主の御手にゆだね、主の血によって祈りなさい。そうすれば、主はきっと、あなたを何度も何度も、同じ試練の場所、同じ特別な境遇へと連れ戻される。あなたが勝ち誇る勝利者となって、そこから出て来るまでである。主がご自分と共に御座で治めさせようと求めておられる、まさにそのような征服者となるまでである（黙示録三・二一）。

多くの失敗の後に打ち勝ったとき、あなたは自分自身や、自分の力や武勇を喜ぶのではない。**主にあって**喜ぶのである。主がおられなければ、あなたは何一つできなかったのである。戦いが激しいほど、勝利は大きい。家庭の生活や周りの環境が厳しいほど、勝利者の冠は輝く。勝利者、勝利を得る者、鋼のよろいに身を固めた征服の戦士。そのようなことを読むと、だれでも自然に、そよ風にはためく旗を掲げた軍隊を思い浮かべる。音楽と歓声を思い浮かべる。私たちは、勝利を得る者にしてくださいと、慕い求め、主に願ってきた。ところが、主は私たちの言葉どおりに受け取られた。そして、その祈りに答えるために、私たちを、まさに今いるこの場所に、まさにこの境遇に置いてくださった。そのとき、私たちは何度、神を見ることができなかったことか。今かかわっているこの戦いこそ、あの祈りへの生きた答えにほかならないことを、何度悟れなかったことか。ここがまさに、神が私たちを置かれた場所であり、戦いである。神は私たちが、ここで打ち勝ち、主にあって喜び続けることを望んでおられるのである。

地上の損失や死別を味わってきたか。人生で最も大切にしていたものを、理解できないかたちで奪われたか。それなら、**主にあって**喜びなさい。『主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな』（ヨブ一・二一）。

「そうだ、ああ、そうだ、主はわかってくださる。
主の道はすべて最善だ。
聞け、ああ、聞け、主があなたを呼んでおられる。
『わたしのもとに来て休みなさい』
知らない先のことは
主の御手にゆだねよう。
悲しいときも、うれしいときも、
イエスはわかってくださる」

自分を誇ってはならない

神は、あなたの労苦と、あなたのぶどうの木の実を祝福してくださっているか。主はあなたを、ご自分のために魂を勝ち取る者としてくださったか。主から託された種をまいて、大きな成果と多くの人数とを与えてくださったか。それなら、主、に、あ、っ、て、喜びなさい。自分の働きを喜ぶのではない（人の働きは、火で焼かれるように焼け落ちるからである）。自分の強さを喜ぶのではない（主がおられなければ、私たちは何一つできないからである）。自分の力を喜ぶのでもない（主はご自分の栄光をほかの者にお与えにならないからである。また、人はみな、良い人でさえ、枯れていく野の草のようなものにすぎないからである）。自分の義を喜ぶのでもない（私たちの義は、ことごとく汚れた衣のようだからである）。主にあって喜びなさい。主はアルパであり、オメガである。初めであり、終わりである（黙示録二二・一三）。すべての義と力、ほまれと栄光は、主のうちにある。

あなたは、自分の集会で用いられてきたか。教えること、戒めること、魂をキリストに導くこと、病人のために祈ることに用いられてきたか。悪霊を追い出すこと、異言を解くことや預言、霊を見わけることに用いられてきたか。人々があなたを仰ぎ見て、あなたのことをよく言うか。**主にあって**喜びなさい。気をつけなさい。ただ主にあってだけ喜びなさい。すべての栄光を主に帰するように心がけなさい。ペテロがこう叫んだときのように、である。『わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜわたしたちを見つめているのか』（使徒三・一二）。

神の小羊を仰ぎなさい。この方はこう言われた。『わたしがあなたがたに話している言葉は、自分から話しているのではない。父がわたしのうちにおられて、みわざをなさっているのである』（ヨハネ一四・一〇）。多くの人が、ああ、本当に痛ましいほど多くの人が、神の前でも人の前でも落ちぶれてしまった。賜物を失い、役に立たなくなってしまった。主にあって喜ばずに、自分自身と人々の称賛を喜んだからである。『主を喜ぶことはあなたがたの力です』（ネヘミヤ八・一〇）。この喜びを取り去るなら、あなたは昔のサムソンのように、髪をそり落とされる。目をえぐられて、もう主の御顔を見ることができなくなる。そしてまもなく、青銅の足かせ（束縛）につながれ、獄屋の中でうすをひくことになる（士師記一六・二一）。ぐるぐる、ぐるぐると、同じ古いうすを回すのである。あなたが語ること、証しすることは、同じ古い話だけになる。以前にあったいやしと、かつてあなたのものだった勝利の話である。

喜びつつ求める

主から何かを受けたいのか。それなら、主にあって喜びなさい。『どうか主を求める者の心が喜ぶように』（第一歴代一六・一〇）。いやしを求めているか。症状を見てはならない。聖徒たちの祈りだけを喜ぶことさえしてはならない。目を主に注ぎなさい。主は、あなたのすべての病を、木の上でご自分の身に負われた方である。その打ち傷によって、あなたがたはいやされたのである（第一ペテロ二・二四、イザヤ五三・五）。そして、主にあって喜びなさい。主のいのちと力と喜びが、あなたの存在のあらゆる通り道を流れ、あらゆる繊維にまで入るまで喜びなさい。

聖霊のバプテスマを求めているか。それなら、主にあって喜びなさい。主はこう言われた。『すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえる』（マタイ七・八）。また主は、地上の親が子供に良い贈り物をするよりも、もっと喜んで、求めて来る者に聖霊をくださるのである（ルカ一一・一三）。

そうだ、求めている愛する人よ、賛美の門を通って入りなさい（詩篇一〇〇・四）。主にあって喜びなさい。あなたの賛美を部屋の隅々にまで満たし、周りの空気の中に響かせなさい。いと高き天に鳴り渡るまで響かせなさい。口を広くあけなさい。そうすれば、主が満たしてくださる（詩篇八一・一〇）。そして助け主が来られたなら、あなたが助け主にお任せしさえすれば、助け主は教えてくださる。夢にも思わなかったような、主にある喜び方を教えてくださるのである。

そして、この喜び、主にある喜びは、神の子供だれにでも与えられている特権である。あなたの喜びに入りなさい。主があなたに所有させたいと願っておられ

る、この御国に入りなさい。そこでは、影も、おおい隠す雲もない。太陽は決してかげらない。目をイエスに注ぎなさい。へりくだりのうちに深く掘りなさい。泉に、尽きることのない供給の源に達するまで掘りなさい。そうすれば、あなたのいのちの金の管を通って、毎日、毎時間、深く、決して変わらない喜びの流れがわき上がる。それは、逆境も試練の多い境遇も抑えつけることのできない喜びである。それは**主にある喜び**だからである。

主を賛美すること

主を賛美することは、私にとって昔から、最も心を奮い立たせ、高めてくれる主題の一つである。

ああ！　私は主を賛美するのが、また主への賛美を聞くのが、なんと好きなことか。

私は何度か、忘れることのできない光景を目にする特権にあずかった。千人の聖徒たちが立ち上がり、手を上げ、輝く顔に涙を流しながら、力と魂と声のかぎりに、心を一つにして主を賛美していたのである。やがて、とどろく賛美の大きな響きは一つに溶け合って、大水の激しく流れるような音となり、おごそかに天へと上っていった。それは一つの声として立ちのぼった。心において一つであり、いと高き神とその栄光の御子イエス・キリストをあがめることにおいて一つである、一つの民の声である。

このように主を賛美しているときにこそ、ほかのどんなときにもまさって、私の霊は最も大いなる啓示をとらえる。力ある全能の、代々の王が高く上げられておられる、その最も大いなる幻を見るのである（イザヤ六・一）。そのときには、空気そのものが電気を帯び、大いなる神の力に満ちているように思える。私は、主の戦車の車輪が山々を越えて跳んで来る音を聞く。聖徒たちが主をあがめ続けるにつれて、その音はますます近づいて来る。そしてついに、聖なる幕屋のただ中を歩まれる王の、おごそかな足音が聞こえる。それから、栄光に満ちた礼拝の雲が、なおも人々の心から立ちのぼるにつれて、私は主を見る。主はほまれを衣としてまとい、栄光の冠をかぶり、宝石をちりばめた礼拝の御座に着いておられる。それは、主の民が賛美によって主のために築いた御座である。

主は、ご自分の民の賛美の中に住まわれる（詩篇二二・三）。本当の賛美のあるところには、神がおられる。

主を賛美するというこのすばらしい秘訣には、力、勝利、祝福、いやし、励まし、奮い立たせる力が込められている。それはどれほど大きく見積もっても、大きすぎることはない。

いつでも主を賛美しなさい

「ああ！　でも、私は見せかけを着込むことなんて、どうしてもできません。そう、か、ん、じ、な、け、れ、ば、主を賛美することなんて、とてもできないんです」と、だれかが叫ぶ。

そう感じなければ、ですって！！　ああ！　それが、あなたの賛美のささげ物を量る物差しなのか。それが、あなたのクリスチャンとしての経験の土台なのか。愛する兄弟、姉妹よ、感情は頼りにするには貧しく、とても不確かな案内役である。主を賛美することにおいても、ほかのどんなクリスチャンの経験においても、そうである。聖書の中で、私の知るかぎり、感情に頼って行動した人はただ一人しかいない。あの愛すべき老イサクである。覚えているだろう。イサクは息子ヤコブの手と腕にさわって、か、ん、じ、た。そして、どれほどだまされたことか（創世記二七・二二～二三）。ああ、愛するみなさん、主を賛美しなさい。**たまたまそう感じるからではなく**、「常に」主を賛美しなさい。主への賛美が「絶えずあなたの口にある」ようにしなさい（詩篇三四・一）。**主はそれにふさわしい方だからである。**

そう感じても感じなくても、主を賛美し始めなさい。そうすれば、まもなくそう感じるようになる。実際、私が手を上げて、私の主を賛美し、あがめ始めると、必ず主の祝福が降り注ぐ。それは、渇いた畑や花に降る雨のようであり、また、私の頭に注がれて衣のすそまで流れくだる注ぎの油のようである（詩篇一三三・二）。

『息のあるすべてのものに主をほめたたえさせよ』（詩篇一五〇・六）。そうだ、ダビデによれば、主を賛美しない言い訳として、あなたにあるのはただ一つ、息が切れていることだけなのである！

「でも、姉妹、私は心の中で主を賛美しています。大声で叫んだり、感情を表に出したりは、とてもできません。私の性分でも気質でもないのです」

愛するみなさん、美しい賛美の衣を着たとき、あなたは自分の「性分」や「気質」より上に引き上げられる（生まれつきの目にはどんなに器量が悪くても、賛美を衣として着たとき、あなたは主の目に美しいのである）。そして、御霊の領域へ遠くまで飛び出していく。心の中で主を賛美することについて言えば、あなたの心はほかのだれの心とも違わない。心が栄光に満ちた賛美と礼拝でいっぱいになり、主がありありと身近な方となるときが来る。主が『ことごとく麗しい』方（雅歌五・一六）、魂にとって『万人にぬきんで』た方（雅歌五・一〇）となるのである。そのとき、あなたの心はあふれ出す。そしてあなたは、主への賛美を叫ぶ。あなたの声は、あがなわれたほかのすべての人々の声と溶け合い、御座に座しておられる小羊のもとへ舞い上がっていく（黙示録五・一三）。

最近ニューヨークにいたとき、私は、地下鉄や高架鉄道の電車や、そのほかの人目につく公共の場所に貼られた掲示に、深い感銘を受けた。それは人々に警告していた。負けるかもしれない、失敗するかもしれないと話したり、敵の強さをほめそやしたりする者がいる。そうして何らかのかたちで兵士たちの士気をくじこうとする者には、重い罰が待っている、というのである。これはクリスチャンへの警告でもあるはずだ。

クリスチャンの軍隊の士気をくじいてはならない

二人の聖徒が同じ集会に出る。たぶん、あなたの集会にもこの二人の聖徒がいるだろう（ほとんどの集会にもいるからである）。

一人は浮かない顔で入って来て、席に着き、重々しく辺りを見回す。集会が少し堅苦しかったり、祝福を必要としているように見えたり、賛美が足りなかったり、「縛られて」いたりする。すると、この愛すべき人は、悪気はまったくないのだが、重荷を負ったようになって、ため息をつき始める。そして声に出して祈ったり、こんなふうに叫んだりする。

「ああ、主よ、ここはどうしたのでしょう。ああ、なんという縛る霊、なんという暗やみの力でしょう。部屋が悪霊でいっぱいになっているようです。主よ、助けてください」などと。たちまち、すべての目とすべての思いが、悪魔へ、暗やみと縛る霊へと向けられる。そしてもちろん（波に目を留めたときのペテロのように）、悪魔に目を留めると、私たちの目はイエスから離れてしまうのである。

私たちは悪魔の大きさと強さを言いふらし、それについて思いめぐらし、恐れを見せることがある。そのとき私たちは、『有って有る者』（出エジプト三・一四）である偉大な方の力を見くびっているのである。一度も戦いに負けたことのない、力ある征服者を見くびっているのである。そのような落胆と、重荷を負った苦悶は、人にうつる。まもなく、だれもがうめき、泣き、みじめになる。そして、だれかが「イエスを見て、賛美し」始めるまで、雲は晴れないのである。

もう一人の聖徒も、同じ集会に入って来る。天からの風が一息もそよいでいないように見える集会である。この人も、集会にかかっている同じ重圧を感じる。けれども、敵を見ることも、敵を認めることも拒んで、こう言う。

「今こそ、私たちのイエスを賛美するときです。今こそ、神が立ち上がって、その敵を散らされるのを見るときです（詩篇六八・一）。私たちがただ主を賛美しさえすれば、主は大いなる力あることをしてくださると言われました。そして私たちは知っています。主への賛美に満ちた空気の中には、敵は宿ることも、とどまることもできないのです」。この聖徒は、すぐに叫び始める。

「ハレルヤ！　私たちはあなたを喜びます！　私たちはあなたの力を誇ります。ああ、私たちの王よ！　勝利とほまれが、いつもあなたの軍勢に伴います。力と主権があなたを包んでいます。あなたの栄光と臨在が、天と地に満ちています。今、それが私の心を満たしています。それがあふれて、部屋を満たしています。ああ、イエスに栄光！　愛するみなさん、主が私たちのただ中におられます。感じませんか。ああ、ここの空気は、まるで天国のようです！」

このような信仰と賛美は、人にうつる。この宮の中で燃える、神への揺るがない信頼の火は、まもなくその胸壁を越えて燃え移る。まず近くの席の人々に広がり、それから部屋の一番遠い隅にまで広がる。奮い立たせ、励まし、うなだれた頭を上げさせ、弱くなったひざを強くする（ヘブル一二・一二）。そしてたちまち、すべての目がイエスに注がれる。主への賛美が幕屋に満ち、魂は祝福され、器はあふれるほど満たされる。後の雨が屋根をたたく音が聞こえる。雨は雨どいを流れ落ち、雨水だるからあふれる。かわいた地は潤され、荒野と砂漠は、ばらのように花を咲かせる！

二人の聖徒の違いは何だったのか。一人は悪魔の力だけを認め、それだけを見た。そしてすぐに、ありさまの悲しさを嘆き始め、聞く人をみな落ち込ませた。もう一人は、イエスだけを見た。すべてを征服する、打ち負かされることのない力と輝きのうちに、確かな勝利へと進んで行かれるイエスを見たのである。

私が見た悪霊と御使の幻

少し前、主は私にすばらしい教訓を教えてくださった。賛美の威光と力を、目の前で示してくださったのである。私は夜の集会のあいだ、天幕の演壇に座っていた。大きな幕屋の席はすべて埋まり、通路にも群衆が立っていた。それだけではない。天幕の外の周り一面に、何百何百という人々が、ぎっしりと詰めかけて立っていた。集会の初めのころで、まだ罪の自覚が好奇心に取って代わってはいなかった。見物人の非常に多くがローマ・カトリックの人々で、残りの人々も、神の力の現れにまったく慣れていなかった。そのため、空気そのものが、不信仰と懐疑とあざけりと嘲笑に満ちていた。人々は、私たちが歌っているあいだは聞いていた（それとも、歌が自分たちのつぶやきをかき消してくれたからだろうか）。けれども、だれかが話そうとするとたちまち、ささやきとつぶやきが始まり、次の歌が始まるまで続くのだった。

演壇の上に目を閉じて立っていると、天幕全体が大きな黒い悪霊に囲まれているのが見えた。悪霊たちには、こうもりのような巨大な翼があった。どの悪霊も、背丈が三メートルほどあるように見えた。彼らは輪になって天幕をすっかり取り囲み、翼の先と先が触れ合うほど、ぎっしりと並んで立っていた。天幕の際にまで迫って立っていたのである。目を閉じたまま、私の心は叫び始めた。

「ああ、主よ、私はどうしたらよいのでしょう」。すると主は、まことにありありと私に語られた。平和の君を愛する人々がよく知っている、あの穏やかで、乱されることのない御声である。

「ただわたしを賛美し始めなさい。戦いはわたしがする。あなたは賛美しなさい」。そこで私は主を賛美し始めた。

「主をほめたたえよ！」。一度目にそう言ったとき、悪霊たちが震えたように見えた。

「主をほめたたえよ！」。二度目には、私は叫んだ。私の声は、ほかのどんな音よりも高く聞こえたに違いない。そして私は、悪霊がそれぞれ一歩後ろに下がり、天幕から遠ざかるのを見た。

「主をほめたたえよ！　主をほめたたえよ！！　主をほめたたえよ！！！」。「主をほめたたえよ」と言うたびに、悪霊たちはさらに一歩後ろへ下がった。そしてついに遠くに消えて、まったく見えなくなった。

「主をほめたたえよ！」。次にそう言ったとき、遠くに、御使の一団が輪になって天幕を囲んで立っているのが見えた。

「主をほめたたえよ！　主、を、ほ、め、た、た、え、よ！」。賛美するたびに、御使たちは一歩近づき、また一歩近づき、さらにもう一歩近づいた。そしてついに、天幕のすぐ際に立った。なんと背が高く、すばらしい姿の御使たちだったことか。美しい白い翼を大きく広げていたので、どの御使の翼も、右と左の隣の御使の翼と、先と先が触れ合っていた。天の父が、ご自分の御使の一軍団を遣わして、天幕を守らせてくださったのである。

天幕の中で、この大きな輝く御使の一団の幻を見たのは、ほかにだれもいなかったかもしれない。けれども、中にいた人も外にいた人も、みな神聖な臨在を感じ取ったに違いない。大きな平安が私の魂に忍び込んで来ただけでなく、会衆全体が静まり返ったからである。目を開けると、心を奪われて見つめている人々しか見えなかった。けれども、もう一度目を閉じると、人々を見るのと同じようにはっきりと、御使たちが見えた。

こうして私が次のように信じるようになったのも、不思議だろうか。すなわち、

賛美の力は敵を追い返し、祝福を引き降ろす

イエスはこう言われる。『なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう』（マルコ一一・二四）。そこで、もし私たちが神に、祈りへのある答えを与えてくださるよう願ったとしよう。それから、それを受けたと信じるとしよう。それなら、その答えについて主に感謝し始めるのは、当然の礼儀である。言いかえれば、祈りの領域を突き抜けて、賛美の領域へと舞い上がるのである。そして、神のみことばのとおりに、それはもう成ったと、前もって神に感謝するのである。

病気、悩み、誤解、落胆、憂うつと戦うときは、イエスを見始めなさい。心を尽くして主を賛美しなさい。そうすれば、主への賛美は上へと舞い上がっていく。それにつれて、大きなわしの翼に乗るように、あなたはこの地上の悲しみより上に引き上げられる（イザヤ四〇・三一）。罪人のためにほふられた小羊を、あなたがあがめ、ほめたたえるにつれて、悲しみと嘆きは見えなくなる（イザヤ三五・一〇）。そして、慰めと『言葉につくせない』喜びが、その場所を満たすのである（第一ペテロ一・八）。

肉において主を賛美する

「でも、私は肉において主を賛美したくはありません」と、だれかが言う。ああ、けれども、私たちはもう『肉によらず霊によって歩く』のである（ローマ八・四）。それに、私のこの哀れな肉が、ともかく何かの役に立つとすれば、それはイエスを賛美することだけである。肉において、主を賛美することより悪いことを何一つしないなら、あなたは決して、主の目に不快な者とはならない。助け主が宿り、思うままに働かれるとき、イエスを賛美するのはとてもたやすい。「そのかたが来られると、わたしに栄光を得させる」からである（ヨハネ一六・一三〜一四）。また、「あなたの腹の奥から、生ける水が川となって流れ出る」からである（ヨハネ七・三八）。

乳香のささげ物を携えて来なさい

あなたには、金や銀は少ししかないかもしれない。ささげることのできるこの世の財産は、少ししかないかもしれない。けれども、主への賛美を出し惜しみしたり、けちったりする言い訳は何もない。

あなたの魂の燃える祭壇の上に、主への賛美を積み上げなさい。その上に、さらに主への礼拝を積み重ねなさい。主に栄光の冠をかぶらせ、主の御名をたたえ、あがめなさい。そうするうちに、主への燃える賛美は、尊い乳香となって立ちのぼる。それは、かぐわしい香りとなって、御使の金の香炉に受け止められる。その御使は、すべての聖徒の祈りに加えて、たくさんの香（賛美）を、御座の前の金の祭壇の上で主にささげるのである（黙示録八・三）。

調子を合わせて

あなたの心の調子を合わせなさい。千本の弦を張った琴のようになり、聖霊の指にかき鳴らされて、美しい調べを奏でるまで合わせなさい。

もしあなたが、自分の琴を柳の木にかけてしまっているなら（詩篇一三七・二）、もし冷たさや自我や形式主義のさびが弦に生じているなら、また、弦が切れたり、調子が狂ったりしているなら、

行って、あなたの琴を取って来なさい！

柳から琴を下ろしなさい。長く使わなかったためにたまったさびを、きれいに取り除きなさい。聖霊に、一本一本の弦の調子を合わせていただきなさい。ふたたび、聖霊がほんのわずかに触れられるだけで、調べがわき出るようになるまで合わせていただきなさい。覚えておきなさい。どんなに高価な琴でも、ほんの少しの衝撃で調子が狂ってしまう。愛する人よ、主の御前では、くつを脱いだ足で、そっと歩みなさい（出エジプト三・五）。

今の時の四重のメッセージ（人間をとる漁師のために）

救い、聖霊のバプテスマ、イエスの間近な来臨、花嫁の準備

今は、言葉を濁したり、遠回しに言ったり、神のみことばに砂糖の衣を着せたりしているときではない。

すばやく行動するときが来た！

今は、あいまいにしたり、ぼんやりさせたり、回りくどくメッセージに近づいたりするときではない。危険に気づかずに、客間の安楽いすに揺られている人がいる。その人の戸口まで来て、こんなことを言うときではないのである。

「よいお天気ですね」

「いい天気が続いていますね」

「ええ、ええ、作物もよくできそうで」など。

「ところで実は、ちょっとお知らせしたいことがありまして。いえ、少しも驚かせるつもりはないのですが。突然おじゃまして、勝手なことを申し上げますが、どうかお許しください」など。

「けれども、ご家族にお知らせになって、助けを呼ばれたほうがよろしいかと存じます。というのも、その、ええ、申し上げにくいのですが。お宅の上の階がすっかり燃えておりまして、もう消し止めるには、ほとんど手遅れではないかと存じます」

い、い、え！！　今は、片手で警鐘を鳴らし、もう片方の手でその人の戸をたたいて、こう叫ぶときである。「**火事だ！　火事だ！！！**　か、じ、だ！！！」

実に多くの説教が語られ、実に多くの記事が書かれている。けれども、それを煮詰めて分析してみると、本当の警告と招きが足りない。罪人に自分の恐ろしい状態を示し、救い主の足もとに招くのに足りないのである。

聖霊について、聖霊をどのように受けるか、聖霊が入って来られることがなぜ必要かについて、本当の、はっきりとした説明が足りない。一人の魂を、御霊について悟り、御霊を求めるところまで導くのに足りないのである。

イエス・キリストが、ご自分を待つ教会のためにまもなく来られることについても、十分に語られていない。主が来られることをどうして私たちが知っているのか、主に会う備えをどのようにするのかを、その魂に説明するのに足りないのである。それでいて、ほかの主題は、どれほど雄弁で、教育的で、学問的であっても、この今の時の四重のメッセージの前では色あせる。取るに足りないものとなり、わきへ退くのである。

献身した魂が、単純で、はっきりとした、昔ながらの救いを、ヨハネによる福音書三章十六節のとおりに、

聖霊のバプテスマを、使徒行伝二章四節のとおりに、

私たちの主の来臨を、マタイによる福音書二十四章とテサロニケ人への第一の手紙四章十六節のとおりに、

そして、花嫁の準備を、テサロニケ人への第一の手紙五章のとおりに宣べ伝えることができるとする。そのような人は（地上に教会がとどまる最後の時刻にあって）、ただちに、メッセージを持つ男、メッセージを持つ女となる。

書いて、書いて、書きまくる。あるいは、話して、話して、話しまくる。それが実に見事で、興味深いことは認めよう。けれども、書くにしても説教するにしても、この時のための本当のメッセージを持つ男、女であることは、まったく別のことである。

神のみことばという二連発の銃を取り下ろしなさい。じっくりとねらいを定め、決めた的にまっすぐ撃ちなさい。メッセージは単純でなければならない。（あなたの言葉の届くところに来た）罪人が、イエスの愛と犠牲と尊い血について、一度も聞いたことがなかったとしよう。自分がどれほど救い主を必要としているかについても、聞いたことがなかったとしよう。それでも、あなたが語り終える前にはそれがわかるほど、単純なメッセージである。

また、はっきりとしたメッセージでなければならない。あなたの周りにいる信者が、昔のエペソの人々のように、聖霊について一度も聞いたことがなかったとしよう（使徒一九・二）。それでも、あなたの言葉の中に、本当の、はっきりとした知らせが十分にあるようにしなさい。その求める人が、次のことを知ることができるためである。私たちの主は父のもとに上って行かれ、聖霊の賜物を注いでくださった。聖霊は来られると、罪人に罪を悟らせてくださる（ヨハネ一六・八）。また、新しく生まれて血で洗われた魂と共に、御業が成し遂げられたことをあかししてくださる（ローマ八・一六）。また、使徒行伝二章四節のとおりに、信者に聖霊のバプテスマを授けられ、彼らを通して他国の言葉で語られる。そして、イエスが来られるときには、この死ぬべきからだを生かす、引き上げの力となられるのである（ローマ八・一一）。

また、聖書に基づいた、はっきりとしたメッセージでなければならない。主がご自分を待つ教会のためにまもなく来られるというメッセージを、これまで一度も聞いたことのない、何も知らない読者や聞き手がいるとする。その人も、あなたが語り終える前に、次のことを聞くことができるようにしなさい。この終わりの日に地上に臨もうとしている恐ろしい事柄が、何を意味しているのか。あなたが、イエスはまもなく来られると信じていること。そう信じる聖書の根拠。そして、時のしるしと、それにつながる神のみことばのしるし。それらが、主が**まもなく**来られるというあなたの主張を確かにするのである。

その人はまた、空中でこのイエスに会うために備えることがなぜ必要かを聞くだろう。花嫁の準備とは何を意味するのか、それがどのようにしてなされるのかも聞くだろう。

ああ、主の花嫁よ、引き上げられる群れよ、

『主の出現を心から待ち望んで』いる人々よ（第二テモテ四・八）。あなたがたは片足で立ち、すぐにも飛び立つ構えでいる。手にはラッパを持ち、去る前に、滅びゆく世に最後の警告を一度吹き鳴らそうとしている。あなたがたのメッセージは何であろうか。

あなたがたは、この最後の時に、どうでもよいことを話しながら、長々と回りくどく、ていねいに、申し訳なさそうに、本当の真理に近づこうとするのか。それとも、この今の時の四重のメッセージを、はっきりとした、明快で、明確で、簡潔な言葉で、声を上げて叫ぶのか。

救い

道を行く人が、たとえ愚かであっても、そこで迷うことのないほど（イザヤ三五・八）、救いのメッセージをはっきりと単純にしなければならない。そのためには、聖書に基づいたはっきりとした事実をいくつか、その人に説明しなければならない。

一　罪とは何か。罪に対する神の態度はどうか。

二　すべての人が罪のうちに生まれ、不義のなかに形づくられ（詩篇五一・五）、それゆえ救い主を必要としている。どのようにしてそうなったのか。

三　救いとはいったい何か。それはどのようにしてなされるのか。どうすれば救われるのか。どうすれば救われたままでいられるのか。救いはその人に何をしてくれるのか。

聖霊のバプテスマ

信者に、聖霊のバプテスマについてはっきりとした明確な理解を伝えたい。その心に、この経験への信仰と飢えを生み出したい。そのためには、この主題について『聖書はなんと言っているか』（ガラテヤ四・三〇）をはっきりと説明する必要がある。

一　聖霊とはだれか。罪人に対して、信者に対して、バプテスマを受けて備えをしている花嫁に対して、聖霊の務めとは何か。

二　聖霊のバプテスマとは何か。聖書の時代にはどのようにして受けられたのか。今日の信者は、聖霊を受けたことをどのようにして知ることができるのか。

三　聖霊を受けることの益と必要は何か。聖霊が住まいとされ、ご自分の宮とされた魂に、聖霊は何をしてくださるのか。

主の来臨

「イエスはまもなく来られる」と言って、聞く人に主に会う備えをするように告げるだけでは足りない。備えのできていない魂を納得させ、電気に打たれたように行動へと駆り立てたいなら、**はっきりと**語りなさい。次のことについて、本当の事実を告げなさい。

一　イエスが、ご自分の民のために、栄光の雲に乗って、文字どおりこの地上に帰って来られる。そう言う聖書の根拠は何か。

二　主がまもなく来られることを、どうして知っているのか。主の出現のしるしは何か。そして、そのしるしのうち、どれがすでに成就したのか。

三　主が来られるとき、また来られた後に、何が起こるのか。

花嫁の準備

周りの人々に主の来臨に備えるよう勧めるときには、みことばに与えられている、はっきりとした、間違えようのない指示を示すことも、大いに必要である。

一　主が来られるとき、主に会うために上って行くのはだれか。信仰を言い表している人はみなそうか。偽善者はどうか。あら探しをする人や陰口をきく人はどうか。御霊に満たされていると主張する人はみなそうか。**違う**のか。では、だれが行くのか。

二　主は、花嫁を備えるために、だれをこの世に遣わされたのか（ヨハネ一六・一三～一四）。そして、その準備はどのようなものか。

三　花嫁の生活、ふるまい、日々の歩み、服装、態度などは、どのようでなければならないか。

愛するみなさん、人間をとる漁師はみな、この四重のメッセージを釣り針のえさにすべきである。尊い魂をイエスのために連れ帰ろうとする狩人はみな、これを銃に込めるべきである。

時は過ぎて行く。最後の時間が、その絶好の機会と共に、すべり去って行く。まもなく私たちの救い主が現れられる。主をお迎えするときに携える魂を、主の足もとに置く金色の束を得たいなら、**はっきりと**しなさい。**熱心で**ありなさい。『**時が良くても悪くても、それを励み**』なさい（第二テモテ四・二）。あなたは自分の持ち場で、書くように召されているかもしれない。説教するように、あるいは、ただ周りの人々に飾らない証しをするように召されているかもしれない。いずれにしても、あいまいに、あちこちへと話をさまよわせてはならない。尊いイエスのために、また周りにいる滅びゆく魂のために、はっきりと明確に語りなさい。そして、この今の時の四重のメッセージにこめられた光を高く掲げなさい。（マクファーソン姉妹）

第四部　幻、預言、異言のメッセージと解き明かし

マクファーソン姉妹を通して与えられたもの

説明の注

神は預言者ヨエルを通して、こう語っておられる。

『その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、（中略）わたしはまたわが霊をしもべ、はしために注ぐ』（ヨエル二・二八～二九）。御霊の賜物が教会に回復されつつある。その中には預言の賜物があり、また異言の賜物と、異言を解く賜物もある（第一コリント一二章）。

以下のメッセージと幻が記録されたのは、まさにこれらの御霊の賜物と働きが回復された結果である。マクファーソン姉妹は、これらのメッセージを自分が書いたものだとは主張していない。メッセージが姉妹を通して語られたとき、姉妹はまったく聖霊の力の下にあったからである。舌も声も、異言で語るときと同じように御霊に支配されていた。ただ、言葉が英語で出てきただけである。その場にいた人々が、語られたとおりに一語一語書き取った。

前の雨と後の雨

（曲「あなたのいる片隅を照らせ」）

はるかな昔、ペンテコステの日に、
キリストは聖霊を授けられた。
激しい風が吹きつけ、炎の舌が現れて、
約束の前の雨が初めて降った。

（おりかえし）

目を上げて、後の雨を見よ。
穀物を実らせるため、今日も降っている。
イエスはまもなく来られ、私たちは主と共に治める。
イエスはまもなくふたたび来られる。

解き明かしについては、次のように書かれている。『このようなわけであるから、異言を語る者は、自分でそれを解くことができるように祈りなさい』（第一コリント一四・一三）。『もし異言を語る者があれば、ふたりか、多くて三人の者が、順々に語り、そして、ひとりがそれを解くべきである』（第一コリント一四・二七）。

詩、または韻を踏まない散文は、異言とその解き明かしによる預言の歌として与えられた。

『この人に四人の娘があったが、いずれも処女であって、預言をしていた』（使徒二一・九）。

『そこでエレミヤは（中略）バルクを呼んだ。バルクはエレミヤの口述にしたがって、主が彼にお告げになった言葉をことごとく巻物に書きしるした』（エレミヤ三六・四）。

イエスが死のさびしい墓からよみがえられ、
敵に打ち勝って、勝利のうちに立ち上がられたあと、
父の御座へとふたたび昇られ、
この栄光の前の雨を注がれた。
弟子たちは大いなる力と聖なる大胆さをもって出て行き、
イエス・キリストの尊い種をまいた。
病人はいやされ、足のなえた者は躍り上がり、踊り、ふたたび歩いた。
あの栄光の前の雨が降ったときに。
今、大いなる刈り入れの日が近づいている。
主は高い所から注いでおられる、

金色の穀物を実らせるペンテコステの雨を。
あなたはこの栄光の後の雨を感じたか。
　今日もなお、飢えた、血で洗われた聖徒に御霊が下られる。
愛に満ちた救い主が、あなたに呼びかけておられる。
「幼子のような素直な信仰で、ただ仰ぎ見なさい。わたしの名によって、
この栄光の後の雨を受けなさい」

ほとばしる賛美

（一九一五年八月、カナダ、オンタリオ州マウント・フォレストにて）

　わが魂よ、声高く叫び、歌え、
わが王への喜びの賛美を。
その御名は正しく、聖である。
わが魂よ、叫べ、その誉れを歌え。
今、慕いこがれる私の疲れた目は、
切なる思いで空を探す。
わが主、わが王を待ち望みつつ。
喜びにあふれた私の心は歌う。
　わが愛する方を、だれにたとえようか。
天から私の心を満たしてくださる方を。
わが魂よ、叫べ、その方の賛美を歌え。
永遠の日々を通して。

空中での出会い

　わが愛する方を、だれにたとえようか。
天から来られた方を。
　ああ、上からの力を授けられた者の喜びよ。
救い主が近づいて来られるのを、私たちは見ている。
御霊が来られると、私たちはまた、他国の言葉で語る。
あなたはこの後の雨を受けたか。

その方は見るに麗しい。
罪から私を解き放ってくださった方。
清く、しみなく、優しく、真実な方。
友よ、その方があなたを呼んでおられる。
　その方はまもなくふたたび来られる。
ご自分のものを呼び寄せ、共に治めさせてくださるために。
わが魂よ、叫べ、黙っていてはならない。
その方があなたの縄目を解かれるまで、
私がその足もとにひれ伏し、
私の喜びが満ちあふれるまで。
そしてそこで、ガラスの海のほとりで、
私はとこしえにその方と共に生きる。

祝福された天の鳩をつかわされ、
イエスの聖なる愛を表してくださった方を。

（おりかえし）
わが愛する方を、だれにたとえようか。
麗しい者の中で最も麗しい方を。
まもなく私はその栄光にあずかる。
空中での出会いのときに。
　神の御子を、だれにたとえようか。
真昼の太陽のように輝かしく、
頭を垂れて「すべてが終わった」と叫ばれ、
最後の勝利を得られた方を。

賛美と礼拝の歌

　太陽の輝きをまとうこの方はだれか。
聖なる方、イエスである。
平和の虹がその足もとにあり、
その方のうちに神性が、完全な力がある。
　聞け、幾千の足音を。
贖罪所の前に集まって来る。

地よ、目をさませ！　イエスはまもなく来る

　地よ、目をさませ！　眠っている者よ、起きよ！　見えない者の目は開かれよ。聞こえない者の耳はあけられよ。罪過と罪とによって死んでいる者よ、墓から出て来よ。宴会の広間で浮かれ騒ぐ者よ、泣き叫べ、わめけ。あなたの滅びの日が近づいているからである。見よ！　あなたの笑い声は嘆きに変わる。あなたのまばゆい恥の衣は、はぎ取られる。
　その方の力を、何にたとえようか。
光の衣をまとい、
戦いに勝利して馬を進められ、
暗闇と深い夜を追い払われる、その力を。
　あなたの腕を、何にたとえようか。
罪の脅かしに向かってあらわにされ、
ご自分の民をすべての災いから守り、
その力で彼らの魂を魅了する腕を。
彼らはそこでその方の前にひれ伏し、
その方を王とし、すべてのものの主と宣言する。
　見よ、その方は栄光の厚い雲に包まれて来られる。
奥義と輝きが、その御顔をおおう。
片足を海に、片足を地に置き、
世界をたなごころに載せて立っておられる。
　見よ、滅びが地に臨み、エホバの手が地の上に重くのしかかっている。聞け！　海はうめいている。あなたの神を忘れた悪しき国よ、まもなくあなたに臨む苦しみのために、海は産みの苦しみをしている。まことに、山々は雪をいただいた頂から涙を流して泣く。暗い空からの稲妻のようにあなたに下る滅びと、怒る神のおろいのために泣くのである。天の星は、あなたの上に注がれる怒りの鉢を前にして、顔を隠す。

国々よ、あなたは不義にまみれている。まことに、地よ、あなたは自分の不義のぶどう酒と、同胞の血に酔っている。目をさませ。泣き叫び、声をあげて嘆け。さばきの日が近づいているからである。エホバの剣があなたの頭の上にかかっている。悲惨と荒廃と死が成就する。怒る神の力強い足音が近づくと、地は恐れて揺れ動き、震える。山々は、神の怒りの声のとどろきの前に、火で溶ける。清算の時が来た。

宇宙の果てしなさのように限りない愛とあわれみのうちに、わたしはあなたのために血を流した。あなたが救われるためであった。けれども、あなたはそれを望まなかった。この日、あなたの血が流される。まことに、それは野をおおう。あなたの衣は国々の血に浸され、血にまみれる。イエスの血を退けた国々の血である。見よ、空は暗くなった。天は、神のしかめた顔の暗さにおおわれている。悪しき国よ、あなたは必ず死ぬ。逃れの道は断たれた。あなたの隠れ場はどこにあるか。あなたの造り主の怒りから、どこへ逃げるのか。生きているうちに、あなたは隠れ場を見いださない。まことに、死の中に休みを求めても、それを見いださない。

国よ、エホバの手があなたの上にある。

あなたのために傷ついた手である。

あなたの生涯のすべての日々、愛のうちに差し伸べられ、あなたの前で嘆願してきた手。

わたしがあなたの名を彫り刻もうとした手。

弱いときにはあなたをささえ、険しく暗い所では導こうとした手。

あなたを引き上げ、天の高みへと送り込もうとした手。

あなたがあざけり、退け、つばきをかけた手。

国よ、この手を、わたしは今、怒りと憤りのうちにあなたに向けた。

あなたの目は見えなくされ、見ることができない。あなたの耳はふさがれ、聞くことができない。暗闇と悲しみの夜を通して、愛の優しい声が響きわたる。あなたが耳を傾けるかもしれないので、わたしはしばらくのあいだ、その声をあなたのために残しておく。わたしはあなたの前に、開いた**門**を置いた。今、その門は静かに、確かに閉じつつある。けれども、まだあなたの前にある。血を流そうと急ぐ足が、門が永遠に閉ざされる前に、向きを変えて入るかもしれないからである。あなたの生涯のすべての日々、あなたの前に大きく開かれていたあわれみの門は、まもなく閉ざされる。その声はまもなく静まり、もう聞こえなくなる。門はまもなく閉ざされ、それからはだれも開くことができない。開かれた門口は、まもなく永遠に閉ざされ、だれもそこに入ることはできない。

愚かな国よ、あなたはこの世の快楽を選んだ。わたしはあなたに願ってきた。滅びから逃れよ、死の谷から急いで出よ、避け所の腕へ逃げよ、あなたの及びがたいほど高い岩に隠れよ、突然の死に追われる人のように逃げよ、と。けれども、あなたは聞き入れようとしなかった。あなたは金で飾った宴会の広間に座り込み、悪魔の快楽と誘惑のぶどう酒に酔って、眠り込んだ。

見よ！　天はあなたの神の不興に満ちている。まことに、今日の天は豊かな祝福の雲に満ち、求める魂の上に乳と蜜、ぶどう酒とマナを滴らせようとしている。けれども明日、その天は怒りと不興を降らせる。正しく、報復する神の、火と硫黄を降らせるのである。

目をさませ！　眠っている者よ。酔いどれよ、衣を脱ぎ捨てよ！　血まみれの剣を持つ者よ、安息の港に逃げ込め。手遅れにならないうちに、急いで門を通れ。神のあわれみの日はほとんど過ぎ去ったが、まだ手遅れではない。

夜があなたに迫っている

滅びが執拗にあなたを追う。神の怒りの稲妻があなたを打つ。あなたの労苦とわざはすべて消え去り、花のようにしおれる。あなたの造った最も偉大なものも、わたしは手の中で塵のように砕く。あなたの目が開かれるのは遅すぎる。あなたの耳がわたしの声を聞こうとするのは遅すぎる。あなたの足が細い道を探すのは遅すぎる。あなたが永遠に閉ざされた門をたたくのは遅すぎる。あなたが天にいるあなたの神の声を聞こうとするのは遅すぎる。あなたは、あなたを呼んだわたしのしもべの声に心を留めなかった。今度はわたしが、わたしを呼ぶあなたの声を聞くことを拒む。

いや、たとえあなたが鷲の速さで海岸から海岸へと飛び回り、あわれみの言葉を探しても、そこにそれを見いだすことはない。まことに、岸から岸へと熱心に探しても、あなたが今日さげすむ細い道を見いだすことはない。わたしはもうひとときだけ、あなたに猶予を与えた。**悔い改めよ！　悔い改めよ！！　悔い改めよ！！！**　ああ、あなたの神を避け、忘れた者よ。

夜の見張り人よ、喜べ

涙にくれる目の者よ、喜べ。
御霊のうちに産みの苦しみをした者よ、声高く歌え。
王にあがなわれた者よ、踊り、歌え。
あなたの悲しみの日は終わろうとしている。
あなたの永遠の喜びが明けようとしている。
夜は長かった。けれども朝が来る。
あなたの道にはいばらがまかれていた。けれども見よ！
わたしはあなたの足のために、純金の道を備えた。

諸国民と聖徒たちへの主の声

諸国民への預言

諸国民よ、主の声を聞け！　聞け！　国々よ、耳を傾けよ！　民よ、目を上げて、**主のかまを見よ**。それは主の憤りの怒りで煮え立っている。ああ、主の怒りの、煮え立ち、沸き返る大がまよ！　だれが思いめぐらしたか。だれが悟ったか。主は手でそれをささえ、その下には主の激しい怒りの火が燃えている。神を忘れた国々はみな、かまに投げ込まれなければならない。

悪しき国々よ、主の手はあなたがたに向けられている。**主の手**、愛に満ちた手、優しい手、刺し貫かれた手。その手がついにあなたがたに向けられた。あ谷は暗かった。けれども見よ！

わたしは来て、闇が決して入らない所へあなたを連れて行く。

あなたは荒布をまとい、へりくだってわたしの前にかがんだ。わたしは輝く光の衣を着せて、あなたを運び上げる。まことに、またたく間に、わたしはあなたを変える。目を上げよ。もう目を伏せてはならない。声をあげよ。岸から岸まで聞こえるようにせよ。きよい手を上げよ。見よ！　あなたの悲しみの日は終わろうとしているからである。

見よ！　王があなたを呼んでいる！　眠ってはならない。目を重くしてはならない。見よ！　王は思いがけない時に来るからである。**見よ、王は来る！**　まことに、闇が外套のように地をおおうとき、嘆きと死別と悲しみがすべての国で聞こえるとき、そのとき人の子が現れる。用意をして目をさましているあなたがたすべてを、すばやく集めて、自分のもとに引き寄せる。開かれた門は永遠に閉ざされる。破滅と滅びが地の上に降りてくる。けれどもあなたには、わたしがあなたのために備えた住まいの栄光を見せよう。

目をさましていよ！　身を慎め！　気をつけよ！　眠ってはならない！　見よ！　わたしはすぐに来る。

あ、主の手。それは今や厳しい手、強い手、報いる手、罰する手である。地よ、主の手はさばきのためにあなたの上にある。だれが主の手から隠れることができようか。だれが主の探る目から身を隠すことができようか。たとえあなたが海の深みに隠れても、主の腕はあなたに届き、さばきへと連れ戻す。あなたは王座に座り、高ぶる者のあいだに席を占めているかもしれない。山の頂に鷲と共に巣を作るかもしれない。「私は高い。だれも私を低くすることはできない」と言い、「私は安全だ。だれも私を倒すことはできない」と言うかもしれない。それでも、**主の手は力ある者を低くする**。

ああ、力ある者は倒れ、悪しき者はさばきに引き出された！　すべての者が主の憤りの杯を味わい、大がまに、主の怒りの煮え立つかまに入る。王座にある王も、畑の農夫も、席にある裁判官も、法廷の被告も入る。国々の支配者も、店にいる貧しい者も、神を忘れたすべての者が、主の憤りの大がまに入る。牛と戦う鷲も、その牛も、いっしょにかまに投げ込まれる。ひなを連れた鷲も、子を連れた雌獅子も、力ある一角獣も、すみかにいるビーバーも、熊も、主の手で投げ込まれる。逃げようとする竜は主の手に集められ、生きたまま大がまに投げ込まれる。そして、翼を広げた鷲の国よ、あなたも味わい、飲み、入らなければならない。獅子、一角獣、野で戦う二羽の鷲、ビーバー、熊、竜、三日月と星。これらすべてが飲まなければならない。すべてが砕かれ、投げ倒され、溶かされ、終わらなければならない。

そのとき、小羊の御国が、白い小羊、柔和な小羊、ほふられた小羊の御国が打ち立てられる。そのとき、獅子と小羊は共に伏す。あなたは小羊の姿で来た主を、ほふられた小羊を拒んだ。けれども**今**、あなたは獅子の姿の主を迎える。主は歯であなたを引き裂き、憤りであなたを食い尽くす。小羊として来たとき、主はあなたを征服しようとした。今は、敗北を知らないユダの獅子として、あなたを征服する。主が征服者となるとき、すべての国はひざをかがめ、主を主と認める。そのとき、獅子と小羊は平和のうちに共に伏す。

ああ、思慮のない民よ！　ああ、愚かな国々よ、なぜあなたは思いめぐらさなかったのか。目を開いて、主の酒ぶねを見よ。主は憤りをもって酒ぶねを踏む。ぶどうの木からふさが集められる。ぶどうの木のふさとは国々であり、それらは主の怒りの酒ぶねに投げ込まれる。主は世をさばくために立ち上がった。この世の君はさばかれる。

だれが主の歩みを止められようか。だれが主に手を引かせられようか。あなたがたは主の愛を退け、主の優しさをはねつけた。主はあわれみと赦しの愛であなたがたをおおうとしたが、あなたがたは望まなかった。けれども今、主は、水が海をおおうように、さばきであなたがたをおおう。ああ、主が歩みを止めると思ってはならない。主の酒ぶねはまだ満ちていない。

すべての国が入り、さばかれ、試され、砕かれる。彼らは主の裂かれた体と流された血を拒んだ。今度は彼らの体が裂かれ、彼らの血が流される。主はあなたがたの身代わりになろうとしたが、あなたがたは望まなかった。その音を聞け。地震のとどろきと、火山のあふれる響きを。血と火と立ちこめる煙を。大砲の雷鳴のように、主の声はその軍勢の前にとどろく。丘は低くされ、山々は根こそぎ覆され、隠れたものはあらわにされ、高い者は低くされ、高ぶる者は塵にまみれ、すべての国が低くされる。そのとき王が、その麗しさのうちに、征服者の足取りと軍隊の歩調で、栄光と力をまとって出て来る。

聖徒たちへ

王は王の衣をまとい、王笏を手にしている。頭には冠があり、まつりごとはその肩にある。その顔は最も麗しい。王のうちに光と真理と美がある。ああ、手綱はその手にあり、王は正しく御する。太陽はその輝きを収め、月は夜に照る必要がなくなる。王は世の光であり、王のうちには少しの暗いところもないからである。私たちは今、聖霊の宮であり、小羊がそのあかりである。主の霊の家よ、最も尊い建物よ。わたしは石切り場からわたしの石を集めた。それを切り、のみで刻んだ。けれども、ああ、小さな民よ、わたしはわたしの民を結び合わせるセメントがほしい。

わたしには砂が要る。水が要る。愛が要る。砂は、粉になるまですりつぶされ、ごく細かくふるわれた石でできている。わたしが石を砕石機に入れると、一つの石がもう一つの石を砕かなければならない。きしみ、とどろき、うめきが起こる。けれども、**あなたがたがわたしの手の中でじっとしているなら、わたしは一つの石を用いて別の石を砕き、すりつぶす**。そのときには、互いに愛し合えないかもしれない。けれども、ああ、わたしの取り扱いを忍耐せよ。わたしがあなたがたをすりつぶし、細かくふるい終えたら、あなたがたはみな細かい砂として一つになる。わたしはあなたがたを救いの水と混ぜ合わせる。わたしがその水である。ああ、なぜあなたがたは、わたしの計画を悟ることができないのか。わたしは、大きな石も、小石さえも、セメントに使うことはできない。ふるいを通る

ものだけを使う。わたしは、海辺の砂のように数えきれない民を持つ。ああ、わたしはセメントがほしい。セメントを得る。**愛によって結び固められた民を**。わたしの生ける石を結び合わせる愛のセメントを得たなら、わたしはすみやかにわたしの霊の家を組み上げる、と万軍の主は言う。石工はセメントを塗るのに槌を使わない。わたしが宮を完成させるとき、セメントを塗るのに槌の音はしない。

見よ、わたしはすぐに来る！　ああ、つぶやく者は、もうつぶやいてはならない。うめく者は、もうめいてはならない。わたしはまもなく来るからである。わたしの宮はほとんど完成している。ああ、わたしの意志に従え。わたしは自分の手で、わたしの石切り場からあなたを掘り出した。あなたを形づくり、のみで刻んだ。けれども、もしあなたがわたしの手に従わないなら、わたしはあなたを愛していても、あなたをわきに置かなければならない。そして、わたしの思いどおりにさせてくれる別の者を取らなければならない。ちょうど、わたしがユダヤ人をわきに置いて、異邦人を選んだように。時は縮まっており、わたしはすぐに来るからである。わたしは完全な家を持つ。わが愛する者よ。**自分の持っているものを堅く守り**、あなたの冠がだれにも奪われないようにせよ。数は定まっている。もしあなたが冠を下に置くなら、ほかの者がそれを取ってかぶる。もしあなたが勝利の外套をわきに置くなら、それはほかの者の上に落ちる。

ああ、どちらの道がよいか考えよ。あなたがたの道か、わたしの道か。主は近い。もうしばらく忍耐せよ。来るべき者は来る。遅くなることはない。ああ、喜べ！　あがないの日は近い！　王は来る。**まもなく**来る。**堅く守れ！　堅く守れ！　堅く守れ！**

完全を目ざして進め

預言と幻

夜であった。闇が地のおもてにあった。まことに、やみがもろもろの民をおおっていた。見よ、闇の中から光が現れ、暗がりを通して呼ぶ声がした。私は目を上げて、いと高き方、イスラエルの聖者、傷のない小羊の臨在を見た。その栄光と、その周りの輝きは、真昼の太陽の輝きにまさっていた。主が私に近づいて来られると、私は近づかれる主の輝きの前に顔を隠した。主が語られると、その声に私の魂はうちにくずおれた。力は私から去り、私は死んだ者のように主の足もとに倒れた。

主がこう言われるのを、私は聞いた。「わが子よ、恐れることはない。自分の足で立ち、わたしに従え」けれども、力が去っていたので、私は立つことができなかった。すると主は私を腕に抱かれた。見よ、私たちは地から引き上げられた。主は私を御霊のうちに運ばれ、小さな丘の前に私を立たせてくださった。そして言われた。「あなたはこの祝福の丘に心を留めたか」そして主は丘の周りを測られた。私はその寸法を見た。百キュビト（四十五メートルほど）であった。丘の斜面には賛美の花が咲き、そこから賛美の小川が流れ出ていた。

それから主はふたたび私を御霊のうちに引き上げられ、とても高い山のふもとの地に降ろされた。その頂は見えなかった。雲の上にあったからである。その高さは測ることができなかった。乳と蜜の流れる、きわめて高い山である。木々は実をたわわにつけ、その房がつるに垂れていた。それは、主がご自分の民のために建てられた主の山であった。

そのとき主は私に言われた。「なぜわたしの民は、小さな祝福の小さな山で止まってしまったのか。わたしこそ、彼らをわたしの大いなる山へと導き出すために来た。弱さから強さへ、敗北から勝利へ、にわか雨から激流へ、小川から大河へと。ああ、なぜわたしの民は満ちあふれる豊かさにまで進まなかったのか。わたしは言った。わたしが父のもとに行くので、あなたがたはわたしのするよりも大きなわざをする、と。わたしの民に語れ。叫べ。『後ろのものを捨てて、完全を目ざして進もうではないか』と。

「ああ、わが民よ、わたしは自分の力を現したいと切に願っている。わたしの不思議なわざを行おうと待っている。身をゆだねる民を待っている。まことに、それを用いて山を打つことのできる虫をさえ待っている。わたしが求めるのは知恵でも、あなたの力でもない。わたしが求めるのは、へりくだりと、身をゆだねた心である」

それから主は言われた。「あなたのかたわらを見よ。わたしの民がわたしのために築いた主の祭壇を」私は命じられたとおりに見た。見よ！　祭壇の上に明るい火が燃えていた。聖霊によって、いけにえと賛美が、かぐわしい香りとして御座へと立ちのぼっていた。けれども見よ！　見ているうちに火は低くなり、勢いが衰えて、ついにおき火だけが残った。

そのとき主は悲しげに言われた。「行って、わたしの民に語れ。『なぜあなたは、わたしの祭壇の上に自分自身をいけにえとしてささげ、賛美をかぐわしい香りとしてささげることをやめたのか。あなたの初めの愛に、心を尽くしたいけにえに、また賛美のいけにえに立ち返れ。見よ、わたしは民の間に目覚めを送る。わたしの祭壇の上に炎が燃え立つ、と主は言う。

見よ、時は縮まっている。しようとしていることを、すぐにせよ。見よ、あなたの門のそばには、あらゆる尊い実がある。急げ！　急げ！　入れ、わが子らよ。見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えて来る。わたしの満ちあふれる豊かさを求めよ。入れ。見よ！　わたしはすぐに来るからである。しかり。アーメン』」

完全な実

わが民よ、わたしに耳を傾けよ。耳を貸せ。見よ！　わたしはわが子らに語ろうとしている。わが油注がれた者たちに、自分を現そうとしている。

わが民よ、主のぶどう園を見よ。あがない主が、そのぶどう園の木々のあいだを行き巡っているのを見よ。あがない主は完全な実を探している。見よ！　ここの木は葉に満ちている。けれども、実はどこにあるのか。ここにある木は花に満ちている。けれども、実はどこにあるのか。わが民よ！　春は過ぎ、夏は終わり、秋が来た。実はどこにあるのか。ここにもう一本の木が立っていて、小さな、熟していない実をつけている。けれども、ああ！　完全な実の時が来たのである。

ああ、小さな一団よ！　小さな群れよ！　見よ、あなたはすべての中で最も小さい者とみなされてきた。けれども、あなたはふさわしい。小さなぶどう園よ、わたしはどれほど長く、あなたのただ中を行き巡ってきたことか。わたしの手には刈り込みの小刀があった。わたしはあなたを容赦しなかった。快いことばかりではなかった。けれども、小さなぶどう園よ、わたしはあなたと共に働いてきた。しかし今、わたしの言葉を聞け。実を結ぶ時が来た。わたしは長いあいだ忍耐して待ってきた。春は過ぎ去り、夏が来て、秋が迫っている。わたしはまもなく来る。育ち、刈り込まれ、熟した実を求めて。

わたしはあなたの忍耐を見た。それを、あなたのための、わたしの覚えの書に書きしるした。

わたしはあなたの涙を見た。それを、わたしの覚えの封じた器にたくわえた。

わたしはあなたの祈りを聞いた。わたしは立ち上がって、あなたに答えたではないか。見よ、雲を、祝福の輝く雲を。わたしはそれをあなたがたの頭上に巡らせた。あなたがたが育つように、御霊の清い水であなたがたを潤している。（ああ、主の御顔に浮かぶ悲しみよ！　ああ、主の御心の嘆きよ！　これほど多くの木、これほど多くのぶどう園があるのに、熟した実がない）。

「ああ、小さな民よ、ぶどう園のこの片隅を、完全な実と共に、わたしのものとしてよいか。わたしはほかの所にいるわたしの民にも呼びかけ、すべてを祭壇にささげるように願ってきた。わたしは何年も何年も、彼らに嘆願してきた。わたしは待った。けれども彼らは、日ごとにへりくだってわたしを求めることを忘れてしまった。わたしは、完全な実をつけた完全な木を待っている。小さな民よ、あなたがたもわたしの期待を裏切るのか。ああ、あなたがたは最後まで行き通すか」

ああ、わが民よ、もはや肉のものを求めてはならない。地上のものを求めてはならない。御霊のものを求めよ。多くの気苦労に煩わされてはならない。ああ、心を一つにし、一つ所に集まり、すべての物を共有し、だれ一人その持ち物を自分のものだと言わない民がいたなら！　わたしはどれほど、わたしの栄光を現すことができるだろう。まことに、彼らは祈りによって天と地を動かすであろう。

あなたがたは、わたしの計画を見抜くことができないのか。わたしの働きを悟ることができないのか。見よ、わたしはあなたがたに奥義を告げよう。

わたしは国々から国々を召し出した。

わたしは民から民を分けた。

わたしは教会から教会を召し出した。

わたしは、なまぬるい者の中から、聖化された者を召し出した。

わたしは、聖化された者の中から、バプテスマを受けた一団を召し出した。

けれども今、見よ、わたしは新しいわざを行う。

わたしは、バプテスマを受けた民の中から、バプテスマを受けた民を召し出そうとしている。わたしの完全の基準に至るまで、最後まで行き通す民を。

すべての者は、一つの完全なからだとして、最後まで行き通すことも、みことばに達することもできなかった。けれども、わたしは民を持つ。わたしの最上の完全のほかには何にも満足しない民を。まどろむことも眠ることもなく、残されたこのひと時をわたしと共に目をさましている民を。この民によって、わたしは力あるしるしと奇跡を現す。人々は彼らの前で驚き、こう言う。

「この人たちは、いったいどういう人たちなのだろう」

彼らは、世には愚かとしか見えない。けれども、彼らを通してエホバの知恵が現される。

彼らは自分自身では弱い。けれども、わたしにあって強くなり、事を行う。

彼らは、自分自身と自分の言葉においては口がきけず、語るに遅く、言葉が少ない。けれども、御霊と力の証明のうちに、わたしの言葉を語り出す。

ああ、小さな、召し出された民よ、わたしは今夜ここにいる。わたしはあなたを民の中から、地上の団体から召し出して、わたしに仕えさせたではないか。それは迫害を伴ったではないか。けれども、あなたはこれまで、その代価を払うことをいとわなかった。見よ、わたしの心はあなたを喜んでいる。けれども、あなたは最後まで行き通すか。見よ、もしあなたがこの道をわたしと共に歩むなら、わたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、あなたに示そう。けれども、わたしは**必ず**あなたに勝利を得させる。わたしが勝利を得たように。わたしが父の御座に座っているように、あなたはわたしと共にわたしの座に座る。ああ、へりくだっていよ！　わたしの足もとに低くとどまれ！　肉の腕に頼ってはならない。たとえ良い肉であっても。わたしを仰ぎ見よ。愛と一致のきずなのうちに立ち、すべてを心から明け渡せ。そうすれば、あとはわたしがする。

見よ、大いなる祝福が、勝利を得る者たちのために用意されている。**勝利を得る者たち**のために。見よ、わたしはすぐに来て、わたしの完全な実と、完全に勝利を得た者たちを連れて行く。

イエスはまもなく来る　備えよ

幻と預言

天から、ラッパのような大きな声がして、こう叫んだ。**イエスはまもなく来る。主に会う備えをせよ。**

私の魂は、主の御顔を見たいと慕い求めた。私の心は主の血によってきよめられ、御霊が幕屋に入っておられた。私は叫んだ。

「はい、主よ」そして、主に会いに走って行った。

「備えよ！　備えよ！」と、大きな声が何度も何度も叫んだ。「備えよ！　備えよ！」その声は、なおも丘を越え、谷を通ってこだました。「備えよ！」

「ああ！　主よ、主よ！」と私は叫んだ。「なぜ私に『備えよ』と言われるのですか。私はあなたのためにすべてを捨てたではありませんか。あなたは私をあなたの血で洗ってくださったではありませんか。何について備えればよいのですか」

主は開いた聖書を私の顔の前にかざされた。それは鏡のように輝いていた。それから主は私に私自身を見せられた。黒く日焼けして、見苦しい私を。

「主よ」と私は泣いて言った。「あなたの思いどおりになさってください。どうか、あなたが私を備えてください」

それから私は目を上げて、ひとりの人を見た。その方は背が高く、太陽のように輝く光の衣をまとっておられた。鋭い剣がその手にきらめいていた。私はその輝きを見、その身にきらめく武具を見た。その方は進み出られ、私に近づかれた。私の上にそびえ立たれた。その麗しさはあまりにまばゆく、私の目は見つめることができなかった。そのとき私は、自分の不完全さ、汚点、失敗を見た。私はそのまなざしの下でしおれ、その御前で恥じ入った。そして、備えができていると誇っていた自分の愚かな盲目さを思って泣いた。

だれが、その輝きのうちに住んで、汚点を見せずにいられようか。

「主よ」と私は叫んだ。「私は失敗した者です。私は真っ黒です。私は滅びるばかりです」すると主は言われた。「わたしの思いどおりにさせるか。どれほど犠牲を払おうとも、わたしにあなたを備えさせるか」

「主よ」と私は叫んだ。「私はまったくふさわしくない者です。けれども、あなたの思いどおりになさってください」

私は幻の中で見た。主が持っておられた開いた聖書は、きらめく両刃の剣に変わっていた。それから主はその剣を上げられ、私の唇に当てられた。それは燃える炭火のように焼けた。私の唇も舌も、すっかり焼き尽くされた。それから主は剣を上げられ、私の目に当てられた。私は世に対して、また全人類の欠点と失敗に対して盲目になった。それから主の剣は御手の中で向きを変えて輝き、主は私の耳を切り落とされた。それで私は地上のどんな声も聞くことができなくなり、ただ主の声だけを聞いた。それは大水の流れの響きのように甘やかであった。ふ

たたび主の剣は日の光の中をひらめき、今度は私の首が切り落とされた。もはや私が自分自身で考えることのないためであった。それから主は私の腕と足を切り離された。もはや私が自分の肉において動くことのないためであった。

私は心の中で叫んだ。「ああ！　主よ！　これ以上あなたの思いどおりになさったら、私には何も残らなくなります」私の魂はうちにくずおれた。私は、主の足もとに死んだ者のように横たわり、粉々に砕かれ、滅びるばかりになった自分を、遠くから見るように見た。私はまったく滅びてしまったように思われた。そして私は、主の取り扱いにつぶやいた。けれども主は語られ、こう言われた。

「あなたはもはや肉にあって歩まず、御霊にあって歩む。死からいのちが生まれる。この朽ちるものは朽ちないものを着る。この死ぬものは死なないものを着る。そのとき、『死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。墓よ、おまえの勝利は、どこにあるのか』という言葉が成就する。肉であるものは死ななければならない。御霊だけが霊のいのちを受け継ぐことができる」

それから私が見ると、見よ！　新しく造られたものがいた。美しい女のようであった。私は、その女が西から来て、東へ向かって歩いて来るのを見た。女は近づいて来た。私はその白い衣を見た。日の光を浴びた雪のようにまばゆかった。その身のこなしは優雅で、優しかった。その声はまろやかで、甘い香りに満ちていた。私はその衣の香りをかいだ。谷間に咲く甘いゆりのよう、シャロンのばらのようであった。その目は偽りを見ず、はとの目のように優しかった。その唇は清く、蜜ばちの巣のように甘露をしたたらせた。愚かさも批判も、その甘さを損なわなかった。肉の言葉は入らず、その耳はただ主の声のためだけに保たれていた。その愛する方、その花婿、その王の声のために。

女が近づいて来たとき、私は驚いてその顔を見つめた。すると、それは私自身であった。私は、主が私に語られる声を聞いた。「これはわたしの愛する者である。あなたは、わたしの完全の基準に、なんと遠く及ばなかったことか」

聖徒たちへ

ああ、目をさませ！　目をさませ！　目をさませ！！　眠っている者よ。イエスはまもなく来る。備えよ！　備えよ！！　主の花嫁は、しみも、しわも、汚点も、そのたぐいのものもないものでなければならない。その目はただ主だけを見なければならない。もしあなたが隣人のことを悪く言うなら、あなたの言葉はあなたを罪に定める。もしあなたが主の声のほかに耳を傾けるなら、あなたの耳はあなたに不利な証言をする。わたしは分かたれた民を持つ、と主は言う。わたしの前を、聖さのうちに、わたしの完全の麗しさのうちに歩む民を。見よ！　わたしはあなたの前に立っている。わたしの剣はわたしの手にある。わたしの思いどおりにさせるか。霊の人となることは、生まれながらのいのちに死ぬことである。古き人をその情欲と共に脱ぎ捨て、神から与えられる天の建物を上に着ることである。

灰にかえて麗しさを、
つぶやきにかえて賛美を、
陰口にかえて愛を、
苦々しさにかえて甘さを、
敗北にかえて勝利を、
陰にかえて輝きを。
ああ、愛する者よ、わたしの思いどおりにさせるか。
栄光のうちに丘を越え、
輝く山々を越えて、
喜ばしい、甘い知らせを聞け。
主は力と勢いをもって来られる。
旅人たちよ、頭を上げよ。
主は近づいて来られる。
旅人たちよ、もう泣くことはない。
主はもうそこまで来ておられる。
アーメン。

主のふるい

預言（フロリダ州デュラントにて）

見よ、二つの手、強い手、主の手。その手にはふるいがある。主はその民をふるい、ふるい、ふるっている。

かつて彼らは小さく、塵のようであった。そのころ、神は彼らを用いることができた。けれども、彼らが小さく無力であることをやめ、分かれた塊となって寄り集まったとき、彼らは大きく、硬く、かたくなになった。主は彼らのために泣いた。主はもはや、彼らをこね、形づくり、造り上げることができなかった。

不信仰の塊があり、高ぶりの塊があった。ああ、あの懐疑の塊。あの自我と疑いと恐れの塊。あの形式と儀式の塊。神はそれらをからだに入れることができなかった。それらをあの栄光ある花嫁のからだに形づくることができなかった。それらはもはや、神の手の中で従順でも素直でもなかったからである。

かつて彼らは小さかった。けれども今、塊はさらに硬く、大きく、広くなり、ついに彼らは目も見えず、耳も聞こえず、口もきけず、悟りの鈍い者となった。それから、組織の塊と、カトリック主義の塊ができた。ああ、その塊のこわばりと硬さよ。「わたしは彼らを砕かなければならない。わたしのみことばの槌で彼らを打たなければならない。わたしは、砕かれ、ふるわれた民、わたしの思いどおりにできる民を持たなければならない。わたしは、自分のために、わたしにつける民を分かたなければならない」

大きなふるい

主の手を見よ。主は砕かれた塊を、手に持った大きなふるいに入れた。そのふるいは目が粗かった。主がふるい、分ける働きを始めると、小さな塊や塵の多くはふるいを通り抜けた。多くの心は、主の取り扱いのもとで砕かれ、悔いた。けれども、疑いと恐れと不信仰の大きな塊を、主は投げ捨てなければならなかった。主はその民を愛していた。けれども、砕かれようとしない者は、わきへ投げなければならなかった。

その初めのころ、多くの者がふるいを通った。小さな塊の多くは目の粗いふるいを通り抜けた。けれども、それらはまだ硬く、塊のままであった。

二つ目のふるい

そこで主は、もっと目の細かいふるいを作り、最初のふるいを通ったその民をそれに入れた。主は彼らを揺さぶり、試み、分け、ふるった。多くの者は逆らって、通ることを拒んだ。それで主は彼らをわきに置かなければならなかった。けれども、ある者はこの二つ目のふるいを通った。彼らは主の目に尊かった。

ふるいを通った者たちは、世を通り抜けなければならなかった。互いに手を放さなければならなかった。自分自身と、人々の意見から手を放さなければならなかった。ふるいを通った者は、あらゆる愚かさと高ぶりを手放さなければならなかった。

ああ、そのふるい分け、その分離よ！　主は彼らを手に集めた。まだ小さな塊がいくつかあった。彼らはなお主の民であった。けれども、信じて砕かれようとしない者は、わきへ投げなければならなかった。

細かいふるい

ふるいを通った者たちも、まだ十分に細かくふるわれておらず、形づくられるほど小さくもなかった。それで主は、自分のためにさらに細かいふるいを作った。

だれが主の計画を悟ることができようか。

主はその細かいふるいに自分の民を入れた。そして、主に思いどおりにさせる民を、今もふるい、試みている。すべての疑いと恐れは取り除かれなければならない。すべての利己心、古い性質、地上の名誉や人気や評価を求めるすべての思いは、取り去られなければならない。すべての硬さ、こわばり、かたくなさは取り去られなければならない。すべての肉は、良い肉であっても、後に残されなければならない。すべての利己的な野心、すべてのうわさ話、すべての地上的なむだ話と愚かな会話、すべての偽りと浅さ、地上の指導者になりたいという思い。これらはみな、集められて投げ捨てられなければならない。

けれども、主はその民をふたたび試みる。二度目、三度目とふるう。四度目、五度目にも、主はその民をふるう。ああ！　主は、最も細かいふるいを通り、最も厳しい試みに合格する民を持つ。心は砕かれ、霊は柔らかく素直になり、主の意志にすべてをゆだねきった民である。主は彼らを集める。一粒も失われることはない。主はその民を、東から西から、北から南から集める。地の果てから彼らを集め入れる。主は彼らを細かい塵のように手のひらに載せ、こねて形づくる。

かつて塊は大きかった。大きく堂々としていたが、主はそれを用いることができなかった。主の民は、神につける民、ふるわれ、試みられた民であり、主の栄光の足の塵のような者である。その塵から、主は一つのからだを形づくる。初めにアダムを形づくったように、このからだを形づくる。彼らは主の手の中で素直になり、主の取り扱いのもとでしなやかになる。主は彼らをからだの肢体とし、愛のひもで結び合わせる。

からだを形づくる

頭は首につながり、首は肩につながる。腕はそれぞれのくぼみにはまる。腕はこわばらず、油を注がれて、御霊によって柔らかく、しなやかになる。胸は信仰と愛から成り、満ちている。からだのすべての部分が、それぞれの場所にある。背骨は組み合わされ、腰は形づくられて、そのくぼみに収まる。素直な塵から強い手足が形づくられる。大理石の柱のような脚で、動かされることがない。へりくだった肢体から、主は足を形づくる。足はへりくだっていて、ほかの肢体を運ぶ。けれども、足がなければからだは歩くことができない。

からだにいのちを与える

それから主は、このからだに息を吹きかける。身をゆだね、殺された主の民に。主はその鼻にいのちの息を吹き入れ、からだは生きた者となる。自分にではなく、御霊に治められる者となる。彼らは肉によらず、主の霊によって歩む。強くなって事を行う。頭からは、聖別と神への賛美のしるしである長い髪が生える。一本も欠けることはない。

からだを迎えに来る

まもなく主は来る！　ああ、まもなく来る、この栄光の王は。まもなく主は雲を分け、合図の声と共に下って来る。ふるわれ、へりくだり、試みられた小さな民の手を取り、彼らを自分の足で立たせる。肢体は多いがからだは一つである。主は彼らを引き上げ、自分と共に御座で治めさせる。

ああ、わが民よ、ふるいを通れるほど小さくなれ。ああ、妨げとなるものをすべて手放して、通り抜けよ。**通り抜けよ**。

ひと時、わたしと共に目をさましていてくれないか

預言の歌

夜は暗い。日はとうに顔を隠した。
主は祈るために園に出て来られる。
選ばれた者たちを連れ出され、共に祈らせようとされる。
ああ、夜は暗い。彼らの目は眠りで重くなっている。
「ひと時、わたしと共に目をさましていてくれないか。
眠らずに、試みる者の力に逆らってくれないか。
このひと時、わたしと共に目をさましていてくれないか。
目をさましている時は、まもなくすべて終わる」
ああ、あなたのために祈っておられる主の声を聞け。
罪に染まった世のために祈っておられる。
失われた者のために産みの苦しみをされる、そのうめきと嘆きを聞け。
泣き、嘆き、むせび泣かれる主の声を、今聞け。
月の光の中、その額には血のしずくのような汗が浮かんでいる。
「ひと時、わたしと共に目をさましていてくれないか」
世は忘れてしまった。見よ、人々はまどろみ、ぐっすり眠っている。
それでも主は祈られる。なおも祈られ、神に叫ばれる。
見よ、闇は深まり、杯は主の御手にある。
ああ、主はただひとりでそれを飲み干されなければならないのか。重荷を分け合い、担う者はいないのか。
見よ、主はあなたの上にかがみ込まれ、あなたの耳に語りかけておられる。
聞こえないのか。ああ、目をさまして祈れ。

これは道だ、これに歩め

ああ、誘惑に陥らないように、目をさまして祈れ。
「しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」
ああ、その叫びを聞け。主は世のために祈っておられる。
夜が明けるまで、目をさまして祈らないのか。
イエスはふたたび来られて言われる。「今は眠って休むがよい。
あなたがたが受けるはずであった祝福は、逃げ去った。
わたしは、共に立つ者もなく、ひとりで祈った。
眠るがよい、眠って休むがよい」
ああ、あなたも主の期待を裏切るのか。あなたも深い眠りに落ちるのか。
それとも、目をさまして祈るか。まもなく夜が明ける。主はまもなく来られる。
愛するみなさん、主に従う者たちが、敵の着せようとする眠りに逆らって祈るべき時があるとすれば、それは今である。園で眠っていた弟子たちと、ともしびを持ったまま眠っていたおとめたちは、今日の教会のなんという型であろう。
昔、園で祈られたその同じイエスが、今日、父の御座で絶えずとりなしをしておられる。弟子たちに、共に目をさまし、誘惑に陥らないように祈るよう願われた同じイエスが、今もとりなし手を呼んでおられる。御霊がその人々を通して、『言葉にあらわせない切なるうめき』をもって祈ることのおできになる、とりなし手を（ローマ八・二六）。
主が現れられるまで、今はほんのひと時しかない。忠実でいよう。目をさまして祈ろう。

預言

これは道だ、これに歩め。
敗北から勝利へ、
泥沼から清さへ、
闇から光へ、
罪から義へ、
谷から広々とした平原へ、
死からいのちへ、まことに、永遠のいのちへ。
これは道だ、これに歩め。
わたしは道である。わたしに従え。まことに、わたしの足跡に従え。

目を上げよ。見よ！
雲と大いなる栄光とを伴って来る者はだれか。
馬に乗って来る者はだれか。
その顔は、真昼に照り輝く太陽のように輝いている。
その衣は雪のように白く、まばゆい。
その声は大水のとどろきのよう、
その言葉は甘く、恵み深く、優しい。
これはだれか。
その足は磨かれたしんちゅうのように輝き、
その姿は燃える炉の中の金のようである。
見よ、その方が来る！
無数の聖徒たちを率いて来る。
見よ、聖徒たちが戦車に乗って来る。
その馬のひづめの音を聞け。
その槍は日の光にきらめき、
その剣は腰に揺れている。
彼らはどこまでも進んで来る。
見よ、天は彼らの栄光に満ちている。

見よ、王が万々の軍勢を率いて来る。
その栄光はまばゆい。王は燃える光のようである。
だれがその前に立つことができようか。
その麗しさを、だれが告げ知らせることができようか。
その麗しさを、だれが言い表すことができようか。

その栄光で天を満たすあなたは、どなたか。
その光が暁のように輝き出るあなたは、どなたか。
わたしは最初の者であり、最後の者である。
わたしは初めであり、終わりである。
わたしはアルパであり、オメガである。
わたしは死んだことはあるが、見よ、
とこしえに生きている者である。
わたしは、敗北を通り抜けて勝利に入った者である。
わたしは、谷と死の陰を通り抜けて、とこしえの広い平原に入った者である。
わたしは、闇をくぐり抜けて光に入った者である。
わたしは、死をのみ尽くして、いのちを、まことに永遠のいのちをもたらした者である。
わたしは、そしりとののしりに満ちたこの世の泥沼を通り抜け、白くされて、とこしえに義のうちに立つ者である。

まことに、わたしがあるように、あなたがたもそうでなければならない。

わたしのいる所に、あなたがたもとこしえにいるためである。
ああ、見よ、わたしこそ道である。わたしに従え。
わたしは道である。わたしに従え。
わたしは地から天へ至る道である。
わたしは道、細い道である。
死からいのちへ、敗北から勝利へと至る道である。

見よ、王がその栄光のうちに馬で進み出る！
天と地の王よ、あなたはだれのために来るのか。
わたしは、この道を歩んだ者たちのために来る。

わたしに従い、死に至るまで忠実であった者たち、
そして、とこしえに生きる者たちのために。
　荒野から上って来る者はだれか。
その愛する者の腕に寄りかかっている。
その顔には涙がある。
足を痛め、疲れ果てている。
その背は重荷にかがんでいる。
その衣は裂け、泥にまみれている。
けれども主は、自分の義の白い衣を彼女に与える。
彼女は山々を登り、谷を通り過ぎる。
広く延びた野を横切り、平原を旅して行く。
行く手にはトンネルがある。夜の陰に浸された深い谷である。
道は暗く、獅子がほえても、彼女はひるまない。
主は彼女をつまずかせず、石に足を打ちつけさせない。
主は彼女に闇を通り抜けさせ、光の中へ連れ出す。
　主は彼女を、二つの国の境へ連れて行く。
そこで彼女は調べられなければならない。そこで衣をはがれなければならない。
彼女は、闇の国から光の国へ、どんな伝言も持ち込んではならない。あなたがたの国の人々は、敵の国から入ろうとする者をみな国境で止めて調べる。そのように、彼女も調べられ、衣をはがれる。
（彼女には新しい衣が与えられる。主の義と喜びの衣である。）
けれども、主が言ったとおり、彼女は通り抜ける。
　わたしは道である。わたしのうちを歩み、全き者となれ。
死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。
通り抜けよ。門を通り抜けよ。入れ。
もうしばらく忠実であれ。闇はほとんど過ぎ去った。
あなたがはずかしめを受ける日は、まもなく終わる。
あなたはもう足を痛めることも、疲れることもない。わたしはあなたに休みを与えるために来たからである。
わたしが弟子たちの足を洗ったように、あなたの足を洗おう。
そして、すべての顔から涙をすっかりぬぐい取る。
もはや痛みもない。
見よ、**まもなく**雲は分かれ、あなたの目は王の来臨を見る、と主は言う。
見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えて来る。わたしはまどろむこともなく、眠ることもない。
急げ、主に愛される者よ。主はあなたの重荷を取り除き、あなたをとこしえに光として輝かせる。まことに、義の太陽として。
　これは道だ、これに歩め。
わたしが勝利を得たように、あなたがたも勝利を得なければならない。
わたしが死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで忠実であったように、
あなたがたも、古い性質を捨て去るに至るまで、そうでなければならない。そうすれば、あなたがたに永遠のいのちを与えよう。
わたしが誤解され、あざけられたように、
わたしが会堂から追い出されたように、
わたしが見せ物として上げられ、しかも汚れがなかったように、あなたがたもそうでなければならない。
まさに、**わたしが道である**からこそ、わたしに従え。
　なえた手を上げ、弱くなっているひざを強くせよ。
もうしばらく、ほんのしばらく耐え忍べ。見よ、わたしはすぐに来るからである。
ああ、あなたがたには見えないのか。
もし目を開くなら、天がわたしの戦車と騎兵で満ちているのが見えるだろう。
もし耳が開かれていたなら、わたしの軍勢の喜びと勝利の叫びが聞こえるだろう。
見よ、わたしはまもなく来る。勝利を得たわたしの軍勢がわたしと共にいる。彼らはわたしの選民のために報復する。
「ああ」と主なる神エホバは言う。「わたしはわたしの選民のために報復する」
まもなく、わたしの速やかな稲妻が出て行く。諸国民の間に、わたしの剣の稲妻

が。
けれども、あなたはわたしに従ったので、わたしと共に天に座して笑う。
　わたしはわたしの酒ぶねを踏む。それは、わたしとあなたを拒んだ者たちの血で満ちる。
わたしの小さい者たちよ、恐れてはならない。わたしが通り抜けたように、**通り抜けよ**。
自分のいのちを救おうとする者は、それを失う。自分を救ってはならない。
見よ、人々はわたしに言ったように、あなたにも「自分を救え」と言う。
けれども、通り抜けよ。通り抜けよ。
復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する。
見よ、わたしは紅海を押しのけた。わたしは道を開いた。
昔、わたしが紅海を押し返し、パロの軍勢をおぼれさせたように、
あなたの目の前から、あなたの敵を滅ぼし尽くす。
　わたしが道である。
わたしは紅海の中にまっすぐな道を造った。
まことに、わたしの血の紅海の中に、道を造った。
わが民よ、渡れ。
わたしはあなたのために死のとげを取り除いた。あなたには勝利がある。
あなたがわたしに従いさえすれば、あなたを悩ます軍勢をわたしが取り除く。

主のぶどう園

異言と解き明かし

目を上げて、東を、西を、北を、南を見よ。主のぶどう園を見よ。
　そのぶどう園は主の前にある。主はそのただ中を行き巡る。ああ、どれほど長く、ああ、どれほど長く、ああ、どれほど長く、主は完全な実を待ってきたことか。
多くのつらいことが臨んだのは、あなたがわたしに従わなかったからである。
わたしは道を開いた。わたしの足跡に従え。
城壁の町々を倒したわたし、
そのわたしこそが、反対の城壁を倒す。
獅子の口をふさいだわたし、
青銅の鎖を断ち切ったわたし、
軍勢を勝利に導いたわたしが。
ああ、わたしに従え！
栄光の中まで、わたしに従え。
園を通って、わたしに従え。
さばきを通って、わたしに従え。
カルバリまで、わたしに従え。
墓を通って、わたしに従え。
復活を通って、わたしに従え。
そうすれば、あなたは引き上げを通ってわたしに従う。
まことに、あなたは**とこしえに**わたしに従う。
これは道だ、これに歩め。
アーメン。
　ああ、主のぶどう園よ、エホバがあなたのただ中にいる。主はあなたを忘れたことがない。あなたをなおざりにしたこともない。主はその愛をもって、あなたの周りに石垣を築いた。四方にあなたの垣を巡らし、世からあなたを守った。主は自らの手であなたの土を掘り起こし、耕した。自らの力であなたの種をまき、あなたの若い苗を世話した。主は祝福の雨と、主の御前から来る慰めの時とで、あなたを潤した。

ああ、主のぶどう園よ、あなたが初めて前の雨を受けたとき、主はあなたの芽生えをどれほど熱心に見守ったことか！　主はあなたの周りを掘った。あなたの上に太陽を照らした。そして今、見よ、主はあなたに後の雨を送っている。あなたの実が満ち足りた完全に、まことに主の完全にまで至るためである。

わたしは風を、まことに北風と南風を、あなたに吹きつけさせた。あなたが堅く立ち、その根がわたしの中に深く下ろされるためであった。わたしは自分のいのちの樹液を、あなたの脈に流れ巡らせた。あなたの柔らかい葉は出そろい、育った。そして今、見よ、実の熟す時が来た。

ぶどう園の主は、熟した尊い実を求めて、その園に出て来た。主は完全な実を求めている。主は東を、西を、北を、南を向く。どこに、ああ、どこに完全な実があるのか。

ここの実は損なわれ、傷がついている。主は通り過ぎる。主が求めるのは傷のある実ではない。自分のもとに携えて行く完全な実である。

あちらの実は小さく、育っていない。完全な実はどこにあるのか。主が自分のために求めるのは、小さく育っていない実ではない。大きさも丈も完全な実である。

そこでは実が育っている。けれども、なんと遅いことか。主は立って、待ち、待ち続け、完全な実を探している。

嵐と白い小羊

異言と解き明かし

雲は暗い。空には、真っ黒な雲の逆巻く嵐が満ちている。天から大きな稲妻がひらめき、落ちる。稲妻は、全能の神の怒りと激しい憤りの目に見えるしるしとしてひらめく。聞け！　雷が丘から丘へととどろき、こだましている。

下には緑の牧場があり、その囲いの中に、白い小羊の美しい群れがいる。小羊たちは、決して恐れもおびえも知らない。彼らのただ中に、一方の手に杖を、もう一方の手に油のつぼを持つ方がいるからである。

主はそのぶどう園に叫ぶ。

ああ、わたしのぶどう園よ、いつまで、いつまで待てば、わたしは完全な実を受けられるのか。なぜあなたはそれほど手間取り、自分の完全をわたしに差し控えるのか。わたしがあなたに手を差し控えたことがあるか。わたしは初めの月に、前の雨と後の雨をあなたに送ったではないか。昼は太陽にあなたを照らさせ、夜は月にあなたを見守らせたではないか。そして今、見よ、農夫が自分の実を待っている。

わざわいだ、実を結ばない不毛の木々よ！　あなたは必ず、生きた木々の園から断ち切られる。あなたのいた場所も、もはやあなたを知らない。あなたは木々の中でのろわれている。わたしに実を結ばなかったからである。

また、傷のある実の木々よ、育たない実の木々よ、わたしの目はあなたを見た。わたしの目はあなたを探り出した。

けれども、ああ！　育ちつつある実の木よ、あなたは完全に至る日に近づいている。あなたは必ず、若木のように、生ける水のほとりに植えられた木のように、わたしの前に育つ。あなたはわたしを慕い、わたしはあなたを慕う。わたしは、あなたが完全に至る日に、あなたをわたしのもとに集める。アーメン。

小羊のうちのあるものは囲いを出て行く。獅子が、おおかみが、闇の軍勢が、それに襲いかかる。それが住んでいた場所も、もはやそれを知らない。ああ、主のみこころと、守る恵みの囲いの中にとどまれ。救う者が来るまで、もう長くはない。主は自分の羊を、おおかみと戦わせるために送り出しはしない。囲いの中にとどまれ。

嵐はつのり、風はうなり、波は逆巻き、稲妻はひらめく。敵は闇に勢いづいて迫って来る。小羊たちはどこへ行けばよいのか。右にも左にも逃れる道はない。

前にも後ろにも障壁がある。小さな群れよ、かたく立っていよ。主の憤りが悪しき者に注がれている。けれども、主はあなたを過ぎ越す。嵐は荒れ狂っている。けれども見よ、天が巻き分かれていく。まったく栄光に満ちた姿の方が来る。その衣は光の衣のよう、その顔はこの上なく優しいあわれみに満ちている。その腕は差し伸べられている。それは羊の大牧者である。

小羊たちは、前も後ろも、右も左も、闇の軍勢に囲まれている。獅子はほえ、へびはしゅうしゅうと音を立て、おおかみは牙をむき、敵は正しい者に向かって荒れ狂う。けれども、彼らはおびえを知らない。彼らと敵との間に、目に見えない力があるからである。

それはイエスの血であり、聖霊の力である。

彼らの導き手が共にいる。まことに、彼らを導く御霊である。一匹の小羊がそのふところにいる。導き手は群れに、もうしばらく待ち、耐え忍ぶようにと語る。導き手は聖霊である。まもなく牧者が来て、その牧の羊を雲と暗やみの日から集め、日の沈むことのないあの囲いへ連れて行く。彼らはとこしえに牧者と共にいる。牧者は油を注ぎ、傷を包む。まことに、牧者はあなたをいやす。

ああ、小さな群れよ、主は来る。主は来る。**主の血と御霊の力のうちにとどまれ**。まもなくあなたは、「帰っておいで、わたしの羊よ、帰っておいで」と言う主の声を聞く。世には滅びが来る。けれども群れには、牧者が来る。見上げよ。

丘の頂は、なんと声を合わせて歌うことか。
御使たちは金の立琴をかき鳴らす。
主の聖徒たちよ、みな共に叫べ。
愛と賛美と、言い尽くせない喜びのうちに。

まもなく主は、朽ちることのない丘を越えて来られる。
清く白い衣をまとって。
まもなく主は、ご自分の旅人たちを迎えに来られる。
かの地で、力と勢いのうちに治めるために。

御霊のうちに与えられたメッセージ

（一九一八年七月二十七日）

地よ、見よ、大いなる暗やみの日、薄暗い日、嘆きと涙の日、泣き叫ぶ日、酒ぶねを踏む日が、あなたに臨んでいる。耳を傾けよ！　大砲の音を聞け。丘と山々にこだまし、鳴り響く雷の声を聞け。

見よ！　全能の神の腕があらわにされた。その剣は神の手にきらめき、光っている。不信仰とあざけりに満ちた地よ、もし耳がふさがれていなかったなら、あなたは神の重い足音を、その歩みの響きを聞いたであろう。

さばきは神のすぐ後に続く。神は報い、報復し、さばく。もし目が覆われていなかったなら、あなたは見たであろう。神の怒りの稲妻に満ちた黒い雲が、あなたの国々の上を巻き進んで来るのを。あなたには耳があったが、聞こうとしなかった。目があったが、見ようとしなかった。あなたの患難の時が来た。

国々よ、泣け。手をもみしぼれ、と主は言う。悔い改めて、荒布をまとい灰をかぶって、わたしに立ち返れ。けれども、あなたは言った。「わたしたちは踊って楽しもう。歌って、杯をかすまで飲み干そう」と。あまりにも長く、あまりにも長く、あなたは宴会の家に座していた。あなたは主の聖なる器を汚した。あなたはわたしの家、主の家を、浮かれ騒ぎに用いた。自分の欲のために費やそうとして用いた。見よ、一つの手が現れる。それは今まさに、あなたの国々の壁に書いている。見よ、あなたははかりで量られて、その量の足りないことがあらわれた。わたしの手はあなたに差し伸べられていた。けれども、あなたはそれをはねつけ、押しのけた。そして今、わたしの手はあなたに向けられている。あなたのさばきが来る。

見よ、今日、手足は手足から、肢体は肢体から引き裂かれている。血は深紅の流れとなってほとばしり、全地を取り巻いている。さばきは一万の大砲から、そ

の声をとどろかせている。

ああ！　愚かな者たち、偽善者たち、心の怠惰な者たち、驚いて滅び去る侮る者たちよ。見よ、あなたの頭上には、一本の糸でつるされた大きな剣が下がっている。さばきは始まった。

あなたのただ中に、大きな酒ぶねを見よ。神の足がそれを踏んでいる。血がほとばしり出ている。まことに、あなたはわたしの子イエス・キリストの血を拒んだ。今、あなたの血が流される。ラケルよ、子らのために泣くラケルよ、子らはもういない。見よ、主の日が来る。それは近い。

四方から取り囲まれ、あらゆる方面から包囲され、あらゆる側から脅かされても、神の民は決して恥をこうむることがない。神の手に守られて、彼らは神の怒りの日にも耐える。神は彼らをきよめて、自分のもとに引き取る。彼らの髪の毛一すじも滅びず、足のくつも古びない。その衣にしみは見いだされず、その手に血もない。見よ、神の民は曲がった時代のただ中に立っている。けれども彼らは道しるべであり、彼らを見るすべての者にとって不思議である。彼らは世にとっては謎である。けれども、わたしにとっては、ことごとく美しい。

心を開け。神はきよめるからである。もしあなたが神に身をゆだねるなら、神はその宮をきよめ、清らかにする。自分に似ないものをすべて追い出す。見よ、密室で耳にささやかれたことは、屋根の上で言いひろめられる。あなたのすべてを主に開け。わが愛する者よ、戸を開け。そうすれば、主はその打ち場をきよめる。あなたのしわをすっかり伸ばす。

治めよ、沈黙よ、治めよ

預言（一九一八年十一月二十二日）

治めよ、沈黙よ、治めよ！
静まれ、黙れ！
海の大波よ、黙れ！
沈黙よ、しばしのあいだ治めよ！
その翼を広げよ。一つは陸の上に、一つは海の上に。
静かに！　天の四方の風よ、争うのをやめよ。
嵐の雲よ、静まれ！
剣よ、さやに納まれ！
とどろく大砲よ、黙れ！
主がもう一度、地に語ろうとしているからである。
もう一度、主はあの叫びを送り出そうとしている。
見よ、花婿が来る。戸口まで近づいている。
緑の草の葉よ、野原と丘の上に萌え出よ。まことに、丘と谷よ、花を咲かせよ。ああ、あなたは戦争の巨大な手に固く握りしめられてきた。明るい深紅の血のしずくが、あなたの脇腹から絞り出され、血なまぐさい流れとなって流れ出た。
引き裂かれ、荒らされた森よ、しばしのあいだ傷をいやされよ。主の大いなる輝かしい日が来る前に、主は地に最後の警告の言葉を語ろうとしているからである。その日は近い。**まことに近い**。
御使たちよ、しばしのあいだ風を引き止めよ。風はやがて、私たちのあがない主キリストを忘れた世に、倍の激しさで吹きつける。その前に引き止めよ。わたしの子らが大いに呼ばわるためである。声をあげて惜しまず、しばしのあいだ「主の来臨」を告げ知らせるためである。

目をさませ

目をさませ！　目をさませ！！　いと高き神の子らよ。わたしは自分の手で押しとどめているからである。怒りと憤りを、戦争と疫病を、災いを、地震と苦しみを。神を忘れたすべての者をまもなく包む、激しい火の憤りを。
「**平安だ**」と人々は叫ぶのか。
見よ、平和の君のほかに平安はない。
「**平安だ**」と人々は叫ぶのか。
けれども、平安を叫ぶその声は、彼ら自身の頭上に落ちる。
今日は救いの日である。
みことばを宣べ伝えよ。
まことに、朝早くから日の沈むまで、それを告げ知らせよ。
まことに、黙っていてはならない。

みことばを宣べ伝えよ

夜の見張りの時にも大声で叫べ。
民に警告せよ、民に警告せよ。
このメッセージを地に鳴り響かせよ。
丘々にこだまさせよ。
谷々に響き渡らせよ。
主の日が近いからである。
主の民の救いの時が来た。
けれども、神を忘れた者たちの頭上には悲しみが降りかかる。
なだれが山腹を流れ下るように。
主の声のとどろきが聞こえるか。

それは主である。主がその軍勢の前で声をあげている。
主は彼らを率いて、勝ち誇って進み出る。
栄光の冠は彼らのもの。
勝利は彼らのもの。
勝利を得た方、
敵を従わせた方、
とこしえに治める方によって。
急げ！　急げ！　わたしの小さい者たちよ。
急げ！　もう時間はない。
見よ、わたしはまもなく来る。
空中であなたがたに会うために。
　わたしの愛する者、わたしの選んだ者よ、声をあげよ。
わたしに賛美をささげよ。

愛の翼と勝利の教会

（一九一九年一月七日、カリフォルニア州ロサンゼルスにて）
　緑の野から、それは来て、高く舞い上がった。
豊かで見事な実をたわわにつけた木々の上へと。
乳のように、雪のように白い翼で、それは舞い上がった。
このはと、優しく清らかなはとが。
その翼は広く、その羽は長かった。
高く、さらに高く上り、
ついには雲と、日に照らされた空の中を渡って行った。
主の民、主の民は、はとのようである。
彼らが飛ぶための翼は、愛である。
けれども今、低く落とされた、はとよ。
翼は切られ、風切り羽は抜かれ、
わたしの愛する者よ、喜べ、喜べ。
あなたの王をたたえる賛美のうちに。
ああ、このメッセージを送り出せ。
屋根の上から叫べ。
尖塔から告げ知らせよ。
幕屋で宣べ伝えよ。
道やかきねのあたりで告げ知らせよ。
通りで、路地で、
町の市場で、寂しい荒野で。
　沈黙よ、治めよ。しばしのあいだ治めよ。わたしの子らが、最後の、最終の呼びかけを送り出すまで。わたしはまもなく来るからである。アーメン。

愛は損なわれ、失われた。どうしてあなたは、昔の日のように高く飛べようか。
私は見た。はとが低く落とされ、打たれ、突かれるのを。
はとは、突きつつく棒から逃れられなかった。
誤りと偽りの教えという棒から。
物好きで、試したがりの子供たちが、通りすがりにそれでいじめた棒から。
けれども見よ、羽はふたたび生え始めた。
その翼は、雪のように白く萌え出る。
前よりも強く。
愛と賛美が、あなたを起き上がらせる。
そして大空へと舞い上がらせる、わたしの愛する者よ。
あなたの翼を切り取らせてはならない。
わたしはまもなく、夜明けに来るからである。

どうしてあなたは、空中でわたしに会うために上って行けようか。
もしその翼が損なわれていたら。ああ、こよなく麗しい愛する者よ。
主はご自分の民のただ中で、新しいわざをしようとしておられる。力と勢いのうちに、ご自身を現そうとしておられる。だから、あなたの愛を満ちあふれさせなさい。心をつくしてあなたの神を愛し、自分を愛するようにあなたの隣り人を愛しなさい。子たちよ、互いに愛し合いなさい。そうすれば、あなたの翼は大きく広げられる。あなたは地上のささいなことの上に引き上げられ、主の栄光を見る。そして広大な天を通って、主の御前そのものへと舞い上がる。セラ！

花婿と花嫁

預言

大いなる、永遠の神の愛よ、
だれがあなたを測り得よう。
神々しく、全能の、栄光ある神の愛よ、
だれがあなたの底を極め得よう。

私たちは海の深みに下って、尋ねる。「神の愛はここにあるか」深海の生き物たちはみな、大声で叫んで言う。「大いなる、大いなる、大いなる神の愛が、私を見守っている」

見よ、私たちは天に上る。そこでは鳥たちが翼を広げて、青い大空を渡っている。私たちは尋ねる。「あなたの愛はここにありますか」鳥たちは大声で叫ぶ。「しかり、しかり、しかり。主の愛が私を支えている」

私たちはさらに、天の霊妙な大空の高みへと上って行き、叫ぶ。

「まさか、主の愛がこれほどの高みにまで上ってはいないだろう」けれども、星々はその栄光のうちに共に歌い出し、私たちに請け合う。「しかり、しかり。主の大いなる愛が私たちを支え、私たちを輝かせ、主の栄光を映させているのだ」

それから私たちは下って、さらに進み、遠く砂漠の静かな荒れ地へと踏み入る。私たちの心は叫ぶ。

「大いなる神の愛よ、まさかこの不毛の地にまでは届いていないだろう」けれども、砂は大声で叫ぶ。「しかり、しかり。主はここにおられ、その愛を注ぎ出しておられる。主の愛は砂漠をばらのように花咲かせる。荒野には池ができ、かわいた地には川が流れる」

永遠の神よ、あなたの限りない愛は、底知れない永遠の年月を通して語り続けても、なお語り尽くせません。あなたの翼、その広げられた翼は、地の果てにまで届いています。あなたは、めんどりが巣の上にうずくまるように、地を覆っておられます。あなたの愛の金色の流れが、その羽の一枚一枚から私たちの上に流れ下ります。あなたの民は、あなたの翼の陰で、日の暑さからも、荒れ狂う嵐からも守られます。とこしえに、とこしえに。

主は伸ばした御手で、ご自分の民を導き出された。
分かれた水の中を、足をぬらさずに。
主は彼らの目の前で、その敵を滅ぼし尽くされた。
主は天から彼らの上にマナを降らせられた。
毎朝、新しいマナを。
主はご自分の軍勢を、広い地へと導かれた。
乳と蜜の流れる地へ。
ざくろと、ぶどうの木の実りの地へ。
ぶどうと、尊い実りの地へ、
主はご自分の民を導き出された。

彼らの分は栄光に満ち、
義と平和が彼らの衣であった。

まことに、主の民は主にあって喜び、
とこしえに主の御名をあがめる。
　主は麗しい、朝の夜明けのように。
主は輝かしい、真昼の太陽のように。
主は甘い、蜂の巣の蜜のように。
このイエス、栄光の小羊は。
　主は優しい、幼子を抱く母のように。
主は強い、あなたの国境を守る山々のように。
主は力強い、あなたの岸に大波を打ち寄せる海のように。
主は栄光に満ちている、この王の王、万軍の主は。
　歌声と共にご自分の民を導き出されたのは、この方である。
この方は、王の軍勢の将である。
主の民は主のあとに従い、
その軍隊は主をたたえて叫ぶ。

小川と大海

聞け！　聞け！　主はご自分の民に語っておられる。「あなたは、日の光に輝いているこの細い小川を見るか。目を上げて、力強い大海の、広大な、果てしない広がりを見るか。あなたの今の境は、細い小川のようなものにすぎない。けれども、もしあなたがわたしに従うなら、わたしはあなたの境を広くする。恵みと力と栄光があなたに増し加えられる。大海が小川よりも力強いように、あなたの後の栄光は前の栄光よりも大きくなる」

若木と樫

「あそこの樫の若木を見るか。そして、そのはるか上に高く成熟してそびえる、力強い親の樫に心を留めたか。わたしの子らは今、前の雨と、降り始めた後の雨とに養われた若木のようなものにすぎない。けれども、ああ！　もし彼らが頭を上げ、口を広くあけて、豊かな後の雨を受けるなら、彼らはどこまでも育つ。その枝はあらゆる妨げの上に伸び、あらゆる障害の上に王の権威をもってそびえる。空の鳥はその枝の間に巣を作り、家畜の群れはその陰で大いに喜んで伏す」

幼子と巨人

　母の手に支えられて、初めて歩き出す幼子を見るか。野を大またに歩いて行く力強い巨人を見たか。その広い肩の上では、最も重い荷も羽一枚の重さにしか見えない。
　からだは今日、御霊に治められる領域の力といのちの中へ、初めの一歩を踏み出そうとしている小さな子供のようである。けれども、わたしの民がただわたしを仰ぎ見て、もはや人間の肉という母の腕に寄りかからないとしよう。そのとき、わたしは彼らを巨人のようにそびえ立たせる。彼らは勝利の大またで前進する。異邦人の前から彼らのそしりは取り除かれる。異邦人はもはや「おまえの神はどこにいるのか」と問うことはなく、「私たちは遠くから主の光を見た」と言う。そのとき主は、その教会を自分のもとに迎える。力強く、強い、勝利を得た、栄光に満ちた教会である。
　夜はその影と共に逃げ去ろうとしている。太陽は永遠の丘々の上に輝かしく昇り、夜が明けようとしている。祝福の大波が打ち寄せている。祝福の雨が激流となって降り注ぐ。見よ、日の光と雨の中で、神の栄光が昇り、その民の上に輝き出ているからである。彼らは神の御霊の力によって、力あるしるしと不思議を現す。
　花婿の花嫁よ、喜べ。
白い衣を着たおとめたちよ、楽しめ。
喜べ、喜べ、その涙をぬぐえ。
長い、長い夜は終わったからである。
　見よ！　永遠の夜明けの光が差してくる。
義の太陽が、その翼にいやす力を備えて昇る。

まことに、太陽が昇る。決して沈むことのない太陽が。
光が差してくる。決して消えることのない光が。
　聞け！　ラッパが主の聖なる山に鳴り響き、こだましている。
進軍ラッパだ！　大波を越えてやって来る、その澄んだ、速やかな声が聞こえないのか。
それは、涙の流れることのない国からこだまして来る。
　だから、愛と真理と賛美の衣をまとい、足にサンダルをはいて立て。
分離のベールを顔にかけよ。
主は、その愛する者のためにすぐに来る。
　ベールをかけたあなたの顔は、世にとっては、隠された愚かな謎にすぎない。
けれども、選ばれた者よ、わたしにとって、あなたの顔は麗しく、愛らしい。
わたしもあなたも愛さない者たちは、あなたの名を悪しきものとして捨てた。
けれども、わたしはわたしの新しい名であなたを呼んだ。あなたはわたしのものである。
　わたしはあなたの名を、わたしのたなごころに彫り刻んだ。
わたしはあなたを、わたしの心のひもに編み込んだ。
わが愛する者よ、首の金の鎖と美しい宝石が、あなたを飾っている。
　あなたのルビーは血のしずくのようである。あなたのために流された、わたしの血のしずくのように。
あなたの真珠は、わたしと共に歩み、わたしの苦難にあずかった者が流した涙のしずくのようである。
あなたのダイヤモンドは、あなたがわたしのために獲得した、この上なく尊い魂である。
　あなたの心は義で、あなたの顔は喜びで満たされる。
あなたの目が、夜明けの最初の光をとらえたからである。
子たちよ、わたしは来る。朝に来る。
　ギレアデの乳香よ、あなたはどなたですか。
あなたは大軍の君です。ご自分の民を導き、あらゆる悲しみから彼らをいやされる方です。
　勝利の足取りで来られ、戦利品を携えておられる力強い勝利者よ、あなたはどなたですか。
あなたは私たちの花婿、義の王です。
　分かれた雲の間から照らし、罪の夜の闇を貫き、悲しみの陰りを払う栄光の光よ、あなたはどなたですか。
あなたは義の太陽です。栄光の主が、あなたの御名です。
　地から天へ至る輝く小道よ、闇から光へ至る栄光の道よ、あなたはどなたですか。
あなたはイエス、道であり、真理であり、いのちである方です。あなたのほかには、だれもいません。
　ちょうつがいで大きく開かれた門よ、その門口から、祝福された、きらめく流れと、かぐわしい牧場が見える方よ、あなたはどなたですか。
あなたは門です。だれでもあなたを通って入る者は、出入りし、牧草にありつくのです。
　谷のゆりよ、シャロンのばらよ、輝く明けの明星よ、あなたの民の魂にとって万人にぬきんでて麗しい方よ。あなたこそ確かに私たちのイエス、王の衣をまとった王、世の初めからほふられた小羊です。
あなたの愛する方の腕に寄りかかって、荒野から上って来る者よ。昇る太陽の最初の光が、姿を変える栄光となって降り注いでいる者よ。あなたはだれですか。
あなたは教会です。小羊の選ばれた花嫁、勝利を得る者たちのからだ、水の中を通り、火の中を歩んだ、試され、確かめられた民です。あなたは、あなたの愛する方、生ける神の子と婚約した妻です。
　あなたを包み、義に輝いているこの白い衣は何ですか。
これは主の義の衣です。私たちが裸であった日に、主が着せてくださったものです。
尊い宝石をちりばめ、愛のひもで結ばれて、あなたの足を飾っているこのくつは何ですか。
これは救いのくつです。主が導き出されるご自分の民に、はかせてくださったものです。

その衣には細やかな刺しゅうが施され、ひと針ひと針が金で縫われている。勝利者の義の冠がその頭に置かれ、彼女は王と共に王の御座で治める。

ああ、来よ、来よ、わが愛する者よ。時は短い。わたしはあなたを、さらに大いなる力と勝利へと、すぐに導き出したいと切に願っている。

生ける神の教会よ、足を速めよ。

もっとわたしに近く寄れ。わたしの腕にしっかり寄りかかれ。

わたしはあなたを、はるかにまさった栄光へと導き出す。

こうしてわたしたちは、道の終わりまで急いで行く。

ついには、わたしがこの手で永遠の夜明けの燃える幕を押し開き、**わたしたちの永遠の勝利の日**の門口を通り抜けるまで。アーメン。

（終わり）

これこそ預言されていたこと

2026年11月23日版

著者　エイミー・センプル・マクファーソン

制作　藤遥

発行　christian-classics-jp

公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/this-is-that/

原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/this-is-that

全文を、原文（This Is That）からAIを使って翻訳しました。

訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。